THE CENTRAL REVIEW

中央公論

六月號

第三十八年　第六號　第四百二十二號

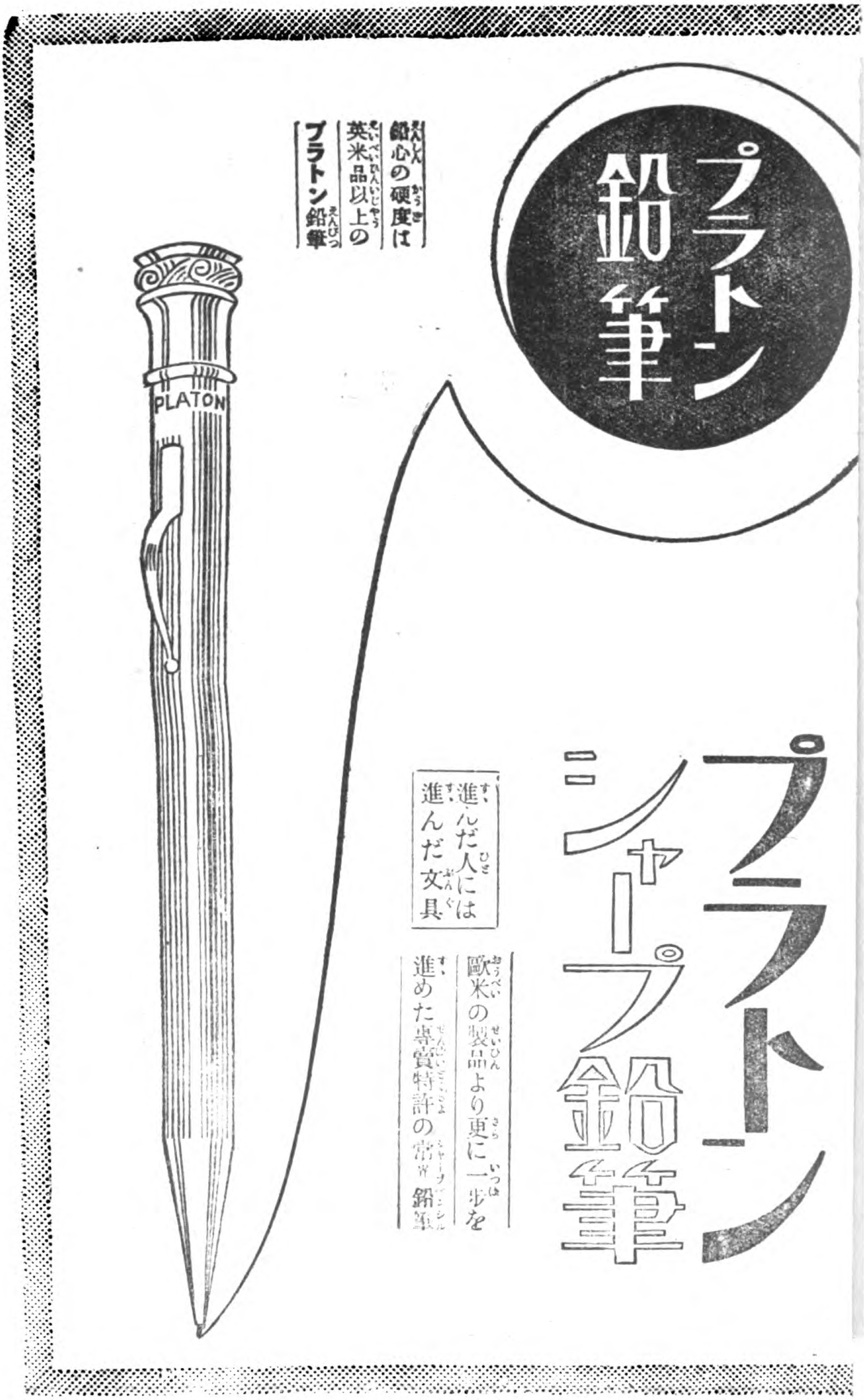

善い型
良い品
全國の人氣
本品に集中
純品質主義
鷹印麥稈帽子
既に市場に出でゝ貴下に迎へらるべく
大阪 東京
株式會社 高橋製帽所

御待ちして居ります

…ラノの肖像畫……山川亮……三九
東山義政論……西川一草亭……五八
東京市長を辭して日露問題に肝煎した後藤子……文學博士 三宅雪嶺……六六

頻々たる性的事件と性道德の新目標

◎根本的戀愛の保護、解放及び正用……杉森孝次郎……七一
◎近代的生活事實と性的道德の進化……長谷川如是閑……七四
◎禍の根をなすもの……伊藤野枝……八二
◎常態が最上……文學博士 三宅雪嶺……八九
◎[illegible]


プラトン鉛筆
鉛心の硬度は
英米品以上の
プラトン鉛筆
PLATON
プラトンシャープ鉛筆
進んだ人には
進んだ文具
歐米の製品より更に一歩を
進めた專賣特許の



草上閑談　森田恒友筆

大正十二年

中央公論

六月一日發行

六月號

第卅八年第六號

第四百二十二號

毛嫌ひと行き懸り

昨今の問題で世上注目の焦點となつて居るものは、後藤子及びヨッフェ氏を中心とする露國承認是非の一件である。勞農露國の承認を躊躇するの少くとも我國に於て無意義なること、否寧ろ一日も早く承認を勵行して彼我の交通を圓滑にし、兼て東洋平和の安定に資するの急務なることは、今更喋々の辯を待たない。而して這般の極めて明白なる問題が何故に迂曲停迷して居るかを怪むとき、吾人は圖らずも我國政界に蟠居する二大弊根に思ひ當らざるを得ない。新聞紙の報ずる所にして謬らずんば、今次の所謂日露交渉に於て亦この二大弊根は頑強に纒綿して居るを吾々は見せ付けられるのである。

一つは云ふまでもなく毛嫌ひだ。後藤子のヨッフェ氏招來は加藤首相の諒解を得たのかどうか、又そのヨ氏との再三の交渉は外務省の何等かの形に於ける依頼に出づるものかどうか、之等の點は能く分らない。唯外間傳ふる所に依れば、政府と後藤子との間に十分なる感情の融和を缺くは疑ないらしい。或は之を八百長と解する人もある樣だが、併し外交の事は外務省の繩張内の事だ、事の是非善惡に拘らず畑違ひの人の權限侵蝕は好まないと云ふ樣な態度は由來我國政界の傳統的偏狹にして、固より今日に始つたことではない。守錢奴が使ひ切れない程の澤山の物を持ち乍ら他人からは指一本でも差さるゝを厭ひ、而かも全然それが自己の利たると否とを問はざると同じである。佛のポアンカレは政敵ルシールを英國に送つてルール問題の難局を切り拔けしめんとして居る。國家の大局に一致する所あらば、功を政敵に讓つて其の最も長ずる所に於て彼の才能を發揮せしむるも政治家の度量に於て異とすべき所ではない。細目の協定なら、政府内それぞれの部局ありて自ら其權限を尊重せねばなるまいが、重要なる大局の處理に至ては機關權限の則制に拘らず、有らゆる方面の有らゆる人材を利用するは寧ろ必要である。毛嫌ひか。權限の拘泥か。孰れにしても我國の官界は概して局量極めて狹小なるの譏がないでもない。

獨り外交問題ばかりではない。例へば勞働問題の樣なものにした所が、我國の官界が畑違ひなるの故を以て如何に適當なる人材を遺し、爲めに事件の眞解決に逹し兼ねてゐるか分らない。勞働問題の解決に最も適任なる人材は幸か不幸か概して彼等の最も毛嫌ひする所である。何の問題にしろ、一番八釜し相な人間を捉へて談じ込むのは、初めは面倒でも結局事件を本當に解決する所以の捷徑なのだ。然るに我國官界の紳士の多くは、常に最も與みし

易き斗筲の徒のみを羅して解決を圖るが故に、着手に易くして終に實効を擧ぐることが出來ない。能く人を使ふとは、猫の如き奉命者を頤使することでなくして、一筋縄で行かぬ樣な輩を驅つて思ふまゝに國家の用を爲さしむることに外ならぬ。

其次は行き懸りだ。去年誤て餅は喰はぬと云つたからとて今年はどうしても餅を喰ふ譯には行かぬと云ふ。餅を喰ふことの健康上の功果如何は丸で問題にしないのである。國家は活き物だ。去年毒であつた物も今年は藥たることも珍しくはない。況んや去年毒だと思つたことの今年誤を悟ることもあるべきをや。要は現在に於て如何にすることが國家の爲に得策なりやを考量することに在らねばならぬ。一旦の言動に不當の責任を課して自繩自縛の陋態に陥り乍ら、而かも之を覺らずして十年一日の如く行き掛りの上に國務の適當なる進展を阻止して憚らない。斯かることの如何に多きかは一々事例を擧ぐるまでもなく既に讀者の目に鮮かな所であらう。

成る程政府當局の一角では、先年來共産主義は畏るべき毒物だと宣傳した。赤化東漸の勢は何物を犠牲にしても防禦せざるべからずと教へた。甚しきは勞農露西亞を以て世界顚覆を目的とする陰險なる猶太人の手先だとさへ誣ひた。今更何の面目あつて之等の連中の立つる國家を承認することが出來やう。併し乍ら記せよ、之等の流言を妄信し宣傳し將た惡用したのは日本國民の多數ではないことを。一部軍閥者流の明白に暴露された不明の譏りを糊塗せんが爲め、誤解と附會と讒誣とを今猶ほ正しいと無理に強いて、國民多數の適當なる要望を阻止するに對し、吾々は何時まで忍ばねばならぬのであらうか。獨り今度の事ばかりではない。一體に我國の政界では、所謂言責の意義を不當に重く觀るの弊がある。政府が一つの新提案をしたとする。其の利害得失の本論に入るに先ち、議員は取敢へず去年之と反對の意見を發表したのは如何なる譯かと詰る。去年の考は間違つたと白状すれば、そんなら其の間違に付ての責任はどうなると追及する。斯くて議論枝葉に走つて中々本道に還つて來ない。だから當局者は毎も「事情の變」といふ漠然たる遁辭に避難して、遂に事理の率直なる表明を省いて了ふ。夫れでも新提案をする方はまだいゝ。多くは斯種の無意義な難詰を恐れて兎角事勿れ主義に安ずるのである。今次の問題にした所が、如何に政府當局が承認問題に對する樞密院邊の思惑のみを懸念して居るさまが分るではないか。

露國承認問題は國民的利害に至大の關係ある政策問題である。而して問題が重大な丈け、この問題の實際的解決が端的に其の利害得失の檢覈の上に與へられないことは、吾人の甚だ遺憾とする所である。

中央公論



第卅八年第六號
六月號
第四百二十二號

社會生活の統導原理としての連帶と連帶人の道德

井上忻治

一

ルネッサンスに於て發見されたる「我」が、その內面的反省と、個我相互間の交渉とによりて明化され、そしてこれに對立する外部的勢力、即ち教權や、國家や、自然やの壓迫に對する爭によりて、その意識が更に深化され、淨化されて、漸次覺醒して來た近代人の解放運動が、フランス革命に於て正に燎原の火となつて爆發したことは、何人も知るがごとくである。かくて、あらゆる舊來の信仰や、薰習や、傳統や、制度やは悉く燒き盡されて、全世界の人心を陶醉せしめたかの美はしき自由主義の基礎の上に、所謂デモクラシーの大伽藍を建設すべきこの文化史上に於ける最も偉大にし

て、最も光輝ある人類の大事業は遂行されたのであつた。この意味に於て一七八九年は全く近代文明に一新紀元を劃するものであつて、近代生活に於ける黎明の光は、正しくその「人權宣言」によりて投ぜられたのである。

普遍主義と個體主義との對立葛藤は、何れの時代に於ても認めらるゝ共通の現象であつて、各時代の思想史は、凡てこの二種の世界觀乃至人生觀の葛藤及び消長の歷史に外ならないのであるが、フランス革命の成功は正に個體主義のために擧げられた花々しき勝利の凱歌であつた。かくて近代生活を一貫する基調としての個人主義的傾向は、こゝにその拔くべからざる根幹を形作つたのである。

實に一七八九年は、久しき間人類の上に加へられた悲慘なる桎梏の凡てを破つた。自由への凡ての大道は打開された。熱狂的活動、無窮の願望、不撓の精進はそれからそれへと人心を鼓舞し、鞭撻した。かくの如くして歷史が記錄する最も力強き個人飛躍の大舞臺は展開されたのである。爾來、個人自由を誹謗するがごとき考は、最早消えて跡方もない。個人自由は實に奇蹟を實現したのであつた。かくて、中世紀以來の他律や、壓迫の精神は益々失はれる。父から子に傳へられた桎梏の甘受、下界の不幸に對する諦らめ、舊時代の信仰の與へる慰籍、地平の彼方に殘されたる舊習。――これ等の凡ては消失して、現代人には益々緣遠い考へ方となつた。

しかし、この個人飛躍の凡ての紀念は、時の流れと共に、眞に幸福なる人類の發展に除きがたき障礙となつたのは、何といふ皮肉であらう。蓋し、內的歡喜に映えまさる躍びやかな光輝は、漸進的にその光に慣されて居ない人々の視野を照明する代りに、却てこれを眩惑する。その强烈なる刺激は、餘りに弱い機關を殺して了ふ。逐新の渴望や、獨創や榮譽や、名聞や、富貴や、權勢やに對する過度の欲求――各人が等しく、何物を犧牲としても敢て求めむとしたこの近代的傾向は、一種の病相ではあるまいか。我等は、この傾向が結局如何なる結果に到着すべきかを豫想するに苦まな

い。即ちそは結局、社會組織に於ける凡ての權力を否定し、凡ての秩序を破壞する革命的理論、無政府、怖るべき犯罪の續發を以て特質づける個人主義の病的發現でなくて何であらう。そして、我々は今正に、この近代的悲劇のカタストロフに接近して來たのではないか。然り、過去一世紀間の經過に於て爛熟した資本主義的文化の行詰りは、正にこの悲愴なる事實の到來を、最も雄辯に物語つて居るものであらう。

二

自由主義の與へた近代的秩序は、最早現實の紛亂を規正するの力がない。資本主義の助成した富の分配の不平均は、兩極端の經濟的階級の悲しむべき對立を現出せしめたのであるが、その結果は、ブールジョワとプロレタリヤと、その何れの階級に對しても、生物的若しくば社會的頽廢の怖るべき原因を作つて、一面に於ては、個人生活の正則なる發展を阻害すると共に、他面に於ては、個人の生活と社會の統一との間に見出さるべき調和の理想から、益々遠かることとなつた。美はしき自由主義の名に於て近代人の憧憬したる理想は、一として實現されなかつた。今や實在は傳說と乖離すること、餘りに著しい。雜多なる解きがたき矛盾と困難とは、生活の隨所に擴充する。社會的不安の雲は生活の全般に漲つて、現在人の意識に共通なる陰鬱と、焦躁と、興奮との時代的情調を織りなして居る。實際一般民衆の生活は、今や殆ど破產の危機に頻して居るではないか。

「自由、平等、友愛」の標語の下にデモクラシーの大精神を實現せむがために企てられた佛蘭西革命の救世的大事業は、形式的には成功したが、しかもその所期の理想は見事裏切られて、却て人類の運命をかくのごとき新たなる不幸に導くがごとき不辭なる結果を招來したのは何故であるか。言ふまでもなく、その根本の錯誤は、自由主義に基く近代の

社會革命が、主として十八世紀哲學の早熟なる概化にすぎなかつたことに原因する。實際、革新の上に現はれたる思想の發展は、大況、空虚なる概念の表現に止まつた。その概化は毫も實生活の眞味に觸るゝところがなかつた。複雜なる現實の社會相を包容して、變轉極まりなき實在の流轉性に順應して行くには、餘りに單純であつた。現代文化の行き詰りを招來した眞の病根はこゝに存するのであるが、この點に關する論議は別の機會に譲ることとして、こゝでは、デモクラシーの理想が、その實現を妨げられた重要なる原因の一として、革命の第三標語「友愛」の名を以て表現された――人類の運命を支配すべき――貴重なる一精神が閑却されて居た事實を、特に指摘したい

現代思潮を一貫する基調は、言ふまでもなくデモクラシーの精神である。そして佛蘭西革命の標語は、正にこの精神を完全に表徴するものであつて、人類意識の要求は、この三標語に於て、最も端的に、最も明瞭に、而も全義的に要約されて居るといつてよい。希望と創造との衝動が活躍して、創造的生活の發展を最も有意義に促進する世界は、實踐理性の自己立法としての人類の自由が眞に體驗される境地であらねばならぬ。從て、自由が「我」の核心であり、人格の中心價値であつて、自由の保障が個性開發の根本條件であるとすれば、近世の開放運動が、凡て自由の要求を標的として行はれたのは、正に當然のことではあるが、而し、個性の自由なる向上發展を期せむがためには、各人は亦た他の人格を尊重し、敬愛して、毫も侵すところがあつてはならぬ。自己を愛するものは亦他を愛せねばならぬ。敬自敬他の精神が各人の生活を一貫して居なかつたならば、自由の世界に於ける美はしき希望も、畢竟幻滅に歸せねばならぬ。友愛の雰圍氣を得て、人格主義は初めてその純眞の光を放ち、カントの所謂「目的の王國」は、初めてその眞義に於て建設されるであらう。故に人類愛の表現としての友愛的精神の確立は、畢竟社會の理想でもあり、また或る意味に於て、人類意識の究局の要求でもあらう。

而るにフランス人がかの所謂「革命の三部曲」——trilogie révolutionnaire——を構成するために、好んで自由平等と並べて高唱した第三節の「友愛」——Fraternité——は、單に革命フランスの舞臺に於て旋律的に呼號されたに止まつて、その精神は毫も確立さるゝに至らなかつた。詰り自由主義の美名に陶醉した當時の人々は徒らに自由、平等の空虚なる名辭の魅力に眩惑されて、この第三標語の重要なる眞意義を看過したので、人類生活乃至社會組織の統導原理が實は「友愛」の標語の下に匿されてあつたことに氣づかなかつたのである。而るに時の流れとともに自由主義の理想が刻々に裏切られて、極端なる個人主義から欺かれた苦い經驗によりて、この標語の意義は、次第に明化され、深化され、熟成されて、今日漸く他の名稱の下に再生の歡びを見るに至つた。即ちそは連帶——Solidarité——の名に於てゞある。この名の下に、我々は最早、利己的欲望をのみ追求する分立的個體ではない。我々は先づ第一に、我々の同胞に對して相互的に一定の義務を有する連帶人であることを宣言する、かくて我々凡てが、人類の生活に於て、各自相互的に一定の義務を負擔する責任ある社會的機關である。部分の全體によりて生き、全體の部分によりて生きる相互關係が圓滑に運ばれて、個人の自由と社會の統一とが調和を得るところに、眞に自由なる個人の生活は見出されるであらう。社會人の自由は人類連帶——solidarité humaine——の觀念を基礎としてのみ可能である。かくて、一度個人主義の門戸を通過して發展し來りたる「我」の自覺は、この意味に於て、更に個人主義を超越せねばならぬ。これ蓋し「我」の自覺が辿り行くべき當然の過程であらう。最近の社會思潮の變化は何れもこの第三段の過程に遷りたる「我」の自覺の進化に反影するものと見ることが出來よう。

三

我々の道德生活の運命は、我々が宇宙を、生命なき機械體の發現と見るか、或は叡智的な目的體の發現と見るかによつて、多少左右さるゝところがあるかも知れないが、私は今この問題に就て深入りする考はない。兎くとも我々の眼に映ずる經驗的世界は、物理的、化學的、知力的、道德的諸要素の複合である。そして世界は、形態や、力や、機制や、運動やを殊別化し、差別化しながら、絕へず發展する。世界は生物と無生物との間の關係を絕へず集成する。そして、そこには無數の律動が無限に交錯して、最大のオーケストラが構成されて居る。そこには無限に雜多なる韻律の變化の間に、自から階調が支配して居る。人類社會はまたこの大オーケストラの一部である。そしてそれが人類社會に關する限りに於て、個人が社會に對する意義と價値とは、各別の唱歌の意義と價値とが、オーケストラの全體の階調を條件としてのみ考へられると同時に、また、この階調は、唱歌の殊別的價値によりてのみ成立ち得るのと一般である。

人類の起原並に種の形態的發達に關する研究に止らず、更に進んで宇宙の進步的發展を證明せむとする最近の進化說は、この點に關して、亦特別の意義を有する。この見地に於ては、宇宙は不斷の創造である。その內面的協調によりて不斷に創造しつゝ進化する。詰りベルグソンの語を藉りて言へば、宇宙の發現は、所謂「創造的進化」の過程である。かうなると宇宙は最早固定し、完成した一個の總和的實在ではない。一個の意匠の展開である。この意匠を導く志向の發現である。從つてかういふ意味の進化は、偶然の盲目的力と、或る目的を追求する自由の活動との間に選擇の可能を許すことになるので、宇宙の機械組織に反對して、道德的自由が肯定され、人格的協動の道德が成立たねばならぬこととなるのである。

連帶の關係はこの事實から發生する。元より無機的の自然にありては、諸元素間の多少大なる間隔が、二次的の意味を有つて來る。そこには常に分子間に隔りがある。假定的のエーテルや、或る種の瓦斯や、若しくは空氣のごときもの

が、その間を流通し得るだけの間隔が存する。そして物體が一の固形體の外形を失ふこともなく、就中、各元素は一體をいみ形成する樣式で、同時に運動し又は相互に結合するのを妨げらるゝこともなしに、その大きさは變化し得るのであるが、有機體に於ける結合關係は整序を條件とする。即ち全體の運動は、共同の目的のためにする各部分の同時又は順時の活動になる。故に社會的集團に於ける結合は、更に統一的な系統的な單位に變つて來るのである。そしてこゝで重要なる點は、或は時間的に、或は空間的に、相互に依屬(アブヘンゲン)する諸單位によりて、一個の全體が構成されて、各單位の特殊の活動は、全體のそれに從屬するものであることとである。こゝに連帶の事實が成立する。故に連帶の觀念は、一般には、全體の各部分間に於ける常住的關係、相互依屬關係――Mutuelle dipendance――のそれである。

集團が、かくのごとく、これを構成する個人の存在に優越せる固有の存在の一種を持ち得るがためには、各自が單に分立的に生存して、各自それ自身によりてのみ價値づけられた各個體の單純なる總和以外の或物でなければならぬ。集團の力は、單に個體的エネルギーの合成力ではあり得ない。その共同所產に於ては、何れの個人にも、彼に特有なるべき或物を識別することの出來ないような、かゝる樣式に於て成立つた各人相互的活動の集積の結果であらねばならぬ。從つて連帶人の集團に於ては、それ自體既に無數の原因の錯綜せる結果に外ならない限りなき原因の集積に基きて、絕えず變遷の途を辿りながら、各自が互に異つた影響を與へ合つて行くので、集團の間に行はるゝ社會的感情、社會的思想、社會的活動は、個人的感情、個人的思想、個人的活動の總和ではあり得ない。かくて各自は、個別的に考へられたその凡てを、一度集團の支配下に置くことによりて、集團的に考へられた凡てに依屬する。各思想家の運動は一度人道的運動に透徹することによりて、初めて集團的運動の力となる。從つて各自は彼等自らがその形成に貢獻しつゝある社會的環境の所產であり、そして、彼等自からがその存在を保障し、その生命を支持することに貢獻し、奉仕しつゝある

社會體の所産である。故に永久的相互行爲に服する人類の相倚關係が社會的結合に附加されたときに、社會の連帶は初めて完全の域に達する。かくの如くして、社會的結合に於ける我々の位置は、建物の構成に於ける單純なる煉瓦の一塊から徹底的に區別されて、我々の生活自體が社會體の內的構造を形成することゝなるのである。

我々は、自然の一切の存在が悉く相互倚屬の關係の下に立つて居ることを主張する。そしてこの宇宙連帶――solidarité cosmique――を主張する權利を有つがためには、宇宙を一の體系として、卽ちその最小部分ですらも、悉く一の調和――この調和がライプニツツの言ふような豫定されたものであらうと、または自然的順應の結果に過ぎなからうと――の下に立つところの全部として認めることを以て充分である。故に、一般的に認められたこの連帶組織の中に我々が社會連帶のために割當てらるべき一個の地位を要求するのは、極めて自然なことでもあれば、また正當なことでもある。

四

社會連帶――solidarité sociale――は社會の構成を豫想する。個人の單純なる併存では足りない。彼等が共同に生存して、互に奉仕をし合ふことでも、まだ足りない。何となれば、我々は犬や猫とも共同に生活して、或る程度の奉仕を仕合ふのであるから、もしそうだとすれば、家畜と人間とはまた屢社會を構成するといはれるであらう。而し、例へば水牛に寄生するかのアレクトーのように、自分の命を繋いでくれ、養つてくれる被寄生動物に、一定の奉仕をなす寄生物が、或る意味に於て連帶關係に立つて居る被寄生動物と、社會的生活を營むで居るものとは、我々には考へられない。社會構成の先在要件としての奉仕の相互關係乃至協働は、最も重要なる心理的一事實――卽ち各自の知見、各自の

感情、各自の活動に、深刻なる共同烙印を印するがごとき樣式に於て、凡てから與へられる影響が、必然的に各自の精神に波及して、多くともこれを色附けなければ止まないほどの心理的効果を待つて、完成されてあらねばならぬ。故に各自が共同の型態を多少とも實現せむがためには、同一社會の成員は同一の種(スペーシーズ)であらねばならぬのは勿論であるが、各自の倚屬關係から、各自を支配し、各自を集團的に保持し、各自に共同體に屬するといふ感情を與へるところの一の社會力が生れて來るがためには、各自は互に連帶的であらねばならぬ。從つて、社會は連帶を豫想する。連帶の事實は社會生活の先在條件である。從つてまた社會人は常に連帶人――h mme solidaire――であらねばならぬ。

凡ての社會事實は連帶の事實のように思はれる。社會の存立を可能ならしめるものは、事實の連帶である。それが意識的過程を伴ふと否とにかゝはらず、兎も角も成員の間に存する事實の連帶は、社會の一次的存在原理である。そして社會進化の過程を成立せしむる根本の條件は、連帶の基礎の上に成立する一般的意識の進化である。かくのごとくして社會連帶の自然法則が樹てられるとすれば、我々が社會生活に於て、我々の同胞と連帶關係に立つことによりて、道德人の觀念に、如何なるモデイフイケーションが與へられねばならぬか?

意識的連帶は義務の觀念に於て成立つ。人格的結合の社會に於ける自由人の相互倚屬は、各自が人格的存在の名に於て有せねばならぬ人道的義務を前提としてのみ可能である。各自が自己の自律を尊重するとともにまた他人のそれをも尊重する精神が、愛自愛他の精神が各人の意識を支配して居なかつたならば、社會連帶には何等の倫理的價値を認めることは出來ない。個體的運命と普遍的運命との密接なる連帶關係に於ける人間の結合は、專ら道德生活に精進する人間の努力に待たねばならぬ。我々は我々の人格の何れの一個に於ても、奴隸の生活を營むことを肯ぜないと等しく、また他人の貪慾と野心とに、我々の固有の意思を犧牲にすることを認容し能はぬと等しく、我々は單に消極的に、腐敗の環境

中に我々の純潔を防護し、若しくば環境の汚濁から逃避するに止まることは出來ない。我々は更に積極的に、最も廣い意味に於ける人道を實現し、社會の進歩のために奉仕し、自他の道德的自由を高めることに努力せねばならぬ。そして我々自身の人格的解放を期するとともに、また同一の人格的解放を得て、我々と合體するに値するように、他人の運命を誘導し、助成する責任を感ぜねばならぬ。蓋し、他の人格と共に生き、共に樂しむことが、連帶人にとつては、正に最終の理想でもあれば、また至上の喜びでもなければならぬからである。かくのごとくして、初めて、人と人との間に拓かれてあるべき完全なる道義的交通が可能になつて、社會連帶は、人間生活の普遍的原理としての、その最高の道德的價値を實現することになるのである。

五

ピエル・ルルーは連帶の精神に我々を引きつけて、この關係の下に我々の生活を支持するものは、各自を支配する「精神的協調」——communion spyrituelle——であるとする。彼はいふ、「各人はその本性上、その同胞と、そして宇宙と、常に協調に於て存在する必要を有つ。この關係が各人に妨げられた時から、彼等は不幸となり、時としては犯罪人ともなる。この連合及び愛の法則から何人も苦痛なしには免かれることは出來ない。」——尠くも何等かの意味に於ける社會的條件の下に生息しつゝある我々人類の生活に關するかぎり、所謂孤存人の觀念は成り立ち得ない。個人的運命は嚴正に連帶的である。孤存人の理想とか幸福とかいふことは、それ自體一個のパラドツクスに外ならぬ。連帶は我々に運命づけられた生活の必然的原理である。凡ての存在原理の勝利は、何れにしても社會人の連帶によりて許されたる單位に歸着することを先在條件とせねばならぬ。而しながら我々の求むるものは、純人間的動機に振作された社會連帶

の範圍を出るものではない。宗教的見地、殊に基督教一流の立場からいふならば、神と人類との愛によりて、若しくば自然的秩序に超越せる秩序、即ち精神の一層本質的なる結合を實現せむとする願望によりて靈感されたる社會連帶のみが、眞の連帶であるかも知れない。しかし、これによれば、連帶は、人類社會に優越せる或る物を追行することの條件に於てのみ、その道德的價値を有することになるのであるから、かくのごとき連帶樣式は、結局一個の理想に止まつて、實現の可能性を缺いて居る。蓋し天國の觀念は、形而上學的若しくば神學的の凡ての要求假定から全然離れて確立さるべき社會的義務の成立を妨げるからである。

連帶が既に個人の必然的運命であるとすれば、個人道德は凡て「連帶の義務」に發祥し、連帶の義務の完成に還元されるものといつてもよいかも知れない。しかし、連帶の義務は樣々の形態に於て表現され得るので、それだけに、この觀念はまた莫然たるものであるがために、色々な不祥な解釋を生ぜしめる餘地が尠くない。若しこれが濫用されたらば、善のためよりも、寧ろ惡のために一層有效になるかも知れない。否むしろ、如何なる形式の下に於てであらうと、過去及び現在の專制的若しくば官僚的政治組織の治下に於て、人民の自由若しくば獨立に對して、社會的利害の名の下に加へられ、または加へられつゝある凡ての壓迫は、悉く連帶義務の濫用に外ならない。民衆煽動のために屢用ひらるゝ集國的强制のごときも、皆それである。しかし、この惡用の事實を見たからとて、我々は連帶の道德的價値を疑つてはならない。連帶が既に我々の必然的運命であるとすれば、我々は益々この觀念を善導し、純化して、その理想の實現に努めるの外はない。

「神は自然の道に於て我々を導く。」――プラトーンのこの言葉は眞である。既に神が至高美であり、至上善であるとするならば、我々が我々の情性及び知性の本能に刺衝されて、神に引つけられ、神に追隨して行くのは、極めて自然でも

あれば、また必然でもある。しかし、地球上に置かれた物體は、凡て引力の自然法則によりて、一樣に太陽に引きつけられると同樣に、我々は人性(ヒューマニティー)の仲介によりてのみ、精神的に神性に引きつけられるのである。何故といふに、人格的存在としての我々の生活の目的は、詮ずるところ、人性の實現である。我々の生活は人性の目安なしには不可能である。實は我々自身が、既に芽生への人性であり、人性の現實態であつて、人性とは、畢竟、この現實的存在の集積から構成された一般的理想態に外ならないからである。即ちこの意味に於ける人性の本質中には、現在のみならず、過去若しくば未來に於ける人類の生活、そして就中天才の最も高い生活の諸形態を包含することになるので、それは、要するに、凡ての人類の思想、活動、感情の中に於て生き殘る値打のある凡てであらねばならぬ。言ひ換へて見れば個人的存在が、彼等に課せられた現實的羈絆から解放された後に、そしてこの經過的形態の消え去つた後に、彼等の本質的單位を再現すべき人類の精神及び心情が、即ち人生の本質だといふことになるであらう。

而るにかくのごとき意味に於ける人性の實現は、過去の人類に對する一方的倚屬と、現在の同胞間に於ける相互倚屬との事實の上に成立つ社會連帶によりてのみ可能である。即ちそれは、時間、空間を通じて結合されたる凡ての眞理、凡ての價値を共同に置くことによりてのみ、實現され得る理想である。こゝに社會連帶の道德的價値が生じて來る。蓋し、目的としての人性の實現に高い道德的價値が認められるとすれば、その必然的手段としての社會連帶に、またこれに相應する道德的價値が與へられるのは、極めて當然なことであるからである。

六

社會的存在としての我々が、我々の同胞と密接に相倚關係に立つて居ることは、如何にしても否定しがたい。そして

社會連帶は、純科學的見地に於て、重要なる一事實であることも、また否みがたい。而しこの事實の相倚關係は、人の道德的意思に反するものではないだらうか？そして、人間が事實上、その表現を妨げ、その結果を緩和し、若しくば抑止することの出來ない他の自然的法則の多くの成果に對して、尙ほ人間の意思が反動するがように、連帶の事實が人間に課する社會的性質に對して、人の意思は反動し得ないだらうか？

然り、マックス・ステイルナーは言ふ。「私は私の原因を何物にも置かなかつた。私以上に存在するものは、それが神であらうと、人であらうと、凡て私の個性の感情を弱める。私は私の原因を私といふ「唯一者――Der Einzige――」に置くばかりだ」――。かくて社會連帶の結果から脫せむがために、無政府的個人主義者は、單に反政治的、無政治的であるばかりではなく、更に反社會的、無社會的になるのである。社會生活を理論づけるものは、個人及び家族の單純なる併存として、社會を解するにしても、若しくば、各自同一意思によりて動く有機體としてこれを解するにしても　兎も角も個人を結合する有意的若しくば無意的、機械的若しくば有機的、政治的若しくば社會的の一の聯鎖が存在することの、必然と妥當とを認めないものはないのであるが、ステイルナーは、この聯鎖の觀念にもまた極力反對する。卽ち、「それ自身の意識に存する自我は、如何なる聯鎖をも、また如何なる併立をも拒否する。自我は或る同一體の機關の一でもなければ、同一機制の一片でもない。自我は相互に少しも連帶的に感ずるものではない」と彼は言ふのである。社會組織に對する個人の叛逆は、恐らくこれ以上に行く餘地はあるまい。しかし、我々は、必ずしも生物社會學的比論の說明を待つまでもなく、我々の一切の人間性を捨てゝ了つて、我々が神か、さなくば、動物になつて了はないかぎり、我々は到底、人間社會から引離されて存在し得るものではないといふ我々自身の體驗を拒むことは出來ない。そしてまた、これと同時に、我々の個人的價値の必然的殊別化が、全體の進歩なり幸福なりを現出せしむる素因であるといふこと

とをも否定し得ない。かくて、共通の幸福を追ひ行く我々の表現や、決意や、情緒や、願望やは、凡ての部分的意識を自づと同一の一點に集中させる。そしてそこに一個の中樞が形成されて、我々の現實的の生活現象は凡てこれに發し、これに歸することになる。この中樞が詰り一般的意識なのである。そしてそれは、表現と衝動との自然的な最高集中であることに於て、我々に取つては眞實な實在である。そしてそれは、世界に於て規正された力の最大の集合であつて、また最廣の分配である。それは時間と空間とを支配する。……それは感銘と願望との連帶に於て成立つ。」我々の體驗はエピナのこの學説を是認せざるを得ないと同時に、社會力の構成に於て、一種の盲目的宿命が、人間の道德的意思の上に、除くべからざる征服の烙印を附するものとは、我々は考へない。固より個人は組織的社會に倚屬するものには相違ないが、而しまた社會は個人によりてのみ存在する。のみならず、個人の表現した觀念や、感情や、欲望や、憎惡やによりてのみ存在する。そしてこの全體が、各自に於て、その個性を作り、意思を作つて居るのである。

而し道德非認論を標榜するスティルナー一派の個人主義者に取つては、一般的意識、殊に、意識的に確立された共通の規律に服することは、彼等が彼等の尊嚴をなすと信ずるものを、拋棄することになるであらう。何故なれば、「唯一者」はニイチエの「超人」——Übermensch——と同樣に、彼自身に於て、彼自身のためにのみ、その固有の道德を作るからである。即ちスティルナーは言ふ。「世の中には、各自がその主人であり、その主法者であり、その主權者であり、その所有者である各別、無比の自我より外にはない。そこには生活の法則はない、道德的規範はない、命令はない、主權者はない、……そこには自我に取つて、義務も權利も、如何なる種類の法則もないとすれば、自己を表現し、自己を押し通すために、我々があらゆる手段、傳統的道德からは最も咎むべきものと見へるような手段までも用ゆることは、極めて自然である。」——而しこの道德否認主義は、尙は一個の道德である。何故といふに、それは凡ての人に、一個の行爲

の準則を科する。即ちそは「自からが凡ての中心をなし」、「自からの欲するがまゝに、彼の知力的、道徳的利益を追求すること」を、各自の義務だと宣言するからである。加之、彼に於ても、それは結局、特殊の樣式に於ける連帶の觀念に歸着する。即ち利己主義者の聯合がそれである。「若し私が或る他人を利用し得ると認めれば、私は彼と了解する。この了解によりて、私の權力が增加さるゝために、そして我々の共同の力によりて、孤立的個人が實現し得べきより以上のものが實現され得るがために、彼と了解する。私はこの社會に於ては、私の力の集積をしか見ない。そしてそれは、集積された私の力である限りに於てのみ、私はそれを認容する……、聯合が汝を所有するのではなく、汝が聯合を所有し、聯合を利用するのである。」

要するに、スティルナーは、社會組織が屢々その影響を受けてゐる利害を超越した博愛的原則に、社會的結合の實利的原則を對立させたにすぎない。そして彼獨特の表現とその用語とを離れて觀察すれば、スティルナーの道徳否認主義は、その根本原理の一に於て、「利己主義は社會秩序を實現するに充分なり」とするステユアート・ミルの實利主義と一致する。この原則によりて、既に、「各人がその利害の最良の判斷者であつて、而も凡ての利益は調和的であるとすれば、」個人に優越せる權力の凡ての干渉は、固より彼の要求するがごとく、峻烈に排斥されねばなるまい。而し、これは適切に言つて、社會連帶の否認にはならない。のみならず、犧牲は單に彼の利己主義によりて與へられるにすぎないと強調するものゝ、スティルナーは兎も角、彼の自由の樣々の犧牲を認容すべく、餘儀なくされて居るのである。彼は「競爭制度の下に於けるがように、時と勞苦とを人間の仕事が蕩盡すること」を避けむがために、必要缺ぐべからざる消費物の共同生產の目的に於て、「唯一者の合意を推賞」せざるを得なかつた。かくて彼は結局社會的分業を認めたのである。既にさうだとすれば、彼の理論は、凡ての見地に於ける人間の相互倚賴の關係を否定すべき、何等の根據をも持

たないと言はねばならぬ。

加之、他方に於て、利己主義が社會生活に於ける唯一の原理であるとしたらば、「より強き、よりエネルジツクな、より自主的な個人が、より弱き、より臆病な者に、彼の優越性を感ぜしめないように、」どうすれば出來るのであるか。彼の利己主義に於て、凡ての一般的法則に對する彼の輕侮に於て、最も強き者は、彼が領有し得べき富、行爲、享樂の凡ての源泉を自己の所有となすことを目的とする權力の行使に赴くように、必然運命づけられて居るものではないか？自己以外には考へない、そして何者にも優りて自己を尊重する利己主義者は、凡そ世の中に一として平等なものを見出し能はぬ筈ではないか。彼が一層優越な權力によりて壓倒されてあるか、さなくば、彼が蔑視する所謂弱者を、自から抑壓するか、その何れかであらねばならぬ。然り、利己主義の王國は力の王國である。ステイルナーは當然ニイチエと結付く、そして彼の「唯一者」は、「超人」と融合せねばならぬ。實は、彼が單獨に世の中に住つて居る場合の外、彼は現實的に、決して彼自身、彼の凡ての力を所有しては居ない。彼が聯合に這入れば、協力を忍べば、奉仕の相互關係を求むれば、彼の利己主義は、やがて反對の利益や、衝突する欲情を調和して、一般的意識の保護下に個人を置かねばならないことが豫定された「社會人」の利己主義になつて了ふのである。

エピキユラスは、利己主義と連帯との關係に就きて、更に一個の解決を暗示した。即ちこの賢人は、人間の相倚關係が齎す義務から免れむがために、家族生活、政治生活を初めとして、殆ど完全に一切の積極的生活を斷念せねばならなかつた。しかも彼がその道徳的存在を去勢して凡ての欲情や愛情を、靜寂の望みと苦痛の恐怖との前に捨て去つて了つた後に、彼は尙ほ、友人を持ち、その友人から奉仕を受け、その奉仕を受くるに當つて、彼等のために犧牲を拂ふことの出來たことを、正しく承認したものに外ならない。かくて、彼は、利己主義に取りて、或る社會連帯の必然性を認め

たのである。

そこで、我々は社會連帶が我々の生活の普遍的原理であることを確かめ得た。從つて、社會連帶の道德的價値は、また普遍的に肯定されねばならぬのである。

七

私はいま社會連帶の道德的價値を肯定した。從つて、連帶の義務もまた、社會人にとつては、當然道德的義務として是認されねばならぬことになるのであるが、しかし、この義務は、同時に、理性人にとりての普遍的義務としても考へられぬであらうか？ 蓋し、凡ての理性的原理の普遍性と妥當性とは、過去及び現在の人々の相互的影響によりて造られた「一般的思惟」の一種によりて、凡ての睿智に科せられた一致の力によりてのみ、現實的となるのである。そしてその固有の立法者であるものは、孤立的個人ではない。それは理性人である。一般理性に服する準非人格的存在である。カントの言葉を藉りて言へば、「彼の偏向（ナイグング）のために、彼に取りて一の例外を作ることに同意しないところの」それである。故に社會的に生活する人間が、ある一般的意思を作り出すことに努力する義務は、道德的義務の普遍的、必然的觀念に、正しく合致するものであらねばならぬ。第一、我々は社會を離れて義務の存在を考へ得るであらうか？ 我々同胞と何等の關係のない孤獨人の行爲には、寧ろ我々はあらゆる道德的意味を拒むべきではなからうか？ 固より、彼が勇氣のある人であるか、若しくば臆病な人であるか。辛棒強い人であるか、若しくば短氣な人であるかを、我々は認めることは出來よう。而し、彼が、假りにカントの要求するやうな「義務の法則を尊重することによつてゞなくとも、尠くも、一般的法則に合致せしめようとする意向、若しくば彼の個人的原理を普遍化させる可能性を目安とすることに

よつて、理性的であるやうに振舞ふ意向に於て行動しないならば、彼は充分道德的であるとは言はれない。彼には意向が欠けて居る。少しも普遍的理性を顧ることをしないで、たゞ自分自身に聽き、自分だけの考によりて判斷する一人者の孤獨から通常生ずる行爲の過謬に對して、彼は彼を保障する方法の何者をも有つて居ない。斯樣な徹底個人主義者は羽根の生へた天使ではあり得ようが、しかし、我々同樣の下界の人間ではあり得まい。個人の生活に於ける不幸や、窮狀や、貧困や、破產やの原因を克く研究して見たならば、そこには、彼れ固有の性質に於てよりも、寧ろ彼が結び付けられて居る人間全體に於て、より多くの原因を存することは明かである。害惡の原因に就て連帶である我々は、この害惡の共同恢復に就ても、また當然連帶でなければならぬ。そしてこれはまた當然理性人の要求でなければならぬ。

連帶は一般的意思乃至は一般的規範に對する或る程度の服從を豫想することは勿論であるが、しかし、これは、無政府的個人主義者の考へるやうに、個人に對して人格の自律を害するものではない。實踐理性の自己立法を毀けるものではない。「人格的尊嚴」の理想――個人道德の一の目標であるやうに思はれるこの理想は、一般的規範に對する尊重と、この規範の要求を滿足せしむべき能力とによりて、各自が夫々自己の價する階級に安ずべき内面的階級制を考へてゐる人々に向つて、むしろ眞の道德的價値を有するのである。

他律を避けるといふことは、自から理性人と信ずる個人に關するかぎり、それは自己自身にのみ服從するといふことではない。それは理想人の實現を目的とすることである。そしてこれが、若し自然的連帶に於て實現され得たとすれば、それは個人的進步、若しくば向上の條件たる社會的進步、若しくば向上の共同努力に精進する善良なる意思の一致に待たねばならなかつたであらう。故に、各人がその固有の德を發達せしめむがためには、その人格の完成を期せむがためには、個人及び社會の連帶關係を益々深化し、純化することに努める義務を痛感せねばならぬ。

加之、一般的理性は、その社會的起原の故を以て、分立的意思の可能なる最大規整（コーディネーション）を、當然人類に命せねばならぬ。そしてこの規整の普遍的必要は、人類にとりては、社會的統制化の命令的必要となる。自然に於ては、凡てが體制（オーガナイズ）される。そして普遍的必要を持ち得るに至つた人類は、この共同的體制の事業に、意識的に協働すべき義務を、行動の原則とせねばならぬ。そして個人の相互倚屬や、相互的協力や、個人間の調和を助成し、若しくば各自の協力を規正する使命の下に構成さるべき社會力や――要するに、社會連帶の一般觀念が要求するこれ等の凡ては、我々に取つて最も重要なる道德的義務の資料を、漸時供給しつゝあるのである。

連帶の進化は常に理性の力を増加する。かくて、人性の中に孕まれる容習の進化は、社會連帶の觀念を以て、段々と社會の正則なる化成を指導する觀念たらしめるであらう。

八

社會連帶の可能なる形式中に、道德的理想に適合する一形式が存すべきことは、最早疑ふの餘地はない。然らば、道德人を實現するに適した連帶の様式、從つて眞の人格的生活を可能ならしめる社會的結合の様式は何であるか？――この問題の考察は別論に讓りたいので、こゝではこの點には全然觸れないことにするが、兎も角、一般の社會的義務は道德的義務そのものである。個人は、事實上、凡て一般的意識の命令に盲目的に服從して行く。常識の要求、習俗、神の命令、これ等の規範的公準は、順次、我々個人に我々の義務を賦課するのであるが、これ等の義務觀念が、一般感情に對して一層獨自的な我々の良心の中に自から化成するに至つて、我々は、自分以外には考へない孤立的個人の與へ得る法則に優つた或る法則に從ふべき義務に對して、常に我々の有つて居た尊敬を、理性の命令のために保存したことに

なるのである。

そこで、純眞な連帶意識は、是非とも人格的の愛と結びついて來ねばならぬ。連帶人の運命は一蓮託生である。共に喜び、共に悲しみ、共に死なむとする共同運命の意識が、結局、連帶意識の基調である。そして社會人の心理に、この共同運命の感覺が成立つのは、極めて自然でもあれば、また必然でもある過程なのである。我々は、如何にしても、孤獨では生きがたい。コントの言ふがように、實證的考へに照らして見たらば、本來の意味に於ける人類といふものは存在しない。人類はユーマニテとしてのみ存在し得るにすぎない。何故といふに、我々の發達は、何等かの關係の下に、凡て社會に負ふところがあるからである。故に直接にせよ、間接にせよ、何等かの形に於て、相互に他人の奉仕を受けることによりてのみ、我々は我々の生を全ふしつゝあるのである。共同運命の感覺は、この素朴な事實から必然的に發生する。そしてこの共同運命の意識は、更に、社會人の間に相互奉仕の義務觀念の確立を促すことになる。かくて相互奉仕の義務意識が、社會連帶の意識的基礎を成すのである。故にこの意識的基礎の上に立つ社會連帶は、極端な無政府的個人主義や、利己主義とは調和しがたい。連帶人の道德は利己主義と通ずるところがない。連帶人の道德は利他主義を基本原理とせねばならぬ。「他人のために生きよ」——これが即ち連帶人の第一義務の表現であらう。社會生活に於ける各自の協力は、意思及び思辯に先在せる、かの盲目的な、抗拒すべからざる同情によりて各自が促進さるゝ場合に、最も有効である。同情は各自の間に交通の道を拓く媒子である。そしてこの所謂同病相憐の情は、現實に共同運命を意識しつゝある者の間に於て、最も深刻に味はるべき心境であらねばならぬ。同情は連帶人の道德的基調である。社會生活に於ける犧牲の觀念もまたこゝから生れて來る。かくて連帶人の間には「隣人の愛」が成立つ。「友愛」の觀念がそれである。そして人格的結合としての社會連帶の要求する友愛の意識的基礎は、連帶人の間を支配せねばならぬ人格價値

に對する相互的の尊重、卽ち敬自敬他、愛自愛他の精神である。前にも言つたやうに、連帶人の協力は、結局、理想人の實現を共同理想として、人格の相互完成のためにする精進でなければならぬので、これが卽ち社會連帶の積極的要素である。友愛は社會連帶の意識的基礎の上に、この積極的要素と結合されて、初めて人格的の愛となるのである。そして社會的結合の基本的原理となるのである。

革命人は「我々に自由を與へよ」と叫ぶ。自由！平等！何といふ美はしい名であらう。而し、我々は求むるものゝ前に盲目であつてはならぬ。若し強い、そして純眞な連帶意識が各人を支配して居なかつたならば、自由が果して我々に何の歡びを齎し得よう？　平等が果して何の幸福を齎し得よう？「自由が何であるか！　自由こそ大なる責任者ではないか。この放縱な、殘忍な、そして石胎(うまづめ)の處女めが。」これは革命佛蘭西の自由主義に欺かれたる民衆の憤怒の叫びであつた。我々はフランス革命の結果に學ぶところがなければならぬ。一度自由及び平等の名に於て確立されたデモクラシーの精神は、今や却て、自由及び平等の名に於て破壞されて居るではないか。

九

私は次ぎに連帶の義務と個人の自由との關係に就きて述べて見たい。我々が眞に道德的たらむがためには、單に本能と模倣とによりて、屈從的に行動するにすぎないかの動物の生活から、我々のそれは本質的に區別されねばならない。その區別の原理は、人間の意思に與へられた自己決定の力である、心理學的分析によりて確定された我々の存在は、單に遺傳や環境の結果ではない。我々自身が一の原因である。そして我々の自我は我々固有のものであつて、自己決定の直接の原理である。この原理に基いて、一面に於ては現實態から解放され、他面に於ては理想態に躍進することの可能

が我々に與へられる。前者は自由の消極的方面であつて、後者はその積極的方面である。我々の生活には、その何れの一面が阻止されても、我々は完全なる人格生活を營むことは出來ない。自由人の生活には、常にこの兩方面の可能態が完全に保障されてあらねばならぬ。而るに社會連帶の結果として一般的意識の要求に、若し我々は常に受働的に服從しなければならなかつたとしたならば、我々の自由は、尠くもその何れの方面かに於て、著しく迫害されるか、若しくば多少とも制限されざるを得ない。故に人格的結合の社會に於ける連帶人の道德は、かくのごとき受働的服從の狀態を認容すべきではない。固より、一般的意識に對する單純なる受働的服從の要求は、社會連帶の必然的性質ではないが、而し集團の一般的意識は、本來、個人的意識の集積をその本質とするので、時の經過とともに硬化しやすい。從つてその成員に對して、漸時、單純なる機械的作用を營むことになるのは、否定しがたい。けれども他方に於て、社會はまたその成員と共に宇宙の目的組織の一部として、絕へず創造的進化の過程に織り込まれて行くので、進化の過程に於ける社會對個人の相互的寄與、卽ち社會的成員の各自がその全體に對して與へる影響と、その全體から受ける影響との交互作用によりて、社會の一般的意識はまた必然その反響を受けざるを得ないのである。

一般的意識は我々個人の所産である。そしてその暴君的支配を、我々が受けなければならない新しい神性の一種ではない。一般的意識は、これを生み出す社會人の知力、感情及び意思の平均價値に過ぎない。卽ち輿論、社會感情、習俗等は要するに凡て集團の平均道德であつて、悉く個人的の判斷や、感情や、意思の所産に外ならないのであるから、別語を以て言へば、結局、一定の時期に於ける個人的創見の集積を本質とする合成力に過ぎないことになる。從つてこの合成力は、その組成因子が恒久的である場合に於てのみ、恒久的である。個人的意思の充分なる數に於て、そのエネルギー若しくば方向の變化が現はれゝば、勢ひ、その平均道德は變化せざるを得ない。故に一般的水準を、强て凡ての人

々に科しようとしても、それは結局無益な企てであるとともに、また不可能なことなのである。自由なる個人的決定のモディフィケーションを許さない嚴正な意思必至論の立場から、若しくば普遍主義の名に於て、實は我々の習俗、我々の信仰、我々の願望の中に進化して行くものに外ならない社會の秩序に、單に受働的に服從することを以て、我々の道徳的選擇に代らしめようとする人々は、實際、連帶及び社會的實在に關する誤れる觀念によりて支配された妄想家に過ぎないのである。而し、一般的意識が進化の過程に服して、段々その水準を高めて行くがためには、それは個人の善良なる意思の協力に待つの外はない。故に連帶の機械組織を、善や理想の勝利に實際役立たしめ得るのは、連帶義務の積極的方面の表現として、常に善良なる意思にのみ歸せらるべき特權である。故に、我々の社會に我々の生活を支配すべき一層有力な、一層純美な一般的意識が構成されむがためには、道徳人としての我々の個人的價値が、益々重要な意味を持つて來るのである。そして、社會により善き習俗が行はれ、より有効なる指導的觀念が與へられ、より大なる進歩が實現されむがためには、そしてその結果として、社會的結合を一層强固に促進せしめむがためには、個人の自由なる協力に益々合理的な積極的要素の働いて來ることを、必要とするのである。

そこで、連帶人の義務は、單に連帶の支持に忠實なることにのみ止まるものではない。一般的意識に單に受働的に從服することは、連帶義務の消極的方面にすぎない。連帶人は更に進んで一般的意識の向上乃至進歩に積極的に協力せねばならぬ。これ即ち連帶義務の主働的、積極的方面であつて、連帶人の道徳の最も本質的な部分である。故に連帶人として、社會連帶の進化の原因に貢獻せむがためには、各自は單に彼の自由を保存するのみではなく、またこれを增加することに努めねばならぬ。單に社會的全體の一要素となるのみならず、より優秀なる組織の意識的要素となることが肝要である。團體生活の古い因襲の皮殼から脱することの出來ない人達は、この個人化の努力を、社會的結合に有害だと

いふであらう。固より個人がその獨自性を肯定することが愈大なるに從つて、傳統的道德の規範を批判することが愈自由であるとともに、妥協の天地を見出すことが、一般的意識を構成することが、愈不便になるであらう。所謂哲學的批判なるものは、多く否定に始まつて、しかも積極的肯定の上に一致すべき手段を我々に與へることは出來ないのであるから、專ら强い共通的信念に負ふところの「道德的統一」を破壞する危險を藏するのは否定しがたい。マルセル・ベルネはいふ。「錬り上げられた思想の缺點は頑强で厭利であることである。我々が眞理の一部を認むるや否や、我々はその斷片が我々の目に眞理そのものと見えるほどの、そして我々がそれ以上に最早求むるところなく、他のものを見ることが寧ろ我々に拒まれてあるかに思はれるほどの價値を附けたがる。個人の精神中に生れた道德觀念は、一度社會的出口を見出すと同時に、直ちに人類や事物を、その尺度に同化させることを初める。そしてこの觀念は、異つた人々の間に異つた方法で化成され得るのであるから、反對の方面に於て幸福の道を我々に示すところの反對學説も、またかくのごとくして作られる」。――かようにして、我々の生活を指導し、若しくば我々の行動を判斷するに役立つべき感情や思想の中に、また道德的無政府や、社會連帶に對する反逆が生れて來るのである。

自由なる道德的反省――即ち社會が我々に指定する指針を採用し、若しくば拒絶することに於て、凡て勝手に判斷すべき權利が、個人によりて恢復される直接の結果は、即ち多くの人々の惱んでゐる所謂「道德的危機」である。かくて科學的分析の進歩によりて招來される觀念の混亂や、益々増長する個人主義の無遠慮な發現やの前に、怖れをなして居る現代の特權階級や因襲的道德者流は、勿體らしく國粹主義を擔ぎ廻つて見たり、所謂醇風美俗の説法に悲鳴を擧げて見たり、まだそれでも足りずに思想に犧牲を科してまでも、道德的問題や社會問題の解決に對して、思想の自由を制限することに、汲々として居るのである。而し、彼の價値に就きて彼自身を判斷し、彼の生活を彼自身に指導すべき能力

を自覺してゐる人達や、或る行爲の道德的價値の評價に關するかぎり、何人に對しても、凡て地位の平等を宣言する人達に向て、かの群居的連帶——Solidarité grégaire——から去ることの餘り遠くない、そして原始的社會のそれに酷似せる一種の道德的單位の建設に便せむがために、彼等の自由を斷念せよと要求するのは、無益であらう。

而し、新思想を發表することに於て、彼自身の信念を實行することに於て、一般的批難の危險を冒すことを敢てしない、または敢てし得ない境遇に置かれた人達に向ては、社會的强制は常に有力なる壓迫である。而し、假令才能の殊別化が益々意見の差異を招來するとしても、また一方に於て、觀念及び感情の根本的同一性よりも、むしろその調和を求むることに、段々と訓練されて來た我々文明社會には、如何なる意味に於ても、社會的强制は不適當である。良心又は信仰の自由は、古代の連帶に對して、我々の文明が獲得し得た讓渡すべからざる征服の一である。

合理的社會に於ける連帶人は、むしろ進んでその思想を主張する義務がある。その個人的信念を擁護すべき義務がある。何故といふに、若し彼がこれを爲さなければ、彼は眞理や理性の利益を、個人的利益に隷屬させることになるので、連帶の要求する相互奉仕の義務に反することになるからである。連帶人の道德の眞價はその積極的方面に存する主働的性質に存する。彼の良心が認容するかぎりに於て、個人的利益の凡てを、社會のために解放して、社會的進化のために奉仕することが、連帶人にとりては、何よりも大切な道德である。若し凡ての個人が、この義務を無視して、一樣に消極的態度を取つたとしたならば、社會的思想や、社會的感情の進歩は止まつてしまふ、そして個人の生活に缺くべからざる心的、道德的發達に對して、凝結した一般的意識によりて加へられる障碍に、我々は段々惱まされることになる。そして各自がその固有の信仰や思想の發表を犧牲にした場合の結果は、結局一般的信仰や思想の權威の失墜であつて、各人は最早これに對して、如何なる尊敬の感情をも有ち得ぬであらう。故に社會は、平和の名に於ても、連帶の

名に於ても、その他如何なる名義に於ても、かゝる不合理を要求することは出來ない筈である。反對に、最高度の連帶は最大限度に於ける個人の自發的な、そして積極的な協力を豫定するのであるから、各自が各自の見地に於て、各自が各自の個人的支持によりて、次第に障碍を排し、矛盾を除くことに努めて、やがて單一なる成果の獲得に協力することを、社會は、個人の根本的義務として要求せねばならないのである。單なる服從や諦めの沈滯せる雰圍氣に於ける所謂社會的平和なるものに、何の意味があるか。各自が共通の理想を追求しつゝ、互にその全能力を傾けて、その自由なる所信、若しくばそのイニシアチブの下に、互に健鬪し合ふことの可能なる結合の様式に於てこそ、社會連帶の道德的精神は、一層強く、一層豐かに現はれて居るのである。

十

デュルケームが原始的の「機械的連帶」——Solidarité méchanique——に對して、「有機的連帶」——Solidarité organique——と彼の名くるものゝ道德的價値を主張したのは、極めて正當である。彼が有機的連帶と稱するものゝ主たる特調は、個人的殊別化と分業との合理的組織である。蓋し、有力なる社會的結合を實現せむがためには、各人は嚴密にその能力の殊別化に基いて社會的組織の中に織り込まれてあらねばならぬ。何故といふに、能力の殊別化は、各自の協力を有益ならしめ、且つ有効ならしめる唯一の方法だからである。而るにこの個人的殊別化が有益に行はれて、社會全體の價値の增加に貢獻すべき個人的價値を、各自の領域に於て有効に實現せしめむがためには——そしてこれは連帶意識を凡ての成員に一層強く呼び起させる所以でもある——、社會的强制によりて個人のイニシアチブが阻止されるようなことがあつてはならぬ。却て奬勵されねばならぬ。自由が與へられねばならぬ。社會は部分的裝置の接合と齒車仕

掛とによりて、千遍一律に全體の仕事を運んで行く一個の機械ではない。社會組織は、無意識的に初つて、漸時意識的過程を踏んで行く個人の結合の自然的成果である。而るにその個人は、皆異つた才能を持つて生れて來た神秘なる自我の持主である。その才能の發展には、豫見された全體の意匠(プラーン)はない。個人の才能は、生活の過程に於ける偶然――、もつと一般的に言へば、與へられた環境によりて、屡、稲妻のごとく隨時に觸發する。個人的殊別化の進歩は、自我の中に集積された個性の匿れたる部分の開發に關する。個人の特性は天才の煌きによりて、しばしばその無意識的仕事に顯勢する。故に自由の阻止によつて、イニシアチブは破壞される。改良は妨げられる。發明は葬られる。そして連帶は毀けられる。社會權力は、常に、個人の獨自性の保護によりて、社會連帶の威力を發揮せしむることに於て、その道德的是認を見出すのである。凡ての法律、凡ての權力は、個人的自由の擁護、從つて分業と殊別化との組織に於て、個人のイニシアチブを尊重することに、常に調和と秩序との基礎を見出すことを目的とせねばならぬ。そして自由に承認されたる道德的相互倚屬を增進することに努めねばならぬ。蓋し、個人に科せられ得る凡ての權力の淵源は社會連帶であるから單にこの點から言つても、個人に缺ぐべからざる自由の尊重を、各自に保障するのは、また社會連帶の重要な使命とされねばならぬ筈である。

　婚姻的結合の連帶は、暴力や、金力や、親達の強制に、最早その基礎を置くべきではない。家族的連帶は、無制限な家長の權力に、最早その基礎を置くべきではない。連帶の進化は、子や妻の獨自性を保護するために、漸時その法律的保護の擴大を要求する。國民の政治的連帶は、被支配階級を支配階級に、無產階級若しくば勞働階級を、有產階級、若しくば特權階級に從屬せしむることに、最早その基礎を置くべきではない。また專ら、力によりて秩序を、強制によりて統一を、信仰や教育の劃一によりて、結合を維持せむとする君主や貴族の權力に、最早その基礎を置くべきではな

い。連帶の進化は 權力の濫用や、集團の名に於て加へらるゝ壓迫に對して、個人を保護すべき法律的保障の擴大を、益々要求するのである。

そこで、永久的結合の社會の場合であらうと、一時的結合の社會的集團の場合であらうと、兎も角も、集合體の利益に於て 個人意思が恐らく承認することを拒むであらうやうな――若し彼等が自由であつたとすれば――、共通の習俗なり、教義なり、信仰なり、規則なりを、個人に科せようとする人類の連帶は、常に不道德的なものとされねばならぬ。普通には、自己固有の思想、固有の感情に從つて、意見を發表し、若しくば行動する自由は、單に思惟し判斷する自由よりも、社會連帶によりて侵害される危險が遙かに大きい。かの群居的連帶は、全體の運動と一致しない凡ての運動に對して、徹底的に禁止的である。統制なき群集――foules――は、集合的壓制から免れむがために反抗的態度を取る個人に對しては、猛烈に反動する。群集及びこれに類する集合の不道德性は否定しがたい。凡て獨自性の企てを抑壓せむがために社會的强制が行はれる度毎に、個人の道德的存在の尊嚴と權利とは、侵害されざるを得ないのである。この點に於て注意すべきは、かの民衆煽動的習俗である。この習俗は、疑ひもなく何れの時代に於ても、一般に承認されないか、または過酷、不當なる連帶の口實の下に、個人自由に對して、最も惡くむべき侵害を、用捨もなく、民衆に犯させたのである。かくの如くして、社會的强制は、しばしば個人の獨自性を抑壓し、自由を侵害するための手段となるのである。

凡て共同的實利以外には義務の根據を見出し得ないやうな場合に、眞の道德的義務と矛盾する義務を、團體は個人に對して賦課する權利を有すべきではない。サンヂカは、成員の加入及び脱退の自由を、尠くも原則としなければならぬのは勿論であるが、また、集團の力によりて、單純なる政治的若しくば經濟的利益を獲得せむがために、勞働者に向つ

て、例へばその家族に對する義務、若しくば愛國的義務の忘却を、道德的に要求することは出來ない。そして社會連帶は、また所謂「一般的利益」と呼ばれるものを標榜することが尠くない。而し、それは大概、共同的物慾の滿足、卽ち多少合理的な利得、安樂、若しくば閑散の慾望にすぎない。ところで、我々個人は、社會組織の支持及びその發達のために等しく協力することには、道德的に義務づけられてゐるとしても、通常競爭的立場に居る他の團結若しくば階級、しかも正義や一般人類の進步を顧念することなく、單に彼等の優越や獨占をのみ求めて居るやうな團結若しくば階級の成功や幸福のために、あらゆる狀況の下に協力することには、決して義務づけられてはあり得ない。寧ろその協力を拒み、若しくばこれに反抗する正當なる權利が、等しく社會連帶の名に於て積極的に是認されるのである。

特權階級の專制若しくば暴虐を破壞するに充分有力なる各種の社會的集團が構成されることは、社會連帶の健全なる發達のために、誠に喜ばしいことであるだけではなく、また極めて必要なことである。强制によりて却て連帶を危くし若しくば不能にするやうな權力を簒奪して、一層廣汎な、一層意識的な、そして一層自由に承認された相互倚屬を以て、かような實質的に狹い基礎の上に立つた連帶に代らしめようとする協力は、極めて價値ある有意義な道德的事業である。しかのみならず、これはまた所謂社會の「道德的單位」――L'unité morale――の實現に貢献すべき、最も有效な方法ででもある。要するに共通理想の獲得を追行する我々の合同は、單なる服從や諦めによりて與へられる社會的平和によりて、更に崇高な意義を持つて居ることは確かである。一個の連合の制限された範圍に止まらず、更に最大の社會的集團の多數を包擁して、こゝに一個の共通精神を形成するまでに、段々と擴大された廣い範圍に於ける善良なる意思の一致が實現されたならば、そこに初めて勝ち誇つた自由主義の凱歌が揭げられるであらう。

十一

私は最後に連帶人の道德を要約して、この稿を結びたい。第一、單なる服從や、諦らめや、公事に對する無關心は、連帶人の道德ではあり得ない。選擧權の不行使は、連帶人に取りては、一の惡德である。閑散や、隱遁の生活は、連帶人に取りては、許すべからざる一個の罪惡である。現在のブールヂョワ階級の一部は、この意味に於て、第一に數ふべき道德的罪人であらう。トルストイ一流の無抵抗主義は、連帶人の世界とは正反對の地帶に住ふ人達に與へられた奴隷の道德である。殊に、近來流行の逃避生活に、自からの淸きを求めつゝある君子人達は、連帶人の道德から見たらば、ただに高慢くさいばかりではない。恐らく、最も卑怯な、最も狡猾な、そして最も冷酷な利己主義者であらう。そして社會から、人類同胞から彼等が受け入れた、そしてまた恐らく現に受け入れつゝある恩惠に對して、無感覺な忘恩者でもあらう。最も陰險にして無恥な責任の回避者でもあらう。社會組織に對して、恐らくこれ位、思ひきつた叛逆はあるまい。連帶人の道德は、かような退嬰を許さない。社會進化は、常に鬪爭の形式に於てのみ可能である。所謂敬遠の美德は、連帶人の道德ではない。連帶人の道德は、エネルギーの道德である。力の合理化である。積極的道德である。而しそれは、奪ふことに於てのそれではなく、與ふることに於てのそれである。從つて連帶人の道德は同時にまた、當然人類相愛の道德である。勞働搾取は、連帶人の社會に於ては、最も惡むべき罪惡であらう。連帶人の道德の最も根本的な實踐的原理は、敬自敬他を信條とする相互奉仕の精神であらねばならぬ。人類の運命を共同に感じつゝ、共通の理想を追求しつゝ、殊に人格の相互完成を目的としつゝ、我々の魂と魂との直接の交通を求めむとする不斷の精進――これが卽ち連帶人の道德の、正に本領とするところである。

社會の存立は個人的道德力の支持に待つの外はない。社會の血脈をなすものは、個人の責任感である。連帶意識に基く社會的責任の感念が、各人の間を強く、深く支配して居なかつたらば、社會の進歩、その健全なる發達は望みがたい。若し各人の心にこの共通感覺が深く巣喰つて居なかつたらば、假令社會組織にどんな立派な名案が與へられようとも、また社會がどんな合理的な原理の下に改造されようとも、畢竟それは机上の空論に終つて、現實に於ては、幾何の効果をも齎すことは出來ないであらう。我々は第一にフランス革命の結果に於て、この事實を見た。最近にはロシアの革命に於ても、獨逸の革命に於ても、また等しくこの事實を見た。かのフランス人が多數同胞の高價なる血汐の犧牲を拂つて、漸くにして贖い得た革命フランスに於ける自由主義の勝利が、一般個人の幸福に果して何程の美果を齎し得たか。それは結局、久しく個人の上に加へられた呪はしき古い桎梏を、更に鋭い新しい桎梏と取り代へただけではなかつたか。三代相恩の普遍主義の暴君を見限つて、新しい個體主義の暴君の下に走つたまでゞはないか。そして彼等の憧憬した自由は、彼等を祝福する弘誓の淨光ではなくて、却て彼等に焦熱の苦しみを與へる厭界の業火と化して了つたではないか。何故であるか？　これ畢竟、革命の第三標語「友愛」の精神――その下に潜んだ人類生活の統導原理が、美しい自由主義に透徹して居なかつたがために外ならない。嘗て革命フランスの現狀に長大息を漏して、ルナンは叫んだ、「フランスは段々野卑に陥つて行く。……彼は徹頭徹尾唯物主義になつた。往時に於けるフランスの貴き金盞花の愛國心、美の情熱、榮光の愛慕は消え失せた。……威嚴のない、面倒の少い安價な政府、自由の正直な願望、平等の大なる渴望、國の榮譽に對する全くの無關心、明白でない利益には寸毫の犧牲をも拂ふまいと決められた意思――これが即ち最も進んだ國民と言はれるフランス人の精神として、私に映ずるところのものである」と。而るにフランスこそ世界に於ける大思想と熱情との傳統的郷土ではなかつたか？

既に行き詰つた資本主義的文化の殘した現在の社會組識の改造は、何れの國民に取りても、焦眉の緊要事であること は言ふまでもない。我々は是非ともその合理的改造を促進するために協力せねばならぬ。而し我々の精神が、純正なる 連帶の義務感念によりて支配されて居なかつたらば、我々の協力は、また既往に於ける先例の轍を踏んで、結局無効に 終るべきは明白である。我々の生活の物的條件は、それ自體に於て、何等絕對的價値を有するものではない。單に我々 の人格價値を實現するがために必要な條件としての相對的價値を有するにすぎない。從つて物的改造は更に心的改造の 根本に遡源せねばならぬことを忘れてはならぬ。

重ねて言ふ。連帶人の道德は敬自敬他の精神に基く相互奉仕である。人格的結合の社會に於ける連帶人の生活は、責 任と勇氣とに促進されて、希望と創造との榮光に躍動せる世界を實現せむがための協力に於ける、不斷の努力と精進と である。

新國防方針の解剖

水野廣徳

一　所謂新國防方針

本年早春加藤首相、上原參謀總長、山下海軍々令部長の三人が打揃ひ、汽車を同じうして、沼津御用邸に御靜養中なる攝政殿下に伺候し、何事か伏奏したと云ふ新聞を見た。軍界三巨頭の合同奏上は問はずして國防軍備に關する極めて重大事件なることを容易に推想せられた。越へて數日、都下の某大新聞紙上に「愈々確定せる新國防方針」と題し、左の記事が掲げられた。

(前略)帝國が其假想敵國と交戰狀態に入り、更に帝國が封鎖を受けたる場合には食糧及び作戰資材を隣邦に需める必要あり。斯かる場合には我が陸軍は此の必要に迫られ或る行動に出づることになつて居る。某々海峽の完全なる聯絡、遮斷に於ける嚴重なる警備、大陸の某地域に對する軍事行動及兵力配備等の變更を招くに至るのである。又我が海軍はワシントン會議の結果、主力艦隊に於て米國の十に對する六の割合となつたので補助艦に力を注ぎ、陸軍に於ては平時兵力を二十一個師團兵數二十三萬に縮小し、戰時○○個師團とし、新兵器の充實を爲せる等、ワシントン會議及陸軍縮小の結果、國防計畫に非常なる變更があつたのは寧ろ當然とすべく、唯今日まで漠然たりしが愈々確定した譯である。

右は特に耳新らしき國防方針ではない。從來陸軍大臣などが議會其他に於て、或は露骨に、或は隱微に、說示したるものが正式の帷幄上奏に依りて、今回具體的に決定したるに過ぎない。素より新聞記事である。『新聞記事は信ずるに足らず、新聞記事に對しては責任を有せず』と云ふのが、日本政治家の意見であるから、此の記事に對しても、當局者は或は事實相違と逃げるかも知れない。併しながら曾て武器問題の判決文をば、當局の發表以前に推量に依つて一句違はず適中せしめた程の千里眼若くは讀心術を有せる新聞記者のことゝて、吾人は之に對し

て絶大の信用を措くものである。恐らく參謀本部の金庫内に藏せる極秘書類をば、得意の忍術に依りて讀破したるものであらうと思ふ。加之、吾人は右記事の眞なることを信ずるに足る幾多の心證を有する。

我が國の現在制度に從へば、國防の計畫を立つるものは陸軍に在つては參謀本部、海軍に在つては海軍々令部である。而して之を決定するは憲法第十二條「天皇ハ陸海軍ノ編制及常備兵額ヲ定ム」の規定に基き天皇の大權に屬して居る。併しながら實際に於て之を決定するものは、軍事諮詢機關たる「軍事參議院」と稱する軍人の集團である。斯くて決定せられたる國防方針を遂行實施せしむる爲め、陸海軍大臣は其の特殊の任用官制を盾として内閣を脅威するの力を有して居る。軍人に依つて計畫せられ、軍人に依つて決定せられ、軍人に依つて實施を強要せられるのが、國防に關する我が國の現在制度である。右に掲げたる新國防方針なるものも亦斯くの如くして決定せられたるものである。加藤首相は過ぐる議會に於て、國防は軍人の專有すべきものにあらずと國民の前に明言して居る。而かも之が軍人の專有でなくて何であるか。抑も國防は國家の爲めの國防である。國民の爲めの國防である。國家の存亡安危に關する重大問題である。國民の生命財產に關する重大問題である。然るに此の重大問題の計畫、決定、實施の權が、經濟知識に乏しく、政治識見の低き、而かも思想に於て昔猶固陋武斷主義軍國主義なる老軍人に依つて獨占せられ、專斷せられ、國民の意思は寸毫だも顧みらるゝ處はない。而かも國民は必任の義務として兵役に徵集せられ、重税を賦課せられ、一朝事あるに際しては、砲彈の埋草とせられ、底の藻屑とせらるゝことは、忍び難き處である。加藤首相は議會に於て又、國防は產業其他萬般の事物を含むもので、軍備も亦其の一であると述べて居る。既に國防が軍人の專有物にあらずして、產業其他萬般の事物を含むものと覺らば、何故に國防問題をば軍人の專擅より解放して國民の共同に移さないのであるか。國防會議設置に對しても、軍部大臣官制改革に對しても、加藤首相は口に贊して腹に非んで居る。何ぞ言に勇にして行に怯なるやである。其の志あるも力足らざるに依るか、將た志と力と共に無きに依るかは知られねど、苟くも一國の總理大臣として、國家と國民とに對し、欺瞞的なる無誠意と誤魔化的なる茶維ッ鋒とは唯々驚くの外はない。

國費の四割乃至五割を投ずる軍備問題に、總ての國務中最も重大なるものである。然るに此の重大なる國政問題をば、單なる戰爭技師たる軍人の專擅に委し、恰かも秦人の肥瘠を聞く處人の如く、恬として念とせざる我が國民の無自覺と無責任と

は、是れ亦驚くの外はない。吾人國民は此の不合理非立憲なる現在の軍閥制度に依り、吾人の血液と、吾人の財嚢とを絞らるる國防軍備に關して、一言半句も容喙するの權利を與へられて居ないのである。然り、吾人國民は國防の策定に關與するの權利を奪はれ居るも、軍人の計畫したる國防方針に對し、軍機に觸れざる限り之を評論することは自由である。前記新國防方針なるものに關し、讀者と共に少しく研究して見たいと思ふ。

二　國防方針の變遷

日露戰爭後、元帥會議なるものに依りて國防方針が決定せられた。其の内容の如何なるものであつたかは確知せざるも、坊間傳へらるゝ處に依れば、陸軍二十五個師團、海軍五十萬噸と云ふことであつた。即ち日露戰爭當時に於ける陸軍十二個師團(外に近衛一個師團)、海軍約二十五萬噸に對して、各約二倍の大擴張である。而して戰後戰勝の餘威に乘じ、陸軍は第一次擴張として一氣呵成的に六個師團の増設を斷行し、海軍も亦之に準じて擴張に着手した。世界が擧つて軍國主義を奉ぜる當時に在つては、此の擴張は恐らく已むを得なかつたであらうと信ずる。其後我が國防方針は如何なる形式に依つて如何に變更せられたかは知らぬが、海軍は二十五萬噸より六四艦隊に變じ、更に八四艦隊に進み、遂に大正九年に至りて八八艦隊の建造が確定したのである。

日清戰爭後より日露戰爭に至る迄、帝國々防の假想敵國は海陸共に露國であつた。從つて海陸軍兩者の協調は所謂兩翼兩輪主義に依つて比較的圓滑に保たれたるのみならず、國民も亦臥薪嘗膽の意氣を以て、血を絞り肉を削るも軍費の支出を拒まなかつた。即ち明治三十三四年の頃に於ては海陸軍の軍費は總歳出の五割に達したることあるも、國民は之に對して一言の不平も唱へず、一句の不滿も抱かなかつたのである。是れ國民全體が國防軍備の切要を徹底的に了解して居たが爲めに外ならない。然るに日露戰爭の結果、露國海軍の全滅と米國海軍の勃興とは、自ら我が陸海軍の假想敵國を異にするに至らしめた。乃ち陸軍は露國の復讐戰に備へんが爲め、依然として露國を假想敵國と爲せるに反し、海軍は新に米國を以て假想敵國と認め、專ら之に備ふることゝなつたのである。之が爲め國防に對する海陸の協調は自ら圓滑を缺き、互に排他自薦して軍費預算の分捕戰を惹起し、兩者の反目は漸次強烈露骨となつて來た。恰かも歐洲戰爭前獨逸に於て、陸軍は露佛を敵とし、海軍は英國を敵とし、兩者の暗鬪明爭烈しかりしと同樣の狀態であつた。

此時に當り露國は内政整理の爲め暫く手を東方經略より緩

め、日露前の三國同盟說さへ唱へられて、日露の國交は比較的親善なりしに反し、偶日米の間には學童問題、移住問題など外交上の葛藤頻發して、日米戰爭の聲内外に喧しくなつた。日露戰爭中、露國婆爾的艦隊並に浦鹽艦隊に脅やかされて苦き經驗を嘗めたる我が國民は、陸軍よりも寧ろ海軍の必要を認め、所謂海主陸從の聲が高くなつた。加ふるに獨逸の武斷主義を模倣したる陸軍と、英國の自由主義を手本としたる海軍とに對し、國民の同情は自ら後者に集まつた。されば陸軍に在つては朝鮮二個師團の增設に對してすら國民の反對強烈なりしに反し、海軍に在つては尨大なる八八艦隊の建造費さへ容易に議會を通過し得たのである。海軍の得意に引き代へ陸軍の失意察するに餘りがあつた。國家内外の狀態を考察せる政治的大局に立脚せず、單なる軍事的見地のみに依つて軍人の策定せる國防方針なるものが、動もすれば陸軍の爲めの陸軍、海軍の爲めの海軍に墮し、兩者の反目的競爭を招來することは、感情の動物たる人間として免れ難き處である。是れ軍人の罪と云ふよりも寧ろ制度の罪である。

三　假想敵は何國？

歐洲大戰の狂瀾に依り、侵略的軍國主義の帝政露國は顚覆して新に勞農露國が生れた。勞農露國は今尙ほ八十萬乃至百萬の軍隊を擁すと傳へらるゝも、其の經濟能力の點より考ふるも、其の對外政策の上より見るも、又其の兵略の見地よりするも、近き將來に於て日本に對し、彼より進んで武力侵略の擧に出づるが如きことは絕對無と信ずることが出來る。是に於て帝政露國を假想敵として設けたる我が陸軍は今や全く其の標的を失ふに至つた。近來我が國に於て陸軍縮小の聲高きは全く之が爲めである。我が陸軍たるもの、此際新に假想敵國を選んで、之に應ずる國防方針を立て直すべき局面に衝當した。之と同時に我が海軍も亦華府協定に依りて國際的に其の勢力を限定せられ、最早や自由の擴張を許されない。是等の事情と理由とに依り、帝國の新國防方針の樹立決定せらるべきは當然である。唯遺憾なるは依然たる舊套を襲ふて、サーベル黨の專擅に依り新方針が決せられたることとである。

新國防方針に於ける重要なる政治的變改は、日露戰爭後一たび分離したる陸海軍の假想敵國が復び歸一したることとである。而して新方針に所謂假想敵國なるものが果して何國なるやは、世界に於ける日本の地理的關係と、國際間に於ける日本の經濟上及政治上の關係を一考すれば、容易に之を推知することが出來る。今少しく具體的に論ずれば、支那若くは露國を假想敵と

して現在の軍備を張ることは、所謂鶏を割くに牛刀を備ふるものである。佛國及伊國とは戰爭の因となるべき政治並に經濟上の利害關係が殆んど絶無である。然る時殘るところは唯英と米とあるのみである。即ち日本の假想敵國は英にあらざれば米、米にあらざれば英でなければならぬ。當局者にして發狂せざる限り、英米兩國を同時に假想敵として國防方針を確立する如きことはあるまいと信ずる。然るに英國は歐洲大戰の疲憊尙ほ深くして國民の平和を要望する念強きが爲め、近き未來に於て大なる戰爭を爲すの意志なきことは、最近、土耳其に對する同國の態度より見るも推想することが出來る。殊に英國は東洋並に濠洲方面に於て大なる軍事上の弱點を有して居る。理知に長ぜる今の英國民は、我より進んで其の利權を侵害せざる以上、日本に向つて彼より積極的に戰を挑むことは絶對に無いと信ずる。是に於てか日本と開戰の機會を存するものは獨り米國あるのみである。

吾人は素より日米戰爭を希望するものでない。又今日之を豫想するものでもない。併しながら苟くも國防問題を具體的に研究する爲めには假想敵國は必ず無くてはならぬ。本來國防の窮極目的は戰爭に備へんが爲めである。現代戰爭に於て假想敵の無き軍備は、標的の無き射擊の如きもので、其の果して正鵠を得たるや否やを知ることが出來ない。從來我が當局者が、日本の軍備には假想敵國と稱すべきものを有せずと說けるは、恐らく外交上に於ける遠慮と謙讓に過ぎないと信ずる。世界の各國が軍備を張つて互に相守り相防ぐ以上、自國と戰爭の機會最も多き或る友國を撰んで假想敵國と爲すことも亦、不愉快ながら已むを得ざることである。素より其の國を敵視し、其の國に挑戰する如き意志は毛頭有しないのである。此の見地に於て米國を假想敵國と爲し、以下新國防方針を解剖して見たい。

四 日米開戰せば

新國防方針に於ては『帝國が其假想敵國と交戰狀態に入り、更に其の封鎖を受けたる場合』とある。此處に謂ふ所の「封鎖」なる文字は其の意味頗る漠然として居る。苟くも日本の海軍が華府協定規約の如く、米國の十に對し六の力を有する以上、南は大隅海峽より北は津輕海峽に至る迄、延長一千海里の海岸を兵術的に封鎖することは絶對不可能と云ふことが出來る。若し封鎖を受ける場合ありとせば日本海軍全滅の後である。故に此處に所謂「封鎖」とは、法律上並に兵術上に於ける嚴格なる意味でなく、海外通商杜絕と云ふ如き廣き意味であることは明らかである。惟ふに日米戰爭の場合、日本の通商は、

縱令我に米國と同勢力の海軍ありとするも、其の範圍は著しく局限縮小せられることは爭ふべからざる處である。卽ち南北兩米との通商は全然杜絶するものと覺期せねばならぬ。米國巡洋艦及假想軍艦の大西洋並に地中海方面出動に依り、歐洲貿易も亦半減を免れぬであらう。濠洲南阿等との通商も幾分の脅威を免れざるのみならず、日米戰爭の場合英國の各殖民國は恐らく米國に好意を表すべく、從ふて此等の地方より物資を獲ることは著しく困難となるであらう。然る時日本が幸に菲律賓を攻略或は制壓して支那海東海等の制海權を握り得たりと假定するも、日本の安全通商範圍は略ぼ印度以東に局限せられることゝなる。若し夫れ菲律賓を攻略し得ずとすれば、日本の通商は臺灣海峽以北に縮限せられるのである。

是に於て斯かる場合、我は『食料及作戰資材を隣邦に需める必要』に逼まらるゝは明らかである。抑も隣邦とは何國ぞや。西に支那あり、北に露國あり、南に暹羅並に佛領蘭領英領等の印度がある。日米戰爭の場合、此等の隣邦が果して我に食料並に作戰資材を供給し得るの能力ありや否やは後の研究に殘し、假りに其の能力ありとすれば、我が國が之を得るの途は平和なる貿易手段に依るか。將た或は武力の强徵に依るかである。然るに新國防方針には『斯かる場合には我が陸軍は此の必要に迫まられ或る行動に出づることになつて居る』とある。是れ萬一の場合に於ては我が陸軍は武力を以て此等隣邦の資材を强徵するの意思あることを表示せるものである。而して此等隣邦中、我が陸軍を用ゐ得るものは支那と露國西（西比利亞）とであるが、西比利亞は文化尙ほ低く物資の産出貧弱なるを以て、我が陸軍の目的とする處は主として支那に在りと推定することが出來る。若し我が新國防方針にして果して右の如しとせば、支那としては誠に近所迷惑の至りで、其の日本を恐れ、日本を惡み、日本に背を向けるのも無理は無い。日本の軍閥者流は、白耳義の中立を蹂躙して世界の反感と憎惡とを買ひたる獨逸の覆轍を今尙ほ眞つ直ぐに追ひつゝあるものである。日本の危險焉より大なるはない。

五　作戰資材の出所

現代戰爭に於て、經濟力は兵力よりも尙ほ一層重要なる要素である。日米戰爭に由る生糸の貿易停止や、棉花の供給不足に伴ふ紡績業の不振等に依つて生ずる一般經濟力の低減は暫く別とし、戰爭の遂行と國民の生活とに直接必要なる各種資材中、我が國の最も缺乏せるものは鐵、棉花、羊毛、石油燃料、食料品である。今平時に於ける此等諸資材の供給元地を調査すれば

大要左の如しである。

(鐵) 鐵は各種作戰資材中第一の必需品にして、艦艇銃砲彈丸水雷等の直接戰鬪器具を始とし、交通運輸機關軍需工業機等に至る迄、戰時鐵の需用額は極めて大量に上り、軍事當局者と雖ども恐らく其の正確なる數量を豫測し得ないであらう。現代戰爭の勝敗を決するものは國力であるが、戰鬪の輸贏を決するものは鐵量であると云ふも誣言ではあるまい。獨り軍用としてのみならず、國民生活用として鐵の缺乏が如何に苦痛なるかは歐洲大戰中歐米諸國の鐵輸出禁止に依つて我が國民の嘗めたる苦き經驗に徵するも明らかである。

我が陸軍の調査に依れば歐洲戰爭中、戰場に於ける兵士一人の一ケ年消費鐵量は三噸乃至三噸八分に達したと云ふことである。左れば百萬の軍隊に對しては一ケ年三百萬噸より三百八十萬噸の鐵を要する計算である。素より日米戰爭の場合に於ては歐洲戰の如き大規模の陸戰行はれざるは明らかなるを以て、消費鐵量も亦歐洲戰と同一に律することは出來ない。夫にしても平時消費量の二倍三倍に達することは豫期せねばならぬであらう。大正十年度に於ける我が國の鐵消費量を見るに、銑鐵約七十六萬噸、鋼鐵百二十餘萬噸である。之に對し同年度に於ける內地産額(滿鮮を含む)は銑鐵六十六萬噸、鋼鐵五十萬噸である。

內地消費額	銑鐵	七六〇、九八五	內地産	四八三、七〇一
			移輸入	二七六、二八四
	鋼材	一二〇四、六〇一	內地産	五五七、八〇〇
			輸入	六四六、八〇一
內地産額	銑鐵	六六〇、四八二		
	鋼材	五二七、八二六		

即ち同年度に於ては內地消費額のみに於て、銑鐵十萬噸、鋼鐵六十八萬噸を輸入したのである。然るに戰時、內地朝鮮滿洲に在る製鐵全爐を使用すれば、一ケ年の産出能力、銑鐵百三十六萬噸、鋼鐵二百十五萬噸に達すると云へるも、果して其の實績を擧げ得るや否やは多少の疑問を存する。我が國に於ける最高レコードと稱せらるゝ大正八年に於てすら、鋼鐵の生産高は僅に六十二萬噸に過ぎなかつたのである。」

假りに年産額二百十五萬噸の鋼を得るとせば、平時に於ける內地消費額の略ぼ二倍である。一九一 年歐洲戰爭の最も闌なりし際に於て佛國産鐵の總量は六百萬噸であつた。日米戰爭の場合、一年二百十五萬噸の製鐵を以て需要を充たし得るやは疑問なるも、原料の供給さへ豐富なれば設備の擴張に依つて尙ほ産額を增加し得るであらう。併しながら翻つて製鐵原料たる鐵鑛に就きて見るに、內地及朝鮮の産出額は全使用額の三分の一

にも達せず、大部分は支那其他よりの輸入に仰いで居る。大正十年度に於ける鐵鑛輸入總額は約四十五萬にして、其の内支那よりの輸入は八割以上に達して居る。之を以て支那鐵鑛の輸入杜絶せば、我が産鐵量は三分の一に低減するであらう。今參考の爲め大正十年度に於ける鐵類輸入の狀態を示せば左の通りである。

鐵	輸入總額(千圓)	米國	英國	支那	瑞典	其他
塊及錠	一〇、〇八三	—	—	八、一二二	—	略ス
板條竿	一九、一六三	—	三、七九三	八、八五四	三、一一二	
線筒管	一二九、一〇二	九〇、六八二	二八、六六六	—	一、〇四一	
計	一五七、九四六	九〇、六八二	三二、四五九	一六、九七六	四、一五三	

右に依れば平時我が國に輸入せらるゝ鐵は、價格に於て總額約一億五千八百萬圓中、米國六割、歐洲二割弱、支那は僅に一割强に過ぎない。而かも鋼材の全部は歐米よりの輸入である。又數量に就いては品種異なるが故、其の比率を求むること頗る困難なるも概計に於て、米國四割、支那四割、英國其他二割である。而して此等の輸入品中、鐵及鐵製品として我が國より再輸出せらるゝ額は、大正十年度に於て約一千六百萬圓即ち輸入額の一割强である。前記の外我が國は鐵製品の一種として毎年數千萬圓の建築材料、車輛、工業機械類等を英米(内米國六割以上を占む)より輸入して居る。(前表の數字は主として時事年鑑より拔出したるもので、多少不明の點あるも又以て大體を知るに足るであらう)

以上に徴すれば、我が國が如何に米國の鐵及鐵製品に負ふ處大なるかを察知することが出來る。故に日米戰爭の場合、支那原料の輸入に依りて或は軍事上の需用を充たし得るとするも、米鐵の輸入杜絶は我が工業界並に産業界に相當大なる打撃たるは爭はれない。若し夫れ支那の鐵さへも取得し能はずとせば、日本は最早や根本的に戰爭を爲すの能力無きものと謂ふべきである。之を以て軍事當局者が支那の鐵に着目する精神は深く之を諒とするに足るのである。唯如何にして之を得るかは、武斷主義一點張りの軍人の頭よりも、寧ろ國民の頭に於て考ふべき問題である。

(棉花) 日本工業の最大宗たる紡績の原料として、又火藥其他の軍需資料として必要なる棉花に就きて見るに、大正十年度の統計に依れば

	輸入總額(千圓)	米國	英領印度	支那	埃及	其他
棉花	四六八、一六九	二三七、四三二	一八〇、七三二	二四、三三〇	二二、七四五	三六、一五三

即ち米國よりの供給額は輸入總額の約半數を占め、支那よりの輸入は僅に五歩餘に過ぎない。幸に英國が我に好意を表し、

自由に印度棉花の供給を受け得るとせば、我は或は火藥の原料と國民の被服とには不足を感ずること無けんも、紡績業は致命的打撃を被むり、國家經濟の基礎を危ふくするに至るであらう。

（石油）日米戰爭の場合、戰闘の主人公は言ふ迄もなく海軍である。陸軍に至りては、若し作戰上の必要と可能とありとすれば、非律賓の攻略と支那の制壓以外、他に殆んど用ゐる處は無い。而して現代海軍艦艇の燃料は石炭よりも寧ろ石油（重油）である。然るに我が國の石油産額は年額僅に二百萬石（三十三萬噸）にして、殊に重油の如きは年産額僅に約五萬噸に過ぎない。戰艦巡洋の全速一晝夜の消費油量約一千噸を要すと聞かば、五萬噸の重油は如何に節約するも、戰時に於て全艦隊一個月の燃料を支ふることの出來ぬは明らかである。是れ我が海軍國防上の致命的缺陥とも云ふべく、當局者が樺太の領有に未練を抱くも、全く同島の石油に垂涎せるが爲めである。其他航空機自働車を始めとし、各種の内燃機關並に國民燈火用に要する石油は、内地産のみを以てしては平時と雖とも需用の半分を充たすに足らぬであらう。之が爲め大正十年度に於ては左の海外輸入を見て居る。

	輸入總額（千圓）	米國	蘭領印度	其他
石油	一六、七二二	一一、六〇八	五、〇八六	二六

是れ亦米國よりの輸入杜絶せば、軍事上並に國民生活上に於て多大の困難に遭遇せねばならぬ。近年北海道の褐炭及び撫順の頁岩等より低温乾餾法に依りて石油を採取する途發見せられたりと云ふも、果して平時に數倍する戰時の需用を充たし得るや否やは尙ほ大なる疑問である。

（羊毛）羊毛及毛織物も亦軍用並に生活用として必需の物件である。然るに日本に於ては之が産額絶無にして、需用の全額を海外輸入に仰いで居る。即ち大正十年度に於て

	輸入總額（千圓）	濠洲	英國	阿弗利加	其他
羊毛	三三、一九九	二六、三六六	三、一八九	一、七九五	六八五
毛織物	三二、四四五		二九、六九九	二、六八九	一、三八四

戰時之が供給を得ると否とは、一は日本の海上權と、一は供給國たる英國及其の殖民國の我に對する好意の如何に依つて決せらるるのである。

（米）次には國民の主要食料品たる米である。豐葦原の瑞穂國も近年急激なる人口増加の爲めか、將た國民生活向上して米食者の増したる爲めか、年々内地産米の不足を告げ、過去十年間平均二百五十萬石づゝの輸入を見、殊に大正十一年度の如き

は上半期六個月間に二百四十餘萬石、此の價格約五千萬圓を輸入して居る。之を表示すれば左の通りである。

米

	輸入總額	支那	英領印度	佛領印度	暹羅	其他
數量（千石）	二、四〇〇	四五	六九四	五四〇	八六四	三六三
價格（千圓）	四八、七二二	四〇二	一三、五三三	一〇、七六二	一七、六六九	七、四一九

之を以て米問題に對しては印度以東の制海權と供給諸國の好意とあれば、日米戰爭の場合我が國民は飢餓に苦しむことはあるまい。又假令海外輸入の途絶ゆるとするも、國民の自制に依りて釀酒製菓等の原料米を節約すれば、戰時米問題の解決は比較的容易である。是れ戰時に於ける我が國唯一の强味である。素より戰時に於ては多數農業壯丁の軍役徵集並に軍需工業轉職に依り多少の產額を減ずるは免れざるも、之とても國民の節制と奮勵とに依て補塡することが出來るであらうと信ずる。

以上に由つて之を觀れば、現在の貿易狀態に於て我が國が戰時支那より供給を仰ぎ得る物資は、鐵の大部分と棉花の五步とに過ぎないのである。されば假令武力に依つて支那の物資を强徵するとするも、到底戰爭資材の需用を充たすこと能はざるは數字の明示する處である。

六　日米戰爭と貿易

食料及び作戰資材の缺乏以外に、日米戰爭の場合、我が國の被むる最大の苦痛は經濟問題である。現在我が國輸出品の最大宗は言ふ迄もなく、生糸及絹製品である。卽ち大正八年には輸出總額の四割强、同九年には稍減じて約三割、同十年には再び增して四割强に達してゐる。而して其の最大得意先は米國である。大正十年度の統計に依れば、

	輸出總額（千圓）	米國	佛國	英國	濠洲	其他
生絲	四一七、二一四	三九四、四五五	二一、四四六	八四〇		三五八
絹織物	八八、九三五	三三、五二七	四、六六七	一三、二二五	一〇、九二〇	一六、六九三
絲屑、眞綿等	三二、六五五	三、一九二	五、六六八			三、六七三
計	五三八、七一三	四三一、一七二	三一、八〇一	一四、〇六四	一〇、九二〇	二九、七〇二

である。卽ち米國への輸出額は總額の八割二步强にして、米國との通商杜絕すれば我が國の生糸業及絹織物業は忽ち全滅の悲境に陷ゐるの外はない。若し夫れ之に加ふるに棉花供給の減少より生ずる綿製品輸出の減退を以てすれば、我が國貿易の打擊は恐ろ半ばに過ぐるものがある。大正十年度に於ける綿製品の輸出狀態を見るに

	輸出總額（千圓）	支那	英領印度	香港	蘭領印度	其他
綿織絲	八〇、五六六	五三、一五八	一二、九九一	一五、四一〇		一、〇〇九
綿織物	二〇三、六六六	一一六、五五三	三〇、四七五	一三、三〇六	二五、七七一	一八、八二一
メリヤス	一三、八九三	二、一九五	二、七五五	六五二	一、五一三	五、七六五
	二九七、四四六	一七〇、八七三	四五、二二八	二八、三六七	二七、〇八三	二五、六〇五

である。更に大正十年度に於ける輸出貿易總額に對する生糸、絹製品、綿製品の割合を見るに

	輸出貿易額	生糸及絹製品	綿製品	絹綿合計
金額	一、二五三、八五〇千圓	五二八、七一〇	二八七、一四八	八一五、八五八
比率	一〇〇%	四二%	二四%	六六%

之を以て戰時絹綿兩者の輸出が全部杜絶すれば、我が國の輸出貿易は其の六割六歩を減ずる譯である。又日米通商杜絶に依り生糸及絹の八割と綿類の五割とを減ずるとするも、尚ほ輸出總額の四割五歩餘を減ずるのである。

次に又日米戰爭の場合、我が海軍は印度以東の海上權をば確實に掌握し、且つ列國は嚴正中立の態度を執るものと假定し、大正十年度に於ける貿易步合を基礎として、我が貿易狀態を地理的に區分研究すれば、其の減少率は大體に於て左の如き結果となるであらうと信ずる。

區域(貿易能率)	地方	輸出	輸入	計	減
第一區(貿易全額)	印度以東	四・八六六	四・〇一三	八・八七九	〇
第二區(貿易三分ノ一減)	濠洲及南阿	〇・二二六	〇・四〇二	〇・六二八	〇・二〇六
第三區(貿易二分ノ一減)	歐洲	〇・六六九	一・八三〇	二・四九九	一・二五〇
第四區(貿易三分ノ二減)	南米	〇・〇二三	〇・〇一九	〇・〇四二	〇・〇二四
第五區(貿易杜絶)	北米及非律賓	四・二二七	三・七二八	七・九五五	七・九五五
計		一〇・〇〇〇	一〇・〇〇〇	二〇・〇〇〇	九・四二〇

右に依れば我が國貿易額は輸出入を通じて約半減するに至るのである。併しながら第一區即ち我が制海權の及ぶ範圍たる印度以東に對する我が輸出品の大部分は、其の原料を歐米就中米國よりの輸入に仰ぐものなるが故、此等原料品の輸入減すれば我が輸出品も亦從ふて減ずるは當然である。左れば日米戰爭の場合、我が國の貿易は實際に於ては半額よりも遙かに減少するものと覺悟せねばならぬのである。斯くても尚ほ我が經濟力は長期の持久戰に耐へ得るであらうか。

七　サーベルよりも十露盤

我が國の論者中には往々歐洲戰爭の例を引き、金は無くても戰爭は出來ると說く者がある。成る程歐洲戰爭中、各交戰國は或は外國よりの借金に依り、或は國內の公債若くは增稅に依り又は紙幣の亂發に依り、莫大なる戰費を支持したのは事實である。併しながら外國よりの借金を爲すには國家の經濟的信用が必要である。辨濟の見込が無ければ貸して與れるものは無い。國內に於て公債を募り或は增稅を行ふには國民の負擔力が必要である。如何に愛國精神に富むも無い袖は振られない。假令國內の經濟は不換紙幣に依つて運轉し得るとするも、外國の物資を購ふには正金でなければならぬ。露國の敗因は主として經濟

力の涸渇の爲め、軍需購買の能力を失したるが爲めであると傳へられて居る。戰爭に金は要らぬとは、經濟上に於ける國家信用の大なる國か、或は又作戰並に生活資材を自給自足し得る國に對してのみ適用し得ることとである。日本の如き作戰並に國民生活に要する各種の資材を外國に仰ぐ國に在つては、之に對して充分なる金力の必要なるは言を待たずして明らかである。假令新國防方針に唱ふる如く、兵力を以て支那を制壓すると假定するも、相當の代償を拂はずして物資を強奪することは出來ぬであらう。

加之、日米戰爭の場合、米國としては兵略上、各種資材の中立國より日本に輸入さるゝことを妨害若くは阻止するに全力を注ぐであらう。是に於てか中立國の市場に於て日米兩國の購買競爭を生ずることは疑はれない。我が勢力範圍たるべき支那に於さへ、米國は中立國民の手を經て支那の物資を買ひ占めることが出來る。況して印度の棉花、南洋の石油、濠洲の羊毛の如きは、當該政府と國民とが日本に對して特別の好意を寄せざる限り、買價の高き者の手に歸することは睹易きの道理である。是に至れば日米戰爭は武力の戰爭にあらずして金力の競爭である。即ち日米戰爭開始の鍵を握れるものは海陸軍の兵力にあらずして國家の經濟力でなければならぬ。

從來の國際公法や戰爭法規なるものが、戰時殆んど何等の權威を有せざることは、歐洲戰爭に依つて明確に例證せられて居る。戰時禁制品及非禁制品の區別の如きは大砲の前には最早や三文の價値も無い。聯合國は封鎖の名の下に、獨逸の非戰鬪員たる老幼婦女に對する食糧までも其の輸入を禁止し、爲めに獨逸老幼の營養不良に死するものは八十萬人に達した。素より戰爭が軍隊の手より離れて國民化したる今日、戰鬪員非戰鬪員の差別や、禁制品非禁制品の區別の如きは、最早や全く無意義の死文に過ぎずして、敵國の有ゆる戰鬪力と戰鬪資源とを撲滅破壞するのが現代の戰爭の根本方略である。是れ我が國の如く、外國の物資に依つて生活し、外國の資材に依つて戰爭せんとする國の有する最大弱點である。

斯くの如く現代戰爭に對しては、經濟力が兵力以上に重要なる關係を有せるにも拘はらず、我が國に於ては今尚ほ國防方針の策定をば經濟知識に乏しき軍人の專決に委ねて顧みざるは、一面に於ては經濟家に對する軍人の侮辱であり、他面に於ては國家に對する經濟家の不忠實であると云はねばならぬ。

八　日米戰爭と列國

今數步を讓つて日本の經濟力は日米戰爭に耐へ得るものと假

定し、更に數步を讓りて支那の作戰資材は日本の軍需を充たし得ると假定したる場合、日本は果して新國防方針に定むる如く、隣邦即ち支那に對して『我が陸軍は此の必要に逼まられて或る行動に出づること』が出來るであらうか。或る行動とは言ふ迄もなく、武力を以て支那を制壓することである。之が能否こそ、新國防方針の適否を論究するに必要なる根本核子でなければならぬ。惟ふに日米戰爭の場合、支那の執るべき態度が三つある。乃ち(一)日本と同盟して米國に宣戰するか、(二)米國と同盟して日本に宣戰するか、(三)日米兩國に對して嚴正(或は一方に好意)中立を保持するかである。我が國は日米戰爭を語る前に、先づ支那が果して何れの態度を執るかに對し、之に處するの道を講じて置かなければならぬ。

(一)若し支那が日本と同盟して米國に宣戰したる場合に於ては、我は支那の有ゆる物資と、國土と、民衆とを自由に利用することが出來る。故に日支の完全なる同盟を結ぶを得ば、日本は米國に對して大なる强味を加ふるものである。此の場合に於て日本は支那に對して兵力を用ゐるの必要はない。從ふて日本は支那制壓を目的として强大なる武力を備ふるの必要がない。而して是れ日本に取りては上策にして、支那の爲めに中策である。

(二)若し支那が米國と同盟して日本に宣戰したる場合に於ては、我は列國に顧慮することなく公然兵力を以て支那を制壓し、必要なる物資と國土とを徴用することが出來る。素より彼の老大なる國土と四億の民衆とを制壓する爲めには、日本は莫大なる經費と軍隊とを要し、然かも其の果して幾干程度迄成功するやは難解の疑問である。加之日本は對支作戰の爲め、主敵たる米國に對する作戰能力を著しく減殺さるゝは疑ふの餘地がない。而して是れ日本の爲めには中策にして、支那に取りては下策である。

(三)若し又支那が中立を守りたる場合に於ては、我は如何に食糧及作戰資材を隣邦に需むるの必要ありとは云へ、猥りに中立國に對して兵力を加ふることは、國際道德の不完全なる現代に於てと雖ども尙ほ許されざる蠻的暴擧である。斯くの如き行動は獨り支那國民を憤怒せしむると共に支那に利害關係を有せる列國の反抗を招くに止まらず、恰かも白耳義の中立を侵害して世界の同情を失ひたる獨逸と等しく、日本をして世界憎惡の燒點たらしむる狂暴の策である。之を以て支那の中立は日本に取りては下策にして、支那に取りては上策である。

左れば日米戰爭の場合、支那政府及國民の親日たると、親米

たるとに拘はらず、中立を守ることは火を睹るよりも明らかである。少くも日本は、支那が中立を守るものとして、國防方針と作戰計畫とを立つることが必要である。而して同じく中立を守るにしても、其の日本に好意を有するか、米國に好意を有するかに從つて、我が作戰上に多大の關係を及ぼすことを我が國民は記憶せねばならぬ。然るに過去並に現在に於て支那は、其の政府も、其の國民も、遺憾ながら我に對して好意を有せりとは決して思はれない。

次に支那以外の列國の向背に就きて考ふるに、大戰の瘡痍尚ほ深き歐洲列強並に日米兩國に對して特殊の利害關係なき二等國以下の諸國は、恐らくは何れも中立を宣言するであらう。唯米國の勢力下に在る南米諸國は或は米國に加擔するやも圖られぬが、其の經濟關係に於て、其の兵力關係に於て、多く意とするに足らない。而して是等の中立國中、獨逸は兵力を有せず、露國は對內政策の必要上、兩國共に嚴正の態度に出づることは想察せられる。素より日露の反目今日の如しとせば、露國は或は我が西伯利出兵に對する報復行爲に出づるかも知れぬ。佛伊は或は我に好意を寄することとあらんも、二階からの目藥と等しく多く恃みとするに足らない。是に於てか日本に最も重大なる關係を有するものは、英國及其の殖民國の態度である。

濠洲、西蘭、南阿、加奈太等の英國殖民國が現在に於て悉く反日親米であることは、彼の日英同盟廢棄當時に於ける消息に依るも之を窺ふことが出來る。中にも土地廣く、人少く、國防力薄弱なる濠洲の如きは、日本の侵略を懼れ憂ふること實に虎よりも甚だしきものがある。左れば日米戰爭の場合、日本の勝利を好まぬことは瞭然である。南阿、加奈太も其の程度こそ異なれ、日本の戰勝を喜ばぬ心理は濠洲と同一である。更に英本國に至りては、由來理性と打算とに長ぜる國民とて、其の向背は容易に豫測することは出來ない。併しながら日本の勝利は直に印度の危險を意味すると思へば、是れ亦日本の成功を歡迎せざることは明らかである。今日歐洲人の心理を忖度すれば、日米戰ふて共に傷き、共に斃れんことを希望して居るであらうと思ふ。何を好んでか、金と人とを犧牲として日本を助けるものがあらうぞ。

之を要するに、現在の國際關係を以て推せば、日米戰爭の場合、日本は英國並に其の殖民國及支那の親米中立の狀勢の下に、獨力戰爭に從事するの覺悟を有せねばならぬ。此の覺悟なくして徒に他國の援助を空想しつゝ漫然戰爭を開始する如きことあらば、大なる違算を生ずるや必せりである。

九　日本の兵力と其用途

斯かる狀況と境涯の下に米國と戰爭を開始したる場合、新國防方針に從へば『某々海峽の完全なる聯絡、邊陬に於ける嚴重なる警備……』とある。「某々海峽」とは推定する處、津輕海峽及朝鮮海峽を指せるものと思はれる。又「邊陬」とは北海道、樺太、臺灣等を意味せるものであらう。或は朝鮮をも含めるかも知れぬ。此等海峽の完全なる聯絡と、此等地域の嚴重なる警備とは、國防上當然爲すべき計にして、其の主義精神に對しては何人も異存のある筈はない。次に『大陸の某地域に對する軍事行動』とある。某地域とは恐らく支那就中滿蒙地方を指せるものであらうと推定せられる。滿蒙と雖も支那の主權に屬する地域である。支那に對して猥りに軍事行動を取り能はざるは前既に述べた通りである。或は三宅坂あたりでは、張作霖を使嗾して滿蒙獨立帝國を建立せしめ日滿同盟などと、剃刀の双を渡るが如き輕業的芝居の筋書を作つて居るかも知れぬが、首尾よく出來たら御慰みである。一體三宅坂が張作霖を操つて居るのか、張作霖が三宅坂を操つて居るのか、此處大なる疑問である。共に野心深き策士の色目使ひ、土俵際で背負投を食はぬ樣注意が肝要である。夫にしても滿蒙を得て支那本州を失ふ、何れが重いか天秤の傾きは判らない。殊に支那領土保全は日本が列國と共に公約せる處である。猥りに滿蒙獨立の尻押などが出來るものではない。要するに「大陸の某地域に對する軍事行動」は新國防方針中至大至重の關係を有するもので、我が陸軍兵力も之に依つて決し、我が對支外交も之に依つて左右せらるるのである。

新國防方針は更に兵力に關する具體的計畫を述べて「我が海軍は華盛頓會議の結果主力艦隊に於て米國の十に對する六の割合となつたので、補助艦に力を注ぎ」と云つて居る。海軍兵力は華府協定に依つて國際的に制限せられたる爲め、最早や多く論議するの餘地がない。唯問題とすべきは、我が海軍は華府協定に於て許されたる範圍内に於ける最大勢力を保持すべきや否や、又華府協定に制限なき補助艦艇の勢力を如何に定むべきやの二つである。戰時少くも印度以東の制海權を確保するの必要ありとする以上、華府協定に於て許されたる最大限の海軍力を維持することは、兵略上に於て必要已むを得ざる處である。從ふて制限なき補助艦艇に力を注ぐは敢て咎むべきではないが、餘り力を注ぎ過ぐるの結果、補助艦競爭を誘起するが如きことあらば、結局に於て敗を取るの愚に陷ゐるであらう。既に經濟力に於て著しく劣れる我が國は華府會議の精神を尊重し、補助艦に於ても亦主力艦と等しく米國の六割程度を以て滿足するこ

とか、抑て賢なる途であると信ずる。素より以上は政治關係、經濟狀態を離れたる純軍事的の見解である。若し之を當面の政治經濟の點より論ずれば、自ら異りたる見解を生ずるであらう。

次に『陸軍に在つては平時兵力を二十一個師團兵數二十三萬に縮少し、戰時〇〇個師團として新兵器の充實を爲す等……』とある。海軍問題が國際的に協定せられる今日、我が國の軍備問題として殘れるものは主として陸軍である。ツイ最近までも勞農露國及支那の陸軍を口實として陸軍縮小に反對し來れる陸軍當局者も目覺めたる國民の熱烈なる要求に抗し得ず、嫌や〱ながら昨年來極めて不徹底なる、極めて姑息なる小縮減を行ふの已むを得ざるに至つた。併し國民は之を以て尙ほ未だ滿足しては居ない。しかも山梨陸軍大臣は去る議會に於て、現在の狀勢に於て我が陸軍は最早や一兵一馬を減ずるの意志は無いと勇敢に放言して居る。陸軍當局者は口に國民の陸軍を唱へながら、事實に於ては依然として陸軍の陸軍、軍閥の陸軍と心得て居るらしい。彼等は唯國民に兵役の義務と軍費とを負擔せしむることに於てのみ、國民の陸軍を標榜して居るものである。

我が陸軍の戰時兵力が果して幾干なるやは、軍の機密と見へて發表せられて居ない。吾人も亦強ゐて其の正數を知るの必要はない。併しながら平時兵力が二十一個師團其の兵數二十三萬なるより計算して、一個師團の平時兵數は約一萬なること、二年兵役より計算して毎年の徵募壯丁數が約十二萬なることを知ることが出來る。然るに陸軍の常備役は現役、豫備役を通じて、七個年なるが故、新國防方針に依り戰時招集し得る常備兵數は八十四萬人に達する。而して戰時兵數は平時の略ぼ二倍なることが、各國に於ける編成法の常例なるが故、今戰時師團の編成を二萬人と假定すれば、我が國戰時師團數は四十二個師團即ち平時師團の二倍となる勘定である。若し夫れ之に後備役十年を加ふれば、戰時招集し得る既教育兵は無慮二百萬人を算する。死亡其他に由る減員を假りに三割とするも、尙ほ百四十萬人を有する。殊に縮小前に於ては毎年の徵募壯丁約十四萬人なりしを以て、現在に於ては以上の數よりも遙かに多數の在鄕兵を有するのである。日米戰爭の場合、日本は此の大陸軍を何に向つて何れの地に用ゐんとするのであるか、更に又日本は此の大陸軍を運用するに足るべき軍需供給の確たる成算があるのであるか。

一〇　支那か菲律濱か

新國防方針に於ては日米戰爭の場合、日本陸軍は邊陬即ち臺灣、北海道、樺太、朝鮮等に於ける嚴重なる警備並に大陸の某地即ち支那に對する軍事行動に備へんが爲めなることは前述べた如くである。米國參謀本部如何に低能無謀なりと雖ども、苟しくも日本艦隊の現存する限り、我が邊陬の地に大軍を揚陸せしむる如き愚なる作戰は運らさぬであらう。從ふて之に備へんが爲め我が多數の陸兵を配置するの必要は殆んど認めない。若し又我が海軍にして全滅し後方連絡の斷絶したる曉に於ては、是等の地域に我が陸軍を配置するも、戰爭の大局に於て何等の意義を有せざるのみならず、我が精鋭を死地に投ずるものである。左れば我が艦隊の存否に拘はらず、此等邊陬の地域に我が大軍を配備することは、不必要にあらざれば無意義である。故に邊陬警備の爲めに大陸軍を要すと云ふ議論は素人噺ましである。唯併し朝鮮に於ては、日本が對外戰爭を開始する場合、國內に或る程度の動亂を生ずること丈は覺悟せねばならぬ。是れ他民族を統治する國家に當然免るべからざる患憂である。併しながら唯一挺のピストルさへも所有を許されざる朝鮮人は、到底大なる物的擾亂を起し得るの力は無い。從ふて之が鎭壓の爲め新に大軍を配備するの必要は無いのである。殊に朝鮮に對しては戰時に於ける武力鎭壓策よりも、寧ろ平時に於ける民心綏和の政策がヨリ有効である。

之を以て日本陸軍の主なる作戰目標は、支那に對する所謂軍事行動でなければならぬ。或は場合に依り、非律賓攻略にも使用するであらう。日米戰爭の場合、支那の執るべき態度は前已に述べた通りである。若し日本が支那の物資を獲得せんが爲めに四百餘洲を馬蹄に蹂躙せんとするならば、五十個師團六十個師團の陸軍も何ほ以て少しとするであらう。併しながら列國の干渉反抗なしに公然支那に兵力を加へ得る場合は殆んど絶無である。而かも世界を敵としてまでも、支那より獲取し得る作戰資材は唯僅に鐵の大部と棉花の少量とに過ぎない。到底對米作戰に要する如き大量の資材を需むることは出來ないのである。斯くの如き軍事行動は恐らく一を得て十を失ふの愚に陷るであらう。畢竟するに對支軍事行動も亦可能にあらざれば無意義であると云はねばならぬ。

斯く論じ來れば日米戰爭に備ふる爲め、平時二十一個師團、戰時四十二個師團(?)の大陸軍の主力は、之を何れの地域に用ゆべきであらうか。若し夫れ太平洋を横つて我が大陸軍を米國の本土に輸送し、加州占領を說くが如きは、單に輸送力の點より計るも、痴人の夢にあらざれば狂人の寢言である。之を以て強ゐて陸軍の用途を索むれば非律賓の攻略である。非律賓に在

る米海軍を制壓して支那海の海上權を握ることは、印度以東の我が通商路を確保する爲めに極めて必要なる作戰である。然るに近年に於ける航空機、潜水艇、機雷等の發達は、最早や旅順戰の如く海上より敵海軍を封鎖することを許さない。之を以て菲島海軍を完全に制壓せんと欲せば、其の作戰基地を攻略奪取することが必要である。而して之を爲すには海陸協同の作戰に依らねばならぬ。

菲律賓攻略が果して我が大本營の對米作戰であるや、或は之を攻略するには幾干の陸軍を要するや等の具體的問題に關しては玆に推測論議するの限りではない。唯最近の兵術に於ては、水陸の防備嚴なる敵地に大軍を揚陸することは殆んど不可能事と認められて居る。假令絕對不可能事にあらずとするも、上陸軍は甚大の損害を被むることを覺悟せねばならぬ。歐洲大戰中獨逸は五十萬人の犧牲を拂つて尚ほ且つベルグン要塞を攻略し得なかつた。聯合軍は十餘萬の兵と數隻の戰艦とを犧牲として尚ほ且つガリポリー半島の占領に失敗した。ベルダンやガリポリーの防備と、菲律賓の防備と、孰れが強弱堅脆なるやを知らざるも航空機、爆彈、毒瓦斯其他の兵器は歐洲戰爭當時に比して今や多大の進步を爲して居る。十八年前一臺の飛行機もなく、一發の毒瓦斯もなく、罐詰めの空罐に火藥を詰めて擲げ合ひたる旅順戰に於てさへ、之を攻略する爲めに我は五ヶ月の日子を費やし五萬の犧牲を拂つて居る。菲律賓占領の爲めには旅順戰に二倍三倍或は四倍五倍する損害を蒙むることを覺悟せねばならぬであらう。同時に之が爲めには莫大なる作戰資材を消費せねばならぬ。是等の點より考察すれば戰爭の大局に於て、菲律賓攻略の利害得失は何れにあるか測り知られない。要は攻略の難易即ち同島防禦の堅度如何に依つて決するのである。我が大本營の作戰方針が菲島攻略にありとすれば、又菲島の防備が甚だ嚴なりとすれば、我は相當大なる陸軍を必要とする。但し我が同胞の肉を以て菲律賓の海を掩ひ、我が同胞の骨を以て菲律賓の谷を埋めると云ふ意味に於て必要なのである。

世間の皮相觀者は、華府會議に於て、米本國より數千海里を距つる菲律賓及グアムの防備と、我が國の眼前に橫はる奄美大島及小笠原島の防備とをば、交換的に現狀維持を協定したるを以て我の不利益と憤ふる者がある。併し是れ其の表のみを見て裏を知らざる盲論である。米國が菲島及グアム島に難攻不落の防備を施すことは、我が國の咽喉に向つて匕首を擬せるもので、我が國防に對して直接至大の脅威である。之に反し我が國が大島及小笠原島に假令金湯の防備を設くるも、米國に對しては何等の脅威をも與へない。我に對する敵の銃と、敵に對する

我の鈍との交換が、損得孰れにあるかは言はずして明らかである。故に日米戰爭の場合を考ふる時、不滿は寧ろ米國側にあるであらう。華府會議に對する吾人の希望は、軍艦比率に於て讓る代償として、少くも菲島及グアムの防備撤廢にありしも、既に協定の成立したる今となりては如何ともすることが出來ない。唯兩者の現狀維持は其の利益寧ろ我に在りと諦らむるの外はない。

二　國防の大危險

次の問題は新兵器の充實である。日本が國防の爲め海陸の軍備を整ふる以上、新兵器の充實に對しては吾人何等の異議は無い。寧ろ之を整備することの餘りに晩きを怪しむものである。詳細なる專門事項は知らざるも、我が國軍就中陸軍の兵器が歐米諸國に比して著しく遜色あるは明らかなる事實である。毒瓦斯も出來なければ、タンクも作れない。機關銃の如きすら小銃を以て練兵をして居ると聞きては、歐洲大戰中露國兵が小銃の代りに棍棒を以て鬪つたと云ふのと好一對の笑話である。是れ我が軍事當局者が徒に外形的の兵數の増加にのみ腐心沒頭して、實質改善を忽にしたる罪である。

各種兵器中、歐米諸國に比して其の進歩の最も後れたるものは航空機であらう。大正十二年の今日に於ける日本の航空界は、大正二年歐洲大戰前に於ける歐米の航空界と大差はないと思はれる。素より我が國に於ても、歐米の新式航空機は購入或は模倣に依りて、博覽會的に雛形のみは一通り揃へるが如きも、唯彼の糟粕を嘗め、殘肴をシヤブるに汲々として、何等日本獨自の創造を有しない。聞く處に依れば戰時は消耗品に近き飛行機發動機すらも尙ほ且つ完全なるものは製作し得ないと云ふ狀態である。斯くて尙ほ戰爭を說き、國防を語る軍事當局者の大膽と鐵面とに寧ろ呆れざるを得ない。斯くの如き航空界の不振遲滯は、一は人的素質と工業能力の低劣に由るならんも、一は又軍事當局者が適當の施設と補導とを怠りたるの罪に歸すべきである。

現代戰爭に於て航空機が至大の威力を有せることは最早や更めて述ぶる迄もない。日本の如く家屋建築の脆弱、四時風力の強烈、四面環海等、敵の空中攻擊に對して幾多の弱點を有せる國に在つては、空中防禦の充實は海軍よりも、陸軍よりも、一層喫緊の急務である。軍事當局者にして誠心國防の必要を感ずるたらば、軍艦の建造を延期してなりと、既設師團を減少してなりと、先づ空中軍の充實を圖るべきであつた。航空母艦、航空機、投下爆彈の進歩したる今日、海上より百臺の飛行機を東京

の上空に飛ばすことは左程の難事ではない。强力なる一發の爆彈は東洋一と稱する丸の内ビルディングすらも粉碎することが出來るであらう。百臺の飛行機は一夜にして東京全市を灰燼に歸せしむることも出來るであらう。然るに敵の空中攻擊に對しては、我も亦航空機を以て之を邀ふるの外、今日尙ほ未だ他に適良なる防禦法が見出されない。戰時に於ける敵の空中攻擊の危險と、之に對する我が航空機の不振とを對照すれば、國防に對する軍事當局者の誠意と忠實とに疑を挿まざるを得ないものがある。

日米戰爭假想の下に於て、我が海軍は最早や殆んど縮少の餘地が無い。之に反し我が陸軍は對米作戰に於て現在の如き大兵力の必要を認めない。恐らくは戰時に於て現在の大兵力を運用するの作戰資材さへも無いであらう。軍備の目的が單なる對外威嚇や外交後援にありとすればイザ知らず、苟くも實戰を目的とする以上、經濟力豐かならざる我が國としては最も經濟的にして而かも最も有効なる國防策を講ぜねばならぬ。一兵一馬と雖ども不必要に存置すべきでない。之が爲めには不必要に尨大なる陸軍の大縮小を斷行し、以て必要にして有効なる航空軍の充備を圖るべきである、政治の中心たる東京、商業の中心たる大阪を燒打せらるれば、假令陸軍あるも、海軍あるも、日本は恐らくは戰爭を繼續するの能力と氣力とを失ふであらう。想ふに軍事當局者は近き將來に於て、必ずや航空軍大擴張を計畫し、之が經費を國民に要求するであらう。國家が軍備に依つて自ら守り自ら防ぐ以上、是れ亦已むを得ざる要求であることを是認する。唯之を行ふには先づ不要なる陸軍の大縮小を爲し、經費を此處に捻出せねばならぬと信ずる。

一三　結論の一

之を要するに、將來我が國と戰爭を開始するの機會最も多きものは米國である。從ふて我が國防方針の假想敵は自ら米國でなければならぬ。新國防方針も亦目標を此處に置けるものと信ずる。世界の現勢より推斷せば、日米戰爭の場合、日本に同盟する國は一國も無いであらう。日本は獨力米國と戰ふの覺悟が無ければならぬ。而して日米戰爭が必ず持久戰に陷ゐるべきは軍事常識を以てするも容易に判斷することが出來る。如何に我が陸軍大臣が陸軍縮小反對の口辭として短期戰の必要上、多數精兵の要を說くも、相手は太平洋を距て丶五千海里の彼方に在る。此方の註文通りには向ふで卸さない。三年續くか五年續くかは知らず經濟力の持久戰に堪へ得る自信と成算ありたる上、初めて劍を拔くべきである。之を以て日米戰爭の能否を決する

ものは兵力の問題にあらずして經濟力の問題である。サーベルの軍人にあらずして十露盤の商人である。然るに戰爭に十露盤は要らぬと說く軍人大臣を有する私が日本は、危險なるかな、禍なるかなである。

之を以て『帝國が封鎖を受けたる場合には食糧及作戰資材を隣邦に需める必要がある』と云へる新國防方針の大本には全然同感である。唯之を需めるが爲めには如何なる手段と方策とに依るべきかゞ議論の問題である。假令戰時と雖ども武力を以て中立國の資材を强奪することは、世界を敵とするの決心なき限り爲し能はざる處、爲すべからざる處である。斯くの如きは勝たんが爲めには殆んど手段を擇ばざりし獨逸と雖ども、尙ほ憚つて爲さゞりし處である。然るに新國防方針には、武力に依つて隣邦の資材を强奪するの意思あることを露骨に表示して居る。「日本が或る國と戰爭する場合には、腕づくで御前の國の資材を取り上げるぞ」と脅かされて、隣邦は果して我に好意と同情とを表するであらうか、親善と交友とを望むであらうか。右に握手を求め、左に短銃を擬す、日本人の唱ふる日支親善に對して支那人が背を向けるのも偶然ではない。

一方に於ては富大我に十倍する米國を假想敵とし、他方に於ては西隣支那を脅威し、北隣露國を憎疾し、自ら四方を敵として國防の要を叫んで居る。獨逸は世界を敵としたと稱へらるゝも、尙ほ幾多の同盟國を持つて居た。日米戰爭の場合、日本に對して眞に力ある同情を與ふる國があるであらうか。遠交近親は蓋し外交の上乘なるものであらう。遠交近攻と近交遠攻とは其の中なるものである。遠交近爭に至つては下の下なるものである。我が國にして遠く米國に備へんと欲せば、近く露支と結ぶことが國防の大本でなければならぬ。

一三　結論の二

大和魂の拔刀隊が機關銃に敵せぬことは、旅順の白襷隊が之を明證して居る。獨逸魂の剛勇も結局聯合國の物力に敗れたることは、歐洲大戰が之を明證してゐる。現代の國防は工業力に基礎を置かねばならぬ。現代の國防は經濟力に基礎を置かねばならぬ。工業力乏しく、經濟力弱き我が國の如きは、徒に外形の軍備を張る代りに先づ工業力の發達に力めることが緊要である、猥りに空言の國防を叫ぶ代りに先づ經濟力の充實を圖ることが必要である、之が爲めには國防の手段方法を講ずる前に、國防に對する國民の觀念を是正することが先決問題であらう。

我が軍事當局者の國防軍備に對する施設を見れば、或は帝國國防に最も緊要なる航空機の設備を等閑に附せる如き、或は不

當の軍術手當に依つて敵意に軍人の思想を惡化せしむる如き、眞に戰爭に備へんとするの誠意を認められない。今の世に於て時勢に適せざる、實質の伴はざる形骸ばかりの舊式軍備を張り、以て新國防方針などゝ唱ふるは、白裝鬼面を被つて人を威かすの類で、足元は既に世界に見破られて居る。「大陸の某地域に對する軍事行動」の如きは、最も愚にして最も危險なる策である。要するに軍事當局者の中心には、近き將來に於て戰爭は無きものと信ぜるか、否らざれば戰爭は爲し能はざるものと覺悟せることが見へ透いて居る。然るにも拘はらず尙ほ國防に名を藉りて、不要なる軍備の縮小に反對するが如きは、一に是れ自家の地位と權勢との擁護維持に汲々として、國家國民を忘れたるものと言はれても辯解の辭はあるまい。

　單なる軍事的見地にのみ立脚せる軍人のみに依つて決定せられたる國防方針に對しては、吾人國民は信頼することが出來ない。現代の國防方針は經濟、産業、政治、教育等の諸問題と、國民の意思とを斟酌考慮して決定せられねばならぬものである。國防は國家の爲めの國防であつて、軍人の爲めの國防ではない。極端に言へば軍人なるものは與へられたる國防方針に從ひ、作戰用兵等に關する戰爭技師の職務を盡せば宜いのである。之を以て國防方針を決定するには各方面の專門知識を交へたる國防會議的の機關を設置の必要が生ずる。素より國防問題に對し軍人を排斥せよと云ふのではない。軍人の意見の尊重せらるべきは勿論であるが、唯軍人の專決を不可とするのである。

　加藤首相は議會に於て、國防會議なるものは米國以外に其の例が無いとの理由を以て、之が設置に反對した。併しながら國防軍備の策定に關し、日本と歐米諸國とは制度の條規を異にして居る。歐米立憲國の多くに在つては國防軍備の決定權は議會の手に屬して居る。然るに日本に於ては軍事參議院なるものを唯一の諮詢機關とせる天皇の大權に屬して居る。左れば歐米諸國に於ては必ずしも國防會議なるものを特に設くるの必要がない。之を以て國防會議の設置は日本の如き制度を有せる國に於て特に其の必要を認めるのである。歐米諸國に其の類例が乏しとの理由を以て之に反對するは、是れ歐米模倣思想の流露である。制度を改正するか、國防會議を設置するか、二者其の一に出づるにあらざれば、日本は何時までも、國家内外の形勢に適應するが如き國防方針を策定することは出來ぬであらう。國民は自己の生活と、國家の生存とに絶大至重の關係を有する國防の決定權をば、軍人の手より國民の手に取り返へすことに力めねばならねばならぬと信ずる。

一四　附記の一

右は日米戰爭想定の下に、新國防方針と稱せらるゝものに對する吾人の私見である。素より國防軍事に關する論議は、四周の狀勢に基づく人々の見解に屬する點が尠くない。元來見解は人々の立場に依つて自ら異るものあるを免れない。而して見解なるものは論理の歸決にあらずして寧ろ其の人の知識判斷に屬するが故、議論を以てしては畢竟水掛論に陷ゐる場合が多い。「見解」は當局者が窮して常に隱るゝ處の城廓である。之を以て種々の見解中、其の果して何れが正しきか、或は何れに從ふべきかは、輿論即ち國民の判斷に待つことが必要である。然るに我が國の現制度に從へば、之が判斷決定に當るものは國民にあらずして一部少數の軍人である。軍人の見解が常に一方面にのみ偏して世の大勢に添はざるは、彼等の職責上境遇上免れ難き處である。例へば華府會議に於ける海軍協定に對しても、日本の軍人は日本の不利を憤り、米國軍人は米國の不利を怒れるに徴するも、彼等の見解が正鵠を得たるものにあらざるを知ることが出來る。是れ僕が此の小論文を草して國民に尋ねんと欲する所以である。

戰爭が國民化して國家總動員を要する現代の國防は、國民の同意と了解とを得たるものでなければならぬ。斯くてこそ初めて、外に對しては强き國家意思を表はし、内に在つては固き國民團結を期し得るのである。國家の最大問題たる國防方針を定むるに當りて國民の意思を圖らず、國民の了解を求めず、少數軍人の專擅に依つて決する如きは、是れ國防を私するもので、啻に國家内外の情勢に添はざるのみならず、一朝有事の際國民の義勇報公心を振起するの途でない。殊に米國の如き大國を假想敵と爲して國防方針を定むる場合に於ておやである。

近時陸海軍に於ては國防の國民化を期する爲め、軍隊と社會との接近融和を圖り、或は大學生を軍艦に便乘せしめて海上生活を體驗せしめ、或は小學生を兵營に案内して兵士と共に軍事訓練を施したりして居る。尙ほ又現役年限短縮の前提として、軍事當局者は内務文部等の當局者と提携して學校及社會に於て學生青年に對し、軍事教育を施すの計畫もありと傳へられて居る。主義としては蓋し結構である。吾人は必ずしも之に反對するのではない。併しながら現在の軍閥制度の下に於ては、軍隊と社會とが渾然として融和することは恐らく不可能であらうと思ふ。且つ又現在の制度の下に於て國民に軍事教育を施こすことは、一歩度を越ゆれば國民を驅つて好戰的軍國主義に走らしむるの危險がある。日本國民は正當必要なる軍備と軍隊其の

ものに對しては、寸毫の惡意も悄念も有するものではないと信ずる。唯吾人の疾むところのものは軍閥の專擅である。吾人の反對するところのものは軍閥制度である。

一五　附記の二

前述の如く日米戰爭は、我が國に取りて經濟上に於ける甚大の苦痛である。戰爭久しきに亘れば或は國家破產に瀕するかも知れぬ。之と同時に軍事的に於ても亦兵力を以て米國に致命的決勝的打擊を加ふることは到底不可能であると斷言する。之を以て日米戰爭は我が國に取りて、損多くして得る處尠なく、幸に引き分に終れば寧ろ成功と稱すべきであらう。翻つて米國に就きて考ふるも、日本及東洋方面との通商杜絕の爲め、米國は其の輸出額の約一割二歩、全貿易額の約一割六分を失ふことゝなり、經濟上に於ける相當大なる打擊である。素より苦痛の程度に於て米國は日本よりも遙かに輕きは勿論である。是れ單に兩國經濟力の相違に由るのみならず、日本が米國より輸入するものは多く必需品なるも、米國が日本より輸入するものゝ多くは贅澤品であるからである。併し米國如何に軍備を張るも武力戰に依つて日本を屈伏せしむることは、是れ亦恐らく不可能であると信ずる。之を以て米國は最後の勝利を博することありと假定するも、戰爭に依つて得る處は以て其の失ふ處を償ふに足らない。即ち日米戰爭は兩者に取りて敗くれば勿論、從令勝つも殆んど利する處は無い。畢竟するに無意義の戰爭である。

然らば日米戰爭は遂に避け得ざるか、語を換へて言へば日米兩國は世界に共存し能はざる程の利害の衝突ありやと問はゞ、吾人は之を發見するに苦しむものである。而かも今日兩國の間に一抹の陰翳凝つて解けざる所以のものは、唯兩國國民間に於ける相互了解の缺乏に基づく疑心に外たらない。即ち利害の衝突にあらずして寧ろ感情の衝突に外ならない。日本は米國が有せる正當なる利益を侵害するの意思は毛頭之を有せざることは明らかである。米國とても日本の正當なる生存を否定するの意思は無いであらうと信ずる。唯兩國々民間の誤解に乘じ、兩國の軍閥者流や軍閥主義者が、或は近眼的愛國の餘り、或は好事的野心の爲め、善良にして無識なる國民に對し、相互に反抗的敵愾心と憎惡心とを煽動鼓吹することが、益兩者の反目嫉視を助長するのである。吾人は個人としても、國家としても、賣られた喧嘩は時に正當防衛の爲め、時に正義擁護の爲め、買はねばならぬことのある覺悟のと決心とを必要とするは勿論である。併しながら吾人は喧嘩を買ふべく常に眼を瞋らし、肱を張り、拳固を固めて待ち設けるよりも、相手をして喧嘩を賣らし

めざることに努力する方が賢しき策である。軍艦大砲の對抗に依つて日米間の暗雲を拭ひ去ることは到底出來ない。日米間の眞の親善は兩國民の了解に依りて相互の疑心を一掃することに依つてのみ遂げ得るのである。而して疑心を掃除する爲めには先づ兩國民の冷靜にして合理的なる自己批判より初めねばならぬと信ずる。此の點に於て我が國民は對外問題に對し、餘りに熱狂にして自我に捕はれ過ぎはせぬであらうか。崇高なる愛國心は貴ぶべきも、盲目なる國家我は排せねばならぬ。孟子に曰く

　齊の宣王問ふて曰く、隣國に交はるに道ありや。孟子對へて曰く、有り。惟仁者は能く大を以て小に事ふることを爲す。是故に湯は葛に事へ、文王は昆夷に事ふ。惟智者は能く小を以て大に事ふることを爲す。是故に大王は獯鬻に事へ、勾踐は呉に事ふ。大を以て小に事ふる者は天を樂しむ者也。小を以て大に事ふる者は天を畏るゝ者也。天を樂しむ者は天下を保ち、天を畏るゝ者は其の國を保つ。

と。知らず、强を以て弱を虐げ、小を以て大に逆ふ者は何を保ち得るであらう？　又曰く、

　滕の文公問ふて曰く、滕は小國なり、齊楚の間に挾まれり、齊に事へんか、楚に事へんか。孟子對へて曰く、此の謀は吾が能く及ぶ所にあらず、已むこと無くんば則一あり。斯の地を鑿り、斯の城を築き、民と與に之を守る。死を效して民去らざれば則是れ爲すべき也

と、是れ則國防の國民化である。「民と與に之を守る」の一語に對し我が國軍閥者の玩味を望む。

頻々たる用語の改正

‖國立國語研究所設置の提唱‖

福永恭助

一

上下兩院を通じて今度の議會で多少問題視されたものの一つに例の恩給法改正案があつた。而してその結果恩給の内でも、從來甚だしく不遇の位置に在つた廢兵の恩給が著しく增加せられた事は既に誰しも承知の通りである。處で此廢兵の恩給增額運動に關聯して、私共國語の整理を主張する者の立場から見て、一つ面白い現象が顯れたと思はれることがあるから今それを話のきつかけとして私が平生考へて居ることを述べて見度い。

面白い現象と云ふのは外でも無い、一つは、恩給增額もさる事ながら「廢兵」といふ名稱はいかにも廢兵を侮辱した名前であるから、何かもつとよい外の名稱に改めて貰ひ度いといふ事で、も一つは、元來恩給と云ふものは、近代の解釋に從へば、在職中官吏が消耗した處の精力に對する補償であるからそれを要求するのは退職官吏の權利であつて、決して政府から恩惠的の意味で支給されて居るのでは無い。從つて「恩給」と云ふ用語を之にあてて居るのは妥當で無いからよろしく之を「退職俸」とでも改正すべきであると云ふ意味の議論が出たことである。而も之等の意見は恩給增額運動者によつてかなりの眞面目さと熱心さ――これ等の名稱を改正して吳れれば恩給增加の要求額を多少減らして差支ないと彼等が考へて居るのでは無いかと思はれる程の熱心さ――をもつて唱へられたといふ事は特に注目に値する點である。

二

「監獄」と云ふ名稱が昨年突然「刑務所」に改められた。其傍杖を喰つて海軍の監獄も今度「刑務所」と云ふ名前をとることになつた。當時山岡刑務局長談として新聞紙の報じた處によると、此用語の表向きの改正理由は、主として「監獄」と云ふ名前が世人に與へる感じが良くないからだとの事である。名稱を變へたら監獄臭くなくなるだらうと云ふのである。成程これは一應賢い思ひ着きであつた。「ケイムショ」なら鳥渡話せる。一度位はいつて見てもよささうな氣がする程であるし、又前科者でも「ケイムショ」で暮して居たと言へば體裁も餘り悪くは無い。改正の目的がちやんと達せられて居る。當局も旨い事を考へたものだ。が併し、さう云ふ事を狙つて用語の改正を敢てする事が果して正當なものであるかどうか。

三

人種差別の撤廢をベルサイユ會議に持ち出した日本の國内に、同胞の一部に對して差別的待遇をするのは不當であると言つて起つたのが水平社の所謂水平運動である。この事あつて以來、人々は假初にも「エタ」や「新平民」や「特殊部落」や「部落民」などと云ふ言葉を口にする事を愼み出した。水平運動の起ることは誠に尤もな次第で、國民がこれ等の人々を特殊扱ひにする事の不當な事は今更申す迄も無い。併しこれ等の言葉に替へるのに、近頃新聞紙上で見受けるやうな例へば「少數同胞」であるとか「水平社の人々」だとか「水平運動を唱へる人」などと云ふ言葉を以てする事が果して幾分でも差別的待遇を撤回したといふ意味になるであらうか。こう言つた事柄に就いて私はこれから段々と話を進めて行き度い。

四

このやうに用語が頻りに改正されることが、先づどう謂ふ影響を國内に及ぼすかと云ふ點に就いて私共は一考して見なければならない。司法省が「監獄」を「刑務所」に變へる事によつて、第一に司法系統の法令文書乃至看板などを書き直さねばならぬが、それは先づ譯なく出來たとして、次に同じ政府部内に於て陸軍省や海軍省の管轄する處の「衛戍監獄」や「海軍監獄」はどうするか。今度の場合のやうに政府部内がよく統一協調して陸軍も海軍も司法省の改正に倣つた場合は好いけれども、通例各省殊に陸海軍省の如きは自省の尊嚴(?)を保つ上からして輕々しく他省の改正に追從しないのが通例である(その活きた例は第一〇項に擧げてある)。さうなると此處に於いてか本來同一であるべきものの名稱が二つ出來ると云ふ事になつて

國語の不統一を惹き起すから、日本と云ふ大きな眼から見て不都合である事は申す迄も無い。さりとて如何に協調や統一が大切だからと云つて、物によつては他省の勝手に定めた用語に――殊にそれが「監獄」を「刑務所」に變へるやうな程度のものであつては尚更ら（併し寛大なる陸海軍はこの度は司法省案に從つたのである）――盲從するといふ事は苟も相當の見識を持つた各省の能くし得ざる所である。

五

以上は單に司法省對陸海軍の話を述べただけであるが、斯かる改正の爲め一番迷惑を感ずるのは恐らくは文部省系統かと私は考へる。國定教科書に載つて居る「監獄」と云ふ言葉は――そんな言葉が事實國定教科書に載つて居るかどうかは私の知る處で無いが、今はたゞ「監獄」といふ一例をかりて私の言はんとする所のものを述べて居るのである――文部省が好むにせよ好まざるにせよ悉く司法省の改正に連れて改正を餘儀無くされて仕舞ふ。更に一般國民に至つては國民と云ふ國民が――泥棒やスリの類に至るまで悉く――皆言語生活に於いて改正を強いられるでは無いか。及ぶ處の大なる、實に用語の改正に若くは無い。愼む可きは實に用語の改正である。

六

今日專制國以外に於いては一般に、政府に議會の協贊なくして豫算の變更を行ふことを許されないのが通則である。併し事豫算に關係が無ければどんな事でも政府は勝手にやつてよいと云ふものでは無い。それは餘りに重金主義の思想であつて、政府はよろしく豫算に對すると同様の精神をもつて政治に當らなければならない。而して今此處に私の述べて居る言葉の問題の如きに對しては殊更ら此精神が必要である。吾人の祖先が廣く日本民族に言ひ繼ぎ語り繼ぎして殘した處の言葉を吾々が受け繼いで使用するのは吾人の榮譽であると同時に日本民族としての權利である。この權利を國民若しくは國民の代表者にはかる事無しに任意に奪ひ去ることは官吏として越權の振舞だと言はなければならない。

さて、これ程重大な用語の改正が單に一局長や一課長の鳥渡した思ひ付き位で起案されると云ふ事に就いても吾々は大に注意を振り向けなければならない。勿論これ等の改正案が勅令として表向きに世に顯れる迄には相當の機關によつて篩に掛けられて居るに違ひあるまいけれども、機關其者が又言葉といふ事に自覺の薄い人の集りである計りでなく、斯かる場合にあつて

は常に起案者の所謂原案なるものが過分に尊重されるのは官界事務の常であるから、此點に就ても私は最後に述べやうとして居る所の國語の研究統一機關の設置を望んで止まない次第である。

七

私は既に(イ)用語改正の愼重にすべき事と、(ロ)國民の言語生活に大關係のあるこの用語を政府殊に一局長一課長の單なる思ひ着き位で無造作に變更することの不可なる事に就いて述べた。併し乍ら若し之等の改正が相當有意義のものであるならば、制度上の事は暫く別として、改正の實質的効果の上からして吾々は相當贊辭を呈することを惜む者では無いが、その結果たるや用語界に一大混亂を與へただけに止まるやうな事は無いかどうか?

再び話は前に戻るが、「監獄」と云ふ名稱が「刑務所」に改まつた時、人々は新らしい名稱が古い「カンゴク」と云ふ言葉の持つて居るやうな一種いやな感を起こさせないかのやうに誰しも考へる。これは事實である。私とても其事實は決して否定しない。併しさう云ふ事丈を狙つて用語の改正を試みるべきものだらうか。それを調べるために私は今一度元に戻つて、新用語が吾々に**いやな感じを與へない**のはどう云ふ譯であるかをもつと突き詰めて吟味して見やう。

「監獄」があのいかめしい赤煉瓦の塀を連想させるのに、「ケイムショ」にはもつと好い響きがあるやうに感ぜられる事實はどう説明するかと云ふに、これはよく考へて見れば誠に下らない話で、それは單に「ケイムショ」と云ふ言葉が耳新らしくて人々の耳にまだよく馴染ない爲めに、その言葉の持つて居る本統の意味に對する感情が湧き立たないからである。其の證據には、「ケイムショ」も度々使ひ慣れて、人々が實際刑務所にもはいつて見て散々刑務所生活の苦役を嘗めて來る程の年月を經れば、自然と誰しも「ケイムショ」の發音を聞いただけで身震ひするやうになるに違ひ無い。此事實は其昔「牢屋」と云ふ言葉から今日の「監獄」に改まつた當座、當時の人々が「監獄」と云ふ新用語に對してどう感じて居つたかと云ふことゝ、今日の「監獄」が持つ處の感じとに照らして少しの疑も無い話である。

今私は「刑務所」と云ふ語を例にとつて話をしたが、これは強ち「刑務所」には限つた事ではない。「エタ」といふ語が「新平民」に變つたとき、人々は大層立派な語だと思つたに違ひ無い。その立派な「新平民」も既に使ひ慣れた今日では昔の「エ

夕」と大して變つた內容を表現する語とは思はれなくなつて仕舞つたではないか。

約めて再說すれば、改正された新用語は、人々に耳新らしい間だけ――即言葉本來の任務をまだ充分に果して居ない期間だけその特徵（感じが惡くないと云ふ特徵）を保存して居るものであつて、それが言葉として充分役立つやうになれば漸次其特徵を失つて矢張り改正以前の古い語同樣のものになつて仕舞ふものである。畢竟この意味に於ける用語の改正は全く意味を成さない。

八

前々節で私は政府乃至官吏が、國民若しくは國民の代表者にはかる事無しに勝手に用語を改めることの不都合を責めた。併し飜つて考へるに、これは强ち役人計り惡いので は無いらしい。事實はもつと根深い根底を持つて居る。それは實に國民が又斯かる改正を好む處に根ざして居るので、此見地からして政府の改正はよく民意に叶つて居ると言ふ事が出來るかも知れない。

「産婆」と云へば誰にも解るのに、それが「助産婦」と改められて仕舞つた。今日では「小使」の事を「小店員」と呼ばなければ誰も働いて呉れない。一昨年、下級職員が團結して「大工」「油差し」と云ふ名稱は吾々職員の人格を無視したものだから、それ等をそれぞれ「船匠手」「機械手」と改正して貰ひ度いと云ふ要求が雇主側に持出された。「擬兵」も同じ理屈だ。或所では「職工」を「工務員」に改めて居る。さうかと思へば「電話交換手」を「女子通信事務員」と呼び換へて女子供を嬉しがらせて居る當局もある。又一昨年の始めであつたか、「巡査」と云ふ響きが人民に與へる感じがいかにも巡査らしくていけないから之を「警手」とかに改めやうと云ふ案も出たが、これはどう云ふ理か立消えになつた。「大工」や「油差し」と云ふ名前が若し下等に聞こえたとしたならば、それは之等の名稱が人格を無視して居るのではない、乃公自身の行ひが人格を無視させるのである。無實の罪を着せられる言葉こそ好い面の皮だ。莊子曰名者實之賓也と。實に名言である。

九

當局や資本家にも狡い所がある。給料は仲々上げられないから、國民の言葉といふものに對する無自覺を利用して、名前だけを變へて嬉しがらせて居るのである。併し名前を漢語臭くしたり、「、、員」と直しさへすれば偉いものにでもなつたかのや

うに安心して居る國民の無自覺其物が何よりよろしく無い。

とは云ふものゝ言葉に對する無自覺と云ふ段になると當局も資本家も共に一般國民と同一程度にある。『國民の無自覺を利用して云々』は私の言ひ過ぎかも知れない。何となれば無自覺なる者が無自覺なことに就いて他人を利用すると云ふ事はあり得ない道理だから。

十

既に述べたやうに我國では各省は各省で官吏の獨斷によつて勝手に用語の制定及變更をやるし、新聞は又新聞で思ひ思ひの譯語を作るから、同じ物又は事が色々の名前になつて居て、今日の日本語は不統一そのものである。同じ軍隊であり乍ら同一物を陸軍では「機關銃」と呼び、海軍では「機銃」と云ふ。飛行機射撃砲のことを陸軍は「高射砲」と稱へ、海軍では「高角砲」と云ふ名稱を附與して居る。而して又陸軍の三等主計正は海軍の主計少佐である。若しそれ陸軍の「手簿」(手帖のこと)「中徑」(半徑のこと)や、醫者の「裏久後重」の類に至つては實に沙汰の限りである。

一體全體國民(或は民族)が互に同一國民であると信ずるためにはお互が使ふ處の言葉が同一でなければならないものである。鹿兒島の人と青森の人と會つて薩派り話が判らないといふやうな事ではまだ日本は言葉に於て充分に統一されて居ない證據である。言葉が統一して居ないと云ふことはとりも直さず國家或は民族として充分なる統一を缺いで居ると云ふ事に外ならない。坊間に日薩會話篇と云ふ本があると云ふ事實を私はたゞ笑つて濟ます譯には行かないと思ふ。

このやうに既に我國では地方々々で言語が區々になつて居るのに、更に別な方面から陸軍は陸軍、海軍は海軍、文部は文部遞信は遞信と云ふ具合に用語を異にして居るのだから堪らない。人は軍隊を稱して特殊部落と云ふ。それには勿論誇張した意味も多少含まれて居るが、人をして此感を懷かしめる最大原因の一つは實に一般社會との言語の相違にあると言つても決して過言ではあるまい。

十一

こうなつて來ると上田萬年博士の言はれた『日本人には國語的良心が無い』と云ふ言葉を私はつくづくと考へさせられる。言葉は思想表現の手段だから、謂はゞ思想の道路だ。この思想の交通機關である處の道路をめいめいが勝手に堀り返し、こねくり返して、後は野となれ山となれでは思想の交通機關はバッ

タリと停止するより外に致し方が無い。そこで町には道路課と云ふものがあつていたんだ個所は人夫が道普請をする――この人夫を修路夫と呼ぶのだから堪らない！――事になつて居る。それと同じ事で國家は思想交通の道路たる國語の修理をする處の機關を設置する事が必要ではあるまいか。町の道路課が道の修理計りでなく新設をも司つて居るやうに、この機關の任務は國語の整理、改良、統一の外、國語の創造にも及ぶべきは言ふ迄も無い。機關は朝野の學者名士數十名を以て組織し、之を内閣直屬として、少くとも政府部内に對しては各省をして其制定に係る用語の使用を強制する權能を與へ、尚國民一般に對する自覺を促すところの宣傳機關をも兼ねた一大研究組織であつて欲しい。今日は食物に對しても國立營養研究所の設立を見た時代である。文化の基調であるべき國語に對して國立國語研究所設置の提唱をするのは今日正に其時を得て居ると考へる次第である（終）。

朝鮮經濟私觀

法學博士　堀江歸一

小引

私は自分が當今經濟上の諸問題に對して、持つて居る意見なり、讀書思索に依つて、收め得た學說なりを成る可く多數の人士に普及し、以つて世論を開發したいと云ふ考へから、一身に多少の閑暇があり、又地方の諸團體から招聘を受ければ、之に應じて講演に赴くことを殆ど一部の定職として居る。而して地方に旅行する度に、零碎の時間すら、之を利用して、地方經濟上の狀態なり、地方の民情風物なりに就て、見聞觀察を怠らないようにし、又汽車の窓や、自働車、人力車の幌の内からも、多少の觀察眼を放つことに工風を凝して居る。以下揭げる所は本年四月上旬京城に赴いて數日を費した際、私の耳目に觸れた

事柄を思出す儘に筆錄したものである。固より首尾の一貫しない所や、知見の狹い所もあつて、是等の點に就ては、讀者の諒恕を仰ぐと共に、他日の補正を期することゝし、玆に單に私の拔かざる朝鮮經濟觀を申述べるに止める。

一、關釜不聯絡船

關釜聯絡船と云ふのはある。然し關釜不聯絡船とは、私共の今まで、全く耳にしなかつた所であるが、今日は正に此言葉を用ひなければならぬ次第と爲つてゐる。從來鐵道省が關釜聯絡の爲に就航させて居つた汽船は新羅丸とか、高麗丸とか、壹岐丸とか、云ふ名前のものであつて、私は是等の內のどれかに三四度搭乘したことを記憶して居るが、何れも船體は少さく、速力も早いと云へず、關釜間百二十二浬の航海に十一時半を費さなければならなかつた。今日でも此航路は單に京城に直通するばかりでなく、北京や長春にも聯絡するし、歐洲戰前に於ては、遠く西比利亞を經由して、歐洲に達する世界的通路の一ツであつた。隨つて右の如き速力の汽船を就航させると云ふことは、誠に驚き入つた沙汰であつた。流石の鐵道省も此點に多少の顧みる所あり、日本の關門を飾る考へを起した爲めか、最近に至つて、聯絡船を一新し、德壽、景福、昌慶と云ふ朝鮮王宮の名を取つた三千六百二十噸級の新造船を之に充てることゝした。隨つて速力も以前の汽船に比較すると、餘程早く爲り、關釜間の航海は僅々九時間に短縮されたのである。即ち私の如き夜の九時半に下ノ關から景福丸に搭乘して、翌朝の六時半に釜山港口に達した次第である。若しも海陸運輸の聯絡を理想的にする點から云へば、汽船が棧橋に橫付けに爲ると同時に、一方には汽車は早くも黑煙を吐きつゝ、何時でも一聲の汽笛を合圖に出發しなければならない筈であつて、西洋文明國の海陸聯絡は正に斯の如き狀態に居る。否遠く例を西洋に求めるまでもなく、釜山に於ても以前は斯の如くであつて、同港に汽船が到着してから、汽車の出發するまでの時間は約三十分に過ぎなかつたのであるのに、今春の旅行に於ては、驚く可し、汽船は午前六時半に到着して、汽車の出發は以前と同樣、十時であつて、其間に正に三時間半の餘裕がある。即ち鐵道省は快速力の汽船を使用して、航海時間を短縮した。此事は誠に結構と云へるが、朝鮮鐵道を支配する滿鐵の京城管理局に於ては、此聯絡船の航海時間短縮に相應じて、汽車の出發時間を繰上げない。啻に奉天長春大連に至る汽車の時間を改正しないばかりでなく、最も簡單に行はれ可き京城行汽車の發車時間をも改正しない爲め、總ての旅客は一旦釜山に上陸した後に、如何に三時間半の時間を費

消す可きやに苦しまざるを得ないことゝ爲るのである。釜山なり、其附近には是れだけの時間を以つて、遊覽す可き場所もなければ、見物す可き古蹟もない。多數の旅客はステーション、ホテルなり、日本旅館なりに入つて、寛々朝餐を喫したり、煙草を吹したりする有樣であつて、現に私の如きも同行者と共に散々の退屈を感ぜざるを得なかつた。

私は自分の退屈したり、迷惑したりした故を以て、天下の公器たる雜誌に此事を論ずるのではない。私の擧げたいと思ふ點は最も聯絡を重んじ、統一を尊ばなければならぬ鐵道汽船の交通に於て、其管轄者の內國政府であり、殖民地會社であることに依つて、斯る聯絡蹂躙の事實を生ずる一事であつて、或は斯る事相は內國と殖民地との行政の事々に相扞格し、又衝突する趣きを具體的に現示したものではないであらうか。私が京城に於て聞知した所に據れば、本年六月に爲れば、汽車の時間も改正されるとの事であつたが、何かの都合に依つて、七月まで延期されたと云ふ報を得た。釜山邊の旅宿業者は斯る不聯絡の爲めに、幾分かの散錢の落ることを利益であるとし、何時までも不聯絡の續くことを希望して居るさうであるが、斯の如きは東海道の雲助が汽車の開通に反對したのと同樣の根性であつて、其愚かなることは、海陸の聯絡を閑却して、旅客に迷惑を加へつゝある鐵道當局者と擇ぶ所あるを知らない。誠に驚き入つた次第であつて、快速力の汽船に搭乘した愉快は上陸後の不便に依つて、跡方もなく消散するに至つたのである。大正十年度の統計に據ると、關釜聯絡船の乘客は一等七千六百六十八人、二等四萬一千二百六十六人、三等十七萬三千百十九人、合計二十二萬二千五十三人とある。此內には釜山なり、下ノ關なりの附近を最終の到着地とする爲め、一向海陸不聯絡の不便を感じない者もあるであらうが、固より一少部分であつて、大部分は往路に歸路に多くの時間を空費する譯であつて、之を二十二萬二千五十三人に乘じたならば、其國民の能率を傷けること幾何であらうか。更に貨物運搬の遲延することから生ずる損失の如何をも考へたならば、交通に對する我國同胞の無神經であることは、或は汽車汽船を知らなかつた野蠻時代と異なる所なしと云へるであらう。

往路の海陸不聯絡の右の如くである通り、歸路に於ても、汽船は釜山から早曉下ノ關に到着し、三時間餘を待ち草臥れて、漸く九時半の東京行汽車の出發に聯絡する次第であつて、此の汽車時間は何時に爲つて改正されるか、豫測するを得ない。日本人は何時までも緩々たる牛歩よりも早い位の汽車で、滿足すると云ふ温順なる性質に生れ付いた國民と申す外ないのであ

る。

二、依然たる朝鮮の水容山態

私は朝鮮内地を汽車で往復すること、既に四五度に及ぶが、如何なる場合に於ても、常に感ずることは、朝鮮の山河の貧瘠であり、天然資料に缺乏しつゝある一事である。或る無識なる代議士は先年朝鮮を旅行した際、汽車から沿線を展望し、朝鮮には到る所、豚小屋が並んで居る、以つて其牧畜業の盛なることを知るに足ると云つた話がある。何ぞ知らん、其代議士が豚小屋と見たのは、甚だしき僻目であつて、實は鮮人の住家であつたのである。家根は低く、軒は傾き、赭土で塗り立てられた物置同樣の小屋に多くの鮮人の密住して居る狀態を目擊しては、何人と雖も彼等の生活程度の劣等であることを嘆ぜざるを得ないであらう。土地の貧瘠であることは、農產物の增收を乏しからしめるが、更に河川の水流に於ける營養をも枯すものと見へ、密陽邊で漁せらるゝ鮎の如きは、脊に乏しく、到底食通の食膳に上すに堪へないと言はれる。國の貧しいことが魚にまで及ぶとは、嘆ず可き事實ではあるまいか。

抑も朝鮮は何を以つて經濟的立國の基礎とし、根柢とするかと云へば、之を全體から觀察して、一の農業國であるとするの外はなく、工業はあると云つても、機業、窯業、製紙業、醸造業の如き鮮人の經營に係るものは何れも小規模であり、工場工業を以つて見るよりも、家内工業を以つてするを當れりとする位であるから、其の產出に係る富に依つて、鮮人を給養し得る數の如き、又鮮人に職業を與へて、其生活を向上せしめ得る程度の如きに就ては、何としても重きを置くに足らない。隨つて朝鮮を盛にするのも、衰へさせるのも、今日の處では一に農業の興亡に繫る次第である。而して農業は總督府の獎勵や、内地資本家の投資經營に依つて、次第に發展しつゝあるやに稱される。現に朝鮮十三道に於ける耕地面積の統計を見ると、

	水田	田
明治四十三年末	八四七、六六七・七町	一、六二七、三三六・七町
大正　八年末	一、五四三、〇八九・五	二、七八一、三六九・六
同　九年末	一、五四三、七〇一・九	二、七七八、二三五・二
同　十年末	一、五四三、六六四・三	二、七七七、八二五・八

といふ數字を現はして居り、水田に於ても、陸田に於ても、近年の耕地面積は十年前に比較して、著しき增加に當り、外に國有未墾地の或は貸付に依り、或は付與に依つて、農民に利用されるものも亦少なしとしない。最近兩三年間に於ける耕地の面積の停滯的狀態に居ることは、遺憾とす可き點であるが、現に

角普通の道理から云へば、朝鮮に於ける天然資源の利用は最近十餘年間に於て著しく進んだ譯であつて、其進歩の跡は鮮民の生活の上に有利なる影響を及ぼさなければならぬ次第であるのに、鮮人の生活程度の低く、加ふるに其狀態の貧しいことは、依然として舊の如くである。此事たる、單に汽車の車窓から瞥見し得た所であるに止まらず、大正十年夏私が或る日の昧爽大邱から慶州へ向つて、自働車を驅つた際、大邱郊外に居住する貧民が陋屋の暑熱に堪へ難い爲めか、アンペラ一枚を引き被つて道傍に一夜の夢を結んで居り、自働車の響に驚いて目を醒ます者の多いことを目擊して、彼等の生活の殆ど無宿者と同樣の憐れむ可きものであることを知つたのである。流石に京城の郊外淸凉里邊には鮮人の家屋の新築されるものが見受けられ、其內には相當程度のものもあることは、大都會が附近の住民を潤ほす結果であると考へられるが、地方農村に至つては、決して斯の如くなるを得ない。現に最近の戶口並に人口統計に徵すると、

戶數

	內地人	朝鮮人	外國人
明治四十三年末	五〇、九九二	二、七四九、九五六	三、一五五
大正九年十月一日	九三、四八八	三、一九六、五五一	七、〇八七
同十年十二月末	九五、九五五	三、二〇一、二二五	七、五四三

人口

	內地人	朝鮮人	外國人
明治四十三年末	一七一、五四三	一三、一二八、七八〇	二八、九九四
大正九年十月一日	三四六、四九六	一六、八九一、二八九	二六、三三四
同年十二月末	三六七、六一八	一七、〇五九、三五八	二五、九四二

と云ふ數字であつて、內地人の戶數なり、人口なりの增加する勢に對して、朝鮮人の戶數なり、人口なりの增加する勢の劣つて居ることは、歷々として之を指摘するを得るのである。而して大正十年十二月末の統計に據り、內地人と朝鮮人とに就て戶數と人口との割合を見るに、前者に於ては、一戶に付き三人八であるに對し、後者に於ては、一戶に付き五人三に當る。不幸にして統計に於ては內地人の家屋と朝鮮人の家屋との一戶當りの廣狹が示されて居らないが、若しも此一項が示されたならば、如何に朝鮮人が內地人に比較して密住をして居るかの一斑が明にされるであらう。

農業上の耕作地が擴張されて、其割合に鮮人の生活程度が進まず、鮮人其ものゝ數亦增加しないことに對しては、種々の說明が下されるであらう。朝鮮人が本來生活程度を上進せしむ可き道を知らないとか、彼等は本來懶惰であつて、擴張された農

耕地を利用する手段を盡さないとか云ふことは必ず一部の人士に依つて擧げられたる所であつて、私も是等の所說に一面の道理の存することを認めるが、斯る事態の惹起されるに就ては、朝鮮に於ける農業制度と相關する所の多きことを信ぜざるを得ない。蓋し朝鮮に於ける農業地は大地主に依つて、所有されるものが甚だ多い、殊に從來內地の資本家が朝鮮に資本を投ずるや、其小なる者は資本を高利に貸付けて、暴利を貪らうとし、其大なる者は土地を買入れて、大規模の農業を經營することを常とした。斯くて朝鮮には今や到る所に大資本家の經營に係る農場を見るに至つたのであるが、是等の大地主は多く內地なり、朝鮮なりの都會に居住し、一方に土地の所在地には代理人を置いて、小作地の管理、小作契約の締結や、其改正に當らせたり、又小作料の徵收を掌らさせたりするのである。即ち往年愛蘭に於て、農村の荒廢を惹起すに至らしめたと稱される地主不在主義（Arsenteeism）は今や正に朝鮮に行はれるのである。地主不在主義の弊害として最も著しきは、地主が土地の所在する地方に居らない爲め、其地方の事情などは、殆ど之を眼中に置かない、代理人を地方に置いて、土地の管理を託する場合には、代理人は地主の歡心を繫いで、自己の利得を多くしようと云ふ考へから、又仲小作人の制度の設けられる場合には、仲小作人は自己の地主に納付する小作料よりも、高い小作料を實際の小作人から徵收して、自己の所得を增さうと云ふ考へから、結局小作人に大なる壓迫を加へて、農業の發展、農村の繁榮を害する點に存するのである。內地の農業に於ても、旣に此種の弊害は僅に或る方面に現はれて居り、農村疲弊の一原因を爲しつゝあることは、爭ふ可からざる事實であるのに、（拙著「續篇世界の經濟は如何に動くか」第十章參照）朝鮮に於ては不在地主や其代理人は內地人であつて、小作人は朝鮮人であり前者の後者に對する侮蔑的念慮の旺盛なる場合には、不在地主の小作人に加へる壓制の强かる可きは、論を俟たない。斯くても尙ほ朝鮮人は李朝時代に官權の壓制に泣かされた場合に比較して、遙に幸福に爲つたと云ふ感を懷くであらう。事實は正に其通りである。然し朝鮮人をして文明國の施政の下に立たしめた以上は、國內に多數を占める農業者をして、其堵に安んぜしめる計があつて然る可きものと考へられる。

昨今朝鮮にも工業勞働者の間に、紛議の絕へざるが如くに、小作人の間に小作爭議が行はれて已まないようである。或る人は之を解して、內地に行はれる同種爭議の模倣であると云ひ、又好事者の煽動に出づるものと云ひ、輕々しく之を看過し去らうとするようであるが、私は朝鮮に小作爭議の起るに就ては、

內地に於けるよりも、更に有力なる原因があると斷定するに躊躇しない。朝鮮に於て小作料の徴收されるや、其方法として收穫期に檢見を行つて、生産額の二分一乃至三分の一を標準として、小作料を定めるものがあり、收穫事に收穫物を折半して其一を小作料とするものがあり、又年の豐凶如何に拘はらず、定額の小作料を定め置くものがあるやに聞くが、其孰れを以つてしても地主不在主義が行はれ、而して地主は朝鮮に於て行はれる高い金利步合を標準として、土地から穫得する利益を定めようとする爲めに、結局地主の權力を以つて、小作人の利害を壓迫するに至るものと解されるのである。

三、工業國としての朝鮮

京城や慶州に於ける博物館美術館の陳列品を一瞥すると、私共の如き其道に就て何等特殊の知識を持たないものであつても、尚ほ古代朝鮮人が如何に鑄金、窯陶、機織其他の業に高尚なる技術を備へ、又優雅なる意匠を貯へて居つたかを知ることが出來る。此技術意匠が連綿として今日まで傳へられ、然も其傳へられる間に、時代の洗練を經、殊に外國から輸入される工藝美術を加味するを得たならば、今日の朝鮮をして一個有數の美術國たらしめ、又工藝國たらしめ、少なくとも特殊の技術を有する工藝家をして輩出せしめるを得たことゝ想像される。然るに李朝を通じて行はれた虐政は國民から總ての美點を奪ひ長所を滅し、今や朝鮮の産業と云へば、農業以外に殆ど見る可きものなきの狀を呈するに至らしめた。私共旅行者が朝鮮に行つて最も困るのは、留守宅の兒女を賑はすに足る土産物の頗る乏しいことである。其でも近年は內地人が入込んで、種々の物資を製造することを工風し、朝鮮特産の名を付けて、賣出すように爲つたものゝ、其內には大阪邊で製造されて、朝鮮に輸入される物資の少なからずあると云ふに至つては、滑稽至極と申す外ないのである。

先づ朝鮮固有の産業として、今日まで命脈を繋いで居るものは、機業、窯業、製紙、釀造、金屬品の製作等であつて、機業に於ては、木綿、絹、麻の織物等を製出するが、木綿織物の如きは、農家の副業に係り、居織機を使用するに止まり、麻織物も亦同樣であり、絹織物に至つては、産額最も少ない。陶磁器の原料は黃海道、平安南道、江原道、慶尚北道、咸鏡北道に産出され、高麗時代に如何に精巧なる器物が製造されたかは、今日古墳の發堀される際に、人をして昔を偲ばしめるに足るが、併今日に至つては、纔に新高麗焼と稱する日用品の製造を見る位の話であつて、之を以て斯業復興の曙光とするが如きは、大

なる間違とせざるを得ない。此他製紙業にしろ、金屬品製造にしろ、何れも地方的産業に過ぎない、一小部分の鮮人に仕事を與へたり、又些細なる數量の輸出貿易を支持したりするに足るとしても、之を以つて大に朝鮮を富ませ、又鮮人を潤ほすに至るものと考へられない。我國が固有工業たる製絲業や、織物業や、窯業を以つて、大に對米輸出貿易を旺盛ならしめる素地を築き一方に、漸を以つて外國輸入の工業を發達せしめたのとは全く趣きを異にするのである。

朝鮮に行はれる外國輸入の工業は鐵工、煉瓦、電氣、製材製革諸業を始めとして、製粉、製糖、パルプ製紙、紡績、セメント、陶磁器、燐寸、製鐵の諸業を數へるを得るが、何れも小規模であつて、纔に國内に於ける需要の一部分に應ずるに止まり、是等製造品の一ツも重要輸出品たるを得ない事實に徴して、斯業の幼稚であることを類推するを得るであらう。現に朝鮮重要輸移出品中、價格一千萬圓以上のものは米、大豆、鹽魚、鐵及び軟鋼の類である一方に、重要輸移入品中、價格一千萬圓以上のものは綿織物、石炭であり、之に次いで車輛、船舶、諸機械、木材の輸移入が數百萬圓に上ることを見たならば、現在の朝鮮が工業的發達に於て、殆ど稱す可きもの〻ないことを斷ずるに難しとしない。

我國に從來行はれる議論を以つてすれば、我國の事業家は朝鮮に工業を起すに就て、鮮人の賃銀の低廉なることを利用しようとし、之を第一の着眼點とするのであらう。今、内地人に依つて經營される諸種の工場を通じ、投下資本金の一千萬圓以上に上るものに就て、職工の國別を見ると、大正十年末に於て、左の如くであつた。

	工場數	資本金	職工		
			内地人	朝鮮人	外國人
窯業	二七	一〇、九五九、八〇〇圓	四三二	三、〇三三	五六八
精穀業	三八	三一、四七七、四〇〇	五七六	八、六八一	―
精練業	七	四六、七五二、〇〇〇	一、八五五	三、一〇〇	一四二
瓦斯、電氣業	三	三〇、五五一、八〇三	一六五	二六八	一五
製糖業	一	三〇、五〇〇、〇〇〇	五四	九五	―

右は重要工業に關するだけの統計であるが、更に大小諸種の工業に就て如何なる數字を示すかと云ふに、諸工場千二百七十六に使役せらる〻職工三萬六千二百十人の内、内地人の六千二百三十七人、外國人の一千七百四十九人に對して、朝鮮人は二萬八千二百二十四人の多きを數へるのである。然らば内鮮人間の賃銀には幾何の高低があるか。諸種の職業に就て、大正十一年六月の平均を揭げれば、左の如くである。

	内地人（圓）	朝鮮人（圓）
大工	三八五	二三三
左官	三九四	二七二
石工	四四〇	二七一
家根葺	三八〇	二〇三
鍛冶職	三四〇	二〇九
平人足	二五八	二一八
農作人	一五三	一〇〇

以上掲げたのは、重に職人の賃錢であるが、内鮮人の差別に依つて、勞働報酬に差別の存することは、大體右の數字に依つて、之を知るを得るであらう、斯る差別の維持が公平であるかどうか、報酬の高低と勞働能率の優劣とが正しく一致して居るかどうかは一個の疑問に屬するが、兎に角各種の仕事を通じて、多數の朝鮮人が使役されて居り、而して朝鮮人に對する勞働賃銀の低廉であると云ふ事實は必ず我國に於て低廉勞働に依頼して、工業を起す説（Cheap Labour Argument）を生ずる所以と爲るのである、然しながら朝鮮の奥地に在る農村ならば兎に角、工業の經營される都會に於て、鮮人が何時までも日本人殊に日本の職工勞働者と懸け離れた生活を送つて滿足して居るであらうか。日鮮融和とか、内鮮同化とか云ふ方針が朝鮮施政の根元である以上は、其事は内鮮人の生活程度を接近させ、従來兩者の間に存在して居つた懸隔を消滅させる形に於て、實際に現はれなければならぬ。勞働運動の急進主義の如き、實に能く青年鮮人に依つて理解されて居り、日鮮勞働者の間に、勞働能率の差別に依らず、單に人種の差別に依つて、高低の段階を設けることの不公正も朝鮮人に依つて認められ來り、彼等の間に勞働運動を試みる機運の漸く盛ならんとする今日に於て、尚ほ勞働賃の低廉に依頼して、工業を起さうとし、斯る考への下に、工業を經營するの結果として、日本の資本家自ら鮮人勞働者の生活程度を劣等なる標準に置からうとする間違を生ずるのは、時代錯誤の極とせざるを得ない。

如何にも今日鮮人勞働者の勞働能率は低いであらう、鐘路や本町通りを通行すると、無數の鮮人が街路の彼方此方に何事をも爲さずに、辻路付き廻つて居るが如き、懶惰の性癖正に膏肓に入つた者に相違なく、斯る輩が工業殊に多少なりとも機械力の使用される工業に從事したとした所で、彼等の能率の舉げられる譯はない。能率の劣等であることゝ、生活程度低く、生活費の少ないことゝが相重なつて、賃銀の低廉である結果を齎し來つたのに相違ないが、然らば日本人の如きは、其官邊に關係するで人あると、民間の人士であるとを問はず、是れまで朝鮮

人の生活程度を向上させ、彼等を文明國の一員たらしめる、小くとも朝鮮在住の內地人の同一職業に從事する者と同一の程度までに進ましめる道を講じた人が幾人あるであらうか。多くは鮮人の生活程度低く、賃銀の安いことを利用し、惡用して居る連中ではないであらうか。勞働能率の低い爲めに、賃銀の安いと云ふことも一の眞理であるが、賃銀の安い爲めに、勞働能率の低く爲ると云ふことも、亦他の眞理に屬するのである。數十年前英國が南阿殖民地を開發する事業に着手し、殊に金剛石並に金の採堀を盛ならしめようとするに當つて、最も大なる困難とした所は土人勞働者の勞働不規律であり、能率の劣等なることであつた。而して斯る不利の狀態の存するのは、畢竟彼等の生活程度低く、一日の勞働に從つて、之に對する報酬を受ければ、僅に四五日間の生活を支持し得る餘裕のあつた爲めに、自然彼等をして懶惰に流れしめたものに外ならないと云ふ事實の判明するに至つた。斯くて英國の官民は土人の勞働性を刺戟する爲めに、先づ彼等に種々の方面から奢侈的消費を敎へ、又彼等を贅澤なる生活に誘ひ、生活費の增加することに促されて、彼等をして繼續して勞働に從ふの已むを得ざるに至らしめたことがある。勤儉貯蓄論者や、消費節約論者に云はしめたならば、斯の如きは最も不可なりとする所であらう。固より此事たる、經濟政策の本筋ではないかも知れないが、一種の奇道であり、變法であることは勿論であつて、多年の虐政の下に、勤儉の效果や、勤勞の利益を先祖代々忘却した朝鮮人の勞働性を刺戟し、勤勉なる勞働者として能率を舉げしめるには、此位の手段を講ずることが必要であらうと考へられるのである。

私が京城滯留中、或る日刊新聞を閱讀すると、近年朝鮮人の內地出稼人が次第に多くなり、一方に其れ等の出稼人にして、再び朝鮮に歸國する者の少ないと云ふ記事が揭げられ、之を證明する數字も添へられて居つた。如何にも下ノ關邊には家族連れの朝鮮人が群集して居り、聯絡船の到着する每に、何名かの朝鮮人を迎へざることはないと云ふ話である。內地に於ける不景氣の甚だ酷烈である際、是等の朝鮮人に何として職業を與へ得るであらうか、抑も亦彼等の移入は內國勞働者に競爭を及ぼして、結局生活標準の維持を脅かすに至りはしないであらうか、共に攻究を要する問題であるが、何れにしても鮮人が內地に移住し來る有力なる原因は朝鮮產業の現狀なり、其產業から生み出される富なりを以つてしては、一千七百萬の鮮人に相當程度の生活を保障するに足らないからである。固より內地に於ける多數國民の生活と云つても、著しく餘裕のあるものではなく、兩三年來社會に吹き荒みつゝある不景氣風の影響は到る所に及ん

で、國民生活を壓迫しつゝあるに相違ないが、尙ほ之を以つて聊か優れるものと考へ、蟲の燈を慕ふが如き有樣で、內地に渡來する鮮人こそ、誠に憫れむ可き者であるとしなければならぬ。而して彼等の多數は一身に工藝上の技術の備はれるものゝない結果、已むを得ないことゝ云ひながら、炭礦土木其他の不熟練事業に酷使され、鮮人たるの故を以つて、低率の賃銀を給與され、內地人から同情なき待遇を受けるのが一般の例であつて、本國から齎來つた多少の貯蓄金すら失つて、生命辛々鄕里へ歸る者もある。彼等の歸國した曉に、其期せずして、所謂不逞鮮人の仲間入りをするのも、亦怪むに足らないのである。

斯る際に元山に相當人數の露國避難民が移住し來り、鮮人と相並んで粗雜なる不熟練職業を競爭すると云ふに至つては、下には下があり、人の生活程度は法律の力を以つて、之を限定しない限り、何處まで低落するものであるか、測り知るを得ないことを感ずるの外ないのである。流石に總督府も事態棄て置き難しとして、其一部分を上海に送遣する計畫を講じたが、種々の故障あつて行はれず、京城に居住する妙齡の外國婦人が同府に流れ渡つた露國人の面倒を見ることゝ爲つた趣きに聞いたが、如何に地理上の便あるにせよ朝鮮に露國民の渡來する如きは、近頃の珍事であつて、社會改良家の一考を要する問題たるに値するのである。」

四　工業國たる一大障害と朝鮮の金融

一國が工業國として起つに就いて必要なる條件の一ツは資金の供給豐富であり、隨つて金利步合の低廉なる一事である。如何に原料品が豐富であらうが、勞働者が多數であつたとしても、金利が高率であつては、到底產業の發展に對して、大なる妨害を加へされば已まない。朝鮮が近き將來に於て、一個の工業國として、繁昌する見込みがあるかどうかと云ふ問題に接すると、私は朝鮮に於ける資金の缺乏に加ふるに、金利の不廉を以つてしては、到底其見込なしと答へざるを得ない。先づ朝鮮の中央銀行とも云ふ可き朝鮮銀行に就て、各種金利步合を見ると、

割引手形	日步	最高	三錢四厘
		最低	二錢七厘
		普通	三錢一厘
貸付	日步		三錢四厘乃至三錢一厘
當座貸越	日步	最高	三錢五厘
		最低	二錢九厘
		普通	三錢三厘

であつて、内地に比較して、如何に其高率であるかは、一瞥の下に之を知るを得るであらう。朝鮮銀行にして既に然る以上は、他の普通銀行が右に掲げられたものより遙に高い金利を徴收するのは、當然であつて、或は利息制限令に規定してある元金百圓未滿に對しては年三割以下、元金一千圓未滿に對しては年二割五分以下、元金一千圓以上に對しては、年二割以下と云ふ法定制限に近い金利步合の行はれるを見ることなしとしない。誠に朝鮮は高利横行の國であつて、邦人中今日の産を成した者の内には、高利貸で成功した連中が多く、大地主の内にも土地を抵當として、高利の資金を貸付け、抵當流れに土地を取入れた者の少なくないと稱される所以であつて、斯る金利の趨勢を以つてして、事業の隆興を望むが如きは、極めて難しとせざるを得ない。

朝鮮殖産銀行は不動産抵當貸出を重なる營業とする銀行であるから、姑く之を措き、一般普通の銀行に就て見ると、内地銀行の支店としては、第一銀行、十八銀行並に百三十銀行の支店あるのみであつて、而して是等の銀行支店は必ずしも本國の資金を朝鮮に齎し來つて、融通を行ふものと思はれない一方に、土着銀行としては、漢城銀行以下二十の多きを數へるが、是等の内、拂込資本金百萬圓以上の四銀行に就て見ても、其銀行としての實力は左に掲げるが如き微弱なるものである。(單位千圓)

	拂込資本金	積立金	預金	貸出金
漢城銀行	三、七五〇	二六〇	一一、三五四	一六、〇七五
韓一銀行	一、六二五	五五四	四、二三三	六、〇二五
朝鮮商業銀行	一、七三〇	五九〇	一〇、二五〇	一二、三二九
朝鮮實業銀行	二、〇〇〇	四四	四、一七七	五、六七八

朝鮮現在の經濟事情を以つてしては、金利步合の不廉であることも、銀行の實力の微弱であることも、已むを得ざる所に屬するかも知れない。而して今日更に朝鮮の金融界を苦しめつゝある二個の事實がある。一は内地に於ける金融の逼迫であり、他は朝鮮銀行の破綻暴露である。即ち右に述べた通り、朝鮮金融機關の不備であることは、或る程度まで朝鮮に於ける邦人商業家が内地に於て融通資金を調達する便宜に依つて、補はれるのであつて、此點から考へれば、朝鮮は間接に内地資金の流入を受けたり、又資金に代る可き商品の輸送を得て一時の餘裕を付けるのである。然しながら此事たる、内地の金融が餘程緩漫であり、内地商人に於て、朝鮮の取引先に「クレヂット」を與へ得る實力あつて、始めて行はれ得るのであるから、昨今の如き内地の金融に梗塞を告げて居る場合には、朝鮮も亦其影響を蒙らされば已まざるに至るのである。

既に朝鮮に於ける諸銀行の實力の微弱であること、今日の如くであるとすれば、朝鮮銀行が其れ等諸銀行の上に立つて、資力を幇助し、恰も內地に於る日本銀行の諸銀行に對すると同樣の地位に立たなければならない道理である。內地には市中諸銀行中、基礎の鞏固なるものもあつて、必ずしも日本銀行の不斷の援助を要しないかも知れないが、朝鮮に於ては朝鮮銀行たるもの、總ての銀行に對して、援助を與へなければならない。同銀行が釜山、大邱、仁川、平壤、鎭南浦、元山、郡山、木浦、清津、會寧等朝鮮內地樞要の場所に支店出張所を有するのも、如上の必要に出づるものと思はれる。果して然らば朝鮮銀行たるもの、其實力に於て豐富であり、其營業振りに於て、堅實であり、眞に他を援助するを得ると共に、他に對して、模範を示すの地位に立つことを要する。然るに其朝鮮銀行は經營上に大なる蹉跌を來して、營業に破綻を招き之を整理する爲めには、政府から保護を受けたり、他の銀行に就て、債權の肩替りを求めたり、而して整理の進行中は新なる資金の融通を愼しみ、既往に行はれた貸付は勉めて之を回收しなければならぬとしたならば、朝鮮の金融界に取つては、朝鮮銀行の實力は半分にも、四分の一にも減縮された譯である。鮮銀の行員中、銀行整理の爲めに馘首の憂目に遭つた者も少なからずあつて、其或る者は路頭に迷つたかも知れないが、斯る銀行の實力減退に依つて、普通銀行や、一般取引先の困惑することも、亦大なりとせざるを得ない。朝鮮銀行が斯る失態を演出するに至つた原因に就ては、私は

第一、本來拂込資本金五千萬圓、積立金一千五十四萬圓と云ふが如き大銀行は朝鮮に取つては、規模大に失すること、

第二、資金の融通に適當なる道を得ない爲め、滿洲方面に仕事の手を擴げ、橫濱正金銀行と愚にも付かぬ競爭などを試みたこと、

第三、特殊銀行の常として、政商輩から法外なる資金の融通を求められ、之に應じて貸付金の延滯や、固定を生ずるに至つたこと、

第四、右の如き諸種の缺陷の存する上に、內地朝鮮の双方に於ける不景氣の打擊を蒙り、遂に之に堪へられざるに至つたこと

を擧げるに躊躇しない。

要するに朝鮮銀行の如き、其正副總裁は政府に依つて、理事は株主總會に於て選擧された者の內から、朝鮮總督に依つて、任命されると云ふ不可思議の制度である其上に、營業に就ては總て朝鮮總督の監督を仰がしめること丶爲つて居る。即ち一朝

鮮總督は必要ありと認むるときは、銀行券の種類、發行高、貸付割引の金額、方法、利子若しくは歩合、爲替料、又は正貨準備若しくは保證準備に關し、制限を付することを得」とあり、又「朝鮮銀行の營業上、法令若しくは定款に違反し、又は公益を害する事項ありと認むるときは、朝鮮總督は之を制止することを得」とある。朝鮮銀行が斯る嚴重なる總督府の監督下に居りながら、今回の如き失態を暴露した事實に徵すると、政府の特殊銀行に對する監督の如き、有名無實のものであることを知るを得るであらう。啻に此種の監督の無意味であるに止まらず、政府が正副總裁に對して、任免の權を持つて居る一事こそ、銀行の獨立を脅かし、銀行をして官邊の權勢を背景とする者に向つて、不良の資金融通を爲さしめ、斯くて銀行を危險なる深淵に導くものとせざるを得ない。私は朝鮮に於て特殊銀行問題に關する卑見を徵されたし、又多くの人々と會談もしたが、結論は第一、斯る失態は特殊銀行に有り勝ちの事であり、第二正副總裁にも責任のあることは、何としても之を不問に付するを得ないが、彼等は寧ろ制度の犧牲であつて、其意思の薄弱なることを責めるの外、大した咎責を加へるを得ない、第三特殊銀行をして政權から獨立せしめることは、其安全を保障する所以であると云ふ諸點と爲つたのである。

五、雜感一束

朝鮮には所謂不逞鮮人も居れば、鐘路の爆裂彈事件があり、赤化運動もあれば、新思想問題もあり、頗る賑な事である。寺内長谷川兩總督時代の武斷政治や、憲兵政治は單に鮮人を威服せしめ摺伏せしめるだけであつて、其以上に一歩をも進めるを得なかつた。兎に角多年の歷史を有し、獨立の體面を持して居つた國を保護國から屬國に移し、直に其國民の悅服を收め得るとか、侵略國と被侵略國とを擧げて、一體のものたらしめるとか云ふことの至難なるは、論を俟たない。唯之を鮮人の多數に就て考へた場合に、彼等が李朝の虐政の下に居つて、生命財産の安全すら之を享受するを得なかつた當時と、總督政治の下に、多少租稅の負擔は加重されたとしても、兎に角法律の規定に依つて定められたものであり、官吏と人民との接觸に於て、幾多の形式を要するに至つたとしても、其形式たる、行政上の必要に基くのであつて、必ずしも人民を虐げる意圖を有しない今日の時代と比較して、孰れを以つて幸福とす可きであらうか。獨立國民と云ふ虛名に憧憬して、惡政を忍ぶか、斯る虛名は失ひ、附庸國民と爲つても、善政を樂むことを利益とするかと云ふ問題を生ずる。冷靜なる批判を以つて、朝鮮人の利害の孰れ

に在るかを斷ずれば、其前者に非ずして、後者に在ること、論を俟たない次第であるが、多數の民衆に此利害關係を徹底せしめるに就ては、種々の妨害がある。第一李朝時代に徒手遊食、尚ほ權勢を揮つた特殊階級が時勢の變遷に依つて遂に無勢力者に失墜し、不平憤懣に堪難いこと、第二儒教に特有なる形式的愛國觀念が常に擡頭して、一部鮮人の妄動を刺戟すること、第三總督政治の效果は概して無形的であり、有形的方面に於て、著しく鮮人に感得されるまでに至らない、寧ろ租税が重く爲つた、其重い租税を納付する上に、手段が煩苛であり、專賣や、間接税の爲めに、物價の騰貴したと云ふ有形的損失の方が明に鮮人の眼底に映ずることの諸點は何としても鮮人をして日本の總督政治を善政であるとして、擧國滿悅の態度に出でしめることを許さゞる原因であると考へられる。

武斷政治や、專制政治で壓倒し去るには朝鮮人の內に、餘り多くの理窟を知り過ぎて居る者があつた。謂り朝鮮特有の制度文物を屈りなりにも持つて居つた以上は、彼等の思想や、感情は之を尊重し、日本としては大綱を統べるに止めなければならなかつた。然るに日本が朝鮮人に對しては、法令一下、直に何事でも爲し得られる、朝鮮の北に流れる川を南に流れさせることも出來得るが如くに考へ、內地に於て煩瑣を能事とする官僚主義に養成された官吏や、嚴重なる軍律の下に、兵卒を手足の如くに動かすことの外何事をも知らない軍人を簡派し、朝鮮十三道に威令を行はせようとしたのは、今日に爲つて之を考へれば、誠に日本人の燥急なる性癖の現はれたものと見るの外ないのであつて、是れでは朝鮮の動亂するのも不思議はない。

大正八年朝鮮總督の交迭を機會として、日本は新に朝鮮に向つて、文化政治を施すこと、爲つた。文化政治に對するものは武斷政治であり、壓制政治である以上、世界的思想の一新されつゝある今日、後の二者の排斥されて、前者の行はれなければならないのは、論を俟たないが、併日本の朝鮮に對する文化政治なるものが能く徹底的に行はれて居るかどうか、將た又文化政治の下に、鮮人の職業なり、生活なりの上に有利なる影響を及ぼして居るかどうか。文化政治の下に於て、言論に對する壓迫は今日依然として行はれ、總督政治に對する批判の如き、如何に其れが公平無私のものであつても、京城府內に於て行はれることを許さないと云ふが如き、何たる矛盾であらうか。朝鮮に行はれる言論なるものは、當局者に對する阿諛諂佞の言に過ぎない。現に私が京城に於ける講演の一節に於て、政府の經濟政策に對して公正なる批評を下したと云ふので、聽講者をして耳を欹たしめたようであり、更に私と行を共にした一友人が京

城に於ける内鮮有力者に依つて招待された午餐會席上に於ける挨拶の一節中に「將來朝鮮は獨立するかも知れない」と云ふ漠たる假設的言辭を述べた爲めに、其後に至るまで内鮮人に大なる「ショツク」を與へて居ると云ふが如き、如何に平生言論に對する壓迫が行はれて居るかを窺ふの資料とするに足るであらう。斯の如くにして朝鮮總督を始め行政の衝に當る者は朝鮮殊に鮮人間に於ける輿論を知るを得るであらうか、限られた方面の人士と接觸し、其言説を取つて、直に朝鮮に於ける輿論であると推斷し、施政の方針を左右するが如き、危險千萬なる話であり、又朝鮮人の方から云へば、言論を通じて、輿論を明にし、以つて總督政治に民意を加味するを得ない以上は、彼等の内の過激なる者が直接行動に訴へる、穩健なる者は一足飛びに議會政治を要望する、淡白なる者は總督政治の紛れ中りを待つこと丶爲るのは、自然の勢であると考へられるのである。

更に事の根本に遡つて、私は日本人が異民族統治の資格を備へて居るかどうかに、疑を持たざるを得ない。假に其資格を備へて居るとしても、甚だ荒削りのものであつて、今後に於ける陶冶鍛錬を要することは論を俟たない。固より東洋に居る英米人などに就て見ても、其本國に於ける英米人に見出すと同樣の高尚なる品性は之を求めるを得ない場合が少なしとしない。北京天津其他に流浪して、利權獲得に狂奔したり、言論に對する買收金を漁りつゝある英米人などの内には、到底風上に置けぬ位の人物があるやうに思はれるが、其れにしても尚ほ彼等は異民族殊に自己よりも劣弱の地位に居る民族を遇するの道は之を心得て居り、彼等に德を施して、親しましめることを常とする。然るに日本人の支那人に對するや、始めから、又表面に彼等の弱小を侮蔑する感情を露出し、事々に力を以つて彼等を壓倒し去らざれば、已まざらんとする、一時大隈内閣や、寺内内閣が支那に對して、武斷的外交を試み、後日に至るまで大なる禍を傳へたが、實は日本人こそ擧國一致、武斷的態度を以つて、弱小國に當る心掛けを持つて居るのである。即ち朝鮮の如き、既に日韓合邦の下に、同一體の國家の融合された以上は、内地人が鮮人に對して、同情を表し、人類愛を以つて、臨まなければならぬ道理であるのに、此點に於て、日本人に缺ける所甚だ多く、事々に差別の眼を以つて、鮮人を見ることの甚だしきは、幾多の事實に徴して、之を知るに苦しまないのである。私は左に自分の體驗した實際談を掲げて、讀者の一讀を仰ぎたいと思ふ。

私が一昨年朝鮮に參つた時、大邱から慶州に一遊することゝ爲つた。慶州は新羅時代の舊都であり、古蹟遺物の見る可きも

の多々あつて、内地人の遊覽する場所の一ツと爲つて居る。大邱から早朝自働車を走らせて、慶州に行くまで、三四の川があり、川幅は廣いが、水は左程に深くなく、淺瀬を縫つて行ければ、自働車の乘切りは何でもなかつた。然るに歸途或る川を乘切らうとした時に、運轉手が淺瀬を見誤まつたのか、其れとも往路に淺瀬であつたものが歸路には何かの都合で、水嵩が加はつたのであるか、私の自働車は幾丈もあらうと思はれる川の眞中で、進退の自由を失ひ、車輪の半ばは川砂の内に埋まり、氣のせいか、瀬は次第に早く爲り、車輪は段々川に埋まり行く趣きであつた。運轉手は鮮人であり、車内に私と同乘して居るのは、十七八年間朝鮮で生活した内地人で、私の爲めに案内の勞を取つて吳れた紳士であるが、此紳士と鮮人運轉手と何か朝鮮語で聲を合せて、四邊に釣魚をしたり、網を曳いたり、又は逍遙して居つた鮮人を呼び集め、彼等の力を藉りて、漸く自働車を淺瀬に押出すを得た。自働車の附近に集まり、脚を水に浸して、勞働した鮮人の數は二三十人にも上つたであらうか。兎に角彼等が働いたればこそ、私共は自働車に安座した儘、川を越さするを得た次第であつたが、偖自働車が無事に陸地に着いた時に、朝鮮通の日本紳士は一枚の紙幣を群がる鮮人に與へて、其儘自働車は全速力を以つて歸途を急いだのであるが、其際私は彼等鮮人の面上、聊か不平不滿を訴へる表情のあることを認めたので、車上で朝鮮通の紳士は先刻幾何の報酬を鮮人に與へたかと問うた所が、大枚五十錢であつたと云ふことであつた。二三十人の鮮人に水浸しの仕事をさせ、而して一方は川中に立往生をする苦艱を免かれて、其報酬として與へられた金額の五十錢と云ふに至つては日本人が鮮人を遇するに、如何なる心事を以つてするかの一斑が窺はれるのである。是れは私が偶然に出會した一例であつて、他に日本人が如何に淺き心を以つて、鮮人に臨んで居るかの例が多いかも知れないが、兎に角日本人としては今少し大國民の襟度を以つて、朝鮮人を愛撫する考へを持たなければ、如何なる文化的施設も遂に一片の空文に歸するの外なきに至るのである。

思ふに歐洲戰後に歐洲の一角に起つた民族自決主義なり、小國獨立運動なりが、朝鮮人を刺戟して、種々の反日本的感情を釀成するに至らしめたことは論を俟たないが、然も其裏面に於ては鮮人に定職なく、生活の安定を缺く者があり、又職業に就いて孜々營々勤勞に勵んでも必ずしも總督政治の下に、有形的生活の方面に何等著しき改善を見ない、却つて煩瑣なる束縛を受けることが相重なり、鮮人の或る者を驅つて、排日運動に關係せしめる事情なしとしない。加ふるに内地人から冷なる侮蔑

的眼光を投げられ、又時に虐待を蒙ることありとすれば、温良なる可き鮮人まで、誤まつて不逞鮮人に化し去ることも亦怪むに足らないのである。今日では流石に外國宣教師の如きも、殊更に總督政治に反抗し鮮人を煽動するようなことは殆ど絶無であると云つて、宜しい位に爲つたと云ふ話であり、鮮人の獨立運動の如きも、亦一笑に付せられるの外ないであらうが、眞實彼等をして日本人と同一體の國民たらしめるを得ない以上は、日韓併合の如きも、結局一片の空文に歸するに至るのである。其れには日本としては、朝鮮人に職業を與へ、内鮮人同等の待遇を認め、生活を向上させ、是等の目的を達するに就て、總て人類愛の念を以つてすることを要する。武斷政治や、警察政治の弊を脱して、文化政治の標榜さるるに至つたのは、確に一進歩である。而して今や支那に向つても、我國の文化事業に關する施設の行はれんとするに至つた以上は、國籍を同じうする朝鮮人をして文化の德に浴せしむ可きことの必要の支那人に對するよりも　更に大であることは、日本國民の牢記す可き所である。

六　内地に歸りての感

朝鮮の荒凉たる山河を眺めてから、一夜を關釜間の海上に過し、下ノ關に上陸して、内地の山河に接すると、今更らの如く我國の耕耘の行き屆いて居ること、工業の發達して居ることに意を傾けざるを得ない。三田尻邊の鹽田や、其附近の水田陸田は誠に箱庭のようであり、德山の海軍煉炭所は汽車の窓から眺めたゞけで、其壯觀を偲ばしめるし、更に藝備地方に進めば進むだけ、往昔大藩の下に治政の効果が擧げられた跡は今日に至るまで、頗る明であつて、沿道到る所の停車場に於て、舊藩時代に奬勵された物産を呼賣りする聲の喧しきことを以つて、其一端を知るを得るし、之に加ふるに原料品の産出、水陸運の便利勞働者の集中等の關係から西洋輸入の工業の經營されて居るものも亦此方面に乏しとしない。我國の内地に於て、今日主穀農業を營んで居る地方は米價の動搖甚だしき結果、農家の經濟に變動を蒙り、時に疲弊の嘆を免かれないし、又時に小作爭議の頻出を見ることなしとしない。然しながら既に工業が起されて居れば、其地方は必ず大小の都會と爲つて居り、又農村であつても養蠶業製絲業が經營されて居れば、是等事業の利益に依つて、農村の經營を謀ることも出來る。私は近來中國諸地方の内部を視察する機會を持たないが、山口縣や、廣島縣が米國出稼人の送金に依つて、如何なる程度の富を吸收して居るか、思ふに其些細なることを斷定するを得ないであらう。朝鮮人の内

地に移住した者が能く其送金に依つて、郷國の繁榮を期するを得るかどうか、一個の疑問に屬する、

之を要するに内地と朝鮮とを比較して、異なる所は前者に於て産業の種類の多方面に亙るに反し、後者に於て其單調なる一事であつて、而して此事たる、政治の善惡にも依つたのであらうが、又國民の勤惰に支配されたことの少なからざりしことを知らなければならぬ。唯我内地に於て近年の如く經濟的秕政が横行し、恐慌後三年餘の歳月を經過して、尙ほ不景氣の一掃されず、随つて景氣の恢復されないと云ふが如き狀態を以つてして、果して國民に善政の効果を樂ましめるを得るかどうか、地方に産業が繁昌して居り、地方の山嶽の蒼く、河川の淸き今日に於て、吾人の深く考へなければならぬ點であつて、私は京城から釜山下ノ關を經て、品川に到着する約五十時間の多くを通じて、思を此問題に向けざるを得なかつた。今此事を付記して、讀者の判斷を仰がうとする次第である。



露國承認問題

露國承認不可無し

法學博士　米田實

一

後藤子とヨッフェ氏との間に始められた日露非公式交渉は、靜平だつた池沼に巨石を投下した程の大波紋を惹出した、幾回かの對ヨッフェ氏懇談で、或程度の見極めが附き、更らに加藤首相との相談で、市長の椅子を投出してまで、一身を此問題に沒頭することとなつた後藤子の得意や、蓋し想見するに足るものがある、尤も子は此頃貴族院等政客に對し、その最初のヨッフェ氏招待時分から今日あるを見極めて居たやうに說いて居るが、之は恐らくは稚氣と衒氣とに富む子の殊更らに聰明振らんとする脫線的言動であらう。無論氏の胸中幾分斯くの如き希望を存し無かつたとは言はぬが、眞相としては寧ろ子が一寸した機會に偶然やつた招待と言ふが適當であらう。而してその招待が近頃になつて「日露協議開始」の機會を造つたのは、予の爲めにも、國家の爲めにも大に欣賀を値する所である。

併しコウ言ふ枝葉的事項の論議やら本問題と後藤子の政治的將來の關係などは、洲沙夏螢よりも多い我が「內政の論客」連に委せて置き、予は玆に少しく對露問題殊に露國承認問題につき所思の一端を披瀝して、江湖先達の批評を乞ひ度いと思ふ。

二

今回の日露交渉には種々の問題があるが、露西亞承認問題は確かに其最も重大なものゝ一でなければならない。

人或は曰ふ「ヨッフェ氏は近頃左迄承認を熱望して居無い、大體兩國が對等的地位に立つて、對等的協定をすると言ふ根義さへ失はれねば善いと考へて居る」と、所謂對等協定云々の意義解釋は姑らく之を措き、ヨッフェ氏が承認問題を輕視して居る道理は斷じて無い、蓋し今日の露國は成程多數の邦國から承認を得て居るには違ひ無い、殊に地境相接する所謂隣接國は大抵露國を承認して居る、卽ち歐羅巴大陸を見ると波蘭國、ラトウイア國、エストニア國、リトアニア國、獨逸國等之を承認して居り、亞細亞大陸を見ると、波斯國、土耳其國、阿富汗斯旦國之を承認して居る、併し乍ら此等は孰れも現在の處では、第二流の國であり、世界の强國として國際政界に重きをなして居らぬ、その重きを成して居るものは、何と言つても英米佛伊日の五大國であるから、少くともその一國たる日本を動かし之より承認を得、以て大國間に一の出口を造ると言ふことは、勞農露國の最大希望の一たること疑ひを容れ無いのである。

然り、是れ露國の最大希望の一である、從つて日本が之を容るゝに於て、始めて露國をして我が希望する幾多の條件を容れ得せしむるものなるを忘れてはならない、我れ此條件を容れずに、我が條件をのみ彼に强ゐんとしても、成功を齎らさうとは思はれ無い。是れ實に日露の眞實な國交回復が承認にあらざるを得無い所以である。

然らば則ち日本は果して今日の露西亞……レニン、ツロツキイー等過激派を中心とし首腦として居る露西亞政府を承認して可なる乎と言ふに、予は大體差支無いと考ふる一人である 殊に之が日露の親善の機會を造り、日本の利益となる可きに於て、益々然るを感ぜねばならぬのである、

三

何が故に露國を承認して可なりと言ふ乎、他無し、その第一に擧げねばならぬのは、現レニン政府が過去五箇年半繼續して來たこと現在に於て十分安固なるを證明して居ること、並びに共政治振りが共産主義者の理想に甚だ遠いだらうが、實際政治の側から見ると、進展し來る局面に對し驚く可き程の適應性を示し、不思議な位の廣大で自由な融通性を發揮して居ることが則ち是れである。

一九一七年十一月七日露都の再度革命以來、レニン、ツロツ

キー等の政府は持續して居る、其間他國を見ると、伊太利ではオルランドー内閣倒れ、ニツチ、フアクタ、ボノミ、チヨリチー諸内閣等度々更迭して居り、佛蘭西では、クレマンソー内閣先づ倒れ、ミルラン、レーグ、ブリヤン諸内閣を經て、今やポアンカレーの執政に會して居る、英國のみはロイドヂヨルヂの政權掌握長かつたけれども、之も昨秋沒落してボナロー氏の出廬を見た、獨り此間に露國のみ、過激主義の政府その者の存續長きのみならず、レニン、ツロツキー等の個人的勢力及びその内閣も齊しく存續し、猶ほ倒壞の色を見無い、是れ果して或人達が思惟する如く、一般露國々民が低能で且つ受働的で、政治上の努力を吝む爲めであるか、或は反過激派の面々即ち社會革命黨立憲民主黨諸黨派が小異を捨てゝ大同に就くを得ぬ爲めであるか、予は此等の觀察にも相當な眞理を包藏すると考へるけれども、矢張り過激派政治存續の最大なる理由は同派の政府が他の露の團結に比し、露國を支配する力を、より多く備へて居るに在ると思はねばならない、此處に所謂レニン政府の「安固」の秘密はあらねばならない、而して此過激派の露國支配力を解剖すると、其要素が他の文明諸國では許さる可き所では無いが、愚昧無知な、無教育なもの多き事實上の半開國「露西亞」は止むを得無いと思はるゝ『力の支配』の意義を解すること、(ケレンスキー執政は之を解せ無いので失敗したのである)、又た必要の前にはその根本主義たる共産制度をも、多くの場合に於て緩和し、所謂新經濟政策で私有財産制度、資本主義の前に叩頭拜伏するをすら避け無い融通性にあることは言ふ迄も無い、

併しその事情は孰れに在るにせよ、露國現政府の安固即ちスタビリテーが事實であるとしたならば、其承認の主要資格は存すると言はねばならぬ、勿論緩和せられたにせよその共産主義は、我國官民が嫌忌する所であらう、然かも嫌忌するからとて我は之に武力干渉を試みて、一億六千萬の露國民を舊態に復せしむる覺悟がある乎、コルチヤツク、セミヨノフ援助失敗の教訓を見た今日、最早や不干渉の外無しとするならば、換言すれば所謂内政不干渉てふ國際的通義が今日露國にも適用せらるゝの外無しとするならば、此時我日本の執る可き道は、斷然露國と絶交して何等の交渉と接觸とを造ら無い乎、若くは之を承認して之と國家的交際を結ぶ乎の二者、一を選ばねばならぬ、然るに絶交は、兩國の地理的關係、歴史的關係、經濟的事情に顧みて、到底「常態」と目す可きで無い以上、我は自然彼の態度如何に依つては承認を覺悟して之と國交再始に力む可きではあるまい乎。

四

世上の論者、或は我が露國承認が我が對米英佛關係を累する無きやを憂惧し、我國は承認問題で英米佛と歩を同一にす可しと主張するものがある、是れ考慮して未だ審かならざるもの丶所論と言はねばならない。

成る程我日本は華盛頓會議に於て、四國協約其他で英米佛と親善關係を深うした形式はある、又た今後外交上是等諸國と提携する場合も少く無からう、然かも露國承認問題には之は何の關係も持ち得可きではない、第一米國は將來露國を承認するに決して英佛と協議すること無く、單獨にやることは疑ひ無い所である。彼はゼノア會議にも參加し無かつたのである、次ぎに英國はと言ふと、一九二一年三月英露通商協定を造つたときも、何等日本若くは佛國と協議もせず、單獨にやつたのであつた、而して當時右通商協定が公式承認に向つて歩を進むる楷梯たる意味を含んで居たことを思ふと、此承認問題は決して各國協調でやる問題では無い、唯だ昨年四月伊太利ゼノア會議の場合に於ては、英佛伊日白等共に協同的態度を執ることになつて居たが、同會議は失敗し、その後の海牙會議も駄目に終つた。今日、英佛伊白も承認問題で何等拘束を受けて居無いと共に、我日本にも何等の拘束は無い、又た何等拘束を受く可き約束も出來て居無いのである、米英佛等が別段日本と協同して進退しやうと考へて居らぬのに、日本のみ偏務的に彼等若くは其一二の後塵を拜せねばならぬ必要が何處にある、コウ云ふ思想は不案内な地の河川を渡るに、一人では渡れなく、他人の渡つた後か、他人と一緒にしか渡れ無いと言ふ臆病で、事大主義の小外交官氣質を暴露して居るものと言はねばならない。

殊に此點で世人が記憶せねばならぬのは、第一、日本の對露關係が、米佛英のそれと全く事情を異にして居ると言ふことであり、第二、日露通商が英佛等の關係多く歐洲方面に影響すること少いことである。

五

先づ日本の對露關係が米佛露等のそれと異ると言ふ點の一は、第一日露は隣國で即ち接壤地域であることにあらねばならない、先づ米國は弘き海洋を隔て半球を異にし、洲を異にして居る、英國もその屬領印度にも幾分の關係があるけれども、その中間には阿富汗斯丹國があり、此方面の通商關係は微弱極まるものであつた、若しそれ英本國と露國とが地理的に相遠いことは辯ずる迄も無い所である、佛國に至つても歐大陸の東北西

南の兩極に位ゐして如何に曲辯しても隣國だとは言へ無いのである、之と比して我國が隣國として露西亞に密接なことは、誰も首肯し得る所である、それ丈け利害關係又た大なるものあるは言を俟た無い所であらう。

のみならず、領域狹小で、原料品に乏しい日本としては、自然原料品供給地としても世界陸地六分一を占むる露西亞、否寧ろその内の四百八十萬方哩の西伯利に注目するは止むを得無い所であらねばならない、蓋し米國はと言ふと、面積三百七十萬方哩國内に種々の產物があり、自給自足の能力が十分に備つて居り、英國は本國こそ小さいけれど、歐、阿、亞、米に散在する一千萬方哩の殖民地は優に原料品供給の力があり、佛國は前二者程では無いけれど、面積二十萬方哩の本國の外に、原料品產地として四百八十萬方哩の亞細亞、阿弗利加殖民地がある、然るに面積二十四萬方哩の日本には之が無い、止むを得ずその經濟的生活の基礎を支那なり、露領西伯利なりに仰がねばならぬのであつて、此點は今日よりも將來に於て頗る甚しからざるを得ぬ立場に在る、思ふに此點や慧眼なる英米佛の政治家が夙に觀取して居る所であらねばならない。

加ふるに日本の露國承認若くは日本の對露親善の先驅けは、その實際的影響に於て英佛を累するものでは無い、そは何故乎と言ふに、日露接近の實際的影響は地理上の關係から何と言つても西伯利方面に制限せられ英佛に近き歐露には及び得無い傾向を有して居るからである、殊に今日に於ける日露の接近は、直ちに貿易上の大活況を促し得る譯では無い、その貿易が多少振ひ始むるには違ひ無いが、何分病根は露國の經濟狀態に在る、他國が承認したからと言つて、その國の產業が急に勃興するものでも無ければ、輸出品が激增するものでも無い、況んや貨幣の價格が安定するものでも、爲替上の變動が止むものでも無い、是れ現に今日迄露國を承認した諸邦國と露國との貿易が大に振つて居る譯では無いことを見ても分らう、從つて日本の場合も同一であり、卽ちその通商は或る制限せる區域に於ける制限的の活動以上には急に出で得無いことを記憶せねばならぬ、從つて我が國民の對露活動は、差當り我國に近き西伯利東部で、或程度の事業を開始し、經濟的地盤を造ること、狹い範圍の商業をやり始めること位であり、眞の大活動が可能となるのは、矢張り、露國の眞の經濟的回復、將來英佛米等の承認を見た後であらねばならない、是を以て之を觀るも、日本として此點で英佛に氣兼ねせねばならぬ必要はあるまいと思はれる。

以上で、露國レニン政府の安固の問題と英佛米等諸國との協調問題は略ぼ論じ得たと考へるが、茲に恐らくは第二の問題が起るだらう。即ち「英佛等の事業家連でも、露國の起業、投資を有利と見たらば、必らず共歩を進める筈だ、これが躊躇して居るのに、日本人のみ無暗に猛進するのが善いであらう乎」是れである。

此問題に對して、予は答へたい「英佛人等と日本人とは、其境遇と立場が違ふ」と、

如何に其境遇と立場とが違ふ乎、と言ふに、英佛人等が今日對露活動が出來ぬのには、二つの事情がある、先づ彼等を二分すると、一は是迄露國に事業をやつた人々と、一は是迄露國に事業をやつたことの無い人である、ところが是迄露國に事業をやつたことの無い人々は、始めての事だから、今日の如き經濟的不安の露國に他に先ちて仕事を始めるには何だか心配で躊躇して居る、次ぎに是迄露國投資及起業に經驗ある面々になると、多少活躍の見當も附くのだけれども、彼等を阻止して居るのは、例の從來の債權財産權問題（即ち債權否認、損害賠償問題）である、蓋しレニン政府は執政の初め、外債を否認し且つ私有財産の沒收を行つたので、是等英佛白事業家は大打擊を蒙つたので、先づ此債權の承認沒收財産につきての賠償問題が彼等に執つては死生の大問題である、之が解決せざる限り、彼等としては又露國に投資する氣にはなれ無いのである、ところが此點になると、日本人は全然立場が異る、英佛の如く、各々六十億圓若くはそれ以上の大貸付をなし居らず、戰時中二億餘圓を貸したが、之は今や政府の手に移つて、私人の貸附金は七千萬圓位ゐしか無い、左れば之れは大した問題で無く、問題は寧ろ今後の投資及起業の安全にあるのである。

ところが、彼等の所謂仇敵たる帝政時代ケレンスキー時代の債務を認めないと言ふレニン政府も、今後の債務やら、外人の私有財産は之を認め、彼等から與つたコンセツションならば又た之を認めると說いて居る、ソコデ今後日露國交回復したならば、今日でも比較的最も共産主義の實現に遠かつて居る西伯利に於ける日本人の起業投資は左したる危險は無からうと思はれる。

從つて露國承認は自然日本にも利益を齎らすに違ひ無い。

七

併し斯く言へばとて、予は無條件に露國を承認せよと言ふのでは無い、要は露國側でも十分に日露親善を圖り、東洋に於て經濟的に提携する丈けの誠意を有し、此立場から目下の樺太問

題等日露國交の阻害物を滿足に解決し、懸案を一掃し、新らしき平和の舞臺に兩者協力して立つの基を造るの覺悟が無ければならない。若し樺太問題其他懸案が解決せ無いとすると、日露間の禍根は依然殘るのであり、從つて西伯利の日本人起業投資も何時危險の運に會するかも分らない、前にも言つた通り承認を與へたと言つて、實際上の貿易の發展の方は急に望まれず、好影響は寧ろ西伯利の邦人起業投資に在るを考ふると、是非此際彼等を不安にし、彼等の上に悪影響を及ぼし易い樺太其他難問題を我が承認問題に於ける理解と相並んで解決し一掃することは、兩國々交上の一大良策であらねばならない、

予は斯くの如き思ひを以て、後藤、ヨッフェ兩氏の交渉の成行を檢し度いと思ふものである。

露國承認の意思と方法

杉森孝次郎

日本は、それのサガレンに於いて、またそれの朝鮮に於いて、ロシヤと接壤してゐる。されば、日本とロシヤとの關係は、英、米、佛等がそれぞれの自國とロシヤとの間に存する關係に比して、はるかに切實にして近緣だ。日本は、この日本自身の特殊の事情を、それの外交の上に讀みいださなくては、無反省の批難をまぬがれない。

極東ロシヤと日本との間の關係を、今日のやうに、敵對とも判然せず、友交とも判然しない狀態に抛棄して置くことは、第一に兩國のためにとらない。そこには、浪費と、破壞と、すくなくとも朽廢とが支配的結果として現はれる。經濟、政治、文化の各方面にわたつてだ。けれども、極東ロシヤは、それの政治的中心をヨーロッパロシヤのモスクワに持つてゐる。日本の接壤部位のロシヤとしての問題の解決は、モスクワ政府を相手とするほかに絕對にそれの方法を示さない。先づ全露を承認する意味に於いてモスクワ政府を承認するでなくては、日本は、それの北西隣との關係を――この關係は、現在に於いては、

すくなくとも無政府狀態に委されてをるのだが――どう救濟することもできない。

日米は、それゆゑに、英米佛等に日本自身の事情を打ち明け、相携へてロシヤを承認すべく誠實なる努力を開始すべきだ。その努力を重ねたる最後の結果として、場合によつては單獨承認を斷行するの餘儀なきに立ち到るかも知れないが、それはまだ今日の具體問題ではない。今日の具體問題としては、日本の立ち場から考へた露國承認の價値、それから、英米佛等の立ち場から考へたそれを、できるだけ周到に算慮して、共同承認の目的に邁進することが先要だ。また主要だ。

露國を承認することは、經濟組織や政治組織に於いて、現在の露國の觀念と實行とを、その承認する國自身が、模倣することをも、採用することをも勿論決して意味しない。露國を承認することは、露國に對して、公然の友交關係に進み入ることだ。眞の友交關係に於いては、獨立と勸告とは完全に保障される。自他相知つて、互いに、與ふべきものを與へ、取るべきものを取るかたちの協力が友交だ。その「もの」の種類は、精神的及び物質的諸方面にわたつて限りもなく豐多だ。

そも〳〵、わたくしのいはゆる國際友聯主義は、今世紀の殘餘に發達すべき最大生命の一でなくてはならん。その興味點から考察しても、日本は極東ロシヤと親善し、また極東ロシヤと親善すべくヨーロッパロシヤと親善し、さらにまたヨーロッパロシヤを橋わたしとして廣く歐洲全體とつながる用意あるを當然とする。

日本とロシヤとは、二十年前に、日露戰爭が戰はれたことがすでに意味する通りに、また、もつと前にも、いはゆる北門の脅威が且つ隱れ且つ顯はれたといふ歷史がすでに〳〵意味する通りに、いまに始まらぬ隣接兩國だ。このロシヤに對して、日本が、英米佛等の贊同を誘起して、國際對策を確立するに努力することは、決して滑稽でも、なま意氣でも、身のほど知らずの、がらにない僭上沙汰でもない。かへつてさうしないことは日本の無智、無策、無勇、そして、內外に對する不德義をさへも意味する。

「すべての人人を愛せよ、わづかの人人のほか信賴するな」といふことばがある。國交に於いても、これは、一金則たるを失はない。ロシヤ人は、經濟的生產にかけては技術に缺け、政治的本質能に於いては行政に短なのではないか。組織と方法はかれの得意とするところであるまい。品性に於いても、無際限の雄大性を有すると同時に、ずぼらなところ、だらしないところ、ずう〳〵しいところをさへも、かれは、他のいく多の美點

と共に同有するではないか。ロシヤと國交を開始し、またそれを保進するにあたつて、日本は、及びどの國といはず、この途にも注意と努力の餘地なきをえない。

およそ、革命時代に際しては、立法が注意のまととされる。けれども、單なる立法は單なる約束だ。行政が履行だ。行政は、それの本質上、かならずしも立法の如くに理義透徹たるをえない。行政は知識であるよりも意思だからだ。動作だからだ。本能、習性、事情、熟練等でもあるからだ。新ロシヤの知友たるためには、それの行政を精察する必要が殊にある。

新ロシヤの國際信義を問題とするにあたつては、しかしながら、ソヴイエツト政府以前の契約を、ソヴイエツト政府が履行したかどうかをばかり見ずに、ソヴイエツド政府になつてからの契約を、ソヴイエツト政府自身がどの位忠實に、あるひは不忠實に履行したかを見ることが肝要だ。

産業未開發、未成達以前の狀態から、またデモクラシイ未着手、未遂行の狀態から、ロシヤは、現在の社會組織へ變革したのだから、新ロシヤの觀念と實行とは、この關係から考察しても、歐米の多くの文明國や、おくればせの日本でさへもの、參考になる點とならぬ點とを當然有するのだ。

しかし、なにがなにであらうとも、日本が、オムスク政府援助を企てたこと、及びそれの連絡としての過去最近數年間の日本の對露行動は、明白に過失であつた。

尼港問題全忘、サガレン即時撤兵は、日本さへ自認すれば濟む問題だから、日露兩國間の利害關係、德義關係を全體的に、大處、高處から考慮して、協力による雙方の大利益を追ふ新發達の濟及び犧牲とすべき性質及び事情の事柄だ。釋然として舊怨を忘れ、大協力にむかつて相互の意思を新たにする方が、功利的にも、道德的にも、どれほどか立派だらう。通商、利權等の新目的は、それを手段としてでなく、それと同時に、併行的に實現されべき性質及び事情の事柄だ。

三億の債權の如きは、實質的には、日本にとつては、苦もなく忘却しうべき性質及び事情の事柄だ。額も知れたものだし、民間の支出でもなかつたらしいといふわけによつてもだ。しかし、形式的には、對露債權をもつと重大な性質及び事情のものとして有する友邦に對して輕薄に落ちぬやうに用意すべき關係を、わが對露債權は持つ。具體的方法がそこにも發明されなくてはいかん。

要するに、日本は、この際、露國承認の意思を先づ現實に持ち、その意思を達するための方法を考案すべき必要にせまられて、客觀的には、ゐるのだ。

露國承認問題

法學博士　堀江歸一

後藤子がヨッフェ氏を我國に招致してから兩三月を經た。ヨッフェ氏が勞農露國の眞實の代表者であるかどうか、斯人と交渉した事項が直に日露兩國交渉の基礎と爲るのであるかどうか、是等の事は私共局外者の與り知らない所であるが、後藤子にした所で、今日の地位に居る以上は、雲を掴むような事もしないであらうし、此點に就ては、同子を信用し、ヨッフェ氏との交渉が直に日露兩國間に於ける正式交渉を開く豫備であるとして、議論を進めると、私は我國經濟上の利害に訴へて、露國と通商條約を締結し、經濟通商の關係を復興することを以つて、急務と考へる、而して露國の立場から云つても、永く經濟的鎖國の狀態に居るが如き、到底事情の許さゞる所である以上は、日露兩國が互に胸襟を開き、幾多の故障は勉めて之を排除して、或る一致點を發見したならば、誠に兩國の幸慶であると思はれる。

然しながら斯る最後の目標に達するには、種々の困難があるようであるが、其困難なるものゝ實質は果して如何なるものであらうか。第一日本が今日諸外國の意嚮如何を問はず、單獨に露國を承認し、續いて露國と通商條約を締結することは、諸外國殊に英米佛伊の諸國に對して、信誼を失うと云ふ説がある。斯の如きは正に我國の外交が所謂追隨外交であつて、毫も我國獨自の方針に依據するを得ないことを明にするの說と云はざるを得ない。如何にもゼノア會議に於ても、海牙其他の會議に於ても、露國代表者の態度は甚だしく驕慢であつて、露國舊政府の債務を負擔しないのは勿論、聯合諸國に向つて、逆に損害賠償を要請し、遂に諸國をして露國承認を不可能ならしめた。當時日本も聯合諸國と態度を一にしたに相違ない、又露國の態度に對して、日本國民として、不快の感を懷いたのであるが、此事が今日に至るまで、一の貴緣を爲して、日露兩國の間に領土上の關係に於て、互に相接近しつゝある事情あるに拘はらず、兩國單獨の交渉を不可能ならしめるものであるか、又一旦我國が

露國と單獨の交渉を開始し、時に英米伊佛諸國の希望に反する所業に出でることが直に我國と諸國との間に、溝渠を築く所以と爲るのであるか、抑も亦斯る溝渠が築かれる恐れありとして、之を恐れて、我國は終始一貫對露方針に就て、歐米諸國と離れる能はざるものであるか、共に私の了解する能はざる所である。

由來追隨外交ほど、我國民を苦しめるの甚だしきものはない。曰く協商、曰く聯合、是等の美名に依つて、一國自由の行動を阻止し、妥協曖昧裡に他國と事を共にせしめようとする。老大國として地歩の鞏固なる國は此事勿れ主義を以つて可なりとしよう、斯の如きは到底我國の堪へ難しとする所である。昨年であつたか、我駐英大使林權助男は列國の面前に於て、土耳古の爲めに治外法權を撤去するの議を唱へ、外交界に大なる刺戟を與へたと云ふ報道があつた。私は當時追隨を事とする我外交界に一の林男あるを得て、非常に愉快を感じた次第であつた。對露問題にしても願くば時弊を打破したいと思ふ。

第二、我國が露國を承認し、露國と通商を開始するに至つたならば、自然兩國民の來往交通の密接と爲る結果、思想上の聯絡をも生じて、我國を擧げて、赤化せしめるに至ると云ふことは、我國に於て一部國民の憂慮する所であつて、軍隊の力で赤化的勢力を掃蕩しようとしたことも、我國に對して思想上の鎖國を行はうとしたことも、今又露國の承認、通商條約の締結に反對することも、總て右の憂慮に基いたものとしなければならぬ。然しながら私を以つて見るに、始め露國が極端なる資本主義から共産主義に移らうとした過渡時代に在つてこそ、露國の爲す所には如何にも無理な所業もあり、斯くては露國自ら國を破壞し、民生を危殆ならしめるものと認められたが、今日に於ては露國に行はれつゝある經濟政策の基調は共産主義に非ずして、寧ろ國家資本主義に屬するのである。即ち穀物に對する國家專賣制度は千九百二十一年三月以來廢止され、農民は自己の收獲した農産物の内から、一部を現物の儘、租税として國家に納付するが、其殘餘は自由に市場に向つて、賣却することが出來るし、一旦資本家の手から國家に收用した事業の内で、個人に返還されたものもあり、外國資本家は露國内に於て、私有財産に關して、寛大なる取扱を受けるが如き諸點を擧げたならば、露國の經濟政策が其根柢に於て、如何に變更されたか、其一斑を解するに難しとしない。國家資本主義の如何なる點に背む可き所があるであらうか。此主義こそ、從來私有財産と自由競爭とを經とし緯として作り上げられた經濟組織の下に生ずる弊害を排除し、緩和する効果あるものとしなければならず、資本

の國有に代つて、寧ろ共產主義の行はれることを以つて、露國に於ける一の特色とする。隨つて我國一部の國民が國家資本主義の何ものたるか、又共產主義と如何なる點に於て異なるかを確かめず、國家資本主義を蛇蝎視し、共主義の行はれる露國と交通す可からずと云ふが如きは、偏頗の甚だしき議論であつて、斯の如くして資本主義の牙城を固守せんとするは、僻見も亦極まれりとしなければならぬ。

第三、次に露國承認に對する反對論は從來露國勞農政府の諸外國に對する態度に誠實を缺くことの甚だしかつた一事に存する。其外債義務の廢棄を要求したり、又一方に國內に於ける騷亂發生の原因を總て外國の煽動教唆に歸し、自國內政の不始末は全然之を閑却して　諸外國に向つて露國の負う債務を遙に超過する賠償金を要求するが如き、其最も甚だしきものである。思ふに露國の斯る態度たる、其承認問題が全然架空の案件であつた間は、或は外國の意嚮を探る材料にしようとか、或は自暴自棄の極、已むを得ざる所に出でたとか云ふ理由を以つて、之を辯護するを得たかも知れないが、承認問題が現實の案件たらんとしつゝある今日に爲つては、私は切に露國當局者に誠實なる態度を持することを望まざるを得ない。露國は共產主義を潤色し、改新して國家資本主義に推移したことに依つて、物資生產の狀況は或る程度まで改善したと稱されるが、斯く增加した生產物に對して、海外に於ける販路の求められざる以上は、國民生活に何等資する所なきは論を俟たない。共產主義であらうが、國家資本主義であらうが、其眞實の目的とする所は、民生の利益であつて、資本主義を壓倒するが如きは、單に民生の利益を擧げる方便の一たるに過ぎない。方便に離擬して、肝腎の目的を閑却するが如きは、賢明なる處置を以つて、之を目するを得ない。

若し夫れ、我國に於て露國との間に限られた範圍に於て、通商を行ふことは之を認めるが、露國其ものは之を承認しないと云ふが如き、何たる僻論であらうか、論者の迷へることも亦甚だしとす可きである。

國民外交と云ふことは、從來我國に於て屢々其說はあつたが、其實を見るを得るは甚だ稀れであつた。日露戰爭前、民間の識者が當局を鞭韃し、激勵して開戰の機運を釀成したのは、國民外交の一種とも見られたであらう。若しも今回の露國問題に就て、後藤子が民間識者の輿望を荷つて、露國承認通商開始の狀勢を作つたならば、茲に最も顯著なる國民外交の事例に接する次第であつて、後藤子が東京市長の職を　つて、國民外交の衝に立つたことも徒爾でない、無能なる外交當局者を刺戟し

た効果の大なるは、何としても之を認めなければならない。然し慾を云へば、官僚外交と國民外交とは聲息相通じ、形影相伴うものでなければならない。時には官僚外交を補助し、其力の及ばさる所を爲す意味に於て、國民外交の働く可き場合もあるであらう。然るに露國問題に就ては、官僚外交は國民外交に引摺られて、漸々彼岸に流れ付かうとする、何たる無定見、何たる腑甲斐なき態であらうか。國民外交の成功した瞬に、官僚外交の當局者の何の顔あつて、國民に對し得るであらうか。

資本主義の立場から

澤田謙

しばらく問題を失つてゐた日本の政界は、後藤子の東京市長辭職をきつかけにして、對露通商問題に視聽を集中することになつた。後藤子の投じた一石の波動は意外に大きい。當興行『大當り』といふところだ。後藤子にしても、ソフアにそり身になつて、葉卷の輪を吹く位の芝居氣はあるであらう。幕僚諸氏の得意以つて見るべしである。

エストニア、ラトヴイア、リツアニア、ポーランドとの修交條約締結に成功した『平和條約製造業者(ピースメーカー)』といふ、いともかしこき異名を得たヨツフエ氏にしても、大連會議、長春會議決裂だけでは、一寸故國に歸りにくからう。ピース、メーカアといふ名に對しても、またその平和條約によつて、資本主義國の『封鎖の鐵輪に穴を穿つた』ことを自誇してゐる手前にも、まことに相濟まぬわけだ。まんざら澁面をつくる筈がない。

後藤子の『國民外交』とかいふものがなくては、國交談判ができないと言へば、外務省に人がないやうで、はなはだ人聞きがわるい話であるが、『無爲而化』といふのは霞ケ關の傳統的政策である。外務省にしてみれば、年來の特色をますます中外に發揚したわけで、とにかく目出たし目出たしである。

いづれにしても目出たし目出たしである。ただそれが、われ等八千萬の國民と、ロシア一億の人民にとつて、はたして『目出た

し』であるか否か。それが問題である。日露修交問題は、私人と官僚の問題ではない。國民と人民との問題である。若し然らずんば、こゝに問題とする價値はない。後藤子が『國民外交』と自稱された所以はどうか知らないが、日露修交といふことが國民の生活に關はることの程度に應じて、その國民外交的價値はきまるのである。

私は一個忠良なる臣民として、この問題を考へて見なければならない。

□

赤色ロシアと白色諸國とが、斷じて絶交といふことは、まことにいはれなきことである。

サウエト政府が、その政權を樹立してからすでに五年。その動亂的革命期――『動亂的』といふのは修辭ではない。なぜなら現在なほ共産主義への革命期にあるとは、ボルシエヴイキの自稱するところであり、内的にも農民の靜かなる革命はまだ繼續してゐるから。――は半歳ならずして熄み、ヨーロツパ資本國の傭兵の包圍攻擊にも拘らず、サウエト政府はますます〱その基礎を鞏固にして來た。ロシア政府は、政治的には――すなはち他の資本主義諸國の政府が、安定を得てゐるといふと同じ程度において――安定を得てゐる。現在の資本主義的國家理論において、サウエト政府は『叛徒』でもなければ『交戰團體』でもない。完全なる立派政府である。

なぜ、それでは資本主義諸國は、この完全なる政府に對して、對等なる交際を否定するのであるか。答は簡單だ。それはサウエト政府が赤いからである。いや、赤いと幻想してゐるからである。

ボルシエヴイズム。革命社會主義。共産インタナショナル。それは聲である。宣傳である。われ等は赤い聲に對して、動物的戰慄を感じてはならない。現實に、サウエト政府の施政を瞰守らなければならない。

若しサウエト政府の實質が、それほど赤いとしても、一體赤と白とが握手してはならぬといふ理由は、私はいづこにも發見することはできない。一國の政府が、その施政方針として資本主義をとらうが共産主義をとらうが、それは各國政府の自由ではないか。夫權絶對の家庭と、妻權專制の家族とは、近所つきあひは出來ないといふのか。理論にしたら雲壤の差はあらう。事實にしたら五十步百步だ。

現代の如き社會狀態においては、いかなる資本主義政府といへども、幾分かの社會主義的施設をなさないではゐられない。またいかなる共産主義政府といへども、資本主義的臭味を脫す

ることはできない。しからば赤にしろ白にしろ、結局は斑である。現實においては多大の差を見ない。いや差を生ずることはできないのである。

□

われ等はいま文化の末路に立つ。社會は煩悶のうちにある。階級の分裂とその爭鬪とは、可怖ろしい勢で社會を内的に崩壞せしめんとしつゝある。

資本主義國の行ふ社會施設といふのは、要するにこの社會煩悶の所産である。妥協の結果である。おそる〳〵氣兼ねをしながら、共産主義へと近づきつゝあるのだ。

ロシアはその溝渠をとびこえた。そして共産主義を標榜して立つた。かれ等は赤旗の威力の下に、勇敢に社會施設を行ひつゝある。もはや何人にも氣兼ねする必要はない。……しかり『自然』に對して氣兼ねする以外には。

資本主義政府も、或る程度の財産制限は止むを得ないであらう。事實相續税または所得税の累進などの租税政策によつて、一歩一歩これに近づきつゝある。土地の國有、鑛山の國有、獨占事業の國有、運輸事業の國有、銀行の國有。これ等もまた止むを得ざるの數である。ある國はすでにその一部を斷行した。然らざるも漸次これに接近しつゝある。

共産ロシアの誇としつゝある諸政策は、資本諸國のすでに恐る〳〵歩みよりつゝある政策である。たゞわれ等がこれに歩み寄るについては、種種の過去の因縁がこれに邪魔をする。ロシアは性急にもこの絆を兩斷したのである。それだけのことに過ぎない。

私をして言はすれば、將來社會の目標は共産社會にある。問題はその道程にある。これに達する方策にある。現在のロシアが共産社會に達したものでないことは、サウエト政府の言明するところである。かれ等もわれ等と同樣に、共産社會への道程によるのだ。たゞその道程方策として、漸進か急進かといふことによつて、差別が生ずるにすぎないのである。

漸進是か、急進非か。これは急に決定さるべき問題ではない。國民性にもより、國勢にもより、時勢にもよる。しかしそれは問題ではない。漸進國には過去の因縁といふ重荷があり、急進國には生活の不安定といふ重荷がある。いづれにしても共産社會に至る道程は、しかく平坦ではない。

サウエト政府も資本主義政府も、ともにこの『憐れむべき旅人』である。重荷の種類こそ異れ互に苦を分つ僚友である。しからばなに故この僚友は、互に反目しあはなくてはならないのか。

□

理論としてでなく、現實としてサウエト政府の實際政策を見るとき、最も驚ろくべきことは、その破天荒なることにあらずして、その資本主義政府との著るしき類似である。

サウエト政府の一つの特色は、私有財産權の制限である。他の諸國が立法政策または租税政策によつて、漸次これに接近しつゝあるはすでに述べた。サウエト政府は銀行の國有を斷行した。しかしこれにしても、中央銀行は多く國有で、加ふるにその他多くの國營公營の銀行の增加と、その活動とによつて、銀行業も漸次社會化しつゝある。英國の鑛山が國有となる日は遠くあるまい。日本でも鐵道は大部分國有である。その他の獨占事業も漸次國營の方針に進み、然らざるも著るしい公共的制限を蒙りつゝある。共産ロシアの土地は一時國有となつたが、いまでは租借の形式で事實上私有權を認められ、天然物産税を課せられてゐる。小商業に至つては、全部私營を許されることとなつた。そして曰く、『經濟の高地を占有すれば、低地の管理は容易である』と。而して現在の資本主義國にして、『經濟の高地を占有』してゐない政府がどこにあらう。そして低地もつねに國家に管理されつゝある！

しからば兩者の現實上の差異は、要するに程度の差にとゞまる。ただその名が共産主義・資本主義と、互ひに相叛するにすぎない。そしてその名は、主としてボルシエヴイキの宣傳にすぎないのである。

われ等はあまりに永くかれ等の宣傳に欺かれ過ぎた。かれ等が『プロレタリアの獨裁』と稱するとき、ロシアの無智なる民衆が、すべて帝王の地位に上りたるかの如き感をなした。『すべての權力をサウエト』に呼ぶとき、ロシア人民の生活が、すべてサウエトによつて支配されつゝあるかの如くに思つた。しかし時日はその誤解の大部分を訂正した。暴露されたる事實は、サウエト共和國の實質が、大多數の資本主義國と大差なきことである。そして世界の『赤化運動』なるものも、またその實質が闡明するとともに、以前ほどに恐怖の念を世界に與へなくなつたのである。

□

この度の日露修交問題について、最も注目すべき現象は、これに反對するものが、赤化恐怖を名としなくなつたことである。(赤化防止團とかいふものを除いては)

現在の社會組織が、赤色ロシアとの門戸を開いたがために、一朝にして夢の如くに消え去るものと想像する人々に對しては、殆んど言ふべき語を知らない。かゝる人々は、社會組織を

蠟燭の火の如くに考へてゐるのであらう。もし一陣の風で消え去るやうな灯ならば、さう門扉を固くして守るほどの價値はなからうではないか。愚なりと雖、風前の燭を守るべからず。況んや社會組織はそれほど根弱いものではない筈ではないか。

帝國の外務省は、流石に赤化恐怖を口實とするほどの愚者ではない。しかし現在までの形勢では、なんとなく日露修交問題に、氣乘りがしないやうな形勢が見える。恐らくは大連長春の二會議に手を燒いたのであらう。

元來國際國家は、互に交際するのが本能である。非常の障碍がない限り、交際すべきものである。而してサウエト共和國の實質が、決してこれを障碍するの原因たらざることは、すでに述べたところである。しからば何がこの談判の開始を妨げてゐるのか。

曰く、すべてこれ從來の行懸りである。過去の因緣である。そして國家自尊心の體面論と、國際的の資本主義的驅引とにすぎない。日本が然るばかりでなく、ロシアがそれである。

□

ヨッフェ氏が後藤子を通じて外務省に提出せりと傳へらるゝ三條件とは、(一)兩國平等の立場で談判すること。(二)修交條約は普通條約たるべきこと。(三)サガレン撤兵の時期を決定することの三である。これに對して外務省は七ヶ條の要求をなしたと傳へられてゐるが、その內容は發表されてない。しかし從來の經過から見れば、(一)尼港事件問題の解決、(二)三億の舊債權の承認。(三)外人私有財産權の返還等がその主たるものとなつてゐるらしい。

これを要するに全部過去の因緣である。そして國家的體面論にあらずんば、國際的資本主義的驅引の發露である。日本がこれに固執するは無理ならぬとして、過去の因緣を一朝にして斷ち切つたロシアが、飽くまでこれにかゝりついてゐる理由を、私は解するに困しむものである。

尤も內實のところを見れば、兩國とも飽くまでこれを頑張るつもりではないらしい。サガレン撤兵問題は、尼港事件と密連するものであるが、これは兩國修交して後、徐ろに決定しても遲くない事件で、帝國政府としても、兩國が國交を恢復して、ロシア政府がサガレン地方に責任をもつことが明らかになれば、撤兵しないとは言ふまい。尼港事件の責任についても、兎角の批評があるやうだが、喧嘩兩成敗。いまさら互に頑張つて見たつて始まらないことだ。兩國政府もこの點は了解してゐるらしい口吻が見える。

平等の地位に至つては、言ふだけ野暮である。おそらく大連

長春二會議に對する愚痴であらうが、これは言ふまでもないこと。帝國外務省としても、強いて威壓を加へる底意はあるまい。それほどの悪辣さは、生憎缺乏してゐるやうである。

だから問題は要するに、三億の舊債權問題と、外人私有權の恢復問題だけである。若しロシアが飽くまで戰時債務非承認の主義を固執し、日本がその要求の主義を主張するならば その間氷炭相容るゝの餘地はない。ジエノア、ヘーグの二の舞である。

唯一の合理的暗礁はこゝにある。若し他の暗礁にひつかかつたなら、罪はいづれがかの不誠實 懸引のやりすぎにある。それはわれ等の問題外である。

□

戰時債權問題については、日露兩國いづれにも一應の理はある。

ロシアは言ふ。舊債務はツア政府の債務である。ロシア人民はその債務によつて、不利益こそ受けたれ、一文の利益を受けたことはない。ツア政府はわれ等の仇敵である。われ等は仇敵の債務を引繼ぐことはできないと。

むかしタレーランが、ウインナ會議において、英普墺露四國同盟の、フランス除外策に反對して啖呵を切つたことがある。

『同盟！ 同盟といふか。そもそも何人に對する同盟なるや。よもやナポレオンに對する同盟にはあるまじ。彼れはいまエルバ島に流謫されてある。またよもやフランス王ルイ十八世に對する同盟にはあるまじ。彼れは諸君の僚友として、ナポレオンを討滅したものではないか。若しいまにしてなほ「同盟」なるものがあるならば、予のこゝに在るは無用のことである。』

場合はちがふが、サウエト政府は、このタレーランの故智に學んだものである。

しかし債權國としては、日本はかゝる主義には贊成できないであらう。もとよりサウエト政府はツア政府ではない。しかし新政府が舊政府の債務を引繼ぐのは、これは國際法の常道である。若し強いて國際法を無視すると言ふならば、國際團體の一國として、とても交際することはできない。

主義とし理論としては、いづれも正々堂々たるものである。從つて二つの主義の上には、これを妥協せしむべき餘地はない。ただ外交のことは、決して主義と理論で決定すべきものではない。魚心あらば水心。

債權問題については、日本の立場は英佛のそれと甚だ異なる。その額も僅かに三億である。殊には日本もその金額を、直ちに仕拂つてくれとは言ふまい。言つたところで無い袖は振れぬ。これも要するに從來の因緣である。意地づくである。日本にし

てもロシアにしても、これまでの主義主張の手前、うかと後へは引かれぬわけだ。

この因縁と意地さへ、相方で折合がつけば、あとはどうにだつてなるではなからうか。

□

過去の因縁さへ片づけば、いづれロシア政府は、種々の貨物の購入を申込んで來るだらう。日露修交の最上の目的は、實はこれにあるのだから。ロシアの荒廢せる運輸と産業を復興するためには、實際他の資本國から必要貨物を買ひ入れるより他ないのだから。

それについては日本も、相當の代償を申込むにちがいない。北樺太買收といふ説もある。御交渉に應じないわけではないとヨツフエ氏が言つたさうだ。シンクレア會社の油田採堀權を、大分日本は頭になやんでゐる。その方面にもロシアは大ぶ色氣を見せてゐるやうだ。そのほか木材伐切權も問題とならう。こゝで話はいよ／＼具體化するとともに、懸引は國家體面論から商賣利益の問題になる。帝國會社とサウエト會社との商業取引となるのである。

商取引に體面論は無用である。三億の債權。安いものではないか、その位の金は、十ケ年賦か二十ケ年賦にしたつもりになれば、取引上でどうにでも片付くまいものでもない。

いづれにしても、國際上ではまだ資本主義的精神が横溢して居る。日本が然るばかりではない。赤色ロシアまた然りである。裸にして見ればさうなつて來る。國交とは通商といふことである。それが目的である。それ以外に目的はない。たゞ體面がこれを假面してゐる。兩國はたして假面をぬぐや否や。

□

理論は措いて問はない。その施政の實際においては、赤色ロシアも白色日本も、赤白の斑であつて、共産ロシアと稱せらるゝその實は、資本主義諸國と大した逕庭のないことは、すでに説いたところである。

さらに一歩を進めて國際關係に入れば、その交渉は、つねに資本主義的に進捗せしめられる。すべてが資本主義の立場である。會社と會社の商取引である。そしてそれがどの程度まで、兩國の人民の福利に關係があるか。私は最後にこう考へる。

日本の資本家が、殊に多くの政商が、新らしい投資物件に歡呼するのは見るやうである。かれ等は利潤増殖の夢を増すであらう。景氣は或は恢復するであらう。そして日本の一般人民は、果してどれだけの利益に均霑できるであらうか、

幾萬の勞働軍が、シベリアの雪深く送りこまれるであらう。

代材の汗は氷るかも知れない。油田採堀の土工は寒さと疲れに病むかも知れない。坑夫は日本內地の鑛山事情を復誦するであらう。そして日本の產業はます／＼發達し、國威はいよ／＼發揚される。そして一般人民は、果してどれだけの利益の分前を得られるであらうか。

謎をやめる。率直に言へば、人民の福利は、日露修交の成否如何に拘らず、內政の良否に從つて增減するのである。問題は國家が人民に好意を有するや否やにあるのであつて、日露問題に關するものではない。……と私は考へてゐる。

サウエト政府も、同樣の意味において、或はより以上の意味において、權力政府である。從つて一般人民、殊に大衆農民の福利は、政府の好意外に賴るところはない。大資本家は滅亡した。しかし國家は嚴存する。國家の施政如何が、ロシア人民の運命を支配するのは、止むを得ざるの數である。

すべてが資本主義である。殊に日露修交問題は資本主義である。資本主義の立場からのみ談判は成立し得べく、そして資本主義の立場によつて、その價値は判斷される。

國民と人民との關するところではない。

□

本誌の四月特大號に、私は『ボルシエヴイキとコオペラテイヴの對抗戰』と題して、政治型態の革命が、一般民衆の福利と沒交涉に成就されたることを說き、農村を中心とする大衆が、コオペラテイヴに集合して、その福利を自衞せる經過を報告した。そして最後に、『萬國の消費者團結せよ！』と言つた。

消費者が團結すると否とは、消費者の自由である。しかし若し團結せざるならば、かれ等の運命は、他人の好意に依賴する以外に、なん等の據り所を發見することは出來ない。それでもいゝと言ふなら仕方がない。日露修交の成功が、その效果を二倍してわれ等に見せつけるであらう。それまでの話である。

日露の修交すべきは自然の數である。いつまでも絕交するといふのは、過去の因緣に引きづられるに過ぎない。この意味において、その趨勢を促進された後藤子に對して、充分の謝意を表しなくてはならぬ。……それだけのことを言へばそれで充分だつたのだ。たゞ私一個としては、それがどこまで人民の福利に影響するか、そこまで考へて見なければ滿足できなかつたので、敢て蛇足を副へたわけである。

外交の實際的立場から

法學博士　林　毅陸

露國承認問題は實に大問題である。然し新たなる問題ではない。既に永き間論議され來りたる問題である。最近ヨッフェ氏我國に渡來し、後藤子爵熱心に此問題のために斡旋しつゝあるために、大に新なる注意と興味とを喚起して居るやうであるが、併し問題自體は勿論今更の新問題ではない。從つて自分としても今更特別の新らしき意見として云ふべきものもないが、只大體の感想を述べるとするならば、先づ第一に露國承認如何といふことは、既に數年來、論議され來りたる問題なるが故に、今俄かに騷ぎ立てる必要はないと思ふ。問題の中心となれる事柄は少しも變つては居ない。依然として、同一の軸の上に廻りつゝあるのである。何か新事件新問題にても發生したるかの如くに騷ぎ廻るべき筋合のものではない。且つ露國問題は列國の政治家が今迄度々手を燒いた所の難問である。如何にかして之れを解決せんとて歐米の政治家は種々頭を痛め、殊に歐洲に於てはロイド・ジョージを初めとし、一方ならず之れには苦心を重ねて來て居る。されど孰れも失敗を繰り返し、今日に至るも猶ほ未解決の狀態に在り、その取扱ひに窮して居るのである。或は經濟的の暫定協商を作るまでには運び得たるものもあるけれども、其狹き範圍に於ても甚だ不滿足なる狀態にあり、露西亞との關係甚だ變體を呈して彼我其爲めに苦んで居るといふことは各國を通じての事實である。されば我國の政治家が今日まで露國問題の解決に成功せずして居るといふことは敢て奇とするに足りない。我々は甚だ之れを遺憾とするものではあるけれども、總て相手あつての仕事であり、相手たる露西亞との話が順調に運び得べき狀態に達しないとすれば、問題の不解決又止むを得ざる次第であつて、決して之れがために日本の政治家が特別の不名譽を受けねばならぬものとは考へない。出來るものは出來るし、出來ないものは出來ないのである。即ち斯くの如く至難の問題にして、列國の政治家何れも苦しみつゝある程のものなるが故に、此問題を取扱ふに於ては決して焦せるべ

きではない。焦せるといふことは成功を期する所以に非ずして反つて失敗の基となる恐れすらある。日露關係を常態に復せしむる事は我々の非常に希望する所ではあるけれども、無理に焦せりたればとて出來るものではない。勿論此問題不解決のために我國は種々不便を感じ、大に困つて居るに相違ない。さりながら露西亞も亦非常なる窮地に在つて新局面打開のために一方ならず苦んで居るのである。兩國の間に國交恢復を許るに於ての誠意熟し、互に信義と尊敬とを以て隔意なく話し合ひをなし得ることゝならば、交渉の成立有望となる次第であるけれども苟も然らざる限りは日本のみ獨り焦せりたればとて何の役にも立つべきではない。

更に又露西亞の所謂過激思想を過度に恐怖することは無意味であるけれども、同時に其思想の中に面白い部分もあればとて、餘りに熱情を起し、之れに醉ひ、若しくは崇拜するに至らずとも、兎に角其面白き部分を喜ぶの餘り、感情的空想家に似たるかの如き狀態となり、一種のセンチメンタルの傾向に陷ることゝなるのは、甚だ面白くないと思ふ。露西亞人の新主張、新主義の中には、確かに面白い部分もあるであらう。また研究に値するものあるに相違ない。一般思想の發達の上より見て大に參考となるべきものもあるに相違ない。之れを研究し、之れを味ひ、之を參考となすといふことは勿論妨げないのであるけれども、之れを面白く思ひ、之れに共鳴するの餘り、着實に且冷靜なる判斷の力を失ふことゝなるのは、甚だ面白くないと思ふ。空想と感情との上に生活する文學流の人に對しては、敢て之れを問題とする考はないけれども、苟も政治を論ずる場合に於ては斷じて斯る種類の弊に陷入ることを避けねばならぬ。露國承認問題は確かに政治問題である、外交上の問題である。文學流の思想感情の、餘りに立入ることは適當でない。日露問題は兩國の利害を基礎として決定せらるべき現實の事務である。最も冷靜なる態度を必要とするものである。センチメンタルに流れて感情的の議論が加味し來るといふことは此外交問題を處理する上に於て第一の禁物であることを忘れてはならぬ。一體露西亞の過激派の主張中に面白き部分ありとするも兎に角今日まで過激派政府の爲し來れる處は無產階級の專制であり、多數露西亞人に對する少數過激派の橫暴であり、眞の自由の主義より見て、眞のデモクラシーの精神より見て非難せざるを得ない點が多々存するのである。我々は之れに對して濫に隨喜の涙をこぼす譯には行かない。假りに其中多少の面白き部分を含むとするも、夫れを喜んで感情的となり、其感情的の議論を政治、外交の取り扱ひの上にも及ぼさんとすることは甚だ誤つて居ると思

ふ。

さて然らば現在我々の面前に提供せられて居る此露國承認問題に就て如何になすべきかといふに、露國との交渉の成り行き如何に依ると云ふの外はない。先方が過激派政府なると否とは先方の勝手である。革命も亦先方の御隨意である。彼の神聖同盟時代に爲されたる如く、他國の革命を否認して之れに干渉するといふ如き愚を學ぶべきものではない。即ち過激派政府なるが故に强いて之れを極端に排斥せんと欲するものではないけれども、さりとて其過激主義を自國内に於て實行するに止めず、他國内にまで之れを宣傳し、種々の危險を與へんとするは甚だ迷惑である。之れは止めて貰はねばならない。露西亞が如何なる主義を採り、如何なる政府を組織するとも、其自由なると同時に、我國が如何なる主義を採り、如何なる組織をなすとも亦我の自由である。之れに對して露西亞より所謂宣傳の手段に依り危險なる干渉を被るとせば、非常に迷惑である。此の如き事は御免蒙ることに致さねばならぬ。又露西亞は他國に對する債務を守らねばならぬ。所謂國際信義を尊重せねばならぬ。亞國に對する債務は勝手に打ち消し得べきものではない。故に此義務を承認することが飽くまでも必要である。國家と國家との間に約束したることは國内の變動如何に依つて影響を受くべきものでない。今日まで過激派政府は此義務を認めないのである。是れは我々の飽くまでも反對せざるを得ない處である。又過激派政府は露西亞内に於ける外國人の財産を沒收して居るのであるが、之れ又容認するを得ざる不法である。共産主義を實行するに際し、自國人民の財産を沒收すると否とは我々の關する限りでないけれども、外國人の權利を蹂躙して其財産を沒收するに至つては甚だ亂暴である。日本人にして此沒收を被りたるものは餘りないやうである。然れども白耳義の如きは之がために大なる損害を被り、其賠償が重大なる問題となつて居る。日本としては此沒收に關係するものは餘り重要なる部分を占めて居ないやうである。さりながら今後日露間に通商を開くとすれば日本人の私有財産の權利を承認せしむることが必要である。此私有財産の尊重について保障を得ざる限り、安心して露西亞に於て通商に從事することは出來ないのである。日露間に完全なる通商條約を結ばず、假りに暫定協商に依つて經濟關係を開くことゝするも、猶此點に就いて相當の保障を必要とするのである。尙日本としては別に尼港問題なるものがある。此尼港事件の責任を糺さねばならぬ。其解決を圖るの保障としてサガレンの一部を占領して居る。此問題に就いて相當の協定の成らざる限りは日露關係の常態に復することを妨げざるを得な

い。尼港事件のための占領に就いては種々の議論もあるけれども、兎に角最初此占領に要する經費が議會に要求された時孰れの黨派も同意を表して居たのである故にその占領其物に對しては反對はない筈である。兵數を幾何にすべきやは便宜の問題であるけれども、兎に角占領をなすといふことは議會の承認を經たることである。露西亞の責任を糺すに於て相當の解決を得ざる以上全部の撤兵の困難なるは云ふまでもない。右の如き次第なるが故に露國承認問題に對する自分の意見は甚だ簡單にして、日露交渉の結果右の諸點に就いて協定の成立を得るならば卽ち承認を實現し得べきであると思ふ。其相談の纏まらざる限りは何とも致し方はないのである。日本側に於ても誠意を以て彼に對するを要すると同樣に、露西亞側に於ても亦誠意を以て我に對することが必要である。懸け引きや、ブラツフはお互に愼まねばならぬ。そして我々としては初めに述べたる如くに特に騷ぎ立つることをなさず、焦せることをなさず、センチメンタルに陷れることをなさず、冷靜にして愼重なる態度を以て此問題に當りたいと思ふ。日露關係が常態に復せられ、兩國民が何等の故障不便なく完全に相交り、相提携し、以て彼我の利益と幸福との增進を圖り得る時節の一日も速かに來らんことを熱心に希望することは勿論云ふまでもないのである。

何故承認に躊躇するか

文學博士　三宅雪嶺

日本の軍隊は、露國の軍隊と戰つて成功し、其人民と戰つて失敗した。明治三十七八年役は日本の名譽であり、大正年間の西伯利出兵は不名譽である。出兵そのものが不名譽でなく、出兵の經過が不名譽に終つた。八億圓の金は惜しくないとしても折角出兵しながら、敗軍の如く歸つて來たのは何と云ふ事か。何故に正々堂々と凱旋しなかつたか。敗軍もせず、將卒が堪へ難い困難に堪へたのに、何時歸つたか知れぬやうにしたのは、何人の責めに歸するか。之を辨解するには、事情に暗く、馴れ

ぬ事をしたと云ふの外はあるまい。成程、音に聞えた露帝國が脆く俄に瓦解するなど、殆ど夢としか思へず、豫想の狂つたのも無理がない。歴史上かゝる事が少なくなく、時として意外の事で惑ふを免かれぬ。之れで新たな經驗を得、悟つた所あらば無駄にならぬ。

　ところで、今尙ほ露國承認問題について惑ひつゝあるのは、事實上に認めた所を、如何に公文上に現はさうかと云ふにある今はもはや事實上に勞農政府を認めて居ればこそ、幾回も會議を催し、何とか通商條約を結ばうとしたりする。政府を承認せずして、何者と交渉するの意か。漁獵問題が略ぼ決定したとするのも、モスクヴに於ける政府の通牒を得ての事である。承認を拒むのは、明かに承認したと公布するのを避けようとするのではないか。信義を缺いた政府を承認しては、筋道が立たず。我が體面を傷ふと考へて居る。眞にさう思ふ所もあるが、何處となく事情が許さぬやうに考へる所が多いでないか。米英、佛伊が承認しないのに、我れ獨り承認するのが穩當を缺くと考へる所もあらう。政府筋で明かに之を發表したのもある。米、英佛伊で承認すれば、現に體面と云ふ所を構はなくてよいか。國際上の事はさう云ふ小矢釜しく穿ちくるものでないとするならば、それはそれとして置き、露國に對しても、何とか名義が付きさへせば可いと云ふのでないか。他の國と違つて、日本の債權は三億圓。背筋立てゝ爭ふ程でもなく、之を棄てゝ置かぬと云はしたいのが重になつて居らう。

　露國でも小さな事に拘泥し、樺太より撤兵せよなど、捨てゝ置いて可ささうな事を云ふが、つまり双方共に力みたいのである。力むのも必要あつての事とし、それで何時まで續く積りであるか。何處でもさういふ力み方ばかしして居るか。話をつければ何時でもつくのでないか。尼港事件について、日本で何程露を責めやうとするのか。露では貴國か軍隊を以つて守つて居る所に事が起り、尙ほ當方の責めになるかと反問しようとする。パルチザンは亂暴に相違なけれど、其の亂暴を氣遣つて出兵して居つたのである。兵が足らぬならば增すべきであり、增し得ないならば防護區域を縮少すべきである。何れをもしなかつたので、禍が起つた。出兵して居らねば露政府の不行屆きを責め、何處までも責めに任じさすべきであるが、さうなつて居らぬ。それで爭ふならば、ヨッフェ氏とでも議論して見るが可い。水掛論になつたまゝで離れようとするのか。それで通商だけ開き、承認を保留して置かうと云ふのか。

　日本に世界政策といふのが必要ないか。あるとすれば、別に解決すべき途あるでないか。十八世紀の末、佛國革命が勃發し

奈破翁一世の下に新政府が出來た時に、承認を拒んだ國がいろいろある。十九世紀の後半、奈破翁三世倒れ、大統領チエルの下に新政府が起つて、承認にかれこれ云ふ者はない。それだけ時代が變つて來た。其後半世紀してまた變つて居る。日本では初め勞農政府を敵とし、チタ政府とかいろいろのものを承認しようとした。日本で承認した方が消滅し、承認しない方が存續して居る。そこで信義問題が出て、債務をと云ふやうになつた。他の諸國と一致するやうになれば便利に相違なけれど、何處迄も同じにせねばならぬか。前には權力ある者が人を屈伏し己れの思ふ通りにせねば許さなんだ。エスを信ずる者をしてエスの繪を踏ましめた。今は法律の範圍内で自由を許し、更に何人をも一個の人格として認めようとする。國家もさうであつて、以前に我が國家で是認する通りにせねば、許さうとしなかつたのが、國内の事は國内で爲すが儘にし、國格を重んずるやうになり來つた。それでも國際法の範圍に於いてする事、猶ほ法律の如しとするが、或る程度までさうであり、たゞ、國際法に疑問が多く、偏に拘泥する譯に行かぬ。勞農政府が何でも我が思ふ通りにし、少しも他國と步調を合はさねば、世界の平和の妨げにならうが、今はそれほどでなく、戰前の債務を負ふが、戰時の債務は共通で負へぬと言ふに至つた。露國が如何なる困難狀態に陷つたかを察したならば、頭から不義呼はりするのも酷でないか。

他國の事を何處までも我が思ふ通りにさせやうとするのは困難であつて、甚だしい故障なければ、その政府を承認し、細かい事は其の後に協議すべきである。獨、墺伊三國の同盟は鞏固と知られたか、戰時中伊が同盟を脫し、獨、墺と戰つた。政府を承認したとて、何でも平穩にせねばならぬ事がない。不都合と見れば、何とでも爭ふべきである。さういふ輕卒な事で承認してならぬと云はうが、前の日露協約が結んで直ちに消滅したのは、何と云ふ事か。西伯利出兵は果して熟慮の甲斐があつたか。この邊で政友會や憲政會や多くの新聞紙や、後に自ら氣付くやうな事がないか。何うしても氣付かぬ者もあらうが、さう許りではない。

何を承認するのか

法學博士 吉野作造

◎

ヨッフエ對後藤の政治劇を中心にして、昨今露國承認問題が頗る矢釜しい。併し一體何を承認しやうといふのか。承認と云ふ文字に依て理解さるべき内容の如何に依ては、既に事實上承認してゐるとも云へるし、又無條件で承認は出來まいとするに一應の理窟はあるとも考へられる。僕自身の私見としては、どッちにしても速に承認すべきだとは思ふも、併し世間の所謂承認論者の様に盲滅法に之を主張するものと同一視さるゝことは好まない。

◎

然らば承認といふは一體露西亞のどの點を承認するのか。

此問に對して第一に考へられねばならぬことは、現勞農露西亞の國家的統一の完成といふ事である。革命後大露西亞は一旦ばら〳〵に崩れた。政治的中心は其處にも此處にも出來た。前代の露西亞帝國に代るべき新國家は何處に在るのか分らなくなつた。處が之が此頃に至り漸く纏りが附いたやうである。殆んど前代の露西亞と同じ程度の領土が、前代に比して遙に複雑な形にではあるが、兎も角も纏つた組織に統一されたやうである。この事實を認めるかどうかが第一の問題でなければならぬ。若し露西亞の統一は未だ本當に固つては居ないと考ふる人があるならば、少くとも其人には承認問題は起り得ないが僕の觀る所では、我國朝野の目下の考は此點に關して最早何等疑ふ所がない様である。

次に詮議せねばならぬのは、現莫斯科政府を以て出來上つた勞農露國の有効にして且正當なる政府と認むるや否やの點である。我國の一部にはボルシェヴイズムを無性に毛嫌ひする所から、莫斯科政府を認めたがらず、五年六年政權を持ち續けたとて何で安心が出來るものかなどゝ放言するものもある。が併し我々は彼を措て別に何所に彼に代り得べき見込のある政權を見出すことが出來るか。今日の所莫斯科政府の制令は今や國內の各

部に普く及んで居るではないか。又彼と取りかはす所の國際上の交渉は、間違なく露國の全體を拘束することが出來ると認められて居る。莫斯科政府が今や中央政府としての資格を十分に具有するその事實は、北京政府の中華民國に於けるの比ではない。ボルシエヴイズムを好むと好まざるとに拘らず、之れ丈の事實は到底認めずばなるまい。少數の頑迷者流を除いて、我國の輿論は此點に付て大した根據ある異論は有たないやうである。

斯くして我國の輿論は、概して（一）勞農露國の統一國家としての完成と、（二）莫斯科政府の正當且有効なる政府たることとの二點をば事實の上に承認して居ると謂つていゝ。故に殘る所は此事實を法律上に移していよ〳〵國際交渉の相手として概括的承認を與ふるや否やの點に繋るのみである。

（八）

日本政府は過般貿易事務官の交換に關し莫斯科政府に或種の交渉を試みた。そこで人或は曰ふ、是則ち法律上の承認を暗默に與へたものではないかと。僕曰くさうではない。理窟を捏ねる様だが、法律上の承認とは元來國際交渉の主體としての概括的承認を謂ふので、特殊の事件に就き個別的に交渉するだけの場合は含まない。而して此兩者の功果の實際上の差異は、後者の場合に在ては問題になつた當該事件について丈交渉し、又其結果として出來た取極の範圍内に於てのみ權利義務の關係を生じ、其他に就ては又元の白紙狀態に還へるのに、前者の場合に於ては取極めた條約等は勿論、その他一般の國際法規慣例に基いて友誼關係は恒久的に存立すると觀らるゝ點に在る。此間の區別を混同してはいけない。

斯くして我々は事實上の承認と法律上の承認（即ち國際團體の一員として承認し、一切の國際法規慣例に基く權利、義務の主體たることを容認すること）とを分けて考ふる必要を見る。而して今次の問題に於ける承認を後者の意義だとすれば（僕自身は差支ないと信ずる者だが）世上の無條件承認反對論にも相當の理由はあると思ふのである。

◎

一つの新しい國が出來た時、假に其國から要求があつたとして、他の諸國は之に承認を與ふべき義務はあるか。理窟を捏ねれば之にも色々論ずべき點はあるが、疑のない點は、漫りに承認を拒むの無意義なことである。法律上の義務でないとしても少くとも相當の條件を具備せる以上之に承認を與ふるは徳義上の義務だといふに間違はない。只此際吳々も注意せねばならぬことは、未だ條件の具備せざるに輕々の承認を與ふ可らざることである。然らば其條件とは何かと云ふに、國家統一の完成と

有効正當なる政府の確立に外ならぬ。而して勞農露西亞は前にも云つた如く此二條件を具備せることと最早疑を容れぬ。左すれば我々は最早露國の承認を躊躇すべき理由はないやうだが、茲に圖らずも一つの豫想外の出來事が起つて、此點に關する在來の國際法上の思想を大に動揺することゝなつたのである。承認問題が矢釜しくなつたのも畢竟之が爲めだ。

在來の國際法は、國際關係の主體として承認さるべき國家に唯二つの條件を要求する丈けであつた。二つの條件の何たるかは前にも述べたから復た繰り返さぬ。所が昔は此上に更にもう一つの條件を加へたのであつた。それは基督教國たることゝ云ふのであつた。斯くいふと如何にも異教厭迫の臭が濃く、排他的謬想の露骨な發現の様に聞へるも、其の眞意は必しもさうではない。詰り國際團體の一員として親愛友誼の關係を持續する爲には、生活の理想に於て、自他交渉の各種規律に於て、大體共通する所なくてはならぬといふ考に基くのである。人を殺してはならぬと考へる者と、人を殺すを賞美する者とは、到底同一社會に棲息することは出來ぬ。我國昔時の切支丹伴天連は盛に蓄妾の罪を責めた爲に西南諸大名から嫌はれたとやら。孰れの立場が正しいか別問題として、餘りに道徳法律に關する根本の思想が違ふと、一所になれぬと云ふは已むを得ない。之と同じ理由で基督教國に限ると云ひ出したものであらう。之を曲解して異教國に對しては國際法の指示に拘らず我儘を働いてもいゝと云ふ意味だと誣ゐるものもあるが、本當の意味はさうではないのである。だから立派な學者にして最近まで斯の説を唱へた人も尠くはなかつた。併し段々假令基督教國でなくとも、生活の理想はさう著しく相違するものではないと云ふ事が分り、且つ此一條件を存することが非常に異教國の反感を挑發するので遂に之は矢釜しく云はぬ事になつた。但し時には生活の理想に可なり違ふ所もないではないので、此の限りに於ては別に例外を設けることにした。即ち宗教を主要條件とせざるを一般の原則とし、而して實際の不便は治外法權其他類似の例外的規定に由て之を避けることにしたのである。治外法權の制度は其後多少濫用された嫌はあらう。併し之を設けた主意は前述ぶる所に外ならないのであつた。

孰れにしても、今日の様な時勢となつては、何處の國でも、又宗教が何であれ、生活の理想はさう大して違ふものではない。と云ふ前提の下に、國家の承認に對しては、かの二條件の外、何物をも立てぬことにしたのである。夫にも拘らず治外法權などゝ云ふ例外的制度を認めた所を以て觀れば、生活の理想が可なりの程度に違ふものある場合には無條件に之を國際團體

の一員として取り容れる譯にも行くまいといふ要求が、如何に裏面に強く働いて居たかを想像することが出來る。

之れ丈けの事を念頭に置いて、さて露西亞承認問題に臨むと在來の國際法理を以て單純に之を片付け得ざる所以は、直に明白となるであらう。

◎

在來の國際法は、國家の承認に對する前提要件は只二つだとした。併し斯く斷定した所以は、生活の理想に關する世界的大同を豫定したからである。生活の理想に於て、殊に其の最も重要なる方面につき、飛んでもない變つた主張をする異分子はまづあるまいと觀たからである。此の豫定が事實間違ない間は、在來の國際法は其儘で通る。けれども若し事情が變つて此豫定がひつくりかへる事となると、古い狀態の上に根ざした國際法理も亦當然に變つて來なければならない。而して勞農露西亞の出現は、正にこの國際法理の變革を促すべき一大異常事ではあるまいか。

何故かといへば、勞農露國では(一)帝政時代の諸條約の無效を主張する。(二)同じく帝政時代並に、戰時中の債務を承認しない。(三)内外人のすべてに對し私有財產權を否認して居る。約束した事に拘束されない、借りた物は返さず、有つてる物は取り上げるといふのだから、率然として之を聞けば、我々の從來の思想とは丸で正邪の判斷を異にする樣に見ゆる。今日までの歷史上には隨分變つた考の出現したことはあるが、斯んなにまで判斷のうらはらになつたことは餘り多くない。斯ういふ考で傍若無人に押し渡らうと云ふ者を、どうして我々は無條件に友達として受け取ることが出來やうか。之が即ち英佛邊の承認反對論の立場で、僕も一應の道理を之に認むるに躊躇しないのである。

◎

尤も露國のこの立場を目して國際信義を蹂躙するものと謂ふてはいけない。露國が約束も守らず借りたものも返さぬといふを不都合とするは我々の立場からの判斷である。露國の立場から云はすれば、正しい約束は飽くまで守る、正しい債務は必ず拂ふと聲明して居るのである。約束は守るべし債務は償却すべしといふ道德上の義務其のものに背かうと云ふ考は彼に於て毛頭ないやうだ。故に彼が之から約束する所、之から借りた物に付ては、十分責任を負ふと信賴して差支ない。僕も此點は疑を挿まない。昔の條約を守らぬといひ昔の債務を拂はぬと云つたからとて、今後も當にならぬ不義不信の輩だと決めて仕舞ふのは、餘りに早計だと思ふ。

然らば何故舊條約舊債務を否認するか。之は正しく取り結ばれたものではないからである。舊條約は官僚と富豪との便宜の爲に民衆の利福を無視して取り結ばれたものだ。舊債務亦然り。一文だつて民衆の利福に向けられたものはない。民衆は國家の主人である。一時官僚富豪の簒奪に遇ひ暫く住家を占領されて居つた。一時的占領に乘じて彼等は全く自分の利益の爲に右隣りに云々の約束をし左隣りに云々の債務を負つた。而して今や民衆は彼等を逐つて其住家を恢復した。その時主人公たる民衆は之等の約束債務に對して何故に一々責を負はねばならぬか。況んや債權者乃至相手方は皆善意なりと推定し得ざるに於てをや。と云ふのが露國の言ひ分である。此の議論に僕は全部贊成すると云ふのではないが、之も一つの見解として傾聽する丈の價値はあると信ずるのである。舊條約舊債務は凡て斯う云ふ種類のものばかりだから否認するといふ。併し理論としては、單に舊時代の取り極めだから否認するといふに在らずして、民衆の利福を顧慮しないといふ點に彼等は標準をおくのである。故に若し舊條約舊債務の中、少しでも民衆の利福の爲にせられたものありとせば、而して又其證明が成り立つとせば、彼等は必ずや其の部分に對する否認を撤回して新に其限界の責任を負ふ旨を宣明するに相違ない。故に詮じ詰むれば、露國の爭ふ所は機械的に劃せる時期の前後に依て責任の歸屬を定めんとするのではなくて、舊時代の條約債務の成立の基礎に疑を繋け先づ其正否を判別し、其上にて責任の歸着を定めんとするに在る。徒らに國際信義を無視するのでは斷じてない。本當の信義の何處に在るかを爭はんとするのである。之れ丈けは如何にボルシエヴイズムを嫌ふ人でも明白に認めて掛らねばならぬ所と思ふ。

以上主ら條約と債務とに付いて語つたが、私有財產權に付ても同樣のことが云へる。

要するに露國の主張せんとする所は、一言に約すれば、國際的正義の觀念に關する新解釋の宣明に在ると謂つていゝ。彼の見解が我と異り其の結果我が少らず不利益を蒙るからとて、濫りに彼を不信義呼ばはりするのは寧しろ醜態だ。彼の言ひ分に啓發されて我々が自ら在來の傳統的思想に深く反省するを要するものがないだらうか。露西亞の主張を無條件に是認することも出來ないが、兎に角こゝは堂々と君子の爭を鬪はすべき境地だと思ふ。彼の立場を適當に理解もせず、只漫然彼を承認すべしとする雅量や又英佛に構はずやつてしまへとする所謂自主的態度やは此際必しも必要でない。彼の頑强なる如く我も亦十分洗練されたる思想をきめて、一歩も枉げず、十分彼と論爭して新なる國際的正義を確立することは、寧ろ今次の機會を利用し

て我々の爲すべき所ではあるまいか。

◎

もう一つ勞農露國を承認するに付て問題となるのは、彼方の世界的革命の宣傳である。そも〳〵彼等の立國の根本主張からいへば、所謂國民主義は其の尊重する所ではない。されば露國に於ける民衆革命の成功だけで彼等は決して滿足して居るのではない。彼等は揚言して曰ふ。我々は世界の被搾取階級に代つて搾取階級に戰を宣し、先づ我が本國に於て第一の火蓋を切つたと。果して然らば露國に於ける彼等の行動は、啻に露國民としての行動ばかりでなく、世界の民衆の名に於て其の爲すべき事業の一つを先づ露西亞に於て決行したものに外ならぬ。詰り露國に於ける革命的運動は、彼等の本務の一端で、之からの仕事は山程あると云ふ譯なのだ。從て又莫斯科政府は國際政治上の一單位として露西亞の政府たると同時に、更に進んで世界を彼等の理想通りに改造すべき全人類的運動の自稱首腦部といふべきものでもある。是れ露西亞が世界顚覆の陰謀を企つと言はるゝ所以である。之を猶太人の秘密結社に連繫して荒唐無稽の臆說を流布するは、一笑にも値せざる滑稽事だが、併し所謂世界的革命の宣傳を丸で根據なしといふのも當らない。只之を非常に危險なものと觀るべきや否やは別に精密に攻究すべき所だと思ふ。軍國主義と資本主義で固つて居る國からすれば成る程危險なものに相違ない。世界民衆の名に於て其の剿滅を期すといふのが彼等の最後の目標だからである。併し又翻つて彼等の立場からいへば、斯くして各種の民族は皆不當の桎梏から救はるゝのであるだから、世界の民衆は却て皆自分達を歡迎すべき筈だと云ふことになる。自分達は滅ぶべき階級からは敵視さるゝ。けれども新に興るべき階級に對しては飽くまで本當の友たるを期するといふ。之にも僕は一應の理窟はあると思ふのである。

彼方の主張にも一應の理窟ありといふのは、一面に於て我々の軍國主義的又は資本主義的の政權組織に、退いて大に反省し又大に改革すべきもののあるを意味するのだ。彼方の主張に惑きて根本的革命の即時決行を可とするや否やは問題だとして、たゞ之を一概に危險視し、蛇蝎視し、一歩も近接せしめざらんとするは、亦餘りに我方の不正を押し通すの嫌なきか。彼の主張の何處までが正しきやを吟味し、以て我方の改善の參考に供するは、時務を知る者の怠つてはならぬ所であらう。要するに之等の點に就ても我々は彼方と堂々君子の爭を鬪はす餘地は大にある。徒らに危險呼ばゝりをして近接を避くるは決して賢明なる態度ではない。

併し政府としては（露國の目して以て軍國主義資本主義の政府と見做す所の政府としては）自分を頭から否認して掛る相手方を承認する譯には行くまいと考ふる人もあらう。或る程さうだ。承認といふことが相手方の立場を全部是認して恒久的の友誼關係に入る事だとすれば、夫れは出來ない相談だ。が、斯う云ふ意味の承認なら、日本の方で出來ぬばかりでなく、露國としても日本を認むる譯には行かない筈だ。故に承認を右の様な意味に限定するなら、始めから問題にならぬのである。然るに露西亞が既に頻りに我方に承認を求め來るといふのである。して見ればその承認と云ふのは、彼我の獨立の立場を相互に尊重し我彼を傷けず彼亦我を攻めざらんことを前提とするものと觀なければならぬ。即ち條件付の承認である。英國は露國承認の一條件として英國領内に於ける赤化宣傳を愼むべしの一項を提出したと新聞に見えるが、之も同じ性質のものだ此條件の裏面には之にも拘らず宣傳をやれば假借せぬといふ意味を含むは當然だ。我國がヨツフェの自由を現に或點に於て拘束して居るいは亦この觀點から見るべきものである。又浦鹽官憲が加賀美事務官を拘禁したのも、其適否は別問題として、右の條件の相互的なるを許せば怪むに足らない。正式の承認には至つて居ないが兎に角之等の事情は今後の承認問題の考察に大に參考となるものである。要するに露西亞には露西亞の立場がある。露西亞だけでは何をやつてもいゝ。只之を日本でやることは許さぬ。日本には又日本の立場がある。日本だけでは何をやつても構はない。只露西亞に往つて同じ筆鋒を振り廻せば彼の刑律に觸れるのは勿論だ。其當事者が一私人たると官吏たるとは問ふ所でない。加賀美事件に付き苟くも國家の代表者に指を染むるとは怪しからぬと憤慨する人もあるが、丸で思想の違ふ間柄では之も已むを得ないと思ふ。故に相互に宣傳をやらぬことにしやうか、又はやつた以上國家の代表者だからとて用捨はせぬ、ドシドシ自國の法律を適用するぞといふ様な條件を附することは必要だらう。さうしさへすれば、兩國相互に承認し、其間に交通を開いたとて、少しも差支はなかるべき道理だと思ふ。若し夫れボルシエヴイズムの宣傳そのものを危險だとして露國との交通開始を阻まんとするの説は、かの天主教の禍患を説いて法王廳との使臣交換を拒んだのと同じく、ヒステリツクな低能的将迷だ。ボルシエヴイズムの恐るべき所以は國交開始の如何に由て消長するものではない。ボルシエヴイズムを恐るべしとするの考に對しても僕に別種の説あるが、假りに恐るべしとしても之に對する方策は自ら他に在ると思ふ。

◎

承認問題と關連して實際上また大に考ふるを要するは、彼と交渉するの緊急の必要が目下實存するや否やの問題であるが、之は餘りに分り切つて居る所だから今は論述を省いて置く。相手方がどんな種類の人間だらうが、之に交渉しなくては埒の明かぬ問題は澤山ある。今までは何處に掛け合つていゝか分らなかつたが、此頃漸く中心點が明となつた。が不幸にして之がまた實に嫌な奴、此方の思ふ通りにならぬ奴だといふ譯である。こゝで問題が起るのだが。徒らに感情の昂奮するに任して輕卒に事件を取扱つては結局損だ。冷靜なる攻究を要する所である。僕の考の要點を約言すると詰りかう云ふことになる。

(一)無條件で承認する譯にも行くまいが、左りとて承認の條件として、(一)舊條約の遵守、(二)舊債務の承認、(三)私有財産の尊重などを持ち出すのは飛んでもない誤りだ。禁酒論者に向つて先づ一杯呑めと強いるのでは談判の開きやうがない。

(二)若し夫れ尼港事件の責任の承認などを事前に認めよと云ふに至ては以ての外の暴論だ。理否の論辨を相手方に許さず、頭から當方の言分を承認せしめて其れから他の問題の交渉に入らうといふのでは到底物になる見込はない。

(三)以上の點は承認問題を決した上で更に論爭してきめていゝ問題だ。我々は彼等の立場の理論的基礎を諒とする。之と同時に我々の立場にも相當の了解を求めて可い。即ち斯くして相互的諒解を條件とするなら、彼を承認するに何の差支もない所だと思ふ。

(四)この緊要なる當面の問題を決するに方り、行き掛りに顧慮すること、古い國際法理に拘泥すること、露國の提唱する各種事項の新解釋に眼を掩ふこと、とは最も愼むべき要點だ。之に判つきりしなくては出來る相談も出來なくなる。概していへば新形勢に對する新着眼が談判に成功する唯一の骨子である。

山嶽の日本

大町桂月



一 富士の根の雪に見下す朝日哉

吉野山と云はゞ、世上何人も花の名所なるを知るなるべし。南朝五十年の遺跡なるを知るなるべし。村上義光父子の討死を知るなるべし。佐藤忠信の奮闘を知るなるべし。九郎判官と靜御前との雪の離別を知るなるべし。放たれたる虎となり給ひたる天武天皇の昔を知るなるべし。神武天皇創業の際の根據地なりしを知るなるべし。國文を修めたるものは、本居宣長が吉野山の水分(みくまり)神社の申子なるを知るなるべし。宣長の親は、水分神社に祈りて、宣長を生めり。宣長生長して幾度も吉野に詣で、水分山に雨は降らねど、父母の昔を懐ひて、袂を濡らせり。吉野の花をも見物したり。『敷島の大和心を人問はゞ、朝日ににほふ山櫻花』の名歌は、吉野山の生み出したるものなりと云ひても可也。

斯く列擧し來れば、吉野山の要領を得たるかと云ふに、否、未だ吉野山の要領を得ざる也。古き譬なるが、これだけにては、龍を描いて、睛を點ぜざる也。吉野山の睛とは、何ぞや。曰く、藏王權現也 吉野の藏王か、藏王の吉野か、吉野山は一帶の峯稜に、神社多く、佛閣多く、樓臺も、人家も相連れるが、その中心に、藏王堂獨り傑出して、一山を壓す。その藏王に三體あり。片足を擧げ、兩手を上下に揮ひ、天地を睥睨して、眼孔紫電を放つ。如何なる惡魔も降伏せざるを得ざるべ

く、世にも猛烈にして雄偉を極む。これ役行者が夢想に據りて作り出せる修驗道の本尊也。役行者は修驗道の始祖なるが、藏王を創造すると共に、吉野山を創開せり。吉野の吉野たる所以は、修驗道の本場なるに在り。換言すれば、藏王の山なるに在り。『これは〳〵とばかり花の吉野山』にては、吉野の山靈その餘りに無識なるを笑はむ。『歌書よりも軍書に悲し吉野山』にても、なほその淺薄なるを笑はむ。後醍醐天皇の吉野に南朝を立て給ひたるを、楠北畠の一族忠臣の擁護の力たりとのみ解釋しては、これ未だ歷史を知らざる也。當時吉野山には、宗信といふ絕代の忠僧ありき。同志の僧兵を率ゐて、後醍醐天皇を迎へまつれり。吉野の山僧主として、南朝の藩屏となりし也。嗚呼吉野何の地ぞや。神武天皇は吉野を根據として、大業を創め給ひぬ。天武天皇も吉野を根據として、大志を遂げ給ひぬ。唯獨り後醍醐天皇のみは劍を按じながら崩じ給ひて、南風競はざりき。されど、なほ能く南朝五十年の命脈を維持したりしは、宗信與つて功なくんばあらず。役行者も、藏王も、亦與つて還功ある也。近年宗信に贈位あらせられて、其墓も世に顯はれ、地下の枯骨新しく聖恩に沾へり。吉野に花を見て、南朝の昔を偲ぶもの、先づ藏王を拜せざるべからず。宗信の墓にも、一杯の酒を酹せざるべけむや。

二　虎杖や天をさること五六尺

修驗道は山嶽に修行驗得する一種の宗教也。之を奉ずるものを修驗者と稱し山伏とも稱す、九郎判官の一行が奥州落の時、山伏に假扮したりしことは、世上周知の事也。今の世、山伏の姿を舊劇に見るのみにして、日本國民は全く山伏といふことを忘れたるやう也。されど、修驗道は全く廢れたるに非ず。藏王堂を中心とする吉野山は狹義の吉野山也、今の大和高嶺とて、狹義の吉野山より熊野方面に連れる一帶の高嶺が、廣義の吉野山也。近畿地方唯一の高嶺也。その中心の大峯山に藏王の奥院あり。一に金峯山と稱す。年々この金峯山に登るもの、今も十萬人を下ざる也。なほ葛城山や、熊野の三山や、豐前の彥山や、伊豫の石槌山や、羽前の羽黑山、月山、湯殿山の三山や、陸前の藏王山や、加賀の白山や、越中の立山や、いづれも修驗道の山にて、登攀する者少なからず。富士山に富士講あり、新しく丸山教あり、木曾の御嶽に御嶽講ありといへども、修驗道の分派也。日本中の名山は、幾んどみな修驗者の開ける所に係る。山によりて盛衰あれども、修驗道の實は、諸所の山嶽に見る也。

役行者の流を汲める壽元、天平年間に、彥山を開けり。同じく役行者の流を汲める黑珍、延曆年間に羽黑山を開けり。葛城

山は役行者の弟子の義學が開きて修驗道の山となせる所也。然るに、承知年間、天台宗の寺門派なる三井寺の智證大師、吉野の大峯を攀ぢ、葛城山をも攀ぢて、二山更に生氣を加へたり。本山修驗派と稱するもの、茲に起れり。寛治四年白河法皇熊野に行幸せらるゝに當り、三井寺の長老增譽上人先達を勤めて、熊野三山の檢校に補せられたり。その後、行尊、覺讃、良瑜など、三山檢校を續ぎて名を顯しけるが、江戸時代となりては、聖護院宮之を續ぎて、本山修驗派なる天台山伏の首領となり給へり。同じ金枝玉葉の寛永寺宮は一種の人質となりて、東叡山に江戸の花を眺め給ひ、聖護院宮は飛ぶ鳥となつて、雲の上に逍遙せさせ給ふ。御入峯と稱す。天顔を拜して京都を出で、伏見の稻荷に詣でゝ宇治に一宿、長池を經て奈良に一宿、八木を經て土田に一宿、吉野に七宿、竹林院を經て安禪に一宿、これより愈峯中也。小篠に二宿、天河に一宿、洞籠川を經て小篠にもどられて五宿、彌山に一宿、深山に二宿、前半に二宿、沼田に一宿、葛川に一宿、玉置に一宿　切原に一宿、これにて峯中を出で給ふ。本宮に四宿、新宮に六宿、那智山に八宿、那智の大瀑に籠らせ給ふ。本宮に戻りて一宿　近露に一宿、田邊に一宿、橋本に一宿、小松原に一宿、岩屋に一宿、紀三井寺に一宿、和歌山に一宿、伽陀に一宿、山口に午憩して貝塚に一宿、大阪に一宿、牧方、伏見を經て、凡そ二箇月にて京に還らせ給ふ。聖護院の衆徒は言ふも更なり、朝廷よりも送衆加はり。三井寺衆徒、大先達衆、坊官衆、富士行居組頭衆、末寺衆、八菅山衆、役山伏衆、年行事衆など相從ひ、雜色數知れず。大斧、小斧、笈、閼伽桶、長刀、米櫃、挾箱など前後に相連り、法螺を吹き、錫杖をふりたて、隊伍堂々として、大名の行列などの比すべくもあらず。切原より山口に至るまでは、紀州領の事とて、紀州藩にて敬意を表し、代官や郡奉行をして始終接待せしめたりき。今や聖護院は存して、宮はおはさず。山門長へに鎖して、白雲空しく徂徠す。

天台山伏の外に、眞言山伏あり。當山修驗派と稱す。貞觀延喜の間に、理源大師出でゝ、之を開けり。醍醐の三寶院が其本也。なほ天台山伏にも眞言山伏にも屬せざる山伏あり。山伏にして剃髮せるもあり。摘髮せざるもあり。普通の俗形なるもあり。篠懸、結袈裟、頭巾、法螺、最多角念珠、錫杖、金剛杖、笈、肩箱、引敷、脚半、閼伽桶を山伏の十二道具と稱す。檜扇、柴打、走繩、草鞋を加へて、十六道具と稱す。今の世山嶽を攀づるにも、これだけの道具を變形すれば、事足る。篠懸、結袈裟は、筒袖の服也、雨外套也。閼伽桶は水筒也、魔法瓶也。引敷とは、熊や鹿の皮にて、休息する時に之を敷くもの也。

也。蘆にて間に合ふ場合もあれど、地濡ひては間に合はず。今の登山者引敷の用意を缺くもの多し。柴打は斧なるが、鉈か鋸かにて間にあふべし。檜扇は普通の扇にて可也。啻に暑さを拂ふのみならず、蚊蟲を拂ひ、焚火の際にも役立つ也。走繩は麻繩也。懸崖を上下するに用立つ。法螺は今の喇叭也、呼子笛也。山中にて一行を集合するに便利也。猛獸を追ひ拂ふべし。熊多き北海道の山嶽を登攀するには、殊に必要也。今の登山者この用意を怠るを以て、霧中相失して、彼此互に困頓し、終に慘死するに至る也。

修驗に類して、更に平易にしたるものを、巡禮とす。修驗を硬派とすれば、巡禮は軟派也。修驗は山嶽に難行苦行し、巡禮は平地に難行苦行す。西國三十三所は山城、大和、紀伊、河內、和泉、攝津、播磨、丹波、丹後、近江、美濃の十一國に跨る。坂東にも三十三所あり。秩父にも三十三所あり。秩父の三十三所は一つ多くして、三十四所となり居れり。これ西國と阪東とを加へて、百の數に充たせる也。八十八所は四國が本家にて、東京八十八所、知多八十八所、相馬八十八所、多摩川八十八所、豐多摩八十八所あり。三十三所と八十八所とは巡禮に屬す。時に山あれども、深山に非ず。概して平地を行く也。三十三所の本尊は、觀音也。八十八所の本尊は弘法大師也。禪宗その他眞言以外の寺にて、別に大師堂を置くもの少なからず。古來大師多けれども、大師と云へば、今や空海の異名の如くになれり。日蓮は聖人にて十分なりしに、空海の後塵を拜せしむるに至れり。末世の俗僧は困つたものと、日蓮地下にて、苦笑すべき也。八十八所の巡禮は、南無阿彌陀佛とも唱へず、南無妙法蓮華經とも唱へずして、南無大師遍照金剛と唱ふ。弘法大師の威德さても大たる哉。

彼岸の六彌陀詣も、一種の巡禮也。能因法師は歌を諳くし、その足跡奧州に及び、四國にも及べり。一種の巡禮者也。『都をば霞と共に出でしかど秋風ぞふく白河の關』の歌は、日々顏を窓より出して日光に曝らし、居ながらにして作れるなりとは、能因に取りて、とんでもなき京童の悪口也。西行法師も一種の巡禮者也。芭蕉も一種の巡禮者也。所謂軟派に屬す。谷文晁に日本名山譜あるが、唯山を下より眺めたる也。これも軟派也。池野大雅は富士山、白山、立山の三嶽に登りて、自ら三嶽道人と稱せり。これ異數にして、硬派に屬す。その畫の脫俗せるも、亦宜なる哉。日本の南畫家は、山嶽に登らずして、山水を描けり。歌人は居ながらにして名所を知れり。漢學者口を開けば、濟勝の具に乏しと稱し、山水の趣を解するものも、自ら賤みて、烟霞の痼疾と稱す。一般に知識階級の人は徒歩にも堪へざ

るもの多く、山嶽は敬して遠ざけたり。唯山伏の一派のみ山嶽を獨占したりしが、それも明治の世になりて、神佛混淆を禁ぜられてより、佛教頓挫すると共に、頓挫したり。一例を擧げむに、越中の立山、今は神の山なるが、もと修驗道の山也。立山とは雄山 別山、淨土山、大汝山、劍嶽の五峯の總稱にして、劍嶽だけ離れて特立す。雄山が主峯にて、その頂上に雄山神社あり。立山に登るものは雄山に登りて足れりとし、峰傳ひに淨土山、別山、大汝山には登るも、明治四十年までは、劍嶽に登りたるもの絶えて、登ることの出來ざる山と稱したりき。巖石峨々として、雄姿天下に冠たり。幾條の雪溪夏も解けずして、萬古の雪を帶ぶ。巖石は處々斷絶するを以て、巖傳ひには登れず。されど、雄山方面より雪溪を下り、雪溪に野宿し、更に雪溪を攀づれば、其頂に達するを得べき也。今や白馬嶽に登るものは年々一萬人を下らず。槍ケ嶽に登るものも數千人あるべし、劍嶽に登るものは數百人に過ぎず。それも明治四十年以後の事也 明治四十年に參謀本部の測量の一隊、大擧して 其頂を窮めたるに、豈に圖らむや、人の登りたることなしと思ひたる劍嶽に、錫杖などありて、登山者の跡を見むとは。維新以後、修驗道の衰ふると共に、劍嶽は登る事の出來ざる山となり居りたれど、その以前には山伏が既に踏破したる也。槍ケ嶽も西洋人か始めて足跡を印したるに非ず、坊主小屋の稱さへありて、山伏が既に登り居りたる也。維新以前とても、知識階級の人は唯山を下より眺めて、山に登らうとせざりき。明治以後の知識階級は、唯西洋の文化を學び、西洋人の眞似するに忽にして、山嶽の如きは、空しく雲外に閑却したりき。然るに西洋人の中には山嶽に登るものあるより、その眞似して、山嶽に登るものも次第に多くなりたるが、實はこれ山伏の復活也。役行者の遺志の伸びたる也。

三　秋晴れや三千世界足の下

今は何事も西洋本位の世の中也。西洋のレッテルを貼るにあらずんば、葡萄酒も珍重せられず。學者も洋行せざれば、箔が付かず。美術家も佛國に遊びたりと云へば、幅が利く。政治家にも、實業家にも、それ〱西洋のレッテルを要す。佛教も西洋の學者が研究すと聞きて、尊きものとなり、浮世繪も西洋人に愛玩せらるゝ所となりて、廣重、歌麿など、俄に世界的畫家となりたり。山嶽踏破とのみ言ひては、山伏の眞似か、大正の國民が未開時代の山嶽崇拜では、文化の逆戻りなどゝ、鼻先にあしらふべけれども、國立公園と聞きては、忽ち飛び付く。西洋には國立公園が盛なるぞと聞きては、益恐縮す。日本の公

園は庭園の擴大なるが、西洋の公園は山林の縮小也。西洋人は未だ庭園の美を解せざるが、山林の美を解す。而かも山林の縮小に甘んぜずして、深山幽谷を公園とせり。是れ西洋に於ける國立公園也。如何なれば國立公園を設けたるぞといふに、都會の地にのみあくせくして居りては、身體も精神も墮落し、萎縮し、腐敗する一方なれば、出でゝ山嶽の洗禮を受け、大自然に接して身體精神を一新せむとする也。役行者より云はゞ、遺志を繼げるもの也。その遺志が山伏の宣傳にては、日本國民が承知せぬ。西洋のレッテル付きて、國立公園が設けられむとする也。日本の登山が中興するなる也。役行者地下にて微笑するなるべし。

四　足の下巖千丈の落花哉

若返り法と云ひ、長生法と云ひ、西洋のスタインナッハのレッテルが付きて、日本國民は俄かに騒ぎ立つるに至れるが、東洋には昔より簡易なる若返り法あり、長生法もあり。他なし、頭寒足熱の一事也。頭がのぼせずして足が冷えぬやうにして居れば、人の身體は健康也。長生する也。若返りもする也。その頭寒足熱は、家に在りても、正座すれば得らるべきが、今の日本國民は正座に堪へずして、膝を崩す。從つて病に罹る也。命が短き也。頭寒足熱は又徒步に由りて得べきが、電車通じ、自動車出來て、今の知識階級は徒步するもの稀になり、病者益多く、生命益短くなる也。

徒步の大仕掛なるもの、山嶽にては修驗也、平地にては巡禮也。千社詣といふこともあれど、巡禮の如く、廣く一般に行はれず。八十八所の巡禮は弘法大師の開創と稱し、三十三所の巡禮は、その前養老年間德道上人の開創にして、華山法皇の中興に係ると稱す。觀音と大師と崇拜物は異なれども、頭寒足熱を利用することは一也。僅々數日にては、その効少なし。二三個月に亘りて、日々巡禮すれば、身體も健全になる也。精神も健全になる也。あらゆる文明病も消え失する也。

達磨は面壁九年にして足を失へりとかや。江戸三百年より引續きて今日までの文化は、驚異すべき發達を遂げて日本國民の頭腦を磨けり。手腕を磨けり。而して殆んど足を失はむとす到る處、小達磨の多きに堪へざらむとす。禪宗を開きたる達磨の足は問題に非ず。小なりとも、達磨ならば、まだしも、此有様にて進まば、日本國民は幽靈とならむとす。幽靈には足なきが、幽靈になりて、足を失へるに非ず。生前頭と手とあるを知つて足をおろそかにし名利愛慾に目がくれて、自然の靈氣に觸れざるものゝ、死して幽靈となる也。今日の日本國民の一大缺

點は、脚力の弱きこと也。朝鮮人に及ばず、支那人に及ばず、西洋人に比して顔色なき也。肉食は運動と伴はざるべからず。日本國民は西洋人の肉食を眞似するものあるも、その運動を眞似せず。日本は西洋の文化に對して、後進の國ながら、醫學の發達は獨逸に次ぐとの事也。これ醫界に俊才多きに因ると雖も、亦日本國民が足を忘れたるに因る也。足を忘れたるが爲めに自然の靈氣に觸れずして、醫藥と親まざるを得ざるやうになり、醫師に多く研究の材料を提供する也。西洋にては、腸チブスの何たるかを知らむとするも、腸チブスに罹るものなくして、醫師の困まり居る國もありと聞く。一言に云へば、日本國民一般に衛生思想が行き渡らざるが、衛生思想進まば、消毒の域に甘んぜずして、必ずや足に及ぶべき也。足を忘れて、消毒の法のみを講ずるは、衛生思想の徹底せざる也。

運動家は案外に早く頓死するものあるが、健脚なるものは、健全にして長命也。之を余の友人に徴するに、例外はあるも、健脚にして徒歩を好むものは、五十歳を過ぎても、元氣壯者を凌げど、徒歩を好まざるものは、早世せり。早世せずとも、元氣なし。他にも早世の原因あるべけれども、徒歩を好まざりしことが、早世の一大原因たらずんばあらざる也。

之を人事に徴しても、出不精といふ人は、必ず成功せざる也。雜誌にしても、新聞にしても、もとは手にて作りたりき。今は足にて作らざるべからず。もとより電話電信の助を要するが、根元となるは足也。足を用ゐて奔走せざるべからず。雜誌新聞が足を用ゐること多ければ、多きほど、世に榮ゆる也。榮ゆるに甘んじて、足を閑却すれば、新聞は忽ち衰へむ。雜誌も次第々々に凋落せむ。

官吏にして大臣となり、實業家にして社長となりたらむ曉には、足の必要滅ずべけれども、それまでに達するには、頭と手腕とある上に、足まめならざるべからず。腰の重きものに、出世の見込みなし。高山彦九郎にしても、林子平にしても、蒲生君平にしても、草莽に蹶起して大志を伸べたるものは、みな健脚なりき。もしも、文化の世の中、脚の必要なるものは郵便配達と人力車夫とのみなりと思ふものあらば、これ自から甘んじて幽靈となる也。

脚を用ゐる以上は、平地の巡禮のみに甘んぜずして、雲上の山嶽を攀ぢむ哉。

五　谷ふかく遠山雲にほとゝぎす

鄕土を愛する者は、其鄕土を知り、國を愛する者は其國を知る。日本國民は果して日本國を知れりや。單に島國と云ひて

は、これ日本を知れるものに非ず。日本は實に島山の國也。横に廣がらずして、縱に伸びたる國也。日本は縱の文化にして、西洋は横の文明なりとは、この頃、人も言ふやうになりたるが、我國は開闢以來、君臣の分定まれり。君臣本位の國也。上が君臣本位なれば、下は親子本位とならざるを得ず。所謂忠臣は孝子の門に出づる也。西洋にては夫婦本位也、個人本位也、この頃は人格本位といふことをやかましく言ふやうになれり。君臣本位、親子本位は縱也。必ずしも人格を無視せず。平等の中に差別あり。差別の中に平等ある也　夫婦本位、個人本位、人格本位は横也。差別を無視して、惡平等とならむとす。人格といふことも、意義を變じ來れり。正しくて、論語に所謂義に喩る人が、本來の人格者なるが、この頃は横の思想横逸して、利に喩る人が、人間は皆人としての格を有す。動物扱ひにするな、品物扱ひにするなとて、横本位を貫かむとするが、今の所謂人格本位也。もとの意味の人格本位ならば、人物の向上を意味するが、今の所謂人格主義は人權の擴張を力めて、人物は下落す。米國にても、この頃は人格主義盛になりて、人物は下落するより、識者之を慨き、人物の向上を圖りて、他山の石とや思ふらむ、日本の識者に、人物養成の方法を問ひ來れるものあり。他の識者は何と答へたるかは知らず。杉浦重剛先生は、貴國には、ワシントンといふ大人物ありき。それを學べば、十分なるに非ずやと答へたりと聞く。

余は西洋といふ語を用ゐたるが、こは歐洲のみならず、米國をも含める也。佛國は文弱にして振はず。英國も老大にして振はず、折角振ひかけし獨逸は一敗地に塗れたり。露國は瓦解せり。米國獨り新進氣鋭にして、何事も世界一を期す。米國人より見れば、小兒と思ひし日本が、何時しか生長して出しやばるを以て、癪にさはりて、目の上の瘤とも思ふたるべし。米國の識者の中には、日本の强きは、五十年前まで封建制度を布きて武士といふ階級のありたる遺德也。日本もゆく〱は弱くなるべしとて、樂觀するものあり。米國の識者の樂觀する所は、日本の識者の悲觀する所也。

日本國民は開闢以來、萬世一系の天皇を奉戴する世界唯一の國民也。されど夜郎自大、固陋に甘んずべきに非ず。今の世、何事も西洋を本位とするは、弊害も多きが、一方より見れば、進歩を意味す。何事も世界一となりては、進歩停止す。西洋を師とする間は、日本に進歩ある也。されど、眞の日本國民たらむものは、根を日本に据ゑて、西洋の花を咲かさゞるべからず。東洋の舊花をも棄つべきに非ず。内にしては中流の砥柱たらむことを期せざるべからず。外にしては皇國の美風を世界に

發揮せざるべからず。今の所謂新知識者は、日本に生れながら、日本の眞相を解せず、西洋の眞相をも解せざるもの多し。云はゞ『浮草や今日はあちらの岸につく』もの也。一時便宜を得ることもあれど、後世より見れば、終にこれ埋め草也。日本に意を得ざりし青年が、米國に渡りて意を得て歸り來り、浮草の本領を發揮して、米國の美を說くもの、在來は餘りに多かりき。西洋の文化より云へば、米國は日本の兄分なれども、もと四百年以來の新しき國也。本國の英國に叛きたる叛逆の民也、杉浦先生がワシントンを擧げたるは、米國にての大人物也。ワシントンとても、叛逆の巨魁たるを免れず。外所事には非ず。北海道若しくは臺灣に移住したる者が、西洋人と同化共謀して、叛旗を翻しては、堪つたものに非ず。されど、日本と英國とは、大に似たる點もあれど、大に異なる點もあり。大陸を離れたることは、相同じ。天皇を奉ずることも相同じ。同じく天皇にしても、日本の天皇は開闢以來の神孫也。英國の天皇は國民中の舊家に過ぎず。今や世界の大陸を擧つて、大統領の世とならむとして、天皇は島國に榮ゆ。東の日本と西の英國とこれ也。世界の將來は一方より云へば、黃白兩人種の競爭場となるべく、一方より云へば、天皇國と大統領國との競爭場となるべし。いづれが勝つかは、今斷言すべき限りにあらざるが、日本國民は此の一大自覺を要す。日本は天皇に歸一するが、英國は天皇に歸一せず。愛蘭土は今になほ獨立を圖らむとす。米國に移住したる英人は、もと〳〵獨立のつもりにて移住したる也。それに猶太人加はり、獨逸人その他の國民も加はりて、新しき國を開けり。日本國民の移住とは、一樣に見るべきに非ず。もとより君臣なし。横のみの國也。縱の日本を以て、横の米國を律すべきにあらざると共に、横の米國を以て、縱の日本を律して、悪平等の國とすべきにあらざる也。

西洋人の中には、日本國民を評して、復讐の念の强き國民なりといふものあり。これ日本人の勝氣にして負け惜ひなるをさしたるかも知れざるが、西洋人は果して日本の復讐を解せりや否や。元來日本國民は私怨に執念深きものに非ず。板倉勝重自ら其子を推薦して、妻敵を討つ者に非ずと云へり。換言すれば、公に殉する者にて、私に殉する者に非ずとの意也。西洋にては、彼の有名なるホーマーの叙事詩の材料となしたる希臘のトロヤ攻擊を始めとして、復讐はすべて私怨に出づ。横の復讐也。我國にて、復讐といふは、俱に天を戴かざる君父の讐を討つこと也。縱の讐討也。今の日本國民なほ忠臣藏を見て、感涙を墮すものは、縱の趣を解する也。忠臣藏の如き縱の讐討は、我國にのみありて、世界萬國、他になし。横の趣のみを解する

西洋人、知らず、能く忠臣蔵に感涙を墮すや否や。

　西洋人の横一方なるは、如何に愛の語を用ゐるかを見ても、判かる也。酒を愛す。女を愛す。花を愛す。神を愛す。あはれや、情緒の低級なる横の西洋人は、神をも酒色と平等に取扱ふ也。さすがに日本國民は、愛神とは云はざる也。愛王とも云はざる也。日本國民の縱の例は多れども、先づ如何に柱といふ語を用ゐるかを見よ。一尾の鯛、一頭の馬、一羽の鶴、一人の男と稱することを、神に用ゐれば、何と稱するかといふに、もしも一人の神といふならば、これ西洋の惡平等に拘はれたる也。縱の日本にては、一神ならば、一柱の神、二神ならば、二柱の神、十神ならば十柱の神といふ也。これ日本獨得の言ひ現はし方也。支那にも、この用例なし。横の西洋人は夢想も及ばざる所なるべし。

　古來隣の雜炊と云へり。さらでだに横に走るは易く、縱に登るは難きに、西洋のレッテル無くては通用せぬ世の中、隣の雜炊ますく共威を逞しうす。折角の縱の國民、化して横の國民とならむとす。已れあつて天皇なし。妻あつて親なし。家あつて國なし。惡平等の思想、天下に瀰漫す。譬ふれば、關東平原の霧に包まれたるが如し。四面目に見ゆるは、都會也、田畑也。林樹也。川原也。何ぞ知らむ、霧の外に雪の富士山あり、紫の筑波山あり、日光山あり、淺間山あり、秩父山あり、妙義山あり、榛名山あり、赤城山あり、箱根山あり、大山ある也今の日本國民は心の霧に蔽はれて、横を見て、縱を見ず。日本帝國を平原とのみ思ひて、島山の國なるを知らざる也。

六　下界の人蟻より小さき紅葉哉

　英國も島山の國なるが、英國の山はすべて五千尺以下也。我國は一萬尺以上の山嶽、富士山を始めとして二三十座あり。八九千尺の山嶽は百座を下らず。五六千尺の山嶽は、一々數ふるに遑あらず。山嶽の爲めに土地が狹められたりとは、誤つて横より勘定したる也。山嶽には褶曲多くして、山嶽あるが爲めに、日本の面積は、島嶼の面積に數倍する也。日本國民は米を食ふ人種なるが、その米を得るは、山の恩也。山あるを以て川あり。川あるを以て水田あり。水田あるを以て米ある也。もしも日本に山嶽なくんば、日本は唯一面の沮洳地なるべし。山嶽の陰は數十里の外に及ぶ。若しも日本に山嶽なくんば、海中の魚族も日本には近寄らざるべき也。

　活火、休火、いづれの火山も支那になく、朝鮮にもなくして、東洋にては、日本のみにあり。富士山を始めとし、淺間山、日光山、那須山、磐梯山、月山、鳥海山、岩手山、岩木

山、白山、立山、御嶽、伯耆の大山、三瓶山、阿蘇山、霧島山、雲仙嶽など、日本の名山には火山多き也。活火山も數十座あり。火山あるにつきて、山湖生ず。十和田湖、猪苗代湖、洞爺湖、支笏湖、屈斜路湖は第一流の山湖也。中禪寺湖、田澤湖、阿寒湖などは第二流の山湖、蘆の湖、富士山麓の五湖などは、第三流の山湖、その他第四流第五流と數立つれば、一百を下らざるべし。琵琶湖は偉大なれども、平湖也。平湖は濁り、山湖は澄む。平湖は下界と連れるが、山湖は山に圍まれたる仙境也。夏涼しくして、蚊も居らず。風聲雲色草木禽鳥すべて下界の比にあらざる也。唯山湖は富士以北に鍾まれり。且つ山上僻遠の地にあるを以て、普通の旅客の目に觸れず。世上大多數の人は、未だ山湖の美を知らざる也。

深山の平地は禪を修するに適すとて、弘法大師は高野山を開けり。高野山は異數にて、多くの山は、其頂尖れり。唯火山は山頂を多樣にす。頂上即ち穴なるものあり、富士山の如きこれ也。頂上即ち湖なるものあり、北海道の摩周山の如きこれ也。頂上に茫々たる砂漠を有するものあり、伊豆の三原山これ也。日本にて、頂上の最も廣きは、北海道の大雪山にて、凡そ二里四方もあり。鬼怒沼山は頂上一里四方、平らかにして、數十の沼を有す。山異なるにつれて、頂上もいろ〳〵に變化す。下界より眺めたるだけにては、想像の及ぶべくもあらざる也。

平地ならば、北すること數百里にして見る草木風色を、山嶽ならば、登ること數里にして之を見る。造化は一種の縮地術を山嶽に行へり。瘠土に生長する赤松帶いつしか盡きて、山毛欅帶となり。樺帶となり、終に偃松帶となりて、樹木盡き、その上にはお花畑の奇花異草、平地には見られざる鮮麗の色を帶びて、これも平地には見られざる星の光と映發す。山高ければ高きほど、空氣清らかになりて、紫外線直射す。それ故に高山植物の花の色が美なる也。願くは高山植物の花をして、長へに天上にあらしめよ。下界に移さば、或は枯れずとも、高山の上に見る如き色澤は得られざる也。

山嶽に登れば、平地に見られざる樹木多く、塵を帶びずして生色あり。雲にぼかされて幽趣あり。巖に生ひて、奇姿を呈す。松も黒松赤松は平地にも見るが、山に入りて、姫小松を見る。この樹は他の樹木の生ひ難き處に生ふ。巖と巖との間に寸土を求むるに非ず。其根能く巖を穿つ也。根に苦勞するを以て、其葉小也。其葉小なるを以て、姫小松の稱あるが、姫どころか、松の中の快男子也。楓も巖に生ず。滿山みな花といふ光景は、實際には見られざるが、滿山みな錦繡といふ光景は、關東以北、到る處の霜葉に見る。登り〳〵て偃松を踏むに至れば、

西洋人、知らず、能く忠臣藏に感涙を墮すや否や。

西洋人の横一方なるは、如何に愛の語を用ゐるかを見ても、判かる也。酒を愛す。女を愛す。花を愛す。神を愛す。あはれや、情緒の低級なる横の西洋人は、神をも酒色と平等に取扱ふ也。さすがに日本國民は、愛神とは云はざる也。愛王とも云はざる也。日本國民の縱の例は多れども、先づ如何に柱といふ語を用ゐるかを見よ。一尾の鯛、一頭の馬、一羽の鶴、一人の男と稱することを、神に用ゐれば、何と稱するかといふに、もしも一人の神といふならば、これ西洋の惡平等に拘はれたる也。縱の日本にては、一神ならば、一柱の神、二神ならば、二柱の神、十神ならば十柱の神といふ也。これ日本獨得の言ひ現はし方也。支那にも、この用例なし。横の西洋人は夢想も及ばざる所なるべし。

古來隣の雜炊と云へり。さらでだに横に走るは易く、縱に登るは難きに、西洋のレツテル無くては通用せぬ世の中、隣の雜炊ます／＼其威を逞しうす。折角の縱の國民、化して横の國民とならむとす。已れあつて天皇なし。妻あつて親なし。家あつて國なし。惡平等の思想、天下に瀰漫す。譬ふれば、關東平原の霧に包まれたるが如し。四面目に見ゆるは、都會也、田畑也。林樹也。川原也。何ぞ知らむ、霧の外に雪の富士山あり、紫の筑波山あり、日光山あり、淺間山あり、秩父山あり、妙義山あり、榛名山あり、赤城山あり、箱根山あり、大山ある也

今の日本國民は心の霧に蔽はれて、横を見て、縱を見ず。日本帝國を平原とのみ思ひて、島山の國なるを知らざる也。

六　下界の人蟻より小さき紅葉哉

英國も島山の國なるが、英國の山はすべて五千尺以下也。我國は一萬尺以上の山嶽、富士山を始めとして二三十座あり。八九千尺の山嶽は百座を下らず。五六千尺の山嶽は、一々數ふるに遑あらず。山嶽の爲めに土地が狹められたりとは、誤つて横より勘定したる也。山嶽には谿間多くして、山嶽あるが爲めに、日本の面積は、歐洲の面積に數倍する也。日本國民は米を食ふ人種なるが、その米を得るは、山の恩也。山あるを以て川あり。川あるを以て水田あり。水田あるを以て米ある也。もしも日本に山嶽なくんば、日本は唯一面の沼湖地なるべし。山嶽の蔭は數十里の外に及ぶ。若しも日本に山嶽なくんば、海中の魚族も日本には近寄らざるべき也。

活火、休火、いづれの火山も支那になく、朝鮮にもなくして、東洋にては、日本のみにあり。富士山を始めとし、淺間山、日光山、那須山、盤梯山、月山、鳥海山、岩手山、岩木

山、白山、立山、御嶽、伯耆の大山、三瓶山、阿蘇山、霧島山、雲仙嶽など、日本の名山には火山多き也。活火山も數十座あり。火山あるにつきて、山湖生ず。十和田湖、猪苗代湖、洞爺湖、支笏湖、屈斜路湖は第一流の山湖也。中禪寺湖、田澤湖、阿寒湖などは第二流の山湖、蘆の湖、富士山麓の五湖などは、第三流の山湖、その他第四流第五流と數立つれば、一百を下らざるべし。琵琶湖は偉大なれども、平湖也。平湖は濁り、山湖は澄む。平湖は下界と連れるが、山湖は山に圍まれたる仙境也。夏涼しくして、蚊も居らず。風聲雲色草木禽鳥すべて下界の比にあらざる也。唯山湖は富士以北に鍾まれり。且つ山上僻遠の地にあるを以て、普通の旅客の目に觸れず。世上大多數の人は、未だ山湖の美を知らざる也。

深山の平地は禪を修するに適すとて、弘法大師は高野山を開けり。高野山は異數にて、多くの山は、其頂尖れり。唯火山は山頂を多樣にす。頂上即ち穴なるものあり、富士山の如きこれ也。頂上即ち湖なるものあり、北海道の摩周山の如きこれ也。頂上に茫々たる砂漠を有するものあり、伊豆の三原山これ也。日本にて、頂上の最も廣きは、北海道の大雪山にて、凡そ二里四方もあり。東怒沼山は頂上一里四方、平らかにして、數十の沼を有す。山異なるにつれて、頂上もいろ／＼に變化す。下界より眺めたるだけにては、想像の及ぶべくもあらざる也。

平地ならば、北すること數百里にして見る草木風色を、山嶽ならば、登ること數里にして之を見る。造化は一種の縮地術を山嶽に行へり。瘠土に生長する赤松帶いつしか盡きて、山毛欅帶となり、樺帶となり、終に偃松帶となりて、樹木盡き、その上にはお花畑の奇花異草、平地には見られざる鮮麗の色を帶びて、これも平地には見られざる星の光と映發す。山高ければ高きほど、空氣清らかになりて、紫外線直射す。それ故に高山植物の花の色が美なる也。願くは高山植物の花をして、長へに天上にあらしめよ。下界に移さば、或は枯れずとも、高山の上に見る如き色澤は得られざる也。

山嶽に登れば、平地に見られざる樹木多く、塵を帶びずして生色あり。雲にぼかされて幽趣あり。巖に生ひて、奇姿を呈す。松も黒松赤松は平地にも見るが、山に入りて、姫小松を見る。この樹は他の樹木の生ひ難き處に生ふ。巖と巖との間に寸土を求むるに非ず。其根能く巖を穿つ也。根に苦勞するを以て、其葉小也。其葉小なるを以て、姫小松の稱あるが、姫どころか、松の中の快男子也。楓も巖に生ず。滿山みな花といふ光景は、實際には見られざるが、滿山みな錦繡といふ光景は、關東以北、到る處の霜葉に見る。登り／＼て偃松を踏むに至れば、

ほつと一と息つく。樹木盡くると共に、頂上遠からざる也。偃松を越えて、お花畑に入れば、此世ながらの神苑也。偃松を踏みて、お花畑に入りたるものにして、始めて高山に登りたりといふべく、花の眞の美を味へりといふべき也。

山靜かにして太古に似たる處、幽禽の和鳴を聽くは、下界に聽かれざる一種の仙樂也。下界にては、春にのみ聞く鶯を、山上にては夏もなほ聞く。下界にて時鳥鳴く時には鶯は鳴かざるものなるが、山上にては鶯と時鳥とが合奏す。駒鳥最も早く起きて鳴き、嶽雀お花畑に仙趣を添ふ。偃松の絕間に、雷鳥の子をつれて步く樣は、世にも可憐なる哉。

平地の水は海の怒濤巖を打ち、川の細波岸を嚙む位の事なるが、山嶽に入れば、水の樣千變し、水の音萬化す。山中の水はすべて淸きが、或は飛び、或は落ち、或は激し、或は散り、或は懸り、或は垂れ、或は踊りて、怒るあり、叫ぶあり、泣くあり、笑ふあり、歌ふあり。單に瀑布を以てするも、直下するあり、巖を傳ふあり、急斜面に激動するあり。溪ありて、山ますく\幽に、瀑布ありて、溪ますく\奇也。路の開けたる瀑布は探り易きが、路の開けざる瀑布多く、世に顯はれざる大瀑少なからず。路の開けざる瀑布を探るは、至險にして、至難也。山嶽到る處に勇者の探險を待つ也。

奇巖怪石は海邊にも見らるゝが山に多し。名にし負ふ槍ケ嶽の槍も、連山の上に傑出せるを以て、其價値ある也。妙義、庚申、耶馬、朝鮮の金剛山などの奇巖怪石雲上に重疊する趣は、山ならでは見られざる也。

平地にても雲烟は見らるゝが、其妙を極むるは、山嶽に在り。白雲馬頭に生ずるも山也。脚下に雷鳴を聞くも山也。下界海となり、峯尖島となる雲海の壯觀も、山ならでは得られざる也。

日出日沒の美は、海邊にても得らるゝが、高山より見れば、なほ一層美也。雲海の底より日輪の躍出する有樣、世にも崇高の美を極む。之を御來迎と稱するは、佛教の語に出づ。御來迎とは彌陀の出現するをいふ。佛教徒に取りては、日出を彌陀の出現の如くに感ずる也。神道者其佛臭を厭ひて、御來光と言ひ換ふ。字面の妥當不妥當は暫く措く。唯これ天照大神天の岩戶を出給ひて、天地忽ち明くなりたるも斯くやと思はるゝばかり也。

山に登りて、最高峯を窮めずんば眞に山に登りたりとは云ふべからず。繪畫や、寫眞や、唯縦のものを橫に寫すに止まる。山上より下界を見下すの大觀は、繪畫にもならず。寫眞にもならず。そこに登山の妙趣ある也。繪畫寫眞にならずとて、畫家寫眞師は山頂を窮めざるもの多けれども、それにては登山の妙

趣がわからざる也。例すれば電車にて下强羅に行き、下强羅より上强羅までケーブルカーに乘り、大地獄を見物し、蘆の湖に發動船を浮べて戻るだけにては、未だ箱根山に登りたりと云ふべからず。それだけならば、繪畫寫眞にても事足る。箱根山に遊びたらむ者は、少くとも鞍掛山に登りて蘆の湖の全幅を見下し、駿河灣を見下し、相模灘を見下し、十國五島を見渡し、富士を仰がざるべからず。これ繪畫寫眞の能くせざる所にして、登山の甲斐こゝにある也。兎角我國の遊客は足不精にして、折角登山しても、繪畫寫眞の範圍を出でず。日光に遊ぶものは、華厳瀑を見て中禪寺湖に至るが、せい〳〵也。戰場ケ原を經て、湯本溫泉に浴するものも稀れ也。阿瀨峠に登りて中禪寺湖を見渡し、男體山を見上げ、轉じて關東平原の末に富士を眺むるものは益稀れ也，男體山頭に立つものは、百中一人ありや否や。

一步一喘、身を雲上に持ち上ぐるには、苦痛の伴ふもの也。その苦痛を凌ぎて、頂上に達すれば、登山の目的達したり。下界を見下して、天下を小とする心持は、超世遺俗と云はむか、羽化登仙と云はむか、狂喜と云はむか、雀躍と云はむか、人魂飛揚と云はむか、一種の法悅と云はむか。登山の妙趣こゝに在り。その眼に入る光景は繪畫に寫せず、寫眞に入らず。その時の心持は、歌にも俳句にも詩にも文にも言ひあらはし難し。以心得心といふわけにも行かず。唯だ經驗の得たき也。

七　紅葉まで雲の下なり雲に立つ

登山家動もすれば、富士登山は登山の幼稚園なりといふ。川なく、溪なく、壑なく、絕壁なく、道開けて傾斜緩に、石室ありて數町毎に相望む。登山家に取りては、至極登り易き山也。その登り易きは、設備の整へるに由ろ也。もしも道開けず、石室もなくば、富士山とても登り難き也。雷雨に遭へば、恐しき山也。風雨烈しき時は危險也。平時は登り易きも、なほ富士山に登りて、山醉に罹るもの少なからず。船に醉ふものは、山にも醉ふ也。八合目以上に至れば、何人の顏も紅色を失ひて、呼吸切迫す。余以爲へらく、富士山に登り得るものは、身體健全也。年々登山する者は、益健全になるべし。殊に富士山は日本を代表する靈山也。麓より仰ぎても、自然の靈氣と呼應するに足る。況んや頂上より御來迎を拜するをや。日本中の山にて、登山者の多きことは、富士山が第一なるべし。富士山は何人にも知られ居る也。その癖、深く富士山を窮むるもの稀れ也。第一、十三州は唯一日といふことからして、間違つて居る也。十三州とは關東八州に伊豆、駿河、遠江、甲斐、信濃を加へたるものなるが、十三州どころか、常陸より盤城に跨れる八溝山よ

りも見え、越後の妙高山よりも見え、越中の立山よりも見え、信濃より飛騨に誇れる御嶽よりも見え、美濃の惠那山よりも見え、三河の石卷山よりも見え、尾張の小富士よりも見え、伊勢湖を隔てゝ、伊勢の朝熊山よりも見えて、富士山の眼界は、都合二十一箇國に亘れる也。黒井海軍大將曾て余に語るらく、ベスビヤ山に登りて、一人の獨逸人と道伴となりけるが、貴方は富士山に何度登られしかと問ふ。登りしかと問はずして、何度と問ふは、振つたる問ひ方也。一度登らぬも馬鹿、二度登るも馬鹿と答へしに、富士山の如き靈妙なる山は、世界に二つとは無し。日本人でありながら、唯一度の登山とは惜しきことと也。余は四度登山したりとの事なるが、外國人にしては殊勝なること也。一度や二度登山したるだけにては、富士山を味へりとは云ふべからず。數十度に及ぶとも、唯登山したるだけにては不可也。中道廻りを爲して、天狗の庭の奇觀を窮めざるべからず、裾の八海廻りを爲さゞるべからず。白糸瀧方面より、中央を少し高くして、團子を三つ並べたるやうなる山頂を眺むるも、富士を味ふ上には、徒事に非ず。御坂峠、西行坂、花水坂を富士見三景とは、甲州だけの事也。田子の浦の富士、三保の松原の富士、龍華寺の富士などは、例の足不精の言ふ事也。畫家に富士を描くもの多けれども、唯形を描くだけにて、その崇高の趣を現せるものは稀れ也。何處から見たる富士の形が好きかを窮むるは、未だし。何處から見たる富士が最も崇高なるかを窮めざるべからず。それには足勞を要す。東海道筋の平地よりしては、富士山は想像ほどに高く見えず。あれにて箱根、愛鷹、天城諸山の倍以上あるかと思はるゝばかりなるが、一たび足を勞して乙女峠あたりよりすれば、想像通りに高く見ゆる也。英雄英雄を知る。富士の高さを知らむには、己れも高處に立つを要す。妄りに富士通を振りまくに非ず。登山の徹底を期する也。

八　巖頭に火を焚いて星と語りけり

富士登山を登山の幼稚園とすれば、穗高嶽より槍ケ嶽への縱走は、登山の大學校也。上高地温泉を朝出立すれば、正午までに穗高の頂に達すべし。それまでは、さまでの事なし。穗高の頂より槍の頂まで、直徑二里に過ぎず。その間溪谷あるに非ず。荊棘あるに非ず。偃松の路を塞ぐあるに非ず。その嶺上を傳ふ也。その嶺上に高低あり。殆んど絶壁に等しき急斜面を左右に縫ひつゝ上下すること、幾度なるを知らず。その絶壁が固定して居れば、まだしも、手を支ふる巖石も動き、足を支ふる巖石も動く。雲霧襲ひ來れば、咫尺辨せず。進退維れ谷まる。烈風吹かば、身は巖石と共に飛ばむ。その日は途中に暮れて野

宿し、翌日の午後になりて、漸く槍に達す。奥穂高の縦走は天下の至險也。案内をする者も稀れ也。稀に案内する者あれば、他の高嶺案内の賃錢の倍額を請求し、荷物を半減す。多くの人と共にすれば、他の落したる巖石我身を壓することなきを保せず。世上の勇者、この登山の大學校に入らむとせば、小人數なるべし。單獨は不可也。導者を撰ばざるべからず。殊に天候に注意すべき也。

九　お花畑雲に取られて一人哉

暴虎馮河を匹夫の勇とけなすは、支那の事也。儒教にして日本國民を誤りたるものありとすれば、この語の如きは、その一例也。支那は暴虎馮河を匹夫の勇とけなすを以て、古來文弱也。革命易姓が絶えざる也。德ある者帝王となると云へるが、その德は匹夫の勇に才智を加味したるものにて、根本は匹夫の勇也。匹夫の勇の盛なる者天下を取り、匹夫の勇を失へば天下を失ひ、他の匹夫の勇ある者之に代る。學者の取りたる天下なしとは、學者概して臆病なるをさす也。

支那の左文右武と云へるは、唯口先だけのことにて、實際は文を尙んで、武を輕んじたりき。文を文化、武を蠻風と解釋しては、大間違也。之を人の身體に譬ふれば、文は肉也。武は骨也。武のみにては骸骨となるべきが、文のみにては、人間の海月也。武を濫用すれば、弊害多きが、武を善用するに非らされば、人榮えず、國振はず。我國は、古來武健也。匹夫の勇を賤まず。一躍して世界强國となれり。あまり驕らすぎて、今は第二の獨逸と睨まる。妄りに武を用ゐるべきにあらざるが、世界平和の主張者なる米國人が、盛にアラスカに飛行するを見よ。アラスカより米國に達する距離は、日本に達する距離と、ほゞ相同じき也。若しも平和の假相に目がくれて、妄りに文化生活にあこがるゝならば、必ず日本帝國を誤らむ。

余は如何なる運動をも否定せざるが、殊に登山を主張す。登山も遊覽の域にとゞまれば、繪畫を見るに同じ。寧ろ危險なし。探賞の域に進めば、命懸け也。如何なる運動にも、命懸といふことは無し。鐵棒の大車輪とても、命懸には非ず。トラッペーとても、命懸には非ず。されど、精神統一せるに非ずんば、丸木橋は渡れず。又精神統一せるに非ずんば、千仭の巖頭には立てず。小指よりも小さき草木に、一身を托して、懸崖を攀づるに方りては、何人も精神統一す。萬戸候もなし。十萬の腰纏もなし、美人もなし、酒もなし、雜念もなし、食慾もなし、天地の間、唯一條の草木あるのみ。人間全く純化す。門徒の念佛、日蓮宗の題目、禪宗の坐禪、唯一擧して山嶽に得べき也。登山は

武健の氣象を養成して、悟道の域に達すべき也。一生懸命の語は、何人も口にはするが、實行するもの少なし。探賞の登山には、何人も期せずして一生懸命となる。この一生懸命を以て事に當らば、天下何事か成らざらむや。

稀に山嶽の慘死者あるを見て、登山は危險なりと云ふものあるが、廣き天下の山嶽慘死者ありとても、年々數人に過ぎず。東京市中にては、自働車に轢かれ、電車に轢かれて、年々慘死するもの數百人あるに非ずや。世人が安全を思ふ都會が却つて危險也。危險と思ふ深山幽谷が却つて安全也。それも心の持ち方一つ也。危險と思ひて、命懸になれば、怪我するものに非ず。慘死する者に非ず。油斷大敵、丘嶽に躓かずして、蟻垤に躓く。山上の怪我や、慘死や、危險と思ふ處になくして、安全と思ふ處にある也。

一〇　天地霧に消えて雷鳥と我と哉

火山なき支那にも、朝鮮にも、温泉はあり。多く平地に湧出す。火山國の日本は山上にもありて、その泉質も多樣也。最も高き處にある温泉は、白馬嶺の温泉なるべく、海拔七千尺に達す。中房温泉や、上高地温泉や、五千尺の高處にあり。草津も四千五尺の處にあり。温泉は關東以北に多し。登山爲に一層の興味を感ずる也。昨年順天堂の醫師七人、日本北高嶺を窮めて、血液を檢せしに、山上にては血液の白血球が平地の倍になれることを知れりと聞く。知るや好し。唯その知るの遲きを惜しむ。西洋には山嶽病院ありて、山嶽を利用して、人の病氣を治療せり。何事も西洋本位の世の中なるに、而かも山上の温泉多きに、我國未だ山嶽病院なきは、大拔かりと云ふべし。

可愛き子は旅させよといふ古き諺を一轉して、余は可愛き子は登山させよと云はむとす。阿波にては、八十八所巡禮を爲さゞる女は嫁に貰はず、伊豫にては石槌山に登らざる男は聟に取らざる風習あり。登山の出來ざる青年は、必ず心身に故障ありて、一人前の男になれざる也。山嶽に難行苦行したる者は何事にも辛抱強くなるべし。體は健に、氣は壯に、心は純になるべし。野宿の經驗あるものは、住居に超脱すべし。山中の粗食を味はひたる者は、飲食に超脱すべし。膽の据れる者は、單身にて深山幽谷に縱横して可なるが、然らざるものは團體を成して、土地の人を物色し、嚮導として山に入るべし。一人ならば一人で、山嶽は沈思瞑想を助く。團體ならば團體で、自から團體道徳を解するやうになるべし。我國は個人としての道徳は發達して、社會道徳は發達せざるが、それも團體の登山が盛にならば、自然に發達すべき也。

元來我國民は自然と親しめる國民也 武健なると共に優美也。春は花、秋は紅葉、夏は月、冬は雪、四季をり〳〵に、日本國民は自然と親しむことを忘れず。花鳥風月は永遠の畫題也。季入らずんば俳句にならず。景色のみを咏ずる和歌俳句の詩體は、我國にのみありて、他になし。花鳥風月は衣服の模樣にも及ぶ。室內には生花あり。室外には泉水あり。市井の陋屋にも、なほ箱庭を見、鉢植を見る。盆栽も鉢植なるが、盆栽は老木と見ゆるものに限る。よくも小さき鉢の中に、數百年の生存を遂げたるものと思はするが、盆栽の本領也。これ日本獨得也。支那になく、西洋になし。他國には唯鉢植あるのみ。未だ盆栽の趣味を解せざる也。我國民とても、苦勞せざるものは、盆栽の趣味を解せざるもの多し。伊東巳代治子は、貴顯富豪唯一の盆栽家なりと聞く。微賤より出世したる伊東子其人が、一種の人間の盆栽也。

花見に、紅葉狩に、海水浴に、湯治に、宮詣でに、寺詣りに日本國民は能く旅行する也。松島、嚴島、天の橋立を日本三景と見立てたるは、さすがに風景眼を具へたるもの哉。松島は八百八島のみに非ず。松の八百八島也。嚴島は嚴島神社のみの島に非ず。全山みな松の島也。天の橋立は四十二町の長洲のみに非ず。松の長洲也。日本國民は松の美をも解する也。唯惜むらくは繪畫と山水とを同一視する也。山に入りても、繪畫の範圍に止まりて、山を品し、水を評す。繪畫の及ばざる山嶽の眞趣を窮めず。見上ぐる也。見下さゞる也。畢竟するにこれ足の祟り也。今の日本國民は頭と手との發達を圖りて、足の發達を圖らず。これ今の日本國民の一大缺點也。足の大小は身の大小と比例す。十文半の足袋を穿くものは、五尺三寸以上の人也。今の日本國民は十文以下の足袋を穿くもの多し。せめて日本國民一般に十文半の足袋を穿くやうになりたきもの也。

平地の自然は、日本國民を優美にしたり。山嶽の自然は、日本國民を武健にしたるが、足を忘れたると共に、山嶽を忘れて、今の知識階級は軟化し、惡化し、墮落する一方也。今の世、役行者の再現を要す。修驗道の再興を要す。されど宗教の形を取りては、宗教の一派となり、隔離を設けて、自から狹くするの嫌なしとせず。修驗道であれ、神道であれ、眞言宗であれ、天台宗であれ、眞宗であれ、禪宗であれ、淨土宗であれ、日蓮宗であれ、耶蘇敎であれ、無宗敎であれ、政治家であれ、軍人であれ、實業家であれ、敎育家であれ、唯登山といふことに一致して、日本中の山嶽らしき山嶽を悉く踏破するに至らば、日本國民たるに負かざるべく、日本の文化愈發達すべく、役行者千秋に沾くべく日本帝國萬古に榮ゆべき也。

新聞記者懺悔錄

―此の一篇を村山龍平翁にさゝぐ―

松崎天民

何を告白しやうとするのか、何を懺悔しやうとするのか。此の標題を見ただけで、内容を判斷して下さいますな。第一、今の私が、謂ふ所の「新聞記者」であるか何うか。それさへ、考へやうに依つては、問題なのであります。

一、胸の疼き

「相變らず、内幸町の方かね」

と、五六年も無沙汰して居る友達の中には、私が今でも、都新聞の社宅に、住で居るやうに思つて居た者もある。

「馬鹿を云へ、四年前の春、彼の社は退いてしまつたんだ。社長が更つてね……」

「さうか。で、今は?」

「浪人さ……」

「へえ、ちつとも知らなかつた」

こんな、挨拶の言葉を交すのさへ、私には決して好い氣持がしなかつた。

「矢張り、神田の方ですか?」

と、省線電車の中で逢つた或る漫畫家は、私が今日でも、二六新報社に勤めて居るやうに、合點して居たらしかつた。

「いや、去年の四月に罷めましてね、一寸、大阪新報の方へ關係して居たのですが……。それも三月ばかりで、おヂヤンになつたのです。それからは、轉々浪々と……」

「さうですか。でも、その方が、のん氣で宜いでせう」

「えゝ、善かつたり惡かつたり!」

こんな短い對話の中にも、自らを嘲けるやうな厭な調子が出て來ることを、私は自分の力で、何うにもすることも出來なか

つた。

七八百通も來る年始狀の中には、「京橋區日吉町國民新聞社内松崎市郎樣」としたのが、戸惑いしたやうに混つて居ることもあつた。「東京朝日新聞社編輯局松崎天民殿」としたのが、轉送されることもあつた。その度毎に、私は何んなに、厭な古疵にでも觸られるやうな、一種の疼きを感じたことであらう。

二、或る對話

「子供達は成人されたし、奥さんはしつかり者だし、君も今暫く、ホンの五年か十年の辛抱だ。社の方へは勤めなくても、何うやら此うやら食つて行ければ、その方が最後の勝利かも知れないよ。結局、僕などの立場から見ると、君の境涯は羨ましい位だと思ふね」

「これで、貯金の二三萬圓もあるか、月々印税が五六百圓も入れば、申分が無いのだけれど……。文を賣つて飯を食ふと云ふ、ただそれだけの事に當面すると、決して羨ましいものではないよ。それに、新聞社の刺戟の強い空氣から離れると云ふことが、一面には暢達した心持を起させがる、他面には何とも云へぬ淋しさがあつてね……」

「それは、さうだらうね。月給生活者が月給に離れると云ふ、物質的の心細さよりも、賑かな環境から孤獨になると云ふ、精神的の寂し味の方が、君などの場合には、强く影響するのだらうね?」

「僕も隨分、長い間……、二十三年も新聞界に衣食したけれど、我意に執着して、社から社を轉々したおかげで、何一つ酬ゐられること無しに、このまゝ老衰してしまふのだ……」

「君の苦勞に對して、新聞界は何一つ報ゐなくても、君は君自身の努力に償はれ、君の讀者に報ゐられ、君の家庭に酬ゐられて居るのだ……」

「さうだらうか」

「それにね、皆が口に出しては云はぬけれど、君が日露戰役以前からの社會記者として、エポックメーキングな仕事に參加した有力な一人であることは、心ある誰でもが是認して居ることなんだ」

「さうだらうか。けれども、そんな事は何うでも宜い。今の僕は、たゞ何となく寂しいのだ。寂しくて、寂しくて、しやうが無いのだ!」

三、半生轉々

謂ふ所の浪人となつてから、十ケ月は瞬き一つする間の速さ

に過ぎた。東京朝日を罷めた時には、七ヶ月ほど遊んで居た。都新聞を退いた後には、八ヶ月ほど無職で居た。それでも足掛け二十三年、滿二十二年間は、新聞社を背景とした登場役者の一人であつた。

今日まで著した本は、二十二三册にもなつて居るが、たゞそれだけの勞作が、私の記者生活に於ける全部の所産であるかと思ふと、乏しいやうな氣持もする。また「私のやうな無學な者が、能くこれだけの爲事をして來たことだ」と云ふやうな、自ら慰める氣持も起る。小學校を卒業しないやうな、ほんとに無學な私でありながら、與へられた職能だけは、何うやら此うやら、不思議に果して來たことよ。時代が私を容れてくれたのか、私が時世に乘じて來たのか、二十餘年の過ぎた世路は、決して不遇でもたく、悲運でもなかつた。

「お父さん、ほんとに馬鹿ねえ。東京朝日のやうな大きな立派な社にジツと辛抱して居さへすれば、今頃は月給も二百圓以上になつて、安心して一生、食つて行けるのに……。ほんとに、あなたには浮氣心があつて、いけませんわ！」

と、今でも時に際しては、妻の愚痴を聞くことがある。男子の出處進退を、輕々にする事の無謀な所以を、まんざら知らぬ私でもなかつたが、自分で投げた賽の目が、巧く當るも一生なら、拙く轉んでしまうのも、運だから仕方が無い……と、私にだけはあきらめがついて居る。生意氣でもあつたらう、自分で自分の立場と云ふものを、自惚れ過ぎて見て居た點もあつたらう。けれども今更、そんな過ぐ世の總勘定をすることは、暗い悔の半生を、我から逆に辿るやうで、徒らに恨を殘すに過ぎぬ。

「人間の一生にはね、自分の力では何うすることも出來ない事があるのだ。半分以上は運だからね……」

と、私の逃げ道は、何時も此の一語であつた。

四、古い殼を

その過ぎ去つた二十餘年を、私は今、胸の中で繰返しながら、原稿紙に向つて居る。此の大浚へをした上で、何も彼も新規蒔直しにしませうと、四五年前から胸算用だけは立て居た。「新聞記者の二十年」何だか平凡たやうでもある「一記者の半生」これも月並な標題である「新聞記者懺悔錄」さう大した懺悔も無いが、書けばこの標題の下に書かうと、ポツ〳〵回想の糸を手繰つて、記憶の整理に取かゝつて居た。

けれども、新聞社に籍を置いて居るのでは、實感が現實にはかり印して、思ひ切つた筆を下すことが出來ぬ。自らの愚を明

けるにしても、或は天下の記者先生を罵るにしても、親しく新聞社の祿を食むで居ては、何となく後めたくて、筆の運びも澁り勝ちである。私はさう思つて、年來の計畫でありながら、大正十二年の今日まで、この「懺悔錄」の腹案を、腹案の儘で過して居た。そして今は幸か不幸か、私はたゞ一人の私となつて、此の物語めいた一篇に、何の顧慮も心配もなく、筆を下すことが出來る境涯に置かれたのである。

「ふん、松崎が記者懺悔だつて……チヤンチヤラ可笑しいや。新聞界の失敗者、異端者が、何を咆吼することやら……」

と、唯我獨尊の記者先生達から、反感に似た心持で、見られるやうな事もあらう。或は

「四十五六の働き盛りで、懺悔も糞もあるものか。そんな事を書く暇があつたら、もつと本でも讀めば宜いのに……」

と、叱りさうな友達の顏も見える。けれども今の私の心持は、これ一つを書いた上で、將來の自分の殼を、全く脫ぎ捨てしまはうとの希望がある。絕望の懺悔でなくて、希望の告白である事に、乞ふ、意を安んじて貰ひたいと、心から念じて、書いて行かう。

平凡無爲な一記者の半生でも、追憶の場面〱には、風雨二十年の足跡が、決して一筋道ではない。——

五、大阪新報

新聞界の大道を、歩いて來た一筋に變りは無いが、然し其の時々の喘ぎには、樣々の迂餘曲折があつた。二十三歲の夏八月十日から、二十五歲の暮二十八日まで、最初に私を哺育てくれたのは、大阪の大阪新報社であつた。

月給十圓から十七圓まで、二年五ケ月の歲月に、私は妻を娶り、良人となり、何時しか父となつて居た。經濟部の相場記者にスタートを置かれた私の記者生活は、明治三十二年にして、祝福が多かつた。洗ひ晒した久留米絣の單衣に、黒木綿の兵兒帶を締めて、東區南久太郎町の紙問屋に、生れて初めて新聞記者の名刺を使つた時、私は何も知らぬ小僧上りの若者と言ふに過ぎなかつた。

「あんた、新聞屋の新米はんやな。紙の相場聞きやかて、和洋紙いろ〱おまんがな。それにな、今は忙しうおます依つて、明日(あした)にでもなつたら、また來て見なはれ……」

若い二十六七の手代らしい男に、斯う突離されてしまうたで、私は幾度、その紙問屋の前を往復したことか。その前日までは京都の關西貿易合資會社に、月給八圓の雇員として使役され、輸出扇子の仕分け係を勤めて居た私にとつて、思へば何と

云ふ身世の急轉であらう。「新聞記者になりたい」一心を、大阪朝日新聞に居た浩々歌客、角田勤一郎先生に訴へて、日參と矢文の願意が、やつと叶つた嬉しさに、私は有頂天になつて居た。

その頃の大阪新報社は、北區出入橋の東に在つた。茅原茂君や、小手川豐次郎翁が主筆職を退いた後、社長坂根正夫、政治部長に菊池悟那、社會部長結城禮一郎と云ふ、若々しい顏觸れだつた。平家建の古い洋館で、編輯局にはガタゴトと、下駄穿きの儘で出入して居た。平板の印刷機械で、紙數も勢力も微々として居たが、それでも朝日、毎日に次ぐ「第三紙」としての存在を知られて居た。

私はそこを巢立の家、搖籃の家として、長い長い記者生活の門出に就いたのである。

六、有名記者

その頃の大阪は、新聞界もまだ若くて、やつと「日本新聞史」の第二期に入つたばかりの觀があつた。大阪朝日と大阪毎日と、土佐堀川を隔てゝ對立して居る他には、日刊紙に大阪新報を有するのみであつた。そして吉弘白眼氏は、旬刊の「萬歳新聞」に依つて、强い怖しい刺戟を、大阪人の神經に投げ付けて居た。

大阪毎日の催した義太夫投票か何かで、大阪朝日と大阪毎日とが、猛烈な筆戰をしたのも、恰度その時分のことであつた。

大阪朝日社長村山龍平、上野理一と云ふ名よりも、大阪毎日社長原敬と云ふ存在よりも、私の羨ましかつたのは、有名な記者達の名聲だつた。大朝には渡邊霞亭、須藤南翠の他に、角田浩々歌客、根本吐芳、岡田翠雨、河野鶴浦など云ふ所謂軟派の人々が居た。久松定憲、西村天囚、鳥居素川、關新吾、本多精一、原田棟一郎、岡野告天子、吉村聯南、木崎好尚、磯野秋渚など云ふ名も、私には或る憧憬れの意味があつた。

大阪毎日の方には、渡邊巳次郎、高木利太、高石眞五郎、春秋源左衞門、奥村不染、松内冷洋の他に、菊池幽芳、水谷不倒、平尾不孤、久留島武彥、香川蓬洲、富樫柳水、山下雨花などの面々が聲名を馳せて居た。幽芳の小說「己が罪」に次いで、中村春雨の「無花果」が、讀者の好評を博したのも、その頃のことであつた。經濟部の外交に採用されて、生れて初めて新聞社の門を出入した私は、無味乾燥な相場係よりも、出來ることなら社會部の方へ廻して貰ひたいと、それとなく希望を申出たりした。幼い頃から文藝の趣味を知つて、一度は「小說家になりたい」希望を抱いて居た私にとつて、それは當然の志望なので

あつた。

「さうだ、君は警察廻りの方が、大に手腕を揮ふことが出來やう。來月から其のやうにしてあげやう」

斯う云つて、私を手引してくれたのは、その頃、甲斐一郎と署名して、印象風の觀察記事を書いて居た結城禮一郎氏であつた。

七、甲斐一郎

私を大阪新報に入れてくれたのは、角田浩々歌客であるが、私に記者入門の初歩を授けてくれたのは、甲斐一郎氏であつた。この浩々歌客と結城禮一郎氏とは、共に三四年前まで國民新聞社に居て、「民友社の小使」であつた私と、一面の識があつたことは、淺からぬ因緣と云ふべきだつた。私は其の關係を賴つて、浩々歌客を訪問し、やがて結城氏の知を受けるやうになつたのである。

その甲斐一郎は、大阪新報に居て、異常なる働き振りを示して居た。社會部の方には、渡邊霞亭の門人、江上朝霞と云ふが居たけれど、殆ど結城氏一人が切廻して居た。訪問をする、續き物を書く、編輯をすると云ふ風に、然も何か知ら、紙上に新味を齎して居た。社會部の警察廻りになつた私は、午前中は一二の警察署を訪問し、午後は社に在つて、結城氏から糊と鋏の使ひ方を敎へられたり、續き物を書かせられたりした。「夢野川」と云ふやうな、短篇小說みたいな物を書いたり、「人力車夫」とか、「新聞配達」とか題した閱歷物を初めて書いたのも、その頃のことであつた。

「何でも構はずに、ドシ／＼書くことさ」

私は其の言葉に力を得て、何時も署名したものを書いて居た。その頃、甲斐一郎の「染屋訪問記」や、「千日前」と云ふ續き物は、一種の驚異に似た賞讃を、先づ同業者間に博して居た。觀察の新奇な事や、文章のスタイルの淸新な事や、とても當時の朝日、每日には見られぬ面白さがあつた。私は此の甲斐一郎の鼓舞と鞭韃とに依つて、何んなに爲事の上に自信を得たことであらう。

その結城氏は、去つて大阪每日に入り、新に大阪每日から山田敬德氏が、社長として大阪新報に乘込で來た。坂根翁は社を退いても、菊池氏は勤續したが、編輯の方には大每から、富樫柳水氏が入社し、別に社會部の方には、向井藻浦君が入社したりした。

私の大阪新報に於ける生活にも、小さな波紋が及ばぬ譯にはいかなかつた。

八、劇評記者

富樫柳水は、私の月給を十四圓に增俸してくれ、向井菜浦は私のために、妻を媒介してくれた。私は結城氏を失つたけれど、何の心配もなく、勤めに勵しむことが出來た。

高田、喜多村、秋月、小織の新派劇團が、道頓堀の朝日座に於いて、初めて芦花の小說「不如歸」を芝居に演じたのも、その頃のことであつた。社會部の警察廻りの外交で、電話係で、編輯の助手で、新派劇の劇評家にもなつて居た私は、「劇としての不如歸」と題する四段の長文を、月曜の紙面に書いたことがあつた。

「君、面白い物を書いたね！」

と、結城氏がわざ〳〵大阪から電話で賞めてくれたのも、また新俳優井垣增太郎君が、私を社に訪ねて來て、

「秋月桂太郎が、一度、お目にかゝりたいと云つて居ます。社の方を罷めて、秋月の作者になつては何うですか。月に十五六圓は差上げるさうですよ」

と云つたのも、その劇評が出た翌日のことであつた。壯士芝居の角藤定憲や、洋行歸りの川上音二郎や、元氣の好い福井茂兵衛や、山岡如萍や、敎育劇の佐藤歲三などを知つたのも、その時分のことであつた。

その頃、「暮笛集」一卷に依つて、新體詩人として一躍名を知られた薄田泣菫は、金尾文淵堂の二階に居て、文藝雜誌「小天地」を主宰して居た。浩々歌客の評論、平尾不孤の文藝評、泣菫の散文詩などの他に、私も其の爲事の一部を授けられて、常に泣菫の許に出入して居た。國木田獨步の「牛肉と馬鈴薯」が小天地に依て發表されたのは、明治三十五年のことであつた。

私は新報の紙上に、「大阪精神病院」とか、「賣笑婦」とか、「木賃宿」とか云ふ續き物を書いて居た。そして社は、出入橋から東區今橋通りに移ると共に、新に横井時雄氏が、主筆として入社した。

社の金廻りは、次第に良くなつた頃であつた。

九、原白頭翁

自分の署名した記事が、初めて新聞に揭げられた時の喜びは、何にたとへやうも無かつた。私はゲラ刷を懷中しては、一日に三度も四度も、繰返し〳〵讀だものである。

今橋に轉じた大阪新報へは、行友李風君が入社して、社會部に新鋭を加へたりした。富樫柳水の水のやうな小說に次いで、李風は海賊を題材にした續き物を書いたりした。

「何うだね、君も小説を書いては……。きつと受けると思ふがね！」

柳水氏に斯う云はれて、私は「黄金怨」と題する小説を書きかけたけれど、少しも自信が無くて、引下つたりした。初めて大阪の新聞社に入つて、宿屋住居の物珍しい横井時雄氏は、能く私を引張つて、千日前を歩いたものであつた。女の水に飛込む藝や、浪花節や、さうしたことにも、横井氏は驚異の眼を瞬つて居た。社には時々、原敬氏が白い頭を見せて居たが、その時にはもう、大毎の社長を辭して、北濱銀行の頭取になつて居たらしかつた。岩下清周氏なども、社の金主らしい面構へをして、月に二三度は姿を現して居た。思へばその頃から、大阪新報社は、北濱銀行の金を食つて居たらしく、金計係の人は、銀行から二人も來て居たやうであつた。社内の空氣が何となく、私には面白く無いやうに、感ぜられても來たのである。

「同じ新聞社に勤めるなら、朝日か毎日のやうな大きな社で、ウンと勉强したいものだ」

私はさう思つて、それとなく心持を、大毎の水谷不倒翁に告げやたことがあつた。それを富樫柳水氏が水谷氏から直接訊いたとかで、富樫氏は手紙一通で、私に退社せよと申傳へて來た。明治三十五年十一月、長男哲郎が生れたばかりで、私は一寸困つ けれど、別に狼狽へはしなかつた。毎日に入れなくても、朝日には入社が出來やうと、私は何か知ら、大丈夫のやうな心持がして居たからであつた。

明治三十六年の新年號限りで、「小天地」は廢刊となつたけれど、私の記者生活は、愈々多事多望の好運に際會したのである。

十、松島大火

その頃の新聞は、何んな大事件があつても、夜の六時か七時を、最終の編輯締切として居た。夜半の十二時、一時に締切るやうになつたは、日露戰爭が始つてからの事で、平生は午後の四時か五時になると、編輯局には一二人しか殘つて居ぬのが例であつた。

松島遊廓に大火があつて、全廓の過半を消失したのは、明治三十四年のことであつた。大阪新報の外交として、西警察署を受持つて居た私は、朝から午後一時ぐらゐ迄、大火の現場に出沒して、材料を漁り廻つた。朝日や毎日からは、五六人づゝの記者が出動して、各方面から大火の原因、燒失戸數、現場の模様などを、詳細に取調べて居た。そして翌日の新聞を見ると、二紙とも全ページを埋めて、詳細に記述して居たが、私は僅に

一段半、それも間違ひだらけの記述で、とても二大新聞とは比べ物にならなかつた。

「君一人だからね、仕方が無いさ」

結城氏はさう云つたのみであるが、私はそれから今日まで、火事の探訪と云ふと、非常に難かしいやうで、一度も要領を得たことが無かつた。吉原大火の時にも、扮装だけは甲斐〳〵しく、現場に馳せ付けたけれど、何一つ記事らしい物は書けなかつた。神田の本屋町の大火の時にも、僅に一段の雜觀記事を書いたのみで、事件の主體を握ることは、何としても出來なかつた。

「得手、不得手と云ふ以外に、一種の習慣性で最初に不成効に終つた同種の事件にぶツつかると、不思議に尻込みしてしまうのだね。外交記者には能くある心理狀態だよ」

と、一人の友達は云つて居た。朝日や毎日に出ぬ記事で、新報のみの特種だと確信が出來た時には、能く「朝日毎日は寢耳に水」などと、標題のわきに付けたものであるが、その時だけは、更に面目も顏色もなかつた。

その大阪新報を退社した翌年、明治三十六年一月十六日、私は大阪朝日新聞に入社した。

十一、さいや翁

入社したと云つても、それは渡邊霞亭氏や、浩々歌客の盡力に負ふところが深かつた。その前、須藤南翠氏に逢つた時には、

「新聞記者も君、案外つまりませんよ」

など丶云はれたが、私は最初から今日まで、今、かうして悔懺錄の發端を記述して居る場合でも、未だ曾て新聞記者の職業をつまらぬなど丶思つたことはなかつた。何んな人間の何んな一生にも、或る悔恨は附きまとふものだと云ふが、私は幸か不幸か今日まで、新聞記者たりしことを、心から少しでも、悔たことは無かつた。三人の男の子の中で、その方面に才能があり、燃えるやうな希望を有つて居るなら、一人が二人でも、新聞記者として世に送ることを、私は反つて好ましい事に思つて居る位である。

大阪新報社に居た頃、一ケ月ほど渡邊霞亭氏の宅に、厄介になつたことがあつた。私はまだ技術が未熟で、先生の地方新聞に送る小説の代作が出來なくて、期待に背いたほどである。それでも氏は、私を其の部下の一員に加へて、能く面倒を見てくれ、また新聞記者として、私の手腕を極度に、發揮し得る機會

を與へてくれた。最初は月給十八圓で、難波、天王寺、憲兵分隊と云ふ風に、警察廻りの探訪ではあつたけれど、編輯の手傳いもさせられたし、新派劇の劇評も書かしてくれた。大阪新報から大阪朝日新聞に、轉つたのみの私であつても、私の記者生活の世界は、とても比較にならぬほどに、多望な前途に祝福されて居た。

渡邊氏は編輯局に居ても、

「さいや、な、若し……」

と、童顔のニコ〳〵して、何時も屈托無さ相に振れ舞ふので、私達は霞亭翁のことを「さいや翁」と異名して居た、文章の早いこと、精力の絶倫なこと、この二つにかけては、眞に推服して餘ある人であつた。明治時代の殘した唯一の作者として、また軟派記者として「渡邊霞亭」の名は、永久に殘るであらう。

大阪朝日の生活は、私に教へられること多かつた。

十二、大阪朝日

狹い編輯局から、廣い編輯局へ、少數の仲間から多數の仲間へ――。大阪新報社を去つて、大阪朝日新聞社の門を入つた時、私は何と云ふこと無しに、充されたやうな氣持がした。記者としての出世の階段が　斯う易々と私の前に廻つて來やうとは、夢にも思ひまうけぬことであつた。

浮世繪の大家稻野年恒老人も居たし、洋畫の山内愚仙翁も居た。顏色の惡い久松定憲翁や、小柄な腰掛の關新吾老人や、背の高い西村天囚翁や、何となく老人內閣と云ふ氣持がした。色の白い精悍な本多精一氏や、獨逸から歸つたばかりで、鼻の尖を赤くして居た鳥居素川氏や、皆、一落一城の主らしい面構へをして居た。「人間も多いが世帶も大きいな」と、これが初めて、大阪朝日の編輯局に入つた時の、卒直な印象であつた。

その頃の大阪朝日は、土佐堀川に面した通りに、武家風の正門があつて、玄關から編輯局、すべて平家の日本建であつた。兩社長の居る總務局と圖書室とが、洋風の構へになつて居て、その間に便所への通路があつた。一ページ二十二字詰六段組と云ふ、べらぼうに舊式な五號活字で、まだ二段抜きの標題などは、何處の社も使はぬ時代であつた。全面を埋めるやうな大事件があつても、大みだしは二號に限られて居て、反つて外國電報の方に、一號の大活字が使はれて居た。寫眞版も今のやうに完全な物が出來て居ず、多くは繪畫で間に合せて、萬止むを得ぬものだけ、やつと不完全な寫眞版を、それも大朝だけで、使い初めたと云ふ頃であつた。

私が社會部の探訪記者として、何うやら此うやら自信を有つ

て働いたのは、大阪朝日に入つてからであつた。それにしても、私の搖藍であつた大阪新報の二年半に對して、私は感謝の心を獻げずには居られぬのである。

私は二十六歳になつた。大阪時代の第二期は、やがて私の前に、次々に展開した。

十三、日露戰役

明治三十九年十一月十五日、二十九歳の初冬まで、私は大阪朝日新聞記者として、日露戰役を經驗した。酒を飲むことを覺えたのも、女を漁ることに興味を感ずるやうになつたのも、その四年間のことであつた、

私達の同僚には、髭の立派な大村琴花や、頭の大きい山本光三や、金縁眼鏡を光らした秋山金東や、穢い洋服を着た武田何とかや、頭のツルリと禿げた吉原老人、齋木老人、加藤信翁と、頭數だけは揃つて居た。國民新聞社に居た軍事記者で、民友社の小使であつた私を呼ぶに「小使、小使」と言つて居た小林龍州氏も、黒い詰襟の洋服を着て、市役所係を勤めて居た。

「うん、松崎か、さうか、さうか。宜う來た、宜う來た。彼の時の小使が君かね。ふん、さうかなア。おい、宜しく頼むぜ……………」

など、人の好い小林氏は、軍人らしい相恰に笑顏を見せたりした。赤松鱗作、折井愚哉など云ふ畫家も居れば、西鶴張りの艶種書きをして、非凡な久保田小塊君なども居た。後年の代議士村松恒一郎氏も、私が入社した頃には、柳江と號する軟派記者で、文樂座の藝評に氣焔を揚げて居たのである。

社會部長須藤南翠の時代は過ぎて、翁は硬派の編輯整理の方に廻つて居た。小説續き物の作家としては、既に一家を成して居ても、社會部長としては初陣に同じ渡邊霞亭氏が、陣容を新にした所へ、私は入社したのであつた。瓦斯市營問題で、大朝が大に論じ立てたのも、堀江に六人斬の慘事があつたのも、貰ひ子七人殺しの椿事があつたのも、天保山沖で汽船沈沒、死者百餘名を算した椿事も、その四年間のことであつた。

けれども、一番大きな強い事件は、何と言つても、「日露戰爭」と云ふ大舞臺であつた。大阪朝日新聞の微々たる一探訪記者であつた私の上にも、この戰爭と云ふ大事件が、何んなに有力な試練となつたことであらう。

十四、補助記者

その頃の編輯局には、妙な階級的の差別があつて、編輯局に居て書いたり編輯したりする記者を内勤と云ひ、それを一人前

の記者に過して居た。市役所や府廳や師團や、警察や芝居や花街へ出入する者は外勤と云つて、「補助員」と云ふ名を附けてあつた。

從つて、午前中に材料を集めて來た者は、それを自分で原稿に書いても宜いし、少し大物になると、内勤の記者に話をして書いて貰ふやうな段取になつて居た。尤も其の頃の外交記者と云へば、足まめに歩いて、何うやら此うやら材料を取つて來さへすれば、それで事足りて居たのである。頭から文章を書くとか書かせるとか云ふ事は、問題となつて居ぬのであつた。

「松崎はん、今日は何うだす。何ぞ、おもしろい事、おましたかいな!」

「今日はあきまへん、不漁だつせ」

「さよか。何ぞ、絞り出しなはれな……」

「さうだんなア、一遍、考へまつさ」

萬事が此の調子であつた、警察事故と演藝記事と艶種と、たゞそれだけが社會部面の包括する材料なので、今から思ふと、實に他愛の無いものであつた。それでも、堀江の六人斬など云ふ大事件になると、現場の近くへ臨時出張所を設けて、部長を初め二三の人々が詰かけ、私達三四人の報告を受けては、次々に二三の人々が雑報に書いたものである。そして全面を埋めてしまつても、大標題は二號活字の「堀江の六人斬」と、たゞそれだけでも、可笑しく無い時世なのであつた。

「自分で探訪して、自分で書かなくては嘘だ。それでなくても、眞實を傳へ難いのに、聞いたのを話し、話したのを聞いて書く間には、事件の有つ氣分や眞實性が、次第に稀薄になつてしまう」

私が斯う主張すると、渡邊霞亭翁も、「さいや、さいや」と同意だけは表して居たが、それをさて實行する迄には、多少の時間を待たねばならなかつた。

十五、訪問記者

今から思ふと、馬鹿〳〵しい組織ではあつたけれど、記者先生と探訪者との間には、同じ職業でありながら、斯うした差別と階級とが、嚴として存在して居たのである。

その舊習を打破することに、最も機運を速めたのは、日露戰役の勃發であつた。同時に所謂三面の包括した材料の上に、「訪問記事」と「雑観記事」の二題を加へたのも、日露の役が齎した取材上の新味と云ふことが出來た。最初の戰死者であつた三浦中尉の夫人を、東區谷町の居に訪問したり、鳥海艦長林中佐の未亡人を汽車中に訪問したり、私の仕事は今までの型を破つ

て、忙しくなると共に、多趣味多方面に渉るやうになつた。
戰地に特派される從軍記者にもなれず、佐世保や舞鶴に出張を命ぜられる艦派員にもなれなかつたが、私は少しも口惜しいとは思はなかつた。留守師團の勤務に似た勞役にも、戰爭の色彩は次第に濃厚の度を加へて、晝となく夜となく飛廻るのが、私には愉快で愉快で堪らなかつた。午後の七時を最終として居た社會部の編輯締切も、十時、十二時になることが、珍しく無いやうに變つていつた。戰死者の姓名が入電すると、一兵卒の末に至るまで、その留守宅を訪問して、本人の閲歴や、遺族の感想を聞いたりした。
「忰が……さうだつか。いや、國家のためやさかい……、よう死でくれました……。一家の名譽、面目で御座りますよつて……」
など丶物語るのを、もつと力強く誇張して「遼東の野に壯烈なる戰死を遂げたる……」など丶、今から思ふと、よくもあんな大嘘が書けたものだと呆れるほどに、それでも當時は大眞面目に書き立たものだつた
内勤も外勤も、一人前記者も補助記者も、そんな事を云つて居る暇は無いほどに、新聞社の世の中は忙しく變つていつた。働いて働き榮えのある記者的職業の愉快さを、しみ〲と感じ初めたのも、その頃のことであつた。

十六、自轉車で

大阪毎日新聞には、山下雨之助と云ふ奇才が居て、千日前などの觀察記を書いて居た。松内冷洋と云ふ才人が居て、社會部面では前途を嘱望されて居た。田井洋公と云ふ若手が居て、メキ〲と手腕を上げて居た。
吉弘白眼氏は、赤色の「大阪日報」を創刊して、正岡藝陽や、長田秋濤や、佐藤紅綠の諸家を、入交り立交り客將に迎へて居た。鬼才宮武外骨翁は、「大阪滑稽新聞」と云ふ月刊雜誌を創刊して、奇拔な世相批判に、關西人の度膽を寒からしめて居た。「大阪朝報」と云ふ新聞が出來て、小田垣狂痴翁が自轉車で歩いて居たのも、その時分のことであつた
大阪には僅に巡航船と云ふ、石油發動機船が出來て、東横堀と西横堀と土佐堀川と堂島川とを運航して居た。人力車夫の職業を奪ふものだと云つて、車夫が此の船に反抗の氣勢を揚げたやうな、社會問題的の事件も、私達を忙しくした。社からは外勤員に社用として、人力車に乗る自由を與へて居たが、それでは費用と時間が不經濟だとて、自轉車に乗る事を命ぜられた。外交記者の中でも、若手の元氣な者だけが、喜んで自轉車を乗

廻した。その頃の自轉車と云へば、丁稚や小使や出前持の交通機關ではなくて、まだ紳士級の遊山用のみに供せられて居た。

自動車は未だ見た事も無いやうな、そんな物が此の世の中に在ることを、夢に想像したことさへ無い時代であつた。京都には木屋町の高瀬川のほとりに、小さい電車が動いて居たけれど、大阪市の交通機關と云つては、人力車か、巡航船か、此の二つしか無い世の中だつた。さうした時節に、私達は何んなに得意然として、社から給せられた自轉車に、乘り歩いたことであらう。

戰死者の遺族を訪ねるにも、出征軍人の家族を見舞ふにも、私は此の自轉車に乘つて、晝も夜も歩いて居た。堀江や新町の紅燈の巷に行くにも、自轉車に乘ることを忘れぬ程であつた。

十七、高利の金

私の月給は、十八圓から二十圓となり、二十二圓となり、二十五圓となつて、戰爭が終る頃には、二十八圓に上つて居た。そして私は何時の間にか、二人の子の父となつて居ながら、一人の女に熱い戀をして、妻や子や家を忘れるやうな、月日を送つて居た。

百圓の證書面に對して、受取る金が七十八圓五拾錢也、それを十三圓づゝ十ケ月に月賦で返濟するやうな、高利の金を借りながら、北の新地、堀江、南地と云ふ風に、遊び廻つて居たのも、二十七八歳の頃であつた。秋山金東、榊原信など云ふ同僚と共に、仕事にも努力したが、酒と女の方面にかけても、人一倍の勉强をして居た。村井兄弟商會の大阪分工場に居て、飲み覺えた酒の味に、私は次第に溺れるやうになつたのである。

月末になると、お茶屋の女將や女中や、高利貸の手代などが、社の應接室に頑張つては、私達を待つて居た。何も知らぬ顏をして居られた村山社長や、上野社長の眼にも、此の奇怪な訪問客の姿は、再三ならず映つたことであらう。下足番のおばさんに頼んでは、巧く撃退して貰つて居たが、それでも二十五日の月給日になると、いろ／＼な債權者が押寄せて居た。月給を貰つても、それは大方空ばかりの時が多くて、何時も／＼前借と、如何に若氣の至りとは云へ、放浮至極のことであつた。大阪朝日と云ふ大きな信用を背景にして居たればこそ、惡い不義理もせずに濟だやうなもの〻、思へば其の日／＼の危なかしい世渡りをして居たものである。

何かと云へば歡迎會、送別會と、社の方にも飲む機會は多かつた。殊に日露戰役の最中は、社員の出張、往來、出入も激しかつたので、何時でも堺卯か泉御で、夜を更かすのが例であつ

た。

月給も安かつたが、遊びも非常に安かつた。何んなに飲でへどれけでも、十圓と云ふ割前を取られたことは、たゞの一度も無い大阪なのであつた。

十八、生死不明

日露戰爭中には、留守勤務の私達の上にも、いろんな悲喜劇を見物することが出來た。

二錢銅貨大の軍神廣瀨中佐でも、私は並々ならぬ苦勞をして、感情を僞つた誇大な記事を、一回ならず書かねばならなかつた。福井丸の船長を訪問して、哀れツぽい二回つゞきの記事を書いたり、戰死兵の葬儀に列して、悲し氣に弔詞を讀だり、いろんな場面が次から次へと、若い私を興奮させた。

最も奇抜であつたのは、金州丸で行方不明になつた特務曹長、鷲康勝氏の事件であつた。大阪每日の方では、何處までも行方不明として報道したが、大朝では木崎好尙氏が編輯して居て、「壯烈なる最期を遂げたる」と云ふことに、確定して書いたのであつた。河內在の鷲氏の家鄕でも、行方不明と報じた大每の態度を、沸え切らぬ事に思つて、大朝の「壯烈なる最期」の方を當然の事にも思ひ、また、さう信じてしまうのが、當時の軍國美談的心持なのであつた。

一か二か、甲か乙か、是か非か、黑か白か、編輯局に達した所報が、何ちらとも判明しない場合が、どんな事件にも度々あつた。不明を不明として記載することに、何の心殘りも無い筈であるが、編輯記者の心理狀態と云ふものは、また一種特別のもので、事件の性質に依つては、何とか何れかへ、片付けてしまひたいのが常である。殊に一世を擧げて、戰爭の犧牲者を謳歌する氣分が、國の隅々へ、人々の心々へ、充ち滿ちて居た折柄とて、「行方不明」など云ふもどろかしさでは、木崎氏の個人的感情と編輯心理とが、承知しなかつたのであらう。それに最う一つは、木崎氏の記者としての第六感が、「鷲特務曹長は、割腹でもして死で居る」と、力強く囁いたからであらう。

そこで私は命ぜられて、星月夜を河內在に出張して、「鷲特務曹長の家鄕を訪ふ」と題した三回つゞきの記事を書いた。大每では行方不明の卑怯者でも、大朝では壯烈な戰死の勇士として、傳へられた譯であつた。

十九、生還曹長

特務曹長の家鄕では、一家一門の面目ばかりでなく、一村一郡の名譽この上無しとあつて、やがて盛なる村葬の儀が執行さ

れた。大毎からは村上と云ふ軍事記者が出張し、大朝からは木崎氏と私とが列席して、村人に歡待された。西村天囚翁の作つた莊重端厳な弔詞は、木崎好尚氏に依つて、靈前に献げられたりした。

昔も今も、事毎に商賣敵であるところの大毎は、その盛な葬儀を傳へるにも、極くあつさりとして「行方不明の特務曹長鷲康勝氏の葬儀は昨日……」と云ふ風に、見やうに依つては何處までも、皮肉な筆法で報じて居た。大朝の方は私の本記事に、木崎氏は雑觀を書くと云ふ風で、まるで大朝社が葬儀を營んだやうな、力の入れ方であつた。その葬場でも村人達は、大毎の態度を不快がり、大朝の確定的勇士扱いに、随喜して居る樣子が見えた。

行方不明が、何時までも行方不明であり、壯烈なる最期が、何時までも壯烈なる最期であれば、別に問題は起らぬのである。けれども私達に依つて、壯烈なる最期を傳へられ、私達に依つて、盛大な村葬儀を營まれたところの鷲特務曹長は、それから一年ほど經て、生きて其の家鄕に還つて來たのであつた。死だのでもなく、行方不明なのでもなく、實は捕虜になつて居たのであるが、その捕虜になつた事實が判らぬ以上は「行方不明」の大毎の方が、最後の勝利と云はねばならなかつた。「壯烈なる最期」の方が、大和魂らしくはあるけれど、記事の上では、大朝の私達が敗となつた。

「生還せる鷲特務曹長」と云ふ記事を、私は罪亡しのために、書かねばならなかつた。與謝野寛氏に似た相恰の男で、面目無さ相にして居るのが、反つて氣の毒に思はれたりした。

「大きな喜劇やないか。見當違ひも此の位になると、目覺しうと宜いやないか……」

木崎氏は斯う云つて、身體を揺り上げるやうに笑つて居た。然し笑つても笑つても、笑ひ盡くせぬものが、私の心の底には流れて居た。

二十、戰爭悲劇

肺を病む三十女房が、蚊帳の中に絞殺されて居た事件も、戰爭悲劇の一つであつた。

天王寺署の管内も、裏長屋に起つた出來事で、私は知合の刑事に連れられて、現場を見に行つたりした。後備に召集されて、出征軍に加はることになつたけれど、不治の病妻を殘して、その上、貧苦に陥れることが、男の心には何としても忍びなかつた。因果を含めて、一思ひに殺した上で、自分は御國のお役に應じやうと、男はさう決心したのであつた。

二人は蚊帳の中で、別れの水盃を交した後、男は古手拭で、病妻の頸を絞めやうとした。殺されやうと覺悟して居る女房でありながら、男は何としても、手に力が入らなかつた。何の怨も憎みもなくて、人を殺さうとするには、餘りに弱い眞面目な男の心であつた。「酒にでも醉つたら……」男はさう思つて、一升徳利に五六合の酒を貰て來て、グデン／＼に醉ふまで一氣に飲み盡した。そして、午前四時頃になつて、寢て居る妻の姿を拜みながら、遂に絞殺したのであつた。

死體の枕許には、その一升徳利が轉んで居て、女の蒼白い顏には、蠅が五六匹たかつて居た。最初は自殺のやうにも思へたけれど、頸部の紫斑色した點や、一般の狀況に依つて、他殺と云ふことは私の眼にも合點された。

「君を連れて來るのやなかつた。これは大事件や、署長や裁判所に知らせにやならん」

刑事はこんな事を云つて、一應本署へ引揚げたが、そこにはもう絞殺した良人が出頭して居て、何も彼も自首して居るところであつた。

「女房殺し」と云ふ標題は平凡であつたが、私は此の事件を、二段半の長きに亘つて細叙した。そして此の記事が動機となつて、辯護士中井隼太氏が、無料で辯護人となり、執行猶豫の判決が下つたのは、三ケ月の後であつた。

三面の雜報でも、書きやう一つに依つて、生命の血が流れる――。私はさう思つて、愉快で愉快で堪らぬのであつた。

廿一、非媾和熱

日露戰爭も終局を結んで、媾和を非とする叫びが、日本全國に漲り渡つた頃。大阪朝日は二度も三度も、當局の忌諱に觸れて、二度も三度も發行を停止された。長い時は一ケ月に亘つて、新聞の發行を休んだこともあつた。

當時の大活躍は、何と云つても鳥居素川氏が、中心人物になつて居た。「敵は本能寺に在り」と云つた風の短文や、「一劍天に倚て寒し」と云つた風の挿繪は、見る者にキビ／＼した刺戟を與へた。西村天囚翁が書いた「和議を破棄し給はん事を願ひ奉るの書」などは、當時の人心に強く觸れて、爲めに紙數の增注文が、日を追うて殺倒する景氣であつた。

新聞紙を奪はれた社では、その儘でジツとして居るやうな、無爲無策に安閑としては居なかつた。編輯局では俄に演說隊を組織して、大阪、京都の兩府に亘り、言論に依て非媾和熱を鼓吹する事になつた。府市部に居た高松正道、名古屋支局長の小山松壽、通信部長の牧放浪、通信部の小池國美、その他の面々

が演說會に出張した。社會部からは私が參加して、生れて初めて演壇に立ち、生れて初めて政談演說をしたほどであつた。編輯局へは休刊中でも、社長以下一同が出勤して、時の內閣を倒さねば休まぬと云ふ氣概が、給仕の末に至るまで、その面上に溢れて居た。

大阪每日の方でも、非媾和に人氣を呼だ大朝に乘じて、遲れ馳せながら同じ筆法となり、同じ演說隊を特派したりした。大阪と京都の郡部は、此の兩社の演說隊に依つて、何處も彼處も人氣が引立つて居た。大每の方からは福良竹亭、松內冷洋、安藤枘面坊などが、府下を巡回して居た。京都府木津の木津座では、兩社合同の演說會を開いたが、社からは牧放浪氏と私だけが出張した。私の處女演說は、

「內務大臣芳川顯正の聲が……」

と叫んだのみで、十分間も演壇に立往生するの失態を演じた。それでも聽衆は熱狂して、「大阪朝日萬歲」などゝ、歡呼するのであつた。

廿二、浮かれ節

東京で燒打が始つた時、私は生れて始めて得たゴノコツケン菌のために、苦痛を忍び〳〵出社して居た。「東京は第二の露都」と題した社の號外が出た頃には、もう一步も步けなくて、宅でウン〳〵唸つて居た。號外の鈴の音に依つて、大阪市中も何となく騷々しく、ジツとして居られぬやうな氣持がした。

神戶監獄に少年感化船が出來て、淡路の洲本まで便乘したのは、まだ病氣の苦痛が烈しい時であつた。大朝を去つて、大阪每日に入つて居た角田浩々歌客が、大每から感化船に出張した。私のその記事は、五回に亘つて欄頭に揭載されたが、無住所の老探訪小川定明翁は、面と向つて激賞してくれたりした。私は其の頃から、精神病院、感化院、育兒院、貧民窟、木賃宿浪花節などに、獨殊の興味を感ずるやうになつて居た。

關西で浮かれ節と云ふ浪花節を、新聞紙上に紹介したのは、大每の山下雨之助と、私とが最初であつた。東京の國民新聞でも浪花節の流行とか題して、永井鳳仙君が一家の卸見を披瀝して居た。私は「勞働者の唯一の慰安は、浮かれ節であります。その哀調には何となく、心を引入れられずには居られません」と云ふ風に、一回限りの感想めいた記事を書いた。「好い所へ氣が付いたな。あれは名文ぢやつた」などゝ、西村天囚翁に褒められたりした。少しでも新しい觀察をし、少しでも新しい文章でも書けば、それが忽ち世に知られるやうな、時世なのであつた。

「浪花節では、先づ桃中軒雲右衛門さ。琵琶調に名古屋節を加味して、一家を成して居るのだ。大阪の浮かれ節は何うだね」

と、旅館花屋に宿泊中の古賀廉造氏から、私は初めて、雲右衛門の存在を教へられたりした。「新聞の雜報も、浪花節の意氣でいかなくては、讀者の胸をつかめない」と、私は心からさう思つた事さへあつた。

浪花節の中にも、人間の生活相は流れて居た。

廿三、父の面影

故郷から迎へた父とは、僅かに四年足らず同棲したのみで、明治三十九年の七月二十五日には、その亡骸を長柄の齋場に葬らねばならなかつた。此の父の一生を想ひ起しただけでも、私には一篇の「人間記錄」が受けさうな氣持がして居る。

父は死ぬる二年ほど前から、突然、聲の出ぬ病氣に取つかれて居た。一種の腦溢血症狀であつたが、最後には涎を唾らして、骨と皮ばかりに痩せて、心殘りの多い生涯の幕を閉ぢた、

十五歳で死別れた母は、私が七八つの頃から、キリスト教を信じた人だけあつて、何處やらに怖い風情が見えて居た。五勺か一合の酒に醉つて、陶然として歸つて來た父に向つて、何事か口八釜しく罵り立て居た母が、私には恐くて／＼しかたがなかつた。

父は好人物であつた。私が北の新地の女の許に行つて、二日も三日も歸宅せぬことがあると、何時も心配しては、社の門前に來て淋しさうに彳んで居た。そして私の顔を見ると、嬉しさうにニコ／＼笑ひながら、何か書いた紙片を渡すのであつた。

「昨夜子供が生れた、男の子、母子とも健全、金が一文も無し、今夜は歸るか」

と、お家流に書いてあつたりした。仇し女の情にほゝけて、宅を外にして居たことが、罪深いことのやうに、思はれたりした。姙娠中の妻に心配をかけたり、病父に苦勞をかけたり、何と云ふ不貞の良人であり、不孝の子であつたことか。如何に物價が安かつた時とは云へ、二十八圓の月給から、八圓の家賃を差引いた殘りで、何うして笑つて暮せるであらう。記者としては何うやら此うやら、充實した世の中を送ることが出來て居ても、人間として、良人として、父として、子としての私は、放埒至極の痴漢に過ぎぬのであつた。

父の亡骸の前に通夜しながら、女に宛て長い長い手紙を書かずには居られなかつたほど、二十九歳の私は、痴情の中にほゝけきつて居た。

廿四、左衛門氏

國民新聞の吉野左衛門氏から、「東京に來て國民新聞に入社して、大に活動して見る心持はないか――」と云ふ手紙を受けたのは、明治三十九年十月中旬のことであつた。

「東京へ行つて、記者として働きたい」

と、東京朝日から來阪する人々を見るにつけても、私の心は燃えさかつて居た。酒と女とに遊びの心は爛れて居ても、爲事、勤務と云ふ方面にかけては、人一倍熱意と眞面目さとを、私は失はずに有つて居た。幸堂得知老人や、半井桃水翁や、饗庭篁村老や、右田寅彦氏や、さうした人々を見るにつけても、私は東京に出て、東京の社で、働いて見たい希望に充ちて居た。

そこへ吉野氏からの手紙は、渡りに舟のやうな氣がした。國民新聞社には、十年前の明治三十年、月給六圓の小使として雇はれて居た因縁がある。その社に十年後の今日、記者として迎へられると云ふことが、何よりも私には嬉しかつた。「月給は當分の間四十圓に候へども、貴兄一家の生活に就ては、決して御心配御無用に願度く候」と、吉野氏の手紙には書いてあつた。「馴染の深き大阪を去らるゝ事は、情に於いて忍び難きもの可有之……」とも、叮重に認めてあつた。「東京病」とでも云つて宜いほどに、東京の世界に憧憬れて居た私の心は、遮二無二、吉野氏の手紙に依つて、動かされたのであつた。

それにしても、私を四年の間、育て教へてくれた大阪朝日を去ることに、私は未練が無いと云ふことは出來なかつた。同僚や先輩にも可愛がられ、兩社長にも存在を認められて、益々前途の多幸が見えて來た際、自分から退社を申出るのは、餘りに自分勝手のやうな、餘りに我が儘千萬のやうな氣持さへしたのであつた。

けれども、多望な前途への一轉機を、感情のためのみでは、見のがすことが出來なかつた。

廿五、別れの盃

第二の故郷大阪よ、左樣なら、左樣なら……。

私はこんな心持になつて、いそ〳〵と上京の準備に着手した。單身で一先づ、上京して、然るべき借家を求めた上で、妻や子供は後から迎へる手順にした。着いた其の日から、直ぐにでも働かねばならぬ身世の多忙さでは、途中で道草などを食ふて居る暇とてはなかつた。

社の人々は別れを惜んでくれたし、日野國明、中井隼太、宮武外骨、吉弘白眼、白川朝吉、武内作平、安藤桂の諸君も、中

の島の銀水樓で、別れの盃を擧げてくれた。

「お互に媾和を非とする運動では、國民新聞も敵の中に數へたものだが、過ぎ去つてしまへば恩怨二つながら泡沫さ。君も東京へ行つたら、更に大に社會記者として、手腕を揮つてくれ給へ！」

中井辯護士の挨拶には、何となく激越した調子があつた。大阪精神病院のドクトル山本宗一氏や、壯士俳優の角藤定憲君などからは、餞別の贈り物を受けたりした。

東京、東京――、私の心は「東京」の二字に燃えて居ながら、住み馴れた大阪を去ることに、輕い哀愁を感じて居た。二男の誕生前から、父の死後に至るまで、妻に隱れて戀心を寄せて居た新地の女に別れることが、大阪を去る悲しみの中の、最も大きな強いものであつたことを、私は何うすることも出來なかつた。

「あんたはんも、いよ〳〵東京やさうだすな。ま、出世のこつちやさかい、お目出度う云はんなりまへんなア……」

私を喜ばなかつた女の母親は、斯う云つて牛肉鍋の馳走をしたりした。

「大阪に最後の牛肉鍋だんな……」蒼白い顏をした女は、默つてうむ向いてばかり居た。受けた盃の中に、又しても流れて落ちる涙と一緒に、私は三四杯立づゝけに飲んだ。

それから、足掛十八年になる。

—大阪の卷—（完）

天民附記――大阪の卷には、まだ書き落した數項目がありますけれど、他日訂正いたします。次號には「東京の卷前期」として、德富蘇峰先生にさゝげる一篇を書きたいと思つて居ます。

A夫人の肖像畫

山川亮

何時頃からか、私の頭の中には不思議な一個の顔が住むやうになつた。それが如何して私の頭の中に入つて來たか、それに就ては私は何も語ることが出來ない。唯、蒼醒めた憂欝な顔が、絶えず頭の奥から私を眺めてゐる。私の心は、その憂欝な顔の捕虜となつて、片時も自由を感じたことがない。

私はその顔に就て、自分の記憶を樣々に辿つてみるけれど、何一つこれといつて思ひ當るものもない。漠然と心の底に感ずることは、それはずつと昔へのことに相違ないと思はれるが、何處かの町で、偶然に行逢つたに違ひないと云ふことである。その會合が不意であつたやうに、その別離もまた不意であつたに違ひない。この行摩りに、不圖見懸けた顔の一個が、何故、私の心の底にその姿を留めたのか。そして、その年月も場所も、その時の光景ですらも、忘れ果てた今日まで、その顔ばかりが、恁うも鮮やかに殘つてゐるのか。そしてその顔が恁うも不思議な魅力で、私の心を捉へてゐるのか。總べて私には不可解の事であつた。

私は悩ましい日と月とを過した。自分の書齋で、明るい電燈の下で、好きな書籍に讀み耽けつて居る時にも、ふつと顔を上げると、この憂欝な顔は眼瞬もせず凝つと私の方を眺めて居る。晝間、事務所の卓に凭れて、專心に寫字をして居る時に、疲れた手を休めて輕い吐息を洩す時に、氣がつくとこの憂欝な顔は鋭い眼眸で私の方を眺めて居る。そればかりか、街路を歩いてゐてさへも、澤山の往來の群衆の中から紛れもせずに私を發見して、やはり私を見守つてゐる。私は思はず立止まつては、その執着の深かい不思議な顔に、恐怖をさへ感ずるのであつた。

『何といふ奇怪なことであらう。何人の顔であらう。この顔が自分と何の關係を持つてゐるのであらう』。私は恁う呟かずにはゐられなかつた。

然しそれから間もない、ある麗かに晴れた日の午後、私はあ

る町角のカフェの椅子に腰かけてゐた。それは五月末の、春から夏に移り行かうとする慌しさが、空にも地にも流れてゐる時節であつた。トスカに似たものが、絶えず私の心を哀しく苛立たせてゐた。私の身も心も物憂く疲れ果ててゐた。私は餘り熱くもない、不味いコーヒーを啜りながら、玻璃戸越しに、戸外の往來を眺めてゐた。

朗かな日の光りは、街中に照り輝いて、影にも光りにも、その色の强さを誇つてゐるやうに見えた。その裡を動く物の姿は、地面から浮上つて漂ふやうに思はれた。私の心は、その光りの中にでさへも、哀しみを嗅ぎつける程に、重苦しく沈んでゐた。そして、その心の底の方では、やはり例の不思議な顏が、私の擧動を凝つと見守つてゐる。私は思はずコーヒー茶椀を手から取り落さうとした。そして視線を遠く町の四辻に走らせた、その時である。私は自分の心の奥に絶えず住んでゐる顏——その顏と寸分の相違のない顏の持主が此方へ歩いて來るのを發見した。蒼醒めた額、何事が秘密を包んでゐる眼眸、慾望に疲れきつた憂鬱なその全身——光りの波の中を泳ぐかと思はれる程に、靜かにしなやかに群衆の中を此方へ歩いて來る女の姿は、不思議にも蒼く透きとほつてゐるやうに私には思はれた。

この女を發見した瞬間から、私の心臓は萎縮して終つたかと思はれた。奇妙な、恐怖の時に感ずるやうな惡寒が、私の背筋を流れ下つた。

『やはり存在をしてゐたのだ』と私は口の中で呟いた。『それにしても、何といふ不思議さだ、これが運命といふものであらうか……』。

突嗟に私はその女——私の心の奥に長い間住んで、私の日々を絶間もなく見守り、その見えない兩腕の中に私を堅く抱擁して來た所の女——を追跡しやうと決心した。私は急いで勘定を拂ふと、風のやうにカフェを拔け出した。そして、女が先刻と同じやうに此方を向いて歩いて來るのを見ると、私は自分が女と擦違ふ距離を目測して、街の電柱の片蔭に佇んで、女の近寄るのを待つた。女は直ぐ私の傍を擦違ふ程に近く通り過ぎた。私は女の通り過ぎるのを待つて、三間ばかりの距りをつけて、何氣ない風でその後から歩いて行つた。背後から見る女の姿は肩の邊りが妙に骨張つて見えた。日の光りを遮ぎる初夏の雲が、時々、大きな影を地上に落しながら大空を流れて行つた。そのうら哀しさを誘ふやうな陰影の中に置かれた女の後姿は、夢の中の人物を眺めてゐるやうな不思議さを私の心に起させた。そしてその夢の中に漂ふやうな氣持で、私の心は輕々としてゐた。重苦しい憂鬱も——それに驚ろいたことには、長い間私の胸の

中に住んでゐた例の顏が、何時の間にかこの胸から拔け出てゐるのであつた。私は夢の記憶を辿るやうな心持で、この女の姿を追跡して行つた。

不思議なこの女は次第に本通りから反れて、寂しい横丁へと歩いて行く……

『何處へ行くのであらう』。恁う思ひながら、私は何處までもその後を追つて行つた。女は私が追跡してゐるのを知つてか、知らずにか、一度も振向くこともしなければ、立止ることもしない。知りぬいた道を歩いて行くやうに、唯すたすたと歩いて行く。疑はしさうに四邊りを見廻すのでもなく、俯向いて、自分の足下を瞶めながら、先刻と同じやうに歩いて行く、そして遂々、人通りも稀な道幅の廣い堀端へと出て終つた。

『何處へ行くのであらう』。と呟いて、私は先刻から歩るき續けて來た道程を考へた。そして大分の時間が既に經過してゐるのを知つた。『何處まで歩るくつもりなのかしら』。

再び恁う呟いて、私は女から眼を放して、四邊りを暫く眺め廻た。そして、ふつと前方を――再び女の方を眺めた刹那に、私は『あつ』と叫んだまま、其處に立竦んで終つた。

たつた今、一瞬間前まで、私の鼻の先のやうな近くを歩いてゐた女の姿が、突然何處かへ消えて行つて終つた。道路は他に人通りもない眞直ぐな一本道であつた。片側はしもた家が續き、片方は堀割の水であつた。何處へ曲るといふ小路もなければ、家の格子戸の開いた音さへも聞えなかつた。眞逆に女が水に飛び込むとは……

私は女の立つてゐた場所へ驅け寄つた地面には別に女の隱れさうな穴があるのでもなかつた。然し女の姿は兎に角にも消えて終つたのであつた。瓦斯體か何ぞのやうに、一瞬の間にこの地上から消えて行つて終つたのであつた。それと同時に私の胸は再び重苦しくなり出した。そして氣がつくと、また例の不思議な、そして憂欝な顏が、私の心の奧から、眼瞬もせず凝つと、私を瞶めてゐるのを發見した。

暫らくして、再び私が四邊りを眺め廻した時に、私の眼に入る總ての物象は、皆一樣にむくむくと脹れ上がり、色濃く鮮やかに異常なものに見えた。それを眺めてゐる私の瞳孔は不思議にも、じりじりと擴大して來るやうな氣がした。

『何といふ不思議な顏であらう。私の頭をかほどに混亂させ、意識の統一を失はせやうとするこの顏は……』。

私は道路の眞中に突立つたまま、齒を嚙み締めて恁う呻吟いた。

その頃私は某美術雜誌の記者をしてゐた。或日、社の編輯局宛に一封の手紙が屆いた。それはN氏といふ美術學校出身の新進洋畫家の個人展覽會の招待狀であつた。他に行く人もなかつたので、私はその展覽會に出かけた。

會場内の打沈んだ空氣や光線は、私の心を柔らげた。長い間忘れてゐた、涙ぐましい靜かな優しい感情が私の胸に蘇つて來た。厚い窓玻璃に屈折せられて、弱々しげに射し込む外光、多くの畫面から流れ出る樣々な色彩の諧調、微かに匂ふ繪具の香り、それらを包む不思議な靜寂――若し誰かが大聲でも出さうものなら、そこら一面の額が吃驚して床に轉げ落ちさうな氣を起させる不思議な靜寂――畫を見てゐる人達も、それを充分に知つてゐるのか、誰も彼も足音をさへ忍ばせて歩いてゐる。私は現實の國から拔け出して、夢の國を歩いてゐるやうな氣持で、唯、恍惚と室内を歩るき廻つてゐた。

日頃の憂ひも哀しみも忘れて、私は畫の一個一個を鑑賞して行くうちに、遂々卅二と番號をうつた一枚の肖像畫の前に來て、思はず『あつ』と聲に出して叫んだ程に、その畫に驚かされた。それは、その畫が私を驚ろかせる程に技巧に傑ぐれたものでもなければ、またそれを眺めてゐる裡に、底から湧き上つて來る程な力を感ぜさす種類のものでもなかつた。然しその畫布の上に描かれた顏である――その顏こそ、絕えず私の頭の奥から私を瞶めてゐる顏であつた。何時ぞやの晚春の日の午後に、私が堀割沿ひの道で見失つた、その顏であつた。

私は多くの人から、不躾さうにじろじろと眺められる恥しさをも忘れて、喰ひ入るやうにその顏に眺め入つた。その蒼褪めた額、蟲はしのやうな眼眸、肉感的な薄い唇、そして顏全體に漂ふ疲れた弱々しげな飽滿と憂欝――總べてが、私の心の奥に架けられてゐる肖像畫にそつくりであつた。

『僕は夢を見てゐるのではなからうか』。さう思つて心をとりなほして、再び私は眼の前の畫を眺めた。然し眼前の額の中からは、やはり同じ女の顏が私の方を瞶めてゐる。

『やはり夢ではない。こんな女は現實に存在してゐたのだ。それにしても何といふ女であらう』。

若しやその姓名でも知ることが出來はしなからうかと、私は急いで目錄を開いた。そして卅二の所を見た――三二、A夫人の肖像』。これが私の知り得た總べてであつた。

A夫人！　然しそれが何人であるかは私には知る術もなかつた。唯、この肖像畫の作者であるN氏とA夫人とは相識の間であることだけは確かであつた。私がA夫人の正體を摑まうと思ふならば、N氏に賴るより他に術はなかつた。

『Nに會はう』。私は瞬間に恁う決心した。『然し何と言つて話を切り出したものであらうか。否々、少くともN氏は藝術家だ。僕のこの不思議な物語を信じてくれるであらう。そして差支へのない限り眞實を明かしてくれるであらう』。と私は考へた。

室内の空氣は身體に汗ばむ程に生温かく、倦怠から生れ出る憂欝を私の心に感ぜさせた。私は再び肖像畫を眺め入つた。何といふ不思議さであらう、それとも自分の心の故からか、その肖像畫の主は、今にも眼瞬をしさうに思はれるのであつた。黃ばんだ外光がその顏面に流れてゐた。そして、その顏の表情を、何時か街の四辻で見掛けた時と相似寄つた同じ表情に思はせた。今にも女はその額の中から拔け出して、この黃ばんだ光りの中を泳いで、私の心の中に入つて來さうに思はれた。

『何といふ不思議な邂逅であらう。これこそ運命的なものだ』。恁う考へた次の瞬間から、私は自分の肩に降りかかつた、この不可思議な運命に眞正面から相對はうと決心した。自分の生涯が試される日が來たのだ。この試練を自分が乘り越えるか、それとも力弱くつてこの運命の下に押倒されるか、どちらにしても、私にとつては自分は煉獄の扉の前に立つてゐるのである。よし、力を籠めて、この扉の中に入つて行かう……私の全心は恁う私に決心をうながすのであつた。

『よし、今直ぐ。これからその第一步を踏み出すのだ』恁う私は心に強く叫ぶと、直ぐN氏に會はうと思つて、會場事務所を訪ねた。然しN氏はもはや歸宅した後であつた。物足りない空しく惱ましい心持を抱いて、戶外へ出た。

戶外へ出てみると、往來には午後四時頃の日の光りが滿ち溢れてゐた。日暮前の物慌しさが、家にも樹にも、または往來の人の姿にも感ぜられた。初夏の光澤を帶びた白い雲が、大空の片隅に彳んだやうに浮んでゐた。私の神經は疲れきつてゐた。私は道の上に立留つて、茫然と空を仰ぎながら、A夫人、A夫人と幾度もその語を口の中で呟いた。その一語ごとに、私の胸の中には窒息りさうな苦しさが湧き出るのであつた。

その夜一夜、一睡もしないで、夜の白むのを待ち設けるやうにして、私は寢床から起き出でた。私の顏は一夜の裡に憔悴して、眼の中は充血し、眼瞼は硬ばつたやうに重かつた。瑞々しい初夏の曉明の光りは、淚の泌み出る程に、私の眼には痛かつた。鏡の中に映つた私の顏は、昨日とはまるで別人のやうに物凄く見えた。疲れきつた皮膚には、鉛色の重苦しさが浮いてゐた。潤ひもなく、ばさばさに乾ききつた手の表面には、弱々しい靜脈が、皮膚の下にうねつてゐた。然し外面のこの疲れきつ

た様子にも似ず、私の血は體内で騷がしく流れてゐた。

『A夫人の正體を知る日だ』。私の心臟は恁う呟きながら、一刻の休息もなく血液を吐き出してゐた。

『長い間、私の心の奧に住んでゐた女だ。その女の正體を今日こそ、はつきりと掴める日だ。しつかりしなくちや不可ない。今日は汝にとつては運命的な日だ。こんなことをしちや居られない』。

私は直ぐ寢床から跳ね起きて、身支度にとりかかつた。朝食を食ふ氣にもなれず、漠然とした危險に身を投げかけて行くやうな、不安と焦燥と憤りとを胸の中に抱きながら、私は家を出て行つた。

展覧會場へ着いた時は、まだ九時を少し過ぎたばかりであつた。會場内には四五人の人影しか見えなかつた。私は眞直ぐに事務所へ足を向けた。私の心臟は私の一足ごとに、喚き叫ぶやうに鳴り騷いだ。私は今にも眩暈を起して卒倒するのではないかと思はれた程に、全身の血が心臟に凝集して行くのを感じた。私の足はその爲めにふらふらしながらも、心臟の苦悶には頓着なく、事務所の入口を跨いで内部へ入つた。

『Nさんは』。と私は無意識に、其の室にゐた一人の男に恁う訊ねた。

私の突然に入つて來たのを不審さうに眺めてゐたその男は、私の語を聞くと

『N君はまだ來ませんが、もう程なく來るでせう』。恁う云つて、手近かの一個の椅子を指して『まあ、お掛け下さい』。

私はその椅子に腰を下ろして、疲れきつた氣持で腕を組合せ、眼を瞑つてほつと息を吐いた。我慢にも、もう眼が開けてゐられぬ程に身體の疲れを感じた。そして、そのまま、うとうとと微睡んで終つた。

ふと鋭い聲に吃驚して眼を開くと、私の前には見知らぬ背の高い男が突立つてゐた。黑のソフト帽の下から、房々と垂れ下がつた頭髮は漆のやうに黑かつた。飛白の單衣も紺の勝つた黑いものであつた。色の淺黑い細面の、そぎ立つたやうな顏には、苛々した神經の疲れが見えた。それがこの人の表情を冷かなものに見せてゐた。この男は、私のだらしない睡姿を見下げ果てたやうに、じろじろと眺めながら、何時までも默つて突立つてゐた。私はこれがN氏に相違ないと思つて、椅子から腰を上げた。そして『Nさんですか』。と丁寧に訊ねた。

『さうです』。とその男は冷淡に恁う一語言つた限り、默つて何時までも私を眺めてゐた。

私が立上つて見ると、Nは私よりは肩の上だけまだ私よりは

背が高かつた。私は自分の名を告げて、名刺を差出した。Nはその名刺をほんのちらりと見ただけで、暫らく默つてゐたが、漸て氣がついたやうに

『お掛けなさい』。然うぶつきら棒に云つて、自分も手近かの椅子に腰を下ろした。私も再び前の椅子に腰をかけた。

『どういふ御用です。何か雜誌にでも書くのですか』。Nは然う云つて、薄い唇を「への字」に押曲げて、眞向ふから私の眼を覗き込むやうにした。少し醉つてるか、熱にでも浮かされてゐるかと思ばれるやうな、その眼の光澤は、私の愚かさに挑戰しかけるやうに閃めいた。

『さうぢやありません。私一個人のことで、一寸お伺ひしたいことがあつて……』。

『何ですか、どういふ事柄ですか』でNの神經は明かに昂奮して來るのであつた。

『A夫人つて云ふのは、どういふ方ですか』。私はだしぬけに、この語を言つた。

Nの額はさつと曇つた。そして眼の中には憎惡の火が燃えて來た。神經的に唇を痙攣させたかと思ふと、眼を鋭く凝らして

『僕の情人です。それがどうしました』。然う吐き棄てるやうに云ふと、ハハハ……と絹布を引裂くやうに笑つた。彼の腰の下では、椅子ががたがたと激しい音を立てて軋んだ。

その瞬間、私は自分の頭の上から、何か知ら眞黒な物體が蔽ひ冠さつて來るやうな氣がした。私はそのまま椅子から床の上へ滑り落ちはしないかと思ふ程に、兩脚が慄えて來た。然しそれを感じた刹那に、反抗的に私は大きな聲を出して笑つた。Nはこの私の笑聲を聞くと、更に大きな聲で笑ひ出した。この挑戰的な笑ひの浪が、事務所の内に異樣に響き渉つた。

暫らくして、笑ひが靜まるのを待つて、私は云ひ出した。

『實は今日は貴方に一つの不思議な話を聞いて貰ひに、やつて來たのです……』。

然う私が云ひ出すや否や、Nはまた大聲に笑ひ出した。そして笑ひながらも

『貴方はA夫人に會ひたいですか、會ひたければ僕が會はせてあげますよ。會はせてあげますから、どうか會はせて下さいと賴みなさい』。彼は皮肉に唇をへし曲げて然う云つた。

『賴みます、頭を下げて賴みます』。私も然う云つた『そして何故私がA夫人に會はなければならぬかを、これからお話します』。

『聞かせませう』。とNの聲は沸き立つて來た感情を制しきれぬやうに、苛立つてゐた。

私は今日までの私の身の上に起つた一切のことを、Nに打開けて話した。Nは最初は絶えず口邊に嘲笑を浮べて聞いてゐたが、半頃から、その顔は次第に眞面目になり、苦悶の表情さへ浮べて來た。私の調子が熱心になつて行けば行く程、Nの顔は暗くなつて行つた。

『もういい。後は聞かなくともいい』と突然にNは私の話を打切らうとした。

私は自分の話に熱してゐたので、その聲を耳にしながらも、尚ほ話續けやうとした。するとNは冠つてゐた黑のソフトを、手荒く掴みとつて、床の上に投げつけると同時に

『もういいと云つたら。强て話がしたければ、向ふの壁の所へ行つて、勝手に壁と話をするがいいや』。恁う云つて、『ハハハ……』と力のぬけた笑ひを洩した。

私はこの話とこの笑ひを聞くと、突然に烈しい憂鬱を感じて默つて終つた。と、Nはそれを待つてゐたやうに

『僕が君のそのロマンスの結末をつけやう。彼女は今はAといふ男の妻君だが、決してAを愛しても尊敬してもゐやしない。彼女の魂を確かりと握つてゐるものは、世界中で僕だけだ。僕だけが彼女の魂を左右する力を持つてゐるんだ。何故と云ふなら、僕と彼女とは現在は別れ別れになつてゐるからだ。君は彼女をどんな女だと思つてゐるんだ。彼女は決して、どんな男をも愛することも尊敬することも出來ない女だよ。唯、自分の感情を、欲望を愛する術だけしか知らない女だよ……』。恁う云つてNは頰を痙攣せた。

『僕は自分の戀人を他人の手にとられた時は、どんな氣持がするか味ひたかつた。その爲めにAに彼女をくれてやつた。そして自分の味ひたかつた感情を充分に知ることが出來た。然し現在ではAに對する復讐心の方が强くなつてゐる。今日、君が僕の前に現れたことは絶好の機會なんだ。僕は君をA夫人に紹介するよ。彼女は現に新らしいあるものに對つて渴望してゐるのだから……』。

Nは滔々として恁う述べ立てるのであつた。

『それで僕とA夫人とが眞實に戀に落ちたとして、君は平氣でそれを見てゐられますか』。と私はNに反問した。

『平氣でゐられる奴があるものか。現在では彼女の魂を掴んでゐるものは、世界中で僕だけだと思つてゐたんだ。ところが、明日になると、また別な新しい、しかも僕よりも力强いものが來て、彼女の魂を揺り動かす。この事實を僕が如何して平氣で見てゐられます。然しだ、ねえ君、然しだよ、彼女は戀を戀することは欲してゐるけれど、ある一人の男に戀することは出來

ない女だ。彼女にとつては、戀することは眞劍な、しかし遊戲に過ぎないんだよ。』

『それだのに、何故、君は僕を紹介するのです』。

『今日までの僕は、戀人を他人にとられただけさ、然し明日からの僕は、戀人その人に棄てられた苦しみさ。それが味ひたいんだ。のたうち廻るその苦悶が、どんなに痛烈に僕の身體に喰ひ入つて來るか、それが體驗したいだけなのさ。』恁う云つて、Nはヒステリツクにからからと笑つた。

私は心の底から身慄ひしながら、思はずも感歎の聲を出した。

『ひとつ祝盃を擧げやうぢやないか、吾々の美神(ミューズ)の爲めに、キリストでもユダと一緒に酒を呑んだことがある、君と僕とが一緒に呑んだつて、敢て美神の怒りに觸れることはなからうさ。どうだ、二人の爲めにA夫人の健康を祝さう』。

Nは恁う云ひ終ると、鋭い金屬的な笑聲を立てて、椅子の上に兩脚を抱きかかへて面白さうに笑つた。

私の心は、今ではすつかり烈しい憂鬱に押倒されて終つた。正午に近い日の光りが窓から射して來た。その明るい光りに背を向けて、椅子の上に円くなつて、兩腕の間に頭を埋めて俯伏してゐるNの姿は、全く一個の惡魔の化身のやうにも思はれた。それを眺めてゐると、尙更ら私の心は暗い所へぐんぐんと引落されて行くのであつた。

『何といふ恐ろしい男だらう。煉獄に入る第一日に、恁んな男に會つて、恁んな話をしかけられやうとは……』。と私は胸の中で、ひそかに呟いた。

『A夫人には何時紹介して貰へるんです』。

急に默りこんで終つたNの姿を凝つと眺めながら、私は恁う訊ねた。この聲にむくりと頭をあげたNは、片手で前に蔽ひ冠さる長髮を掻きあげながら

『展覽會の最終の日の午後二時頃。その時刻にA夫人は此處へ來ます、約束があるのだから。その時に會はせてあげます。』

Nは恁う云ふと突然椅子から立上つて、床の上の帽子を引冠るなり『失敬します』と云つたかと思ふと、風のやうに身輕るく、その背高い姿を私から背けて、この室から出て行つて終つた、私は『あつ』と云ふ隙もなかつた。

『あれは狂人です』。と先刻から室の片隅に居た男は、この時初めて私に恁う云つた。

『さうです』。と私もそれに答へた。

然しNの魂の中に消しても消しても、消されずに尙ほ一層、力強く燃え上つて來る炎のあるのを感じた。そして、この魂の

炎が何時か一度は素張らしい力となつて、彼の全身を焦き爛らして來るに相違ないことをも感じた。その時、彼の藝術が如何なるか、どんな征服力を以て觀者に迫つて來るか？ それを私は心中で考へてゐた。

『然し何といふ恐ろしい男だらう』。恁う呟き呟き、軈てこの室から私も出て行つた。

それから二三日過ぎた晩であつた。私が近所のカフヱへ出かけやうとしてゐる時であつた。

『お客様でございます』。と宿の女中が取次いで來た。私は不審に思つて、默つてその女中の顔を瞶めると、女中は尙ほ語を足して『お目にかかれば判ると仰言つてお名前は仰言いませんが、綺麗な女の方です』。と云つた

私の心臟は急に鼓き出した。そして餘りにも無雜作に投げ與へられる運命に對して、私は恐ろしい氣さへした。私はその女の人を出迎へるために、室を出て玄關へ行つた、入口の電燈の下に、年若な背のすらりとした一人の婦人が立つてゐた。頭を女優髷にして、薄い紗のコートを着て、手にパラソルを持つてゐた。女の背後の門のところには、車が待たせてあつた。私の足音に、ふつと顏を向けたその女の、白粉を塗らない生地のままの淺黑い細面には、橫から射す電燈の光りに照らされて、靜かな少しセンチメンタルな表情が浮んでゐた。私は默つて頭を下げた。それから『どうか此方へ』と云つたが、その聲には感情の激動が隱しきれなかつた。

私はそのまま踵をかへして、廊下を自分の室の方へと引返へした。女も默つて私の後からついて來た。二人が座につくのを待つて『私、Eで御座います』と女は云つた『Nが此方へ伺ふやうにとのことでしたので……』と輕るくすらすらと云つた。

『さうですか、此間一寸お話は伺ひました』と私はたじろぎながら答へた。

『存じて居ります、さうでしたつてね。私はずつと以前から貴方を存じて居りましたの』。

この語は私にとつては、完く思ひもよらない語であつた。私は唾液を呑んで息を潜めて、A夫人の顏を瞶めた。

『何時から……』。軈て私は恁う訊ねた。

『もうずつと、久しい前から』。と夫人は答へた。然しこの語が終ると同時に、コケテイシュな媚笑が夫人の口邊に浮んだ。そして肉感的に細められた眼は、その語の嘘りであることを曝露したやうに私には思はれた。

A夫人は細そりとした肩を、しなやかに落しながら、眼許と

口許とに嘲笑を集めて、無意識の間に相手の心を玩ぶやうな態度を見せながら
『あの時から今日まで、ずつと貴方のことを覺えてゐましたわ』。と云つた。その語の調子は人妻とは思へぬ程に、大膽なものであつた。そして、夫人は私には判らぬ「あの時」のことの細かな記憶を辿るやうに、眼を空に向けて眼瞬をした。
『Nさんとは何うして御懇意なんですか』。と私は話を換えやうとして、恁う云つた。
『御存知の癖に、この間Nが貴方にお話したぢやありませんか』。と云つて、私がたじろぐ顔を興あり氣に眺めながら『Nは私の戀人ですわ、古くからの。私が十八の歳からの戀人ですわ』。夫人は恁う云つて、またコケテイシュな笑ひを洩した。『世間でNのことを何と云つて惡口しても、Nの胸の中には世間の道德家達の到底知りもしない、貴いものがあります。何と云つても私は十年近くもNの心を見て來たのですもの……』。
『それではAさんは』。と私は訊ねなければならなくなつた。
『それは何も云はないことにしませう。だけど可哀想な人間ですわ。私さへ握つてゐれば、他に何の希望も持ち得られない人間なの。私の才色兼備なのに滿足しきつてゐますのよ』。恁う云つて夫人は、Aをも私をも愚弄するやうにからからと笑つた。

薄い唇が大きく開いて、細い眼が吊上がつた。顏面神經が惡く、顏の表面に突出して來たやうに、夫人の顏は刺々しくまた寂しく見えた。語にも笑ひにも絶望的な響が籠つてゐた。
『可哀想な人間……みじめな人間……』。誰のことを云つてるのか、夫人は微かに恁う呟いた。そしてまたからからとヒステリツクに高笑ひした。
私はこの夫人の魂の中に、痛ましい孤獨と背負ひきれぬ程な惱みのあるのを感じた。原始以來の、人類の魂に植えつけられた矛盾が、現在この夫人の胸の中に無限の嘆きを投げてゐるのを私は感じた。その夫人の孤獨な魂から流れ出る冷たい吹息が、氷のやうな魅惑を以て私の魂にも迫つて來た。Nが私に言つた語——A夫人が絶えずこの現世で求めてゐるものが何であるか、然しその求めてゐるものが與へられた瞬間から、夫人は自らその幸福を裏切つてゐることをも私は感じた。
『夫人』。と私は胸苦しい感じに襲はれながら、息窒らせて云つた『貴女は不幸な人ですね。然しその不幸の種は貴女自身が蒔いてゐるのだとは思ひませんか』。
夫人は微かに點頭いた。そして凝つと私の顏を眺めながら——
——それは例の「A夫人の肖像」に描かれたのと寸分違はぬ、あの鋭く人の心を蝕はすやうな眼眸であつた。

「…だけど、そんなことはもつと知り合つてからでなくては不可ませんわ。もつと、もつと理解することが二人には必要です。總てはそれからですもの』と夫人はきつぱりと云つた。

『さうです』と私も點頭いた。

『それでは私、もう歸ります。今夜は無理に都合して出て來たのですから、車も待たせてありますし。近いうちに、ゆつくりと來られるやうにします』

夫人は恁う云つて立上つた。私も強てそれを止めやうとはせず、立上つた。室の入口まで行くと、夫人は急に振返つて、淋しい顏に微笑を見せながら『お身體を御大切にして下さい』恁う云つて、私の返辭も聞かず急いで玄關へ出て行つた。

私は夫人を送くり歸へして、自分の室の机の前に座ると、窓を開け放して戸外の闇を眺めた。凝つと瞳を闇の裡に据えて、木下闇の奥を瞶めながら、頭の中では次第に滿ち溢れて來る運命の流れの恐ろしい渦卷の響を聞いてゐた。その響は、じりじりと私の神經を磨り減らすかと思はれる迄に苦しかつた。私はその苦しさを噛み締めるやうに凝つと押堪えて、尙ほ專心に庭の奥の闇の中を瞶めてゐた。不思議な胸苦しさが、私の心に微かに小波に似た微動を傳へ始めた。それが次第次第に私の魂までも搖り動かして、私の全身は何處とも知れぬ神秘な存在の裡に吸ひ込まれて行くのであつた。その胸苦しい、苛立たしい、それでゐて喩へやうのない快さに打敗かされて、今は抵抗する力もなく、果しもなくその官能の麻痺の中に落ちて行く……と、突然に闇が破れて、私の眼の前には恐ろしい一個の裸形が現れ出た。ぎらぎらする無數の燐光が一人の女の週圍を取圍んで燃えてゐた。頭髮をばらばらに振亂して、全身裸形の姿で、その女は暗い水の上を歩んで來るのであつた。その背後にも蒼醒めた燐火の塊が、女の姿を追つて、長い尾を曳いて走つてゐるのであつた。その燐火の塊の一個一個には皆、目鼻があつて、その目や鼻が何事かを頻りと訴へてゐた。

『見ろ、夫人は遂々氣が狂つたんだ。求めてはならないものを求めた罰なんだ』恁う叫く聲が、何處からかひそひそと聞えて來た。私は兩眼に力を凝めて、夫人の裸形を瞶めた。Nの悪魔的な高笑ひが、遠くから快さうに響いて來た。私は思はず身體を微かに動かした。と、その瞬間に幻覺は破れた……

私は苦しく喘いでゐる、自分の烈しい呼吸に氣がついた。胸の中では地獄の火が燃えるやうな苦悶を感じた。今見たA夫人の裸形は、私の身肉を爛らすかと思ふ程に、私の胸に迫つて來た。私はその幻覺が消え去つた後までも、その皮膚の光澤を見、その皮膚の匂を嗅いでゐるやうな思ひがした。然し再びその闇

の中に視線を遣ると、そこには唯眞黑に塗り籠められた暗黑の領土があるばかりであつた。その暗闇の中からは、思ひ出したやうに生温かい微風が、裸形の人の吐息のやうに、無氣味に、すうつすうつと吹いて來た。

その夜から次第に私の心は衰へて行つた。A夫人の唇は絶えず私の心臓から血を吸つてゐるやうに思はれた。晝も夜も、絶えず一個の幻が、私の全身を包むかとも思はれた。その幻の裡に私は身も心も浸して終つて、自分の仕事も忘れ、將來も忘れて、焦け爛れるやうな苦惱と酣醉とに刻々を生きて行くのであつた。

『近寄つてはならない。近寄つてはならない』私の心の片隅では頻りに恁う叫くものがあつた。然し私の全體は、この聲を聞きながらも、何時の間にかじりじりと、その近寄つてはならないものに引寄せられてゐるのであつた。A夫人の名を知り、A夫人の姿を見て語を聞き、その心に觸れたのも瞬間で、再びその消息は絶え、姿を見ることが出來なくなつてから、もう十數日經つて終つた。私の心は昔にも增して風に煽られる猛火のやうに、その姿、その聲を搜し求めるのであつた。私の衰へ行く心は、その弱り果てた兩手を擴げて、闇の裡を手搜ぐりしながら、A夫人の幻を追つてゐるのであつた。

『何といふ苦しさだ』。私の心は虚空を摑んで呻吟き出した『僕の心はこの苦しみを欲してやしない。それに運命は、僕の欲してもゐないものを押しつけるのだ。この苦しみを僕に與へて、最後に僕を何處に投げ出すつもりなのだ』。

夏の夜の眞夜中過ぎの空氣は、水のやうに冷々として靜かであつた。遠くで犬の啼聲が聞えた。四邊りが靜かであればある程、私の體内で騷ぎ立つ血の音は、私の心を不安にした。私は蒲團の上に横へた腕を伸して、夢中で何者かを抱かうとした。私の耳許でA夫人の『貴方』と呼ぶ聲が私の胸を打つた。私は擴げてゐた兩腕をぐつと引締めた。然し兩腕の間には何者も殘つてはゐなかつた。ぱつちりと眼を開いた刹那に、肉に喰ひ入るやうな寂寥が私を襲つて來た。『貴方』と呼んだA夫人の不思議な聲は、眼が覺めても、未だ私を呼び續けてゐるやうに、耳の底でひそひそと叫いてゐた。今はもう私の心にはAもNもなかつた。總てがA夫人の姿の下に押潰されて終つた。私の心は、もう一分の猶豫もしてはゐられない程に、A夫人に對する戀心が燃え立つて來た。この戀心の前に立つては、Nの悪魔的な笑聲も私の心を脅かさなくなつた。まして、よぼよぼの老耄のAなんかは、私の眼の中にはなかつた。

『さうだ彼女を奪へ。それが僕の生きることの總てだ』。恁う叫んで、私の身體の底から押し上げて來る、抵抗し難いある力があつた。

犬の遠吼えは、絶えては續きながら、暫らく聞えてゐた。

『彼女を奪へ。僕の魂がそれを要求するのだ』。

私はあれから二度貴方を夢にみました。何時もお目にかかつてゐる時のやうでなく、落ち着いて、しんみりと話をしてゐる夢を、二晩つづけてみました。

お身體に變りはありませんか。

忘られない懐しい人は、やはり貴方です。私の魂は貴方を呼びます。私の魂はもう貴方なしには、生長することが出來ません。

何といふ不思議さでせう。私は貴方の不可測な大きな力のなかに吸ひ込まれて行くのを感じます。罪だ！と知つて、それに抵抗しながら、然し私の魂は貴方の方へ引寄せられて行きます。神秘な力のなかに――

それは、まるで渦に卷かれて行く木の葉のやうです。

明治四十四年七月二日夜

貴方の愛する　E

夢を見てはならない、夢を見てはならない。今は夢を見てゐる時機ではない。はつきりと眼を開けよ。そしてこの人間の苦しみを凝視せよ。苦しみは人間を救ふ唯一の道だ。

A夫人よ、苦しめ苦しめ、血みどろになつて苦しめ。この苦しみの爲めに流す血は、後から來る者を救ふと同時に、君をも救ふであらう。苦しみに破れてはならない、苦しみに倒れてはならない。

今、僕達の眼前に開かれた道は唯一つ、それは鬪ひの道だ、血汐の道だ。血汐を踏み越えてこそ、僕達は生活を掴むことが出來るのだ。僕の魂はその血汐に渇してゐる。夫人よ、君の魂も同じく血に飢えてゐるであらう。

僕の魂が君を呼ぶ。君の魂も僕を呼ぶ。それは同じく血に飢えてゐる二個の魂であるからだ。（明治四十四年七月三日）

私は机の上のノートから一枚、紙を切取つて、それへ恁う書いた。暫らく一息を吐いてから、更らに頁をかへして、次のやうに書き續けた。

運命よ。汝は僕に挑戦するのか。よし、それなら僕は汝の手袋を受けてやらう。どんな運命でも僕にぶつかつて來い。

鬪、これが人生の實相だ。苦惱が人生の實相だ。苦惱を征服

すること限りなければ、苦惱そのものも限りなく現れる。然し苦惱が限りなく現はれると同時に、それを征服しやうとする、僕の慾望も限りなく強くなつて行くのだ。

苦惱よ來れ、滅亡よ來れ、僕は汝達と取組んで、見事汝達を征服し、それを生かしきつて見せるぞ。運命の煉獄の中で、燒かれ鍛はれることを、僕の魂が要求するのだ。

此處まで書き續けて來て、私は急にペンを机の上に投げ棄てた。そして私は窓の障子を押し開けて、空を流れて行く白雲の悠々とした姿を見守つた。私は窓のところに兩肘を突いて、掌で額を押え、米嚙(こめかみ)に打つ血の響を指の先で觸れながら、しみじみと此頃の身心の衰えを感じた。

その夜、私はこの紙を封筒に入れてA夫人の許へ郵送した。

左樣なら

二人の間には永のお別れをしなければならぬ時が來たと思ひます。不幸なものは何事も不幸であるやうに、一生が運命づけられてゐるのだと思ひます。呪はれてゐる者は、呪はれてゐるまゝに滅亡して行かなければならぬやうに、決められてゐるのだと思ひます。

左樣なら。永久に左樣なら。貴方は私のことを忘れて、幸福になつて下さい。

八月十九日　R

御申越のことは承知いたしました。

今はもう何事も申しません。二人の間は愛の力に依つて淨められることなしに、永劫の罪に汚されたまゝで、その烙印を額に印して生きて行くのです。

八月廿日　M

あれだけ、はつきり二人がお別れする時が來たと書いて置きながら、貴方の手紙を見た瞬間から、私の心はまた縋りかけて來ました。

私は不幸です、みじめです。どうか私を救つて下さい、力になつて下さい。永久に私の味方になつて下さい。私の味方は貴方だけです。昨晩も貴方と夢の中で話して、大聲で笑つたのに自分で眼が覺めました。懷しい人、私を忘れないでゐて下さい。貴方の愛する……

八月廿二日

もう貴方ともお別れです。左樣なら。

私が貴方の上に投げかけて來た、昔醒めた夢も、今ではすつかり破れました。私は最後の扉を開けて見た時に、哀しい幻滅に會ひました。私は貴方に會はなかつたら、よかつたらうと思ひます。何故、私は貴方に會つたのでせう。貴方を知りさへしなければ、私はもつと幸福であつたらうのにと、今はそれを悔いて居ます。

さう申しても、私は決して貴方に對して憎みも恨みも抱いて居る者ではありません。それどころか、貴方に濟まないとさへ思つて居ます。貴方を幸福にしてあげたい……ですから私と別れて下さい。貴方は私のことなんか忘れて幸福になつて下さい。私と別れさへすれば、貴方はきつと幸福になれます。貴方の持つてゐる、その大きな天分を充分に發揮して、立派な仕事を殘して下さい。私は何處にゐても、それを見守つてゐます。

貴方が私の爲めに、ありたけの力を絞つて苦しみ悶えて下すつたことを考へると、まつたく濟まない氣がします。然し今の私は戀どころではないの！もつと、もつと重大な事件が身に降りかかつてゐるのです。それは內密ですから誰にも言へません。あの人(夫Aのこと)も何も知らないのです。戀愛なんて、そんな呑氣なことは言つてゐられないの。だから私と別れて下さい。どうせ私達の生活は恰で油と水とのやうに離れ離れの生活です。近い將來には家庭に破綻が來ることは知れてゐますが、今暫らくは(或時期が來るまで)Aの傍にゐてやらうと思ひます。私が今直ぐにAを棄てたら、Aはほんたうに死んで終ふでせう。私はAの寶物なのですもの。ですから私と別れて下さい。貴方はAとは違つて、これから幾つでも新しい戀の出來る人ですもの。私を忘れて下さい、私を棄てて下さい。貴方はもう私を愛してはゐないでせう。私と別れて下さい。だけど私が死ぬ時には、貴方にお知らせしますから、來て下さい。貴方の手を握つて死ぬかも知れませんからね。

×　×　×

ああ長々と書き潰して自分ながら倦きて來ました。これまで書いたことは、みんな噓です、出駄羅目です。然し唯一つ、ほんたうの事があります。それは「左樣なら」をするといふことです。左樣なら、左樣なら、永久に——

この日、四月廿三日を永久に忘れずに覺えてゐて下さい。明治四十五年四月廿三日。

私達の間に戀が始まつてから一年を過ぎた、この春の期節に、A夫人からのこの最後の手紙を受取つた數日の後、私は友人の經營してゐる某農園に來た。東京から汽車で二時間餘り、九十

九里の海岸に近い土地であつた。

私は汽車の中でも、A夫人の手紙を心の中で幾度も、様々に考へた。夫人の體内を迴ぐつてゐる淫蕩な慾望が、今は私に飽き果てて、誰かまた別な新しい男の皮膚の香を要求してゐる……それは、あの女にとつては、不可抗的な力であるに相違なかつた。然うなれば、この女の慾情は最早や善とか惡とかいふ道徳の世界を超越した、神秘なある存在であつた。

『何といふ不思議な惡魔だらう……』。

私は、夫人の身體に觸れては、間もなく其處から永遠に影を消して行く數多くの男の幻を想像した。そして、あの白粉の下に塗り匿された荒んだ肉體の到る處に、様々な男の指痕が消えずに殘つてゐるやうな氣がした。それを空想すると、私の心は無氣味になつた。またもや奇怪な幻覺が私の眼前に現れさうになつたが、然しその病的な神經の昂奮を、私は力を極めて遂々それを壓えつけた。

私は夕暮方に農園に着いた。丁度、桃と梨との花盛りで、果樹園一帯の空氣までが、さながら空氣中に何か可燃性の物體が浮遊してゐて、それが燃えてゐるのかと思はれるまでに、薄紅色に明かつた。一足、果樹園へ入るや否や、私はその強い香りと色とに面を打たれた。それで暫らくは默つて佇んでゐた。遠くから雨を呼ぶ蛙の聲が、睡眠を誘ふやうに聞えて來る。空には一面に薄い屑をした白雲が散ばつてゐた。

農園の友人S氏は、丁度梨棚の下で鋏を使つてゐたが、私の聲を聞きつけると、そのまま鋏を片手に、果樹園の奥から出て來た。仕事服のポケツトに片手を入れて、煙草を捜しながら、日に焦けた顔に親愛的（ファミリャル）な微笑を湛えて私に挨拶した。静かな農園で勤勉に勞働してゐる、この立派な人格者の友人の顔を久振りで、しげしげと眺めた。すると、都會で過して來た私の生活の總べては、一切が無意義であり、小つぽけな煩はしさに過ぎないやうな悔恨と寂寞とが、私の胸の底から流れて來た。昨日、手紙を見た瞬間から、A夫人の姿は遠く彼方へ飛び退いて終つた氣がしてはゐたのだが、現在ではAやA夫人の記憶は、ずつと昔に生きて居た人のやうな思ひがするのであつた。そしてこの戀の思ひ出も、誰か昔の人の手に依つて書かれた物語を、これも何年か前に讀んで、その荒筋を朧氣に辿りながら思ひ出してゐるやうな氣がするのであつた。今はもうA夫人に對する愛もない。勿論、憎みもない。唯、總べての幸福を一切投げ出して、純眞にA夫人を愛した自分の無邪氣さが可愛かつた。これが他人であつたなら、力の限り抱き締めて、頬ずりしてやりたい程

に自分自身が可愛かつた。昨夜、これを最後にA夫人に會つて『私はもう貴女を愛してはゐません』と、言ひ切つた時の、自分自身が可愛かつた。その瞬間には『もう世の中には自分以外に愛する者は一人もない。これから先は、自分自身を愛して愛して、愛しぬかう』とさへ思つたのであつた。

折角恁うして、遙々とS氏に會ひに來ながら、私はS氏の前に止つてゐることに苦しみを感じた。私はS氏が仕事の殘部を片づけに行つた間に、獨り果樹園の小路を奥へと入つて行つた。白い砂の上には紅の褪せた桃の花瓣が散り敷いてゐた。小路の兩側に垣を造つてゐる梨の木には、瑞々しい若葉に交つて、白い花が點々として、碧空の星のやうに咲いてゐた。上總平野を吹いて來る海風は、薄着の肌には寒かつた。私は歯を噛み締めて、虚無の洞穴へ突落された自分自身の姿を凝つと瞶めてゐた。すると、此處まで遙々と棄てに來た筈の煩悩が、また新しい泉の噴き出るやうに頭を擡げて來るのであつた。

私は地上にしやがんで、砂の上に指先をつけて文字を書き始めた。私の頭はまるで現在の境遇に關係のないことを考へてゐる。私の眼は視線を地上には落してゐるが、これも全く別な遠くの事を瞶めてゐる。私の指先は、私の頭にも眼にも關係なく、唯、器械的に砂の上に、模様のやうな様々な線を引いてゐる。その縱横様々に入組んだ模様畫の上に、この時、何處からか桃の花瓣が、風に吹かれて落ちて來た。私はその花瓣を撮みあげたが、直ぐ指先で揉み固めて、小さな砂粒程の塊として、それを傍に投げ棄てた。そして立上つて、靴底でその模様畫を蹈み消すと、唾液を吐いて、内懐から一包の手紙の束を取出した。もうその手紙にも、何の感興も殘つてはゐなかつた。一つ一つそれを引裂くと、私は燐寸をすつてそれに火を移した。めらめらと青白い火が、その手紙を片端から燒いて行つた。私の煩悩もそれと一緒に燒き失せて行くかのやうに、この體内から次第に抜け出て行くやうな氣がした。私は後から後からと、手紙を引裂いては、その火の中に投げ込んだ。黄昏れて行く夕闇の裡に、そして花の香の微かに浮動してゐる空氣の裡に、幾十通の手紙が吐き出す、青白い憂欝な焔を瞶めてゐると、その焔の色は私に、情慾に燃え盛つて男の胸に兩腕を投げかける刹那の、A夫人の瞳と吐息とを思ひ出させるのであつた。

『この砂土も眞逆にこんな戀文を燒かれやうとは思つてゐなかつたらう……』。

私は恁う呟くと、如何したことか、思はずも静かな微笑が私の片頬に浮び出た。然し軈て燃えるだけ燃えて終ふと、一年間の戀文は黒い灰となつて、その殘骸を私の足下に横へた。私は

恁ういふ歌を心に思ひ浮べながら、その灰の中に唾液を吐いた。

女心はさまよふ小浪
移り流れて速いこと
女心は月日か空か
移り變りの速いこと……(レルモントフより)

そして靜かな微笑を續けながら、まだ熱味(ほとぼり)の殘つてゐさうな灰を靴底で蹈み躪り、蹴散した。それをまた風が四方へ散らしてくれた。

もうこれで、私の身體にはA夫人に就ての何の痕跡も留めなくなつて終つた。私は始めて長い間の幽囚から解き放されて、自由な空氣の中に浮び出たやうな氣がした。恁うなつてみると、肖像畫なんぞを描いてA夫人の囚はれのなかに跪いてゐるNや、蛇の穴籠りのやうに壓潰されて、夫人の情慾の人身御供になつてゐるAなどが、見るも悲慘(みじめ)に思はれるのであつた。

私はその灰の上に兩足を揃えて突立つて、くるくると二三回、身體を回轉させながら

『ほんたうだ。これで始めて永久に左樣ならだ。左樣なら、左樣なら、綠の惡魔さん……』。

そして私は靜かに靜かに、冷たいが快い微笑を洩したのであつた。

この時S氏の宅の方から、私を呼ぶ聲が聞えて來た。私は急いで走り歸つた。家の入口の所で、ランプの掃除をしてゐたS氏は

『どうしました。先刻から隨分呼んだのですが聞えませんでしたか。飯が出來たから、そろそろやりませう』。恁う云ひながらS氏は、內部へ入つてランプを燈した。淡いランプの光りが土間の一部分へ流れた。そこに据ゑられた大食卓の上には、獨身のS氏の手で造られた野菜料理が、見る眼も醒める程な鮮やかな綠の色を見せて、皿の中に盛り上つてゐた。香り高い果物さへも、その皿の中に添えてあつた。私は指さされるままに、その椅子の一個に腰を下ろした。

『どうですか。さあ一杯』と、S氏は私の前の湯呑に冷酒を滿たしてくれた。地酒の香りの、つんと鼻にくるのを、私はまづ一口呑んで、湯呑を下に置いた。

『もうこれで私に一切は終りとなつたのだ。唯、後にまだ殘されてゐるのは、自分の藝術の完成と言ふことだけだ。明日からは、この事の爲めに自分は生きなければならぬ』。恁う思つて、私はまた湯呑から一口の酒を啜つた。そして果物の皮を剝いて、その液汁を吸つた。爽やかなその香氣は鼻に沁み咽喉から胸に入つて、私の心を輕るく蘇生へせてくれた。

「Sさん、恁うして貴方と一緒に歩む氣持は、何處へ行つても味へませんよ』と、泌々した心で私はS氏に云つた。
『どうしてですか』と、S氏は暖かい笑顔でそれに答へた。
『私の現在の心持を、人間の語で貴方に傳へるのは、絶對に不可能のやうですね……』と私はそれに答へた。
　S氏は靜かな笑顔で、凝つと私の顔を瞶めてゐる。宵の更けるにつれて、雨を呼ぶ蛙の聲は、一層高く農園の四方から湧き上つて來るやうに、私には思はれるのであつた……

東山義政論

——趣味生活の先覺者として——

西川一草亭

　東山義政論など云へば、今時何の爲めにそんな古臭い人物を持出すのかと怪む人があるかも知れない。併し能く考へて見ると、今の世の中に趣味生活と稱するものゝ大部分が、此義政の生活を模倣して居る事實が有る。元より夫は社會の全體から見れば極僅かな部分で、問題にする程の物で無いと云ふ人があるかも知れぬが、趣味生活と云ふ様な事を口にしたり、實行したりする事の出來る階級に有る人々の大部分は、茶の湯、挿花、謠曲、お能、庭作り、書畫骨董の趣味に耽る事、さう云ふ事柄のどれかを模倣しない人は無い様に思ふ、是等の趣味は皆義政が先縱を爲して居るのであつて、尤も夫は皆悉く義政が創始した物許りでも有るまいが、其大部分は義政に依りて完成された物、或は義政に依りて生活上の一つの趣味として認められた物が多いのである。
　東山時代と現代、時代としては隨分懸隔があり、距離がある様に思ふ。而かも趣味生活にさう云ふ古い物を追求する人の多いのは何の爲であらふ。夫は因襲に囚はれた愚な事だと云ふ人があるかも知れない。さう云ふ昔の物には其事の可否に論なく、どこか自分の故郷に歸つた様ななつかしみの有る物だと云

ふ事も一つの理由であらふが、只夫許りでは無い。どこかそこには日本人の本質に觸れる物が有つて容易に捨て去る事が出來ないのではないだらふか。つまり義政のさう云ふ物を要求した心持が、現代の吾々にも、どこか偶の方に潛在して居て、夫れが機に觸れ年に應じて芽を出して來ると云ふ樣な事は無いだろふか。さう云ふ見方も出來ぬ事は無からふと思ふ。

夫は考へ方に依つて何れとも云ふ事が出來るが、兎に角趣味生活の上に、今の社會に東山の流風餘韵を汲む人の多いのを否む事は出來ないと思ふ。既にさうした事實があるとすれば、現代のどこかに東山時代と共通する何等かの要素が有るので無いか、是は考察に値す可き問題だと思ふ。

全體義政の生活と云ふのは、どふ云ふ物だつたらふ。私はそんなに歴史の詳敷事を知らぬが、政治の上では隨分混亂した時代の樣に思へる。上に立つ者が醜い權勢の爭を事として、權勢の他に、人間の貴ぶ可き所以の物を何一つ知らなかつた樣な時代である。さう云ふ世の中に生れ合はして、夫を處理する器量が無く、早く職を讓つて、自分は東山に退隱して、そこに義滿の金閣を眞似た銀閣を作つて、其傍に東求堂なる瀟洒な家を建て、數奇をこらした庭など作つて、當時禪僧が盛に支那に往來して居たのに托して、支那の有名な繪畫や工藝品を集めて、さう云ふ物を見たり、生花に一種の法則を立てゝ自然の花を眺めたり、又茶を飲む作法を學んだりして悠々自適の境涯を樂んだ樣である。

自分の職責を何一つ盡さないで、そんな遊戯三昧の日を送つたと云ふので、歴史の上では惡く見られて居る樣であるが、政治上の伎倆は兎も角、私は人間としては割合に優れた素質を持つて居つた人では無かつたかと思ふ。夫は其人の創造した生活が、假令部分的にもせよ、四百年後の今日尚且つ生命を保つて現代の一部を支配するかの觀があるのを見ても、義政の生活が無意義な生活であり、其人物が劣等な人間であつたと云ふ事は云へないだらふと思ふ。只足利氏の父祖の業に忠實でなかつたと云ふことは云へるだらふ。

義政の生活を模倣した中で、最も廣く今の世の中に行はれて居る事柄は床の間の設備であらふ。床の間のやうなあんな無益な物を作る必要は無い杯云ふ議論をする人も今は大分有る樣であるが、日本の家から床の間を取り除けたら、隨分妙な物になりはしないかと思ふ。少くも外出するのに帽子を忘れた樣な物足りなさを感ずるだらふと私は思ふ。

兎に角住宅に床の間を作つて、そこに懸物を懸け、花を挿けて置くと云ふ事は義政が先例を開いたのであつて、夫より以前には無かつた事の樣に思ふ。此一事に見ても東山以前と、以後には住宅の樣子に餘程違つた點が出來たと思ふ。

此床の間の設備が有る爲めに、繪畫と云ふ物に何等の顧慮を拂つて居ない、無風流な人間も家を持てば懸物の一二幅を他の世帶道具と併せて買求めると云ふ樣な事から、自然畫の趣味が廣く浸透して行く事實が有る。

東山以前も、畫を見ると云ふ趣味は有つたであらふ。併し夫は極狹い階級に限られて居て、德川時代や、今日の樣に中産階級に其趣味の普及したのは、全く此床の間の關係による事と思ふ。

どふして東山時代に床の間の樣な物を思ひ付いたかを考へて見るのに、最初は佛間の形式であつたらしく思はれる。夫は此時分の床飾りの方式を見ると、床の間には本尊、佛樣を懸け、其前に三具足、香爐、燭臺、花立て、を置いた物らしい。夫が段々一つの趣味に變つて行つて、後には佛像の代りに山水などの畫幅を懸け、最初佛樣にお供する意味の挿花が、後に自然を見る爲めの挿花に變つたらしい。そんな點から考へて見ると、義政の生活は一面趣味生活の創始であつたと同時に、夫は佛門に歸して、宗教の信念に生きる、信仰の生活であつたらしい。

床の間に懸物を懸けて、其懸物の前に挿花を置いて、畫と併せて挿花を見ると云ふ習慣は、今では平生見慣れて仕舞つて居るので誰も夫を怪まないけれども、能く考へて見れば是は一寸妙な思ひ付きである。悪い趣向と云ふ程でも無いが、是非懸物の前に挿花を持て行くと云ふ必要は無い樣である。特に畫には花鳥畫なども有るのだから、そんな場合にも挿花は重複する事になつて、餘り適當な場所では無い。夫にも拘らず、挿花と云ふ物を懸物の付き物の樣にして仕舞つたのは、こふ云ふ歷史的の因縁があるからである。

日本の挿花が一種特別な目的を持ち、不思議な物に發達したのは無論此床の間の關係によるのであつて、此に畫と併せて挿花を置くと云ふ習慣を作つた事から、床の間に挿花の無いのはさびしいと云ふ漠とした考から、最初は何の趣味も感じなかつた人迄、挿花を習つて見ると云ふ樣な事から、一つの流行を形造つて居るので無いだらうか。是も今日では其事が餘り盛になり過ぎてうるさい流派などが澤山出來て、其ほんとの意味も沒却されて居るかの觀が無いでは無いが、兎も角是に依りて、多少とも日本人の自然美に發する趣味の開けた事は慥である。此多忙な世の中に挿花の樣な方法でも無かつたら、多くの人が花

を見ると云ふ樣な機會は餘り無いかも知れない。梅が散つた、櫻が咲いたと云ふ位の事は解つても、其他の花が季節季節に、色々な形や色に咲て來るのを何も知らずに、其日の行事に追はれて居るかも知れないと思ふ。

此床の間に關聯して、寧ろ夫に付屬して、違ひ棚、出書院と云ふ樣な物が付いて居るのも、東山時代の遺風である。出書院の方は、中以下の家には無いかも知れぬが、違ひ棚は大抵な家に有る樣に思ふ。夫で此處にも義政の餘習を學んで、色々な骨董品を並べたり、玩具、書物などを置いたりする。中には床の間や違ひ棚を物置同樣に心得て、何んでもそこらに置いて邪魔になりそうな物を抛り上げて置く、無頓着な人も少くないが、家の構造がそんな風に出來て居る以上、吾々日本人が多情多感な青年期を過ぎて段々住居に落ち着きを感ずると同時に、書畫骨董の趣味に陷ちて行くのは當然であると思ふ。或人は書畫に凝り出す、或人は陶器を集めると云ふ風に、晩年をさう云ふ物に打込んで、家と云ふ物を恰も骨董品を並べる場所の樣に心得て、懸物の爲めに家族の便宜を犧牲にして、矢たらに床の間を造つたり、座敷を無暗に立派にして、家族は狹い部屋に不自由を忍んで居ると云ふ樣な例も或る階級には大分有る樣である。

そんな習慣は誰が作り出したかと云へば、云ふ迄も無く義政である。義政が能阿彌、相阿彌の連中に命じて、君臺左右帳記と云ふ樣な、座敷の莊飾法を記述した特別な書物を造つて、床飾りの作法、骨董品の陳列法を制定して、それを世間に普及させた事が原因になつて居るので有る。

兎に角日本の床の間と云ふ物は、日本の家では家の中心、家の首腦の樣になつて居て、日本の家は其床の間の爲めに全部が出來上がつて居るかの觀が有る そうして其床の間は何の用を爲すのかと云へば、畫を見る場所であり、挿花を見る場所であるのだから、先づ日本の家は趣味生活の爲めに作られて居ると云つても過言ではないと思ふ。

庭園と云ふ事も義政の生活の一部である。元より庭作りと云ふ事は義政に始まつた事で無い。人が家を造れば必ず周圍に空地を設けて、日光を受け風を入るゝの便宜を考へるだらふ。既に空地が有れば、夏の日を障り、強い風を避ける爲めにも樹を植へる事の必要を感ずるだらふ、又其樹に自然の風致を認める樣になれば其植へ方を工夫して、常住不斷の眺めを造るに極まつて居るから、庭園の起原は可なり遠い事と思ふが、併し東山

以前の庭園と、東山時代、義政の庭園には大分違つた點が有る様に思ふ。東山以前は庭園と云へば、只廣い面積に大きな池を堀り、樹を植へ花を移して逍遙自適に供した物で、今の公園の様な意味の物と思ふが、義政の庭園と云ふ物は山水に發する一つの理想を描いて、夫を庭園の上に表現した物で、夫に依りて自分の住居を恰も自己の理想の山水中に置いて、俗世間を離れた様な心持ちを樂んだ物の様に思ふ。

東山以前の庭には美しい花物なども隨分植へた様である。櫻を植へたり、藤棚を造つたり、萩や芒なども植へた様であるが、東山以後は花は挿花の上で見る事にして、庭は專ら常綠樹を植へ、四季を通じて變化の無い事、恰も墨畫の山水を見る様な趣味を喜んだ様である。是は此時分に支那から山水畫を輸入して、其山水畫の趣味の開けた事から、其造詣を庭作りの上に持て來たと云ふ事も有るだらふが、一面から考へると、只夫許りで無く、世事の煩を嫌つて、夫から廻避するには名山に入つて遊ぶと云ふ支那流の考を受けて、自ら庭園に一種の山水を模造して、自分の住居を恰も名山の中に置いた様な心持になつて、一種の慰藉を得たので無いかと思ふ。

つまり義政の生活は、是を表面から見ると、豪奢な耽溺して、只自分勝手な遊戯三昧、贅澤三昧に日を送つた道樂者の様に見へるが、夫は生活の理想化、生活の趣味化であつて、日常の實生活を其儘一つの藝術として享樂したので無いかと思ふ。さうしてさう云ふ事を考へ付いたと云ふのは贅澤の意味で無くて、寧ろ隱遁的の考から來て居ると思ふ。世間を煩く思つて、其世間から逃れる手段として、獨自一個の生活を創造して、其生活の中に自己のほんとの魂を見出さふとしたのが義政の生活では無かつたらふか。私にはさう云ふ風に思へるのである。即ち家の周圍に理想の山水を現はした庭園を作り、其庭園の中に簡單な住居を置き、其住居の中に畫を鑑賞し、自然の風致を現はした生花を置いて住居全體を理想化して、生活其物を直ちに一つの藝術として受取ろふとしたのが義政の生活の目的でなかつたかと思ふ。夫だから挿花が一種の藝術として考へられ、土瓶茶椀の製作も一つの藝術であり、茶釜も藝術であるなら、茶を飲むと云ふ作法其物も一つの藝術だと云ふ風に、生活に關はるすべての物を藝術に見て、其土瓶、茶椀の作者の名が、運慶、雪舟などの畫家、彫刻家の名前と一緒に並べられ、茶を飲む作法を工夫した利休や、遠州の名が、西行、芭蕉などと併せ稱せられて居るので有らふ。此一種特別な國情の源を溯れば、

夫は皆義政の趣味生活から起つた事である。

此時分に又茶の湯と云ふ事が始まつて居る。夫は南都稱名寺の僧珠光に依つて工夫された事になつて居る。つまり一禪僧の創始した物を義政が採用して、同じ道に耽つた事になつて居るが、實は此茶の湯と云ふ事は、義政の生活の趣味化と云ふ事から思ひ付いた物であつて、義政の趣味生活と云ふ事は面白いが、あれではまだ冗慢無益な事が多い、且つ其趣味がまだ洗練されて居ないと云ふので、夫をずつと簡單にして、洗練を加へたのが茶の湯の生活である。即ち義政の座敷飾りが、床に三幅對、四幅對などの畫を懸け、前に一對の生花を置き、香爐、燭臺などをうるさく飾り立てたのを略して、一幅一瓶の制度に改め、八疊四間の座敷を切詰めて、四疊半の艸庵を造り、そこで茶を飲み食事を仕乍ら、繪畫、挿花、工藝美術等の趣味を樂んだ物である。すべて義政の生活を簡單にして、一層夫を醇化した物である。義政の趣味生活は此茶の湯の醇化作用に依りて、廣く民間に普及したと云つてよかろふ。其點から考へると、珠光を始め、千利休、小堀遠州、古田織部、松平不昧など云ふ歷代の茶人は皆義政の後繼者であり、其祖述者と見てもよい譯である。

尤も茶の湯に此醇化作用の徹底して行はれたのは、夫は千利休であつて、夫で利休が茶の開祖、古今を通じて茶の湯の第一人者の樣に見られて居るのであるが、珠光は單に義政の生活を簡略にしたと云ふ丈けで、趣味の簡易生活を思ひ付いた丈けであると思ふ。私は近頃世間でやかましく云はれて居る、文化生活と云ふ物の意味をまだほんとは能く解らないのであるが、夫が若し現代に發達しつゝ有る有らゆる科學を應用して、出來る丈け簡易な便利な生活を營むと云ふのであるなら、此茶の湯は趣味の上に立脚して、そこから簡易生活を主張した物の樣に思ふ。文化生活が、電氣を應用して其便利な事を經驗して居ると、茶人生活は、田舍の爐などを模倣して原始生活の興味を味つて居る。私は今の文化生活と、茶人生活の對照は實に面白いと思ふ。誰れかもつと二者を比較して詳敷夫を說いたら一つの面白い話柄になると思ふ。

兎に角茶の趣意は簡易と云ふ事に有る筈だと思ふが、今では却つて是を人が面倒な物に見て、「今時茶の湯でもあるまい、此多忙な中にどふしてあんな面倒臭い事がやつて居られるか」と云ふ風に茶の湯のすべてを見る人が多い樣であるが、夫は茶の湯の精神が誤解されて居る結果だと思ふ。桃山時代に秀吉を始

め、多くの武人に茶の湯が喜ばれたのは、其簡易と云ふ事が武人の氣に入つたので、若し是が今の樣に面倒いうるさい物に見られて居たなら、どうして秀吉などの意に合ふだらふ。

茶の湯が面倒い物、煩雜な物に見られて居るのは、末流を汲む人が其眞意を解せず、つまらぬ形式に拘泥する結果だと思ふ。私は茶の湯を面白い物だと思つて居る一人で有る。さうつまらぬ物で無いと思ふ。併し茶人は大嫌ひだ。茶人程何も物の解らない癖に、何んでも知つた樣な顏をする者は無いと思ふ。さう云ふ反感から私の樣に茶の湯を面白いと思ひ乍ら、茶を嫌つて居る人も世間には少くないと思ふ。

最後に能樂と義政の關係はどふかと云ふと、私は只能樂が足利氏の式樂であつたと云ふ事を記憶して居るのと、其お能の律動が、義政に依つて創造された、日本の挿花、此時分の挿花は今の挿花とは樣式の違つた物で、一種特別の形式を具へて居た。夫と照し合して見ると、其律動に餘程似た點が有つて、挿花の樣式を其儘人間の動作に現はせば、夫が直ちにお能になり、又能樂の律動を挿花の上に應用すれば、すぐ此時代の挿花が出來ると云ふ樣に、夫程二者の間に近接した點が有る事から考へて見て、能樂も挿花も、つまり同時代の思想の一つの現はれで有ると思ふ。さう云ふ點から見て、能樂も又義政の生活の一部と見做す事が出來ると思ふ。只義政の趣味性行から推すと、義政はさうした人間の動作、音聲などより、靜的な物を好んだ傾向が有るから、何れかと云へば、お能と義政の交渉は、他の建築や、庭園や、繪畫、茶の湯などの關係から見て、夫程深く無かつた事は想像される。

要するに義政の生活は、多趣味であり、又贅澤にも見へるが、夫は得意の地位に立て豪華を極めた物で無くて、失意と云ふ程でなくても、甚だ意に滿たない、不滿な世の中に生れ合はして、夫から逃避する爲めの手段であつたと思ふ。隱遁的である、廻避的であると思ふ。さうした境遇から生れた趣味が、どふして今の樣な時代に是程適合するのであらふ。東山時代と明治、大正の世の中とは餘程差違が有る樣に思ふ。今の日本は何と云つても勃興の時代である。日本が此程勃興の機運に向かつた事は過去を振り返つて見ても無いかも知れない。是は義政の時代に比すれば、黄金時代と云つても云ひ過ぎでは無いと思ふ。夫にも拘らず謠曲が榮え、挿花が繁昌し茶の湯や書畫骨董が流行するのは何の爲めであらふ。隨分不思議な現象であると

思ふ。

私は其原因を考へて見て、夫は必ずしも義政の趣味が勝れて居る許りでも無い。現代の人にはどこか義政の趣味境遇に似通ふた點が有るので無いかと思ふ。表面は太平である、得意の地に居る人も随分多いと思ふ。併し翻つて其裏面を窺ふと、生存競爭のはげしさに堪へず、或人は神經衰弱を起し、或人は暗に苦痛を訴へて居る。何等かの方法に依つて心機の轉換を計る必要が有る。而かも夫は西洋流の刺撃の強い物では却て結果の反對になる恐がある。夫が偶々義政の廻避生活と一致し、其趣味に適合する所以で無いかと思ふ。

かく云へば人或は、夫等の事柄は敢へて現代に迎へられて居る許りで無い。夫は徳川時代にも模倣されて居たでは無いかと云ふ人があるかも知れない。併し徳川時代に迎へられたのと、現代の人が是に執着するのとは、多少趣が違ふと思ふ。云ふ迄も無く徳川時代は個人の自由競爭を禁遏して、多くの人が無聊に苦んだ時代である。無職に苦んだ爲めに、義政の趣味生活は矢張多くの人に學ばれたので有るが、夫には消閑の意味が多かつたと思ふ。今の人の是を學ぶのにも矢張り消閑の意味が多少は有るかも知れぬが、其心理には今述べた様な事實が有りはしないかと思ふ。

徳川時代の情勢であるか、夫とも違つた意味から來て居るかは、もふ四五十年も經て見なくては分らない事である。四五十年の後に至つて、尚且つ是が榮へて居れば、私の考が當つて居るのだし、夫が衰微の徴を現はして居れば、矢張り過去の惰性だつたと云ふ事になるだらふ。

東京市長を辭して日露問題に肝煎した後藤子

文學博士 三宅雪嶺

後藤子が東京市長職を辭したのは、三段に分けて觀る事が出來る。一に一般市長の位置よりし、二に東京市長の位置よりし、三に後藤自らの立場よりする。

現行自治制は山縣公が内相として取り懸つた所に係かり、官吏の權力に撞着せぬやうにし、一種異樣の形になつて居る。初め伊藤が憲法制定とか、山田が法典編纂とか、關係各特殊い事業を分擔し、山縣が自治に當つた時、軍事の片手に何れ位の事が出來るかと心配され、ともかく目鼻が明いたので、結構とせられたが、其後時機を見て漸次改むべきに、それほど改まらず、市長の位置がとかくぐらつき易くなつて居る。一度市長が罷めれば、後任に暇取り、定まれば助役も變り、前に遣り懸けた事を遣り直すといふ事になる。それでいよいよ遣り直し得るかと云へば、市會議員の多數で決定し、市長が之を何うする事も出來ぬ。初め自治を奬勵するやうで奬勵せず、監督の下に自治を許すと云ふが先きになり、眞に市の爲めを思ふ者が進んで議員にならうとせず、利權を爭はうとするやうな連中が多くなり、市の爲めよりも、自身關係者の爲めにするに傾く。衆議院が既にさうであつて、府縣會もさうであり、市會がさうなるのも已むを得ぬとするが、他は必ずしも決議に從はねばならぬと限らず、市長は何でも市會の決する儘にせねばならぬ。其處は市長が官吏と違ひ、解散も出來ず、手の付けやうがない。

利權漁りの議員が決定する儘にして安んずる市長は、何ういふものであるか。或る特別の事情を以て職に就くの外、俸給の爲めにすると見られる者である。其の爲めにしなくても、さう見られるを免かれず、又實に多くはさうなつて居るらしい。市長を定める時、詮衡委員は其の當人に恩を着せやうとし、市長も之を知り、特に其の言ふ事を聽かねばならぬ。市長は名譽でもあり、悪くない位置と考へ、職に就いて見たものの、何でも言ふ事を聽いてばかり居れず、聽かうとしても、一方に反對が

あり、痛くもない腹を搜ぐられる事もあり、とても居れぬとして辭職と決心する。或ひは議員の方で辭職を迫って來る。或る黨派で多數を占め、其の代表者として出で、何の故障ないのもあるけれど、其の黨派の爲めに鬪るに止り、市の爲めに不利益と思うても、實行せねばならぬ。市の爲めに不利益と思ふのは、善い部類であつて、市政はさういふものと信じ、何の疑ふ所ないのが稀とせぬ。さう行かぬ所では、市長も愛憎を盡かし、議員も愛憎を盡かし、任期の滿たぬ間に、更迭する事になり、中には就任間もなく罷めるのがある

市長として長續きするのは、特殊の事情を以てするが、大阪市で名望家が失敗し、警察上りが最も成功しつゝあるのは、長く勤めて手心を覺えた所もあるとし、議員の素性を知り、其の弱點を押へ得る事が最も與つて居る。議員が何の意で發議し、それが如何に市政に影響するかを見て取る事が出來るが、いざと云ふならば別に方法があると凄味を見せても居る。久しく市に居つて懐かし味もあれば、警察を控へての強持てもある。さういふ調子で永持ちする程であつて、單に多數が迎へて與れたといふ丈けで乘込んでは、何時抛り出されるか知れぬ。大阪市で或る男爵の如き、直ぐと抛り出され、慘目な眼に逢つた。かゝる狀態では、專ら市の爲めに力を盡くさうとして市長職に就くが如き、とんだ目に逢ふの外ない。

市の爲めにせねば、何の爲めにする乎。そこで市長職に就いて兎角の面倒を免かれなくなつて居る。市會議員に善いのが尠いと云ふのも缺點ながら、市長が餘りに權力ないと云ふのも、市長らしい市長の現はれない所以である。幾代も經驗を積めば、少し宛改まらうが、今の所では、市長は單に市會の多數に從ふのみでなく、成るべく之を指導し、事によつて、決議を否認し、反省を促す位にせねばならない。そこが一般市長に對しての問題に屬する。

所が、市に種類が多く、二萬五千人の小さな市からして、約二百五十萬の東京市まで、種々樣々である。此の違つた多くの市を一樣に看做すのは、小さな市の自尊心を高めると云はば云へ、大きな市に取つて當惑することがいろいろある。同一の名義でも、一圓と百圓との違ひがあり、一圓で旅館に居る者と、百圓でゐる者とを平等に扱ふのは、水平の極に達して居る。それならば何も百圓拂ふに及ばず、御免を蒙らうと、云ふ事になり勝ちである。東京市長は何時とはなしに大臣級と云ふ事になつて來た。俸給もさうであるが、其の點では他に大阪もあり、特別に東京を限り得ないが、何分にも帝都の下、内外人との交

際もあり、大臣並みでなくてならず、それも平大臣では物足らず、首相級でありたいと云ふやうな所があり、實際大臣になつた者を幾人も市長にして居る。

ところで大臣になると東京市長になると、何れが善いかとなれば、市長は位置に於いて警視總監及び府知事にも伺ひを立てねばならぬのみならず、市會の決する所に從はねばならぬ。それで何ういふ職務があるかと云へば、大國の首都として着手すべき事が山ほど積み重つて居り、少しでも職務を怠とすれば、一刻でも安閑として居れぬ。大臣になつて居る方が、幅も利いて氣樂である。官尊民卑の習慣で、命令を以てせば、大抵の事が定まり、衆議院にでも解散を以つて脅かせば、有象無象がびく〳〵する。之れだぞと云ふ武器を具へて居る。市長にはそれが無く、市會の云ふ事を聽かぬとは以つての外と、逆捩ぢを食はされる。市長になり手もなり手であるが、議員のさもしい根性で、俸給及び交際費を市長の身邊に結び付ずに置かぬ。之れまでよりも多く收入があるでないかと云ふ事になる。餘り議員に頭を下げねば、誰のお蔭で職に居るか、考へて見るがよいと云ふ調子である。大抵の者は堪忍袋を切らずに居れず、強いて其の緒を締めて居れば辭職を勸告するに至る。

初めの市長松田氏は、ひたすら堪忍して、それでも旨く行か

なんだ。逍に尾崎氏は其の邊を心得て居り、何と云はれても我を立てず、逆らはねば可いとして、長續きした。東京市を何うしようとか、市長の位置で出來る事でないと妙に悟つて居る。何の爲めに在職するか、俸給の爲めかと詰られても一向平氣、何とでも云ふが可いとする。無難に勤めやうとすれば、さうなくてならぬ。自ら意見を持ち出しては、事が面倒になる。市長として何も爲んでないかと云はれれば、市の事は市會が爲すのであり、市長はその爲すが儘にして居れば可いでないかと來る。さういふ腹の極め方では困るとしても、そこを見拔いて平氣になつて居るので、當時大阪市長を勤めて居つた者が、あの眞似は俺に出來ぬと云ふた。一種の度胸を据えたのである。

阪谷男はさうして居れず、東京市に對する職分といふ事が氣に懸かる丈け位置が難かしくなつた。奧田男は尾崎と同じく市會の實質を知りつゝ、更に一層市會の有力者の要求する所を察し、其の滿足するやうに取計らつた。それが市の爲めに利益とも考へたらうが、眞に利益か何うか。長續きしたならば、大騷ぎが起らねばならぬ所、その以前に歿し、名市長として市葬にせられた。田尻子は大臣にこそならね、爵も平大臣より高く、市長として十分の貫目あると見られたが、市會の實情に就いて知る事甚だ少く、已れ自ら何の地位に居るかをも解せぬかに思は

れた。眞逆かそれほどの者と思はれなんだのに、如何にも物解りが悪るく、田尻一代の失策は東京市長に爲つたのに在るとすべきである。官僚畠に育つた者は、斯くなり易く、田尻は人を誡めるが爲めに現はれ出でたのであらう。

それと云ふて田尻まで糶上げて來た市長を、其の以下に落す譯に行かず、そこには内相から外相に移り、何時でも首相と云はれさうな後藤子が、偶々閑散な身であるらしく、之を擔ぎ出さうと運動した。肝入りといふ連中が、此處が袒の脱ぎ所として奔走した。後藤子は各方面に諒解があれば、一度東京市長になるのも可いと考へたらう。何れ位勤むべきかを考へたか何うか。首相原氏も存命中であり、東京市長職を後藤に宛てがつて置けば、面倒も少く、何か面白い思付きもしようと云ふ所で勸めた。自分も出來るだけの援助を與ようと云ふた。後藤が市長となつたのは、糶上げの絶頂に達したので、市會では特に俸給を上げようとし、後藤は之を公共事業に抛げ打つことにした。そればかりでも前の市長と違つて居る。金があるからであつても、金の爲に職に就かぬぞといふだけの事を明かにした。助役の選定も宜しきを得た。自分の在職中は、東京市將來の爲め大計劃を定め、之を後に遺さうと云ふ位の事を考へたらう。八億圓の計畫と知られたのは、想像ばかりでなく、其の可能性を認めたのであらう。西伯利の野にも八億圓を捨てゝ居る、帝都を完成するが爲めにそれ位の額を費せなくて何うするといふ意氣込みもあつたらう。長く辛抱したならば出來ぬ事も無く、絶えず其の爲めに骨を折り、二三期も經過したならば、政府も世間も根負けして同意したらう。後藤自ら他に爲すべき事なければ、さうしなかつたとも云へぬ。

併し自分が小倅扱ひしたものが内相として大監督顔をし、市會でも大風呂敷きの後始末を何うするかと呟き、小面倒な事件もいろいろ起り、もはや痺れを切らして止まる甲斐が無いと見たらう。本來氣の多い性質でもあるが、割合に大きな事に目が付き、之を敢てするの意氣がある。絶えず眼を外國につけ、中にも露國に興味を覺え、之で何事かを成さうと考へた。日英同盟を如何に觀たかは別とし、桂公を動かし、露國と計る所あらうとした。官僚も露に重きを置き、日露協約で外交の方針が定まつたと考へたが、革命後に赤化宣傳に懼れ、之と共にするなど夢にも思はれぬとする。後藤は一段上より觀、革命が起つても露國は露國、外形の變化にかゝづらふべきでないとし、外交の行き詰つて居る所に一幕開けやうとする。ヨツフエといふ人物が露國に居り、他國に出て條約を結ぶに慣れ、支那でも何事か

を試みようとして居る。偶々病氣で惱んで居り、日本で保養させる方が當人の爲めにもなり、何かにつけて便宜もあらうと思へる。全く利用の意ないでなけれど、人の爲めに計るの親切心もあり、ヨツフエもさるもの、日本へ行つて何か出來ぬものでもなく、出來なくてももともとといふ位に度胸を据えて居る。ヨツフエとても鬼でなく、親切にすれば親切に感ずる。露國人は利害を打算するけれど、何處か大まかな所もあり、儀式張らずに笑つて話がついたりする。漁業問題を一片付けするに至つただけの事があり、其の他の事は尙ほ分らぬ。

露に對して一と袒脫いだのは、後藤に取つて近來の出來と云はねばならぬ。之を斡旋した者は他にいろいろあるとし、成敗の分り難い所に乘つて出る者は、あるやうでなく、世間でも後藤が成功すれば褒めてやらう、失敗すれば嗤つてやらうといふ狀態になつて居る。當面の當局者さへさうである。良ければ助力し、惡るければ差し止めてよいのに、そこまで踏み込む事が出來ぬ。後藤としては、何處まで漕ぎ付けるか、承認まで漕ぎ付けるかの不明であつても、東京市長を罷める程の仕事に取り懸つたのを認めねばならぬ。今後政界に何の位置を占めるか、未知數になつて居る所も面白い。今の所、首相になつてもならなくても、それだけの箔をつけ、當世有數の人物とする。その金廻りに豐かなのは、長所であつて短所である。金廻りに惡くては、現在の位置を得るに難く、市長の俸給を公共事業に振り向けるなど出來る事でないが、折角日露親善の爲めに計りつつ、鈴木商店の砂糖買占めの如きに疑を招いてゐる。此の邊を明かにしたならば、寔に見上げた者であるが、其處まで望み難いか、もはや其の邊にも疑を解き得るとするか何うか。

後藤子が東京市長を罷めたが爲め、今後の市長は、少くも經歷に於てそれ以上の人物でなく、それ以下の人物となつた。澁澤子が出れば、先輩として其れ以上であつても、前に十年も若ければとの事であり、今は更に難かしからう。助役の昇進ならば、滿鐵社長の後藤の後に中村が出たといふ形になる。或ひは看板よりも實質が大切とするが、今の市制では、大看板を掲げぬ限り、市會の有象無象に嬲り者にされて過ぐるに止まる。後藤子がせめての事に市制を改めて去つたならばと惜まれる。

頻々たる性的事件と性道德の新目標

根本的戀愛の保護・解放及び正用

杉森孝次郎

戀愛至上說とか、戀愛至上主義とかいふたぐひのことばが散見するやうだが、現象としては、戀愛のために他のすべての興味を犧牲にする場合はあつても、原則としては、人生に於ける戀愛の位置は、決して至上ではない。

從來は、言說的主張に於いては、戀愛は、ややもすると至下扱ひされた。いはば戀愛至下說または戀愛至下主義が、現今に於いてさへも、多くの言說的主張や言說的批評に、無意識的あるひは半意識的ながらに採用されてゐる。

人生に於ける戀愛の位置は、至下でもなければ至上でもない。戀愛は、生活興味及び生活活動の一複雜體としての人に於ける一要素にほかならない。戀愛は、部分的實在であるが如くにまた部分的價値だ。戀愛は、人生に於けるそれの位置を、存在關係及び目的關係の兩特徵のいづれに於いても、有限にして持つ。

戀愛は結婚に進み、結婚は出産に進み、出産は養敎育に進みさらに自治的創造に進む。文化の保存及び成長は、種族的形式に於いて個人が永生することを一基礎的要件とする。文化保存の可能が、結婚なしでは考へられないのだから、人生に於ける戀愛の位置は卑小では決してない。戀愛は、わるいものでも、いやしいものでも、つまらないものでもない。戀愛が、わろかつたり、いやしかつたり、つまらなかつたりするすべての場合は、戀愛そのものの罪過ではなく、戀愛を持つ、または、

いとなむ人の、持ちかた、または、いとなみかたに於ける罪過であるにきまつてゐる。

戀愛は結婚の一豫件または一要件であるとするならば、結婚は新人格を創造するための一豫件または一要件であるがゆゑに、そして科學も、藝術も、經濟も、政治も、教育も、すべてのこれらの文化價値は、人格の內容及び作用としてのみ存在可能であるがゆゑに、科學も、藝術も、經濟も、政治も、教育も、ことごとく戀愛の內容及び作用にすぎないと考へることは、一應、妥當に見えるかも知れんが、實は、つくさざる考へだ。

なぜかといふと、その論法からいふならば、例へば、太陽なしには人の生存は不可能だ。しかるに、科學も、藝術も、人なしには不可能だ。それゆゑに、科學も、藝術も、太陽の內容及び作用にすぎないと考へるならば、なに人も、その考へがつくさざる考へであることを感ずるであらう。その感じにみちびかれて、相當の客觀的理由を發見するだらう。同樣の關係が、戀愛がすなはち科學だ、藝術だ、おの〳〵の、または、すべての文化價値だと考へる人の場合にも存在する。

およそ、經驗、存在、または、價値の說明は、それの過去や將來にそれを還元したり進達させたりすることのみによつて完成されるわけのものではない。科學的興味及び科學的活動は、また、藝術的興味及び藝術的活動は、それの原因や結果から離れて、それ自身に、ある價値と、存在と、性質とを持つ。實をいふと、現在が、過去よりも、また將來よりも、すなはち、それの原因よりも、またそれの結果よりも、一層完全なる存在であり、價値であり、經驗であるのだ。戀愛と科學とのあひだや、戀愛と藝術とのあひだに、どんなに原因と結果とのあひだの關係が存在しようとも、だから科學は戀愛だ、また、藝術も戀愛だと認識するわけにはゆかん。

戀愛といへば、相手がわかつてゐ、とにかく、すでにある程度まで發動の途にのぼつた性欲及び性愛だとして理解される餘地がある。しかし、わたくしは、ここでは、いはば戀愛の未發態としての性的根本興味及び活動をも、いなむしろそれの方を、已發態としての戀愛よりも餘計に注意の對象に置いて戀愛論をやつてゐるのだが、その深い、廣い意味の戀愛は、科學、藝術等の文化活動に變形する可能を有すると同時に、それらの文化活動と同源に汲む特殊の一興味であり、一活動であると見られる。しかし、科學や藝術の發生論がどうあらうとも、それらの現實論や價値論となれば、科學は科學であつて戀愛ではない、また、藝術は藝術であつて戀愛ではないと明確に判斷される。

およそ、生命の成長を、それの既往狀態としての原始狀態のみによつて説明し、理解し、認識せうとする企ては、甚だしい無知であると同時に亂暴だ。芽は種だ、枝葉花果は芽だといふことが、そのことばのある意味に於いて例示する如くにだ。たとへば、十七、八歲の處女は、かの女の前期態としての赤ん坊によつても、またかの女の後期態としての老婆によつても、かの女自身を、かの女の現在の本質と價値とを決して完全に、また代表的に説明されうべからざる獨特存在であり、個性であり、目的價であることを、なに人かついに疑ひえよう。

根本戀愛の原料的、自然的形式に於ける發表と滿足とをば、種族保存のために必要な、有用な程度を標準として制限すべきだ。殘餘の根本戀愛をば、人としては、科學、藝術、政治、經濟、教育等の文化活動に投資すべきだ。ついでながらに注意するが、勿論、精確には、藝術が根本戀愛と至近の關係にある。藝術意識、藝術活動の特質は自己目的にある。それが手段價でなく、目的價たるところにある。しかるに、戀愛は、それ自身に引力を持つ。人は、戀愛のために戀愛に引かれる。引かされる。人は戀ひするために戀ふ。戀愛は、實は、それ自身、一種の藝術意識であり、一種の藝術行動であるのだ。それゆゑに、戀愛を、それの未發態に、あるひはそれの已發態にでさへもしたがつて、文化活動に轉用すれば、文化能率は、自己目的の活潑さを與へられて生き上がる。根本戀愛と文化とのあひだの關係にもまして、因果關係の深い場合はない。

異性を追ひ、性交に耽る男女は、粗雜なる頭腦の持ちぬしだ。科學、藝術、政治、教育等が、かれらにむかつては、あまりに淺い底を示してゐるのだが、それは、底が淺いのでなく、かれらの視力が短いのだ。犬でさへも、異性を追ふ能力に於いて、活動に於いて、熱烈さに於いて、かならずしも人に劣らない。單に性になやむ人を見ては　わたくしは、ある境遇のをとこ犬を聯想させられる。

本質的意義に於ける藝術は、現象的意義に於ける科學にも、技術にも、政治にも、經濟にも、教育にも、完全に許與されてゐるのに、なぜ、人は、古來、現象的意義に於ける藝術のみに、それも性行方面のみに、かれの最深の藝術本能を解放したのだらう。反省と思索と知識との不足がこの問ひに對する唯一の答へだ。

貞操が、男女間に雙務的に分配されべきことや、結婚は、小供に對する責任を自認すべきとについては、それが完全に社會の觀念及び實行として成功するまでは、反覆唱道の餘地がある。

しかしながら、今日の日本の社會に於いて、最も力説を要す

る一事は、正しき意味に於いての根本戀愛の保護及び解放だ。父兄本位の結婚が現實的に、及び殊に象徵的に意味する人格破壞、文化毀損の原始的慣習を、早く根本的、進化的に超脱する用意が必要だ。そのためには、男女間の品性あり、知識あり、道德ある社交の機會が設備されなくてはいかん。姑息にも見え、平凡にも見えようが、この點に於いては、歐米のある國々の程度にまででもいいから、早く、わが社會に於ける男女間の道德的に相知る機會を進達させたい。さうでないと、根本的戀愛が、ゆがんだ、不自然な、破壞的な表はれかたをのみする。鬱抑と、滯塞と、乾涸と、腐爛と、また、爆發と、猥褻と、要するに破滅が、唯一の結果だ。

道德的保障のある男女交際に機會を與へなくてはいかん。現在のままで男女間の交際の遮斷的埒柵を解き放てば、亂と醜と痴態とに落ちるにきまつてゐる。ぢきに、男は女の、女も男の、居室や寢室へ往き來するやうになるのだ。封建主義の日本に於いては、男は女をいやしむと同時にむやみにありがたがる。威張りもせず、へつらひもせぬところに、自由社會民の道德はあるのだが、日本人は、威張るか、へつらふかの兩端に生き途を見いだす如くに、男女道德に於いても、隔絶と醜交のほかを知らない。恥づべく、かなしむべく、また惜しむべき狀態だ。

近代的生活事實と性的道德の進化

長谷川如是閑

概念構成の過程そのものを道德と考へるに至つたのは、生活を概念的に構成する階級が支配者の地位に立つた結果であつて、軍國的支配と知的支配との結び付いた人間の歷史の產物であつた。眞・善・美といふやうな概念の完成が生活それ自體よりも人間に取つて價値のあるものであると考へたのも、その結果であるが、數千年の歷史について觀察して見ると、實はさういふ概念構成の生活者は特別の階級に屬する人々で、而かもその階級生活者の中でも殊に小部分の人々に止まつてゐたのであ

る。無論少數の者は尊いといふ經濟上の價値の法則に從つても、さういふ生活は尊いものとして見積られる理由はあるが、その尊いものが果して人間的生活を維持する根柢的の要素であるかどうかは問題である。

それは畢竟、その概念を造り上げた生活經驗そのものに依存するのであつて、眞も美も善も生活過程の經驗的事實がそれを成立せしめるか、せしめないかといふことで問題が定まるのである。だから概念構成を生活上の主な仕事とする階級の概念は、この生活經驗の事實が進化するに從つて崩壞するか、又はそれに順應して修正されるかの外はない。これが所謂『時代の思想』などと稱して特に一定時期に固有の思想が成立つ所以である。

このことは生活の總ての法則に關して云へることであるが、殊に道徳又は法律と稱せられる行爲の法則に於いて最も顯著に示されてゐる。數千年來この法則の根柢並びに動力が何であるかについて、絶えず爭はれてゐるが、それは畢竟複雜な人間生活の進化が新たな生活經驗を絶えず人間に與へて、舊概念を修正しなければならないことにしてゐるからである。尤もその爭の間に於いて、舊概念が社會の一部に必ず一種の安全地帶に閉ぢ籠つたやうに保存されてゐるのであるが、それは思惟の過程が或る階級的生活の組み立てによつて、生活經驗と沒交渉に發展させられることも出來るからである。然しそれは畢竟特別の階級生活者の世界であつて、骨董品が一部階級に非常な高價を保つてゐるのと同じ理窟である。

性の道徳も、それ故に、生活の進化によつて絶えず進化してゐるのであつて、ただ概念構成の過程に於いて、その經驗的事實と懸離れた偶像を有つてゐるに止まるのである。道徳の進化は一般にさうであるが、殊に性の道徳に至つては、顯著にその進化の迹を見ることが出來る。と言ふのは、それが制度の上に一定の形で顯はれて來るからである。これは道徳の進化が制度の上に顯はれるのではなく、制度の進化が道徳の上に顯はれるのであるが、その過程は吾々の日常生活と密着した事實なので、善惡ともに凡べての人間が影響されること、形而上學の進化が吾々に沒交渉なのとは大に違ふ。宇宙哲學がどう進化しようが、一般人は沒交渉であるが、性に關する制度の進化は、誰に取つても一つの重大な出來事である。

何故に性の制度の進化がそれ程一般に影響するかと云へば、言ふまでもなく性の生活は凡ての人が營んでゐる生活であつて、特別な概念構成の生活のやうに、特殊階級のうちに一部分の人だけが營んでゐるものではないからである。そのことは當然次の事實を證明してゐることになる。第一に性の生活は全人

類の最も原始的の生活であるといふこと、從つてそれは概念構成の生活に助けられた意識目的によつて支配されることの最も少い生活であるといふことである。それを或は動物的と云ひ、もつと科學的な口吻で『衝動的の生活』などと云ふが、いづれにしても昔から『戀は思案の外』と云はれてゐる通り、思案即ち意識の作用は、性の生活に於いて全くではなくとも、殆んど無能力であるといふことが、暗々裡に承認されてゐたのである。それは言ひ換れば、性の道德は衝動によつて容易く打ち破られることを云つてゐるのであるが、然し元來性の道德そのものが、段々研究の結果、衝動的行動に對し非常に力强い拘束力を有つてゐるといふことが發見されたのである。而かも何故にそれ程力强いかと云へば、その道德が凡べての道德のうちで最も意識的でない、即ち最も無意識的であるといふことに原因してゐるのである。

性の道德の原始的のもの、並びに最も發達したものについて考へて見ても、性の道德は全く無意識的禁制である。容智が最も働いてゐない禁制である。例へば貞操觀念の如き、根本的な性の道德ではあるが、決して容智的ではない。又論理的でもない。その概念すら明瞭でない。ただ盲從である、原始社會に於いては、貞操及びそれに關連した道德は極めて無意義のやうに見えるものであつたが、併し非常に嚴重なもので、それを犯せば大概は死刑であつた。性的羞恥の如きは、この禁制を恐るゝことに起原するかと思はれるくらゐなものである。妻の母の顏を見てはならぬ習慣とか、婚間夫と同居してはならぬ習慣とか、夫又は妻の名を直接に呼んではならぬ習慣、(それは今でも夫を「やど」と呼び、人の妻の名を決して呼ばないで、「奧さん」とか「お家さん」とか呼ぶ習慣に殘つてゐる。)その他凡べての無意義らしい性的道德の法則は、何れもそれぞれ社會生物學的又は社會心理學的根柢があつて出來上つたことであつて、その根柢は今日の文明人の知識で理解するのは難しいので、ただ社會生活の或る時期に生存上の過程として經驗した生活事實が、進化の法則でさういふ禁制となつて殘つたのであらうと考へる外はないのである。

發達した性の道德も、畢竟右のやうな原始的事情から脫して了つてゐる譯ではない。例へば因襲的な貞操の觀念が守られるのも甚だ無意識的であるし、又因襲的の貞操觀念が崩れるといふ近代的現象にしても、いろいろ理窟はつけるが、それは所謂『解釋』で第三者の意識に於いて起る作用であつて、當の破壞者其人は要するに盲目的に破壞してゐるのである。そのことは事實を驗しても、亦たこの現象を藝術の上で表現してゐるも

のを見ても明かである。で、それは誠に神秘的な作用であるかの如くに考へられてゐるのであるが、その神秘は畢竟原始時代のタブウが神秘的であるのと同じ意味である。だから貞操が一種の禁制として表はれるのも、又それが新たな性の生活によつて打ち破られるのも、等しく無意識的作用によつてゐるのである。それ故に貞操の破壊も、それが性の生活の進化として表はれると、破壊そのことがやはり道徳的に観念される。時代を代表した性質の性的悲劇は、制度の進化の現象として、必ず道徳的に受け容れられる。換言すればその悲劇は、進化した性の制度を築き上げる基礎となるのである。だから現在の性の制度を破壊するといふ行爲も、それが唯單に個人的衝動によつてゐるやうな外觀を呈しても、決してそれは凡ての場合に個人的現象ではない。原始的のタブウも、個人的に破られることは無論有り得るが、然し時代の進化がそのタブウを破つて行く時には、禁制破壊は決して個人的衝動ではなく、それは謂はゞ社會的衝動――さういふ言葉が使へるとしたら――である。即ちそれは制度としての性の法則が、社會的に破られて行く過程である。十八九世紀以來のヨーロッパ初め、凡べての文明國に起つた性の生活の混亂は、決して個人的の現象ではない。その衝動には社會進化の機構が働いてゐることを拒む譯には行かない。

上述の見地に立脚して考へると、今日の性の道徳の混亂は、固定した性の制度が、進化した生活事實と一致しないところから起つてゐるに相違ない。それ故にこの近代的進化を觀察する者は、社會生活の進化と關聯して考察することが肝要である。新たな性の道徳の建設は、この一般社會生活の進歩の上に築き上げられなければならないのである。この方法で近代的現象を觀察すると、二段の經過を取つてゐることが認められる。第一段は崩壊の經過である。第二段は建設の過程である。

崩壊の經過としては、性の道徳の破壊は一般近代文明の崩壊の中に働らく一つの過程に過ぎないのである。社會の凡べてが完全に傳統的の發達を遂げてゐるのに、性の生活だけが崩れつゝあると言ふのではなく、その反對に、性の生活の崩壊は文明組織の崩壊そのことの一つの症狀に過ぎない。これを詳説することは今の場合不可能であるが、性の道徳の進化の歴史に於いて明かである通り、性の制度は叡智の生活の支配を受けるよりは、寧ろ經濟的生活の支配をより多く受けてゐる。近代文明の崩壊は哲學の崩壊ではなく、生産組織の崩壊であつて、二十世紀に至つて頂點に達した産業組織の自己崩壊である。その意味でギリシア、ローマの崩壊と多くの共通點を有つてゐる現象である。性の道徳はこの近代の産業生活の基礎、即ち個人主義的

基調の上に築き上げられたことは、一般道德哲學の近代的組み立てと變りはない。而してこの個人主義の組み立ては、ギリシア哲學がギリシアの特權階級の組み立てであつた如く、今の特權階級の組み立てであつて、無產階級は全くこの個人主義的生活の特權から除外され、そこに近代生活の崩壞の基が培はれたのである。性の制度に於いても、極端な個人的自由主義が成立し、近代の戀愛觀と云へば必ずこの個人的自由主義の基礎に立つてゐる。而かもこの戀愛的自由主義の特權を享樂し得るものも、同じく特權階級の人々だけである。多數人は社會的生活組織の必然からさういふ自由を享樂する特權を與へられてゐない。而もさうかうするうちに、產業上の個人的自由主義が崩れて行くやうに、戀愛上の個人的自由主義も、決してそのまゝ次の制度の建設に現はれやうとは思はれない。

無論この近代的個人主義は、人間生活の上に於ける當然の進化であつて、この個人的自由の基調が全く失はれるやうなことは不可能であり、又それが人間的生活を向上せしむる有力な働きを今後も長く勤めるであらうことは、例へば兩手が動物の足から進化して、指先きの器用が生活を助けるやうになつた以上、永久に兩手が人間的生活の進化向上を助けると同じことであるが、然し兩手の働きにも制限があつて、直ちにそれだけは不十分となり、種々なる道具の發達によつてそれが補はれなければならないやうになつた如く、個人的自由もより重大な社會的約束によつて補はれなければならないのである。

性に關する個人的自由主義の極度である近代的戀愛主義は、それ故に、今日までのところでは、建設的の作用よりは寧ろ前述の第一段の過程、即ち崩壞の經過に働いた作用として重大なのである。近代的生活組織に於いて性の制度の受けた進化は、この個人的自由主義による破壞によつて最も顯著に働き出されてゐるのである。貴族生活の崩壞に伴つて、その社會に於ける性の生活の混亂があり、中產階級の勃興と沒落に伴つて、その家庭的向上と崩壞とがあり、無產階級の窮厄に伴つて、その社會の性的アナアキイがあり、凡べてそれは一般生活の混亂に關聯してゐる。而してその混亂の基點は個人的自由主義であつた。これが第一段の過程である。

然らばこの性の制度の崩壞の過程が如何にして建設に向ふかと云へば、そこでもまた生活組織の一般的進化に依存するのである。近代的組織の崩壞は如何なる建設を產み出すか、それは凡べての歷史的進化と同じく、事後に於いてでなければ確かに言ひ得る筈のものではないが、併し一般の生活組織が傳統的の特權の上に築かれるとは、もう殆んど不可能になつたとする

と、一般の形勢はこの特權階級によつて極めて嚴重な生活の壓迫を受けてゐた階級、即ち生産者の階級の進展であると認められてゐる。それは即ち社會的生存の現實の作用を營んでゐる階級が、漸くその實際的價値の上に生活するといふ機運に到達したのである。言ひ換れば今まで生産の生活を管理することによつてその果實を過度に收用してゐた制度が崩れて、生産が個人的收益の手段ではなく、人間の社會的共存の生活方法とならんとしつゝあるのである。何人もこの共存の働きに共同しなければならなくなつた。管理者は少數の專門家が之に當り、今までのやうに多數の人間が名目的管理、又は管理の責任もない特權的地位によつて、極めて有利な階級的生活を營むといふことが困難になりつゝある。

この形勢は當然に婦人の生活をも支配し、婦人が男子の生活又は享樂の資料であるといふ生活が不可能になり、婦人も亦もつと積極的に社會的共存の共同動作を取らなければならなくなつた。即ち夫及び夫に隷屬する家だけが婦人の世界であつた今までの狀態から、更に夫その人が自分だけの世界としてゐた社會そのものを、婦人も亦自個の世界としなければならなくなつたのである。これは婦人の生活に取つて大なる改革である。

然らば即ち性の生活も亦右のやうな生活の改革によつて、新たな建設を進めて行くことにならなければならない。それは「家」が崩壞して、生活の根據が、一方ではもつと個人的に、他方ではもつと社會的になることを意味する。即ち個人的自由主義と廣い意味の社會主義とが、家族主義に代つて生活の新たな約束を基礎づけるのである。

この意味から、性の道徳が將來に於いてどういふ制度に表はるべきか、具體的には豫想出來ないまでも、一般的目標は既に立つてゐると云つていゝ。即ち近代的個人主義による性の道徳は、もつと社會的な——次の建設に於ける社會生活の約束に伴ふ——拘束を受けない譯に行かないのである。

何が個人的自由主義の性の道徳を拘束する力を有つてゐるかといふ、哲學的乃至藝術的根據からの疑問が起るであらうが、然し人間あつて以來、絶對な個人的自由主義といふやうなものが、少くとも性の制度に於いて成立つたためしはなく、又今後も成立ち得る見込みはない。近代的個人絶對主義は、要するに如何にその哲學的構成が完全しても、畢竟は近代の産業的個人主義の道連れであつて、その經濟組織が崩れたら、同時に崩れる信仰である。それは近代的エゴーマニアと同じ性質を有つてゐるのである。性の道徳がそれに立脚して、所謂近代的戀愛主義を哲學的又は藝術的に作り上げたのであるが、それは傳統を

破壞する作用に於いて、その事業が終了したと言つていゝ性質のものである。無論前にも云つた如く、一旦兩手が生えた以上は、永久にその兩手が人間に役立つやうに、個人的自由主義の戀愛觀念も、それが生活の衝動作用に根柢する限り、永久に人間の産んだ善いものの一つとして役立つであらう。然し新たな婦人の生活環境は、もつと社會的なものに相違ない。近代が生んだ個人的自由をその一部として包含しつゝ、もつと複雜な、或る意味でもつと經濟的な、また事務的な生活作用の影響を受けなければならない。

一夫一婦の制度の生れたについても、一夫多妻制の崩れたについても、決して哲學が衝動を抑えた結果ではなく、衝動が生活環境に順應して現はれたに過ぎない。而してその生活環境は藝術的であるよりは、寧ろ經濟的であり、哲學的であるよりは寧ろ事務的であつた。美しい幻想は生活の制度が生活事實と適合しなくなつた場合に、その制度を打ち破る感情傾向として表はされるのであつて制度の建設は、大抵その幻想を幻滅に終はらせる。今日の婦人の生活の進化は、中世紀に於ける貴族的婦人の寄生生活の發展とは正反對の、それ自體の生産生活を築き上げる過程である。一方にはさういふ堅實な事業を社會的に負擔する婦人が、その生活に於いてだけ中世の貴婦人のやうに、寄生的であり、享樂的であり、幻想的である譯には行かない。それにも拘らず今日多くの婦人が生活的に目醒めながら、性的に頽廢的になり勝ちなのは、要するに今日までの社會の婦人に對する要求が、彼女等を男子の享樂の目的として育て上げることにあつたことの惰力である。初期の革命婦人が多く性的亂行の爲めに破れるのは、やはり何と云つてもまだ因襲的寄生生活の享樂的氣分から離れ得ない爲めである。今後の婦人の性の生活は、さういふものでは有り得ない。やはりそこに嚴重な社會的タブウが働いて、或る程度までその個人的自由の絕對性を否定するに違ひない。この傾向はもう既に堅實な職業婦人の生活に幾分表はれてゐる。初期の職業婦人はやはり一方では新たな社會的負擔に任ずる新生活に入りながら、他方に於いては、男子の享樂の目的物としての婦人の因襲的の生活、即ち中世式夫人乃至十九世紀式自由婦人の典型を脱しなかつたが、今日の奮鬪的婦人の中には、既にさういふ因襲的生活に對して興味を失つてゐるものもある。その人々は彼女の哲學や藝術を、自由婦人のやうに高調しないから、案外目立たないが、決して少數ではなからうと思ふ。

然し因襲的婦人が僅かの獨立の收入に有りついて、有頂天になつて、その自由主義を發揮するといふ時代は、まだ全く過去

になつたとは云へない。今日いろいろ奇妙な新たな男女の享樂機關が生れて、傳統的生活にも一致せず、さりとてそれが新たな生活の典型であるとも思はれない過渡的性質の世界を現出してゐるが、そこに入り込んで行く婦人は、貴族的寄生生活の婦人と獨立の收入を有つてゐる職業婦人とであるさうである。かやうなことは過渡時代、即ち世紀末的現象としては已むを得ないことであるが、然しもはや今日に於ても、婦人の堅實な社會的地位は、さういふ頹廢的態度によつては築き上げられないといふことを、少くとも無意識の間に悟つてゐる婦人も少くないことであると思ふ。而して新たな性の道德はさういふ婦人の間に極めて實際的な約束の下に作り上げられるに相違ない。何時になつても人間は性の生活がたゞ享樂的行動ではなく、社會保存の嚴しい約束の下に於ける、かなり骨の折れる生活であるといふ事實から脫れ出でる譯には行かない。原始的性の道德、即ち無意味なタブウは、文明の世界に於いても、やはり合理的に理解されない約束として表はれるであらう。而かもそれは單なる遺傳的な性質のものでなしに、もつと現實の生活に即した約束として、その拘束力を有つのであるが、然しそれは個人的根柢とは全く別な、社會的約束である點に就いては昔のタブウと變りない。

要するに性の道德は現代に於いては、寄生的婦人生活から出れたそれに代るに、社會的生活の根柢をする婦人の新たな生活環境に於いて發生するそれでなければならない。一時さういふ婦人が性の生活を無視するやうな傾向を取つたが、然し婦人の多數の生活が社會的生活の渦中に入ることとなつて、獨立婦人の獨身生活といふやうなことが事實上不可能になり、婦人はその社會的生活を以て性の生活に入り込むこと、丁度男子のそれと同じになる譯である。すべての男子は、複雑な社會的生活を營みながら、性の生活を生活してゐるのである、今後の女性も亦、その跡を追はなければならない。故にさういふ現實の生活關係が、今後の貞操觀念や女性の男性に對する行爲の約束を強く支配しない譯には行かない。性の道德の今後の發達は、かういふ過程に添うて進むことは、教育家、法律家その他一般實際家の深く考慮しなければならないことである。因襲的な所謂醇風美俗を保存しようとする老人の運動の如きが、この意味で何等の効力も有し得ないことは言ふまでもない。

禍の根をなすもの

伊藤野枝

最近非常に、やかましく騒がれてゐる性の問題、殊に若い未婚の婦人達のそれに對して、保護者達の間に捲き起されてゐる大きな憂慮については、私は其の子女の教育の方針が根本的に改められない以上は、決して、取り除く事の出來ないものだと信じて居ります。

今日迄の女は、何の爲めに、どういふ目的で教育されて來てゐるでせうか？女を育てる人々はたゞ男の妻として、出來るだけ高價に賣りつける事しか考へては居りません。女は、出來るだけ男の要求に應じる事の出來るやうに、大事にされて育てられて來てゐるのです。大抵の若い娘の夢は、みんな、自分の未來の、男を對象にした夢ばかりです。それがあたりまへの事とされてゐるのです。人間としての自分の將來を考へる事は、不正規な事としてあるのです。家庭での教養も學校での學問も、みんなお嫁にゆく爲めに、その目的でばかり受けさせられるのです。さうして貰ひ手、若しくは買ひ手のつくのを待つてゐるのです。そして其の大事な賣り物が無事に『片付く』までは、その保護者はなみ〲の心配ではありません。其處で凡ゆる機會から娘の賣物としての價値を傷つけるやうな事のないやうに庇ひます。

けれども、これが本當の保護の仕方でせうか？ 私はそれを、最も危險な保護の方法だと思ひます。その保護の方法は、必然に多くの危險を持つてゐるのです。かういふ保護の下にある娘達に、結婚といふものが、どんな概念を滲み込ませてゐるかと云ふ事を考へると、私は恐ろしくなります。若い娘達は死力をつくして護らなければならぬ自分の大事な處女性といふものが、自分にとつて、何故それ程大事であるかと云ふ、眞の疑問に答へる何物を持つてゐるでせうか？彼女はたゞ盲目的に、處女性を捧げた男に自分の一生を捧げなければならぬと云ふ道德を信じてゐはしないでせうか？ そしてそれが最も恐るべき彼女の過ちのもととなるのではないでせうか。

本當に大事に保護されてゐる處女の持つてゐる一番の危險は、その隔絶された異性に對する憧憬です。其の憧憬は全く純な、そして又無知なものです。が、此の憧憬は、其の本體にぶつかつた時には全く自分を盲目にしてしまひます。同時に其の無知は悉ゆる判斷力を奪ふものです。女を玩弄視する男性の無恥は、この女の盲目を、その無知をどれ程愛するでせう？大事にかけて保護された室咲きの花のやうな女を要求する男の、女に對する要求は、そのわがまゝなねがひにあるのです。もし、その大事な花が、無事に、保護者達の望みどほりな買手の手に渡れば問題は起りません。けれども、それが甘くゆかず、娘の夢のやうな憧憬が異性を求めて近づいて行つたとき、其處に大きな破綻が來るのです。

異性に對する憧憬は、男性のそれと、女性の場合とでは非常な相違のあることを私は信じて居ります。女性の（勿論處女の）憧憬には大方の場合、非常にぼんやりしたもので、何んの慾情をも伴はないのが普通なのです。これに反して、大抵の男には、必ず慾情が伴つてゐます。しかし乍ら、若し男が本當にその慾情に純な場合には、女の一圖なしかし淡い憧憬をよく知つてゐて、女の純な心に恥ぢて、容易に其慾情を表はす事がありません。けれども、男が既に女の處女性に對する尊敬を失つてゐる場合には、彼女はすぐに男の自由にされてしまひます。もし各自に此の二様の傾向を持つた二人の男が一人の處女に近づいた場合に、彼女が無知で、其の異性に對する憧憬が深ければ、女はきつと厚顔な男のものになるでせう。彼女の心の中に第一の男に對するどれ程の尊敬が炎えてゐても、異性と云ふものに對する微妙な憧憬を生み出す彼女の體は、第一に彼女の體に手をかけたものに委されるのです。一度でも彼女の處女性が犯されゝば、その犯したものに自分を委すのが、彼女の唯一の道德なのです。其處に悲劇が生じます。もしその男が女の保護者の氣に入れば、幸だが氣に入らなければ、いろ〳〵なもつれが生じます。同時に又、男に、女を引き受ける意志がないときにも同様です。

これは一體、誰れの罪でせうか？男の誘惑によるのでせうか？女の弱さによるのでせうか？何方にしろ、餘計に責められるのは女です。そして男が女のたよりにならない場合には、女は一層慘めなのです。けれども、その女の弱さは何處から來たのでせうか？女は、弱くあれ！と育てられて來たのではないでせうか？　どんな男の傍におしつけられても、其の男に自分の一生をまかさねば生きて行く道はないのだと云ふやうに慘めな運

命を、よく〳〵のみ込ませられてゐるのではないでせうか？さうして、機會が來さへすれば、誰れとでも一緒になるやうに訓練されてゐるのではないでせうか？　處女には、『拒絕』と云ふ事は敎へてないのではありますまいか？『拒絕』の代りに、その保護者は『隔絕』をもつて間に合はせてゐるのではないでせうか？

無知と、憧憬は、たゞ『隔絕』の賜物です。『隔絕』された魂は、憧憬でフラつき出した時に、自分で自分をどうする力も持つてはゐないのです。そんな敎養は一つも持つてゐないのです。その中味のないフラ〳〵な魂に向つて、何を責める事が出來るでせう？　その魂が惡いとは云へません。その魂をつなぎとめておく敎養を少しも與へなかつたものに寧ろ其の罪を負すべきだと私は思ひます。

性的道德とか、性的敎育とか云ふ事が頻りに流行する言葉になつてゐます。が、此の傾向が、どれ程若い人達をあやまらせてゐるでせう？　それは性と云ふものに對して、常に不純な考へのみしか持つ事の出來ない、一部の人達の餘計な杞憂です。それは、異性から無理に『隔絕』した保護物をもつてゐる人達の手前勝手な杞憂です。その人達のその意識的な性別の高調こそ、最も危險な傾向を齎らしてゐるのだと私は信じます。

何故もう少し、自由に男の子と女の子とを一緒にする事が出來ないのでせう？今迄仲よくして來た男の子と女の子と、何故無理々々に引き離さなければならないのでせう？無分別な『隔絕』のみがすべての惡い結果を持ち來すのです。その不自然な『隔絕』の意味を知らうとする好奇心が、若い子女を害ひます。

私は聲を大きくして云ひます。性問題を危險な傾向に導いたのは、みんな老人共の不純な精神だと。彼等自身まづ性の差異に對する恥づべき意識を消すべきです。年若い子女達につまらない好奇心をわざ〳〵引き起さすやうな『隔絕』を止すべきです。男も女も、性別を意識するより先きに、まづ『人間』に對する識別を敎へらるべきです。娘達は男の妻として準備される敎育から解放されなければなりません。男と女との差異を劃然と立てた敎育が先づ打破されなければなりません。子供の頭に、性の差別を激しく印象させる事が止められなければなりません。少年少女の間にある性別の意識を伴はないフレンドシツプが自然に育てられなければなりません。

異性に對する危險を多分に含んだ好奇心や、憧憬は、性敎育

や、監督と稱する隔絶ではそれを助長するとも、失くすことは出來ません。現在のすべての若い男女間の不純な關係は、たゞ兩性の間の理由のない隔絶が生む無知と憧憬に根を張つてゐるのです。その兩性間の無知無理解は、たゞに、未婚の男女關係を害ふばかりでなく、一たんは、周圍に祝福された、所謂正しい道程を踏んだ夫婦關係をも害ふ原因となつて居ります。

女の保護者によつて取りきめられる結婚の相手の男に對する最大の條件は、女の一生をどれ程よく扶養して行くことが出來るか？と云ふ事です。これは子供を愛する保護者としては無理のない感情でせうが、一般に此の事實は結婚當事者達の眞の生活、內的生活の條件を疎外して選ばれる傾向を持つてゐます。

男も女も、結婚の當座は、卽ち相手に對する好奇心がなくならないうちは無事にゆきます。又、幸ひにして、理解や愛が生じた場合にはそんな事もありませんが、男か女かゞ、そのおしつけられた生活に、何の興味も持ち得ない事になれば、それは悲慘な結果を生じます。そしてたゞ室咲きの花のやうに育てられて來た女には、大抵の場合に、自分自身の生活の中心意義さへ把めない消極的な人間が多いのです。すべてがたゞ、與へられる生活を與へられるまゝに享けてゆくと云ふより能のない人間の方が多いのです。さう云ふ女は、男の生活に對して何の興味も持つ事が出來ず、何の理解も出來ないのです。そして相手の男は忽ちその女に對する興味を失つて、其の興味の對象を他へ求めるようになります。これは、其の成立から推して行つても當然の結果だと云はなければなりません。

が、最も强く、男女を『隔絶』することの不可を證據立てるのは、自由意志で結婚した夫婦關係の破滅です。彼等に叛かれた保護者や教育者の地位にある人々は、これを以て、若い者の自由な選擇が間違つてゐることの證據にしてゐますが、事實は全く反對で、彼等はたゞ、保護者や教育者の嚴重な干涉に對する反抗から、冷靜を缺く場合が多いのです。若い男女の結合はたゞお互ひに持つ好奇心だけで充分に成り立つのです。放つておけば、好奇心もそれ程の原因になる程は募らず、やがてお互ひの人間を理解し合つて、無分別な行爲から自分を救ひ出すだけの事が出來る場合でも、周圍の干涉は、一圖に若い者の好奇心を煽り立てゝ盲目にするのです。其處で、一度は得意の自由意志を誇つた其の結婚生活もやがて、慘めなものに代つてしまふのです。

私は繰り返して云ひますが、現在の女の教育の方法が間違つてゐるのです。それが現在の悉ゆる男女關係の上に大きな禍根となつてたゝてゐます。

放つておけば、女はふしだらになる、と信じてゐる人達が澤山あります。現在のやうに、ボンヤリした、自意識のない、其の癖非常にセンテイメンタルで、物事を正しく觀察したり批判したりする事の出來ない、決して自分で自分のしまりをする事の出來ないやうな女達を手放しておくのは危險です。女がもつと在來の『女』と云ふものゝ持つてゐた概念から切り放されなくては駄目です。

處女性と云ふものが、本當にはどれ程の價値をもつたものか私は知りません。けれども、少くとも、それを保護する場合に、他人まかせが安心か、自分での保護が強いかと云ふことになれば、私は後者をずつと賴みにします。保護者達が心配するやうに、女は自分の處女性を粗末にはしません。若し、つまらない好奇心などに妨げられる事なしに、男性に對する本當の眼識が具はれば、その處女性は何よりも完全に保護されるでせう。

女の處女性が、本當にどれ程價値のあるものか？ と私は今云ひました。それは何故か？と云へば、一方にはさうして室咲きの花のやうに大事にされて保護されて居る處女がある一方に、私は其の處女性を殘るところなく踏みにぢられてゐる女達がどれ程多いかをあまりによく知つてゐますから。

結婚――と云ふものに最後の望みをつないでゐるのは、現在のすべての女に共通した事です。申分のない教養を受けて相手を持つてゐるのも、その目的なら、自分の才能を賣つて、勞力を賣つて生活してゐる多くの女達の目的もやはりそれなのです。更に悲慘な事は、男の暴虐な慾情にその體をまかせて生きてゆく多くの賣笑婦達ですらも、やはり一人の男の手に自分をゆだねて、『家』をもつ事が最後の望みなのです。

高い教養を受け、立派な才能を持つて、男子とおしならんで働く職業婦人の中で、結婚を思はぬものがどれ程あり得るでせう。何百萬と云ふ多數の可憐な婦人勞働者の中に、現在の資本家の酷使の鞭から、機械の虐げからのがれる方法として結婚を望まないものが幾人あるでせうか？ しかも此の自ら自分の口を糊しなければならぬ不幸な娘達は事毎に、その節操を保つ事の困難にブツかるのです。彼方にも此方にも、自分の慾情の爲め、或は金の爲めに彼女をねらつてゐる男共に出會ふのです。彼女達は正當に働いて、むしろ酷使されて、しかも其の上にその節操を蹂躙されなければ生きてゆけないのです。或はまたつらい勞働からのがれる爲めに、節操を賣り物にしなければならないのです。」

一つ目的に向つて、同じやうに大事にされなければならぬものが、何故一方には大事で、一方には大事でないのでせうか？　他人の娘がどれ程ひどい屈辱を被つても、否、時によれば平氣で他人の娘の節操を犯す人達が、自分の娘の節操に關する場合には何故あれ程騷ぎ立てるのでせうか？　これが富裕な人々の贅澤な手前勝手でなくて何んでせうか。未婚の娘の處女性は、たゞ富裕な階級の人々にとつてのみ大事なのです。貧しい家の子には、そんな貴い節操の持ち合はせはないのです。その節操は、厭應なしに踏みにぢられます。

が、此の不當な行爲は、決して富裕な階級に報ひられる事はないのでせうか？　それは確かに報ひられて居ります。踏みにぢられた女達は何よりも早く、男に對する鑑識眼を持つやうになります。さうして能動的に男を動かすやうになります。男は、安咲きの花では滿す事の出來ない興味をそれ等の女に見出します。現在私共の周圍に見る事實は、妻以外の女が、どれ程多くの男を自由にしてゐるかと云ふ事を、よく證據立てます。そして、それは直ちに、踏みにぢられた女達の、一種の復讐とも見れば見る事が出來ると思ひます。

少數の或る階級の人々が、如何によく教育され、如何に自分の幸福を求める爲めの準備がよく出來たとしても、大多數の人間が不用意――に寧ろ侮蔑にみちた不用意の中に置かれてゐて、どうしてそのよき準備や教養が正しく役立ち得ませう。

私は人間が如何に教育され、如何に準備されて世間へ送り出さるべきか、と云ふ事については、勝手な事を云ふ事が出來ます。けれども、それが少數の人にだけあてはめられるのでは、何んの効果もない事を必ず附加へて云つて置かねばなりません。

最後に、私は性教育と云ふ事について一言したいのです。あの問題も、私は今騷ぎまはつてゐる女學校の先生方や、保護者達が、自分等の利己的な立場からする教育には反對します。まだしも放つておく方がいゝ位です。あの人達は到底冷靜に、性の秘密を話して聞かせる資格を持ちません。たゞ、危險に對する憂慮ばかりが、あの人達の心持を領してゐます。それ故、あの人達は冷靜に根本問題に觸れる事が出來ません。

おもふに、性教育と云ふものは、それ程に大さはぎをする必要のない事ではありますまいか。私は最近フランスの科學者のアンリ・フアブルが子供へ科學知識を與へる爲めに書いた書物を飜譯しましたが、其の間に、澤山のありがたい暗示にふれました。殊にありがたいのは、生物の繁殖についての微妙な說明

です。就中、植物の花粉と結實の關係は、立派にそれを人間の生殖の上に移して來られます。性の差別について、何の不純な考へも持たぬ子供達に、純粹な科學の立場から、生物の繁殖と云ふ事についての事實をよくのみ込ませておきさへすれば、必要の場合には僅かの冷靜な言葉で、適確に人間の生殖の眞意義をつかませる事が出來ます。生理も、衛生も、充分に、言葉をつくして說明する事が出來るでせう。

私は、それだけの事で充分だとおもひます。それ以上は、子女自身の處理にまかせていゝ事ではないでせうか。たゞ不用意に、眼前の危險にあはてゝ、そろ〳〵不純な差別意識に災されだしてゐるやうな若い男女をとらへて、不純な立場にゐる人達が、いゝ加減に、何を說明しても、充分な效果をあげることは六ケしいだらうとおもひます。それどころか、そんな事が公然の問題になる程若い子女の異性に對する好奇心は煽られるのではあるまいかと氣づかはれます。

要するに、問題の根本にあつて禍するものは、不自然な男女の「隔離」です。それが異性の好奇心をお互ひに昂めます。第一に、保護者、或は教育者の位置にある人達自身が、まづ甚だしい性別の意識にこだはることから解放されなければなりません。男も女もおんなじに、一人前の『人間』をつくる事を先づ心がけなければなりません。『人間』が立派に出來あがりさへすれば、他人の爲めに餘計な心配をする必要はありません。自分の育てた、或は教育した、息子や娘に對して抱く不信と不安とは、その教養が未完成であると云ふ事を立派に證據立てます。自分の娘や息子を、自分の教へ子達を、何故に信ずることが出來ないのか？　どうして世間の人達はそれを教育者や保護者達に向つて云へないでせう。

今の世の中では、片輪な人間ばかりが住んでゐるのです。そしてお互ひに、他人の片輪を氣にやんでゐます。けれど、何がそう人間を片輪にするのか？　そんな事は誰れも考へようとはしないのです。

『人間』をつくる事にまづ努力されなければなりません。けれども片輪ばかりの、世の中で、それが可能な事でせうか。如何に立派な道が示されても、それが悉ての人の步き得る道でなければ、到底最善の道とは云へません。性道徳の道ばかりではありません。悉ゆる事がみんな人間の教育の根本方針の改革を要求します。が、どうしたら悉ゆる人々が妨げ合はずに、その教育を受ける事が出來るかゞ先づ考へられなければなりません。

常態の向上が最上

文學博士　三宅雪嶺

性的問題は常態に對して變態と認められる所に出で、常態は或る時代に於て普通一般に怪まず、慣れてさういふものと心得て居るを指し、時代の變化に伴ひ、自づと變化するを免かれぬ。變化しても特別に變化と氣付かず、當り前の事とする程度に於てする。普通に當り前とする所の外に出るのは、多少の注意を拂はずに居れず、或は不德として責め、或は相當の理由を認め、他人の反省すべき所とし、其他いろ〱ある。如何に變態とて、白痴風癲ならぬ限り、略ぼ限度があり、大體に於て略ぼ知れたものとすべく、唯幾分の違ひが人の感情を刺戟し、關係人の生涯にも影響し、往々重大事と見ねばならぬ。日本で昔から男女關係に就いてさまざまの話があり、王朝に王朝の習慣が成立ち、舊幕に舊幕の習慣が成立ち、同じく舊幕でも、前と後とで違つて居る。心中といふ新たな問題が起つた事もある。然し世間に噂するのは、間男とか駈落ちとか、妾騷ぎとか役者買ひとかいふやうな所であつて、將來の爲めに改むべきものとするの意識に乏しかつた。親爺の頑固にも困る、無理押しにするからと云ふやうな事が云はれたが、それで必ず改めねばならぬとまで考へない。

時によつて捨て鉢になり、勘當せられて構はぬが、戀は思案の外と云ふ所で辯解し、一般に斯く改めるが可いとするに至らぬ。

明治に入つて、何等かの變化があり、大正になつて一層多く異なるを覺えるが、いよいよ何處が變つて居るかと問ひ詰めれば、左程の事でないやうで、明かに二つの傾向を認める事が出來る。一には成るべく一夫一妻の實を擧げようとする事、二には成るべく他より壓迫せず、双方の諒解を以てする事である。昔から一夫一妻を正式としても、妾を置く事が當り前になつて居り、特に之を咎める事がなく、稍々生計に餘裕ある所では、妾を置くに定まつて居つた。高祿の徒とか長者連中とかは勿論の事、鹿爪らしい儒者も妾を置き、生計に餘裕あつて妾を置か

ぬ方が怪しまれるくらゐであり、將軍とか、大名とか、何人居るか知れぬ程である。明治になつて官名に權といふ字を冠ぶせるのが多く、縣令權令といふやうな所から、妻の外に權妻といふものが付き物になつた。馬車を走らす所から、定紋付きの人力車を走らすものまで、必ず權妻があると思はれ、權が幾人とも云ひ、全く權の無いのが變り者と見られた。官名に權の字が省かれると共に、權妻の權の字も消滅したけれど、いくらか其の實が殘つて居つた。

ところが幾十年を經過するうち、何時しか妾を置く事が減じ、蓄妾をする連中が指を折られるやうになつた。知事や裁判官や、上京する每に臨時の妾を置くのがあり、それでなくても、桂庵で儲け口は妾の周旋にあるが、落着いて居る所では妾を置かぬに定まつたと斷定して妨げない。尙ほ以前の如く、妾を置き或は之を誇るのは、實業關係の代議士又は之に類似した方である。幾人も妾を置くのは、實業界の或る部分であつて、中に幾軒妾宅を構へて居るといふので信用を繫いで居るのがある。然し總して蓄妾が減じ、人に誇るよりも、隱くすやうになつて居る。それだけ何時とはなしに一變したるの實を示し來つて居る。

之と相表裏して、結婚は好い加減に定むべきものではなく、當人同士の諒解が何よりも肝要と見られるやうになり來つた。前にも無理に當人を差し措いたのでなく、好いた同士であるからと云ふので纏つたのがいろいろあるけれど、特に重きを置かうとしなかつた。實際に重きを置いても、それ程意識しなかつた。近來父母兄弟姉妹等の諒解をも要するけれど、當人同士の諒解を重んじやうとして居る。そこで前ほど年長者に於て制限しようとせず、自由判斷に委かさうとするので、判斷して宜しきを得るのがあり、宜しきを得ないのがあり、宜しきを得たとしたのが得なかつたり、宜しきを得ないとしたのが宜しかつたり、さまざまにならうとする。以前にも種々のいきさつあつたにせよ、近頃自由を重んずるを當然とするだけ、自由にして間違が起ると考へられる。自由にしなくても間違が起るが、自由にする所で、自由の爲めに間違ひの起るのが眼に着く。近來性的問題の起るので、昔からあつたのも少くなく、醫者が何うかするといふのもさうである。以前にも醫者と坊主が警戒物になつて居つた。小說が媒となるとは、近頃の現象であるけれども、昔から何が媒となるかゞ知れず、「一とせ紅葉狩りの折」などいふ文句が相應に通用した。枝にブラ下げた短冊が媒介となつた事もある。切つたり撲つたりといふ事も、いつの世にもある。

然し近來何事があるにしても、大體上に一夫一妻の實を擧ぐべきものとし、如何にすれば其の實を擧げ得るかを考へて居り、問題の起るのも之に關聯するのが多い。そこで日本國民が漸次進步するを認める事が出來る。何の關係からか、いろいろ議論があるが、家庭が不靜肅にならうとするよりも、靜肅にならうとするのを疑ふ事が出來ぬ。政治家實業家の待合遊びが盛んと云ふのも、常時の妾より臨時の妾に換つた所とも云へる。妾と銘打つた者を置くのが何處となく氣が咎め、人と一緒に待合で巫山戲て氣が濟む。何時でも除外例があり、中に甚だしいのがあるけれど、總體の傾向が惡いと云へぬ。只、今一層善くなれば、宜いにと望まれるのである。官吏の方が漸く改り來つた時、實業家が前の官吏に倣ひ、更にその以上に出で、政商といふが如き者は、いろいろの例を示し、學校に影響を及ぼして居る。先生が何とか言ふけれど、あの先生はうちの阿父さんが定めたのであつて、うちには別宅もあり、先生の言ふ所と違つて居ると說く。それでも幾人も妾を置く事が最早や誇りにならす、笑ひものにならうとするだけの事あるは爭はれぬ。

性的問題の起る時、一夫一妻と定めず、さういふ關係を破らうとするのもあるが、藝術に表はれて居るに止まり、實際に何程行はれるかが疑はしい。今の時代は今の時代だけに相當の傾向がある。頹廢時代に何とかなるにせよ、今はさうでない。藝術として變態を喜ぶも、己れ自ら之を行ひ、人を喜ばさうとするまでの物好きは少い。變つた事は將來に起るかどうか。新しいとするところが案外に古い問題に屬する事がある。歐米でも舊い問題を幾度と繰返して居るか知れぬ。ヴォルテールとシャトレー侯爵夫人との關係は、或る點で理由がある。夫人は當時評判の美人であり、それがヴォルテールと共にニュートンのプリンシピアを讀み、相共に研究するうち、知識上の諒解で戀となり、シャトレー侯爵は之を尤もの事とし、自ら手を引いて二人を夫婦にし、前通りに交際を續けた。戀愛より戀愛に移る所斯くあるべきものとするのである。それ程人が互に諒解すれば、平穩無事、面白く行けるやうである。然し十五年を經、夫人は他の男と戀に落ち、前に侯爵が手を切つた如く、手を切らなければならぬやうになつた。それで夫人と新たな夫と何の爲めに戀が成立つたかゞ分らぬ。前には知識ある人は格別だと云ふ事であつたが、後には何の爲めか、ヴォルテールも頗る當惑した。然し夫人が產蓐熱で死する時、前の夫たちが相寄つて悲しんだ。斯かる事は相應に理窟がつくけれど、後に之を眞似ようとするのが何程あつたらうか。戀愛に變態もあるとし、要するに常態なるべきであつて、常態ながらに最も整ふ所に向上を

見る。常態は變遷するものの、同じ人間の事、瓢箪より駒が出る事はない。變態で刺戟を與へ、改善を促すにせよ、變態で犧牲になるを願ふべきかどうか、弔ふ者はある、祝する者があるか。他の方面にも之に似た事があり、自ら犧牲になつて人の參考になる。已を得ぬに出でたのであつても、篤と考ふべき所である

性問題に對する私の考

安部磯雄

現在結婚に關する思想の一班を觀察すると大別して之れを二つに分けられると思ふ。其一つは昔から存在する思想であつて、今一つは近頃次第に稱へられるやうになつた説である。舊來の思想は大體に於て男女の性慾といふものを惡く解釋し、性慾は寧ろ卑むべきものと見た。無論人間から性慾を取除く事は出來ないが、併し之れは一つの止むを得ない弊害であつて、人間はなるべく性慾を抑へるやうにしなければならぬと考へたので、若し人が性慾から離れて生涯を獨身で暮す事が出來たならば其人は立派な人間として世間から賞讚されたのであつた。そして結婚に對する態度としては、人は一度結婚したならば永久にその關係を引き離すべきものでない、即ち離婚は不都合であるといふ風に考へた。日本人は大體に於て昔から斯ういふ思想に支配されて來たが、歐米人も亦殆んど之れに似た思想に支配されて居たので、結婚に關する思想は世界共通といふても差支へない。

先づ日本に於ける結婚制度に就いて大體觀察すれば、人は一度結婚したならば生涯離婚すべきでないと考へ、此原則は殊に婦人に對して嚴重であつた。男子の方では離婚は度々行はれたが、婦人は結婚するに當つて夫の家からは歸らぬ決心をして行くのであつて、親達もさう教へ、本人もさう覺悟して居たのである。で、結婚後どんなに不幸な境遇に陷入つても、夫婦仲が惡く、夫から虐待されるやうな場合があつても、離婚は何人も

讃成しないのである。其處には無論貞操觀念が手傳つたので、貞操は常に婦人に對して強く要求された。婦人は男子に對して絕對に服從しなければならぬものとされて居たので、男子から如何なる取扱ひを受けても離婚をする事は出來なかつた。萬一離婚することがあれば再び結婚しないで生涯貞操を守り、殊に夫が亡くなつた場合には一層此貞操觀念は強くなるのであつて、さういふ場合再婚をしないといふことが婦人の最も尊ぶべき道德とされたのである。此點男子に對しては比較的寬大であつて、男子側からはいろ／＼な理由で其妻を離婚する事が出來たし、同時に男子に對しては貞操觀念は餘り多く要求されなかつた。歐米に於ては基督教の思想に依つて大體結婚制度が維持されて來たので、基督教の教訓から云へば人は一度結婚したら決して離婚することが出來ない、夫婦の中一方が他の者と關係を結ぶ、即ち姦通の理由に依るの外は離婚は不可能である。同じ基督教でも新教と舊教とを比較すると舊教に於ては一層此點が嚴重であつて、舊教の信者が一度結婚すれば離婚を許さない。斯くの如き宗教思想が存在して居たために歐米の法律がさういふ思想を根抵として成立つて居るので、法律の上からも離婚は非常に困難である。これは米國に於て殊にさうであつて、米國では離婚は仲々難かしく、裁判所は之れを容易に許さない。然るに此點に於ても日本の反對であつて、アメリカでは女が離婚を請求すると多くはそれが成立つ。女が離婚を要求する場合には夫の不品行といふ點からばかりではなく、或場合には夫が虐待する、時には打擲するといふ理由でも其要求は通るのであるが、反對に男子から離婚を要求しても容れられることが難かしい。若し女の方で姦通して居るといふやうな事實があれば問題はないが、さうでない場合他の理由で離婚を要求しても裁判所は許さない。或は又婦人の方が相當の財産を持ち、夫と離れても獨立して生活して行けるといふやうな場合、離婚をしても妻は生活に困らないのであるが、さういふ場合でも、妻が承諾しなければ離婚をすることが出來ない。斯くの如き場合、夫婦とは名のみであつて、感情も意志も行き違ひ、甚しきは夫婦の間には性的關係もないといふ時に、男子の方からは當然離婚をしたいと思ふのであるが、妻が單に何々夫人といふ名譽や稱號の爲めに頑として離婚に應じなければさういふ場合でもアメリカでは離婚することは困難である。今日日本では女が離婚することが出來ないために苦しんで居るが、アメリカでは男が離婚出來ないために困つて居るのである。さういふ點からも今日の結婚制度に對して大分反感を抱く者が出て來た譯であつて、舊來の結婚制度に對して反抗的態度を執る者が次第に増え

て來た。

　自由戀愛とか、自由結婚とかいふ言葉があるが、之れは結婚制度の破壞を意味するものであつて、現在の結婚制度は人間を束縛したものであり、今日多くの人々は結婚制度の爲めに苦んで居て、夫婦とは名のみで實が無い有樣であるが、併し一度結婚した以上法律もなか〱離婚を許さぬし、よし許しても社會の制裁があるので事實上離婚を實行することが出來ないのであるが、之れは實に個人の權利、幸福を無視するものであつて、人間は斯くの如き結婚制度の爲めに束縛さるべきでないといふ考へから、自由戀愛や、自由結婚に關する說が公然と唱へられそれを實行する者も多く出て來たのである。此說の中には又別の意味も含まれて居るのであつて、現在之れが爲めに何人も苦しみ、何人も之れを以て悲むべきことゝしてゐるのは文明の社會に醜業婦の存在して居ることであつて、今日醜業婦は增〻することはあつても減少する傾向は認められないのであるが、自由結婚論者から云はせると醜業婦の多いことは現在の結婚制度の缺陷から來るのであつて、現在の結婚制度に於ては夫婦の間に愛情が全く無くなつて居ても、法律や社會の輿論が夫婦關係を無理に繋いで置かうとするので、勢ひ男は自己の滿足を他の方面に求めなければならないから今日の社會に醜業婦が存在する所以であると考へるのであつて、若し結婚制度を破壞すれば不自然な夫婦關係は除かれるので、自ら醜業婦の必要がなくなる譯けであつて、自由結婚が行はれなければ醜業婦を社會から驅逐することが出來ないと主張するものである。また全然結婚制度を破壞せぬまでも現在の結婚制度其物に反對する人は少くないのであつて、結婚制度を廢さうとは思はぬがそれを現在よりは違つたものに改めやうとする立場に在る者がある。例へば契約結婚であつて、結婚は双方の契約であるから期限をつけて五年なり十年なり結婚をし、期限が切れても双方が猶ほ滿足であるならば其結婚の期限を更に引き延すし、不滿であるならば期限が至れば直に分れることが出來ると考へる者がある。つまり之れは結婚が成功するか、失敗するか分らないので試驗的に結婚をするのであるから試驗結婚と稱しても差支へないのであつて、外國に於ても此說を唱へる者がある。併し孰れにしても一方は試驗的に行ふ結婚であり、他は期限の契約もなく、結婚制度を無視して、自己が滿足ならば宜し、不滿足ならば分れるといふ自由結婚であつて、結局に於て其差は大きくはない。で、其結果はどうなるかと云ふに必しも離婚になるとは限らないので、結局夫婦の關係は變るには變るが、少くとも夫婦關係を保つて居る間は一夫一婦で行かなければならぬといふ說もあるの

である。併し普通事實はさういふやうな一時的一夫一婦の説が行はれるよりも雜婚に陷入り易いのであつて、自由結婚が盛んに行はれる結果は雜婚が生じて自ら一夫一婦の説を否認するやうになるのであるが、今日に於ても大分さういふ傾向が見られるのである。近頃の言葉に三角關係といふが三角關係は勿論一夫一婦の關係ではなく、それは雜婚の始りであつて、三角關係を持つ者ならば四角、五角と行く可能性があるのであつて、結局それは多角關係になり、雜婚となる。之れは隨分極端な説であつて、舊來の説も極端ではあるが、それに反抗して起つた自由戀愛や自由結婚の説に對しても同樣の感なきを得ない。今日では政治思想、社會思想が混沌として居ると云はれるが、男女問題、性の問題は恐らく何物よりも一層混沌たる狀態に在つて此問題に關する人々の意見程相違して居るものはあるまい。これは重大なる問題であつて、青年はよく政治想思、社會思想に依つて動かされるが、それ以上に心を動かされるのは性に關する問題であつて、今日此方面の思想の混沌たる時期に當つて青年の行くべき道を知らしむる目標を立てることが必要となるのである。

玆に一つの提案として、私自身としては此標準に依つて性の問題を取り扱ひたいと思ふのであるが、それは一言にして云へば幸福と云ふことであつて、今私はそのことに就いて考へて見たいと思ふのである。要するに結婚生活の目的は幸福といふことに在るのであつて、人生は大部分此幸福の思想に依つて導かれて居るのである。我々の結婚生活は云ふまでもなく我々の要求をそれに依つて滿足させることが出來るから結婚をするのであるが、其要求の滿足は肉體的でもあり、靈的でもある。或人の考へるやうに結婚は肉ばかりでもないが、さればとて靈ばかりで行くことも出來ないのであつて、それは靈肉一致の境涯であつて、人間は此二つの滿足を結婚に依つて求めるのである。誰れしも結婚する時は此二つの滿足を得る爲めにすることは明であるが、若し結婚に依つて此二つの滿足を得られない場合には結婚の生活は無意味であるから、斯くの如き不幸な結果になつた時には離婚は決して不道德ではない。不幸を忍んでまでも結婚生活を繼續しなければならぬ必要はないから、一度結婚したら分れることが出來ぬといふやうな窮屈な考へ方は今日の實際に通用しないのである。で我々の結婚生活に於ては此幸福といふことが一つの標準となるのであつて、此標準に依つて結婚生活を判斷しなければならないのである。併し乍ら玆に注意すべきは此幸福は決して一人の幸福ではないといふことである。結婚は二人の關係であつて、だから幸福は二人のものでなけれ

ばならない。我々の道德は決して利己的であつてはならないので、自分丈けの幸福を計ることは許されない。自己の幸福と他の幸福との兩立に我々の道德の立脚點はあるのであつて、一人の幸福を以て總てを判斷することは出來ない。で結婚生活の標準は幸福に在るのであるが、それは飽くまでも二人の幸福であつて、此標準に依つて結婚生活を繼續するか破棄するか判斷すべきである。そこで實際問題に入れると、若し我々が離婚をしたいといふ時に、結婚はもと〳〵二人の幸福のためにしたのであるから、其結果が不幸であつたならば、二人の合意の上でそれを實行することは差支へない筈であつて、何人と雖も之に反對することは出來ない。そして斯くの如き態度こそ性に關する道德の一つの標準としたいのである。

今此原則を說明する前に一言云つて置くべきことは、そこには双方の合意の上でなくとも離婚が行はれ得る場合があるといふことである。合意は此場合の原則であるが、一方丈けの考へでも離婚が出來るといふことを茲では云ひたいのである。例を擧げれば男子が女子を虐待するといふ場合、反對に稀には女子が、男子を虐待するといふ場合であつて、精神の上からばかりでなく、肉體の上からも堪え難き取り扱ひを受けたといふやうな時には、双方合意の上でなくとも、一方丈けの考へでも離婚することが出來る。また夫婦の中双方の孰れかが他に戀愛關係を有する場合、即ち姦通の事實がある場合には、それは夫なり妻なりが其一方に離婚の宣言をしたやうなものであるから、當然他の一方が離婚をしても差支へない。次に之れは少しく複雜な問題であるが一つの離婚の理由となるのであつて、それは双方の孰れかゞ夫婦としての性的能力を有しない場合である。之れは一般的にもある場合であつて、例へば人が年老ひて自然に性的能力を失ふやうな場合であるが、斯くの如き場合に離婚を要求するのは甚だ不人情で不都合な話であつて、私が云ふのは人が若い場合に限るのである。斯くの如き場合はまゝある例であるが、それは婦人に多くあるのであつて、婦人が年頃になつて心に戀愛を解しても、生理的慾望を滿足せしむることに就いて一向考へぬ者がある。日本の婦人に斯くの如き者が多いかどうかは斷言することは出來ないが、自分が不思議に思ふことは、歐米人の性的問題に關して書いたものに依れば、婦人が性的能力を有して居ない場合があるらしく、多くの性的教育に關する書物は男のために書いたのではなくて女のために書かれたやうに見えるとである。歐米の婦人の間には極端な宗教々育を受けた結果夫婦の滋味を知らないものもあるらしいが、日本の婦人にもさういふ例があるとすれば、一方が全然性的能

を缺いて居るといふ點から、此場合離婚の理由が生じるのであつて、一方の承諾がなくとも離婚が差支へないことになる。以上の場合は夫婦が合意の上でなくとも離婚の出來ることを云つたのであるが、併し矢張原則としては二人の者が全くそれに同意することなくしては離婚を行ふことが悪いことに變りはない。何故に此原則を強く主張するかと云ふに、今日の自由結婚や、自由戀愛論は結局結婚否認論であつて、斯くの如き極端な說が行はれることは個人にとつても、社會にとつても決して喜ぶべき現象ではなく、どうしても性的問題には一つの目標を定めて置く必要があるからである。勿論舊來の結婚制度に滿足することは出來ないが、それを全然否認するやうな說にも遽かに同意することが出來ない。若し歐米諸國に於て結婚否認論を唱へるならば歐米では男女の地位が比較的平等であるから弊害が少いけれども、日本に於て結婚制度を否認することになると、誰れが一番不利益を蒙るかといふにそれは婦人であつて、婦人はそのために常に不利な地位に立たせられなければならないのであるから、婦人のためにも結婚制度を維持する必要があるのである。概して云へば婦人よりも男子の方が移り氣であり、好新的である。少くとも今日までの男女關係の發達の過程に於て、男は我儘であり、節操も要求されなかつたから、習慣性として男は常に新らしいものを慾しがるのであつて、或種の男子にとつては自由結婚は彼等の歡迎する所である。結婚制度があつても男子は往々さういふ傾きがあるのであるが、愈々それを破棄することになれば、男子は妻の同意を得ぬ中に他の女に關係し易くなる。つまり双方合意の上に成る離婚の手續きなしに、勝手に他の女と關係し、放縱な生活に耽るやうになる。斯ういふ狀態になれば勢ひ妻も離婚を承諾せざるを得ざる立場に至るのであつて、云はゞ婦人の方に意志なくして離婚を強制される地位に立つやうになるのであるから、婦人にとつて大なる不利益であつて、此點からも日本に於ては結婚制度を破棄することは婦人の側から反對しなければならないのである。

猶ほ結婚制度を維持しなければならない他の理由としては次のやうなことも云へるのである。今我々は人生に於て一番大事な結婚をするに當つて、屢々餘りに多くの知識を有たない中にそれをする。一個の樂器を取扱ふに當つても其前に相當の練習をしなければ音樂を奏することは出來ないが、結婚は一つの諧調であつて、それを作るには相當の智識や經驗が必要であるが、多くの人々は何等の準備なしに、恐らくはそれに關する書物一冊すら讀まないでたやすく結婚をする。或人は男女双方に熱烈な戀愛さへあれば十分であつて、本能に依つて結婚生活を

豐富にすることが出來ると考へるが、之れは誤想であつて、男女が一週間や、一ケ月間の交際に於てお互にありのまゝの性質を露すことはないのであるから、假令戀愛から入つた結婚であつても、大概の結婚は一二ケ月たつか、たゝぬ中に双方が思はぬ困難に遭遇することがある。即ち夫婦間に誤解を生ずる、意見の一致を缺く、性格が合はぬといふことになるのであつて、斯ういふ經驗は多くの人の持つ所のものである。然るに結婚前にそれに關する書物を讀み、或は話を聞き、或は自分で考へた人であるならば、今云つたやうな難關を容易に切り拔けることが出來るのであつて、さうすると結婚は再び幸福に返ることが出來る。此場合相互の忍耐といふことが非常に必要となるのであるが、自由結婚に於ては最初の難關に於て、即ち二三ケ月後に來る危機に於て二人は永遠にそれつきり分れて了ふ。で、矢張結婚制度といふものがあつて、互にたやすく離婚すべきでないといふ考へから、結婚後に來る難關を切り拔けて再び幸福な生活に入る方が望ましいのであるが、此點自由結婚の弊害があるのであつて、如何に熱烈なる戀愛に成立つ結婚と雖も、必ず危機が到來するのであるから、結局度々危機に遭遇するから度々分れることになつて、換言すれば彼等は離婚する必要かないのに離婚を繰り返すことになるのであつて、彼等は生涯眞の幸福を得ることが出來ない。

斯くの如く考へて來れば今日の所謂自由結婚には容易に贊成することが出來ないが、併し前に云つたやうに、如何に結婚制度を辯護しても現在のそれには缺點があつて多くの改善を要する點がある。結婚生活には無理があつてはならない。其ために不幸を見ることは到底忍ぶ事が出來ないのであつて、さういふ時には離婚の自由を與へられなければならない。併し乍ら私は飽くまでも結婚に關しては中庸の說をとりたいのであつて、舊來の保守的な結婚制度にも反對すると同時に結婚制度を破壞するやうな極端な思想にも與することが出來ない。結婚の問題に關しては中庸の所に解決の方法を見出さうとする者であつて、即ち相方の幸福を求むるといふ其標準が、我々の結婚生活を繼續すべきか、或は破棄すべきか、又は結婚生活に入るべきか、獨身生活を守るべきかといふ問題を決定することになるのを信ずる。

深く文藝に親しむがいゝ

菊池寛

性的な過失は、人類の原罪の一つで、ある程度迄は避くべからざるものだと思ふ。人間の生々の力が、つい規を逸して迸り出るものだから。

が、此の頃新聞に出るやうな事件は、男にもつと反省があり、もつと道徳的意識があり、女にもつと性的智識と思慮とがあれば、容易に避けられるべきものだと思ふ。日本の家庭教育なり學校教育なりは、まだ「箱入娘」時代の名殘りがあつて、現在の處女を保護するに足りないのだ。現代の處女は、男性と接觸する機會が多く從つて、戀愛的性的雨風に打たれるのだから、生やさしい「箱入娘」的教育では直ぐ傷物になつてしまふのだ。むろん、現代の性的混亂を救ふには、新しい性的道徳も必要だが、そんなものは五年や十年の間に、おいそれと確立し得るものではないのだ。從つて應急手當としては、戀愛及び性慾的智識を與へて、男性との接觸に於いて、大過なからしめることである。さうした智識を與へるのには、學校教育よりも文藝に親しむのが一番いゝと思ふ。さう云ふと、舟木芳江嬢のことを擧げて反證とせられるかも知れぬが、あれはまだ親しみ方が足りないのだ。もつと、文藝に親しめば、人生も分り、男性も分り、戀愛も分り性慾も分つて、つまらない過失をしなくつても濟むと思ふ。小説を讀むことに依つて、男女關係の種々相を知ることが出來、それがやがて實人生に處するに當つて、豫備智識として役に立つと思ふ。さうした意味に於て、文藝は一種の「人生案内」である。戀愛や性慾的生活に於ける暗礁の處在は文藝に親しむことに依つて、知り得ると思ふ。

道徳の現代に於ける位置

神近市子

一

ある時代の社會的の正義乃至道徳といふものは、人が孤立して生活するところにあるものでなく個人が相集つて社會生活を營む時に始めて生ずるものであります。それは社會生活を營む場合は單獨に生活する場合と異つて、個人と個人の要求、社會と社會の要求は屢々衝突し相矛盾し勝ちである爲め、その間を調停しその相互關係の意義を明かにするある種の軌範を必要とするからであります。そしてこの軌範がその社會の認容するところとなり傳統によつて飾られる時に、それは道徳といふ名によつて呼ばれ後進の子弟に奉ずべき信條として社會によつて強ひられるに至るものであります。

然し乍ら、社會は何時も同じ形にのみよつて存續し行くものでは決してありません。それは反對に絶へず流動し躍進して行く一の有機體であります。從つてこの社會生活の軌範となるべき道徳も、時代の制度と人類の意識の變動に伴つて絶へずその形を變じて行くものであります。その結果としてある時代に最高の道徳であつたものが次の時代には前時代と同じ評價を與へることが出來ないものとなり、反對にある時代に甚しい惡徳と考へられてゐたことが時代を經過してゐるうちに非常な正義の表現として評價されるに至ることがあります。そして一般道徳のこの性質はそれが男女間の性的道徳に關する範圍に限られた時にも全く同じ性質を有するもので、性的道徳の目標を決定しやうとして私が全體としての道徳の過去、現在及び未來の位置の釋明にこの稿の大部分を費さうとするには、全くこの共通性を認め有識な讀者にはこの方法によることが一層私の云はんとするところをよりよく了解せられると感じたからであります。

二

現代をもつて道德のない時代、正義がその光を失ふて人道地に墮ちた時代だとして語つてゐる人がよくあります。これは舊時代の道德のみを道德と考へてゐる人が屢々陷つてゐる誤謬で、その人々が政治家、教育家、官吏等、舊時代の精神と特權とを代表してゐる人の間に多いことは私の云ふ事實を裏書して居ります。實際に、若し道德がその人々の云ふところの種類のものゝみであるなら、現代は殆ど道德なく人道なき時代といふことが出來ます。然し前に云ひましたやうに道德にも道德の發生母體たる社會の制度にも常に變革はあるもので、無道德無人道と見へる現代は實際には急速に行はれた社會的の變革の爲め、その精神の上には未だその變革の完全な浸潤が行はれず、爲めに大多數の舊時代の人々にのみ只だ前述のやうな不都合な澆季の世に映ずるのであつて、實際の社會相を注意深く眺むるものには現代にも時代に相應する正義と道德とがあるのであります。

現代は新しい時代が舊時代にとつて代らうとする過渡期にある時代であるといふことは何人も認めてゐるところであります。既に對立する二つの時代があるとすれば、又必ずその二つの時代に屬する二種の道德があるのであります。そして二つの時代をつなぐ過渡期がある時には、その過渡期に屬する特種の道德を生ずることは理の當然であるのであります。然してその期の道德は時代そのものゝ混亂と矛盾とをその儘に寫してこれを老衰した舊時代の、又私共にとつては樂しい夢のみに現はれる未來の新時代のそれに比較する時には、これを道德といふ名で呼ぶことに不安を感ずるほどに特殊の形を有してゐるのであります。然もこの時代の道德は、舊時代にとつては反逆となり破壞となると同時に新しい時代に對しては暗示となり希望となる非常に重大な使命を有してゐるのであります。私は以下に今少しくわしく私のこの考へを敷衍して見やうと考へます。

前項に、私は對立する二つの時代があれば道德にも亦對立する二種の道德が生れるものであることを述べて置きました。現在私共の前に對立してゐる二つの時代にも亦明かにその性質が認められるのであります。こゝに私共の前に對立する二種の道德についてこれを區別するには種々の見方なり區別の仕方があると考へますが、私はそれを階級的で有ると無いとによつて區別して見やうと考へます。

在來の私共の道德は、恐しく階級的であつたといふことがその著しい特長であります。謙讓、恭儉とこれに類する道德がその半ばを占め、個人關係の場合その間に常に尊敬をうくべき個人と服從と忠誠を表示する必要を有つ個人とが存在することを

假想して設けられた軌範が多かつたやうに思はれます。階級的であつたといふことが、まだ充分に私の意味するところを盡してゐないとすれば、舊時代にあつては階級が儼然と對立し、相對階級は互ひに冷眼をもつて見合ひ、道德は多くの場合弱者階級に課された冷たい義務であつたものであります。もう一つ言葉をかへて云へば、個人間の關係にあつても階級間の關係にあつても社會の幸福と平安とを支持する義務はいつもその時代の低い階級の手にあづけられ、高い階級又は强者の階級はその時代の道德的責任を問はれない傾向があつたものであります。民衆は彼等の自由と幸福とを代價として支拂つてその時代の平和を支持して來たのであります。

封建時代の生活を私共に想像させる市井に散見する講談本などを見ても、昔の大名達にも極く稀れには『主の顏を怖れない』賢臣といふものがあつて、放縱無恥な大名に奉ずべき德として部下に對する寛大、領民に對しての憐愍、同僚間に示すべき威力といふやうなことを擧げてゐたことがあるやうに見へます。然るに大名方にあつてはその一つ又は全部を缺くことがあつても――寛大である代りに吝嗇であり、憐愍を有する代りに憎惡に富み、威力を有する代りに惰弱であつても、尙ほ且つ彼等が大名であることを妨げることはありませんでした。然るにそれが一旦臣下又は領民に至つてその領主又は主君に對しての義務の只だ一を缺いた時にも、その運命は知るべきでありました。

封建時代のこの專制的制度に對する反抗は、佛蘭西革命を口火として一齊に封建制度の沒落を馴致しました。そして人類の理性的方面に於いては人類の自由平等なるべき原理は承認せられた觀がありますが、然も私有財産の制度を覆滅するに成功せずして、新しき近代の主從關係たる資本家とその雇傭者の階級を生ずるに至りました。そして封建時代に於ける權力者と民衆との間の關係はこの富者と貧者の間にも繰り返され、資本家乃至雇傭者の側にあつてはその使用人に對する義務乃至正義は殆ど不問に附せられる場合が多いのに、使用人側の雇主に對する義務に至つてはその最後の一に至る迄確かめられてゐるといふのが今日私共の前にある實情であります。

これと全く同じ不公平と矛盾とは、男女間の性的道德にもあつたものでありました。多くの先賢の敎には、男女間で守るべき義務については比較的に婦人の側に重くはありますが然し男子の側にも守るべき義務が婦人のそれに準じて擧げられてゐるのが普通です。然し實際の場合に妻子に對してその道德的義務を盡さない夫に對する批謗を聞かないのに反して、妻が夫に對する義務を完全に盡さなかつた場合――特に貞操の點に關して

疑を附せられた場合には、その妻たる婦人の運命は頗る悲慘なものでありました。特に夫たるものは貞潔に對して何等の責任も問はれないのに婦人は結婚後はもとより結婚前の清淨すら要求されたものでありました。そしてこの男女間の性的道德に關する不公平は、日本の今日の法律に明かにその足跡を殘して居ります。

三

舊時代の道德の感化が地に墮ちたといふことは事實であります。然し乍ら舊時代が來らんとする新時代を妊んでゐると等しく、滅び行く舊道德にとつて代るべき新道德も亦私共の前にその姿を現はして居ります。萬一それを認めることが出來ない人があつても、それはその人の不用意と鈍感とが然らしめるのであつて、それは決して新道德自身の罪ではないのであります。然らば新時代の新道德はどんな軌道によつてその發生の過程を辿つてゐるのでありませうか？　順序として私はこゝに時代の精神について只だ一言を費して見やうと思ひます。

近代の精神は、これを一言にして云つて見れば自己の眞實の姿を自覺した民衆の、自己の所有と所屬との凡てをとり返さんとする焦慮と煩悶とによつて充たされてゐると云へると思ひます。そして自己の人格の獨立と尊嚴とを自覺したもの、自己の全人的表現といふ目的に向つて、凡ゆる障害と困難とを突破しやうとする騷擾と不穩とはその著しい現象であります。實際に子は親に、妹は姉に、生徒は教師に、女は男に、貧者は富者に、精神的の平等と物質的の公平を求めて止まないのが現代の最も現代的な徵候として一般に認められて居ります。そして多くの先進の努力と犧牲とによつて今日にあつては世界の常識がこの爭鬪の不可抗性と人類平等觀の正義とを認識しやうとしてゐるのであります。實際に餘り遠からぬ時世に於いて今日存在する不合理な階級の對立は一掃され、一層公平な一層合理的な、精神的物質的の機會と自由とが均等に個人に與へられる社會が將來されるだらうとは一般に固く信じらるれやうになつてゐるのであります。

前に述べた通り、未來に期待されてゐる新社會の發生の第一歩が、個人が自己の人格の獨立と尊貴との自覺によつて始められたとする時、私共は必然にこんなことを考へるのであります。それは眞實に自己の人格の獨立と尊嚴を一度自覺した者は、又必ず自己の友朋たる他人の人格の獨立と尊嚴とを意識しないではゐないものだといふことであります。この只だ一つの事實は、私共に實に多くのことを希望せしめるのでありますが、私

共が理想とする將來の新しい社會の道德について、實に限りない歡喜と愉樂とを感じさせられるのも、この一つの自覺に關する認識の爲めであります。實に人類が自他の平等、兩性の平等の事實を心に銘じて忘れない時にこそ、地上に始めて天國を出現せしむるといふことも過言ではありません。然してこの時代には舊時代にその不慈悲な暴威を振つた甚しく階級的であつた道德――被壓迫階級の服從によつてのみ支持された舊道德は一蹴され、平等な個人、平等な兩性によつて互助的に支持される道德が出現することは明かであります。即ち服從と謙讓とを中心とした舊時代の道德は、友誼友愛を中心とする新時代の道德にその位置を讓るに至るのであります。

私はこれ迄に去らんとしつゝある舊時代と來らんとする新時代の對立があるといふことを既に再三申しました。そして既に對立する新舊の時代がある以上その中間たるべき推移の時代又は過渡期があるべきであり、そして現代は實にこの舊時代が新時代へ推移する過程又は混淆の時代であるのであります。

私は又前に、二つの時代をつなぐ過渡期には又過渡期自身の正義なり道德なりがあり、その正義なり道德なりは時代そのものゝ混亂と矛盾とをその儘に寫してこれを舊時代の又は新時代の道德に比較する時には道德といふ名で呼ぶことに不安を感ずるほどに特殊の形を有するものであることも言及して置きました。それはこの期間の使命が新時代の建設にある一方、舊時代の破壞をもつて又一方の任務としてゐるが爲めであります。こゝに近眼者流の人々に『現代に道德も正義もなし』と斷じしめる原因があるのであります。然し乍ら道德の破壞的方面たる暴力の行使さへ前時代になかつたものではなく、實際には武士の階級にとつて主命による殺戮は最高の正義であり從つて勇氣は最高の道德の一に數へられてゐたものであります。

現代の道德の建設的方面を云へば、各種の共同的精神の發動にその最も具體的な方面を示して居ります。勞働組合の發達、各種の社會事業の增加、國際關係に於いて互助的方面の施設――これらは最もよく新しい時代の精神を私共に示すものであります。實際に幾千幾萬哩はなれた地方に住む人の意志を、只だ一片の紙片によつてこの地にある人に傳へる前時代には夢想も出來なかつた奇蹟的の事業、直接には何等の愛執も關係もない遠いある民族の幼兒の運命を氣遣つて、この民族の間に努力と犧牲とが拂はれるといふこと、職を同じくして報酬の獲得に當つては常に競爭の立場にある同職の人々が、その苦がい競爭の苦味を忘れて一の組合を組織しその遠い目的を遂げやうとして協力することは、これらは決して前代になかつた事象であり、

全く新しい時代の新しい精神の現はれと見られるのであります。

現代道徳の破壊的方面は、民衆が全人類の生活權利が平等なるべきことを、私有財産の制度が不公平で不正なることを意識し始めた時に當然起つて來た消極的方面の積極的努力の現はれでありました。民衆が新しい道徳の完成を夢み、新しい自由と幸福の到來を冀へば冀ふほど、彼等は自分達の足下にその勢力を振ふ舊社會の制度道徳を邪魔物と考へないでは居られなかつた。そして全體としての社會にとつては極く少數を形づくるに過ぎないこれら自覺した分子の戰鬪方法として、反抗と破壊とを生むやうになつたものでありました。彼等は他に多くの穏和な合理的な手段を有してゐてこの非常手段を選んだものではなく、少數が多數に、弱者が強者に對抗せんとする場合に唯一の最効果ある方法として現在の手段を選んだものでありました。勞働者の同盟罷業とこれに類する各種の運動、過激視さるゝ言動と過激視さるゝ行爲――所謂識者のもつて現代の缺陥となす凡ての紛擾と混亂とは、これらは萬一道徳といふ字が當らないとしても少くも過渡期たる現代の正義といふには少しの憚るところはないのであります。

四

私は性的道徳の範圍に於いて、その眞の目標をいづこに置くべきかについて意見を求められたものに對して、この稿の殆ど大部分を費して道徳の現代に於ける位置の釋明を努めて來ました。これは私が性道徳も亦全體としての道徳の中に含まれる一の單位であつて、全體としての道徳の運命とはなれるとは出來ないと考へてゐる爲めであります。從つて性道徳の現在に於ける位置とその將來の目標とを決定するには、全體としての道徳の現在に於ける位置と將來の目標を決定することがその儘に前者にとつても答となることに考へ及んだが爲めでありました。

然し又こゝに別項として新しく私の論點をくりかへして見れば、性的道徳の範圍内にあつても現代が新舊二種の道徳の過渡期に立ち、それ自身の道徳に於いて混亂と矛盾とを極めてゐることは事實であります。在來の男女間の道徳上の責任が、婦人の側に重く男子は殆ど不問に委ねられてゐたことは既に前に云ひました。最近頻發した事件――神戸の女教員凌辱事件と云ひ、横濱の某醫學博士の事件と云ひ、又は若い文士の戀愛事件と云ひ、その凡てが舊時代の男性中心の性的道徳が極端な然して變態的な現はれ方をしたものに過ぎません。只だその事件を由々

しい人道上の問題として世間も凌辱を蒙つた當人もこれをとり上げたところに、私共は始めて新しい時代の色彩を見出したのであります。これが舊時代の眞只中で起つた事件であつたとしたら、どんな結果に到達したのでありませう？ 恐らく婦人の側にて恥と外聞を怖れて泣寝入りとなるのが落ちであつたでせう。この比較は私共にこれらの事件を中心として一般の性的關係に對する新しい意識の發生を示して呉れると思います。

近代の婦人の人間としての自覺は、何時迄も舊時代の道德の價値について疑を挾ませずには置きませんでした。男子と同じき教育と職業の要求、獨立の生活に對する願望——それらは大部分時代の經濟的理由によるものであることは事實であるも、然もこれを客觀的に觀察する時に、完全なる經濟的の自由——××制の確立を將來する迄の過渡期にあつて、婦人が男子に對する反抗と對立の要求の爲めに多大の犧牲を拂つて爲されてゐる努力とも見ることが出來るのであります。現在の職業的婦人——特に無産階級の婦人の努力と奮鬪とによつて全體としての婦人の獨立と自由に對する翹望が馴致され、××制度の社會を確立せんとする努力に對する興味と同情とが全體としての婦人の上にも目覺むべきことは、只だ時期の問題のみであると考へれるのであります。

この方面を婦人の性的關係を改善せんとする建設的方面の表ばれとすれば、現代の夫たる男子又は全體としての男子の不當なる待遇、理由なき凌辱に對して婦人が反逆と復讐とを試みることはその消極的破壞的方面と見て好いものであります。女が男に對して——弱者が強者に對して爭ふ時に選むべき多くの手段はありません。不幸に選び出された婦人が反逆と復讐を企むことは、その婦人にあつては正義であることを識者はよく理解すべきであります。

現代の過渡期にあつては、一方に經濟的獨立への努力と他方男子の放縱と横暴とに對する反逆とは、性的關係の改善への二つの軌道を爲してゐると見て好いものです。そしてこのうちの經濟的努力の方面は全體としての人類の××生活にその最後の焼點を見出し、その破壞的反逆的方面にあつては兩性の完全な理解と同情とより生ずる友誼友愛を中心とする性道德の確立にその焼點を置くものであるといふのが私の信念であります。

何だかまだ充分に自分の云はんとするところを盡さない感がありますが、これ以上に推敲の餘裕ない爲め極めて不完全な儘で讀者の批判を乞はなくてはなりません。

姦淫に關する三部作及びその他に就いて

相馬泰三

私は嘗つて（七年ほど前に）告白に似た或る眞率さを以つて、姦淫に關する三部作を企てたことがあつた。そして、その最初のものとして稿を起したのが「處女」と題する小説で、あれでは、私は或る青年が自分の氣まぐれから一人の小女を精神的に姦淫したことを書いた。結末に於て、男は案外平氣で、それでも筆先きだけでは、「俺は、自分の意氣地なさから、いろいろとお前に下らない物思ひをさせたり、心配をかけたりして、ほんとに濟まなかつた。俺は、今、それを深く愧ぢ、悔い、そして、あまりに輕はづみであつた自分を自ら責めてゐる。でも、まあ、あの上の罪を犯さないですんだことを、せめてもの心の申わけにしてゐる。……」こんなふうに書いてゐる。それに對して、女は次ぎのやうに答へてゐる。「あなた樣のおつしやる通りでございます。あなた樣は、ほんの爪の先程も私の身體をお穢しになどはなりませんでした。それであなた樣はご無事で、いついつまでもご潔白で、ほんとに結構でゐらつしやいます。しかし、この私はどうなるのでございませう。悲しみと失望との涙に泣きぬれてゐるこの私は？　一人ぼつちと暗黑の裡に取殘されたこの私は？——私の將來はどうなるのでございませう？……」私に云はせれば、彼女の處女性は明かに破られたのである、肉體的な姦淫に於ける場合と同樣に、優るとも劣らない强さをもつて！　つまり、正しい意味からいへば、彼女は既に處女ではないのである。

第二部として私が選んだ題材は、或る男が悲境に陷らうとしてゐる哀れな女を救ふのに、心にもない姦淫を以てしたことであつた。人道主義的精神に燃えてゐるその青年の眼には、その危い瀨戸際に立つてゐる女をそのまま放つて置くことはどうしても出來なかつた。そのために、いろんなことが試みられた。が、どれもこれも徒勞に終つた。最後に、もうこれ以上に何も殘つてゐるものはないと考へて、彼は遂に自分の身體を犧牲に供した。そして、成功した。しかし、その次ぎに待つてゐたも

のは醜悪であり、悔恨であり、呪咀であつた。

第三部として、私は、賤しい所謂「あそび」なるものによつて身自を凌辱してゐる青年の淺ましい姿を描き出さうとした。勿論、彼は所謂「あそび人」ではない。彼は、女性に對して、また、いろんな男女問題に就いて、人一倍の注文を持つてゐた。あまつさへ、プラトニツク・ラブの最も熱心な憧憬者でさへもあつたのだ。それだけに、彼のなやみは慘憺たるものであつた。

しかし、「處女」が風俗壞亂の廉でその筋からの注意を喰つたりしたのですつたり元氣が挫け、それにほかの理由もあつて、第二部第三部はそのまゝ、とうとう書かないでしまつてある。

そのかはり、と云ふとをかしいが、私は、その後、「愛慾の垢」「誰がかひなに」「或る一族のこと」といふ三つの小說を書いた。勿論、是等は特に性の問題の爲めばかりのものではないが、尠くともその或る重要な部分に觸れやうと心掛けたことだけは確かである。

「愛慾の垢」では、熱烈な戀愛の前にはどんな汚れた過去も問題にはならないことを示し、「誰がかひなに」では、一人のだらしのない女の不身持ちが涯ない事件をひき起し、そのために多くの人々が益もない混亂に陷しいれられることを描いた。そして、「或る一族のこと」では、或る特種な社會(廓)におこつた事件にことよせて、あまりにも頑な、あまりにも不自由な男女問題に或る一種の暗示を與へやうとしたのだ。あの中に書かれてあるやうな人達は、さういふ方面のことでは神經が麻痺してゐると云へば云へるかもしれないが、また反對に、特異な發達を遂げてゐるのだとも考へられないことはない。彼等は、世の中に、男女關係以上の、より重大な、より切實な事柄がいくらもあることを認めてゐる。そして、それとこれとが衝突した場合に、彼等は果してどんな處置を執つたか――たとへば、Aは自分の妻にBといふ情人のあることを知つて許す。Aの妻とBとの間に出來た子供をBが自分の子供として屆け出る。が、Bにも妻子があるので、自分の家に置くことが出來ないで里子に出す。それを可愛相に思つて、數年の後、Aが改めて養女として貰ひ受ける。それから、また、何年かの後、Aが病死する。Aは臨終にのぞんで、妻と養女を自分の枕もとへ呼びよせて、「お前たちも女二人つきりで、何かにつけて賴りないだらうから、私からも呉々も賴んであるが、これから先きは、Bを私と思つて何かと面倒を見て貰ふがいい。」といふ。すると、Aの三回忌がすんだあとで、Bが妻子を捨てて、着のみ着のままで、ぶらりとAの家へやつて來た。そして、そのまま、ずつとそこの家で暮らすことになる。それから、また、何年かの後、Bが死に、A

の妻が死に、Bの妻が死んだ。そして、あとに殘つた人達によつて、AとAの妻とは一つ所に葬られ、Bの墓とBの妻の墓とは同じ形で並んで立てられた。しかも、こうした事柄がすべて何のこだはりもなく、常におだやかに、滑かに取運ばれてゆくのであつた。

　このほかに、私は、「鹿子木夫人」「驢馬」「山犬と兎」と題する不義の姦淫に關する三ツの作品をものした。「鹿子木夫人」では、女の心持ちになつて考へ、「驢馬」では、男の立場としての感慨を述べ、「山犬と兎」では、もつと大きな、高いところから靜かに見下してみた。

　昔から、この同じ題材を取扱つた小說や戲曲やがどんなに多くあるかしれない。そして、揃ひも揃つて、多くのものが（殆んどすべてが、と云つてもいいほどである。）何かしら血腥さい事件と結びついてゐたり、さうでなければ、作中人物の誰かが、聞くも哀れな悲運に陥るやうなことで終つてゐる。しかし、私のものは必ずしもさうでもない。それは、私が人間としても、また、思想の上からも、性の問題をどんな場合にでもこの世に於ける最大唯一のものと考へることが出來ないところから來てゐるのだと思ふ。それどころか、私は、寧ろ、性の問題をあまりに重く見過ぎる傾向のある作家や作品を排ける。なぜなら、それは、どこかに嘘があるから、さもなければ、どこかに、きつと、未開のにほひがしてゐるから。……

　以上によつて、私が、この問題に對してどんな考を持つてゐるかといふことが、ほぼ說明されたやうに思ふ。だが、實際のところ、最後にどういふ解決をつけていいものか？　それから、また、自分自身がそれをどんなふうに處理して行つていいのか？　それは私にも解らない。全く、世の中に、面と前へつきつけられて、これほど當惑する厄介なものはまたとないであらう。それは、これまでもさうであつたと同じやうに、神様のおぼしめしにお任せするほかはない。そして、ひたすら、神様に、よく、親切に導いて頂くやうにお祈りするほかはない！

　アナトール・フランスは、ユートピア物語「白い石」のなかで、自分の想像する世界ではあらゆる自由が許され、そして、少しの破綻もないことを說明したあとで、この男女關係のことに就いても云ひ及んでゐる。それによると、その理想の世界では、もはや夫婦といふ形はなくなつてゐる。男も女も、すべて、自分は自分のもので、あらゆる自由が許されてゐる。勿論、間違つた法律や道德で戀愛を束縛するといふやうな舊風は殘つてゐない。衝動が理性より力强いことには變りはないが、ただ、昔のやうに一概にそれを抑制せずに、寧ろ放任してゐるものだか

ら、却つて弊害が少い。……等、等、等であるさうだ。しかし、それにもかかはらず、最後のものはあくまでも神秘であつて、それだけは、今の世と同じやうに、やつぱりままならぬのだ相である。

これは本當かも知れない。いろんなことが限りなく繰りかへされた揚句、やつぱり、そんなところへ辿り付くのが、最後のおちなのかも知れない。（五月十日稿）

性的問題を無視する我法制

片山哲

□

現在の法律で、結婚や、離婚法を、性的法律だと考へては大變な間違ひである。といふのは、是等を規定してゐる法律即ち親族法なるものは實際の所、性的法律と稱すべきものでなく、家族上の一經濟制度に過ぎないからである。言ひ換へるなれば、我民法上には性的法律といふべきものが一つもないと謂つてい丶のである。民法上に性的法律がないとすれば、性的法律はただ刑法上存在するのみと觀なければならぬ。我々の生活が平靜である場合に適用すべき性的法律が一つもなく、たゞ、波瀾の起つた場合に適用すべき法律をのみおいてゐるといふ事は、如何にも、我法律の『非人間的』なる事を物語つてゐるものではあるまいか。

□

我法律は、又同時に、資本主義思想の下に制定せられたものである事を斷じなければならぬ。その自由思想、個人主義の觀念は、無產者を奴隸の如く取扱ひ、財產保護に關しては、驚くべき程親切に、委曲を盡した規定を下してゐる。しかしながら財產本位では、到底規律する事の出來ない男女の性的問題については、資本主義思想に更に加ふるに封建制度の思想を以てし、性の問題を鴻毛の輕きが如くに取扱つてゐる。それがため

に、結婚の制度を男子に都合のいゝ一つの便宜方法なりと認定して、現行結婚制度を作つたのであつた。戀愛關係などは、法律の禁物とする所で、唯々親の命によつて結婚するとか、親類の反對に出會つて結婚を思ひ止まるとか、總て結婚を男子專制の一つの方便と考へてをるのである。男子專制のみではない、男子の意思も、家名のため、財産のため無視せられる事すら間々あつたではないか。

□

資本主義思想の下に立案せられたる現行法制は、又道德、宗教と、法律とを嚴然と區別してゐる。成程區別すべき個所が澤山あるであらう。しかしながら、餘りに此區別に囚はれ過ぎてゐるの感がある。區別の方面をばかり考へてゐるために、法律なるものを禁令、取締それ自體の様に考へ、「かゝる事をすべからず、之を犯したる者は何年の懲役に處す」といふ規定を法律の全生命の様に心得、財産法規か然らざれば、悉く取締法規、或は禁令法規のみと考へてをるのであらう。民法は全篇悉く財産法規であるから、工場主と職工の關係も、あはれ、財産的觀察から判斷せられ勞働者の地位は、塵、芥と殆んど選ぶ所がない、唯一の勞働法規と謂はれてゐる工場法ですら、扶助料といふ温情主義の涙金で、勞働爭議を解決せんとする資本主義全盛の法律である。この資本主義法律は人間の生活を毫末も考へない、生活をすら考慮しないものが、何で性の問題に頭を惱すであらうぞ。性の問題を全然無視してゐる現代法律は、同じ思想を以て、遂に道德、宗教をも殆んど眼中においてゐないといふ結論となり得るのである。戀愛を無視した我法制は、同じ觀念を以て、遂に結婚を一つの契約の如く取扱ひ、この契約に違反したる貞操蹂躙を金錢で評價し、以て萬事を解決し去らうとするの觀がある。根本的に性の問題を考慮してゐないで、而も一朝事があつた場合に、性の問題、戀愛の問題を解決し去らうとする現代法制は、一體何處に、性的法律の基礎をおいてゐるのか、頗る迷はざるを得ないのである。資本主義法制、封建主義の法制には遂に性的法律なしと斷ずるの所以は實に此處にある。

□

私は、一例として島田淸次郎事件につき短評を試みたい。あの事件を法律で解決しやうとした事は非常な間違ひであつたと信ずる、是非の結論は別として、法律の手段によつてあの性に關する問題を審かんとした事が、觀念上、大いに誤つてゐる事と思ふ。性的問題につき根本思想のない我法律に向つて、性による破綻の不幸を救濟して貰はうと考へてもそれは駄目であ

らう。現行制度では、性に關する頗るデリケートな問題も、金錢上の事件や、商取引や、泥棒や、詐欺師など丶同じ様に取扱ふのである。根本觀念が、そうであるといふばかりでない、之を取扱ふ手段方法が、全く同じであるから堪まらない。指輪を奪つたといふ事も強盗と見れば見られ得るであろう。一室に止めておいた事も見様によつては、不法監禁と見られ得るであらう。少女からある目的のために奪ひ取つた指輪強盗事件も、深夜兇器を以て家人を脅迫し金錢を强奪し去つた强盗被告事件も、同じ刑法によつて、同じ刑事訴訟法により、同じ檢事の手で取調べられるといふのであるから、我性的法律の眞髓が那邊に存するか、略伺ひ知る事が出來るであろう。島田事件を法律の手によつて解決せんとした事は、無より有を生ぜしめやうとしたと同樣、頗る筋違ひの觀がある。これと同じ遣り方を、勞働爭議に見るのである。勞資間に於ける經濟戰、階級上の爭議に際し官憲は、何か刑法に觸れる様な事がないか、何か帳簿を胡魔化し金錢横領等の不正行爲がないかなど丶、鵜の目鷹の目で、あら探しを初め、果ては爭議團の幹部を檢束して、資本家に對する談判の態度が不穩當で、脅迫になつたとか、裏切者の監視が嚴重過ぎて、不法監禁になつたとか、まことに九牛の一毛にも當らない様な些少な飛沫を捉へて、爭議團の氣勢を挫き、この天下の階級鬪爭を解決せんとするのである。我々は極力之を攻擊して來た、勞働問題を金錢關係の如くに、淺はかに考へてゐる我法律が、何んでこの階級爭議を解決する事が出來やう。勞働を無視し、經濟關係を眼中においてゐない我法律は、全然勞働問題に嘴を入れる資格がないものだと痛罵したのであつた。勞資の爭や實に堂々の陣を張つて、正面攻擊を開始しなければならぬものである、裏門からコソ／＼と擧げ足とりの檢擧は、實に男らしい方法でないと、我々は常に痛擊したのであつた。性的事件も、矢張り、これと理論を同じくしてゐる、性の問題を金錢問題の樣に淺はかに取扱つてゐる我法律に、自ら好んで、救を求めやうとしてゐる島田事件の告訴は、この意義から言つて餘り面白くないものだと思つてをつた。島田事件は性的道德上の問題であり、同時に、社會上の問題である、當事者は堂々、社會上の問題として爭はなければならぬ。唯單に漠然社會上の問題とは謂はない、これ實に、一種の階級鬪爭であり、男女間に於ける社會組織に關する重大問題であるとして戰はなければならぬ。一擧げ足とりで、此重大事件を解決し去らうとする事は、返す／＼も殘念千萬な事と考へるのである。

□

性的道德上の判斷、社會上の批判は、性的法律から離れて獨立に存在してゐるのである。性的法律は唯そこに現はれたる結果の跡始末をしやうとする時にのみ存在するものである。勿論これは現代の制度、資本、封建の制度の下で謂ふ事であつて、決して我々の法律觀でない事を充分に注意しなくてはならぬ、法律上の研究は要する所、社會制度の研究に落付き來るもので、たゞ條文や、法の分類、文字の解釋を以て法の生命なりとする事を斷然排斥しなければならない、法律を以て性の問題を解釋し、或は之に嘴を容れる事を許すには、法律上の根本思想から改革して行くべきであらう。例へば、神戸で某外人が深夜に我婦人を凌辱したといふ事件があつた、輿論は此暴行に憤慨し、被害婦人は刑事問題を起し又民事損害金をも請求した。司法當局はその婦人の請求を二つながら容認した、此刑事々件を以て、性的法律であり、又性の問題につき法律が相當の解釋、解決を與へたりと早合點するのは大變な誤りであらう。問題が具體化し、露骨化しなければ其問題の眞相が判明せぬといふ傾向があるが、それは我社會上一般の通弊ではなかろうか。忠臣藏で勘平が腹を眞一文字に切り、眞つ赤な血を、ドロ／＼と流さなければ、それは悲劇にはならないとか、不如歸の浪子が、夫に別れ、不治の病の爲めに遂に悲しみながら死んでしまうといふ場面がなければ、不如歸劇の値打がないとか、赤い血や、死亡の事實を以て、これを悲劇だと感ずる觀念を憐れと思ふ。具體的事實の前、既に、婦人凌辱の性的事件が、我法制上到る所に横はつてゐるではないか。娘の初戀はものかは、其意思すら考へないで、親は娘を自分の都合のいゝ家や、男に嫁がして、サツサと片付けてしまつてゐるではないか。如何に學識あり、能力ある婦人も一度結婚すれば、行爲無能力として取扱はれ、妻特有の財產をも一々夫の許可を受けなければ、之を自由にする事が出來ないといふ狀態である。男が藝者遊びをしても、妾を蓄へてもそれは妻に對しては何等の侮辱にも、虐待にもならぬといふ有樣である。貧乏人の娘は、自分の父の負債のために、父の命令に依つて、あたら花の乙女時代を娼妓稼業のために汚さなければならぬといふ制度が公認せられてゐる。自由意思で凌辱を敢てしてゐるのではない、國家の制度として婦人凌辱事件が、頻々として行はれてゐるのではないか。

□

我々の理想とまでゆかずとも、常に希つてゐる法律は、斷じてそんなものであつてはならない。道德、宗敎と其社會的使命を同じうしたものでなければならぬ。性的道德觀は性的法律と合致したものである事を必要とする。これがためには、我親族

法を根本的に改革しなければならない、結婚法は眞に相愛する男女のホームを規律するものである事を要する、戀愛が結婚法の最大要件となつた時に、初めて、其所に戀愛至上主義があり、性的法律なるものが其意義を爲し、人間愛が、發溂として性的法律の中に輝くであらう。舊制度の下では、永劫に人間の愛情は無視せられ蹂躙せられてゐる、我々は唯この腐爛したる舊制度の改廢のみ希つて止まぬものである。

性的事件の社會的考察

加藤一夫

性的事件が頻々として起る様に見える。もつともこれは最近に至つて初めて起つた現象ではなく、從來も常に行はれて居たことではあるが、最近に至つて特に著しくなつた傾向がある。それについて吾々は何麼風に考ふべきであるか。これを單なる道徳的問題として論ずることは、最早今日の吾々の心情を滿足せしめ得るものではない。何となれば、舊道徳の權威は既に滅びつくしてしまつたのであるから、その尺度でもつてこれを批判する事は難いし、新しい道徳がもし生れ得るとしても、それは何よりも先きに、他の社會的現象に隨從すべきものであるから、先づ吾々は、何うして此麼現象が起つて來たのであるか、一體こんな現象は社會的に見て何麼意義を有すべきであるか、と云ふことを考へなければならない。そしてその時初めて、今後、性に關する問題を何麼風に取扱ふべきであるかと云ふことを諒解すべきである。

何うしてこんな現象が現はれ出して來たのであるか。

しかしこれを考へる前に、現今行はれつゝある性的事件は果してどんな種類のものであるかを觀察して置く必要がある。

僕の見るところでは、今日行はれて居る性的事件には、大體、或る自覺せる少數の男女が、その自覺の結果、自己を解放しよ

うとする、積極的反逆的精神から來つたものと、世紀末的デカダン的放恣から來つたものとの二つが存在して居る様に見える。勿論これは、兩者の間に何等の關係なり共通點なりが存しないのではない。否、それが在る。だから、はつきりとこれを、別々のものとして取扱ふことは困難である。たゞその性質上、比較的この色彩の濃厚さによつてこんな區別をつけ得るばかりである。

では、その兩者に共通するところの現象は何であるか。それは、從來の道德や理想や社會的制度やに對する信念が殆んど完全に打ち破られ、一切のもの丶權威と云ふものが思想的には殆んど完全に滅ぼされてしまつたと云ふ一事に關聯して居る。

一時自然主義文學の隆盛を極めた時代にも、これに類した現象はあつた。しかしその時分と今とでは本質的に云つて餘程異つたものがある。

自然主義時代に於いても、一切の道德や理想が破壞された。因襲の打破、あるがまゝの人生、自我の權威、かう云つたことが、その當時の標語であつた。そしてこの思想は唯に、人間を舊い道德や理想や因襲や習慣や權威から解放して、あるがまゝの現實に生活すべきことを教へた。だが、その解放思想の根本は、主として個人の自覺であり、個人の解放であつて、個人が眞に解放されるためには先づその個人の生存して居る社會的不合理から解脫しなければならぬと云ふことには餘り多く目覺めて居なかつた様に見える、從つてその解放は主として個人的思想的のそれであつて、未だ全く現實的社會的のそれとはならなかつた様に見える。（勿論今日と雖も、此の域を脫しきつて居るとは決して云ひ得ない。少くとも頻々たる性的事件の殆んど凡ては、依然として單なる思想的個人的）のものである。しかし一般に、それを批判するもの丶眼は自然主義時代のそれとは大に趣きを異にして居るのは事實である。）

自然主義的解放運動の基調は、何と云つても、思想や道德やの文化的方面に限られて、（少くともその方にのみ重點を置いて）經濟的、社會的方面に存しなかつた。從つてそこに社會運動との關係が薄く、勿論それが社會主義的運動とはならなかつた。そしてその結果、その運動は中途半端なものに終つてしまつて、現實曝露の悲哀だとか、灰色の人生だとか云つた樣な、極めて消極的な、絕望的なものとなつてしまつた。

ところが、今日の解放運動は最早、決してさうした觀念的文化的個人的解放運動ではない。それは一切のもの丶權威を否定する。而もそれは、社會的、經濟的見地に立つての否定である。

だから、從來の道德や理想や因襲やに對する否定は、決定的徹底的である。最早そこには現實曝露の悲哀はない。たゞ雄々しい戰鬪的氣分と權威の徹底的蹂躪がある。それが自覺せる性的解放運動であらうと、單なるデカダン的性的解放運動であらうと。

即ち、今日の頻々たる性的事件は、それの直接の動機が何であらうと、その根柢に徹底的な權威の失墜が深く巣喰うて居るのは動かすべからざる事實である。

今日では既に、一切の權威が徹底的に蹂躪された。そしてそれが社會問題的性質を帶びて來た。それでは、その社會問題的性質と性的事件との關係はどんなものであるか。

現今に於ける社會問題の中心は何と云つても、資本主義的經濟組織が一般に無産勞働者を搾取して居ると云ふ事實から起つたものであるのは云ふまでもない。今日の勞働者は自己に資本を有しないが故に、自己の勞働を商品として資本家に賣らねばならない。その結果彼は、資本家の搾取に甘んじなければならないのは勿論、自己の人格をまでも資本家の自由に提供しなければならない。彼はまことに新しき奴隸である。そして此の奴隸は、初めて自己の地位の何處に在るかをさとつた。現社會が彼にとつて如何に不合理であり、如何に呪はしき鐵鎖であるかをさとつた。そこで彼は、彼と同じ境遇に在る同胞と相扶け相團結して、自己階級の解放運動に從事するやうになつた。組合運動や社會運動がその結論である。中にはまた、テロリストとしての非常手段をとる事もある。

だが、奴隸の地位に置かれて居るものは決して勞働者ばかりではない。勞働者以上に奴隸としての永い歷史をもつて居るのは婦人である。婦人は、娘として親の奴隸である。妻として夫の奴隸である。母として家庭の奴隸である。否、社會的に考へて見て、女はたゞ社會の奴隸である。そしてその最も大なる原因は、婦人が經濟的に獨立することが出來ない狀態に置かれて居ると云ふ事に存する。

ところが、自由に對する要望は、決して單に男子のものとのみ限定される所以はない。奴隸勞働者が自由のための解放運動を初めたとするならば、その同じ要望が奴隸婦人にも起らないと云ふ理由はない。そしてその要望は今や、漸次に婦人の胸中にも簇勃として發起するやうになつたのは事實である。

たゞ、何と云つても此の自覺が婦人の胸中に湧き上つて來たのは、男子のそれより遲かつたのは事實である。從つて、今日の婦人の解放運動は、尚未だ自覺せる男子の運動のそれまでに到達して居るとは云はれない。

今日も勿論、少數の婦人達は、婦人の解放運動を社會運動のレヴェルまで引き上げて居るのは事實である。しかし大多數の婦人はまだそこまでは進んで居ない。彼等はたゞ、自己の奴隷的地位を見ることが出來るやうになつた。從來の道德や因襲や理想やに對する信念を放棄してしまつた。そしてそれに反逆を試みようとする精神に燃え上つて來た。だが、彼等はまだ、彼等自身をかうした地位に縛りつけるところのものは、單にさうした道德や思想や因襲の力によるのではなく、もつと直接的に具體的に、彼等の經濟的自由の剝奪、と云ふよりは寧ろ、今日の社會全體の經濟組織の不合理に歸因すると云ふことを悟つて居ない。そこで、最も多く自覺せる婦人達と共に社會全體の變革を志すところの社會運動に投ずることなくして、たゞ單に、自己一身上の自己革命をやらうとする。中にも、婦人にとつて最も重要な要素をなすところの性的自由のために、從來一切の權威を蹂躪しようとする。玆に於いて、娘は兩親に背いて自分の戀人のもとに走り、妻は夫に背いて情人と共になり、未亡人は子供や亡夫への愛を振りすてゝ新しき性的生活に入るやうになる。そしてかうした出來事が社會の或る一角に起ると、これ位の程度にすら自覺してない、多情な放恣な性格の持主である女が、親に對しても、夫に對しても、子供に對しても、眞實愛を失つてしまつたのでなく、また、これならばと云つたやうな眞の愛を新に發見したと云ふのでなくとも、あるちよつとした機みから、何等貞操的觀念に脅かさるゝこともなく、謂ゆる性的事件を惹き起すと云ふことになる。しかしこれも、決して、女だけがそんな氣持になつても、男の方でさうでなかつたら、さうは行かないが、男と云ふ奴は一體生れつき放恣であるかの如く、また、何時でもさうした餌食のひゝかゝつて來るのを待つて居る蜘蛛の如く、自分の張つた性の網にとびかゝつて來る犧牲者を待つて居るばかりでなく、常に周到な注意をもつて女を誘惑するのだからたまらない。こんな風にして今日の謂ゆる性的事件が頻出するやうになるのである。

嘗つて僕等も、社會的科學の知識に不足せるところから、たゞ個人的に自己を革命しさへすれば正しい生活を獲得し得るものと考へた時代があつた。しかし今は、個人的自己革命だけでは決して正しき生活を獲得し得るものでないと云ふことを悟つた。だが、大部分の自覺せる女は今、僕等が嘗つて辿つた道を、即ち個人的自己革命を遂行しようとして居るらしく見える。しかしこれはやがて婦人に、幻滅を感じさせるのに相違ない。そして更に進んで社會運動の渦中に投じて來ることを信じて疑はない。

性的事件の頻出は、かうした社會組織上の缺陷と、かうした半ば自覺せる男女の自覺から起つた一つの現象であるけれども、而も大部分はまだ、さうした理由で起るよりも、寧ろ更に多く、世紀末的デカダン的氣分から起るものであると云ふ事は疑ひを容れない。と云ふのは、ゾラやモツパツサン等の性慾小說を初めとして、その種の小說が最近非常な勢ひで賣れ初めたと云ふ事からでもわかる。蓋しかうした小說の讀者の多いは、決して今日の社會組織の缺陷を痛切に感じて居るところの貧しきプロレタリアではなく、少くとも多少生活に餘裕のあるもの、もしくは大いに餘裕のあるものである。そしてそれ等の人々はみな、多少とも、今日の社會の不合理を感じ、今日の社會に於ける一切の權威の破壞を感じながらも、尙未だ新しき社會生活を見出すことを得ず、まだ、現在の生活を蹂躙してまでも新しき生活に這入る事を得ないところから、自然と、デカダン的氣分の陶醉に自らを誤魔化して居るものだからである。資本主義の爛熟期に在るブルジョアジイは實際、經濟的に自己崩壞の途上に在るばかりでなく、生活に於いても、思想に於いても、氣分に於いても、凡ゆる方面に於いて自己崩壞の途上に在る。かうしてブルジョアジイは、漸次にその壞滅の途を急ぎつゝある。ブルジョアもしくはブルジョアの支持によつて辛うじて生きて居る階級が、その賴るべきものを失つて、何時とは知らずデカダン的氣分に陷つてしまふのは寧ろ當然である。そしてこれは、恐らく何人の力もよく阻止する事を得ないであらう。吾々は寧ろ、資本主義制度壞滅の過程として、靜にこれを默視すべきであらう。

一體、一切の道德や規範がその權威を失墜してしまつたとき、吾々の生活を促進して行くところの原動力が、人間の食慾と性慾とであるのは爭はれない。そしてこの食慾解放の運動として表はれる重なるものは謂ゆる勞働運動だとか社會運動であるが、性慾解放の運動が、主として純眞プロレタリアによつて起されず、また起さるべき餘裕がなくて、幾分でも生活に餘裕のあるものによつて起される性質のものであるから、それが思想や藝術等の文化的意義をもつたものとなつて表はれるのは當然である。そしてそれが、藝術的方面では從來の性道德の否定となり、性慾解放の目的を持つと共に、思想的に云つて、性的事實の重要を說き、性的知識の普遍化に導くのも亦當然である。

實際この頃は、必ずしも藝術の方面に限らず、性的事實を書いた書籍の出版の、著しく增加したのは見逃す事が出來ない。たとへば、夫婦和合の秘訣として、性的調和の重要なことが

切りに唱へられる樣になつたが、そしてこれは、間違のない事實ではあるが、それにも拘らず、今までは、そんなことについては殆んど盲目であつたと云つてもいゝ、たとひ全く盲目でなかつたとしても、公然とそれを語ることを恥ぢ、寧ろ、さうした事實を承認することを蔑視する傾きがあつた。だが、近頃はそれが公然と語られるやうになり、啻に語られるばかりでなく、事實、夫婦生活の上の最も重要なる一要素となつて來た。そして茲に最も注意しなければならぬことは、資本主義的文明の爛熟と共に、萬人の生活が多忙を極め、器械的になり、從つて無味乾燥なものとなるところから、近代人の大多數が皆神經衰弱者となつて、性的機能を完うすることが出來ないやうなものとなるに至つたと云ふことである。そして此の事實はやがて、滔々として流れ來つたところのデカダン的氣分と合して、從來の貞操觀念を何の容赦もなく蹂躙してしまうやうになつたのも事實である。

實際、これ等の事實は傷ましい事であるには相違ない。しかし、時代の變化や、社會的事情の變化が、それ等の事業を餘儀なくせしめたものである限り、これは如何ともすることの出來ないものだと云はねばならない。

そこで、將來の性的道德の新目標を如何にすべきかと云ふことも自ら分明である。

今日の性的事件の頻出は、それが善いものであらうが、惡るいものであらうが、また、それが正しいものであらうが無からうが、それは要するに、今日の社會組織が齎した不可抗の缺陷である。それ故にこの性的關係の調節は、一つにもつて社會組織の變革に待たねばならない。今日の社會制度を無視して、抽象的に、或は概念的に、如何なる新道德を樹立しても、それは要するに無益な努力だと云はねばならない。

即ち、何よりも先きに、婦人にも男子と同樣（もつとも今日と雖も男子の凡てがさうであると云はれないのは云ふまでもないが）經濟的自由を享樂せしめねばならない。そして、婦人をして男子の奴隷たる境遇から解放せしめねばならない。男子が社會から生活を保證されると同時に、女子も亦社會から生活を保證されなければならない。そして、男子も女子も、他の何者によつても强制されず、自己の自由なる選擇によつて結婚をし、自己の自由なる意志によつて離婚し得るやうな世の中となさねばならない。

勿論、さうした時にはそこに、男女の自由を束縛すべき何等の權威は存しない。だが、その時初めて、男女は眞の結合をな

す事が出來るであらう。從つて、婦人が男子及び社會に對して反逆すべき理由を失ひ、その間の道徳が頽廢すべき原因を保有しないであらう。もしまた、一度結合した男女も人格や趣味、性癖の上からまた、性的不調和の事實から、(經濟的には既にその障壁が除かれて居るのだから、その方面では心配がないが) 別れた方がお互に利益であると云ふ結論が生じたならば、合意の上で自由に別れる事も出來るであらう。

もつとも、それにしても尙、男女のうちの何れかゞ、餘り多情であるが故に、つひ、他の男女と性的關係を結ぶやうなことのあり得るのは認めねばなるまい。だが、それは何うも仕方のない事である。それは、如何に嚴格な男女道徳が存して居る時代と雖もやはり起り得る事實である。

もし一度相愛し合つた男女だとか、一度相結合した男女だとかゞ、他の男女に愛を移したり、他の男女と性的關係を結ばうとする場合には、先づお互にその相手にそれを打明ければいゝだらう。そして十分に諒解し合つたときにそれを實現すればよからう。もしそれが十分の諒解を得ないのにも拘らず、强いてそれを實現しようとする場合には、そこに怨恨や鬪爭の行はれる事もあるであらう。だが、それも結局仕樣のない事ではないかと思はれる。人生に何等の鬪爭もなく怨恨もなく、愛と平和との天國を求むるものは、求むる方が寧ろ間違つて居る。

新性的道徳の條件

本間久雄

新聞を賑はす性的事實が最近殊に多くなつたと云ふことは、偶々、一つは舊式の性道徳が權威を失つたと云ふことと、一つは、新しい性道徳が、次第に世間の注意を引きつゝあると云ふことを證明してゐるものと見ることが出來る。この意味で、私は、最近の性的事實の暴露を必ずしも性道徳の頽廢であるとして悲觀はしない。寧ろ、舊道徳と新道徳とが相剋してゐる現代

の過渡期の當然の現象として、それらを樂觀的に觀察したいと考へてゐる。

私は今こゝで、最近世間の視聽を集めたそれらの性的事實を具體的に批評する餘裕を持つてゐない。たゞ、當來の性的道德の條件とも云ふべきものを思ひつくまゝ左に列擧することゝする。

一、戀愛が根柢とならざるべからざること。これは恐らく多くの説明を要しないほど明かな條件であらう。戀愛のない兩性關係は單なる性的遊戲か、さもなければ單なる賣淫である。戀愛のない性道德はこれを考へることすら出來ない。しかし事實は、戀愛を度外視した性的遊戲か賣淫かの兩性關係が大部分を占めてゐる。吾々の周圍の結婚生活の多くに就いて見ても、このことは容易に肯かれるであらう。「たとへ、法律の手續きを經た結婚でなくとも、戀愛は道德である。いかなる結婚も戀愛なしには不道德である」とエレン・ケイが喝破したのも要するに戀愛が、餘りに兩性關係において度外視されてゐるからである、

尤もこの場合、問題となるのは戀愛の意義である。いかに戀愛を根柢とすると云つても、戀愛そのものゝ解しようによつて、そこに內容上に大きな相違が出て來るのが當然だからである。私の云ふ戀愛は、ジョルジ・サンドやエレン・ケイやカアペンタアなどの云ふやうに靈魂と感覺とをして不可分離のものとするところの靈肉合致の戀愛である。かういふ戀愛そのものゝ價値については、こゝで論ずる餘裕はないが、新しい性道德の根柢とならなければならない戀愛は蓋しかういふ戀愛である。

二、結婚形式の羈絆を自由にすること。新しい男女關係は、決して在來のやうに、一生涯的な一夫一婦の嚴守であつてはならない。戀愛を根柢とする以上、その戀愛の消滅することはあり得ることである。尤も戀愛の繼續は望ましいことであり、戀愛の消滅しないやうに相互に努力することは、眞の戀愛の體驗者に取つての相互の責任でもある。しかし、どうしても相互において繼續するに堪えなくなつた兩性關係は、現在に觀るが如き法律上、道德上の制御なく、その羈絆を斷ち切つてよい。世間では、かういふ自由にその羈絆を斷ち切ることを以て、兩性關係において徒らに放恣と淫逸とを奬勵するものゝやうに考へてゐるが、それはたしかに俗衆的な見解である。無論、そこにはさういふ弊害もないではないが、すでに戀愛のなくなつた男女の關係の繼續を强ひるところに生ずる弊害に比べると、恐らくそれは物の數でもあるまい。一夫一婦の形式にのみ道德を認めて、その形式の中に醸される不道德を認めないのは俗衆的短

見者流のことである。

三、相互の人格を認め合ふこと。これは本當の戀愛に眼ざめた人の當然採るべき態度である。人格を認め合はないところには本當の戀愛は成立しない。人格を認め合はない戀愛は、單なる賣淫的な、肉的な、戀愛の名に値しない性的關係である。

相互に人格を認め合ふとは、相互に尊敬し合ふことである。相互の獨立を認め、相互の價値を認め、それによつて、又自己を補足することである。「エレン・ケイは、戀愛の最高典型を以て「道德的にも知識的にも、同じ平行線上にある男女の間に存立し得るもので、か〻る男女がお互に自分を完了するために相愛し合ふ狀態」であるとなし、又、「この完全なる戀愛は、當の男女にお互に一つとならうとする强烈なる渴望の一念を生じさせる。しかし尙この戀愛は、男女二人をそれ〲相互から獨立させつ〻、而も二人をそれ〲二者一體となると云ふ大なる完全に向つて發展させる」と云つたのは眞に至當である。かういふ戀愛こそ所謂人格的戀愛であつて、又この人格的戀愛こそ、新しい性道德の根柢となり得るものである。

四、自由と責任と連帶觀念とを相互の間に把持すること。これも第三と連續する條件であることいふまでもない。自由のないところには責任がない。責任のないところには連帶觀念はない。連帶觀念のないところに、協力生活の營み得ないのは當然である。

結婚生活における自由といふことについてはカアペンタア氏は次のやうに云つてゐるが、味ふべき言葉である。

「夫婦が互に遠く離れて自由に行動することを許し、而も常に彼等を絕對的同情の絆に結びつけ置くやうな、極めて自由な、天眞爛熳な結婚は、その自由であるといふことのために、却つてます〲吸引的となり、生活範圍が廣いといふことのためにます〲結婚生活が豐富になり、活氣を增し、或る意味においては破壞すべからざるものとなるのである。恰も滑かな軌道を廻轉してゐて、互に遠ざかるけれどもそれは再び迅速に相接するためであつて、遂には重なれる一つの星となつて輝く二つの天體の關係のやうなものである」と。

自由といふことは決して放恣の意味ではない。在來の一夫一婦制は、この自由といふことを全然認めないで、婦人を單なる私的所有物と見做してゐた。だから在來の性道德は、男に寬大で、女に苛酷であると云ふやうに、男女によつて標準を異にした二重道德であり、從つて又一種の奴隷道德であつた。相互の間に人格を認め合ひ、相互の間に自由を保留し、責任を負擔し、連帶觀念を把持するならば、かういふ因襲的な二重道德は自ら

消滅するであらう。又、新文化建設のためにはそれは必ず消滅させなければならないのである。

以上の四つは、ざつと思ひ浮ぶまゝを擧げた新性的道德の條件であるが、しかしこれらは結局第一の條件である戀愛の尊重といふことに煎じつめることが出來る。といふのは二以下の諸條件はすべて戀愛を根柢とすることなしには考へられないからである。この意味で、新性的道德を樹立するためには、本當の戀愛を眞面目に各自が考へ、各自がそれを體驗しなければならない。さういふ各自の思考や體驗やは、又自らにして、新性的道德の一代の趨勢を形くるのである。

事實、又、戀愛を性道德の基礎としやうとする要求は、少くも新しい時代人の間には、すでに一般の輿論となりつゝある。この輿論なり趨勢なりに逆らうものは新しい時代に逆らう舊套的な人である。

最近の個々の性的事件を概觀しても、(尤も醫學博士大野某の事件は例外である。これは性道德上の問題ではなくて、單なる犯罪學上の問題である。)それは決して、因襲的道德の立場からのみ非難さるべきものではない。それらの多くは(無論例外もあるが)寧ろ、因襲道德の權威が失墜し、新しい道德のまだ、はつきりと確立されない過渡期における當然の産物として、眞摯な考察研究の對象として觀察さるべきである。私は、今日の若い新時代人がそれらの性的事實を所縁として、一層多く性道德の問題に留意することを希望する。

社會的に見て

大山郁夫

近頃の新聞紙の社會面を賑はしてゐる性に關する諸事件には、大抵の場合、私は特別の興味を持たない。さうしたものは、關係當事者に取つてこそ重要な問題であらうが、一般の第三者に取つては、決して珍らしい問題でもなければ、特別の重要意

義を帶びた問題でもなく、唯單に、人間といふ動物の一種類を、その本源の狀態から現在の狀態にまで存續せしめて來た根本的衝動に關する一般原理が、個々の場合の狀況に應じて、それぞれに多少の特殊相を帶びて現はれて居るだけのものに過ぎないのである。尤も、さうした特殊相が、時としては、或る程度に我々の特殊の興味を喚び醒まさない譯ではないが、それも多くは一時的性質的のものに過ぎないのであつて、永續きのしないのが普通である。少くとも、私の場合はさうである。で、さうした事件の一つ一つに特別の注意を拂つて行くには、私の生活が餘りに忙しすぎもすれば、それよりも先きに考へなければならない問題が餘り多すぎもする。

しかしながら、この原則には、時としては多少の例外がある。それは、事件の根本的動因は依然として性的葛藤といふ永遠の人生問題であるにしても、それに附帶する諸條件が或る意味――殊に社會的意味――に於て相當に重要意義のあるものであつて、それが却つて我々の興味の中心となるやうな場合である。しかも、さういふ諸條件が、あらゆる意味に於て過渡期にある現代の世相と深く交渉してゐる場合に於て、殊にさうである。たとへば、若し我々が新聞紙の記事に信頼することが出來るものとすれば、大野博士に關する事件とか、島田清次郎に關するそれとかゞ、恰度この種類に該當するものである。これらの事件のローマンテイックのサイドは、我々に直接の關係のない他人の情事であるが、しかしそこに含まれて居る社會問題は、或る意味に於て、現代社會の空氣を呼吸してゐる我々自身の問題である。かういふ立場から見れば、前者の場合には、現代社會に於ける男女の社會的地位から來る諸問題も含まれて居れば、多くの人々が口にして居る通りに、我國の女子教育に於ける性教育の缺陷から來る諸問題も含まれて居るといふことも承認が出來る。そしてまた、この性教育の缺陷が、封建時代からの遺物である婦人道德觀や節操觀に關聯して居るといふことも、おのづから推論し得られるやうに思はれる。それからまた、後者の場合には、關係當事者たち、及びその周圍を繞ぐる人々の間に於ける階級意識が、特別に明瞭に現はれてゐるやうに感じられる。殊に、舟木氏側の人々の間には、階級的優越感が鼻に附くほどの程度に示されてゐたやうである。そして、それが彼等の判斷を誤らせて、若しあゝしたことが同階級間に行はれたのだつたならば別に問題にしなかつたであらうと思はれるやうなことまでを、際立つて目立つた問題にしたやうな形跡があつたやうに、我々には考へられるのである。彼等が娘の片言を聞いて、直ちに相手の島田氏に強盜、誘拐、強姦などだつたかの罪

名を負はせて、事件を表沙汰にしようとしたのは、つまり、さうした階級的優越感から來た判斷の錯誤のためではなかつたらうか？　手短かにいへば、彼等の島田氏に對する輕卒なる糺彈の態度は、イギリスの法諺にある The king can do no wrong と略ぼ同樣の基礎的感情に立脚したところの Our "musune" can do no wrong といつたやうな僻見的矜持から來たものと、我々には見られたのである。それがために、結局彼等は、その後島田氏の手から出た娘の手紙の發表に依つて、飛んでもない大味噌を附けたことになつたやうだつたが、それはしかし、事件發生の當時からの彼等の不明が齎らした當然の報酬ででもあつた。

それから、最後に一言したいことは、これらの事件に關して諸新聞紙に現はれた批判は、少くとも私の眼についた限りでは、殆んど皆、封建時代的貞操觀に立脚して居ないものはなかつたといふ一事である。萬事が過渡期にある現代ではあるが、特にかういふ種類の問題に對する批判となると、殆んどすべてが依然として封建時代式の價値づけに基礎を置いてゐるといふことは、我々に樣々のことを深く考へさせた。就中私は、男子專制の因襲から來た物の見方が、如何に社會の各層に於ける人々の潜意識の中に今尚固い根據を占めて居るかといふことに打たれない譯には行かなかつた。これは平凡な事實だけれども、しかし同時に拒めない事實である。

かういふ概論以外に亘ることは、私は一切避けたい。といふのは、私は諸新聞紙の關係記事以外に、右の諸事件に關する報道を持たないからでもあり、またその諸新聞紙の關係記事にしも、今では大部分忘却してしまつてゐるからでもある。

想華

五月雨の詩趣

近松秋江

雨は通例厭なものになつてゐるが、反對に又詩趣に富み、風情の多いものともなつてゐる。殊に春雨は艶なものに數へられ、その他夕立といひ、白雨といひ、時雨といひ、村雨といひ、冬雨、秋霖おの／＼風情があるが、就中五月雨は雨百態の中でも深刻なる味がある。

詩人藝術家はその眼に映る物を、いかなる物をも化して、よく彼等の詩題たらしめる。殊に我が邦在來の文學の中でも俳句は最もよく物を詩化するの自由と多方面の趣味を持つてゐる。

私は五月雨の厭はしさを思ひ、如何にして梅雨の期間を過さんかを考へる度に、人力の以つて如何ともすべからざるこの厭ふべき自然の襲來に對し、たゞ消極的の諦めの中に一脈の畫趣と詩趣とを思念し、森羅萬象を悉く詩化して往くところとして可ならざるはなき俳人の自然觀に學ぶところが頗る多い。

五月雨には名句がなか／＼に多い。芭蕉の、

五月雨の降りのこしてや光堂

といへば、自然に對し歴史に對して悲しい諦めの中にも無限の詩趣がある。

さみだれを集めて早し最上川

の句を味ふと、豪宕たる長江大河が五月雨の濁水に水嵩を増して滔々と流れてゆく壯觀が眼に浮ぶ。それから不玉といふ人の句に、やはり七部集の中に、

白鷺や青くもならず五月雨(つゆ)の中

といふのがある。此の句は面白いと思ふ。毎日毎日ふりつゞく五月雨に、池の水際の蘆の葉は青く伸びて濃く茂り、その色は融けて流れんとしてゐる。側に立つて餌を漁つてゐる白鷺も爲に青く染まりさうであるが、さて染まらないのが不思議である。

野坡の句に、

さみだれに小鮒を握る子供かな

といふ鄙びた句がある。この句を思ふと、自分の聯想は自然にわが幼時に返つて來る。田舍では麥の黄熟する頃で、つゞいて田植へが始まり、五月雨は幾日も降りつゞき、不斷は水の絶え〴〵なる川にも水嵩がまさり、田圃の小溝にも水がどぶ〴〵溢れる。さういふ時にどうかすると大きな鮒が、とまどひをして水田の縁の畦道の水溜に游ぎ上り、水の退いたあとに取り殘されて、ぴちや〴〵跳ねてゐる。それを見付けて握り取つた時のうれしさは忘られぬ。

私の故郷の村には、すぐ傍を小さい川が流れてゐる。それが五月雨の頃か、又は初秋の二百十日時分の秋雨の降りつづく頃になると屢々洪水を來すことがある。近年山林の保護がよく行き屆いてゐるために餘り洪水も出なくなつたとい

ふことであるが、私の幼少の頃には一年に二度か三度は必ず出水した。川はさまで大きくないが、溪川のやゝ成長したものに過ぎないので、却つて水の出て來るのが早い。ひどい豪雨でもあると、一夜の中にも岸に溢れ田野を流し、人畜に損害を與へたやうなことも今から三四十年の昔しにはあつた。

私はその川に洪水の出るのが夏日の一興であつたことを忘れぬ。もう幾日も降雨がつゞくと、「下の川に大分水が出た。」といふ言葉を必ず聞く。そして雨の降りしきる中を、傘をさして見にゆくと、不斷は水の枯れ〳〵になつてゐる川に黄濁色の洪水が兩岸よりも高いくらゐに渦を巻きつゝ轟々たる響きを上げて流れ落ちる樣は物凄いとも壯觀ともいひやうがない。川幅はそんな時には四五十間にも廣がつて居らうか。對岸には特殊部落があつて、雜な板橋が架つてゐるが、出水の憂ひがあると見ると、早速橋板をはづして岸に引揚げてしまふ。橋はそのほかにも二つも三つも架つてゐるが、やゝ堅固に出來た永久力のある橋までが危險に瀕することも屢々である。川の上流の方から材木や大きな木の株などが流れて來る。特殊部落の屈竟な男が黒い褌一つになつて長い竿の先に鳶口の附いた奴を以つて、流れて來るそれ等の材木を拾ひ取る。川の岸に立つて、上流の方から、白馬の飛ぶ如く浪を打つて流れる水に浮きつ沈みつしながら大きな木の根などが流されて來るのを、今度は何が來たであらうかと、

「大きな奴が來るぞ。」と、いひながら、その方を見てゐると、いろんな物が押し流されて來る。

しかし、雨が止んで空が晴れさうになると、水嵩は忽ち減ずる氣配を示してくる。流域といつたところで僅かに水源まで三四里にも足らぬくらゐの川であるから、水の増すのも早いし、退くのも早い。もし雨が尙ほ止まなければ水嵩は刻々膨れて來る。兩岸の藪や人家や藁塚や林を罩めて煙雨濛々と天地を鎖し、村は今にも水に押し流されはせぬかと氣づかはれる。

それは、自分が幼少の頃故郷にゐて五月雨の時分毎年必ず出會はした記憶である。今日になつても時々その時分のことを思ひ起し、一度五月雨の降り募る頃の洪水に出會はしたいと思ふが、偶々の歸郷ではさういふ場合に打突からない。

五月雨の詩趣は既に水である。水に臨んだ處にその詩趣は一層よく溢れる。桃隣の句に

　五月雨の色や淀川大和川

といふのがある。格別好い句とも思へぬが、水郷の五月雨の色が思はれる。山城と攝津との間にある澱八幡あたりも一つの水郷である。私はあのあたりを屢々京阪電車に乘つて通つたことがあつた。

京都の近郊には新緑を見るに好い處が多い。宇治、嵐峽、石山などさうである。新緑は晴に好いのみならず雨にも好い。其等の場處は五月晴に螢を眺めるに有名な處となつてゐるが、私は、平田渺々たる南山城の水郷に何となく五月雨の趣味を覺える。そこは木津川が平野の東南から流れて來て淀と八幡に來て宇治川に合流する。加茂川と桂川とが伏見の西方で落合つて、それが又淀に來て宇治川に注ぎ入る。是等の四つの河水が溢れ澱んで附近の低地を浸して出來てゐるのが巨椋の池である。あたり一圓少し長雨が降ると、田も川も一緒になつてひた〳〵と畦の草を浸してゐる。河の岸には青蘆が人の丈よりも長く伸びてゐる。淀には今でも淀君の舊城趾が殘つてゐて、高い石垣の上には老松が翠蓋を翳してゐるのが電車の窓からも見えてゐる。埋め殘された城の堀には水蓮や蓮が浮いてゐる。私はいつぞや、五月雨の濛々と降り罩めてゐる時そこを通りながら電車の窓から覗いて見て、何ともいへない哀愁を覺えたことがあつた。

八幡には、木津川が宇治川に落ち合ふ少し上流の處に長い板橋が架つてゐる。木津川は川底に沙の多い清い感じのす

る川である。私は、水の形では川を好む。そして、いかなる川をも好むが、木津川は最も好む河流の一つである。いつもそのあたりを電車で往來しながら、遠木津の長江に架した板橋を眺めて通り、いつか一度その板橋を渡つてみたいと思つてゐた。すると、丁度ある五月雨頃のことであつた。八幡にゐる知人を訪ねて夜になり、折から五月雨の晴れ間に月が上がつたので俄に興を催うし、かねて渡つてみたいと思つてゐた木津川の堤に出て板橋を向うに歩いて渡つた。今日では吉野川の吉野に渡る、所謂昔の柳の渡しにもコンクリートの橋が架り、京都の市中などはいふまでもなく、南畫趣味の月ケ瀬の梅溪などでさへコンクリートの洋風の橋が架つてゐる時代に、木津川の橋は依然として昔ながら板橋であるのは嬉しい。――事實は嬉しくないか知れぬが、少くとも風雅の立場からいふと、うれしい。私は知人とともに五月晴れの月を仰ぎ、白く月光に輝いてゐる長江を臨みながら、かつ／＼と板橋を踏んで往き返へりしてみた。霖雨には苦しめられるが、陰曆五月の頃はまだ七月八月ほど暑さも甚くなく、春とはいひながら四月の花の季節のやうに不意の寒さを覺えることもなく、雨の晴れ間に濃綠の木蔭を慕ひ、又は月の夜の屋外を逍遥するのは、なか／＼に身に快適を覺える。

五月雨の季節はいふまでもなく氣が重く、沈鬱である。しかしながらその憂鬱なところに又深刻な雅趣がある。

東京の近郊武藏野の野趣に富んだ處は、京都の近郊の新綠の美に劣らずなか／＼に五月雨の頃の綠樹の色が美しい、それは多摩川の沿岸にいつて見てもいゝし、荒川の方に出てもいゝ。又市川の傍を流れる江戸川にいつて鴻の臺の樹林を眺めるのもいゝが、さしあたり、そんな處までゆかないでも東京市の如き樹木の多い都會では都會の中にゐても相應に濃綠の美を樂むことに不自由を感じない。小石川の植物園以北、本郷の大學構內、上野の森、目白臺、雜司ケ谷、音羽の護國寺。牛込から戸塚あたり。四谷から赤坂離宮の森林。宮城の森、麻布から愛宕、芝山内の樹林。三田から高輪

の高臺など新綠の季節になると、大東京の殆ど大半は綠樹に埋もれてしまふ。そして、新綠は、すが〳〵しい五月の陽光に照り映えてゐるのも美しいには美しいが、その新綠の色がや〻老いて濃綠の色を增した頃になると、やがて梅雨がしと〳〵と降りつゞくやうになる。

ある五月雨あがりの午後、今にも又雨の降つて來さうな空模樣である。牛込の方から小石川の關口の大瀧の方に步いて來ると、目白臺から雜司ヶ谷の方の丘陵は濃い綠の葉がも〳〵と茂つて、其等の樹林の頂邊には薄墨を流した如き夕立雲が低く垂れ下がつて、早稻田の田圃には頻りに雨を呼ぶ蛙の聲が聞えてゐる。今にも降つて來さうなたゞならぬ空模樣を見せてゐるのに屢々出會つたことがあつた。さういふ空模樣と濃綠の森とのピクチユアレスクの配合は五月雨の季節になると至る處に見る景色である。不忍池畔から池の彼方に上野の森林を眺めた時、その頂邊にもの〳〵しい黑雲の附けてゐるのを見ることもあらう。小石川の久堅町あたりから植物園の森を眺めた時一幅の水墨の風景畫に接するであらう。赤坂の溜池あたりの住民は、離宮の森の上に低く垂れ下がつた物凄い黑雲を見るであらう。さういふ、空の色と森との配合を成せる時、森の色は、靑く晴れた日の太陽の光線を浴びてゐる時よりも一際鮮かにその薄墨色の空の表に浮き出して見えるものである。私は、そんな時の重苦しい、惱ましげなる水墨畫風の光景に興を感ずる。そして、そんな空模樣の時にはよく燕が嬉々として空を舞ひ飛んだものであるが、近頃東京にゐては殆ど燕の影さい認めなくなつた。子供の時田舍には燕が多かつたものであるが、田舍でもそれが少くなつたのではないかと思ふ。

その燕のことで思ひ出す。雲雀と燕とは早春から晩春、五月雨の頃までかけてその季節の表象のやうに思はれたものであつたが、先頃暫く田舍に往つてゐる間にも、雲雀は、まだ朝寢てゐる頃から晴雨にかゝはらず、高い空の中で歌つてゐるのを春眠を貪りながら、めづらしく聽いてゐた。しかし、その雲雀も田舍でさへひどく減じたやうに思つた。燕

は田舍で挿秧の頃そこら中を翔つてゐたものであるが、今はそれも少くなつたらう。嘗て、今からもう十年も前のことである。大和の法隆寺へ行く田圃道で燕が、俥に乘つてゆく道の先きを、地べたに腹を附けるやうに低く飛んでゆくのを見て、私は忽ち蕪村の句を思ひ浮べた。

大和路の宮も藁屋も乙鳥かな

といふのは眞によく穿つてゐる。その乙鳥の影すら東京近郊では殆ど認めない。大和路には今でも尙ほ蕪村の句のとほりであるか、どうだか。

去年の春、十幾年ぶりで久し振りに、長い間の宿屋生活を止めて有めの自宅を構へてから、少しばかりの庭の空地を樂しみ、いさゝかの樹木などを植えてよろこびたる折り、たま〳〵八百屋の店頭に生瓜の苗のあるを買ひ求め、生垣の際、日當りの好きところに植えたるに、その夕方より新開の田圃に雨を呼ぶ蛙の聲が聞えて、五月雨降りはじめて、苗はよく生き、それより雨の晴れ間〳〵の強く照らす日に二葉の苗は見る〳〵成長していつた。梅雨は人體には厭はしく惱ましいけれども、草木は梅雨の惠みに浴して生育する。梅雨の季節には果物の熟する物が多い。梅、枇杷、苺、櫻桃などは最も梅雨の季節を聯想せしめる。もやしでない、本物の生瓜の走りの出るのも此の頃である。苺はやゝ毒々しけれど櫻桃の味はしほらしい。

近年開けてゆく郊外にはその頃からもう蚊が出はじめて、家々五月雨の晴れ間に去年の蚊帳を取り出して日に曝してゐる。蚊帳は悒けれど、その用ゐはじめの頃が何となく梅雨の季節といふことを思ひ起さしめる。

梅雨の頃の衣服のことを思つて見るのも又一興である。近ごろは洋裝が次第に盛になつて來たので厭はしい霖雨を凌

ぐにも都合よくなつた。殊にセル、ネルなど外國の毛織物を和服に仕立て、外套又はレインコートなどを用ゐたりするので雨を避けるには不自由を感じないが、その下に着る和服は依然として雨に弱いものばかりである。しかし雨には弱いが、我が國固有の趣味からいふと、梅雨の頃の着物にも面白い物がある、五月雨といふは通例太陽暦で六月一と月くらゐに當つてゐる。六月は九月と同じく單衣を着る季節である。七月八月と異り薄暑を覺えるので、羅衣を用ゐるほどではない。それで普通の單衣を用ゐるのであるが、女ならばやつぱりお召の單衣柄が最も普通である。近ごろ屢々大島がすりの單衣を着てゐるのを見る。男子にもいろ／＼あるが男は結城つむぎか薩摩がすりなどが古めかしくて最も面白い。近年結城縮みといふ、馬鹿に高價な織物が出來て、男女ともにそれを着てゐるのを見る。しかし結城縮みよりは、やつぱり在來の結城の方が厭味がなくして遙かに好ましい。たゞ値段の高いばかりが洗練された趣味ともいへない。況んや此の結城縮みを冬物に仕立てゝ着てゐるのなどは野暮も亦た甚だしいといはざるを得ぬ。結城縮みも單衣には肌に付かなくしてよい。しかし、單衣にはやつぱり普通の結城か薩摩がすりなどが好い。その他高貴織高貴お召などの肌にべたつく物は單衣にして着心地が好くないばかりでなく、梅雨時に着るには地質が弱くていけない。之に反して結城紬のさら／＼として澁味のあること、薩摩がすりの男らしくて素樸なる雅趣あるなど最も好ましい。是等の品はひとり單衣にして着るに限らないが、本來太地の物であるから冬着に綿など入れて重ね着にするには重苦しいが、單衣にして六月九月の薄暑と梅雨秋霖を凌ぐには最も適當の品である。此の他セル、ネルの雨を凌ぐによく最も調法であること論なし。しかしながら結城紬、薩摩飛白の如き趣味に乏しきを如何せん。梅雨は厭はしいが其等の着物を着るによい季節であることを思ふと、梅雨必ずしも厭ふべきでない。

時論

法學博士 吉野作造

○再び兵卒保健問題に就て

三月號の本誌に於て、僕は某青年將校の通信に基き、兵卒保健問題を論じた。意外にも多大の反響があつて、其後いろ〳〵の方面からいろ〳〵の注意や意見やの寄送に接した。一々之に御答する遑のなく又悉く之等を世上に紹介することも出來ないのは、大に遺憾とする所である。今本誌上をかりて之等未見の知己に深厚なる謝意を表しておく。兼ねて又此重大なる國家的問題に今後とも懇切なる注意を拂はれんことを冀つておく。

僕の受取つた澤山の書信の中、こゝにどうしても此儘篋底に秘め置くことの出來ないのが一つある。それは軍醫某氏の寄せられたものだ。公益の一助だと思ひ、某氏の了解を得てこゝに差支なき一部を公表し、讀者諸君研究の一資料に供したいと思ふ。

○軍醫某氏は三月號の所説に對しては、若干誇張に失するといふ點を留保しつゝ、大體に於て同感の意を表して居らるゝ。先づ胸膜炎の蔓延といふことに付ては、二三ケ月間に數百名の患者を出したと云ふ隊のことは聞かないが、最近段々増加しつゝあるは隱し難い事實だとて、次の表を送つて呉れた。之に依ると大正七年からまた著しく増加して居るやうだ。猶ほ氏は附言して、最近に於ける同患者數は毎師團平均約二三百人位のものだらうと云つて居る。但し大正十一年は從來餘り注意して居なかつた「輕症胸膜炎」の發見に依て夥しき増加を示して居るが、原因が判然しないので目下頻りに調査中だとのことである。

胸膜炎及肺結核陸海軍比較表（人員每千比例）

		明治四十二年 陸軍	明治四十二年 海軍
胸膜炎	新患	一三・八八	一三・七六
	死亡	〇・一三	〇・三六
	除役	四・〇〇	三・六五
肺結核	新患	三・八三	六・九九
	死亡	〇・〇九	〇・四三
	除役	三・五一	六・二七
肺結核ノ胸膜炎ニ對スル比		三・六二	二・〇九

明治四十四年	陸軍	一二・八四	〇・〇八	三・七四	三・八五	〇・二一	三・四四	三・六〇
	海軍	一二・八五	〇・二六	二・四八	六・四七	〇・三七	六・一〇	一・九九
大正元年	同	一一・七八	〇・〇四	三・〇五	三・[illegible]八	〇・一〇	三・[illegible]	三・二九
	同	一九・〇[illegible]	〇・二七	三・七一	六・三八	〇・五七	五・四[illegible]	二・九八
大正二年	同	一一・八[illegible]	〇・〇五	三・三九	三・一[illegible]	〇・〇七	二・八八	三・三[illegible]
	同	一七・[illegible]	〇・一五	四・一三	七・二七	〇・五一	六・四二	二・五八
大正三年	同	一一・七七	〇・〇四	二・九七	三・〇三	〇・〇七	二・七七	三・八八
	同	一五・五三	〇・一七	二・一七	七・〇九	〇・三八	五・八六	二・一九
大正四年	同	一三・〇三	〇・〇[illegible]	三・四九	二・九五	〇・〇五	二・七[illegible]	四・四一
	同	一九・六六	〇・一〇	二・九二	六・二八	〇・四三	五・六四	三・二一
大正五年	同	一四・一七	〇・〇三	三・三〇	[illegible]・五四	〇・〇七	三・二七	四・〇〇
	同	一六・一〇	〇・〇七	三・〇八	五・八九	〇・四〇	四・七五	二・七四
大正六年	同	一五・〇九	〇・〇[illegible]	三・五一	三・九三	〇・〇八	三・六[illegible]	三・八四
	同	一六・四[illegible]	〇・一七	一・七〇	五・二三	〇・三四	四・七一	三・一五
大正七年	同	二[illegible]・[illegible]四	〇・一〇	六・七〇	五・三七	〇・一六	五・〇九	四・一〇
	同	二五・七〇	〇・三〇	四・四四	六・三四	〇・七九	四・八四	四・〇五
大正八年	同	二三・〇三	〇・一〇	七・六三	四・九〇	〇・一六	四・五一	四・七[illegible]
	同	二五・〇〇	〇・三[illegible]	四・二七	七・[illegible]	〇・七三	六・六六	三・二〇
大正九年	同	二七・[illegible]	〇・〇[illegible]	九・五八	五・三九	〇・一二	四・九[illegible]	五・二[illegible]
	同	一八・八〇	〇・二九	三・三四	六・七[illegible]	〇・八三	五・七四	二・七九
大正十年	同	二四・四六	〇・〇四	一〇・三[illegible]	五・一三	〇・一〇	四・八[illegible]	四・七七
	同	一八・七九	〇・三一	三・四八	六・〇六	〇・六五	五・七四	三・一〇
平均	同	一六・八五	〇・〇六	五・一四	四・〇五	〇・一〇	三・七四	四・〇六
	同	一八・二四	〇・二[illegible]	三・三〇	六・五一	〇・五四	五・六八	二・八一

胸膜炎の原因に付ては、今はつきり分つて居ない。我國では特別の調査會を設けて該病の原因、療法並に豫防法等を研究して居るが、未だ光明を認めないといふ。尤も之は我國特發のものでなく、外國の軍隊にも多いのだが、彼に在ても今猶研究中だとの事である。但結核と密接なる關係あるは疑なく、又近年社會一般に結核患者の多くなつた自然の影響として、本患者の多發するも已むを得ない。が併し軍隊に於て特に本病の續發に惱むのは、別に軍隊特有の誘發原因がなくてはならぬと思はるゝ。此點が軍隊としては最も精密に研究せねばならぬ所であり又最も正直に打ち明けねばならぬ所であらう。

某氏は曰ふ。胸膜炎の病理學的原因は不明だが之を誘發する外部的原因に至ては多少見當がつかぬでもないと。其第一は役務の過激と云ふことだ。是れ衛生部員一般の公認する所ださうな。いろ〳〵な關係上、此點に關する衛生部員の主張のなかなか容れられないのは、非常に殘念だと云つて居らるゝ。

過激なる役務中是非とも禁じて貰はなければ困るのは「剛稽古」と「過度の行軍」との二つだ。就中「剛稽古」は別に隊長の命令あるに非ず、各中隊下級幹部の企であつて、そして飛んでもない無理をやつて居るは事實だ。之等下級幹部の中には、吾々の常識から判斷して呆れた程馬鹿な無茶をやつて居る者は少らずある。彼等を指導し監視するに極度の注意を拂はなければ、兵卒の保健は到底滿足に立てられぬとさへ思はるゝ。「過度の行軍」に付ても同様の趣旨から繰り返さるべきは云ふまでもない。

次に氏は內務生活の狀況をあげ、之も衛生上遺憾な點は頗る多いと云つて居る。就中食堂、食器洗滌所の設備、營內人員の減少などは焦眉の急務だ。之等の點に付て氏等は幾度上司に意見を具陳したか分らないさうだ。が、何時も經費の都合を理由に容れられぬ。兵卒保健問題の解決に對しては、どうしても上司當局者の頭の改造が先決の急務である樣に思ふ。

斯く說いて某氏は、さりとて軍隊生活は徹頭徹尾非衛生的だといふのは當らないと述べて居る。食物も良い、生活が規則的だ、夫れに運動もする。だから入營後新兵の體量が著しく增すといふ現象も珍らしくはない。但し勞働の度合に比して食物が適當かどうかは自ら別問題だ。餘りに粗食に習慣づけられた下級農民に取つて軍隊の方が遙に食べものがいゝことは疑ない。

○

軍隊に於ける患者の取扱振りに付ても細い意見を述べられて居る。取扱が慘酷だといふ說には抗議して居るが、改良すべき點は遠慮なく述べられて居る。第一は病氣の種類を三等に分ち一等症には全額の俸給を與ふるも、二等症は半分、三等症は三分一に減ずるの不當なることである。第二は花柳病を三等症として特殊の待遇を與ふることである。第三は中隊の下級幹部が成績競爭の結果强て多數患者を出さゞらんと苦慮し、爲めに兵卒をして受診の機を遲れしむることなどである。之等を外にしては軍隊の患者取扱は可なり便宜に出來てると思ふと云つて居る。

看護卒の問題になると、中には不心得なものもあるが、概していへば能く働くといつていゝ。看護婦のやうに手の屆き兼ぬるといふ嫌あるは致し方ないが、今の軍隊では、あれ以上を看護卒に期待することは出來ないやうだ。軍隊外に於ける青年の修養なり訓練なりがもつと出來て居れば此上もないが、今の兵卒の程度では先づあんな者かと思ふとの事である。看護卒に代ふるに看護婦を以てするの試みは目下研究中であるさうな。軍醫の手不足といふこともあるが、之はその物質上精神上の待遇問題と關連する事柄だと思ふ。

○

概して之をいふに、軍隊衛生の現況には改良すべき點が頗る多い樣だ。其中譯もなくやれさうで事實中々困難なのは、下級幹部たる古參兵の無暴なる新兵酷使である。設備上の改善に至ては、經費の都合上容易に運び難いものゝあるは我々も認むるが、中には上司當局の考一つで目前に改め得るものもある。之にも拘らず改善の決行を見能はざるもの少らざるは、我々の甚だ遺憾とする所である。

以上が某氏の意見の大要だ。僕は茲に某氏の好意を謝しつゝ又當局と讀者とに向つて更に此上の進んだ調査考究を積まれんことを希望するものである。


パイロット
高級萬年筆
常に
信用の圏内に
ありて
努力す！
株式會社 並木製作所
東京日本橋

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ
煙草も一度「カロット」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸えぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

昨年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御注文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御説明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確心を申上げました、共うして先づ一社員の煙草好な方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですね」、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立ちになつて「カロット」を取り上げてお試しになりました。

「やあこれでは煙草は吸へませんね」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇をして歸りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

弊堂は日比谷交叉點から銀座に向つて行けば右側八軒目です、何らか一度誰方も御來店の上御試しの上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし、最後に弊堂は確信を以て次の事を斷言します、其れは「萬一御來店御試吸の上煙草が直ぐに廢められない方は其儘「カロット」を壁に投げつけてお歸り下さいまし……」

特徴

外見少も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に温雅なる香氣と忘れ難き淸涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を必ず忘れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

カロット金貳圓 日、英、米專賣特許出願中

同 **パイプ** 水牛銀模樣付 五拾錢
同 新流行ベークライト製 七拾錢
同 象牙製サック入 壹圓五拾錢

パイプは三種の内希望の品御用命願升

送料 内地十八錢 台、朝、樺四十五錢
引替送料 内地卅五錢 台、朝、樺五十五錢

御注文は振替利用を便とすれども御都合によりては郵便にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

東京市日比谷有樂町一丁目貳番地
榮川堂
振替東京五二九壹壹
電話丸の内一九一七

al Encyclopedia

royal 8vo. Volumes

新

提

供

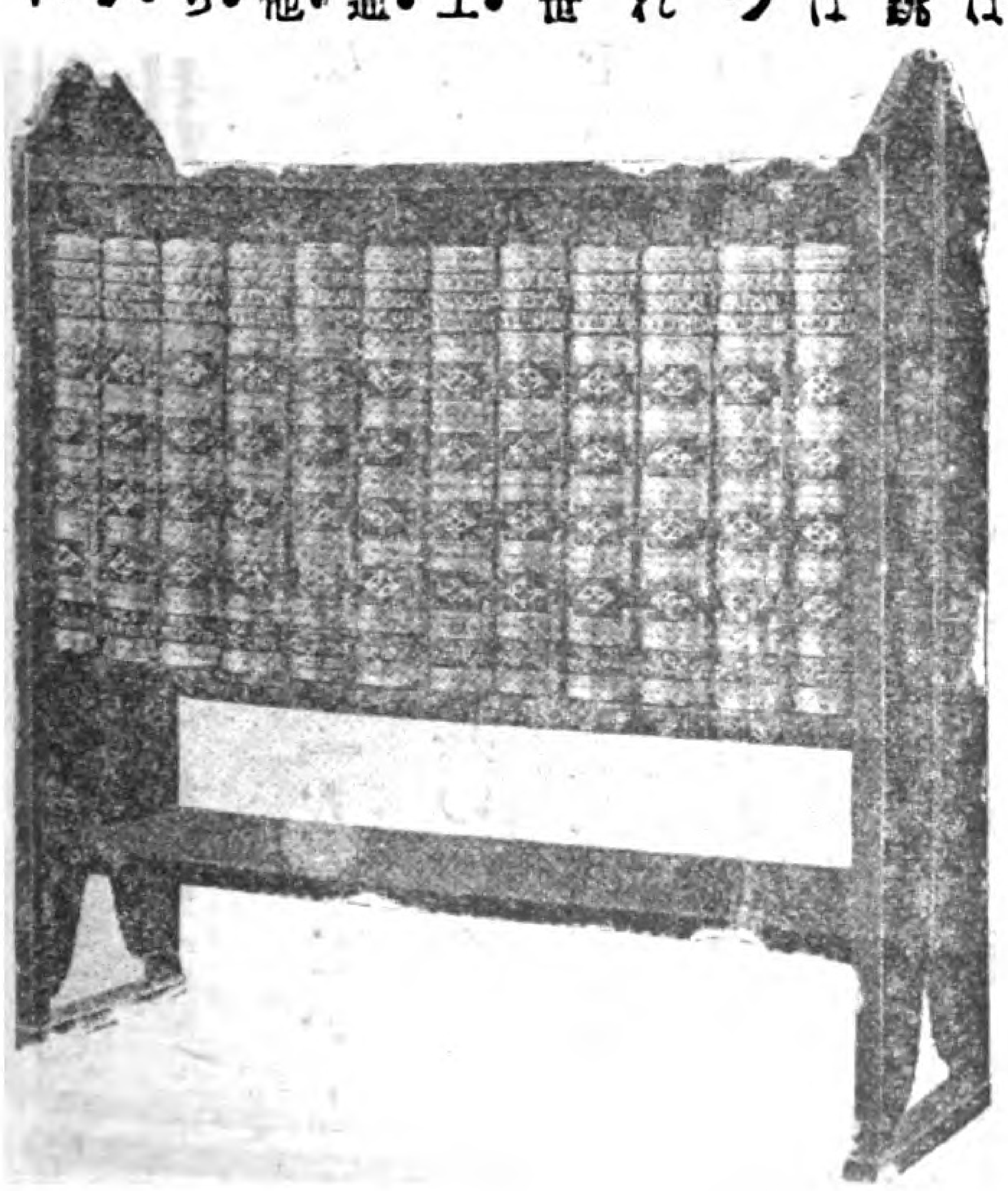
ハームスウォース萬有百科全書

一九二三年版

特價及び
月賦支拂

全部が新鮮で且獨創的なる最新百科全書 （全十二冊）

新しい世界は生れた。古い知識を以て瞻める四圍の環境は皆不可解である。大戰の爲め少くも半世紀以上を一足飛びに跳り越えた世界の現勢や文化の新傾向が產み出した新らしい謎は古い知識の百科全書では解けなくなつた。**ハームスウオース萬有百科全書**は大戰後根柢から改造された英米佛獨唯一の最新百科全書として世界の讀書家の興味の中心となる。●大戰後の世界の變局や政治上●社會上思想上の各方面の新らしい問題や新らしい運動や、交通●輸送上の新らしい開展や工業機械の新らしい進步や、物理其他●科學の新らしい發明や、各種の新らしい、言葉や各方面の新ら●しい人名や地名や皆大抵洩れなく包括せらる、AからZまでが●皆新らしく、一行一カットでも前著を踏襲したセコンドハンド



Harmsworth's Univers

12 Sumptuous

のものは無く、全部に溯つて新らしい氣分を盛らしてなる、凡そ是等の特色は一々擧ぐるに遑ないが、就中最も顯著なるは着彩其他一〇一面の圖版と一二三五〇〇の本文挿畫にて、此の如き挿畫の豐富は從來百科全書中匹敵するものは無い、且是等無數の挿畫は悉最新の資料から選擇されたので、挿畫を見るだけにて能解し得る最新の科學的興味と文化的清新味とは量り難きものがある。知識を漁るは文化人の獨特の興味で、此の如き最新百科全書を備ふるは即ち文化生活を完全にする要件である。

特價月賦提供

弊社は此の新らしき百科全書を各人各家庭に普及するが日本の文化の向上を裨益するを信じ、倫敦出版會社と謀りて特に或る期間或る部數を限りて算籌外の一時拂特價及び何人も負擔を感じない少額月賦法を設けて提供する。但し倫敦出版會社の出版力は世界各地からの競爭的大註文に殆んど應じ兼ねる狀勢なれば豫定の部數如何に拘らず何時提供を撤去するやも計られず。且此の如き最新百科全書は一日も速かに座右に備へるが御利益なれば此際諸君は迅速御申込あらん事を切望する。

▼總八、〇〇〇頁
▼八、〇〇〇、〇〇〇言
▼項目五〇、〇〇〇章
▼着色其他の圖版一〇一面
▼挿畫二三、五〇〇圖
▼寄稿四五三人
▼毎巻口畫グラビユア版
▼第一冊巻頭六名士論文

内容說明書及申込書
御照會次第送呈

申込金
金十圓

東京市日本橋區通三丁目
丸善株式會社
東京神田・東京三田・東京丸ビル・大阪
京都・名古屋・横濱・福岡・仙臺・札幌



人間の意企

藤村千代

（一）

私は至極吝嗇であつた。吝嗇と言ふ言葉は可厭だけれども、世帯持ちの好い奥さんだと言はれる分には不服がない處か、寧ろ好い氣持ちがした。萬事の遣り口が、一應この吝嗇と言ふ網の目を潜り抜けて來るように思へるのは、不思議な事ではないのであつた。

で、私は今度の新居を如何言ふ工合にしまつに遣つて行かうかと言ふ考へで一杯になり乍ら、先に立つて這入つて行つた。仔細に、先づ間取りの巧拙を調べ、押入を一つ一つ開けて見たり、窓の取り方や流しの工合まで見たりした。

ふと、或考へが浮んだので私は振り返つて良人を見た。

「ねえ、馬鹿に廣いじやあないの、早速誰かに間貸しをするんだわね。」

直ぐに私はどの座敷が適當だらうかと見廻したり、それから、どんな人達に貸した

もんだらうと考へたりして居た。子供のない、大して金に困らない、さうかと言つて此方が頭を抑へられない位の、などゝ言ふ事まで素ばしこく頭に浮べて居た。

が、良人は妻の申し出に對して贊成出來ない時に決つてする、あの氣のない呆けた顔をして、沈默つて居た。そこで私は又、つ突くようにして、

「餘り廣過ぎて勿體ないじやありませんか。此處の茶の間と臺所さへあれば澤山。」

と、ぷつんとおしまひを斷つて了つたような口の利き方をした。その時、良人は又か、と言つた風な顔附きで私の方をちらと見た。それで彼が、お前は餘りしまつをし過ぎるよ。と言つて居るのを私は感じた。

然し、良人が何とも答へないで唯顔だけでそんな振りをするのは、好い氣持ちがしなかつた。「貸すのは止めた方が好いじやあないか。」とでもさつぱり言つて呉れた方がどんなに好いか知れない。と私は、彼のこの顔を見るたびに腑のあたりがむづ／＼するような、あのいら／＼しさに囚はれたのであつた。

何か、小つ酷い事を言つて遣り度いと言ふ衝動を抑へる事が出來ないで、私は未だ疊の敷いてない床板の上を矢鱈に歩き廻つた。その騒々しい下駄の音の中で、癇癪玉の發作が靜まつて行くのに耳をすまして居やうとしたり、窓際の方に寄つて行つて、たてつけの悪い硝子戸を態ざとがた／＼開けたり締めたりした。

私は、良人にあてこすりを言ふ代りにそれで自分の氣を靜めようと思つたのであつたが、この修養は私には大變辛かつた。

私は腹の中に一杯彼の悪口を詰め込んで、ひそかに笑つて遣りたい、と思つた。そして、私はそれを初めた。私達の結婚の翌日から彼が私に與へた苦勞の數々を、一どきに思ひ浮べたのであつた。——

彼は、給仕からやつと見習ひになつた許りで、月給と言ふのも極りの惡いような、よくそれで二人の人間が死ななかつたもんだ。と不思議に思はれる位の金を取つて居たのであつたから、私はしよつちゆう怠けたがる彼を拜むようにして、日曜日の日直を貰ひに行かせたり、若い者同志が一緒に寢たいのも我慢して、一ケ月の半分は宿直を貰ひに遣つたりした。それでも足りなかつた。私は彼の留守中を、金になると言ふ仕事なら何でも遣つた。私は今それを言ひたくない。思ひ出すのも可厭だ。——私はその中で少し宛貯金した。餘つたから貯金したのではなくて、引つ裂いて持つて行つたのだ。さう遣つてやつと今のようになつた。私は三十二になつて初めて自分が年を老つたのに氣が附いた。そして吃驚した。全く、私は呉服屋の前を眼を瞑つて通つて來たのだもの。

それに彼は如何であつたか。私が見て居なければ鏡臺の前で水白粉位つけ兼ねない程であつた。洋服の地が薄くなるのを頻りに氣にして、一日に三邊位私にその事を言つては零した。私が喧しく言はなければネクタイを一ケ月に三十本も買ひたがつた。全で、洋服の地が薄くなつたのをネクタイで胡麻化さうとでもするやうに。

だから、彼は私が內職をして居ると言ふ事を非常に恥しがつて居た。

私が若し、軍手を編んで居た手を止めて、白い糸屑を冠つた儘の姿で彼の會社の受付へ「うちの人に逢ひに來ましたが……」とでも言はうものなら、彼は私に逢ひに出る代りに、厠へでも逃げて了つたかも知れない。彼は彼の同僚に、自分の女房は零落した殿樣の落し胤か何ぞ位に話して居るのだらうから。

斯う言つた風の彼なのだから、今度この家へ移つて來るにしても人に座敷貸しをしたりなんぞするのを、恥しがつて居るのだ。家が廣ければ廣いだけ、その廣い中に納つて居たいんだらう。ほんとうに、彼の見榮坊は私達の社會的の地位が進むに隨つて酷くなるのだ。否や、見榮坊の方がもつとお先つ走りに進んで行くのだ。兎も角も、こんな立派な家

に住まはれると言ふ事だけで、どんなに晴れがましいそれだからどんなに有難がらなければならない事なのかも知れないのではないか。それだのに、彼の見榮坊はもつともつと先きをつつ走りたがるのだ。――

　私はこれだけの事をほんの一瞬きの間に、頭に浮かべた。ほんとうは、これだけの事を皆彼に言つて遣りたかつたのだけれども、やつと我慢したのであつた。

　それだけに、私の思つて居る事が皆眼の中へ集つて、非常に險しくなつて來たのを私は感じた。私は、自分のこの眼を自分で見るような氣がした。

　實際、私はつい近頃になつて屢々この眼を見た。私は自分が年老つたのに吃驚した瞬間から、全で、十六七の娘がするのと同じような熱心さで自分の顏を鏡に映した。(私は若い頃から人に綺麗な女だと褒められつけて居た。だからそんなにしよつちゆう鏡を見ないでも好い氣になつて居られる變な安心と言ふ風なものを持つて居たのだか……）私はその鏡の中で艶のないたるんだ皮膚や汚點の浮いた額を見る前に、先づこの劍相な眼を見た。それは、大きく見張つて居るだけに凄い性惡な光りを放つて居た。私は、自分乍らこの眼を優しい眼付きだとは承認する事が出來なかつた。

　それからは、頻りにこの光つた眼の事を氣にした。如何かすると、家内の消費經濟を如何に巧妙に遣るべきかと言ふ私の頭の中一杯の考へが影を潛めて、その代りに、この眼の事で埋まつて了ふ事すらあつた。それ程、私は自分の眼に神經過敏になつて、始終、優しい眼付きを凝らすように工夫して居たのだけれども、時々、この心掛を忘れて了つて、眼瞼が吊り上つた瞬間にやつと氣の附く事があつた。

　私は今もそれを感じたので、良人に氣付かれないように左の手でそつと、眼瞼を撫でるようにした。そして落付いた優しい聲で又言つた。

「ねえ、貴方はさうはお思ひにならない？二人限りで住んで居るのは物騒だとはお思ひにならない？貴方がお出掛けになつたあとだと、私はお風呂へも行けない事よ。お隣りも遠いんだし不用心で仕方がないわ。」

「さうだな、」

彼は不決斷な調子で初めて口を切つた。その不決斷の中で、同僚や知人から聽かれない前に如何して座敷を貸さなければならなかつたかと言ふ事を、悟らせなければなるまい、と考へて居るやうであつた。軈て、唯つた二人限りでは不用心だと言ふ口實を、好い思ひ付きだと思つたかして、彼は妻の考へに同意した。同意し乍らも、まさか俺がけちな心で座敷を貸したのだなぞとは誰も思ふまい、と我れと我が心に呟いて居るのが、彼の浮かない顔に出て居たけれども、私は見ない振りをして居た。

二三日して、私達はやつとこの新居の方へ落付いた。さんざ方々の二階住ひを持ち步いた古馴染の世帶道具ではあつたけれども、茶の間一杯に列べたてて見ると、ほのかに殘る昔の匂から全で違つた新らしい氣分が湧いて來るやうであつた。私は何者にとも知れず感謝したいような心に滿たされ乍ら、丹念にそこら中を拭き淸めて居た。

それはよく晴れた日曜日であつた。表を、乳母車を押してゆつくり步いて居る夫婦連れや、鴛鴦のように見せつけがましく列んで行く若夫婦やが、時々、この家をちらと見ては通つた。

一片附け濟んだ處で、私は未だ新聞切れにくるんだ儘の湯呑みを二つ取り出して、茶を淹れようとしたが、ふとこの時、「早くした方が……」と思ひ附いたのであつた。

私はごたごたの中から硯と紙とを探し初めた。良人は洋袴の折目が（彼はそれを毎晩寝押しにして居た。）崩れるのを氣にして、二本の足を全で義足ででもあるやうに疊の上へ投げ出して居たが、その時、急に盤座になつて言つた。

「今直ぐ、貼るんかい？」

「表の板圍ひの處と曲り角の電信柱とへ遣つとけば好いでせう。」

可厭は言はせぬ、と言ふ調子で私は言つた。

「何だか變だな、」

「彼はさう言つて、子供が用足しに行くのを可厭がる時のやうな顔をした。私は、良人のこの顔に對する一種の示威運動の積りで、態ざとげし／＼音をさせて墨を磨り初めた。そして、かたつと墨を置いた。この空氣の中で彼が澁々作り上げた二枚の貼紙には、少し遠く離れると讀めないだらうと思はれる位の小さい字が書いてあつた。私はそれが氣になつたけれども、沈默つてその儘貼つて置いた。

それから、私達二人は長火鉢を挾んで勝手な事を考へて居た。子供を背負つた内儀さんや夕飯のお菜の事だけ考へて歩いて居る腰辨などが、貼紙の前に立つて居る有様を想像すると、何となしに愉快になつた。今にも誰かが格子を開けて、「お宅でせうか、貸間をなさると言ふのは、」と言ひ乍ら這入つて來るだらう。と窃かにそれを待つて居た。

私達は今まで、方々の座敷を貸り歩いて居た。何處でも、鍋を提げたり菜つ葉を抱へたりして、勾配の急な階段を上つたり降りたりした。爐の前には長い煙管をいぢくり乍ら癇性の内儀さんが頑張つて居て、彼女の後をすれ／＼に通る時には、「濟みません、」と言はなければならなかつた。夜は夜で、メートルの電燈に氣兼ねをしいしい後片附けをしなければならなかつた。狹い勝手の板敷には、口喧しい、それで面皰の一杯吹き出た娘が大きなお神輿を据えて居たから、私

は捻ぜた肩を尚更窄めて大根を刻み乍ら、「如何もお邪魔様。」と言はねばならなかつた。

然し、私はこれらの事を少しでも忌々しいなぞと思つては居なかつた。彼等は金持で家を持つて居て、私達が貸りなくても誰でもそれを貸りたがつて居たし、又私達は家がない程貧乏で、是非とも彼等の座敷を貸して貰はなければならなかつたのだから、それ位の氣兼ねをするのは當り前だと思つて居た。(誰でも、その家を盗んだのではない。)

そして、今は私達が家を持つて居て、明日からは私がそのお内儀や太つちよ娘の役をする筈であつた。

私は今大變愉快な氣持で、誰かの來るのを待つて居た。それがから、女郎蜘蛛が糸を張つて小さい虫のひつ掛つて來るのを待つて居るような氣持であつた。

軈て、觀音開きの扉の開く音がしたので、私は狼狽てて出て見た。電燈は茶の間だけにしか點してなかつたので、玄關は薄暗かつたが、その薄暗い何にも見えない中で私は小さい子供がむづかる聲を聽いた。(まあ、瘤附きだよ。)私は驚いて自分の心に呟いた。

その時、女の聲が全で私の心中を見破りでもしたように、

「子供が一人居りますけど……」

私は可厭な顏をした。幸、其處は暗かつた。若し少しでも明るかつた、私はそんな顏をしなかつたであらうか。(私は私がもつと貧乏であつた時に同じような顏を方々でされたのを憶へて居た。私は今一寸その眞似をして見ただけであつた。或時、私は電車に乘つてそんな顏を見た。綺麗な着物を着たお嬢さんが、薄穢いクションに腰を下す前に左右を見廻して一寸顏を顰めた。その隣りへ水つ洟を垂らした日傭人足が腰を掛けたのだが、彼は腹掛の中の錢を勘定して居たかしてお嬢さんの長い袖の端を敷いた事を知らなかつた。美しいお嬢さんは前よりももつと眉を寄せて、小つ酷く袖を

引いた。私はそれを遠くから見て居たのだけれども、お孃さんと一緒になつて人足の粗忽をどんなに咎めて遣りたいと思つたか知れなかつた。私は無意識でお孃さんとそつくりな顏をして居た。

今でも私は、その時のお孃さんの顰め顏を大變上品だつたと思つて居る。私は、私がそんな顏をするやうな身分になりたいと窃かに待つて居たのだ。）

そこで私は、即座に出鱈目な口實を案出して、殘念だがお貸しする事は出來ない。ときつぱり斷つて了つたのであつた。女は沈默つて出て行つたが、扉をぎいつと締める時に暗い中で彼女の眼がぎろつと光つたやうであつた。

私は、何だか非常に薄情な事をしたあとのやうに、一寸氣が咎めたが、大急ぎで私の頭の中からその女の眼を逐つ拂つて、そつと自分の心に言ひ聽かせた。

「金を溜めやうと言ふのに、こんな弱氣は禁物だ。」

そして、良人の方へ向き直り乍ら態ざと腹立たしげに、

「そりやあ穢らしい女！あんな女、何處かの物置で我慢すると好いんだわ。」

と言つて、嘘のやうな笑聲を立てた。私は急に自分が見識の高い身分の好い婦人になつたやうな氣がした。それは一寸せい〳〵した好い氣持であつた。

それから暫く、私は新聞紙や反古紙の間に瀨戸物やバケツなどがごちや〳〵散らかつて居る茶の間の中を、さも忙しそうに彼方へ行つたり此方へ行つたりして片附けて居たが、心の中では始つ終、好い借り手が來ないものかとそれ許り氣にして居た。未だ樣子が解らなかつたから、隣りの家の扉の開く音を聽き間違へてもう少しで馳け出さうとして半分浮き腰になつたり、風でカタツと音でもすると、口髭の生へた相當な紳士が「御免。」と言つて今にも這入つて來そうな

氣がしたりした。

良人は、私から命令けられたように、皺くちやになつた新聞紙を押しては疊んで居る風に見えて居乍ら、それで、講談や新小說の切れつ端を探しては讀んで居るので手の方は全でお留守になつて居たけれども、私は何とも言はなかつた。あの見榮坊が一軒構へ早々に間貸しをしても好いと言ふ氣になつて吳れたのは、何よりだと思はなければならなかつたから。

(二)

宵の口にあの薄穢い女が借りに來たつきり、誰も來なかつた。せか〳〵した私とは全でうらはらの呑氣な良人は、氣永に待つてなくつちや駄目だよ、と言ひ乍ら自分で蒲團を引き摺り出して、その上にごろつと寢て了つた。

私はだん〳〵いらいらして來た。

先刻釘に引つ掛けた許りのボンボン時計がカチッカチッと態さとのような高い音を立てて時を刻んで居るのが、その時の私の耳には全く變な具合に響いて來た。カチッカチッと言ふその一刻み毎に金がくうに消えて居るのだぞ、と言ふ事をはつきり思ひ込ませないでは置かないやうな、變な音に聽へて來た。この感じは私のようなほんとうに苦しんで金を溜めたいと思ひ、又ほんとうに金の有難さを知つて居る者にでなければ解らないものだらうけれども、私はそれ以上じつとしてこのチクタクを聽いては居られなかつた。全く、一ケ月幾らに貸すにしても、一秒が積つて一ケ月になるのだ。廣い座敷を只明けて置いて、このチクタクが平氣で聽いて居られる風のものではなかつた。

私は、もうぐつすりと寢込んで了つた良人の顏を見て泣きたくなつた。人は皆、彼の事を呑氣で德な性分だと言ふけれども私は一度だつてさう思つた事はない。その時も、何て情けない男だらう、としんから嘆かはしい氣がした。彼の

髭のない變にすべつとした長い顎が、不斷よりも五分位間伸びがして見えるやうな氣がした。

私は兩手に一杯このむしやくしやした自分の氣持を籠めて、彼を揺す振り起して遣りたいと言ふ思ひに驅られた。

その時突然、表の扉が、紛れもない家の扉が開いて大野と言ふあの男が初めて私達の前へその姿を現したのであつた。

私が誰か座敷を貸りに來たのだと言ふ喜びに驅られて驅け出して行くと、明るい茶の間から暗い玄關の方へ向つて居たために、暗い中を見据える事の出來ない私の眼に、彼の鋭い眼が二つぎろつと光つて居るのだけが、丁度眞暗い屋根裏で燐が燃えて居るやうな不思議な光りを放つて居るあの猫の眼にぶつかつたような不氣味さで映つたのだ。彼はその時叩土の上につつ立つた儘、上半身を曲げてその鋭い眼光の屆く限り初めて來た私達の家の中を覗はうとでもするような身構へをして居た。

實際、驅け出して來た出會ひがしらにこの鋭い二つの眼光にぶつかつた感じは、今でも忘れる事が出來ない。私は、彼を間借りの相談に來た男だらうなぞと考へたのは、何と言ふ思ひ違ひだつたらうと、とつさの間にも考へない譯に行かなかつた。

然し、彼が矢つ張り只の通り掛りの男で間を借るために遣つて來たのだと言ふ事が解つた時、私は安心したと同時に變な氣抜けがした。唯つた今、監獄の高い煉瓦塀を乘り起えて來た許りだと言つた方がもつと當り前に聽へたかも知れないと思はれる程、彼は異様な印象を與へる面構へをして居た。だん／＼暗い處に慣れた私の眼は、彼の頬にはすつかひに一寸五分許りの傷があるのをまで見てとつた。

私は、つい先刻まで時計の刻みで命が縮まるような思ひをして居たとは言へ、こんな男にだけは貸したくないと思はすには居られなかつた。

で、私はてんで初めつから貸す積りもなくて、單なる好奇心からこの男の相手になつて居たのだつたけれども、だん〱と話しを聽いて居る中に、初めの氣持がもや〱となつて了ひそうであつた。

――自分はつい近頃女房を持つた許りの、二階借りをし乍ら勤めに出て居る者だが、（彼は何處へ勤めて居るのだともはつきり言ひはしなかつた。）今居る處が如何も思はしくないのでと言ふのは、その家の親方が秋口にかかつてめつきり減つて來たみいりの償ひに、座敷と言ふ座敷は皆人に貸し初めたので、（それでたつぷり家賃の二倍は上るだらう。）丁度仕事のなくなり出した井戸替へ、どぶ浚へなどの人足や喰ひはぐれそうになつた土工などが、如何はしい女達を一緒に引摺り込んで朝から晩までとん痴氣騷ぎをやつて居るんだから、とても〱まともな人間の一緒に居られる處ぢやあない。自分達も一日も早く出たいと思ふので――

とそう言ふのであつた。

私は不思議な氣がした。こんな男が自分で自分をまともな人間の方側へ仲間入りさせて居ると言ふのは、如何にも解せない事であつた。今更で、仰向けになつて寢込んで居るあの良人でもが言ひさうな何の變哲もない言葉が、彼の剤付きから來る異樣な印象を裏切つて、妙な好奇心を起させるのであつた。

私は、非常な興味をもつて彼の身態を觀察し初めた。下は何か解らない。只、赤ゴムの靴を穿いて居るところから洋服だらうと思はれるだけで、上にはすつぽりと釣鐘マントを冠つて居るのだが、そのマントがこの男の經濟狀態を語つて居るものだとすれば、それは如何にも情けないものであつた。

私は始終、斯うした觀察眼の中を自分で潛り拔けて來たから、人の態り振りを見てそれで凡てを判斷すると言ふ事に掛けては、非常な天才だと思つて居た。又、大抵狂はぬ眼利きをして居た。

私は今も唯つた一眼で、この男が月給四十五圓の、これから先とても一年に一圓宛つ昇級するのが精一杯の樂しみで、營々と働いて居ると言ふ風な律氣な勤め人だらう、と見て取つた。

それ程に、そのマントはお粗末でおまけに古ぼけて居て、もう一つ情けない事には蒟蒻の目のような白つぽいだゝだら模樣になつて居るのが、よつぽど時代から脫け出した感じを與へて居た。でもそれは、微かな雷燈の光でぼやつと包まれて居たから、只、穩かな律氣さを示すだけに止まつて、私には至極好い感じを抱かせたものであつた。(このマントの印象は私を欺いたであらうか。私はこれからの長いお饒舌で、それを話す積りで居る。)

到頭、私は初めの決心にも拘らず、上つて座敷を御覽なさい、と言つて了つた。

彼は兩手で靴を摑んで足を一本宛つ拔き出すようにして疊の上へ上つて來たが、その時もマントを脫がうとはしなかつた。彼の立つたあとに、玄關の揚げ板の上に殘された彼の鳥打帽をちらと見て、私は如何した譯か、その鳥打帽がこの男の貧相な顏のてつぺんへのつかつた有樣を、一寸想像したのであつた。そうした時、今時、好い年輩になつて居乍らソフトも冠らないで下つぱの電信技師のような格好をして居る勤め人を、私は一寸小馬鹿にしないでは居られなかつた。

こんな一種の優越感に、私は長いこと飢えて居たのだ。私は、この男が急に氣の毒になつて來た。それで片つ方では愛想の好い小間物屋のお內儀が女房の都腰卷を買ひに來た男をもてなす時のような、媚を交ぜた商賣氣を出し乍ら、(私は金が好きであつたから、又非常に商賣を遣つて見たいと言ふ年來の考へをもつて居た。)商品を見せるような積りになつて、大野を案內したのであつた。

私は先づ、その八疊の間が朝は東から午後は西から終日たつぷりと日が差し込んで、疊が焦げて仕方がない位だと言ふ事だの、出窓と椽側の障子とを開ければどんな夏の盛りにでも、全で草つ原の中に寢ころんででも居るような爽やか

な風の吹き通しの中に居る事が出來る事だのを吹聽して、こんなに上等な木口は、電燈で見るよりもぱつと明るい日光の中で見る方が錆があつて好いのだなぞと、（私はこんな事に掛けては尙更お饒舌になるのだ。）言ふ事まで立て續けに饒舌つた。

そして最後に、押入がたつぷりと深くとつてある事を彼に示すような振りをして、唐紙を開けて見せたまでは宜かつたが、そのあとをさも締め忘れたと言ふ風に開けつ放しにして置いた。と言ふのも、如何かしたはずみには良人に輪をかけた程の見榮坊になる私が、その押入の中に拵へた許りで使ひ惜しみの更紗の蒲團がそつくり積んであるのを、彼に見せたい許りに遣つた事であつたけれども、彼は肝心の方には眼も呉れないで、次の間の柱時計の下に飾つてある茶簞笥を穴のあく程見詰めて居るのではないか。

私は、はつと兩方の手を叩きたいような氣がした。押入の中の蒲團よりも、この茶簞笥をどんなに見て貰ひたかつたか知れないのだ。若し火でも出た時には一等先きに抱へ出して貰ふように、不斷から良人にも賴んであるものはこの茶簞笥をおいて外にはないのだ。私は、ついうつかりして居たのだ。全くこの茶簞笥は、まだ雜然と散らかつた儘の紙屑の中に置いてあつたとは言へ、茶の間の一角にあつて家中を睥睨して居た。

私は自慢の念で一杯になつた。突然、何か言つて見たくなつたので、

「あの……」

と、その男に呼びかけた。

すると、彼は如何した譯か酷くどぎまぎして、

「へえ、」

と恐縮したやうな返事をして、ぴよこつと一つ頭を下げたのだが、私の方へ向いてではなくもとの姿勢の儘だつたので、此方からは、全で、茶箪笥へお辭儀をしたとより外見えなかつたのだ。

それが又、私にとつて、自分自身が慇懃な辭儀をされたよりも餘つ程嬉しかつたので、すつかり有頂天になつて、八疊を貸す事に決めて了つた。そのために私は、彼のマントの下にどんな洋服を着て居るのかめくつてでも見たいと言ふ激しい欲望をさへも忘れて了つて、うか〳〵と彼を送り出したのであつた。

それから私は、寢呆けて居る良人の蒲團の側へそつと這入つて、長い間、色々な事を考へた。私の閉ぢた眼の前がほのぼのと白んで來るやうな明るい幸福な考へ許りが浮かんで來た。長い長い苦勞の連續がやつと今になつて報いられたのだ、と言ふ風な安らかな喜びをもつて、これからさきの事を空想して居た。

この明るい私の頭の中を時々、今歸つて行つた許りの男の二つの光る眼が往つたり來たりした。突然私は、彼が茶箪笥へお辭儀をした時のあの瞬間の彼の横顔の中に、一つの濁つた小ずるい表情があつたのを、今になつて彼が眼の前に立つて居た時よりもはつきりと見たやうな氣がした。

私はこの表情を胡散な眼で穿鑿した。あの時の彼のあの度外れた慇懃さは凡ての人間がその心の疚しさを人の眼から隱す時に無意識に遣る、あのてれかくしだつたと思はない譯に行かなかつた。

この考へは、私の幸福な夢の上に薄ぼんやりと蒼白い雲を引いた。私はこの薄い雲を拂ひ退けやうとして、ぐるつと一つ寢返りを打つた。

（三）

その翌くる朝は、ちら〳〵と雪が遣つて來たけれども、私は毎時のおきまり通り早くから起きて昨夜の片附け殘りの始末をして居た。（朝寢をするものに碌な奴はない。朝寢は金儲けの仇だと私は眞面目に考へて居る。）

と、ぎいと表の西洋扉が開いて、あの男が白い大風呂敷にもくるみ切れない蒲團包みを背負つて這入つて來た。おや馬鹿に早いんだことと思ひ乍ら、私は手拭冠りの儘でこの新しい隣人を迎へに立ちかけようとしたのだが、その時、彼の一間位後から細つそりとした姿の好い若い女が赤い焜爐を抱へてそゝくさと急いで來るのが見えたので、私はつと四疊半の、玄關からは見えない側の壁にぴつたりと體をくつ附けて了つた。私は自分が如何してそんな眞似をしたのか解らなかつた。唯、初めての挨拶をする前に今遣つて來た恐らく大野の女房であらう若い女を、じつくりと見て置きたいと言ふ心を制へる事が出來なかつたのだ。

四疊半の西洋窓には、前に住んで居た人達がその儘にして置いた細い簾が掛つて居たから、私はそつとその方へ寄つて行つた。この簾を透してなら先方にはちつとも悟られないで見たいだけ見られる、さう私は考へたのだつたけれども、前にも言ふ通りその女は外の寒さのためにそゝくさと小走りに行き過ぎて了つたので、簾の目を透して茶色つぽい羽織の肩の輪廓と小さく束ねた頭髮とを私の眼に殘しただけに過ぎなかつた。

が、それだけで充分だつた。この幻燈のように行き過ぎた女の影は、この女が大野の女房なのか知ら、と解り切つた事をもう一度考へずには居られない程、私を吃驚させたものであつた。

と言ふのも昨日大野が、自分で自分の女房の事を「ぽつと出の田舍者で何にも解らない奴ですから」と誰でもが貰ひたこの女房の噂をする時に遣る、例のてれた薄笑ひを片頬に浮べ乍ら言つたのを、何氣なしに眞に受けて居たからであつた。

人の勝手な言ひ草をその儘信じて居たと言へば、自分で自分の女房の事を賞める奴もあるまいぢやあないか、と笑はれるかも知れないが、私には私一流の、人の事では惡く高を括つて了ひたい性分があつた。それに、つい此頃になつてから私の心の中では、自分達が世間並に顏出しの出來る暮しをして居るのだと言ふ一種の押しが、頭を擡げて來た矢先きではあつたし、人が自分より下らなければ下らないだけ好い氣になつて居られる、そう言つた風の安易さを享しんで居ようと言ふ氣持ちもあつた。

で、私は彼の言葉を一も二もなく承認して彼の女房の事なら、むんづり肥つて目立たない位鼻の頭の赤い、子守つ娘のやうな銀杏返しを結つた見るからにお人好しの、などと勝手に定めて居たのであつたが、これは又餘りな違ひ方であつた。

玄關ではあの男の惡叮嚀で圖々しい（少くともその時の私にはそんな風に思はれた。）聲が、

「お早うムいます。」

と二度許り聽へて、あとほんの一分間位しんと靜かになつた。

私はその一分間、何とも言へない可厭あなもだ〳〵した心持になり乍ら、その心持の始末を付けたいと思つて、態ざと沈默つてじつとして居た。

三度目の聲がした時に私はやつと、

「おや、」

と玄關へ聽へる位に獨言つていそ〳〵と（少くとも玄關に居る人達にそう見えるように）出て行つた。（私はこんな對當ならいくらでも出來る。）

そして、一邊に頭のてつぺんから足の先まで吸ひ取るように見盡して了いたいと言ふ貪婪な一瞥を女の方へ向けた。又、あの眼を遣つてるな、と私は自分で自分が情けなくなるような一寸慘めな氣がし乍ら、さうするのをやめる事が出來なかつた。それ程にその女は、私なぞが夢にも持つてゐないようななよ〳〵とした美しさを體の何處かに潛ませて居る風に見えたのであつた。

男が何か早口に言つて氣忙しげに出て行つた。さう、彼はこれから直ぐ會社へ出なければならないから、とでも言つたのだらう。女はその後姿に、一寸物問ひたげな眼で追ひ縋つたが、直ぐに私の方へ向いて物慣れないお辭儀をした。その時口の中で二言三言何か言つたようであつたが、それは此方へ聽かせるためと言ふよりも自分の氣が濟むように只口を動かして居ると言ふだけのように見えた。

——おや、この女は初對面の挨拶さへ碌すつぽ出來ないのだ。——私は、急にぴちぴちと心が跳ねるような氣がした。

この變に愼しい美しい女を、何處か勝手の違つた處でいぢめて遣りたいと言ふ無意識な慾望がふいに私を驅つた。私は、今までの長い間の世渡りでだん〳〵と積み重ねて行つた切口上を、而も未だ誰にも遣つた事のないようなとつておきの馬鹿叮嚀さで、ねつちりねつちりと初めたのであつた。

「まあまあ、そんな御挨拶は拔きになすつて、何卒お上んなさいましな。ほんとに未だ埃だらけで申譯ムいませんけど……今朝は丁度、この通りの降りでムいませう？この分ならお越しもお遲いこつたらうと勝手に定めちまひましてね、もう、がらくたの列べ放題で……でも八疊の方だけはゆんべの間にあらまし片寄せておきましたんでムんすけど、あとで又お氣の濟むようにお直し遊ばさないと……おや、その提爐は、と、椽側へ置きましたのではこの通りの吹き通しで

ムルすし、と言つて……まあ、とんだおせつかいな事許り申上げますわね。」

この計畫は成功した。女は上る事も出來ないで土堤爐を抱へ上げたり又下に置いたり、私はだん〳〵嬉しくなつて來た。そして、調子づいて勝手な事を饒舌つて居る間に、何時の間にか初めの目的を忘れて了つて只お饒舌だけがして居たいと言ふあの、單純な毒のないお饒舌やの調子になつて居た。

斯うなると、お饒舌ほど正直なものはない。私は自分の滑稽な立場を忘れて、この女がしんから好きになつた。で、女が、あとで自分の勝手の好いように片附けるから何卒構はないで置いて呉れ、と幾度も辭退したのにも拘らず、雜巾バケツに水を汲んで來て遣つたり、そう煤けても居ない障子の紙を氣を利かした積りでぺり〳〵剝がして遣つたりした。

私は、そうし乍らそれとなく女の方に眼をくれた。この女の美しさの中のとんでもない處に隱されて居るかも知れない變なものを嗅ぎ出さうとでもするやうに。

二人の女と女とが出會つた時の、この奇妙な探り合ひの眞劍さは女にでなければ解らない。最初の一瞬間、お互に相手の肌の色までも見通さうとする。白足袋の裏に跳ねた泥のあとさへ見逃さない。が、次の瞬間、惧る惧る相手の優越さに疑ひ深さうな眼を呉れる。何か、ほんの眼尻の愛嬌黶子を見出してさへも、それを非常に誇張して美しいものと考へずには居られなくなる。そして、燒け爛れるような痛々しい心を抱き乍ら、話しの間中幾度となくそつとその黶子を見る。

今私は、この女の着て居る銘仙の羽織が仕立卸しではあつても幾度か水を潜つたものであらうと言ふ事や、もうこの他には幾枚も持つては居ないだらうと言ふ事などを考へたけれども、そんな事は、この女の靜かな美しさの前にはすうつと煙のように消えて行くべきものであつた。私は、私が色々な雜念から離れて、だん〳〵この女の方へ吸ひ寄せられ

て行くのを感じた。

女が三四人集つて居る、其處にこの女が一緒に居たとしても、人は誰も他の女の三角な顏や濃い眉や流行を追つかけ損つたような髮容に、先づ眼を惹かれる。そして、一番おしまひにこの櫛卷の淋しい女の顏を見出だす。そうだ、この女は一番おしまひに見出される淋しい顏の女だ。だが、何處から湧いて來るとも知れないこの淋しさは、長い長い絹糸で人の心を手操り寄せる。

あの頰に傷のある男が、何處から如何してこの女を連れ出したものだらうと言ふ突拍子もない疑が、私の胸にふと浮かんだ。こんな大人しい粹造りな女を「田舍者丸だし」だと言つて見たがつた、まんざら謙遜許りでもなささうなあの男の嘘言に、何かしら薄い蔭があるような氣がした。

だが、それにしてもこのもの靜かな女の口から何を聽き出せやう。私は、私のお饒舌がこの女の何處かにぶら下つて居る薄い絹の幕のようなものを、幾度となく揺るがし乍ら何の手答へもない儘に又私の方へ戻つて來る、如何しやうもないもどかしさを感じた。

女は彼女が私の心の中に播き起した考へも知らぬげに、只管、座敷の片附けに掛つて居た。そして何處かそう遠くない處だらうと思はれるもとの宿と此家の間とを幾度となく往來して、一つ一つ小道具を運んで來たりした。

私はその間に、良人を送り出したり茶の間の掃除をしたりし乍らも、絶えず八疊の座敷の方へ心を取られて居た。女が次の道具を取りに出掛けたあと、唯つた今何を持つて來たのだらうと、それが見に行きたくて何にも手に附かなかつた。私はほんとうに廊下を驅け出しては見に行つた。

アルミの小さい鍋、米の這入つた石油の空鑵、さては糠味噌の桶までに私は一つ一つ丁度自分が買ひものでもある

ように、値踏みをしては輕く頷いて居た。この時の私は唯つた一つの事しか考へて居なかつた。これだけの道具しか持つて居ない、そしてこれだけの道具をさへも人手を借りないで一つ一つ運んで來ると言ふ風な人達を、同居人にした事は危い事ではないかしら、と言ふ事であつた。

この考へは、彼等に一ヶ月の間代が拂へなかつた時、彼等がその抵當になるだけの物を持つて居るだらうかと言ふ程に、露骨ではないにしてもほゞそれと同じ事であつた。（何かに付けて直ぐ斯う言ふ風な勘定をしないでは居られない私の癖を、私は決して卑しんではゐない。斯うした勘定だけが私を一代分限にするかも知れない、と眞面目に考へて居るのだから。）

が、そんな事をちつとも氣にする必要はなかつた。私は今しも、細長い板のようなものをその頭の上一尺ほども突き出して全で兩方の手で捧げたような具合に持ち乍ら、危つかしく遣つて來る女を、西洋扉の硝子越しに見た私は、女の捧げて來たものが何んなものか早く見たいと言ふ思ひに驅られて玄關に走り出乍ら、未だ降り止まない雪の中をじつと透かして見た。女は、門の處で一寸立留つて、今度は私の方へその細長い板切れの正體が黄色い糸を一面に張つた琴だと言ふ事をはつきりと見せるような具合に眞直ぐに向けて、例の小走りで這入つて來た。

私は思はず「あつ」と聲を擧げる處であつた。そして、それは全く無意識で女の方へ兩手を差し出し乍ら、その琴を非常に大切な品物に對するように指先きを少し慄はせて、そつと受取らうとでもするやうな身構へをした。

私は突然、この女にと言ふよりは女の持つて來たその琴に馬鹿叮嚀なお辭儀をしたいような氣がした。丁度、昨日あの男が私の家の茶簞笥の前でしたと同じような樣子を、私も屹度しただらうと、あとからそんな氣がした。

私の勘定高い氣持はふつと消し飛んでしまつて、この板つ切れの樂器に對する「迷信」で頭の中が一杯になつた。

――近頃は、豚肉屋の娘でも生命保險屋の奧さんでも誰でも彼でもが、琴を彈いて居ると言ふ事を私は知つて居る。けれども私は、それが如何しても嘘だとしか思へない。私は何時でも琴の前に坐つた人を袂の長い美しいお孃樣として想像する。その丸窓の蔭では鶯が鳴いて居なければならないと思つてゐる。

私は今、琴を持つてゐるからには上手にそれを弄ぶであらう彼女の前で、自分が一段低い貧乏人の中にずり落ちて行つたような氣がした。それで、不思議なことにはちつとも忌々しい氣がしないのであつた。それ處か恐らく明日からは八疊の出窓を拔けてあの奧床しい琴の音が道行く人を留らせるだらうと言ふ想像は、私を窃かに小踊りさせた。私はそれで晴れがましい虛榮心を滿足させる事が出來るのであつたから。――

その晩、大野も外から歸つて來、良人も會社から歸つて來て二夫婦四人の私達は、茶の間へ集り乍ら初めての團欒を樣々な雜談に過したのであつたが、ふと、大野が眞顏になつて私の方へ口を寄せて來た。

そして、低い聲で、

「あのお座敷は幾らで拜借出來るんでせうか。」

私は一寸どきつとした。私の方からそれを言ひ出さうと思つて變にまご〳〵して居た處だつたから、斯う先手を打たれると、その時まで心ですつかり決めて居た事を又初めつから混ぜつ返さなければならなかつた。一瞬間、私は自分の心の中で無遠慮な慾張りと同じような強さの見榮とが、上になつたり下になつたりしてお互にのさばり合つて居るのを感じた。

ふと、今朝の琴の事が閃めくように私の頭に浮んで來た。この時私は、彼等が私達よりもずつと金持だと決めて了ふ

方が餘つ程氣樂で勝手が好いのを感じた。で、今迄で永年の間、より金持の人達に對して笑ひ掛けて來たあの廿つたれた追從の笑を浮べ乍ら、私ははつきりとした聲で最初決めて居たよりも五十錢多い金高を言つたのであつた。

それからの長い間、この五十錢を餘計なお景物だつたと思ふ事がなくて濟むように私は竊かに祈つて居たのだつたが……。

（四）

「おい…」

先刻から二度許り裏の方で良人の呼んで居る聲がしたけれども、私は返事もしなかつた。それが病氣のやうになつて居る私一流の丹念さで、私は茶箪笥の艶拭きを遣つて居たので、聽いても聽かなくつても大した損のない良人の無駄話しなんかのお相手にされるんじやあ叶はないと思つて居たのだつたけれども、その彼の例の調子の、人の思惑なんかにちつともこだはらない單純な人の好さで、

「早く來て御らん、面白いものがあつたあつた。」

と呼んで居るのを聽いてると、私はつい釣り込まれて、それでも顔だけは出來るだけ「下らない」と言ふ風を裝ひ乍ら、聲の方へ首を廻した。

すると、彼は茶の間から見通しの物置の蔭まで來て居乍ら、態ざと其處に留つてにや〳〵笑ひ笑ひ何か白い紙つ切れのやうなものを撮んだ手を高くさし擧げて見せた。そして、その同じ手でおいでおいでをして居るのであつた。

私は何時でも「下らない」と思ひ乍ら彼のこんな樣子に心を惹かれた。せか〳〵した世帶苦勞の想ひ場所ででもある

ように、ふつと其方へ引き込まれて思はず良人の顔を見乍ら心から微笑みたくなるあの、懐かしい心持が私の胸の底を流れた。この心持は何時でも私に仕事を捨てさせた。

私は艶布巾の繰し皮を握つたなり臺所の板の間をそうつと（同居人があるようになつてから、何故だか又何時の間にか私は忍び歩き許りして居た。）爪立てて歩き乍ら、彼の持つて居る紙つ切れは何かと問ふ代りに、一つ腭をしやくつて見せたけれども、彼は自分ひとりの興味で顔中を益々にや／＼させて、何か斯んなに面白いのか知つてるか、と言ふ顔をして、

「これは娼妓だつたんだね。」

と、紙つ切れを持つて居ない方の手の小指をぴく／＼動かして見せた。

彼の持つて居る紙つ切れとこのぴく／＼動いた小指とが、どんな關係のあるものか解らなかつたけれども、ついこないだから私が非常に知りたいと思つて居た事が解つたのかも知れない、と言ふ氣がすると同時に、私はがむしやらな渴望を感じて其處にあつた片ちんばの庭下駄をつつかけると急に驅け出して行つた。

良人ははははと大きく笑つた。私の性急な驅け出し方で充分得意になつたもののように、矢つ張り手は高くさし擧げたなりで一足宛後すさり乍ら、到頭、物置の蔭から畑の隅にある大きな櫻の木の蔭まで私を私の好奇心と一緒に引つ張つて行つた。其處で一寸、今出て來た茶の間の方を振り返つて、

「大丈夫、來やしないだらうね。」

と言つておいて、やつと私にその紙つ切れを見せて與れた。如何だ。大しためつけもんだらう。と言ふ風な一種の得意な上機嫌らしい笑ひを始終湛へて、彼はどつしりと兩足を櫻の根方にしやがませて　その破れた紙つ切れを土の上に

丁度嵌め繪をでもするやうに、一つ一つゆつくりと織ぎ合して見せた。それは又、丹念に五つにも六つにも千切つてあつたからすつかり織ぎ合せるまでに大分手間どつたけれども、彼は一向平氣であつた。そうしてやつと出來上つた、ありふれた美人繪葉書の、さぬ場末の寫眞屋に備へ附けてでもありそうなペンキ塗の海邊の前で、瘦せた體を思はせ振りな海水着で包んで寢ころびながら、それででこ／＼の束髮を平氣でのつけて居る一寸可愛いい女の繪姿を、私は呆れて見守つた。

「一體、何處からそんな馬鹿々々しいものを拾ひ集めて來なすつたの？」

「まあ、沈默つて見て居な、今に解るよ。」

彼は落付いて一旦綴ぎ合せた繪の方をそつと又ひつくり返しに地べたへ伏せて、今度は切手の貼つた字の書いてある方を向け乍ら、

「ほうら、これからが見ものなんだ。」

私は、一番先きに下手なペン書きの「春波樓」と言ふ宛名書きを見て、やつと良人の小指の意味を悟る事が出來たのであつた。

「春波樓つてのは藪野のあれ？」

「さうだよ、奴さんは彼處の抱へだつたのさ。ね、春波樓方山田雪子様とあるだらう？何だかお孃様の名前みたいだが、ほら、彼奴が毎朝怒鳴つて居るじやないか、お雪、お雪つて。」

「未だお女郎をしてる時分のらしいのね。」

「一寸、此處の下んとこの文句が振つてるじあないか。ね、君の妻が眼の先にちらついて仕事が手に就かないとさ、如

何だい？又の逢ふ瀬を樂しみに待つて居給へ、と書いてあるよ。こんな文句を繪葉書に書いて寄越す處は如何にもメリヤス工場の職工らしくて好いやね、はは……」

「何處の人だか解つたもんじやないわ。そして、今の旦那が寄越したもんでもなささうなのね、」

「當り前さ、そんな野暮な事が言つて居られつかよ。色男の五人や十人持つてなくつて遣つてけやしないよ。」

私は、こんな下司な言葉を近頃聽いた事がなかつた。良人とあの女とを一緒くたにして、輕蔑したような顔付きで、

「馬鹿だわね、あの女は。こんなものを矢鱈に其處いらに放かして置いたりして。そして又、それを態々拾ひ集めてわい〳〵騷いでる貴方も、よつ程如何かしてるわ。」

「何だい。自分だつてさんざ、面白がつてたじやないか。だが、何處で俺がめつけたのか知つてるか？」

私はその時、そんなことを知つてるものか、と言ふ風につんと横を向いて見せたけれどもほんとうは、跳び上つて大聲で叫び出したい程この大發見を喜んで居たのであつた。

この繪葉書一枚のお陰で今日からは私の眼の前に全で違つた眞裸な女になつて立つて居なければならない座敷の女を私は意地の惡い微笑の中で思ふ存分ためつすがめつして見詰める事が出來るのであつた。而も、女の方では何にも知らないで一生懸命に裸けた前を掻き合せやうとして居る。

私は、誰も見て居ない處で「あは、、、」と大きな口を開けて精一杯笑つて遣りたかつた。

ほんとうの事を言ふと、私はお雪と言ふあの女が何だか氣に喰はなかつた。私より九つも十も若くて、何處か男の心を惹きつけないではおかないような色つぽいなよやかさを持ち、おまけに上品で慎しくて私のように口を過ごすと言ふ事もなく、終日椽側で解き物をして居るかそうでなければ人に聽かれるのを憚つてでも居るような忍びやかな琴の爪

聞き、さう言ふ彼女の何處に非の打ち處があらう。それが、その非の打ち處のないと言ふのが、私の氣に喰はなかつた。

私は、彼女が鍛冶屋の女房のようにお饒舌で、馬車曳きの嬶あのようにそそつかしければどんなに好いだらう、とほんとうに思つて居た。そして心の何處かで彼女がとんでもない襤褸を出す時が來れば好い、と窃かに待つて居たのだ。そのお雪が、蕎麥屋の女中でも肉屋の仲居でもなくつて、娼妓だつたと言ふ事は、何と言ふ痛快な事であらう。もう乙に澄まして居たつて駄目だぞ、と言ふ氣で意地の惡い北叟笑みを洩らして居たのであつた。

この時の私の心の中には、誰にも話した事のない秘密があつた。

私は今から二十年も昔に、遠い田舍の製糸工場で働いて居た事があつた。十本の指は熱い湯のためにふやけて了つて蛹臭い湯氣の朦朧した中で一日中浸つて居なければならなかつたことに對して、私は言ひようのない屈辱を感じて居たので、若し人が知つたならどんなに馬鹿にされるだらうと言ふ事許り恐れて、もう連れ添つて十四五年にもならうと言ふ良人にさへも話さないで居たのであつた「糸取工女」のようだと言はれまいとして、一擧手一投足、私はどんなに人知れぬ苦勞をして來ただらう。

知らぬ間に私は、この誰にも持つて行き處のない氣持の腹癒せをしやうしやうと構へて居た。女さへ見れば、あの女だつてミルク工場かバリカン工場にでも居たんだらう、と絶へずそんな事許り思ふようになつて居た。誰をでも女でさへあれば、何處の馬の骨だか、と先づ一つせせら笑つて呉れたくなるのであつた。

だが、糸取工女と娼妓とでは譯が違ふ。私はこの時から、變な色眼鏡を掛けてお雪の起居を監視した。

（五）

彼女を監視する前に、私は既に一つの考へに囚はれて居た。娼妓をして居た位の女だから、洒あ〳〵と構へて居たつて隠し男の二人や三人はあるだらう、と言ふのがそれであつた。

私は、大野と言ふあの男が何處かへ行つて夜遲くなつても歸つて來ないような場合には、變に緊張した氣持になつた。今にも、そうつと表の出窓の蔭に誰か、あの繪葉書を寄越した男でもが忍び寄つて來るだらう、と言ふような氣がして、そんな時、お雪が白粉瓶を入れた眞鍮の金盥に手拭を持つて、湯へでも行かうものなら、私は思はず屹つとなつてその後姿を見ずには居られなかつた。

然し、自分がこんな氣持になつて居ると言ふのは自分乍ら少し許り恥しかつた。私はそれを良人にさへ話さなかつた。自分獨りで聽き耳を立てて居た。

繪葉書一枚で上つて了つた證據は、私には餘り呆氣な過ぎた。その下をもつとほぢくり返して見たらと言ふ氣が絶えず動いて、私は自分の得意なお饒舌の鋒先きをお雪の方へ向けるようにして居た。――彼女が私の疑ひを裏附けるような唯つた一言をでもひよいと口から滑らして吳れれば好い、と竊かに覘ひ乍ら――

が、そんな時お雪は此方の思惑を知つてか知らいでか、一寸小首をかしげて只輕く笑つて居た。この笑ひを、私はついこないだまで唯の愼しみ深い女の笑ひとして見過ごす事が出來た。然し、今の世の中に彼女のこの笑ひ程いけ圖々しいと感じさせるものはなかつた。私はこの面の皮をひん剝いて遣りたいと言ふ思ひに驅られて、その時の來るのを手ぐすねひいて待つて居た。

有り態に言ふと、私のこの人聽きの悪い期待の原因はその頃の私が自分自身の生活に疲れて居た事にあつた。斯う言ふ大袈裟な物言ひが不可なければ、その頃の私は永年の貧乏世帶の切り盛りに飽きあきして居た。その切り盛りの彼方には美しい霧の掛つた樂園であると許り思つて居たのに、それは只霧が美しかつただけで、如何やら存外詰らなさうな正體が半分見えかかつて居た。

私は其處でぼんやりして立留つた。もうこれからはその詰らなさを出來るだけ少くするか、又は今までに築き上げて來た霧を吹き飛して何も彼もぶち毀しにして了ふような大芝居を打つて見るか、二つに一つを決しなければならない、そんな風な事をぼんやり乍ら感じて居た。

が、前にも言つたように極端な吝ん坊で未練がましい私は、流石にその大芝居の中に自分自身を打ち込むだけの勇氣がなかつた。それで、絶えず自分のぐるりを見廻して居た。何かを探して居た。

こんな私がお雪の前に立つた時、彼女が彼女の良人に對して不實な行爲をして呉れれば好いなどと言ふ穩やかならぬ空想を逞しうして居た處で、大した不思議はない。

實際私は、自分で芝居は打てないが人の遣つてる芝居なら見せて貰ひたいものだと思つて居た。思つて居た處ではない、人が遣りたがつても居ない、と言ふ事がはつきり解つて居てさへも、無理にも遣らせて見たい位、考へて居たのかも知れなかつた。

然し、こんなに自分の心持を切り下げて考へたのは餘つ程經つてからであつた。その頃の私にはこれ程の餘裕はなかつた。只、手ぐすねひいて何事かの起るのを待つて居たのであつた。

往來の雪の上を滑つて行く馬橇の鈴の音が、私の妄想をそつと撫でては行き過ぎた。私は、自分が斯うして爐の端で良人のシャツの綻びや靴足袋の繕ひなどをして居る間にも、自分の全で知らない世界で起つて居るであらう様々な出來事の影を、頭の中で追つ掛けて居た。

私はふと、廊下を隔てた次の間で同じように坐つて縫ひ物をでもして居るであらうお雪の姿を思ひ浮べて、彼女が今、何を考へて居るのか知る事が出來たなら、とてつもない事を考へ出した。

私は突然、彼女に知られないで彼女の様子だけでも見たいと言ふ思ひに驅られてそつと立ち上つた。丁度好い按梅にその八疊に添ふた廊下の突きあたりの處には五六本釘が打つてあつて、箒だのはたきだの、ブリキの塵取だの紙屑籠だのがぶら下げてあつて、掃除を初める前には可厭でも其處へ行かなければならないのであつたから、私は何時でも遣るように一寸輕いしわぶきを一つして、極く自然に聽へるような足音をさせて彼女の座敷の前を歩いて行つた。

實を言ふと私は、一日のうち二度位こんなみつともない根性になる事があつて、度々箒をとりに立つて行くような振りをしなければならなかつた。(私は彼女に聽へるように座敷が汚れて困る事を零した。汚れて居ると氣になつて何にもする氣になれない、と言つた。)如何かすると、障子の塡め硝子を覗き込んだ私の眼と、何かにおびえたようにはつと見上げた彼女の眼とがかち合ふ事があつた。私はそんな時に決して顔を赧くしないように用心して居た。この用心が却つて私をどぎまぎさせた。どぎまぎし乍らも私は、此方が襤褸を出す前に向ふの襤褸を嗅ぎ出して遣らうとあせつて居た。それで、氣拙い笑顔をし乍らも口でだけは、

「酷く凍てますわね、」

などと平氣で言つて退けた。お雪のこれに對する態度は何も彼も知つて居て、それで空つ呆けて居るのだとも、又はほ

んの無邪氣で只笑顏を返して居るだけなのだとも好きなように受けとれた。

私はこの變なぬかるみのような氣分の中から脫け出るために、彼女は少し低能なのかも知れない、と高を括つて了ふ事に決めて居た。

今も私は、二人の眼が出合つた時の言草を用意し乍ら、好い具合に三寸許り開けた儘になつて居る障子の間からちらと座敷の中を見た。

「おや、」

私は危く聲を立てる處であつた。彼女は出窓の、細棧になつて居る障子を半分開いて往還の方を見て居た。その彼女の楕卷きの頭越しに粉雪の降りしきつて居る長方形の空間があつて、そこに、山高を冠つて此處からは額だけしか見えない男の顏が此方を向いて居たではないか。

が、私が「おや、」と心の中で叫んだ瞬間にその顏は向ふを向いて、聽て見えなくなつて了つた。

この唯つた一寸程もないフイルムの切れつ端だけでは如何判斷のしやうもない筈のものであり乍ら、私の頭の中ではその見えもしない男の顏とお雪の笑顏とが押し列んで大寫しになつた儘、こびり附いて離れなかつた。

そんな事は皆、お前の妄想に過ぎないじやあないかと一笑に附されても仕方がないけれども、私が廊下に通り掛らない前、ほんの一分間前にあの山高の男が窓際に寄つて、窃かにお雪と逢曳の相談をして居たのではない、と如何して斷言出來やう。

再び縫ひ物の中に自分を忘れやうとした時に、私は忘れる事の代りに尙更激しい妄想に悩まされて居た。

丁度その時、物思はせ振りな偶然が又惡戲をしやうとして居た。

私が廊下へ立つてから十分も經たないだらうと思はれる時分に、玄關で一人の男の無遠慮な胴間聲が、案内を乞ひ乍ら同居人の在否を聽いて居るのを私は耳にした。私がそれに答へやうとして半分腰を起しかけた時、もう、八疊の唐紙のあく音がしてそれと一緒にあのお雪のいけ洒あしやあと上ずつた聲が（如何してその時の私に好い感じが持たれるものか。）

「まあお爺さん！この降りによく出掛けて來られたわねえ、」

と、それははつきりと手に取るやうに聽かれたのであつた。

既に或考へに囚はれて居た私は、彼女のその聲を虚心に聽く事か出來なかつた。

「ふん、お爺さんとは、よく出來てら、」

今の男の聲はこれ迄でに幾度聽いたか知れない。しやがれてこそ居れ、ともすれば女の心を暗い處へ引摺り込まうとするあの、物慾を離れ切れない男盛りの力强さが滿ちて居るではないか。

私は、自分とお雪との年齡の相違から來る感覺の隔りを忘れて居た。そして、「まあお爺さん！」の一語に執ねくこびり附いてお雪の思惑を揣度しやうとした。

「冗談言つちやあ不可ないわ、この人はこれでもうお爺さんなんですよ。」

とお雪が言ふ。

「飛んだ勘違ひをしちやあ困るよ。全く俺は、お雪の亭主が居ない時にばつかり遣つて來る。さうだ。毎日勤めに出て居る彼が眞つ晝間うちに居ないつて事位、解り切つた事だ。俺はそれを百も承知の上で遣つて來たのだ。そしてひよつとしたらお前なぞから變に思はれるかも知れないつて事まで承知の上だ。が、それで如何したつてんだ。俺はほれ、こ

の通りおほつぴらで出這入りしてるし、何一つ人聽きの惡い話しなんぞしてやあしないんだい！」

と、お爺さんと呼ばれた男が言ふ。

私は、彼等二人のこの言ひもしない言葉の方をはつきりと聽いたような氣がした。私は起しかけた膝を又そつと揃えた。そして、體中の神經を一ところに集めて殆んど、半時もじつと座敷の方へ聽耳を立てて居た。

が、そんなにいきり立つ必要はちつともなかつた。座敷からは細かな會話の遣りとりまですつかり聽へて來た。

彼等は二三日前の吹雪がどんなに酷かつたかと言ふ事を話し合つて居た。鹽漬の水甕が寒さの爲めに龜裂した事を話して居た。これで雪解には行倒れの足の腐つた乞食共がこの街だけでも五六人は上つて來るだらう、と言ふ事を話して居た。

これらの餘りに日常茶飯事めいた世間話しは私をいら〳〵させると同時に、又別な期待を抱かせた。私は彼等が此方へ聽かせるために態さとこんな話し許りして居るのだ、と思つて尙この上の恐らくはか細いささめきが點綴するであらう處をまで、聽き洩らすまいと一層神經過敏になつたのであつた。

丁度、お誂へ向きに座敷は急に靜かになつた。彼等の此處からは見えない膝と膝との間を重苦しい昂奮が流れてゐる有様が私に想像せられて、それが妙に私の神經を壓迫した。

突然、この暗闇の中へ突き込まれて了つた私は、手足で藻搔く事の代りに頭の中の妄想を縱横無盡に踊らせた。

――赤いメリンスの蒲團のかかつた炬燵が見える。それに櫛卷の頭を埋めて眞白い襟足を惜しげもなく投げ出して居るお雪の頭から肩にかけた小刻みに慄へる曲線が見える。その横に同じように炬燵へ這入つては居るけれども心も空の只らん〳〵と燃えて居る血走つた二つの眼に精一杯煩惱を喰ひ留めて居ると言ふ風の男。

突然、間の唐紙が二枚、仰山な音を立てて倒れたと思ふと逞しい三十男の毛脛が倒れた唐紙の桟も裸にめり〳〵と踏み込むが早いか、ぬつと現はれた大野の、そげた頬に光つて居る傷痕！

「ふざけた眞似をしやがると承知しねえぞ！」

「何をつ！」

「あつ、誰か來て、」

―――――

それは現實よりもはつきりとした一枚の活畫であつた。私は自分で勝手に描き出した血腥ささに慄へ上つた。

この時私は、今恐らく會社の汚い書卓に縋つて靑傳赤傳と銀行ペンを走らせて居るであらう大野の姿を想像した。彼は欺かれた良人としての滑稽な姿を私の前に遺憾なくさらけ出して居た。而も彼は、ちつともその事に氣附いて居ない。彼の今藻搔いて居る貧窮そのものがお寄の身請け一切の事から起つた結果であつたとすれば、彼の悲慘は尙更、大きな聲を擧げて笑ふべきものではないか。私は彼の釣鐘マントと赤ゴムの靴とを想像した。……

私は變な息苦しさを感じて、突然立ち上らうとした。立ち上つて如何する積りなのか自分の心を決しやらうとしたとたんに、座敷の唐紙が開いて恐らく客が歸らうとするのであらう、以前と同じ沈んだ調子の話しをし續け乍ら二人が玄關へ立つたけはひがした。

私は、機先を制せられたかたちで一寸足を引いた。その時、私の耳に次のような話し聲が聽へたのであつた。

「お婆さんももう好い年なんだから、樂にさせたげたいと思ふんだけど……」

「何あに、お前らだつて道樂に暮してるじやあねえもの、餘計な心配をさせちやあ濟まねえや、婆さまの世話位如何に

かならねえもんでもねえ。」

「その内私も暇を見て行つて見るから……」

「いんや、心配するがものはねえだよ。さあつて時にやあ、何時でも一走り遣つて來るだから、」

私はこれ以上聽く必要がなかつた。ほんとうに彼は、お雪が折々心に懸けて私にさへも話して居たあの遠い續き合ひだと言ふ貧しい老人ではないか。

私は自分のさもしい根性をへし潰して了ひたかつた。少しでもそれを紛らせようとして、私は急いで玄關へ出乍ら、精一杯愛想よく、

「おや、お歸りでございますね、」

とお雪にともなく、綿の厚いちやんちやんこの眞丸い背中を此方へ見せて頻りに藁沓の紐を結んで居るこの年老いた客人にともなく、言葉を掛けたのであつた。そして、その老人と同じように藁沓を穿いて往來に出て、他處目にはさも雪の踏みならしをでも遣るように、やけにぐいぐいと雪の上を踏んでは、一足毎に聲を出して、

「馬鹿、馬鹿、」

と言つて見た。それでひとりで踊つて居た自分の心を嘲笑すると同時に、窃かに慰撫して遣りたいと思つたのであつた。

私は眼を擧げて、降りしきる雪の中にだんだんと小さい點になつて行く老人の後姿を見送つた。

（六）

飛んでもない見當違ひをして居たのだと言ふ事がはつきり解つたあとでも、私の性分としてその儘素直に引つ込むの

が業腹であつた。私は尙も執ねくお雪の起居に眼を附けて居た。それで自分がどんなに下らない神經の徒勞をして居るかと言ふ事に就いては、ちつとも氣にして居なかつた。

毎日雪が降り續いて北國のほんとうの寒さが遣つて來た。この頃になつて、私の居間になつて居る茶の間を摺り鉢や蒸し釜を抱へて臺所へ行つたり來たりするお雪の腰に變なものがぶら下つて居るのを、私は氣附いたのであつた。

「奥さん！」

私は斯う言つて彼女を呼び留めた。（ほんとうの事を言ふと私は、「お内儀さん」と呼びたかつたのだ。然し、成上り者の悲しさには自分で人からそう呼ばれたい許つかりに先づ人に斯う呼ぶのが、私の癖になつて居た。）そして、その腰に巻いて居るのは何かと聽いて見た。

「これ？」

お雪は切れの長い眼尻だけで笑ひ乍ら、

「これ、腰蒲團よ。」

さう言ひ乍ら後へ手を廻してその腰蒲團の端を撮んで、「斯うやつてるとそりやあ溫いんですよ。」

可厭味な程ぱつとした草色無地の小座蒲團のように綿を入れたメリンスが、彼女の比較的細つそりとした腰にぺつたりとくつ附いてその眞中が丁度、腰の丸さの通りにぴよこんと飛び出て居るのに紐を附けて、袷の上からしつかりと體に括りつけて居るのであつた。

私は、彼女が寒に入つてから頻りに腰が冷えて斯うでもしたくては我慢がならないのだ、と言つて居るのを聽き乍ら

心の中では全で別な事を考へて居た。

私の空想は彼女の蒲團を着せたその腰から全く變な方へ飛んで行つた。私はほんの一瞬間ではあつたが、妓樓に居た頃の彼女の如何はしい樣々な姿態を非常なめまぐろしさで頭の中に描き出した。突然、眼の前がくら／＼とした。そのくら／＼とした旋風機のスクリユーのようなものがだん／＼と鈍い廻轉に移つて來て、軈て變な聽えない音を立てて留つた。と、私の眼の前にはパツとして明るい黄色の腰蒲團がぶら下つて居るだけであつた。

その腰蒲團は、お雪の細い腰へぺつたりと喰つ附いた儘彼女の體が搖れるにつれて搖れ乍ら、ゆつくりと唐紙の中へ消えて行つた。

夜になると馬鹿のようになつて寢呆けて居る良人を蒲團の中へ殘して、私は夢遊病者のような足どりでそつと廊下へ出て見た。

八疊の間の電燈は消してあり乍ら椽側に添うた硝子窓からさし込んで來る雪明りで、ほの暗いのと夢のような微光が暗さの中に溶けて居た。

じつと眼を凝らして居ると、子供の頃に弄んだあぶり出しの繪のようにだん／＼と座敷の中のさま／＼なものの形が現れて來るのを、私は氣狂ひ染みた唯一つの考へに囚れ乍ら見て居ると、最後にこの私の眼は凡てのものの影を遮つてぐるりと立て廻らしてある丈の高い六双の屏風にぶつかつたのであつた。(曾て私は、このお雪が捧持して來た琴に對するのと同じような驚嘆と渇仰の眼を向けた事があつた。然し今は、同じこの屏風の影に全く別なものを見たのであつた。)

私はその時、思ひもかけない不思議な風が吹いて來てこの立て廻らしてある屏風を音も立てずに倒して了つたら、と言ふ事を想像して居た。

私の想像いや、妄想はもう一つ中へ這入つて行つた。私はその陰に寢て居る男女の——自分の腕の中に居る女が何も彼も吸ひ盡された人魚のように冷い體を持つて居る事をさへも知らないで、全で、今にも誰かから奪ひとられるのをでも慄れるやうに搔い抱いて居る大野の色道餓鬼のような裸の姿、その裸の首に執念深い蛇のやうに蒼白い痩せた腕をぐるりと捲きつけて居るお雪の死んだような姿、——二つの姿を見たような氣がした。

が、お雪のその同じ腕は夜毎日毎に幾百人の男の首に捲きついた事であらうか。否や、今でさへも彼女の夢がそれらの數限りもない男の首から首へ彷徨ひ廻つて居ないと誰が斷言し得やう……而も彼女の枕許に立て廻された屏風、恐らく妓樓から運ばれて來たものであらう同じその屏風は、何も彼も見て居乍ら沈黙つてつゝ立つて居る。

——私は急に瞳を凝らして、下手な野草をなすり描きにした安つぽい屏風の紙を見詰めた。と、紙の上に數限りもない如何はしい汚點が水の中に垂らし込んだ油のようにぎら／＼光る紫の波紋を畫いてだん／＼と擴つて行くのを見た。

私はきつとなつて、この汚點が何であるか見極めようとした。——

…………

この時、私は自分が今何處に立つて居て何をしやうとして居るのか、と言ふ事に思ひ至つて、薄暗がりの中に居乍らひとりで顏を赧らめた。それは、恥しいからだけではなかつた。變な、憤怒に似た感情がその底を流れて居た。（私をこんな泥濘の中に追ひ込んだものの正體は解らない乍ら、その解らないものに向つて私はぼんやり腹を立てて居たのであつた。）

私は、來た時よりももつと足音を忍ばせて廊下から寢床の方へ歸つて行つた。

私が斯うした妄想の間を彷徨して居やうとは知る筈もないお雪は、賴りない女のしみ〴〵とした親愛を私の方へ向けて來た。

彼女はよく夢の話しをした。

お腹がだん〳〵と膨んで來たと思つて喜んで居たら、それは姙娠したのではなくて變な水が溜つて居たのだつたと言ふ夢や、何だか急にお腹が痛んで來たと思ふと赤ん坊の握りこぶしが腹の皮を突き破つて出て來たと言ふ夢や、可愛らしい女の兒が「母さん、母さん」と呼び乍ら腰へまつはり附いて來たと言ふ夢や、凡そ見る夢毎に「子供」と言ふ事に關連しないものはなかつた。

彼女はそれらの話しをしたあとで、

「如何して私には子供がないんでせう？」と呟くのが癖であつた。私は「ふふん、」と心の中で嘲笑し乍ら、知り合ひの産婆から得たあやふやな知識を振り廻して、「子宮後屈、子宮後屈、」と面白がつて呟いて居た。

お雪が臺所の方へ歩いて行くその絹天の色足袋を穿いた小さい足が、疊の上に眼に見えない足跡を殘して行く。私はその一つ一つの足跡の中に屛風の紙の上に見たのと同じ汚點がぽつぽつと浮き上るのを見た。

お雪が洗濯盥の濯ぎ水を井戸端で流して居る。石鹼のあぶくの立つた水は土の中へ吸ひ込まれても、私は其處にこれも同じな汚點が殘るのを見た。

お雪が物干竿に手を掛けて今洗ひ上げた許りの晒し木綿の襦袢を通さうとして居る。晒し木綿からはぽた〳〵と滴が垂れる。その滴の中にさへ、何か如何はしい液體が溶け込んで居て乾いた飛び石や土の上やに同じやうな汚點が現はれるのを私は見た。

お雪の行く處往ぬる處、何處にも彼處にも眼にも見えず色も無い汚點がそれで居てはつきりと浮き上るではないか。私は眉を顰めてその痕を見た。其處から、微かな饐えたような惡臭が煙のように立ち昇つて行くさまで、私は自分の眼で見たのであつた。

…………

斯うした妄想は私をだん〳〵と息苦しくさせた。私は、こんな得體の知れない汚點を其處いら中ぶち散けて歩いて居るご本尊のお雪を憎みたいと思ひ乍らも、摑へ處のないものに對する變な氣拔があつて、只ぼんやりとして了ふだけであつた。

私はこの汚點の正體が知りたかつた。誰か居て、それは青春を失つて了つた女の見さかひの附かない嫉妬心が、少し形を替へた許りなのだと説明して呉れたなら、私は頷いて相手の顏を見守つたであらう。

幸か不幸か私はその正體を知らなかつた。知らないなりに、こんな事でくさ〳〵するのは實に馬鹿げた事だとさへ思はないで居た。

（七）

何も彼も洗ひ浚ひ言つて了ふと、私はお雪が娼妓をして居た位の女だから今に不貞腐つた事をしでかすだらうと思つ

て居たのだ。否や　早く思ひ切つて不貞腐つた居を見せて呉れゝば好いと待つてさへ居たのだ。私は、自分が餘り苦しんで來た。人の幸福を手を束ねて見て居る事が出來なかつた。その幸福を自分が直接手を下さないでめちやめちやにして了ふ事が出來れば、一番有難いと思つて居たのだ。）

ところが、私の期待は美事に裏切られた。彼女は山内一豐の妻よりも貞節であつた。朝は暗い内から亭主と一緒に挽臼を押して居る豆腐屋の女房のように、何の變哲もない只の女であつた。

私は、彼女の貞節を驚嘆する代りに輕蔑した。輕蔑する事に依つて密かに自分の心を慰撫しやうとした。だが、それだけではお終ひにならなかつた。

私はその頃になつて、大野夫婦の仲よく暮して行く有樣が急に目障りになつて仕方がなくなつた。少くとも、ちつとも喧嘩をしないで居るといふのが癪に觸つた。良人の歸りの遲い夜なぞ、彼等の座敷から聽へて來る微かな笑聲でさへも虚心で聽いて居る事が出來なかつた。故意にいちやついて私の心を傷けようとして居るのだとしか思へなかつた。

晝間、お雪はよく椽側の日向に座蒲團を持つて出ては、それに坐つて解き物をして居た。それを洗つて張つて又椽側に坐つて縫つて居た。それは皆、大野の羽織か長襦袢か兎に角お雪自身のものであつた事がなかつた。

（彼女は何時も同じ眞岡木綿のなせん染を着て居た。彼女はその鐵砲袖の細い袖口を引つ張つて「私にはこれ一枚しかないのよ。」とよく言ひ〳〵した。そのあとで、彼女もずつと以前にはルビーの這入つた指輪だの、小濱縮緬の羽織だの、八つ橋の長襦袢だのを持つて居たけれども、もう今では皆なくして了つたのだと淋しい顏で問はず語りをするのが癖であつた。）

そうし乍ら、女は家に居るのだからどんな襤褸を着て居ても好いけれども男には何時でも小綺麗な態がさせたいもの

だ。と何時でもあとから附け加へるのであつた。

夕方近くなると、彼女は小さい手籠を提げて惣菜ものを買ひに出掛けた。歸つて來るとその籠から流し板の上へ、はしりの小肴だの、松茸や蕨の鹽漬だの、私のようなけちん坊にはてんで初めつから口へ入れるもんじやあなく只眼で見るだけのものだとしか思へないやうな材料が、ほんのぽつちり宛出て來るのであつた。

彼女はそれをちよき〳〵と刻んでは唯つた一人前の、全でまゝ事ごつこのやうな樣々な料理を拵へた。そして、それを赤い塗膳の上へ列べて一寸離れた處に立ち乍ら、暫くお雛樣のお供へのように飾られた皿小鉢をじつと眺めて居た。それから呟くような聲で、自分は三度が三度でも鹽鮭一切れで澤山だけれども外から働いて歸る良人には出來るだけ甘味いもを用意して置いて遣りたいのだ、とそう話すのであつた。

彼女は又、他處から貰つた水菓子や私が偶に裾分けにした煎餅なぞを自分では一つ缺けも口にしないで、銀紙を敷いたボール箱の中へ列べて居た。私はそれを見て、惡くならない内に喰べたら好いだらうと言つたけれども、彼女は眞顔で、寒い中は決して惡くなるものではない。良人はひよんな時に色んなものを喰べたがるけれども貧乏暮しの悲しさにはそれを諦めて貰はなければならない時がある。せめてそんな時の役にでも立つなら、と思ふのだと言ふのであつた。

私にはこれ以上何にも云ふ事がなかつた。これら、彼女の良人に對する心盡しを示すのに外ならない一つ一つの斷片は、私をいら〳〵させるのに充分であつた。私には、お雪が樣々な身振りや言葉に依つて私に挑戰して居るのだとしか思へなかつた。彼女の凡ての遣り口が皆私に對する示威運動のように見えた。私は無精に腹が立つて仕方がなかつた。

私は、そうする事がどんなに下らないかと言ふ事を考へる前に、この示威運動に對して全精神を擧げて對抗しようと決心した。そして、始つ終變な身構へをして居た。

斯う決心をした瞬間から、私は急に自分の良人の姿を顔をしげ〴〵と見上げた。そして今更のやうに、彼がどんなに立派な男であつたかを氣附いたのであつた。

私は、彼の色白な男にしては珍しい細面の優しい顔が尚更ノーブルに見えるように、コバルトがかつた養老お召か何かの地合で早速一枚仕立てようと、思ひ立つとちつとの辛棒氣もなく、少し吹雪いては居たけれども角卷でしつかりと體をくるんで馬橇を驅つて出かけたのであつた。

ほんとうに幾年振りに、このデパートメントストアの眞似をした白い洋館のどあを押した事であつたらう。其處では様々な心を惹くものがあつた。臙脂色のネクタイ、薄紫の絹シャツ、キッドの赤靴さては何々、凡そ良人の身に附けて適はしいと思はれる（私はその時彼を最早四十にもならうと言ふ男だとは夢にも思はなかつた。全で、若い戀人のための買物をでもして居るような浮々した氣持で居たのだつたから）品物は一つ一つ手にとつて見た。

言ふまでもなく、私の心の中では「極端に吝嗇な私」が地團太を踏んで、

「お前は、今までに血の出るような思ひをして溜めた金をこんな處で投げ出す積りなのか。」

と叫んで居た。

けれども私は一向に聽へない振りをした。それにもうその時は、揉み手をしたおべつか者の番頭が一人私の側に附きつきりになつて居て、私のおべつかに飢えて居た心をそれは上手に煽り立て、私を何時もとは全で違つた女にして了つて居た。

（私は、その時の私がさもその店のどあの外には自働車が待つてでも居るような凉しい顔をして居たであらうと思ふと、もう中年も經つた今でさへ、ひとりで顔が赧くなるような氣がする。）

それから又、馬橇に乗つて歸つたのだが一遍膨れ上つた心は馬橇の一揺れ毎に納りが附かないほど好い心持に膨れて來た。

毎時市場へ野菜の買出しに行く度びに通り慣れた同じ雪路が、今はどんなに違つたものに見えたであらう。雪のためにへし潰されさうになつて前へのめり出して居るように見える柾葺きの低い屋根が、ずうつと軒を列べて居るのを見るにつけても、何て汚い家だらうとしんから情けない氣がした。それよりも、こんな汚い豚小屋の中でうよ〳〵して居なければならない蛆虫どもを尚更可哀そうだと思はずには居られなかつた。赤ゴロの脚絆を穿いた馬子、毛の擂り切れた角巻を掻き合せ乍ら走つて行く女房共、兩頬を眞赤に凍てつかせて腹の減つた馬のように白い息を吹き出して立つて居る鼻つたれ小僧、私はそれらの姿を侮蔑をこめた眼で見送つた。

私は、自分が唯つた小半時の間にこんなに違つた人間になつたと言ふ事を信じる事が出來なかつた。私は馬橇の御者臺で鞭を振つて居る男に向つてさへももう少しで、

「私は今あの店で百圓近い買物をした許りなのよ。」

と聲を掛けそうなのをやつとの思ひで我慢しいしい、兩袖を嵩張つた包みの上に畳んで、ぼんやりと冷い雪に頬を打たれ乍ら樂しい空想に耽つて居た。

（八）

その夜、私は茶の間に備へ付けのコークスのストーブをどん〳〵と燃やして、（吝嗇な私はこれまでどんなに寒い晩にでも只飾つてだけあるこのストーブを燃やした事がなかつた。それはほんとうに飾つてあつたのだつたから）昔田買つ

て來た反物を裁つて居た。

　私の心は、お雪の挑戰に應じるために良人のもの許りの素晴しい買物をしやうとしたあの瞬間から、春の綿雲のように又しんこ細工のようにふわ〳〵と際限もなく膨れて行つた。お召のじつとりと濡れたようなそれで居て粗い手觸りは、私をその綿雲にのせた儘遠い遠い夢の國へ連れて行つた。私はうかうかとその國中を彷徨ひ乍らそれでも手許りは忙しなく動かして、やつと片袖縫ひ上げた。

　それを自分の手に通してとみかうみ、暫くそうして居る中に玄關の扉が、降り積んだ雪に壓されて軋んで居るせいではあるけれども、さも人憚りなぎーいと言ふ音をさせて開いたと思ふと、そうつと床板の上へ踏み込んで來た雪沓のコトリと言ふ音を聽いた。

　あの忍びやかな足音を私は何度聽いたらう。良人が醉つて歸つて來たのだ。

　私は、「何卒、せめて今夜だけその醉拂ひの足で亂暴に其處いら中蹴飛ばすような音をさせて這入つて來て下さい。ほんのつきあひ酒の二合や三合、如何して私が文句を言ひませう。『おえい！しこたま醉つて歸つて來たが、それが、それが如何したい？』と怒鳴つて下さいな。まあ、貴方と言ふ人は今夜も茶の間へ這入つて來ないで、私に隱れてその儘そつと寢床の中へもぐり込む積りなの？」と、若しもお雪に聽へないものならば口に出しても言ひたい處を心の中で呟き呟き立ち上つて、玄關の方がすつかり見へるように間の唐紙をさつと開けた。

　不意を喰らつた良人は吃驚したような瞳を私の方へ向けてじつと見据えた。（まあ、貴方はまだそんな、『おえい、俺は醉つてるよ。だが、ほんのぽつちりしか呑んじやあ居ないんだよ。』と言ふ風な空つ呆けた眼をなさる積りなの？）

　私は、彼のその空つ呆けた醉眼を唯つた一眼で燒き盡して了ふ程な媚を凝めた眼で彼を見返し乍ら、

「おや、お歸んなさい。道が詰かつたんでせう？貴方はまあ歩いてお歸りになつたの？」と、いそ〳〵と彼の後へ廻つて厚ぼつたいオバアの袖から腕を拔き出して遣るために手を添へた。そうし乍ら私は、我れと我がはしやいだ若々しい聲を聽いた。此處の開き戸一枚を隔ててお峯が、未だ歸つて來ない大野を待ち侘び乍ら、同じように私のこの聲を聽くであらうと言ふ事を如何して考へないで居られやう。

だが、良人は何にも知らなかつた。毎時の調子で「俺はこんなにしつかりしてるんだぜ、」と言ふ風に足をどしんどしんと一足づつ踏みしめ踏みしめ茶の間へ這入つて來て、どつかりと眞中にあぐらを掻いた。

そして初めて、

「おい！」

と私の方へ向いた。

私は、彼の眼が燃えさかつて眞赤になつたストーブの胴體から、じろ〳〵と其處いら中擴げてあつたお召の裁布の上へ注がれ、最後にさも物問ひたげな眼付になつて私の方へ戻つて來るのを見た。

私は突然、彼のこの締まりのない唇の上へ兩手を重ねて蓋ひたいと言ふ衝動に驅られた。その、「おい、その着物は何處かの仕立物かね、」とでも言ひ出しそうなぶざまな彼の顏付は私をはら〳〵させた。私は大急ぎで、全で良人の唇の上へのしかゝるようにせか〳〵して言つた。

「ねえ、好いでせう？貴方は酒井さんの送別會へ着て行くのが要るつて仰言つてらしたでせう？もう今夜と明日の晩とかゝつたらすつかり出來上つて了ふのよ。一寸、袖だけ通して見て下さいな。」

彼は未だ疑はしそうに私の眼を見て居た。今にも「お前そんな贅澤なものを買つて好いのかい？」と私の口眞似のよ

うな事を言ひ乍ら、それで私の機嫌をでも取りだげにして居る彼に、これ以上へまな事を言はせないために、無理にもその腕を引つ立てるようにして寢間の方へ連れて行つて、

「貴方は駄目ね、そんなに醉つ拂つちまつちや着物どこじやないわね。」

全で子供をあやすようにそう言ひ言ひ、ワイシヤツを脫がせて遣つた。そして、しげしげとこの芝居の相方にもならない醉つ拂つた道化師の薄赤い眼瞼や濃い眉やを見て居る中に、一瞬間、狂ほしい愛慾の虜になつた自分を感じた。私は何か大きな聲で叫び出したかつた。(この突きつめた心の奥にさへ扉一つの向ふに居るお雪へ聽かせたいと言ふ心がなかつたであらうか。)

斯うして私――三十二の中年増が消えかかつた昔の燒けぼつくひにはかない焰を燃やし初めたと言ふのは、如何に滑稽な事であらう。私は良人の肩や脊中を蒲團の上からそつと叩いて遣る事に依つて僅かに自分を制へ乍ら又針仕事の前に坐つた。

私は、その夜程幾年着慣れた蒲團の綿の固さを、又十六燭の電燈の暗さを、天井や貼り壁に幾條となく流れて居る雨の汚點を、心に掛けた事はなかつた。

（九）

三日目の晝過ぎにやつと縫ひ上げて衣紋竿に掛けたまゝ暫くは惚れぼれと全で生きた人間をでも見るように眺めて居たその着物を、折りから退けて歸つて來た許りの上衣を脫いでワイシヤツ一つになつた良人の肩へそつと着せかけ乍

ら、私は彼の耳許へ口を寄せて斯う言ひたい氣持で一杯になつてゐた。

「勝手元に居るお雪さんが今に此處を通るでせうから、何卒、變に嬉しがつたような顔をしないで下さいな。ね、應揚につんと構へて下さいよ。」

然し、さう口に出して言ふまでもなく、私のこの二三日の急激な心の變化は、永年連れ添ふたものだけが知るあの何の說明もなしにぱつと反映してゆくような心を持つて居て吳れた彼に、じめ〱と感染して居た。

彼は、さも幾年も着古したものを着る時のような手慣れたぞんざいさでくる〱と帶を捲きつけて了ふと、ゆつくり姿見の前へ歩いて行つた。私は坐つた儘彼の後姿を見上げた。しなやかな地質の藍がかつた瀧縞が、彼の少しいかつい肩から女のような細腰の上を滑つて未だ靴足袋の儘の踵まで流れて居るすらりと高い背丈けを、私は惚れぼれと見上げたのであつた。

と、私達のけはひを感じてか、手拭を冠つた儘のお雪が薄汚れた前垂れで手を拭き拭き、あたふたと茶の間へ這入つて來た。私は彈かれたようにその方へ振り向いた。そして、彼女の單純な驚嘆だけを現した素直な表情を見るゝ、好い加減調子高い聲を制へようともしないで、

「ねえ、存外よく似合ふでせう？これで、あんな風な色男振つた樣子さへしなきやあ、ほんとうの旦那樣だわね。」

とはしやいだ笑聲を立てたのであつた。

が、この私の笑聲が消えない間に、其處に突立つた儘その時までちつとも口を利かなかつたお雪の頰が見る見る引きつるように緊張して、殆んど苦痛に近い表情になつたかと思ふと、

「おゝけなる！」

と叫ぶような聲を擧げたのであつた。

良人の左肩に押し列んで鏡の中に映つた彼女のその時の顏を、私は何時までも忘れる事が出來ない。私は無意識の間にもどんなに彼女のその顏を見その叫聲を聽きたいと思つて居ただらう。

私は、小氣味よさと得意さとをちつとも隱さうとはしなかつた。そして、相手が何か言ひ出すのを怖れでもするようにせかくして、二三日前に見て來たデパートメントストアにどんなに心を惹く品々があつたかと言ふ事、良人のためにどんなものを買ひ調へようと心組んで居るかと云ふ事、其他凡そその時のお雪の心を小突き廻す事が出來そうな事柄を、ねちくとした意地悪さで立て續けに饒舌つたのであつた。饒舌り乍ら私は、お雪の「おゝけなる!」と叫んだ時の心を若し許されるものならば針の先へでも突き刺して何處かへぶら下げて置いて足るだけ見て居たい、と言ふ風な變な誘惑に自分の心が唆されて行くのを感じた。

この、私が無意識で或は意識して醸したかも知れない、お雪にとつては息も詰りさうな雰圍氣は單純な彼女の心をすつかりと包んで了つたように見えた。彼女がその雰圍氣の中から逃げ出さうとして、私の眼の前で頻りに藻掻いて居る有様を、私は北叟笑み乍ら手をつかねて見て居たのであつた。若しくは、逃げようとする彼女を毒々しい執ねさで何處の隅つこまでも追ひ掛けようとして居たのであつた。

私は自分の良人に、全で女形の役者が物見遊山にでも出掛けるような仰山な態をさせて、夕飯を濟ませると雪路の酒場あさり、活動芝居の見ものからさては場末がかりの浪花節まで一つ一つ、さして大きいと言ふでもないこの街中の種

が上つて了ふまで毎夜のように覗いては歸つて來た。

家を出る時も歸る時もぎいと玄關のどあを開ける毎に、私はどんなにうららかな笑聲を立てた事であらう。（お雪達の部室は死んだようにしんとして居た。そのしんとした中へ私の笑聲だけが筒拔けに通つて行つて氣味惡げなこだまとなつて戻つて來た。それ位、私達の武裝した幸福が、彼等の中に反響して行く有樣は私を充分に得意がらせたのであつた。）

私は又、良人の居間になつてゐる奥の六疊をどんなに居心地よく恰も女學生が戀人の部屋を飾るような心盡しをもつて飾り立てた事であらう。

又、朝夕の彼の食膳を小料理屋のちやぶ臺のようにごてごてと賑かにするために、お雪のあとを追つかけるようにして小籠を擡い込み乍ら、どんなに市場へ急いだ事であらう。流し許一杯に買つて來た材料を擴げ乍ら、如何にこの乾海苔が高價であつたかと言ふ事や、この罐詰の筍を探し出すのにどんなに骨が折れたかと言ふ事を、お雪に話すのを忘れなかつた。

吹雪のために外へ出る事の出來ない夜なぞ、良人と二人限りの樂しげな宵語りの聲を、又は煎茶を啜り菓子を喰べる音をさへ彼女等に聽こえよがしにしなかつただらうか。

そうし乍ら、幾度、彼等との間を隔てて居る唯つた一枚の扉を、恰も敵の砦でもあるように憎惡をこめた眼で白眼んだ事であらう。

（十）

私の意企は美事に成功した。いや、餘りに成功し過ぎて、踏み躙られた蟻のように脆くも破れて了つた敵をみ出した時、私しは少し悲しくささへなつた。

お雪達の座一からは話し聲も笑ひ聲もかいたと言ふ物音さへも聽へて來ないようになつた 彼女は井戸端に佇みながら頻りに彼女等の貧を喞つた。彼女は、彼女の遣つて居る内職の針仕事がどんなにまだるつこいかと言ふ事、彼女の良人の俸給がどんなに少いかと言ふ事、自分達は一生涯浮み上る事は出來ないだらうと言ふ事を意地も張りも拔けた淋しい顔をし乍ら私に訴へたのであつた。

その頃から忍びやかな彼女の啜り泣きが、邊りを憚り乍らそれでも聲を制へ兼ねてつい大聲に怒鳴つてゐる大野のだみ聲に纏れて、屢々茶の間までも洩れて來た。何か言ひ爭つて居るけはひ、瀬戸物を投げつけるような音、そんなものが突然、薄氣味の悪いしじまの中をかすめて通つた。

大野の歸りも明るい中と言ふ事はなく夜も非常に更けてから而も酷く醉つ拂つて、今はもう人の思惑さへ氣にしないと言ふ風に、亂暴に扉を叩いて、

「開けろ、開けろ!」

と怒鳴つてはお雪を呼んで居たが、それも一頻り、軈て二晩も三晩もうちを外に歸つて來ない事があつた。

そんな夜毎にまんぢりともしないで、夜廻りの拍子木と鍋燒うどんの呼聲とに次第に更けてゆく事を知り乍ら、それでもひよつとと思つては遠くから馬橇の物悲しい鈴の音が近附いて又遠ざかつて行くのを幾度となく窓越しに見送つては、待ち明かしたと言ふ事を、お雪は溜息と共に私に物語つた。

酷い吹雪の朝、お雪は頭巾も冠らない雪にまみれた頭髮をぼうぼうさせて外から歸つて來た。丁度、玄關を開けやう

として立ちかけた私は驚いて何處へ行つたのかと聽いた。

極度の悲しみと寒さのために蒼ざめて慄へて居る彼女の頬には溶けかかつた雪が、丁度今流れた許りの涙のようにかかつて居た。じつと一ところを見据えて居乍らそれで何にも見て居ないような大きな眼をみひらいて、彼女は只私の問ひに答へるためだと言ふ風にうつろな聲で氣紛れらしく、豐川橋の袂に立つて居たのだ。と許り言つたけれども、その時、彼女の眼からほんとうの涙がぽた〳〵と流れて來た。

彼女は急に早口になつて、そのあとをつけ足した。

——夜が白々と明ける頃から行つて今まで待つて居たけれども、彼女の良人は歸つて來なかつた。彼は屹度　平岸へ行つたに違ひないのだから其處からは一本道の豐川橋を通らないつて言ふ筈がないのに——と言ふのであつた。

平岸と許りでは辨るまいけれども其處は殖民地には附きものの質のよくない宿屋ならびの町なので、私はそう聽くと直ぐひとりでに變な笑ひが唇に上つて來るのを感じないでは居られなかつた。

大野が二日も三日も居續けして歸つて來ない。お雪が夜の明けない中から待ち伏せして居る。これは私の意企が最後のどんづまりまで成功した事を意味するものでなくて何であらう。大野は私の思ふ壺の中で踊つて吳れた。彼等の水の泡のような幸福はあとかたもなく消えて了つた。

今となつて私はこの時の私の頬に浮んだであらう殘忍な笑ひを想像する事すら出來ない。お雪が彼女自身の悲しみに囚はれて私の顔を見やうともしなかつたと言ふのは、まだしも幸な事であつた。

彼女は尙語り續けた。

——こんな酷い吹雪の時に、あの吹きつさらしの橋際に立つて居て若しも朝歸りの大野に逢ふ事が出來たなら、假令

彼が鬼のような心をもつた男であらうとも彼女の雪にまみれた姿を見て哀れを催さぬと言ふ事はあるまい。彼女は、彼を彼の遊び場所から引き摺つて歸らうとは思はない。唯、少しでも彼の心を惹く事が出來るならそれでもう充分なのだ。――

あゝ、これ程弱々しいそれで居て人の心の奥底をひたくと打つ言葉があらうか。而もその時の私にとつて、これ程滑稽な馬鹿げた泣き事にしか聽へない言葉があらうか。

私は、泣きくづをれた彼女の背にもつと激しい鞭を加へるために、より殘忍な言葉を見出さうとして居た。そして、あの不愉快な年增女の鬪々しさをもつて、さもありとあらゆる男心をすつかり掴んで了つたとでも言ふ風なとり澄ました口調で、色戀に狂ふ男の心にそう言つた風の笑ふべき眞心が、どんなに小うるさいそれだから執念深いものに思はれるか、と言ふ事を彼女に說明して、

「放かしてお置きなさいな、馬鹿々々しい。寒い目を見るだけ損だわ、」

と手もなく言つて退けたのであつた。

夕闇に紛れて質草を小脇に搔い込み乍ら、お雪の姿がこそくと出て行くのを、又道具屋の親爺が呼び込まれて目ぼしい品の一つ一つが彼等の座敷から失はれて行くのを、私は良人の頰ぺたをつつ突き乍らどんなにさもしい北叟笑みをもつて見て居た事であらう。

もとく貧弱な彼等の持ち物は丁度、梢に殘つた柿の葉が折からの木枯しに一溜りもなく吹き飛ばされて行くような呆氣なさで、消し飛んで行つた。

その中に裸のまゝでとり残された男女はお互に抱き合つて慰めやうとはしないで、裸であるが故に尚更醜い争ひを続けて行つた。

或夜、大野は酔眼に皺を寄せてにや／＼し乍ら、私達の茶の間へ這入つて来た。（彼の物凄い最初の印象は、みすぼらしい釣鐘マントのお蔭で私の前から姿を隠して居たけれども、この頃から漸く、再びほんとうの姿を現しかけて居た。彼はもうその時に、のちの計畫を凡てして居たのであつたらう。）

這入るといきなり、

「嬶あはめそ／＼しやあがるし、酒手はなし、つく／＼貧乏が可厭になりましたよ。」

と言つて、から／＼と大見得に笑つて見せた彼は、それでもつて（俺あ全く貧乏だよ。だが貧乏も乙な洒落だと思つてりやあ気にもならねえや、）とふざけた啖呵を切つた振りを見せたがつて居たけれども、悲しいかな、血管の網目を張つた酔眼には尾羽打ち枯らした人間のさもしさが一杯に燃えて居るではないか。（いや或は、僻目に許りものを見たがる私の眼にそう見えただけであらうか。）

「處で、開いた口に牡丹餅と言ふお誂へ向きの甘い話しがあるんですがね。如何です、一つ乗つて見る気はありませんか。」

其時、良人はちらと私の方を見た。その眼が、「如何だ、ちつと胡散臭いね、」と言つて居た。そして、

「いや、うつかり乗れませんよ。悪くあがくとためにならないからなあ、」

と冷めたく響く一言で、大野のふやけた言葉をぴしりと受け止めた。その調子には相手の思惑にこだはらない、如何

かするときくつと向ふの胸を刺すような冷酷さがあつた。

彼はこの勇氣を何處から又何時の間に得て來たのか。私は良人の動かない表情を吃驚して見上げた。

この一ケ月の間に彼はほんとうの旦那樣になつて居たのだ。知らず知らずの間に私のかけた催眠術の中からこの勇氣を持つて來たのだ。

（私は自分のこしらへた藥が餘り利き過ぎて、お雪も大野も自分の良人の彼までが、もう少しで私の意企からはみ出しそうになつて居るのを感じた。）

然し良人は何にも知らなかつた。彼は、生れ附いてからの旦那樣のようなあの威容のある落付きをもつて、役者なら二枚も三枚も上の大野に向つてべん〳〵と長談義を初めたのであつた。

——如何なる時にでも自暴を起すのは一番不可ない。馬鹿を見るのは當人だけだからだ。然し惡あがきをするのはそれよりも不可ない。固くして時の來るのを待つてゐなければならない……。

大野は、如何にも我慢がならないと言つた風に、それでも口許だけには卑屈なおべつか笑ひを浮べ乍ら手を振つて、良人の言葉を遮つた。

「いや、もうすつかり決めちやつたんですよ。今の處、問題は只資本が少し許り足りないと言ふ事だけなんですがね。其奴も明日、嬶あが田舍へ歸つて拵へて來るつてやあがるし、いゝ何、彼奴のお袋と言ふのは生さぬ仲とは言ひ條存外氣の小さい律氣な女でしてね、お雪が折入つて賴むとなれば四の五の言ひやしないだらうと思ふんでさ。それに、これ迄だつて此方から仕送りこそすれ塵つぱ一本でも世話んなつた事あなしね、全く一生に一度と言ふどたん場の無心なんだから、ちつと許りの無理位聽いて吳れたつて罰あ當りやせんさ。」

と言ふ風な彼の言ひ草は、もう一歩で芝居がかりのゆすり文句になりそうであつた。それだけに現實味の乏しい彼の話しを、幾らどたん場の思案の末に出た事とは言へ、私は本氣で聽く氣がしなかつた。自然、鼻つ先でせせら笑ひたくなるような氣持を半分は彼に悟らせ、半分は隱して置きたい位の積りであつたのだが、彼は知つてか知らいでかえへゝと人を馬鹿にしたような笑ひを洩し乍ら、その「開いた口に牡丹餅のような甘い話し」の內容を話し初めたのであつた。

――話しと言ふのは簡單な、つい近在に三等郵便局の賣物が出たのを買ひとらうと言ふのだけれども、色々ひつからんだ事情があつて……(彼は此處で狡猾さうに笑つた。)表向き、好い買手の附くのを待つて賣るとなれば、切手の賣上げが日に××圓局長の手當と言ふのが年×××圓と言ふ甘い話しなのだから、到底も此方の手なぞへ廻りつこないんだが其處は又有難い事に……(ここでも彼はふふんと笑つた。)そこの馬鹿主人が大それた藝者狂ひの、一人の女をしつかりした物持ちの旦那と張り合つて明日が日にもその女を向ふの男に落籍されやしまいかと言ふ心配で血迷つて居る矢先きなんだから、その男のためには半年先きの五千圓より今日の千圓の方がどんなに有難いか解らないのだ。――

彼はそう語り終ると例の頰の疵痕を尙更引き吊らせるような大口を開いて、威勢よく笑つた。私にはその笑聲が、「いや、人の弱味に附け込んで甘い汁を吸ふのは格別ですよ。」と言つて居る言葉と同じように聽こへた。

私の心のそこうの方に微かに波打つて居た不正義に對する憤りが、はつと頭を擡げやうとした時、彼は矢庭に立ち上つて、

「大ぶりな長火鉢を向ふに廻して朝つぱらから茶碗酒と言ふ境涯もそう遠くはないな。」

と憎さげな捨て獨白を殘して出て行つたのであつた。

（十一）

翌日は、北の國ではそれが癖のからつ風が屋根から屋根へ這ひ廻つて居たけれども、雪の上を跳ね返す日の光りだけでも暖かげなどつちかと言ふと穩かな日和であつた。

その晝過ぎ、如何工面をしたものか——幾度か水を潜つた銘仙ではあらうけれども——仕立卸しの小ざつぱりとしたいでたちで、今日は又、改つた昔風の前の高い束髮に襟だけ眞白に塗つたお雪が、暇乞ひに私の部屋へ來たのであつた。

丁度私は、夕方の買物に行かうとして居た處だつたので、今にも疊の上へ手を附いて改つた挨拶を初めそうなお雪を、

「まあまあ、其處まで御一緒に行きませうよ。」

と、手に持つて居た籠を彼女の鼻つ先きで振つて見せて止め乍ら、自分で先に立つてさつさと表へ出たのであつた。

何時もはき〳〵しない女ではあつたけれども今日は又格別に籐編みのバスケツトでもない小風呂敷の包みを手をすぼめた袖の中へ抱へ込んで、せう事なしに歩いて居ると言ふ風な、うつ向き勝ちにのろ〳〵と遣つて來るので、私は幾度も雪の上に立つて彼女を待つて遣らなければならなかつた。

太い薪を積んだ馬橇が私の前を通り過ぎて行つた。人間のやうに涙を一杯溜めた大きな眼をみひらいき乍ら馬は眞白い息を吐き出してはあ〳〵喘ぎ喘ぎそれを曳いて居た。同じ馬と橇がお雪の側をすれ〳〵に通り抜けようとした時、彼女は未だ固らない路端の雪の中へぐさと片足踏み込んだ。

私はいら／＼して思はず大きな聲で、

「早くいらつしやいな。偶に田舍へ行くんだと言ふのに全で……」

と言ひかけて、そのあとの「もう二度と歸つて來られないやうな處へでも行くやうなのね」と言ひたかつたのを、はつとして止めなければならなかつた。馬はとうに行き過ぎて了つたのに雪の中から藁沓を拔かうともしないで、ぼんやりと立つてゐる許りか薄く白粉を掃いた頬には涙が條を引いて流れて居るのを私は呆れて見守り乍ら、それでやつと前の言葉を呑み込んで、

「大野さんは如何したんでせうねえ、見送りには行かない積りなのか知ら」

とさも思ひ遣りのありさうな言葉ととり替へたのであつた。

彼女は下唇を噛んでじつと泣きたいのを堪へようとするやうにして居たが、

「あの人は他處から廻つて停車場で落合ふようにするつて言ひましたけど……」

と、あとはくつ／＼と咽喉だけで泣くような聲の中へ埋つて了つた。

この愁嘆場は私には餘りだし拔け過ぎた。私はどんな所作事を遣つて好いのか迷はずには居られなかつた。

遠い田舍へ行くのだとは言へ、往き戻り唯つた五日や十日そこいらの留守に大野の事が氣にかかると言ふのか、と彼女の小娘臭い涙を見乍ら私は彼女を慰めようとするよりも、女郎の三年もして居た癖に太々しいと言ふ感じの方が先きに立つのを如何する事も出來なかつた。

で、市場の入口まで來た時に私は精一杯ふざけた積りで、

「泣くのはお止しなさいよ。歸つて來りやあ郵便局の奧樣で納つて居られるんじやあないの？」

と、自分だけは野菜市場のセメント塗りの土間の上へ飛び上つてから、指先きで輕く彼女の肩を小突いて言つた。

それに對してお雪は何とも言ひ返しはしなかつたけれども、つい吊り込まれたと言ふ風な淋しい笑ひを切れの長い眼尻に殘して、私の方へ目禮を送り乍ら街の方へ歩いて行つた。

私はふと、ほんの一瞬間ではあつたけれども私の心の底の何ものかが、彼女のその淋しげな笑ひに吸ひ込まれて行くのを感じて、思はず二足ほど往來へ踏み出さうとしたけれども、もう一丁も遠ざかつて行つた彼女の後姿から、丁度大横町の四つ辻に捲き起つた吹き通しの風で地面から吹き上げた粉雪が私の眼を遮つたのであつた。

彼女は斯うした淋しい笑ひを私の心に刻んだ儘、その時限り私の眼から見えなくなつて了つたのであつた。私は餘りに遲く、この時の彼女の涙を思ひ起さなければならない時が來たのを殘念な事に思つて居る。

(十二)

お雪が行つたその日から大野の姿も同じように消えて了つた。

と言ふのは、それから二三日過ぎた或日、何處からとも知れない使ひ男に、殘つた道具は皆賣つて了つたのだからこの男に渡して貰ひたいと書いた名刺を持たせて寄越した限り、彼は到頭歸つて來なかつたからだ。

ベケツや土釜の類までもすつかり運び出されたあと、がらんとした八疊の眞中にぺたんと坐つた儘私は何を感じただらうか。

私はほんとうに疲れ切つて居たのだ。彼等が來てから居なくなつて了ふまでの百日足らずの間、私は何をして居たの

だらうか。

泥沼の中で、會體の知れない蛸入道のぬらぬらした長い足ととつ組んで居たのではないか。そのためにどんなに無駄な心遣ひを、いやどんなに空な金遣ひをした事だらう。

私は、初めて正氣附いた人のようにあたりを見廻した。私の心に、その時まで姿を搔き消して居た「斉斎な私」がむく／＼と毛むくじやらな手を擴げて來た。

私はおろ／＼聲を擧げて、毀れた瀬戸物の缺けらを繼ぎ合せて見るようなはかない努力をして、色々なものを搔き集めた。

衣桁に掛つた良人のお召の褞袍や大島の散歩着を狼狽てて簞笥の底へしまひ込み、又、柾目の桐下駄の土を洗つて下駄箱の奥へ押し込んだ。昨夜空けた許りの罐詰の底にこびり附いた煮凍りを、溜息と共に見詰めた。

私は唯つた一日で三つも齢をとつたような氣がした。何も彼もすつかり氣抜けがして了つたのだ。私はそうして居る中にほんとうに慘めな——野分のあとの原つぱに唯つた一匹とり殘された兎が、體中の毛を一本一本ひつこ抜かれて裸になつて了つたような——情けない氣がして來た。

唯つた昨日までは私の心をあれほど惹いて居た良人でさへも、今は眞裸の儘、いや、古ぼけた紡績の鼠のやたら縞を着て、不精髭をぼう／＼生やして薄ぼんやりと立つて居るだけではないか。最早や彼は、直きに老いぼれて了ふであらう爺々むさい、それで居て甲斐性のない只の四十男に過ぎないではないか。

不可思議な玉手箱の中から立ち昇つた白い煙が、凡てのものの上を蔽ふて了つた。

私はこの煙の中に居て、遠い田舎へ行つた儘何の音沙汰もしないお母の姿をぼんやりと描いて居た。彼女はあの最後

の淋しい笑を浮べた儘私の方を見て居た。

私は今更のように彼女の大人しい身振り素振りさては愼しやかな口の利きようから優しい笑顔まで、一つ一つ彼女の影を拾ひ乍ら頻りに空しいイメージに向つてかすれた聲で呼び掛けて居た。

斯うした思ひは一日一日募つて行つた。その上に、曾つて彼女の居た間中執念深い女のねちねちした意地惡さで朝に晩に彼女の首に細紐を掛けてぐいぐいと引つ張るようないびり方をした私に、燒けつくような自責の念がのしかかつて來た。

私は、自分がどんなにさもしい根性のあくたれ女だつたかと言ふ事を極端に誇張して考へる事に依つて、も早や見る事の出來ないお雪の影に向つて許しを乞ふて居た。この、我れと我が體を嘖んで喜んで居る氣狂ひのような自己譴責はその時の私を一番慰めて呉れた。

私はこの慰めの中にやつと體を沈めて、靜かにお雪を懐しんで居たのであつた。

然し、この靜けさはそんなに安定したものでもなく、又この慰めも極めて力の弱いものであつたと言ふ事を私は直き悟らなければならなかつた。

彼等が居なくなつてから廿日も經つた頃の或日、六錢の切手を貼つた厚ぼつたい私宛の手紙が來た。

例の吝嗇な心柄から暑さ寒さの手紙づきあひまでしないで居た私の處へ一體誰が、と訝り乍ら態ざと裏書きの名をかくしたその封じ目を切る間ももどかしく讀み下して行く中に、私は實に意外な事實を知つたのであつた。

この手紙こそあのお雪が、恐らく今日邊り資本の足し前を抱へて大野の許へ歸つて居る頃であらうと思つて居たその

お雪が、この街とは端と端ほど方角違ひのK街の處もあらうに吉山町はとある樓の薄暗い部屋から細々と書き送つたものであつた。

碌々小學校さへも出ないであらう彼女が、思ひ切りあてずつぽうな文法と文字遣ひはもとより、書き現はされた內容の愚かしさ恥しさを隱さうともしない見さかひなさ、そんなものに對する侮蔑などをすつかり塗り潰して了つて、ひた〳〵と私の心を打つたものは、その手紙一杯に漲つて居る便りない女の身を切るような哀婉の聲であつた。

彼女は、何も彼も投げ出して私の方へ兩手をさしのべようとして居たのであつた。

――こんな處から手紙を出す私を輕蔑して呉れるな。そして、便りない私を憐んで呉れ。

私は大野といふ人間を今日と言ふ今日が日までこんなに酷い奴だとは夢にも思はなかつた。私は欺かれて賣られたのだ。(彼女はここから全でひすてりいにかかつた女みたいに、みさかひの附かないせき込み方で大野の無情を列べ立てて居た。)

私はもと居た遊廓でも律氣に年期を勤め上げてもうあと一ケ月と言ふ處であつたのに、大野を知つてからと言ふものは(彼女はここで下手な浪花節のような言ひ廻しで、如何なる天魔のみ入りしか、と書いて居た。)折角丹精した身の廻りのもの小道具類、さては着物の類までもすつかり彼のために入れ上げて未だその上に一年半も年期を增さなければならなくなつたのであつた。

彼と一緒になれたのも他處眼には落籍(ひか)されたとも見えやうが、何を薄情な彼にそれだけの實意のあるものか。丁度遊廓移轉の事があつて、律氣に勤め上げた女には情け深い樓主が證文に棒を引いて呉れたので、ほんの着のみ着の儘で世

帶を持つたのであつたけれども、それからの苦勞とても疾うに皆樣の御承知の通り、稼ぐに追付く貧乏なら如何諦めようもあらうものを、昔に變らぬ甲斐性なさと遊び癖、揚げくの果てが瘦せ我慢の謀叛氣で今度の郵便局の話し、(これとても今考へると嘘の事やらほんとやら、)それについつい乘る氣になつたのも皆私の馬鹿正直からとは言へ、ここでお前が眼を瞑つて唯つた十日の間體を貸して呉れたなら、その身の代の五百圓を一時の間に合はせ、郵便局を買ひとつて此方の名義にした上は、直ぐにもそれを抵當(かた)にして借りた金でお前を、未だ鑑札の下りないであらう前に迎へに行かう、とまで言つたその時の彼の言葉を如何嘘言と思はれよう。

いつ時可厭な思ひをすれば良人のためは軈て身のためと思つた事の恥しさ皆樣には里へ行くと僞つて、ともゑ樓から迎への男が待つて居ると言ふ停車場まで行つたのだが、その時渡した五百圓と言ふ金にだけ用事があつた許つかりに、大野がこれ迄私と同棲して居たのかと思ふと、腸も千切れる程に口惜しい。

彼がそつと敎へておいた處書きへ宛てて幾度手紙を出して見ても返事もないと言ふのはもとより、ふと氣にかかつて周旋屋の手で彼の行方を探らせて見ると、その處へは姿も見せないと言ふのは、もと〱彼が始めからたくらんだ事なのであつた。

それをさへ、初めの間はもしやその中ひよつこりと迎へにでも來て呉れる事かと思つてゐたのも空賴みと解つた今、私はやつと欺かれたと言ふ事を知つた。

もう明日にも鑑札が下りやうも知れないけれども、この儘籠の鳥となる事の悲しさ、たとへ何處の果てに逃げ隱れして居やうとも、唯つた一眼彼奴に逢つて、恨みの數々を思ひ知らせて遣りたい!

何卒、私を憐んで、大野の行方を探つて呉れ。そして若しこんな願ひが許されるものならば、何卒、五百圓の金を持

つて私を迎へに來て貰ひたい。私は一生あなた達の許で召使ひとして働くであらう。(體一つしかない私が何でその大金を返す事が出來やう。)——

長い手紙は斯う結んであつた。

この最後の三行程の文句を、それが假令絶望し切つた女の風吹く小枝にも投げ掛けたい一縷の糊の、思案に餘つた淺智惠だつたとは言へ、最早やその時は昔の吝みつたれに輪を懸けた程になつて居た私の心が、只の形容詞として見過して居られる風のものではなかつた。五百圓と言ふ金高を讀んだだけで、私は私の帶の下で鳩尾の皮がぴくつと動いた程に吃驚した。

私は、相手が底なしの淵から細い腕をさし伸べて救ひを求めて居るのだと言ふ事をも忘れて、(明日にも病氣になつて死なないとも限らない生身の人間を、假令一生召使ひになるからつて言つたとて、五百圓と言ふ大金と取り替へるなんて言ふ酔狂な眞似が如何して出來るものか。)と、私の坐つて居た處から出窓の隙を透して僅かに見える遠い空を見詰め乍ら、呆れたように心の中で呟いたのであつた。

が、直きに私は、人間生き死にのどたん場から呼びかけて來た言葉をさへ斯う打算しないでは居られない私が、どんなに吝みつたれ根性の女だかと言ふ事を考へて誰も居ない部屋の中に居てさへもひとりでに顔が赧くなつた。で、「五百圓」と言ふ金高と一緒に、私は自分の吝みつたれ根性をそつと遠い方へ押し遣つた。そして、それに觸れないような處で精一杯の親切を賣らうとして、まともに手紙を書いた眼に見えない女の方へ向き直つたのであつた。

そうした處で私の不幸は、もう一つの別な——と言つてそれも矢張り一種の病的な自己譴責に過ぎないのだけれども——考へに打つかつた事にあつた。

お雪は果して大野ひとりに賣られたのだと考へて好いものだらうか、と言ふのがそれであつた。もとより、彼女の手紙にもある通り彼以外の誰がそうした殘忍を敢てしやう。而もその彼にこの殘忍な決意を促したものは誰であつたらうか。

彼は、私達の座敷へ越した當座、釣鐘マントに赤ゴムの靴と言ふいでたちにも、お神酒ほどの呑みでもない晩酌の量にも身柄を辨へた幸福を感じて居た。いや居たらしく見受けられた。その幸福は、彼等が身柄を辨へて居る限り續くべき筈のものであつた。

それを全で、揚子の先きでちく〳〵とほぢくるようにつゝついた者は誰だつたか。誰も彼等に、彼等の貧乏を朝な夕な痛感せしめないでは置かないように、それがなけなしの札びらだつたとは言へ見せつけがましく切つたものはなかつたか。

それは皆、この私自身でなくて誰だつたらう。――

私は此處まで考へた處で、あの初めて部屋を借りに來た晩の暗い玄關の中でぎろつと燐のように光つた大野の眼が、この弱氣な私の考へを何處か遠い處からせゝら笑つて居るようなのを見るような氣がした。

私ははつとした。そして、睨みの利かないみえを切つて、この彼の眼を見返した。

「惡黨奴！私が一寸斯う考へたからつて、如何してお前の引つかけた砂を被らなきやならないつて法があるものか、あつて堪るもんか。」

私はそう、低い聲で彼の眼に言つた。

斯うしたのちで私は、彼がどんなに卑怯な無頼漢だつたかと言ふ事を極端に誇張して考へる事の方が、自分の氣持ちを

極めて安易にさせると言ふ事を發見した。で、若しほんのとばつちり程でもお雪の不幸に關して私に責任があつたとしても、その微かなとばつちりをさへも塗り潰して了はうと決心した。
そこで私は、もう一度お雪のたど〳〵しい手紙を讀み返した。そして、大野の罪をどんな手段で鳴らすべきかと言ふ事をじつくりと考へたのであつた。
夕方、良人の歸るのを待ち兼ねるやうにして私は彼にこの話しをした。
斯うした場合、兎かくはき〳〵しない處の心細い味方ではあつたけれども、煽てたりすかしたりして私の思案に力を添へさせるのは、せめて附け景氣だけの役には立つのであつたから。
彼はその二た昔前の見習給仕時代に夜學教師の法學生から教はつたと言ふ古ぼけた六法全書を持ち出して怪しげな條文を探り當てて吳れるし、私は私でそれを如何言ふ風に適用するかと言ふ事に就いて智慧を絞つたのであつた。斯うして一夜さまんぢりともしないで私はお雪にあてて彼女の手紙にも敗けない程な長さの手紙を書いて遣つたのであつた。
今にして考へて見ると、その時の、少くとも私だけはお雪の不幸な出來事に對してちつとも同情して居たのではなかつた。否な、寧ろこんなに思ひ懸けない素晴らしい出來事が起つたと言ふ事で、どんなに面白がつて居たか解らない位であつた。
一番痛快だと思はれた事は、あのなよ〳〵と弱々しい心の山内一豊の妻よりも貞節であつたお雪が沒義道な良人の仕打を恨んだ結果だとは言へ、あの長い手紙一杯に良人を罵りこき下して居る事だつた。
私はどんなに長い間こんな時の來るのをじれつたがつて待つて居ただらう。私のその時の返事が、假令尻尾に火の付

いた山犬をせつせとけし懸けたような文體になつたとしても不思議のない事であつた。

私はその返事で彼女に、如何して彼女は大野に復讐すべきかと言ふ事を敎へた。寧ろ敎唆した。

私は次のように書いたのであつた。

――彼女は五百圓と言ふ金の力を藉りないで自由になる事が出來るであらう。（私は先づ斯う書く事に依つて、私が金を出し澁つて彼女の願ひを退けたものではないと言ふ事を彼女に吞み込ませたい積りであつた）

彼女は假令内縁にしろ立派に有夫の女だ。そして、針仕事をでもすれば如何に細々ながらもそうした性的職業なぞに依つてでなく自活するだけの能力をもつて居る。一番肝心な事は、この出來事が憎むべき詐欺の上に立つて居るもので彼女の全然預り知らない間に行はれた事だと言ふ事即ち、大野に欺かれて賣られたのだと言ふ事などを、隙を見て警察へ訴へ出よ。（これらの凡てが良人の怪しげな六法全書の中からめくり出されたのは言ふまでもない。）――それから私は附け加へた。――彼女はもつと強くならなければ不可ない。強くなつて今の彼女の代りにあの憎むべき大野を徳の爲にした上で、一日も早く歸つて來い。自分達は何時でも双手を擧げて彼女を迎へるであらう。……

（若し眼に見えない神のようなものがあつてその時の私の心を窺つて居たとしたら、彼は、「けちん坊よ。お前は一文なしで素晴しい親切を施すじやあないか。」とせせら笑つた事であらう。）

（十三）

お雪達が居なくなつてからと言ふものは、全でふぬけのようになつて居た私の心が、彼女への返事を書いた時から素晴しい期待をもつてはちきれそうになつて居た。

これから數日經つた或日、私は私の精一杯のそれはおせつかいには違ひなからうけれども只、通り一ぺんのおせつかいだと言はれたくない、變にひつからんだ親切が、あれ程期待をもつて居た親切が、如何に報いられたかと言ふ事を知つて、あつと背中をどやされた時のようにのけ反る程吃驚したのであつた。

折り返して來たお雪からの返事は極く短いものであつた。短いだけに諷刺とも警句とも嘲笑ともとれるその手紙を見て、私はその時程不可解なお雪を見た事がなかつた。

それには斯う書いてあつた。

――今初めての、處こそ何處とも書いてはないが大野からの手紙が來た。私はほんとに間違つて居た。彼は決して私を欺いたのではなかつた。結果がそれと同じ事になつたからと言つて彼を恨んで居た事を、今ではほんとうに濟まなく思つて居る。彼は却つて、他の詐欺師にひつかかつたのであつた。そしてその男のためにすつかり金を捲き上げられて了つたけれども、何卒、彼を恨まないで、彼の馬鹿正直であつた事を恨んで呉れ、と書いて居た。そして彼は又、

一年なり半年なりその儘辛棒して呉れたならば、假令、樺太シベリアの果てで坑夫人足の稼ぎをしやうとも必ずお前を迎へに行く。――そう誓つて居た。

ほんとうに私は間違つて居た。今はもうちつとも彼を恨んでは居ない。

それにしても、この前に書いたあの馬鹿々々しい自分の手紙が恥しくて堪らない。何卒、燒き棄てるか送り返すかして欲しい。――

手紙は、それだけで結んであつた。

故意か忘れたのか、私に唯つた三日でも氣を揉ませた事に就いては一言の挨拶もなかつた。私は手紙を握つて居た自分の手がぶるぶると慄へる程、かあつとなつて了つた。ふいに足をすくはれて投げ出されたような氣がした。

最早や、その手紙の中には何も彼も投げ出して倚りかかつて來ると言ふ風な便りなさはちつとも見られないで、あの同居して居た頃の開き扉一枚を睨み合つて居た頃の忌々しいお雪の顏が浮いて居るだけであつた。

彼女は、私が寢も遣らないで書いたあの長い手紙よりも、所さへも明かさないで己れの罪跡を晦まさう爲めに嘘八百を書きなぐつたであらう大野の怪しい手紙の方にどんなに心を奪はれたかと言ふ事實は、私をこの上もなく侮辱した。

私の親切（少くともその瞬間に私は私の遣つた事をそう信じて居た。）に唯つた一言の感謝の辭さへも惜しんで居る彼女が、大野のぺてん師の前には、手もたく降參して了つて居るではないか。

私は呆れて全くぼんやりして了ひそうであつた。

誰も居ない座敷の眞中にその手紙を投げ付けて、私はほんとうに聲を出して怒鳴つた。

「何て骨抜きの馬鹿女だらう！どうせ一遍女郎をした女だもの、二度でも三度でも好きなだけ勝手に遣ると好いんだ！」

然し、そう怒鳴つた位では私の腹の虫の承知しよう筈がなかつた。

もうその時の私には、當のお雪が女郎になりたがつて居やうが居まいがそんな事はてんで問題になつて居なかつた。

そつちがその氣なら勝手に遣つて見るが好い！如何せ横車の押し合ひだ。そんな破れかぶれの氣持ちまであつた。私は、あの忌々しいお雪にそんな貞女面をさせて置くのが如何にも業腹だつたのであつた。

そこで私は、良人の歸りを待つだけの辛棒氣もなくて直ぐに又返事を書いたが、これは手紙と言ふよりも挑戰狀みたいたものであつた。私は葉書一杯に全で叩きつけるやうな文句を書いた。

――ぺてん師の罪をさへ許した貴女は實に天女のやうな女だ。人の罪を許すのはまことに結構だけれども、自分がその背負ひ投げを喰ふのだけは止した方が好いだらう。――

私はこの挑戰狀を送り付けて置いて、そのあとの言葉を廻らさうとして居た。

丁度その時、全でお誂へ向き通りの段取りで、

「御免！」

と言ひ乍ら一人の若い巡査が、私の家の玄關に姿を現はしたのであつた。鉛筆に手帖を携へた彼は言ふまでもなくお雪の身許調査に遣つて來たのであつたが、その彼の手帖が今までに調べた處によると(勿論お雪の方の言ひ草なのだが)五百圓と言ふ身代金の必要は併つてお雪の大病の時私から借りた金を、今回是非とも拂はなければならなくなつたためだ、と言ふのであつた。

この見え透いた嘘言は單なる嘘言として受けとるよりも、あのぺてん師に對するお雪の氣狂ひ染みた惚れ方のために起つた、貞女面のさせる處として、私には如何しても見過ごせない嘘であつた。

「滅相もない！如何してこれ丈けのお金を人に貸しとくだけの餘裕が、私共にあるものですか。」

と言つた口の切り方で、私はべんべんとこの嘘言の依つて來る處を發きに懸つたのであつた。

この時の私は、全で何かつきものでもしたやうな具合であつた。唯だ一つの自分の意企に向つて驀地に進むために、餘計なものは何でもどしどしと突きのけて行つた。

私は彼の手帖の中に書かれてある箇條書を一つ一つ覗き込んで自分の意見を述べるような振りをし乍ら、その箇條書を自分の言はうとする事の方へ押し曲げて行から行からとした。

私は此處で再び六法全書を振り廻したのち、お雪がどんなに優しい貞女であつたかと言ふ事を様々な曾つては私自身をいらいらさせた彼女の良人への心盡しを、てこ盛りにして彼の前に列べて見せた。

そして、——若し彼女が貧しい家に生れたのでなかつたなら、彼女のような女こそ生れ乍らの淑女なのだ。この、一體ならお上から木杯をでも下さるべき女を如何なる理由からにもせよ娼妓なんかにする事を許可されると言ふ事は、お上の御處置として實に悲しむべき事だ。(私はここで、ここら邊りの街でさへ太鼓を叩いて居るような救世軍の口吻を眞似る事を忘れなかつた。)

彼女は今まで、不當に罰せられ過ぎて來た。今度こそ、この惜むべき詐欺を行つた大野が罰せられて然るべきものではあるまいか。——

と、言ひ終つた時には自分で自分の言ひ草の中で醉つ拂つて了つて居た。醉つ拂ひ乍らこんな醉つ拂ひの中に在つて而も理路井然とした自分の言葉が、相手に與へたであらう効果をも充分に知つて居た。

(その時の私は、若し自分の的が外れた場合には、假令姥櫻の、風情は劣るとは言へ、この十二三年來試した事もない自分の色つぽい臟をさへ、この若い巡査の上に試す事を辭さなかつたであらう。)

然し、彼は私の注文通りに感激して與れた。そして、下級官吏の今にも擧手の禮をでも行ひかねない、あの滑稽な律氣さをもつて突つ立つた儘、

「いや、仰言る事はよく解りました。こんな事がすつかり上つて了へば、假令樓主がどんな手段を弄したとしても、こ

の女に許可を與へられると言ふ事はありますまい。御心配には及びません、」
と言つて、玩具のような帽子を頭にのつけ乍ら雪を踏んで出て行つた。
私を一廉の經世家扱ひにして濟まして居たこの若い巡査を、私は慎しく送り出してから、「御心配には及びません、」と言ふ言葉がどれだけの値打のあるものか、もう一度頭を振つた。
だが、恐らく私の資金はずん〳〵進んで行くであらう。

幾日か、幾十日か經つた。
お雪の處からはあの時を限りに杳として便りもない。勿論あの若い巡査とても、あの事件の結果を私の處へ報告しなければならないと言ふ義務はない。
私ははつきりさるべきものがはつきりしない時に感じるあの焦燥を感じて、遣瀬ない日を送つて居た。
この時、唯つた一枚の新聞紙がこんな事件の結末としては餘りに呆氣な過ぎる古新聞の切れが――それも、偶然良人が外から買つて歸つた食パンの包み紙になつて居た――凡てを解決して與れた。
小標題は「現在の良人に欺されて、」とあつて、「シベリアへ賣られた女」と言ふ例の如何にも田舍新聞めいた人間の卑しい興味を滿足させる事だけをめやすに置いた書き振りの三面記事に、私の眼がぶつかつた時私は其處に何を見出したであらうか。それがあのお雪の事だと知つた時、私は殆んど喪心せん許りに驚いたのであつた。
恐らく今頃は、鬼のような樓主から遣といあまだと許りさんざ打擲せらたらうけれども、しよう事なしにも借金に棒を引かれて、何れは同じ小料理屋の二階ででも、凝り性もなくあのぺてん師に心意氣を見せて居るであらうと思つて居

たお雪が、娼妓の鑑札が下りない許つかりに（いや、私が用もない横車を押したがつた許りに）そこは慾に拔け目のない樓主の、殖民地には特有の親分子分の仲間の莖で、それからそれへと賣り渡されて、どどの詰りがシベリア三界までも流れて行く事になつたのだとは……。

私は長い長い惡夢から初めて醒めた人のように、邊りを見廻した。そして其處に全で違つた世界を見た。それは假令、自分の興味一つを中心に置いた變な意地つ張りから遣つた事とは言ひ條、さう遣つてお雪に鑑札が下りないように仕向けた事の心の底には、又一片の眞心があつた。否や、確かにあつたのだと、せめて今になつては信じて居たい。

然し、もうそんなものさへ何處か遠くへ消し飛ばされて了つたのだ。

意地の惡いそれで居て巨人のような恐るべき力を持つた運命は、小つぽけななりに小まつしやくれて、その猾智惠の淺い人間の意企を、何の會釋もなくぐん〳〵と出し拔いて行つたのだ。

私は生れて初めて、（ほんとうに私は生れて初めてと言ふ言葉を誰の前ではつきり言ふ。）敬虔な心をもつて、見えないお雪の影に向つた。そして心から手を突いて彼女に詫びたのであつた。

——お雪よ。何卒私の情けない量見を許して呉れ。いや、若しもお前の氣が濟むなら私の馬鹿を笑つて呉れ。そして、お前の上に許された生活なりに明るい氣持になつて呉れ。

何卒、殊更に破れかぶれの賣春婦になつて、梅毒の膿汁の中にのたうち廻り乍ら、私の方へ向いて、「見ろ！しみつたれたお前の量見のお蔭がどんなものだか、」

などと言ふ事を止めて呉れ。眞白い齒を剝いて、シベリアの果てから私を嘲笑ふ事だけは勘辨して呉れ。——

と、この同じ瞬間に、私の頭の中に燐のように光る大野の二つの眼が、

「どうでえ！　俺の遣つた事は、」

と言ひ乍ら、甘まうまと天網を潜り抜けて恐らく今頃は、第二のお雪の膝枕で惡たれ口を叩いて居るであらう有様がぱつと浮んだが、それは唯、ほんの一寸頭の中を通り過ぎた幻影に過ぎなかつた。

私はもう、彼の事なぞちつとも氣にしては居ない。

唯々慚愧の涙に暮れ乍ら、あの二通の手紙を恰かも風の中に明滅する燈火の最期のように私の處へ殘した儘、遠くシベリアへ流れて行つたお雪の上に、一日でも明るい日が照るように、ひそかに祈り續けて居る。(完)

——西巣鴨の寓居にて——

一九二三、四、二八、

戯曲

『投棄てられた指輪』

―（愛とは彼等が取交す二つの指輪である）―

金子洋文

人

賢次（中學校の先生）

牧子（その妻）

弘二（その子）

俊子（その姪）

仙子

清子

時

現代

所

東北の都、秋田。（ある中學校教師の家庭）

一

公園の高臺に面した弘二の室。

室の眼下は汚ない公園の堀だが、それは觀客から見えない。

小春日和。

公園の樹木の間から白い公會堂が見える。

公會堂にはロシア饑饉救濟の音樂會が開かれてゐる、爽かな管弦樂が、かすかに聞えてくる。

公會堂から少しはなれて、豫報の紅白の旗が微風に動いてゐる。

幕。

清子が椽側の籐の寢椅子に斜に腰かけて音樂に聞きほれてゐる。間もなく牧子茶道具を持つて登場。

清子。(微笑しながら)日曜なので隨分人が出てゐますね。

牧子。(座敷にはいり)何しろ三日も降りつゞいて漸く晴れたのですからね。

清子。ほんとうに、今年は全く雨の多い年ですね。

牧子。今月にはいつてからも二日とお天氣のつゞいたことはありませんよ。おかげで夏からの汚れ物がどつさり溜つて困つてしまひました。

(短かい間)

清子。公會堂のオーケストラが、よく聞えてきますこと。

牧子。新聞社の方達が、ロシア飢饉救濟のために開いたのださうですね。

清子。え。

牧子、西洋の音樂はたゞもううるさいだけで私達にはさつぱりわかりませんよ……お茶をどうぞ。

清子。はい、

（室にはいつて來て座る。茶を飲む。）

牧子。お兄樣は、とう〳〵博士になられたさうですね。

清子。（輕く）え。

牧子。お宅では皆さんお喜びでせうね。

清子。父などは、もう死んでも思殘すことはないなどと、言つてゐるのですよ。

牧子。さうでせうね……お兄さんのお年はいくつでした。

清子。私と十違ひですから、三十二です。

牧子。まあ、まだその位ですか、私はまた七八かと思つてゐましたよ。昨日夫と話した時も、多分その位だ、と言つてゐましたのでね。

清子。先生はお忘れになつたのでせうか。

牧子。大勢の生徒のことですから、何もかもぼんやりしか覺えてゐないんでせう。

清子。さうでせうね……兄はいつでも言つてゐましたよ、松木先生は叱ることはないが、點が辛いからこはいつて。（輕

く笑ふ)

牧子。(微笑して)でもあなたのお兄さんは九十點以下をとつたことがないと言つてゐましたよ、こちらの中學校では、ずつと特待生であつたさうですね。

清子。え、おかげで私などは、お父さんから叱られ通しでした。

牧子。そんなことないでせう。本當にお宅の方は、皆さんよくおできになつて結構ですね。こゝのお醫者様仲間で、あなたのお宅位、幸福な所はありませんよ、病院はお忙いし、お兄さんは博士に出世なさるし、これであなたが良い處へお嫁入なさると、何もかも幸福づくめと言ふものですね。

(沈默)

清子。弘二さんは何處へお出かけなつたのでせう。

牧子。お友達の田山さんが、一時の汽車で東京へ行くといふので、停車場まで行つたのですよ、あなたがゐらしたら、待たしておいてくれと、言ひ殘して行きました。

清子。(帶の中から時計を出して見る)

牧子。もう過ぎましたか。

清子。え、十分過です。

牧子。それなら、もうぢき歸るでせう。

(短かい沈默)

牧子。村田のお君さんが、見えてゐるやうですが、御存知ですか。

清子。え、一昨日私の處へ來て、一日遊んで歸りました。お會ひになりましたか。
牧子。いゝえ、一寸町で見かけたんですよ、何うして歸られたのでせう。
清子。妹さんが、お嫁入なさるんださうです。
牧子。さう、さう、あそこには年頃の綺麗な娘さんがゐましたね。どちらへ嫁くのでせう。
清子。仙北の大きな地主さんの處とか、言つてゐました、
牧子。お輿入は何日です。
清子。明後日ださうです。
牧子。(一寸考へて)お君さんは、あなたと同じ年でしたね。
清子。え。
牧子。まるで、七つ八つ違つてゐるやうに見えますね、あなたは若く見えるし、あの人はぐつと老けて見えるし、女も、赤坊を二人も產つと、若さがすつかりなくなりますね。
清子。逢ふたびに顏が違つてくるので驚くんですよ。それに昔の華かな氣持まですつかりなくなりましてね。
牧子。赤坊を生むと、誰でもすつかりかはるものですよ、それがまた女として本當なんです。
清子。あの方は、昔は立派な考へを持つておられたのですがね。
牧子。女の持つてゐる華かな氣持とか、立派な考へなどといふものは、家庭には何の役にたゝないものですよ、さういつたものはまるで女の靴のやうなもので、家庭にはいると、すぐぬがなけりや、いけないものです。
清子。(無言)

牧子。(皮肉に) でもこれは、私達とちがつた立派な家庭や、若い人達には通用しないかも知りませんね。
清子。(苦しさうに) そんなことありませんわ。
牧子。本當です、生活が違ふといふことは恐しいものです。その人の考へまで違ひますからね。私は一度東京の親戚へ行つて、こり〳〵したことがありますよ。そこのお嫁さんは洋行までしたえらい學問のある方ださうですが、夫は勿論、お母さんまで下女同様に使つてゐるんです、あれが、新らしいやり方かも知れないが、私はそこにゐる間、一寸も心のおちついた日がありませんでしたよ。
清子。(無言)
牧子。まあそんな人が、弘二の嫁だと考へてごらんなさい、ぞつとしますよ、私などは三日一所にゐるだけで、病氣になつてしまふでせう、私達の嫁はやはり貧乏な教員風情の娘さんで結構なんです、釣合はぬのは全く不縁のもとですからね。
(苦い沈默)
牧子。でも、あなたなどはお幸福ですね。
清子。何うしてでせう。
牧子。もう、おきまりになつたさうですが。
清子。何でせうか。
牧子。そんなに、おかくしなさらなくても。
清子。(さとつて顔を紅くする)

牧子。帝大を出た方ださうですから、あなたとは全くお似合ですね。
清子。（無言）
牧子。御祝儀はいつ頃なんです。
清子。（きつぱりと）あの話はことわりました。
牧子。まあ。
（短かい沈默）
牧子。それは本當ですか。
清子。え。
牧子。まあ、何うしてそんなことをなされたのでせう、あんなに財産があり、學問があり、位置のあるお婿さんは、金の草鞋で探しても、めつたに見つかるものぢやありませんよ。
清子。（無言）
牧子。私は本當に喜んでゐたのですよ、何うしてそんな無茶なことをなされたのでせう、お父さんが不服であつたのですか。
清子。いゝえ、私が進みませんでしたので。
牧子。何うしてでせう。
清子。（無言）
牧子。私はその話を聞いた時、本當に安心したのですよ、まあ、どんなに重荷をおろしたでせう……何か、あちらで、

むづかしいことを言つてきたのですか。

清子。いゝえ、そんなことはありません。

牧子。(考へて)　何うしてでせうね。

清子。私はさう何もかもそろつた立派な方へ行きたくないのです。

牧子。さうですかね、私などにはあなたのお考へがさつぱりわかりませんね。(考へて)何かあつたのではないのですか。

私は時々いやな噂を聞くんですが。

清子。どんな噂でせう。

牧子。あなたが弘二と交際つてゐるために、いゝお話がいつでもこはれると、言ふのですよ。

清子。そんなことありませんわ。

牧子。それで私も弘二に注意したんですよ。あれは男だし、それに私の方は低い身分ですから、何うでも構ひませんが、あなたは今が一番大事な時だし、そのために大きな傷がつくやうでしたら、とんだことですからね、だから、あなたによく事情をお話して交際をよしたら何うだつて言つたのですよ。

清子。(無言)

牧子。それに弘二の嫁も、漸くきまりましたのでね。

清子。(苦しさうに低く)　さうですか。

牧子。どうぞお氣を惡くしないで下さい、皆あなたのお身體を心配してのことですから……私達の息子は何うなつても、少しもかまはないんです。

湍子。（無言）[illegible]

（苦しい沈默）

牧子。いやなことをお聞かせしましたね。私達の年になると、世間の口が恐しくて仕方がないんですよ、夫が先生などしてゐると、いやな噂がたつと、とんだことになりますからね。

湍子。本當にすみません。

（この時下の玄關でベルの音がする）

牧子。おや、弘二が歸つたやうです。

（梯子段を駈けあがる音がする、弘二はいつてくる）

弘二。只今。

牧子。お歸り。

弘二。いらつしやい。

湍子。今日は（かすかに言つて膝に涙をおとす）

（弘二暗い顏をしてちらと母を見る）

牧子。田山さんはおたちになつたの。

弘二。（不機嫌に）え。

牧子。何も言はなかつたかい。

弘二。誰にです。

牧子。私にだよ。
弘二。言ひませんでした。
牧子。さうかね。若い人達はあつさりしてゐてい丶ね。
（苦がい沈默）
牧子。（お茶をついで）さあ、お茶をおあがり。
弘二。（無言）
牧子。俊子は下にゐましたか。
弘二。さあ、ゐなかつたやうです。
牧子。まあ何處へ行つたのだらう、下を空にして（立上つて）私は下へ行きますよ、淸子さん、ごゆつくり。
淸子。はい。
（牧子退場）
弘二。（急に）お母さんが、何か言つたのでせう。
淸子。え。
弘二。僕はそれが心配で駈けるやうに歸つて來たが、おそかつた。
淸子。弘二さん。
（と、呼んで涙をおとす、沈默。管弦樂の音がはつきり聞えてくる、チヤイカウスキーの一八一二年の最後の部分、音樂が、やんで拍手の音がする）

清子。お母さんは何うして私を嫌ひなせう。

弘二。あなたの持つてゐるいろ／＼なものが氣にいらないのでせう。

清子。私の僅かばかりの學問ですか。

弘二。それもさうです、それにあなたの家柄がいゝのも氣に食はない一つです、母はいつでも自分が女王様でゐて、下の者をあはれんでやりたいのです。ところが、あなたはそれにふさはしくないのでせう。

清子。それぢや、何うするといゝのでせう。

弘二。水と油です、何うにも仕方がないでせう、母とうまく行つたら、今度は僕があなたと別れなければならないでせう、一番いけないことは、母と僕とがまるで違つてゐることです、母は自分の嫁をほしがつてゐるのです、悪く言へば召使です、それを僕の嫁にあてがはうとしてゐるのです。

清子。あなたさへ許せば、私はお母さんの召使になつてもかまひませんわ。

弘二。駄目です、母の望んでゐる召使はあなたのやうに新らしい考へを持つてゐてはいけないのです。第一僕と知合であることが一番悪いのです。

清子。（無言）

弘二。母の考へでは結婚に大事なものは神秘だと思つてゐるのです。お互に知らない同志、顔さへ見たことのない男と女。その男と女が、暗い灯の下でびく／＼しながら盃をやり合つて、それから暗い所で始めて顔を見合せて、そしていつまでも變りなくやつて行く、さういふ奇蹟がひどく氣に入つてゐるのです、だから、あなたと僕との關係が氣に入らないのはあたりまへです。

清子。（無言）

弘二。その神秘も或はいゝかも知れません。僕は惡いとは言ひませんよ。だが、何故私達のやうな關係が惡いのか、それがわからないのです。僕は幾度それで母と言ひ爭つたか知れません。だが駄目です。母の心には理屈のとほらない憎惡がうえつけられてゐるのです。

清子。何がそんなに憎いのでせう。

弘二。二人が神聖な火を汚したからです、母を無視して戀し合つたからです。

清子。では何うしても、私達はお母さんに愛されることが出來ないのですね。

弘二。（嘆息と一緒に）あゝ、僕がこゝを飛び出すことが出來さへすればなあ。

（永い沈默）

清子。もう、何もかもきまつたのですつてね。

弘二。何が。

清子。あなたの結婚が。

弘二。母はそんなことまで言つたのですか。

清子。え。

弘二。結婚の日まで。

清子。いゝえ、（少しふるへて）いつなんです。

弘二。來月の四日ださうです、母一人で勝手にきめたんです。どうでも好きなやうにするがいゝ。

清子。私達は何うなるのでせう。
弘二。あの人達の好きなやうに任せておくといゝでせう、誰が、そんな馬鹿な眞似をするものか、そんなに嫁がほしかつたらほしい人が貰ふがいゝ。
清子。あの人から返事が來たのですか。
弘二。（苦々しさうに）昨日來ました、まるで無自覺です。
清子。どんなことを言つて來ました。
弘二。馬鹿げてゐて、お話しにならない。
清子。私に見せて下さい。
弘二。とても不快だから見ない方がいゝでせう。
清子。私が讀んでいけないのですか。
弘二。そんなことはないが、あまり愚かで、腹を立てるばかりですよ。
清子。あんなに言つてやつても、結婚すると言ふのですか。
弘二。さうです、嫌はれても、僕に戀人があつても、親のいひつけだから結婚すると言ふのです。
清子。まあ。
弘二。全く、氣が知れない。
清子。弘二さん、その手紙を私に讀まして下さい。
弘二。（ます〳〵苦しさうに）讀んだつて仕方がありませんよ、無智で呆れるばかりです。

清子。（疑つて）私に讀ますのが厭なんですか。

弘二。そんな馬鹿なことが……　……。

清子。その手紙には、私が讀んでいけないことが、きつと書いてあるのでせう。

弘二。（無言）

清子。どうぞ、私を苦しめないで下さい。

弘二。仕方がない、見せませう。

（机の中から桃色の封筒にはいつた手紙を取出す）

弘二。あなたが、讀みますか。

清子。（急に不安になつて）どうぞ、讀んで下さい。

（寢椅子に腰かけて讀み出す。この頃からまた公會堂で演奏が初まる）

弘二。（短い間　獨りで讀んで見て獨言する）實にたまらない、少女雜誌の作文そつくりだ！……（拜啓、今日も雨が降つてゐます、昨日も一昨日も雨でした。それは丁度私の心とそつくりです）……我慢出來ますか。

清子。（うなずく）

弘二。（あなた樣からお手紙が屆いたのは、一昨日の午後三時頃でした。私の胸はどんなに幸福にふるへたでせう、私は一人で眞赤になつて、二階へ行つてそれを開いて見ました。私は何を讀んだかわかりませんでした。それから後、私は二時間も丁度晩の御飯の時まで泣きつゞけてゐたのでした。

その夜も、次の夜も、私はこの恐ろしい不幸のために眠ることが出來ませんでした。私は死にたいと思ひました。

こんなお手紙を下さる前に、何故私を殺して下さらなかつたと、あなた様をうらめしく思ひました。お話がきまつてから一月の間、私はどんなに幸福であつたでせう、私は始めて幸福といふものを味ふことが出來ました、來る日も、來る日も私に喜びを運んでくれました。夜は夜で、私を充分眠らせない程、甘い空想が私の寢床を埋めました。

而し、今は何もかもすつかり變つてしまひました、それは毎日の雨のやうに物悲しい心です、全くのうつろです、あゝ、私は死にたいほど悲しいのです。

こんな不幸な眼に會ふ娘は、この世が始つてからも、幾人もなかつたことでせう。萬人に一人位かも知れません。私はきつとその不幸をうけるにふさはしい人間かも知れません。神樣は私をさういふ風につくつたのでせう。私は孤兒です、棄子なんださうです。今でも本當の父や母がわかつてゐるやうでわかつてゐません。きつと恐しい罪が生んだのでせう。だから、私に幸福とか歡びとかがふさはしくないのは當然かも知れません。私は生れてから今日の日まで、來る日も、來る日も、不幸つゞきでした。

こんな不幸の中にも女學校に通つた四年間の内、後の二年が私にとつて樂しい時でした、私は毎朝鏡山學校へいらしやるあなた樣と、會ふことが出來たからです。）

清子。その方を、あなたは知つてゐるのですか。

弘二。僕は少しも知りませんよ、いつだつたか、母が知らぬ風をよさふて寫眞を見せたことがあるが、まるで知らない女でしたよ。

清子。どんな方です。

弘二。さあ……泣いてゐるやうな顔をしてゐましたよ。

清子。その次を……。

弘二。よしたら何うです。

清子。いゝえ、聞かして下さい。

弘二。何處まで讀んだらう（急に顔をしかめて二三枚の用箋を裏へまはす）（私には兩親のいひつけに叛く力などは少しもないのです（清子不審さうに頭をあげる）私は死をえらむか、あなた樣の處へ生きてゐる屍となつてお嫁に行くか、二つに一つの方法を選むより仕方がありません、でも私は死ぬことはいやです、死ぬことはそれほど恐しくはないが、死ぬことはいやです、私はあなた樣に戀人があつても、あなた樣にきらはれても、あなたのお傍にゐたいのです。私はあなたの召使でたくさんです、それが丁度ふさはしい私の運命なんです、あなた樣がその方をあきらめなさらなくてもよろしいのです、私はその方さへ許して下さるならば、その方の召使となつても苦しくないのです、私はたゞあなた樣のお傍にゐたいのです、それで私は滿足なんです……）實に卑劣だ、もう讀むのはよしませう。

清子。（無言で涙を落す）

弘二。（近よつて）何うしたんです、だから讀まない方がいゝと言つたでせう。

清子。あなたは、おかくししましたね。

弘二。何です。

清子。女の方は、長いことあなたを戀してゐたのでせう。

弘二。（無言）
清子。私はすぐ氣づいたのです、さうなされたあなたの心はよくわかります、だが、あなたは、あの手紙をうけた時の別の心持も一緒にかくしたのでないでせうか。
弘二。あなたは僕を疑ひ出したのですか。
清子。私は何だか心配です。
弘二。僕を信じて下さい。
清子。あなたは何うするつもりです。
弘二。僕は決心しました。嫁を貰ひたけや貰ふといゝでせう、來たい奴は勝手に來るといゝでせう。僕は自由であなたを愛します。女が僕に交渉して來るやうでしたら、すぐ追出してしまひます、それは女の無智が當然負はなければならない不幸です。
清子。それが出來るでせうか。
弘二。出來ます、僕はきつと追出します、僕は結婚の日ゐない意です、會社からの出張を口實にして旅へ出ます、母が貰ふ嫁だからそれで差支ないでせう。
清子。私はその言葉を信じます。私を棄てないで下さい。
弘二。僕を疑はないで下さい、僕はあなたなしでは生きていけない。
清子。（取縋つて）私も同じです。
弘二。（抱き寄せて）あなたは僕の妻だ。

（接吻する）

二

同じ室。
一ケ月經たある日の黄昏。公園の樹木に夕陽が美しく映えてゐる。
前の時より、室の模樣が婉めかしくなつてゐる。
幕。
賢次、籐の寢椅子に永くなつて、いゝ氣持で假睡をしてゐる。そこへ俊子が唱歌をうたひながら、梯子を一つ一つふんで上つてくる。

虹が出た、
虹が出た
空を一面海と見て

（賢次の眠つてゐるのを見つけると、そつと足音をしのばせて近より、眼を抑へつける）
賢次。誰だツ、またいたづら好きな郵便屋さんだな。
俊子。（弘二の聲色をつかつて）僕です。
賢次。（笑つて）随分、やはらかい男の手だな、まるで骨なしだ。

俊子。(手をはなして) 叔父さんは眠つてゐたの。

賢次。いや、いや、考へごとをしてゐたのだよ。

俊子。うそ、うそ。

賢次。本當だ、中學校の先生が嘘などつくものか。

俊子。では、どんなことを考へてゐたの。

賢次。算術の先生だもの、算術の考へごとさ。

俊子。どんな算術。

賢次。ある處に幅八里ある河があるんだが、それに一本の木で橋をかけようと言ふのだよ。

俊子。まあ、そんな算術、馬鹿げてゐるわ、世界中探したつて、高さ八里ある木なんかありやしないわ。

賢次。ところが、あるから面白いぢやないか。

俊子。本當……嘘だわ。

賢次。女學校の植物の先生は、その木を知らないのかな。

俊子。誰だつて知らないわ。そんな木。

賢次。ぢや知つてるのは叔父さんだけだらう。

俊子。叔父さんは本當に知つてるの。

賢次。知つてるとも。

俊子。どんな木かしら。

賢次。秋になると、その木からおいしい實がどつさりとれるよ。

俊子。日本にもあるの。

賢次。どつさりあるとも、こゝの公園にも五六本はえてゐるよ。

俊子。おかしいわ。

賢次。おいしい實だよ。毎日食べてゐるのにわからないかな、お馬鹿だね。

俊子。栗かしら……おかしいわ。

賢次。何うして。

俊子。八里ある河の橋になんかならないわ。

賢次。何うして、おや叔父さんの口眞似をしてごらん、木はいつの間にか大きくなるよ、いゝかね。栗。

俊子。栗。

賢次。栗。

俊子。栗。

賢次。九里。

俊子。(無言)

賢次。九里。

俊子。あら。

賢次。ほうら、いつの間にか大きくなつたらう。

俊子。いやな叔父さん。

（甘へて頸に取りすがる、二人は子供のやうにふざける、そこへ牧子登場）

牧子。俊子さん、明日の豫習がもうすんだのですか、

俊子。いゝえ。

牧子。御飯前にすましなさい、お前の成績が惡いと、あづかつてゐる私達が樺太の人達にうらまれますよ。

俊子。はい。

（いやな氣持で下へ下りて行く）

牧子。あなたはこゝで何をしてゐたんです。

賢次。假睡をしてゐたよ。

牧子。それから俊子を相手におふざけですか、結構なご身分ですね。

賢次。疲れてゐるからね。

牧子。疲れてゐるから私の心配なんか何うでもいゝと言ふのですか。

賢次。さういふわけぢやないが、お前に何か心配があるのかい。

牧子。主人のくせに自分の家のありさまが解らないのですか。

賢次。解りやうがないよ、朝起きて學校へ行く、歸つて來てすぐ寢る、これが、私の每日の生活なんだからね。

牧子。それですまされますか、一家の主人として、

賢次。私がこゝの主人とは、何うも思はれないね。

牧子。あんなことを言つてゐる、それぢやあなたは何です。

賢次。何だか……、まあ食客かも知れない。

牧子。まあ、あきれてものが言へない、主人のくせに私に何もかも背負せて、自分は食客かも知れないと言つてゐる、その位なら門札をとつてしまつたらいゝでせう。

賢次。とつても差支へないよ。

牧子。あなたは何うして自分の家庭のことに、そんなにづるく逃げるのですか。

賢次。逃げはしない。私は何も知らないのだよ、いや、或は少し位知つてゐるかも知れない、が、私には何うすることも出來ない、まあ新らしい言葉で言ふなら、自由がないと言ふのだらうね、私は算術の教師でありながら、給料を入れてある封筒の中さへ勘定することを許されてゐないのだからね。

牧子。あなたはいつでもそこへ逃げて行きますね。

賢次。お前はいつでもそこへ追ひ込むぢやないか。

牧子。（かつとなつて）あなたはあまり無責任です、意氣地なしです、あなたは自分の息子一人さへ何うすることも出來ないんです、あの結婚の夜の見苦しいありさまは何うでした。若し私がゐなかつたらあの子は恥をすまさないで、遠くへ出張してしまつたでせう、漸く押へつけて、何うやら世間體をごまかすことが出來たのは皆私の力ですよ、あなたはいつでも世間へ恥をまいて歩く、それを刈つて歩くのは皆私です、あなたが馘首になりかけた時、内務部長さんにお願ひに行つたのは誰でした。

賢次。（苦りきる）

牧子。あなたには今の家庭のありさまがわからないのですか、お嫁をもらつてから、弘二が一晩でも家におちついゐてたことがありますか、何のためです、毎朝あの嫁の眼を見てやりなさい、泣いて夜を明してゐることが、はつきりわかるぢやありませんか、弘二は未だにあの生意氣な醫者の娘に迷つてゐるのです、それも、これも、皆あなたが意氣地がないからです、息子を放任しておいて、不行跡をとめることが出來なかつた、あなたの落度のためです。

賢次。それ程わかつてゐて、何故お前がとめなかつたのだ。

牧子。あの子はあなたをひいきで、私を嫌ひなんです、あなたの言ふことはきくが、私の言ふことなどきくものですか。

賢次。それぢや、何故いやだといふ嫁なんかもらつたのだ。

牧子。不具でもないのに、いつまで一人でほつておかれます、母親が息子の嫁をもらつてやるのが、何故惡いんです、

賢次。それぢや、うまく行く筈ぢやないか。

牧子。それも皆あの女のためです、これまで出不足のあの子が、嫁をもらつて以來、いつでも家にゐたことがない、何處かで女と會つてゐるのです、さあ、この手紙を讀んでみなさい。

(手紙を懐から出して夫になげてやる)

賢次。お前は弘二へ來た親展書を、自分で破つたのか。

牧子。見たのが何故惡いんです、自分の息子を、地獄へ落さうとしてゐる女の手紙を破つたからつて何故惡いんです、あなた、このまゝほつておいたら何うなると思ひます、恐しいことが持上るのが、あなたに見えないのですか、あの嫁は今に死んでしまひます、さうなつたら、あなたは何うするつもりです。

賢次。私は知らない、お前の蒔いた種だ、お前が刈るといゝだらう、私はこんなことを聞くのは御免蒙る。
（かう言つて下りて行く）

牧子。あなた。
（後を追ひかけたが、考へなほしてすぐ引返す、そして室にはいつて來て弘二の机の引出をひつくりかへす、女の手紙が一本もはいつてゐない、その時仙子登場）

仙子。お母さん。
牧子。弘二はまだ歸らないかい。
仙子。え、お父さんが顏色を變へて出て行かれましたが。
牧子。あんな人、ほつておきなさい、公園へ散歩にでも行つたのでせう。
仙子。…………
牧子。仙子、お前に聞きたいことがあるのだがね。
仙子。はい。
（座る）
牧子。弘二は、お前を愛してゐますか。
仙子。（うつむく）はい、大へん親切にしてくれます。
牧子。お前はこゝへ來てから、不足に思つたことがないかね。
仙子。いゝえ、私が不束なので恥しく思つてゐます。

牧子。弘二はお前を叱るやうなことが、ないかい。

仙子。いゝえ、何も叱つて下さらないので、かへつて苦しいのです。

(涙を落す)

牧子。何うしてお前は泣くんだね。

仙子。お母さん、何もかも皆私が悪いのです。

牧子。何うしたのだね。

仙子。(しく〳〵泣いて) 私さへこちらへ來なかつたら、こんな悪いことにならなかつたのです、皆さんを苦しめなくてすんだのです、私が馬鹿だつたので、弘二さんの親切な手紙がわからなかつたのです。

牧子。弘二がお前に手紙をやつたのかね。

仙子。結婚の前に二度下さいました。

牧子。何う言つて

仙子。初めは(自分には戀人があるから、あなたと結婚する氣がない、この結婚は大きな不幸と罪悪とをつくるのだから、あなたも斷念して反對してくれ)と言つてこられました。

牧子。まあ。

仙子。それで私は返事を書いたのです、私は兩親の命令にそむくことは出來ないし、それに、あの方を慕つてゐると、言つて……。

牧子。そしたら。

仙子。私を大變お叱りになつて、(お母さんの召使に來たけりや來るがいゝ、私は祝儀もしなければ、あなたを愛しもしない、あなたと私とは永久に他人だ)と言つて來られました、私はそのお言葉にそむいてやつて來たのです。

牧子。何といふ馬鹿げたことをするのだらう……それで、その手紙の通りなのかい。

仙子。はい。

牧子。ぢや、何もなかつたのだね。

仙子。え。(うつむく)

牧子。それでお前は夜も寢ないで、泣いてゐるのだね。

仙子。あの方もお眠りになりません。

牧子。何うして。

仙子。あの方は毎晩裏口から公園へ行かれます。そして二時か三時頃でなければお歸りにならないのです、あの方も、私のやうに泣いていらつしやるのです。

牧子。(溜息をつく)

仙子。(泣いて)お母さん、私を追出して下さい、私はあの方の苦しみを見てゐることは出來ないのです。

牧子。そんな馬鹿なことが出來ますか

仙子。あの方は私を憎んでゐますが、また愛してもゐられるやうです、一度公園から歸られた時、私は眠つたふりをしてゐました、そしたら(可哀さうな人だ)と言つて、私の唇に接吻されました。

牧子。本當かい。

仙子。でも、その次の朝から、あの方は前より嚴重に自分を守られるやうになつたのです……私にはあの方を苦しめる力がなくなりました。私は死にたいほどです、お母さん、どうぞ私を離緣して下さい。

（すゝり泣く、沈默。玄關が開いた音がする）

牧子。弘二が歸つた樣子だ、（立上つて）お前、今のやうな考へを起しちやいけないよ、お母さんはお前の味方なんだから、きつと今によくなるよ。

（牧子退場、少したつて弘二登場、顏色が悪い）

仙子。お歸りなさい。

弘二。（かすかに）只今。

（チラと顏を見合せる、弘二、籐椅子に腰かけて公園の方を見る、夕映が美しい、蜩がさみしくなく）

仙子。お茶を召上りますか。

弘二。いりません。

仙子。………。

弘二。あなたは、また泣いてゐたやうですね。

仙子。（無言）

弘二。お母さんと何を話したのです。

仙子。（暫くして）私を離緣して下さるやうにお願ひしたのです。

弘二。（女の方を向いて）離緣、

仙子。はい。

弘二。本當ですか。

仙子。(すゝりなく)

弘二。あなたは僕を恨んでゐるでせう。

仙子。いゝえ、あなたのお心をありがたいと思つてゐます、私はあなたを苦しめてゐるのが恐しくなつたのです。

弘二。今日僕が何處へ行つたか知つてゐますか。

仙子。いゝえ。

弘二。あなたの實家の近所まで行つて來ました。

仙子。(無言)

弘二。急にあなたのことを知りたくなつたからです、僕はある所で悉皆聞いてきました。

仙子。何處でせう、駄菓子店のお婆さんからですか。

弘二。さうです、あのお婆さんはあなたに乳を飲ましたことがあるさうですね。

仙子。え。

弘二。あなたの不幸な身の上話を聞かされて、僕は泣いて來ました、あのお婆さんは恐しいことを僕に言つたのです。

仙子。何でせう。

弘二。(あの娘さんは、今度また不幸であつたら、きつと自殺するでせう)と言ひましたよ、あなたは二度も自殺しかけたことがあるさうですね。

仙子。(聲をあげて泣く)

(短かい沈默)

弘二。(低く呻くやうに) あゝ僕は何うすればいゝか、わからない。

(兩手で頭を押へて籐椅子に横はる、女の泣く聲がつゞく)

幕。

三

同じ室。

八日間經たるある夜のこと、障子をしめきつた室で牧子と仙子が話し合つてゐる、仙子は弘二の羽織を縫つてゐる。

仙子。丁度、あの日からです………あの人は實家の近所へ行つて、私のことを聞かれたんださうです。

牧子。そんなことがあつたのかね、何を聞いたのだらう。

仙子。私の不幸な身の上話をすつかり聞かれたんださうです、棄兒のことから、寒中、男のやうに旭川から水をくませられたことや、下女のやうにひどくこきつかはれたことや、氣絶するほど物差で打たれたことや、三日間何も食べずに押入にたゝき込まれてゐたことや、それから、二度まで自殺しかけたことなど、皆聞かれたんださうです。

牧子。お前は本當に難儀をして來たんだね、養母さんはそんなにひどかつたのかね。

仙子。え。

牧子。養母さんは、眼の悪い兄さん一人しか生たなかつたのだね。

仙子。え、二度目に流産してから、ひどい神經衰弱にかゝられたのださうです。

牧子。何うして、そんなにお前が憎かつたのだらう。

仙子。養母さんの心持を考へると、無理がないやうにも思はれますわ。……それに病氣だつたのですから。

牧子。すると、お前の父さんと、川端の藝者との噂は本當なんだね。

仙子。本當ださうです、私の本當のお母さんはその藝者ださうです、だから、私を棄兒にしたのはお父さん達のたくらんだことだと思はれます。

牧子。養母さんはそれを知つてゐるのかね。

仙子。初めは何も知らなかつたんです、義兄さんはあの通り眼が見えないし、自分は病氣で赤坊を生つ望みがなかつたし、そんなことから私を非常に可愛がつたさうです、ところが三つの時、川端の藝者と、お父さんとの間にごたごたが起きて、何もかもばれてしまつたんださうです。

牧子。その時、何故養母さんはお前をはなさなかつたのだらう。

仙子。一たんははなしたさうですが、二日目とか、三日目とかに自分一人車で出掛けて行つて、金をたゝきつけて私を連れて來たんださうです。

牧子。どういふ氣持だらう。

仙子。それが私にもわからないんです。

牧子。お前を酷めて讐をとりたかつたのかね。

仙子。私もさうとばかり思つてゐましたが、あの人に話したら、（養母さんは、非常にお前を愛してゐたのだ、だから、憎んだのだ）と、言つてゐました。
牧子。弘二がそんなことを言つてゐたかい。
仙子。え。
牧子。わからないね。
仙子。さう言はれて見ると、何だかそんな氣持もします、養母さんは私の顏を見て、急に寂しさうに泣いたり、急に私を連れて呉服店へ行つたりしたことがあるんです、でも、平素の折檻がひどいので、私は世間を胡魔化すためだとばつかり思つてゐました。
牧子。私にもさうしかとれないね。
仙子。あの人の話だと、私がこつちへ來てから、養母さんはずつと床についてゐるさうです。
牧子。道理で私が行つた時も、養母さんは出て來なかつたよ、私はまたお前達がお禮に行かなかつたので、腹を立てて會はないのだとばつかり、考へてゐたんだよ。
仙子。から自分が幸福になつて見ると、養母さんがお氣の毒で仕方がありません。
牧子。ほんとうに………お前がこれまで苦しんで來たことも無駄でなかつたのだね、あゝ、私は弘二のためにどんなに心配したか知れなかつたよ、でもそれだけで、挺でも動きさうもなかつたあれの心が、よく動いたものだね。
仙子。（うつむいて）そればかりでもなかつたんです。
牧子。外に何かあつたのかね。

仙子。(ためらつてゐたが) あの人に、持つてゐた藥を見つかつたんです。
牧子。(びつくりして) 藥を……まあ。
仙子。(無言)
牧子。あゝ、お前はそこまで覺悟してゐたのかね。
仙子。すみません。
牧子。やれ〳〵無事にすんで、本當によかつたね、皆佛樣のお助けだよ。
(短かい沈默)
仙子。でも、自分の幸福に比べて、淸子さんのことを考へると、私は大變すまなく思ふのです。
牧子。でもそれは仕方がないよ、間違つたことをすれば、それだけの報ひがあるのはあたりまへだからね。
仙子。あの女は私をどんなに憎んでゐるでせう。
牧子。そんなこと氣にかけちやいけないよ、お前だつてあの女のためにこれまで苦しんで來たのだからね、さういふことは佛樣に任せておく方がいゝよ、佛樣はちやんと、いゝ人には幸福を、惡い人には苦しみを與へなさるのだからね。
仙子。(無言)
牧子。その後、弘二はあの女と會つたのかしら。
仙子。いゝえ、すつかり事情を書いたお手紙をやつただけです。
牧子。返事が來たの。

伸子。え。

牧子。何う言つて、

伸子。あの方を自分のものにするか、死を選むか、二つに一つを選むより途がないと言つてこられました、大變嘆いてをられました。

牧子。(憎々しげに)すぐ、さういふ風な言ひ方をする、醫者の娘だもの、死にたかつたらいつでも死ぬがいゝ、私達のちつともかまはつたことではない。

伸子。あの人はそれを大變心配してをられるんです、それで一昨日友達の方に先方へ行つてもらつたさうですが、何うしても會つてくれなかつたさうです。

牧子。お友達つて誰だらう……石川さんかい。

伸子。え、あの方は満子さんと從兄妹同志ださうですね。

牧子。石川さんにも會はなかつたのかね。

伸子。え。

牧子。それで弘二は今晩も石川さんとこへ行つたのだね。

伸子。え。

(短かい沈默)

牧子。でも、お前はこのことに、あまり心を使つちやいけないよ、お前や私はこのことに何も關係がないのだからね、種を蒔いた人達に任しておくといゝよ。

仙子。え。

牧子。本當に厄介なことだね。

(公園で九時の鐘なる、この時階下でおいと呼ぶ賢次の聲がする)

牧子。今行きます。

仙子。お休みでせうか。

(立上らうとする)

牧子。いゝよ、お父さんのことは私がするから。

(牧子階下へ下りて行く、短かい沈默。この時下で雨戸をしめる音がする、そして間もなく)

俊子。(階下から) 姉さん。

仙子。はあい。

俊子。(階下から) 姉さん、いゝ星空よ。

(仙子立上つて障子を開ける、星空が、公園の黒い森の上に輝いてゐる)

仙子。いゝ晩ね、ほら、お堀に星がうつてゐますよ

俊子。(階下から) きれいね…………いろ〳〵な虫が鳴いてゐるわ。

仙子。さうね…………俊子さんまだ寢ないの。

俊子。(階下から) もう三十分勉強するの。

(俊子かすかに唱歌を唱ひながら戸をしめる、沈默、間もなく弘二急いで歸つてくる)

仙子。お歸りなさい。

弘二。おい、滿子さんから手紙が來た。

仙子。何と言つて來ました。

弘二、まだ見ない、今戸口で受取つたのだ、開くのが何だか恐ろしい。

（思ひきつて開く、中から用箋一枚出てくる、讀む、沈默）

仙子。何と言つて來ました。

弘二。（ホツとしてそのまゝ渡す）

仙子。（手に取つて讀む）……生きる決心をしました。

弘二。滿子さんは死なゝかつた、やはりあの人は强かつた。

仙子。本當にようござんしたね、

弘二。おい、僕達はあの女に感謝しなければいけない。

（手を握り合ふ、それから抱き合ふ、沈默、弘二、急にはなれて椽側に出る、仙子縫物をかたづけながら）

仙子。あの女はこれから何うなさるでせう。

弘二。僕には判らない。

仙子。前に話のあつた所へ嫁かれるかも知れませんね。

弘二。或はさうかも知れない。

仙子。大學を出た立派な方ださうですね。

弘二。そんなつまらないことを、今言はないでくれ。

（沈默、玄關のあいた音がする、暫して俊子そつとくる）

俊子。兄さんは。

仙子。椽側にゐます、なあに。

弘二。何だ。

俊子。兄さんへ、お客様よ。

弘二。誰だ。

俊子。清姉さんが。

弘二。（吻つとして）清子さん。

（沈默）

弘二。行つて見よう……お前心配しなくていゝよ。

（弘二と俊子退場。仙子心配さうにしてゐる、間もなく弘二と清子登場）

仙子。いらつしやい。

清子。（昂ぶる感情を抑へながら）始めて。

（沈默）

清子。今朝出した手紙、屆きましたか。

弘二。少し前見ました……僕は何も言ひません。

清子。私昨夕の内に、何もかもすつかりきめてしまつたんです、（仙子に）あなたにもいろ／＼御心配かけてすみません
でした。

仙子。いゝえ、私こそ。

（仙子お茶を持つて來る、すぐ下りて行く、仙子それを淸子と弘二にすゝめる）

淸子。私、默つて出發うと思ひましたが、急にお二人にお眼にかゝりたかつたので、夜分でしたが、突然お伺ひしたのです。

弘二。何處へいらしやるんです。

淸子。東京へ出ることに決心しました。

弘二。いつです。

淸子。今晩です。

弘二。十時の汽車ですか。

淸子。え。

弘二。あなたは僕を憎んでゐるでせう。

淸子。それほどでありません、かうなるのがあたりまへです、私は何よりもこれまでの自分達の過去を憎んでゐます、遊戲に充ちた論理や、藝術を玩んできた自分達の生活が呪はしく思つてゐます。

弘二。（無言）

淸子。私達はこれまで狹苦しい自分達の生活しか見てゐなかつたのです、世界のことや、もつと、もつと深い人生の姿にまるで無關心でゐたのです、……苦い經驗でしたが、私は漸く救はれたと思つてゐます。

（短かい沈默）

弘二。兄さんの所へいらつしやるのですか。

淸子。いゝえ、一度は寄りますが、Y先生の所へ參ります。

弘二。お父さんはそれを許されたのですか。

清子。父は氣まぐれの東京見物位に思つてゐるでせう。私は多分秋田へ歸らないだらうと思ひます。

弘二。何うしてです。

清子。これまでのものは何もかも棄ててしまひたいのです。一切のもの、學問も、藝術も、故郷も、生活も、皆棄ててしまひたいのです、そして、裸になつて新らしい世界へ飛込んで行きたいのです。先生のところで少し勉强したら、フランスからロシヤへ行きたいと思つてゐます。

弘二。さうですか。

清子。兄は多分やつてくれるでせう。

（沈默）

清子。（次第に常態を失してくる）あなたから頂いた指輪をどうしたらいゝでせう。

（かう言つて帯から紙に包んだ指輪を出す）

弘二。どうぞ、あなたの勝手にして下さい。

清子。こんなものを持つてゐるより捨ててしまひませう。あなたにあげたのも捨てて下さい。

弘二。（無言）

清子。指輪を取交はすなんて、どうしてこんな愚かなことをしたのでせうね。戀つて、丁度こんな愚かな眞似と同じかも知れませんね。捨ててしまつたら、さつぱりするでせう。

（弘二机の中から指輪を取出す、清子それを取つて）

清子。何處へ捨てたらいゝでせう。汽車の途中何處かの川へでも投げませうか……、でも、それぢやあなたには判らないし、私にもつまりませんね、あなたにいゝ考へがありませんか。

弘二。（無言）

清子。幸福な方に、さういふ考へは浮ばないかも知れませんね……いゝことがあります、下の堀の、汚ない泥の中へたゝき込みませう、こゝは私にとつても記念多い室ですから、なほいゝでせう、さあ、あなたにあげます、投つて下さい

弘二。（無言で受取る、そして仕方なしに椽側に立つて行く）

清子。まるで、外國の小説にある場面ですね、私は大變いゝ氣持です。

（弘二、指輪をなげる、ターン、ターンと、輕い水音が夜の靜かな空氣の中にひゞく、沈默、清子感情を抑へつけることが出來なくなつて、急にわつと泣く、彼女はその聲を手巾で抑へつけて室を出て行く。仲子後からつゞいて出て行く。弘二籐椅子に倒れる、間もなく玄關の開く音がする）

永い沈默。

（牧子、そつと登場）

牧子。あの女は何しに來たんだね。

弘二。お別れに來たのです。

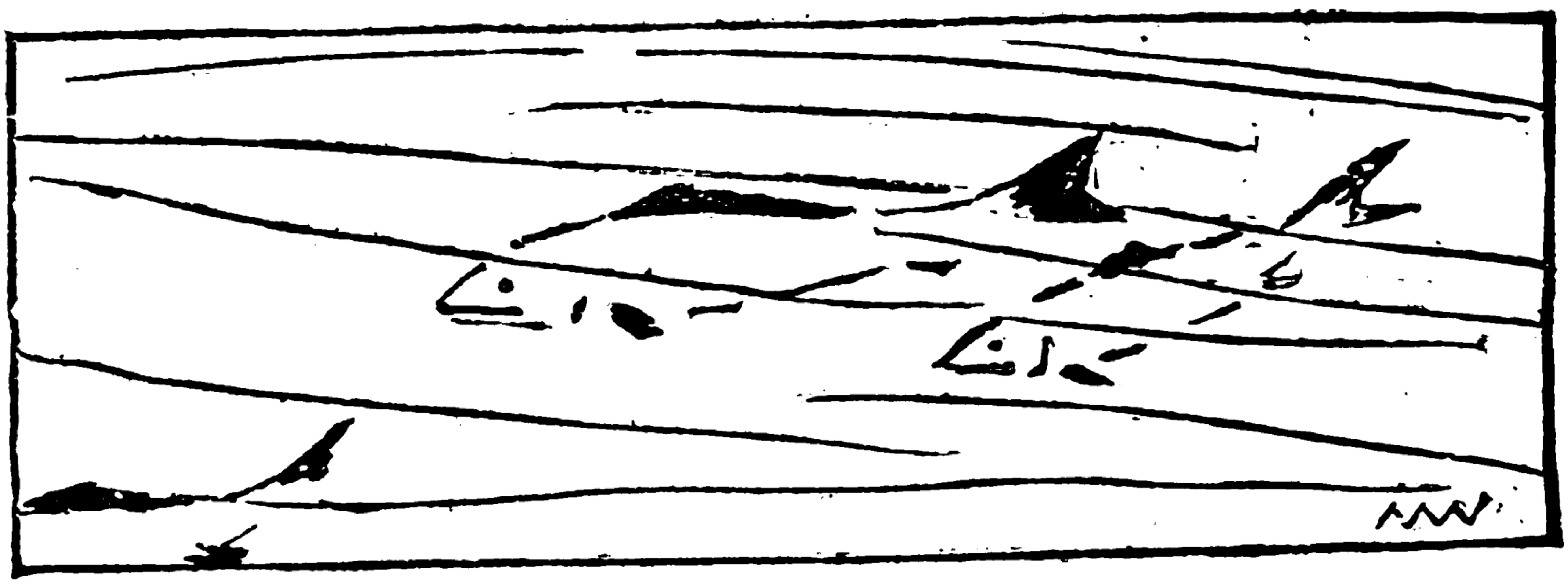
牧子。何處かへ行くのかい。

弘二。（無言）

牧子。あすこの家はあまり幸福過ぎたのだ、これで世間並になつたといふものだらう。

深かい沈默。

幕



一夜の宿

佐藤春夫

「私はこの間、八王子の方へ行つて來ましたよ……」

さう、私に話し出したのは無名の青年畫家S・Tであつた。

S・Tは私の好きな男だ。五六年前に一二度人につれられて私のところへ遊びに來たことがあつた。無口な朴訥な青年で、彼をつれて來た男のおしやべりなのといい對照をしてゐたが、しかし彼の一見地味な畫が彼の爲人を語るには相當に雄辯であつた。荒涼とした砂丘の畫が澤山あつた。何でもない村の風景があつた。どれもこれも畫學紙八つ切りほどのスケッチブックのなかに、水彩なので、もとより彼の畫才を充分に覗ふことは出來なかつたにしても、その小さな畫面には相當につつましい凝があつた。私はうまさは一とほりだと思つたがその心持が同感出來た。私は彼とは永い友情が結べさうな氣がした。彼の重厚な氣持が私に素直に感ぜられたのだ。それだのに私と彼とはさまざまな事情で逢はなかつた。それが四五年前のことなので、私も自づ

とS・Tのことを忘れてしまつてゐた。或る日——つひこの間の或る日、彼が突然私を訪ねた時には、私は全く思ひがけなかつた。彼は袂のなかや懐のなかなどにその後の習作をどつさりねぢ込んで、それを私に見せに來たのであつた。私は彼に會つた時に一度に二つの喜びを感じた。——彼が私を忘れずにゐてくれた事、又、私自身が彼の爲人を觀察した目が間違つてゐなかつたこと。私たちは暫くぶりで逢ひながら毎日逢ふ人のやうに話し合ふことが出來た。この時を最初にしてS・Tはその後、よく私のところへ遊びに來る。

彼は私の作品の「お絹とその兄弟」といふのを好きだと言つた。あの小說のために挿畫風の繪を描いて見たいと言つた。そのためには一度、折からの陽氣でもあるし、八王子の方へ遊びに行つて見るとも言つた。私はS・Tがさう言つてくれるのを嬉しく思つた。何故かといふのに、彼は二人がかけへだてて逢はなくなつてから、私に逢ふことの代りに私の作品を讀んでゐてくれたらしいからである。それに彼が好きだと言つてくれたのは作者たる私自身にも氣に入つてゐるものではあり、S・Tのやうな性格の人にはいかにも同感されていい作だと自分でも信じてゐるからであつた。

「八王子の地方は私も知つてゐるのです」と彼は言つた「五年ほど前にちよつとあの邊を歩いたことがありましてね。……あの近所は面白い。いかにも田舍々々してゐて。私もあの平凡なところが好きです——さうだ。近いうちにもう一ぺん行つてよく見て來ませう。」

S・Tがそんなことを言つてゐたのが、その次に訪ねて來た時には、本當に八王子の方へ行つて來たと言ふのであつた。

彼はどこから話し出していいか戸迷ひしてゐたらしかつたが、やがて語り出した。

ふるい事に遡ぼらなけやならない。もう五年の前のことである。そのころS・T自身は東京に近い或る小都會の中學校を出て、自分では畫の修行をして見たいと思つてゐた。けれども父は自分に小學校の先生になることを求めた。父自身は小學校の校長で、自分は長男ではありながら、小學校長ぐらゐの俸給ではその長男ひとりを東京の學校へ修行に出すだけの資力がないのである。一たい自分のうちは家族が多かつたし、それに自分の修行したいといふことは物質的には望みの拗い學藝であつた。けれども自分は子供のころから繪描きより外には何にもならうとは思つても見なかつた。自分の父は田舍の古い校長などによくある型で漢字の素養などのある嚴格な人ではあつたけれども、それでもまだそんなに年はとつてゐなかつたから、さうわからずやといふほどでもなかつた。いやがる私を無理に教員にしようと命じもしなかつたが、事實、やつぱり私を東京へ出すのは物質的に苦しかつたのだ。それを看て取つて私は家から逃げ出した。――東京に叔母があつたから、さうしてもしどうにかして自活の道を立てることさへ出來るなら父は、私に私が繪の修學をすることをさう拒みはしないだらうと信じてゐたからである。

私は叔母の家へ來て、しかし自活をする方法などが、この大都會にさうやす〳〵と轉がつてゐやう筈もないし、私は仕方なくたゞごろ〳〵してゐた。私が思ひ切つて家を出て來た氣持を父も察してくれたものと見えて、別段に私を取戻かへさうともしなかつた。それにつけても私は、自分がそんなにのらりくらりと一日一日を過してゐることが父に對しても亦、叔母に對しても心苦しくて仕方がないと思つてゐるやさきに、私は或る日ふと新聞の「人を求む」といふ欄で仕事の口を見つけ出した。それは八王子の或る織物會社で友染の下繪描きを募集してゐるのであつた。さうして相當澤山あつた同じ求職者のうちで、どうしたはづみだつたか自信も經驗も格別にない私が雇入れられることになつた。

會社の仕事場は二子の渡しの手前の瀬田といふところにあつたので、私は新町の大工の二階を借りてそこから勤めて

ゐた。私はほんのしばらくその仕事にたづさはつたけれど、我儘な話だがその仕事はどうも私の肌合ひに合はなかつた。私には父讓りの頑固な性質があつて、それに私には許嫁もあるし、自分で吹聽するのも妙なことではあるが私は男女關係のことではトルストイアンでその主張を實行してゐた。私の周圍の人たちはそんな點ではごく自由なのが、私には放縱に感じられた。そんなことを考へてくると私は女の長襦袢などにするやうなそんななまめいた圖案などをしてゐることすら、どうやら、幼時から父に受けてゐる感化と合致しないやうな氣もちにさへなつた。そんな馬鹿なことを考へて見るうちに、私は、一そ、これはもうこの仕事はよした方がいいと思ひ立つた。思ひ立つと私はもうすぐにそのとほりにした――私はそんな肌合ではあつたし、また世間見ずで、年から言つても二十の時であつたから。

四月の終りで、私はその月のさまざまな仕拂ひをすませると懷中には四十何錢か殘つてゐた。無駄のない生活をしてそれでその生活費を仕拂ふと私の手に自然殘つたのがそれだけなのだから、私がその時もらつてゐた給料はほゞわかるでせう。私は東京へかへつても仕方がないと思つた。それよりは京都へ行かうと決めた。全く無鐵砲なことであつたのは四五日すると直ぐにわかつたが、私はその四十何錢――たしか四十二錢であつた――を持つて、中仙道を京都の方へ拔ける計畫をしたのである。さうして出發した。

その第一日である。一日中歩き通して日のくれかかつたところは立川といふ村であつた。私は長い坂道を下りて勞れ切つたところで、道ばたにあつた一軒の寺へ行つて宿を乞ふと、出て來たのは中年の坊さんであつた。私の話を聞くと急にうさん臭さうに私の樣子を見てから言つた――

「今どきそんな馬鹿なことを言つてはいかん。若い者のくせに。京都へ行かうと思へば汽車になり何になり乘るものはある。それをせずにおまけに金も無しで行つて見ようなどとは、以つての外のことだ。ほんとうに金がないなら、早く

東京へ歸つたがいい。ここではそんな人間の宿は出來ない。」

私はその次には、お寺から五六丁も行つたところで或る水車小屋へ這入つて行つた。そこではまた、自分のうちへと めない代りには、もう少し行けば木賃宿のかたまつた場所があることを教へてくれた。――この水車小屋のところから少しばかり行くと、長さ二間とはない板橋がある。その橋を渡つてほんのしばらく行くと今度は長い橋がある。この橋のあるところが多摩川だか、そこを渡るには橋錢を三錢出さなけやならない。木賃宿はその橋を渡つたところに五六軒もあるといふのだつた。どの家でも泊めてはくれさうにもないのを見て私は仕方がなければ、もうその木賃宿へ泊るつもりでゐた。けれども四十何錢のうちから、旅に出ると早々、たとひ木賃でも宿錢を拂つてとまるのはもつたいなかつた。そんなことを考へながらよたよた歩いてゐると、これがさつき教へられた短い板橋であらう、なるほど二間とはない。古くなつて手すりなどが朽ちてゐる。その下を水が四五尺、川原が四五尺、淺くて美しい流が夕闇のなかでせせらぎを立ててゐる。そのせせらぎが私の心持をほんとうに旅人にしたものである。その橋を渡つた時、私はうしろから一臺の馬車に追ひ越された。この馬車は空つぽではあるがその構造から見て、礫を運ぶものだといふことがすぐわかつた。その馬車を見送るともなく見送つてゐると、私は自分の行く手の方に、白く暮れなやんでゐる夕方の川原道の中ほどに物置小屋が一軒あるのに氣がついた。

「これはいい具合だ」

と、私は思つた。といふのは、言ふまでもなく私はこの小屋で一夜を明してやらうと思ひついたからである。

しかし、私がその納屋のやうな建物の前へ來た時には、この小屋がやつぱり人間の住家であつたのを知つて多少意外でもあつたし、それよりはがつかりした。さう言へば、さつきの荷馬車の男が、この小屋の前でちよつと車の早さをゆ

ゐて、ここを素通りしなかつたやうな氣がしたが、この家のかど口の戸は半分だけ開けられてあつた。私はそこから中をのぞき込んだ。中は眞黑で、けれども爐には火が燃してあつて、その前には女が彼女自身の焚く火で照し出されてゐた。

私はつか〳〵とその家のなかへ這入つて行つた。さうして第一の機會ではあのお寺で、第二の機會ではあの水車小屋で言つたのと全く同じ言葉を繰返して、一夜の宿を賴んでみた。

土間にある爐の前にゐる女は全くとり合ひさうにもなかつた。――「私のうちはこのとほり、お寺や水車小屋のやうなきれいなところぢやないから。」私が前に二軒の家でもことわられて來たことをも言つたものだから女はそんなことを答へた。女といふのは四十に手のとどきさうになつた醜い顏であつた――焚火で照し出されて浮き出してゐる。家の外を折から荷馬車が通つた。それはさつき私を追ひ越したあの荷馬車が、もう一度引き返して來たのだが、女はその方へ目を向けた。それから馬車の男とかの女とは通りすがりにちよつとした言葉のやりとりをした。田舍言葉でよくはわからないながら、今日一日の仕事がすんだことを喜び合つて、明日までの別れをのべる親愛の言葉であつた。

私は彼等の言葉を聞きながら、斷られてゐる自分だのに、どつかり腰を下してしまつてゐた。意地にも立つてはゐられないほどくたびれ切つてゐたから。この外から見て納屋のやうな家は中へ這入つても納屋のやうであつた。半分は土間で、自分の腰をかけた莚敷の床は三疊とはない。彼女が言ふとほり全くこの廣さのなかへ男ひとり餘分に泊めることは出來まい。――言ひ忘れてゐたが、この醜い母親のそばには八つぐらゐの男の子と四つぐらゐの女の子とが纏りついて、私を不思議さうに見上げてゐた。

私は言つた「實は、私は屋根さへあれば物置小屋のなかでも何處でも寢るつもりだつたのです。床のあるところぢや

なくてもいい。その竈のそばに寝させて下さい。薬を自分で捜してくるから……」

「さうまで言ふのなら」と女は言つた「どうにかすれば治めて上げられるでせう」さう答へながら、女は手を差しのべてそこらにあつた豆らんぷへ、竈のなかの火を一たん薪くづにうつしてその薪くづから豆らんぷへ灯をともした。さうして改めて私の顔を見た。

「あなたはきれいな着物を着てゐる」とその女は言つた。その言葉の意味を解きかねてゐると、女は言ひつづけた「東京の人はみんなきれいななりをしてゐる。だからお金がないと言つても田舍者は本當にはしない」

彼女はその竈の上にかけてあつたお湯をばけつにうつしながそれへ鹽を入れて、その鹽湯で私に足を洗へと言ふのであつた。それからこれは別に湯呑へ鹽湯を飲むためにくれた。彼女が言ふには、いつか母と娘づれとの巡禮をやつぱりこの家にとめた事があつたさうである。その巡禮が這入つて來るとまつさきに彼女に求めて、自分の娘に飲ましたものは鹽湯であつた。それから足を洗ふ鹽湯であつた。鹽といふものは尊いもので、それで足を洗へばつかれは直るし、それを飲めば一時の飢えを忍ぶことも出來る——とさうその巡禮が言つた。「あの人たちは長い旅の經驗からそんなことをおぼえたのであらうが、あなたも（と、彼の女が私に）これから長い旅に出ようといふのだから心得　置いたらいいであらう。鹽湯ぐらゐなものはどこの家だつてもくれるから……」

私は彼女のすすめてくれるままに足も洗つたしお湯も呑んだ。そのお湯を呑みながら、私はさもしい事をちよつと考へたが、それはもしやこの家では鹽湯をくれただけで御飯はくれないのではないかといふことであつた。寝るところが決ると私はひどく空腹になつて來たのであつた。でも私はまもなく皆と一緒に御飯を貰つて食べた——南京米のつめたい麥飯がぼろぼろになつてゐた。さうしてそれを私にくれるために、彼女とその子等はいつもより少くたべたであらう

ことは言ふまでもない。

女は、瀬田からこの立川まで、私の歩いて來た里程を十二里ぐらゐと言つてゐた。私たちの座つてゐる莫蓙敷といふのは、私がさつき足を洗つたりしてゐる間に見たのだが、それは土の上から二尺ぐらゐ高いところに薪にするやうな雜木の伐り倒したのを渡しならべて、その上に板をもう一ぺん敷き並べて、莫蓙を敷いてあるのである。その莫蓙敷の廣さはさつきも言ふとほりまあ三疊あるなしである。釜の蓋の上へちよこんと置かれてある糸しんの豆らんぷの光は、そんな狹いところをさへやつと照しかねてゐる。

御飯がすんだ時に、女は佛壇のやうな神棚のやうなものへ御燈明を上げた――それまで氣がつかなかつたが、壁の隅の高いところにそんなものがあつたのである。さうして子供たちや私にはかまはないで、女は一心に御經を上げ出した。それは彼女の日課の一つであつたと見えて、慣れてゐる子供たちは音無しくそれを聞いてゐた。讀經が終ると彼女は立つて行つて御燈明を消してから、ふたりの子供たちの相手になつた。彼女は男の子に言つた――「あした東京へ行つたらお前には二圓で袴を買つて來てやらうな。それからおみさには……」おみさといふのがその女の子の名であらう。その子の頭を撫でながら母は明日の土産を約束してゐた。その品物が何であつたか私は今思ひ出せない。ただその時私は、この貧しいうす暗いしかし情味には決して缺けてゐない團欒や、彼女の旅人をもてなす樣子や、讀經の日課などのことを思ひ合して、その醜い女が案外にも美しい心持を持つてゐる人に思へたのであつた。

彼女は私の方を顧みて何をあきなひする人だとたずねた時には、私は正直に畫描きの修行をしてゐるのだと答へて、手輕に自分の身の上――と言つて何もむつかしいこともない身の上を話したりした。女は私に是非とも一つ描いて貰ひたいものがあると言ひ出した。私は承知したが、それは彼女自身が持つてゐるものを描き直すのだと言つて、彼女がそ

れを捜しに立つた時には、私はちよつと何が出てくるかといふ好奇心があつた。それは例の佛壇のなかに仕舞つてあつたが、見ると金比羅さまの御神像であつた。それが彼女の御守だけれども御神像は古くなつて拜みにくくなつてゐるから寫しなほしてほしいといふのである。なるほど煤びてもゐたし手擦れてもゐた。もともとさう複雜なものではなかつたから、丹念に書いてやつたけれどもわけなく出來た。私は秘藏してゐた墨をつかつて描いてやつた。彼の女はひどく滿足して、一生大事に保存すると言つた。

私はもう溫い季節だしそれに外套を持つてゐるからふとんはいらないと辭退した。それでも彼女は、ここはこんなところだから寢てしまふと川風の寒いのがまだ身に沁みると言つてどうしても私にふとんを一枚貸せないでは措かなかつた。親切は有難かつたが、そのふとんがまたそれをかつぐと垢がこびりついてゐるので膚のさはるところがひやりとして却つて寒い。何でももとはこの寡婦の夫の着物ででもあつたらうかと思はれるこまかい大名縞の布で出來てゐた。それもつぎはぎだらけで、またこの光つてゐる垢を落さうと洗濯でもして見たら今度はもうちぎれちぎれに朽ちて到底布の形では居まいと思へるやうなもので出來た布團であつた。そのゝち私は長屋の生活もしたし木賃宿にもとまつたし、また妙なことを言ふやうだが私はそんな人たちに或る親しみを持てるので場末の貧民窟なども歩きまわつて見たこともあるけれども、そのどんな機會にも、あれほど——あの時私自身が着て眠つたものほどきたならしい布團はあとにもさきにも見たことはない。世間には無論布團のない人もたくさんあるだらうが、無いのは別として有る以上はあれよりきたないのがあり得るだらうとは、私もちよつと想像しかねる。

それでも夜が明けて、私が出發しようとする時には彼女は私の爲めに握飯を二つ用意してくれてあつた。それから彼女は私に六錢くれようといふのであつた——。

「これを持つて行きなさい。もつとあげたいが、どうもこれよりないのだ。子供が學校へ上るのでお金が入つた。東京へも行かなければならない。ほんの志だ」

そんなことを述べて、彼女は私に惠みをするのではなくあの昨夜の御神像を描いたお禮のつもりらしかつた。私は無論受けようとはしなかつた。しかし女は私の拒むのを聞き入れなかつた。——

「あなたはまだ貧乏は知らないのだ。たつた六錢だけれども、これからさきには今もう一錢だけ、たつた一錢だけあつたらなあと思ふやうな目を見ること無いとは言へない。その時の用意と思つて持つて行つて下さい」

彼女はさうも言つた。それから私の着物がきれいすぎるといふことをもう一ぺん言つた。私はその六錢を受けて、それから女に名をたづねた。

「板谷きよ」と女は答へた。

「どんな字です」

「木へんの板に谷です」と女は答へた。それぐらゐの文字を知つてゐたのである。

私はそれから三日ほど歩いて三十四五里行つたが、四日目にはもう到底これ以上つづけることが出來ないのを悟つて東京へ引返した。

東京へ來てから、私は板谷きよに御禮のはがきを出した。

「お絹とその兄弟」を讀んだ時、八王子の近所の田舍のことやら、それから自然に板谷きよのことなどを聯想したが、私にふと妙な不安があつた。それはあの時、あの物置小屋のやうな家を現に目の前に見た時には別に何とも考へなかつ

たことで、それだのに後になつて思ひ出した時に氣がついたのだが、あの川原のなかの家は、もし出水でもあつた時には流れてしまひしはしないだらうか——ありさうなことだ。無いとは限らない………

それから五年經つた。

私はこの間八王子へ行つて來た。八王子までの切符を買つて、かへりがけに立川の方をまわつて來るつもりでゐた。ところが八王子へまだつかないうちに、——さう、八王子まではまだもう一つ間があるのだが、立川の驛まで來ると、私は古いあの苦しい旅の記憶が生々して來た。私は豫定をまるで逆にして立川で汽車を下りると、八王子まで歩くつもりになつた——せいぜい三里ぐらゐの道のりであらう。私はその邊を歩いたことは前にも言つたとほりだけれども、停車場の方は知らなかつた。人にたづねながら古い街道の方へたどつて來た。あの邊の風景はほんとうに平凡で素直だ。何でもなくつて面白い。たうとう見覺えのある道へ出た。草や木などにでも馴染のあるのはうれしいものだ。ことに私はさういふものが好きだから、丁度人の顔つきやなどを思ひ出すやうに、時々はいろいろな樹の枝ぶりなどを思ひ出すほどの私である。

あの夕方に疲れた足でとぼとぼと辿つた道を、來て見ると私ははつきり知つてゐた。季節も偶然同じように晩春であつた。お寺のところは通らなかつたが、あの水車小屋の方へは出た。それから川のあるところへ通ふ道であつた、あの朽ち腐つてゐた小さな板橋は美事な石橋に變つてゐた。——その下をくぐつてゐる小さな流れは、あの夕方私がそれのせせらぎの爲めに足を留め、その次の朝私はそこへ下りて行つて、そこで口を嗽ぎ顔を洗つたところである。私は向ふの方をながめてあの物置小屋のやうな板谷きよの家を捜して見た。捜すまでのことはない。川原のなかに一つぽつんと

目につく筈である。それだのに、その家が無かつたからである。その家はなかつた。けれどもそれと同じ場所に一軒のもつと新らしくつてもつと見ばのいい小屋がある。

「ああ、新築をしたのだな」私は心のなかでさう思つたが、新築といふ言葉が新舊のそれらの小屋に對して何となく自分ながらをかしかつた。で、私はひとりで微笑しながら「ひよつとすると、出水でまへの小屋が流れたのかも知れない」と思ひながら、私はその家を見つづけながら歩いて行つた。と、不意にその小屋のなかから馬が首を出した。「ああ、馬小屋であつたか」私はさう氣がついたがそれにしても、板谷きよの古い家よりもその馬小屋の方がまだしも立派であつた。さうしてそれははつきりと目の前にくらべて見ることが出來た。といふのはもう無いものと思つたあの古い小屋は、歩いてくるうちにその新しい馬小屋のかげから見えて來たのである。――馬小屋の屋根の方がずつと脊が高い。馬が首を出した時に、さうして板谷きよの家がその馬小屋の隣にまだあることを發見した時に、私は直ぐに思ひ出したのはあの礫を運ぶ荷馬車の男であつた。板谷きよは、なるほどあの馬車屋の女房になつたのであらう……。ありさうなことだ。あつていいことだ。――私は晴やかに笑ひたい氣持であつた。

私は彼女の家の前に立つて見た。障子は閉めてあつたし、その破れからちよつとなかを覗いて見ると、誰もゐないやうなけはひでもあつたし、またゐるらしい氣もした。私はわざわざ障子を開けてこの家を訪ふほどのことも無いと思つた。ふとふりかへつて見ると、そのあたりの川原は描いて見てもよかつた。スケッチブックをとり出して私は描き出した。

氣がついて見ると自分のうしろに、私の描いてゐるのをしきりに見てゐる子供がひとりゐた。いつどこから來たのだか知らなかつた。私はちよつとふりかへつて見た――十一二の子供であつた。この子だと私は思つた。

「坊やは誰が好きだね？」
「I」子供はうなづいたやうであつたが言つた「好きだ」
「自分で描けるかい」
「描けないよ」
「坊や學校へ行つてるだらう？」
「あ、」
「何年生だ？」
「一年生だよ」
「え？　一年生だ。そんな大きな帽をしてかい？」
「落第したんだ。落第したからやめちやつたんだ。また今年から行くやうになつたんだ」子供はそんなことを答へたが、突然大きな聲を張り上げて叫んだ「おみさ。來て見ろや。馬、描いてゐるんだぞ！」
見ると私のうしろに、あの小屋の方から八つぐらゐの女の兒が驅け出してゐた。この子供たち兄弟は、五年前のあの子供たちにちがひなかつた――どこに見覺えはなかつたけれど、おみさといふ女の子の名は、東京からの土産を約束する母親の聲音と一緒に私の耳にくつきりとした思出があつた。私は描く手をやめて言つた――
「君たちは兄弟だね。あのうちの子だらう。お母さんは板谷きよといふのだらう？」
「……」男の子はしばらく考へてゐた。それから「さうだよ」と言つたのは、女の子と男の子と同じだつた。
「お母さんは今うちにゐるかい？」

「ゐないよ」と男の子が言つた。

「どこへ行つたの？」

「東京だ」

「東京へよく行くのだな。親類でもあるのかい」

「…………」

「いつ歸つてくるの？」

「夕方になつたら」女の子が言つた。

「用事に行つたのかい？」

「ゴミ上げだい！」男の子が叫んだ。

「ゴミ上げ？」

「うむ。さうだよ。なあ、おみさ。夕方になつたらお父つあんもお母さんも橋のところへ蒸汽で歸つて來らあなあ。蒸汽のなかで遊ぶんだなあ。面白いよ」

ゴミ上げといふのはどんなことだか尋ねて見たけれど男の子も女の子も要領を得た返事をしなかつた。

子供たちは私の描くのを見るのに飽きたと見えて、ふたりで追つ駆けまわしたりしてふざけ合つてゐたがそのまゝどこかへ行つてしまつた。けれどもしばらくすると再び彼等は、手に蓮華草などを摘み集めて歸つて來た。男の子はその一束ねの草花を默つて押しつけるやうに私の方へ差出した。年の割にはずつと幼い人懐つこい仕方であつた。私にそれをくれようといふのであらう。

「有難う。……坊やは一たい何といふ名だい？」

「ハラダ」

「ハラダ——原田か？　苗字だね。ぢやおみさもやつぱり原田か」

「うゝん。ハラ——だ」

「原田ではない——原かい？」

「……………」

「お父さんの苗字だね——お父さんはいつ來たの」

「來やしないよ。前からあるよ」

「來たのはお父つあぢやないよ——お母さんだ」女の子は男の子の言葉を補ふやうに言つた。

「お母さんが來たんだ？」私には子供らの言葉の意味がどうもよくわからない…………

「うん。別のお母さんが來たんだ——もう先にだ」女の子の說明はもつと私をわからなくした…………

「それぢや」と私は言つた「お母さんは何といふのだ——板谷きよ、ぢやないのか？」

「お母さんも原だ！」と男の子が言つた。

「でも、さつきは板谷きよだと言つたではないか？」

「……」男の子は默つてしまつた——どうもこの子はいくらか低能兒である。

私は子供らの言葉をさまざまに自分で想像して見て、たうとうかう聞いて見た「ぢや、お母さんは二人あるのかい。」

「さうだよ。二人あるのだ——前のお母さんと後のお母さんと……」女の子の返事である

「然うか。それぢやその前のお母さんはどうした——板谷きよといふお母さんは？」

「死んぢつたよ——もう先に……」

「もう先に？！」

「なあ、おみさ。砂村に打ち上つたんだなあ」——男の子はそのことなら自分でも知つてゐるといふやうに言ひ放つた。

その子供たちを相手にして聞いて見てもわかりさうなことでもなかつたから、私はもうそれ以上は聞きもせずに歸つた。

——しかし、砂村に打ち上つたといふ彼女は家ごと流れたのでないことだけは確だ。あの納屋のやうな家はそのわきに馬小屋が出來てゐる外は變つたこともなくもとのままに在つたのだから。

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◉定價 金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）
但支那を除く

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割さなれども頁數の都合にて變更することあるべし

廣告取次所

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金口座番號は**東京三十四番**なり
一郵券代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず
一代金引替小包の取扱は一切謝絕す
一集金郵便御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
　一金二圓以上五圓迄　金七錢
　一金拾圓迄　金八錢
　（集金委託料及送料共）
一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十二年五月二十日印刷納本
大正十二年六月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木島三

發行所　東京市丸ノ內ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話 丸ノ內三〇二
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正十二年五月二十日印刷納本
大正十二年六月一日發行（毎月一回一日發行）

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

中央公論 六月號（第三十八年第六號） 定價金八十錢